

青森県埋蔵文化財調査報告書第100集

沖附(1)遺跡

昭和60年度

青森県教育委員会

沖附(1)遺跡発掘調査報告書正誤表

頁	行	欄	正	誤
18	5		文末に「住居跡確認状況の等高線は、原則として実線は10cm間隔、破線は5cm間隔である。」を加筆する。	
27	第17図		タイトルの末尾に「(1~12 J-8号、13~22 J-9号)」を加える。	
29	第4表	番号4の行の出土位置欄	A B土上中位	J-8・9土境界
76	2		167点、剥片点、石核	134点、剥片92点、石核1
109	23		(17層)	(7層)
182	第47表		遺物番号7の行を削除	
		遺物番号8の器種欄	リ	襦
254	第68表	遺物番号9の備考欄	筥書	刻線文様

青森県埋蔵文化財調査報告書第100集

沖附 1 遺跡

むつ小川原開発事業関係埋蔵文化財調査報告書

昭和 60 年度

青森県教育委員会

序

むつ小川原開発予定地城内には、縄文時代から歴史時代に至るまで、数多くの遺跡が発見されております。青森県教育委員会は、開発に先立ち、これらの遺跡の記録保存のため、昭和46年から継続的に調査を進めてまいりました。

昭和59年度は、同開発予定地域内に所在する沖附1)遺跡の発掘調査を実施いたしました。調査の結果、歴史時代の住居と縄文時代後期を中心とする遺物・遺構を検出しました。

本報告書は、その結果を収録したものであります。しかし、限られた時間内での整理、作成でありますので、充分とは申せませんが、本書が、地方史研究や文化財保護に寄与することができれば幸いと存じます。

最後に、本書の刊行に当たり、発掘調査から報告書作成まで多大な御協力をいただいた関係各位に対して、心から感謝の意を表します。

昭和61年3月

青森県教育委員会

教育長 **本 間 茂 夫**

例 言

1. 本報告書は、昭和59年度に実施した上北郡六ヶ所村に所在する沖附(1)遺跡の発掘調査報告書である。

2. 執筆者の氏名は、依頼原稿については文頭に、ほかは文末に記した。

3. 遺構番号は、種別ごとに中央区・西側区・東側区の順に通して付した。なお、遺構名は次のようにした。遺構の配置図には()内に記した略称を用いた。

縄文時代の竪穴住居跡：J - 1号住居跡 (J - 1H)

縄文時代の土壌：J - 1号土壌 (J - 1土)

歴史時代の竪穴住居跡：第1号住居跡 (1H)

歴史時代の土壌：第1号土壌 (1土)

4. 遺構・遺物の各表中の()は、現存部の計測値である。なお、挿図の縮尺は、土器 $\frac{1}{3}$ 、 $\frac{1}{3.5}$ 、 $\frac{1}{4}$ 、石器のうち剥片石器は $\frac{1}{3}$ 、礫石器は $\frac{1}{3}$ 、 $\frac{1}{4}$ を原則とした。

5. 挿図に使用したスクリーントン等の種別は、次のとおりである。

地山 (203)、焼土範囲(床面が焼土化している範囲 (122)、土器破片出土ポイント、石器(砥石も含む)、鉄製品、鉄棒、土器の剥落部分・施釉部分 (31)、黒色処理部分 (42)、石器の実測図 (112)、(122)

その他については各項に記した。

6. 資料の鑑定及び同定等は下記のとおり依頼した。

奈良教育大学教授 三辻 利一 火山灰の分析

県立八戸高等学校教諭 松山 力 石質鑑定

県立木造高等学校稲垣分校教諭 山口 義伸 地形・地質

7. 発掘調査及び本報告書作成に当たって、次の諸氏から御教示を得た。

(敬称略、50音別)

秋元信夫、石岡憲雄、石附喜三男、石川長喜、伊東信雄、市川修、市川金丸、井上喜久男、井上肇、今泉泰之、今井二三夫、岩見誠夫、上野秀一、宇部則保、江坂輝弥、遠藤香澄、大沼忠春、小笠原幸範、小笠原好彦、小笠原善範、大野憲司、岡本孝之、葛西励、木本元治、工藤清泰、工藤竹久、工藤雅樹、栗村知弘、桑原滋郎、小井川和夫、小滝一三、近藤義郎、近藤宗光、昆野靖、酒井宗孝、桜井清彦、桜田隆、菅原文也、相馬信吉、高嶋成侑、高橋信雄、高橋興右衛門、橘善光、千代肇、中川重紀、野村崇、福田友之、藤沢良祐、藤田亮一、藤沼邦彦、藤本英夫、藤原妃敏、菅田実、船木義勝、三上次男、光井文行、村木淳、森幸彦、八木光則、山岸英夫、吉岡康暢、渡辺誠、渡辺洋一

8. 引用・参考文献は巻末に一括収録した。

目 次

序	J - 12号土壌	30
例言	J - 13号土壌	30
第1章 調査の経過	J - 14号土壌	31
第1節 調査に至る経過	J - 15号土壌	32
第2節 調査要項	J - 16号土壌	32
第2章 遺跡の概観	J - 17号土壌	33
第1節 自然環境	J - 18号土壌	35
1 地形と立地	J - 19号土壌	37
2 地質と層序	J - 20号土壌	40
第2節 周辺の遺跡	J - 21号土壌	40
第3章 調査方法と概要	J - 22号土壌	41
第1節 グリッド設定	J - 23号土壌	41
第2節 調査の方法	3 . 土器埋設遺構	43
第3節 調査概要	4 . 屋外炉	45
第4章 遺構と遺物	5 . 焼土状遺構	45
第1節 縄文時代の遺構と遺物	6 . 遺構外の遺物	46
1 . 住居跡	第2節 弥生時代の遺物	92
J - 1号住居跡	第3節 歴史時代の遺構と遺物	98
J - 2号住居跡	1 . 住居跡	98
2 . 土壌	第1号住居跡	98
J - 1号土壌	第2号住居跡	105
J - 2号土壌	第3号住居跡	108
J - 3号土壌	第4号住居跡	117
J - 4号土壌	第5号住居跡	122
J - 5号土壌	第6号住居跡	127
J - 6号土壌	第7号住居跡	133
J - 7号土壌	第8号住居跡	135
J - 8号土壌	第9号住居跡	141
J - 9号土壌	第10号住居跡	143
J - 10号土壌	第11号住居跡	147
J - 11号土壌	第12号住居跡	151

第13号住居跡	150	第8号土壌	274
第14号住居跡	153	第9号土壌	274
第15号住居跡	157	第10号土壌	274
第16号住居跡	161	第11号土壌	274
第17号住居跡	169	第12号土壌	276
第18号住居跡	173	第13号土壌	276
第19号住居跡	177	第14号土壌	276
第20号住居跡	180	第15号土壌	278
第21号住居跡	184	第16号土壌	278
第22号住居跡	192	3. 遺構外の遺物	278
第23号住居跡	198	第5章 考察	282
第24号住居跡	205	第1節 遺構	282
第25号住居跡	207	1. 縄文時代の遺構	282
第26号住居跡	213	(1) 住居跡	282
第27号住居跡	218	(2) 土壌	282
第28号住居跡	220	(3) 土器埋設遺構・屋外炉ほか ...	283
第29号住居跡	222	2. 歴史時代の遺構	284
第30号住居跡	227	(1) 住居跡	284
第31号住居跡	231	(2) 土壌	291
第32号住居跡	234	第2節 遺物	292
第33号住居跡	238	1. 縄文時代の遺物	292
第34号住居跡	242	(1) 土器	292
第35号住居跡	246	(2) 石器	295
第36号住居跡	255	2. 弥生時代の遺物	297
第37号住居跡	259	3. 歴史時代の遺物	299
2. 土壌	270	(1) 土師器	299
第1号土壌	270	(2) 須恵器・陶磁器	303
第2号土壌	270	(3) 鉄製品	304
第3号土壌	270	第6章 自然科学的調査	306
第4号土壌	272	第1節 火山灰の分析	306
第5号土壌	272	第7章 まとめ	308
第6号土壌	272	引用・参考文献	309
第7号土壌	272		

第 1 章 調査の経過

第 1 節 調査に至る経過

昭和44年度に発表された新全国総合開発計画で本県のむつ小川原地域は、その有力な候補地となった。同年、「陸奥湾、小川原湖地域の開発」の計画が青森県から発表された。その後、昭和46年度には、「むつ小川原地域開発構想の概要」の第一次基本計画が発表された。同時に青森県教育委員会では、開発に伴って破壊の恐れのある遺跡の所在や範囲を確認するため、分布・試掘調査を実施してその成果の概要を発表してきた。

昭和49年には、むつ小川原開発第二次基本計画の骨子が発表され、幹線道路を含む工業基地利用図が公表された。昭和52年3月、むつ小川原開発第二次基本計画に係る環境影響評価報告書（環境アセスメント）が住民に示され、同年8月間議了解となったことをうけて開発は本格的に着工の見通しとなった。

以来、この開発事業に係るむつ小川原開発株式会社所有地内の発掘調査は、昭和49、50年に実施した新住区建設に伴う千歳（13）遺跡を初めとして、昭和54、55年には石油国家備蓄基地建設に伴うパイプライン敷設に係る表館、発茶沢の両遺跡、昭和56、57年の石油備蓄基地消火用水確保に係る弥栄平（2）遺跡、昭和58年には、むつ小川原開発工業用地予定地内に所在する大石平遺跡の調査が実施された。

昭和58年11月、むつ小川原開発株式会社から、むつ小川原開発工業用地予定地内に所在する大石平、沖附（2）の両遺跡とともに本遺跡の発掘調査の依頼があった。そこで、青森県教育委員会では、同年11月発掘調査依頼を受託する旨回答し、調査計画に組み入れ、昭和59年4月から同年10月まで、青森県埋蔵文化財調査センターが調査を担当して実施することになった。

（工藤）

第 2 節 調査要項

1. 調査目的

むつ小川原開発事業実施に先立ち、当該地区に所在する埋蔵文化財の発掘調査を行い、その記録保存をはかり、地域社会の文化財活用に資する。

2. 調査期間

昭和59年5月7日から同年10月31日まで

3. 遺跡名及び所在地

沖附1遺跡 青森県上北郡六ヶ所村大字尾駸字沖附4 - 10

4 . 調査対象面積

10,000㎡

5 . 調査委託者

むつ小川原開発株式会社

6 . 調査受託者

青森県教育委員会

7 . 調査担当機関

青森県埋蔵文化財調査センター

8 . 調査協力機関

六ヶ所村 上北教育事務所

9 . 調査参加者

調査指導員 村越 潔 弘前大学教育学部教授

調査協力員 田中 澄 六ヶ所村教育委員会教育長

調 査 員 小山陽造 八戸工業高等専門学校教授

滝沢幸長 八戸市文化財保護審議会委員

佐藤 巧 県立郷土館学芸員

山口義伸 県立木造高等学校稲垣分校教諭

青森県埋蔵文化財調査センター

所長 工藤泰典 (現、青森県地方労働委員会事務局総務課長)

三橋時男 (昭和60年4月 青森県教育庁財務課副参事から)

次長 須藤昭二

総務課長 舘浦善清

調査第三課長 工藤泰博

主任主査 成田誠治 (調査担当者)

主事 坂本洋一 (調査担当者)

調査補助員 佐藤文一、佐々木新治、島田ひろみ、畠山和香子、津川奈子、八戸千里

第2章 遺跡の概観

第1節 自然環境

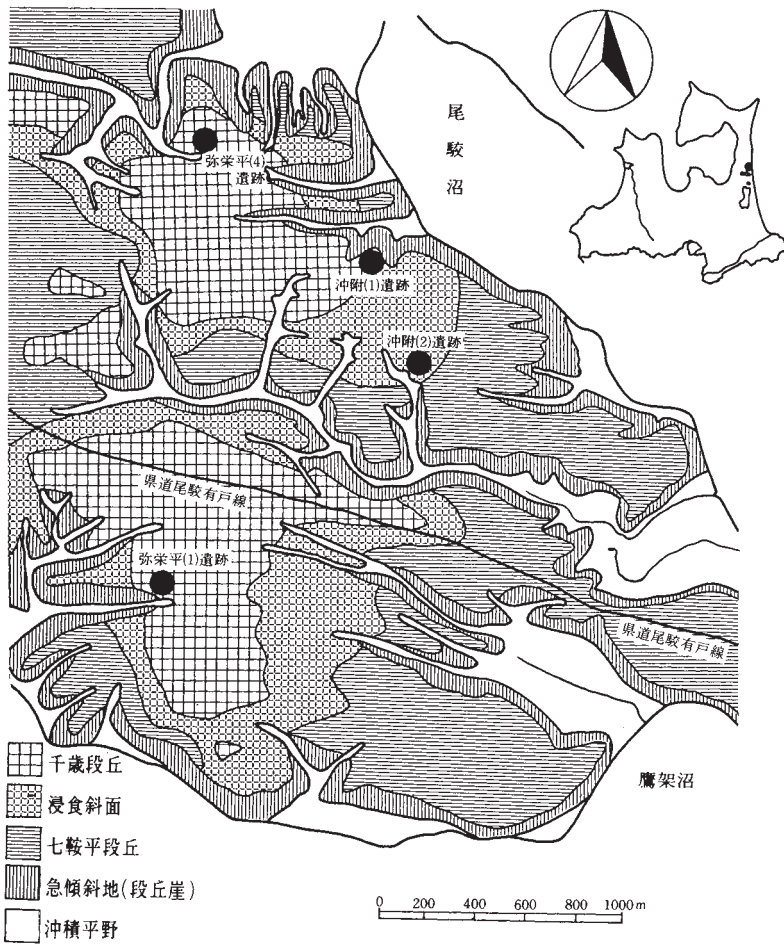
山口 義伸

1. 地形と立地

上北郡六ヶ所村は下北半島頸部の太平洋側にあつて、この付近には北方から、尾駮沼、鷹架沼、市柳沼、田面木沼、内沼そして小川原湖の湖沼群がみられる。太平洋沿岸にはこれらの湖沼を開塞するような形で、天ヶ森砂丘が現汀線に沿ってほぼ南北方向に約200mの幅で分布し、さらに内陸側には標高が約5～23mにも及ぶ古砂丘が同じく南北方向に約200～300m、尾駮沼と鷹架沼の間では約800mの幅で分布している。現在、古砂丘は松林となつていて、防風、防砂林の役割を果している。また、この付近には海岸段丘の発達も顕著であつて、上位から、吹越烏帽子段丘（標高100～140m）、長者久保段丘（標高90～130m）、千歳段丘（標高60～100m）、七鞍平段丘（標高12～50m）の4段丘が確認できる。これらの段丘のうち、本遺跡が立地しているのは、千歳段丘及び七鞍平段丘へ連続する浸食斜面上である。

本遺跡は、約4km内陸の、尾駮沼西方500m地点に立地している。この付近は、北方にほぼ東流して尾駮沼に注ぐ尾敬川があり、南方にはほぼ東西方向に走る県道尾駮一有戸線にほぼ沿つてその北方200～400mに東流する中規模な浸食谷があつて尾駮沼に注いでいる。この両浸食谷にはさまれた、南北の幅は約1500mである。東方は尾駮沼に臨む段丘崖であり、南北両端も浸食谷に臨む段丘崖となつていて、いずれも急峻である。この地域は、やや西よりのところにほぼ円形状の千歳段丘が小丘状に分布し、その東方に浸食斜面および七鞍平段丘が舌状に張り出すように分布している。また、上述の両浸食谷の、段丘面に谷頭をもつ小規模な支流がいくつかあつて多少起伏に富む地形ではあるが、全体的には南北方向に緩やかに起伏する地形であつて東方に緩傾斜している（第1図）。

本遺跡は、標高が約56～61mの千歳段丘および浸食斜面上に東西方向に帯状に立地していて、本遺跡の北端は、千歳段丘面に谷頭をもち、東流する小谷があつて、この谷に臨む急峻な段丘崖となつている。現在、この付近には防風林としての松林が繁茂している。本遺跡の南方には東西方向に帯状な谷状凹地があつて南北に起伏している。また、本遺跡内に分布する平安時代の住居跡はその集中する度合からいって東西両端と中央部の3ヶ所に分かれる。東端に分布する住居跡はきわめて平坦な段丘上に立地しているものの、上記の小谷の北流する支流の左岸の、西端に分布する住居跡はこの支流の浸食作用によって起伏に富んでいて、北方に急傾斜する斜面上に立地している。また、中央部は支流の東側（右岸）の平坦地に立地している。これらの住居跡はほとんど直径が約3～9mの円形で、深さが約1mの凹地として肉眼で観察できる状



第1図 遺跡周辺の地形分類図

況で分布していた。

なお、本遺跡の周辺には、南方約400mの地点に沖附(2)遺跡、北西方約800m地点に弥栄平(4)遺跡などが立地している。

2. 地質と層序

下北半島の頸部を構成している地層のうち、基盤をなす地層は新第三系中新統の泊安山岩類及び鷹架層である。また、本地域に最も広く分布する地層は新第三系鮮新統の浜田層及び第四系下部洪積統の野辺地層である。新第三系中新統の泊安山岩類は安山岩質角礫岩及び同質集塊岩からなっていて、本遺跡北方の老部川に臨む段丘崖にみられるが、主に本地域北方の山岳地に広く分布している。中新統の鷹架層は主として塊状のシルト質砂岩からなり、泊安山岩類の上部と指交関係にあって鷹架沼を中心にほぼ南北に分布している。新第三系鮮新統の浜田層は塊状無層理の砂質シルト岩と砂岩との互層からなり、下位の中新統を不整合におおっていて、本地域に広く分布している。また、第四系下部洪積統の野辺地層は全体的に砂とシルトの互層からなり、下位の第三系を不整合におおひ、ほぼ水平に堆積していて、一般に段丘構成層におおわれている。

千歳段丘の段丘構成層については、千歳(13)遺跡の立地する本段丘の比較的標高の高い所では、斜交葉理の発達した砂層(野辺地層)に不整合に本段丘構成層としての茶褐色及び黄褐色の粘土質火山灰層(層厚約300cm)が堆積しているが、本遺跡の立地する、千歳段丘の比較的標高の低い所及び下位の七鞍平段丘へ連続する浸食斜面においては段丘構成層の堆積状況がわるく、下位より塊状で淘汰不良の中～粗粒砂層、火山灰質の砂質粘土層、そして粘土質の黄褐色火山灰層(砂の混入や腐植化の進行等により二次的な風成堆積状況を示す)の順で堆積している。なお、本遺跡及び周辺遺跡内の基本層序及びその対比については第2・3図に示した。

遺跡内の各層の概要は次のとおりである。

- a層 暗黒褐色土層(5～25cm) 表土。沖附(2)遺跡の a層、弥栄平(4)遺跡の a層に対比される。草根を多量に含んでいて、全体的にしまりがなくソフトな感じである。
- b層 黒色腐棺質土層(10cm) 沖附(2)遺跡の a層、弥栄平(4)遺跡の b層に対比される。草根を含み、粘性、湿性が多少あり、硬さもある。全体的に格子状の割れ目が発達していて a層と区分できる。なお、乾くと灰黒色に変化する。また、松林及び西側の傾斜地以外の平坦地においては耕作により a層及び b層の区分はできない。
- a層 暗褐色土層(10cm) 沖附(2)遺跡の a層、弥栄平(4)遺跡の a層に対比される。土壌化の進行している漸移層で、最上部に縦のクラックが発達している。全体的に粘性、湿性があり、層全体がしまっている。乾くと、灰褐色に変化し、ソフトな感じになる。
- b層 暗黄褐色土層(15～20cm) 沖附(2)遺跡の b層、弥栄平(4)遺跡の b層に対比される。上位の a層に酷似するも、a層よりも火山灰粒の混入が多く火山灰質である。全体的には粘性、湿性があり、しまりもある。なお、a層のようなクラ

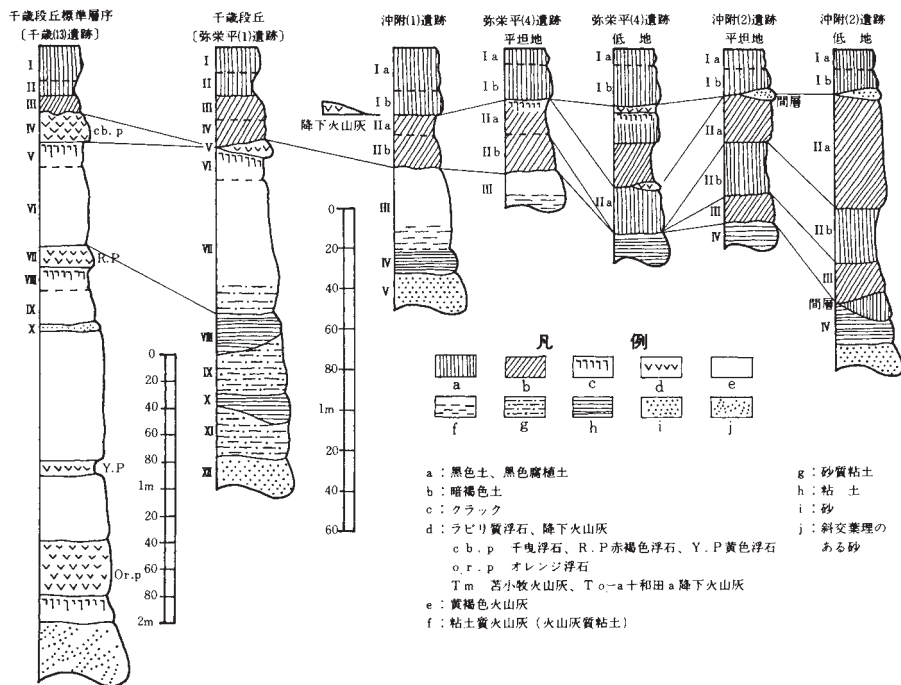
ック (crack) の発達がなく表面がなめらかである。

層 黄褐色火山灰質粘土層 (40~60cm) 弥栄平 (4) 遺跡の 層に対比される。本層は、本地域に鍵層 (key bed) として広く分布する千曳浮石 (Cb.p) の下位にある黄褐色火山灰層に相当すると考えられる。ただ、全体的に粘土質であって、さらに下部が細~中粒砂質粘土層になっていることから多少水成堆積物としての特徴をもつ。

層 灰褐色粘土層 (10cm) 層下位に帯状に分布し、非常にしまりのある粘土である。

層 粗粒砂層 (10cm+) 淘汰不良の粗粒砂である。

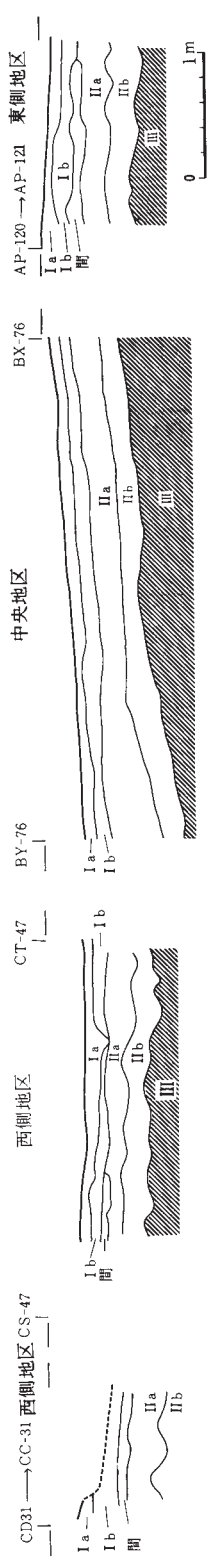
本遺跡内に分布する住居跡はすべて a 層及び b 層の黑色土層におおわれているが、その厚きは20cm程の薄いものである。しかし、西端に分布する住居跡は、枝流の浸食作用により、a 層および b 層の黑色土層はもちろんのこと、下位の a 層及び b 層の暗褐色土層も土壌化が進み黑色土層に酷似している。全体的に 層及び 層の黑色土層及び土壌化した暗褐色土層の厚さはおよそ40~50cmに達している。さらに 層は、明らかに水成堆積物の要素をもち、暗灰褐色の砂質粘土層になっている。なお、本遺跡内には、平安時代の住居跡のほかに、縄文時代後期の遺物が東端付近に集中している。これらの遺物は、b 層と a 層の境界面より出土している。



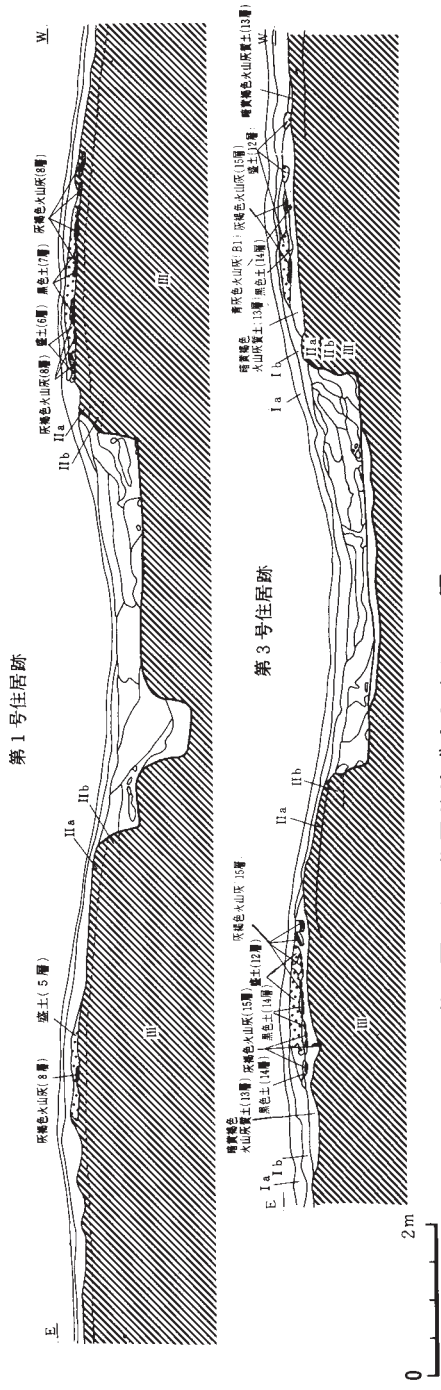
第 2 図 各遺跡内の土層模式柱状図

ところで、本遺跡内に分布する平安時代の住居跡の周場内には上下 2 枚の歴史時代の降下火山灰を確認することができた（第 3 図 2、第 1 号・第 3 号住居跡のセクション）。上位層は、灰褐色火山灰で、周堤内に帯状に分布していて、その厚さは平均して 3 ~ 5 cm ほどであって、ときには 8 cm にも達することがある。下位層は、青灰色火山灰で、同じく周堤内にレンズ状に分布していて、その厚さは 3 cm ほどである。周堤内の堆積状況を模式的に示したのが第 3 図 3 であるが、これによると、a 層の上位には、a 層と 層の混合物と考えられる暗黄褐色火山灰質土層が 5 ~ 8 cm ほどの厚さで堆積している。この層は全体的にしまりに欠けていて、粘性、湿性がない。おそらく風成堆積物と考えられる。この層の比較的上部に下位の青灰色火山灰がレンズ状に挿入している。この風成層としての暗黄褐色火山灰質土層の直上には細粒の炭化物を多量に含む黒色土層（厚さ 0.5 ~ 1.0 cm）が堆積している。この炭化層（特に第 2 号住居跡）の直上には、上位の灰褐色火山灰が約 5 cm ほどの厚さ（所によっては 8 cm ほど）で帯状に堆積している。そして、灰褐色火山灰層の上位には b 層に酷似する黒色腐植質土層（厚さ 2 ~ 3 cm）と、住居跡構築の際の火山灰（おもに 層）の盛土（厚さ 15 cm ほど）が堆積している。周堤内の上記各土層及び降下火山灰層は周堤外には全く存在しない。ただ住居跡内の覆土中に降下火山灰のブロックが点散しているのが確認できるだけである。ところで、地山の a 層直上にある、風成の暗黄褐色火山灰質土層が、住居跡を構築した際の盛土とは考えにくいことから、住居跡とは直接に関係のない、広範囲にわたって分布する、b 層形成前の風成層と考えられ、それが住居跡を構築した際の盛土におおわれて周堤内にだけ残ったものと考えられる。それゆえに、下位の青灰色火山灰がレンズ状に挿入し、周堤外にこの降下火山灰を含めてこの層全体が分布していかなのであろう。なお、弥栄平（4）遺跡の平坦地内の谷状凹地には、本遺跡の土層に対比される b 層下位から a 層直上に上記の 2 枚の降下火山灰が分布しているのを確認している。このことから住居跡の構築の時期はあきらかに降下火山灰の降下以後の b 層の形成する初期ということになる。

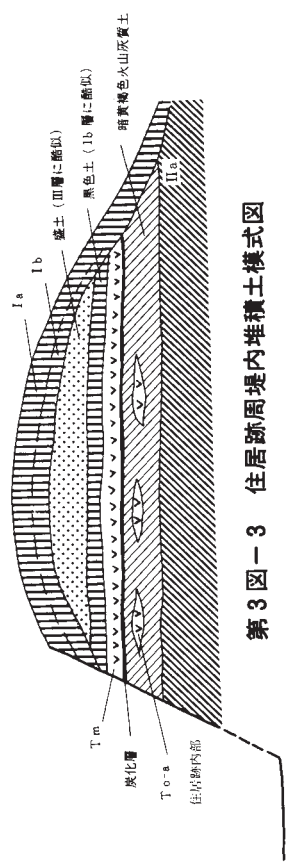
なお、この 2 枚の降下火山灰について、その堆積時期及び状況を考えると、上位層は苦小牧火山灰（Tm）、下位層は十和田 a 降下火山灰と考えられ、周辺の大石平、髯茶沢、弥栄平（4）などの各遺跡にも同様に確認されている。この 2 枚の降下火山灰の分析データは第 6 章第 1 節に示したとおりである。



第3図-1 基本層序



第3図-2 住居跡外盛土セクション図



第3図-3 住居跡周堤内堆積土模式図

参考文献

- 千歳(13)遺跡(1976) 青森県埋蔵文化財発掘調査報告書第27集 青森県教育委員会
 発茶沢遺跡 (1982) " 第67集 "
 鶉窪遺跡 (1983) " 第76集 "
 大石平遺跡 (1985) " 第90集 "
 科学 Vol.51、 9(1983) 町田、新井、森脇
 古文化財教育研究報告 12(1983) 三辻、松山、山本、高林

第2節 周辺の遺跡

本遺跡は、尾駮沼の南岸に沿った段丘上に所在する。尾駮沼の周辺には、第4図のように多数の遺跡が分布しているが、埋もれ切らないで、すり鉢状の窪みになっている竪穴がみられる遺跡は、弥栄平(4)遺跡(第4図65)、発茶沢遺跡(第4図39)、家ノ前遺跡(第4図96)である。また、鷹架沼周辺及び後川に沿った台地上では、鷹架沼竪穴遺跡(第4図46)、戸鎖館跡(第4図42)、千樽遺跡(第4図117)などにみられる。

縄文時代後期の遺跡は、沖附(2)遺跡(第4図104)、弥栄平(1)遺跡(第4図40)、弥栄平(2)遺跡(第4図57)、富ノ沢(1)遺跡(第4図48)、富ノ沢(2)遺跡(第4図49)、大石平(1)遺跡(第4図99)など多数分布している。

弥生時代の遺跡は、大石平(1)遺跡(第4図99)、家ノ前遺跡(第4図96)などである。

(成田)

第1表 周辺の遺跡地名表

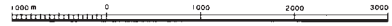
遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	出土品等	文献・その他
9	老部川(1)遺跡	尾駮字猿子沢2-1	縄文(後)歴史	縄文土器片、土師器片	
13	上尾駮(1)遺跡	尾駮字上尾駮	縄文(前~後)歴史	縄文土器片	
19	表館遺跡	鷹架字発茶沢244	縄文(早~後)歴史	刀子、製塩土器、石帯 縄文土器片、石器、土師器、須 恵器、土壇、溝状ピット 竪穴住居跡(歴史)	青森県埋蔵文化財調査報告書第3集、第24集 沼館愛三『南部諸成の研究(草稿)』みちのく 双書第33集、青森県文化財保護協会1973、青森県埋蔵文化財調査報告書第42集、第50集、第61集

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	出土品等	文献・その他
38	鷹架貝塚	鷹架字道の下	縄文(晩)近世	縄文土器片(大洞A式)、陶片、貝類	
39	発茶沢(1)遺跡	鷹架字発茶沢	縄文(早・中・後)歴史	縄文土器片、土師器片、須恵器片、竪穴住居跡(縄文、歴史)溝状ピット、土壌(縄文)	青森県埋蔵文化財調査報告書第3集、第9集、第24集、第50集「発茶沢」青森県埋蔵文化財調査報告書第67集
40	弥栄平(1)遺跡	尾駮字表館農場1-2ほ場	縄文(後)	縄文土器(甕棺土器)、人骨石器、貝類	青森県埋蔵文化財調査報告書第3集 考古学ジャーナルNo.63、1971
46	鷹架沼竪穴遺跡	鷹架	歴史	土師器片 竪穴群・空堀(歴史)	青森県埋蔵文化財調査報告書第42集
48	富ノ沢(1)遺跡	尾駮字尾駮	縄文(中・後)	縄文土器片、石器、土製品、石製品、竪穴住居(縄文)	青森県埋蔵文化財調査報告書第9集
49	富ノ沢(2)遺跡	尾駮字尾駮	縄文(中・後)	縄文土器片、石器	青森県埋蔵文化財調査報告書第9集
55	老部川貝塚	尾駮字猿子沢	縄文歴史	縄文土器片、土師器片	
56	老部川製鉄遺跡	尾駮字猿子沢	歴史	鉄滓	
58	尾駮沼西岸遺跡	尾駮字上尾駮	縄文	縄文土器片	
64	弥栄平(3)遺跡	尾駮字表館農場1の3ほ場	縄文(早・後)	縄文土器片(貝殻土器)、磨製石斧	青森県埋蔵文化財調査報告書第28集
65	弥栄平(4)遺跡	尾駮字上尾駮農場3の4ほ場	縄文歴史	縄文土器片、土師器片、須恵器片	青森県埋蔵文化財調査報告書第9集
96	家ノ前遺跡	尾駮字家ノ前4の1	縄文(早・後)弥生歴史	縄文土器片、石器、土師器片 竪穴住居跡(歴史)	青森県埋蔵文化財調査報告書第24集、第48集
99	大石平(1)遺跡	尾駮字野附	縄文(早~後)弥生	縄文土器、石器、積石、配石遺構、石組炉、弥生式土器片、土壌、住居跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第24集 " 第90集
100	大石平(2)遺跡	尾駮字野附	縄文(早~後)弥生	縄文土器、配石遺構、積石、土壌、石組炉、弥生式土器片、石器	青森県埋蔵文化財調査報告書第24集 " 第90集
101	尾駮遺跡	尾駮字野附	縄文(晩)	縄文土器片(壺形)	青森県埋蔵文化財調査報告書第24集 六ヶ所村内遺跡一覽表
102	上尾駮(2)遺跡	尾駮字上尾駮	縄文(早~後)	縄文土器、石器	青森県埋蔵文化財調査報告書第48集
103	沖附(1)遺跡	尾駮字沖附	歴史	竪穴群(歴史)	青森県埋蔵文化財調査報告書第48集
104	沖附(2)遺跡	尾駮字沖附	縄文(後)	縄文土器片、石器 土壌・溝状ピット(縄文)	青森県埋蔵文化財調査報告書第48集
105	発茶沢(2)遺跡	鷹架沼字発茶沢2の14	縄文(早・中・後)歴史	縄文土器片、石器、土師器	青森県埋蔵文化財調査報告書第42集
106	沖附(3)遺跡	尾駮字沖附	縄文(後)	縄文土器片	
109	新納屋(2)遺跡	鷹架字道の下89	縄文(早・前・後)	縄文土器片、石器 竪穴住居跡・土壌(縄文)	青森県埋蔵文化財調査報告書第42集、第62集
115	鷹架遺跡	鷹架字道の下	縄文(早・前・後)	縄文土器片、石器 土壌(縄文)	青森県埋蔵文化財調査報告書第63集
116	弥栄平(5)遺跡	尾駮字上尾駮	縄文(前・中・後)	縄文土器片、土壌	青森県埋蔵文化財調査報告書第28集
118	老部川(2)遺跡	尾駮字猿子沢	歴史	土師器片、須恵器片	



本図は建設省国土地理院発行の5万分の1地形図(NK-54-17-11)を縮小したものである

平沼



第4図 沖附(1)遺跡の位置と周辺の遺跡

第3章 調査方法と概要

第1節 グリッド設定

地形に合わせ、1グリッドを4×4mにし、第6図のようにグリッド設定した。グリッド名は、アルファベットと算用数字を組合せて表示することにした。また、測量用基準杭を20m間隔に配置した。

なお、グリッドの南北線は磁北から25°北東の方向にある。

第2節 調査方法

グリッドの杭打ち、埋もれ切らない竪穴の確認、平板実測、表土の粗掘り、遺物の検出、遺構精査、写真撮影、遺物の実測などを繰り返して調査を進行した。

中央区、西側区、東側区とも基本土層の堆積状況を観察するためセクションベルトを設定して、各区の土層を統一し、表土から順にローマ数字（Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ…層）で呼称し、「土色」を調べて記載した。

遺物が出土した場合は、遺物の種類・グリッド・層位別に遺物カードに記入し、必要に応じて分布図、微細図を作成した。

遺構の名称は、中央区、西側区、東側区ごとに種類別の通し番号を、発見順に付けることにした。

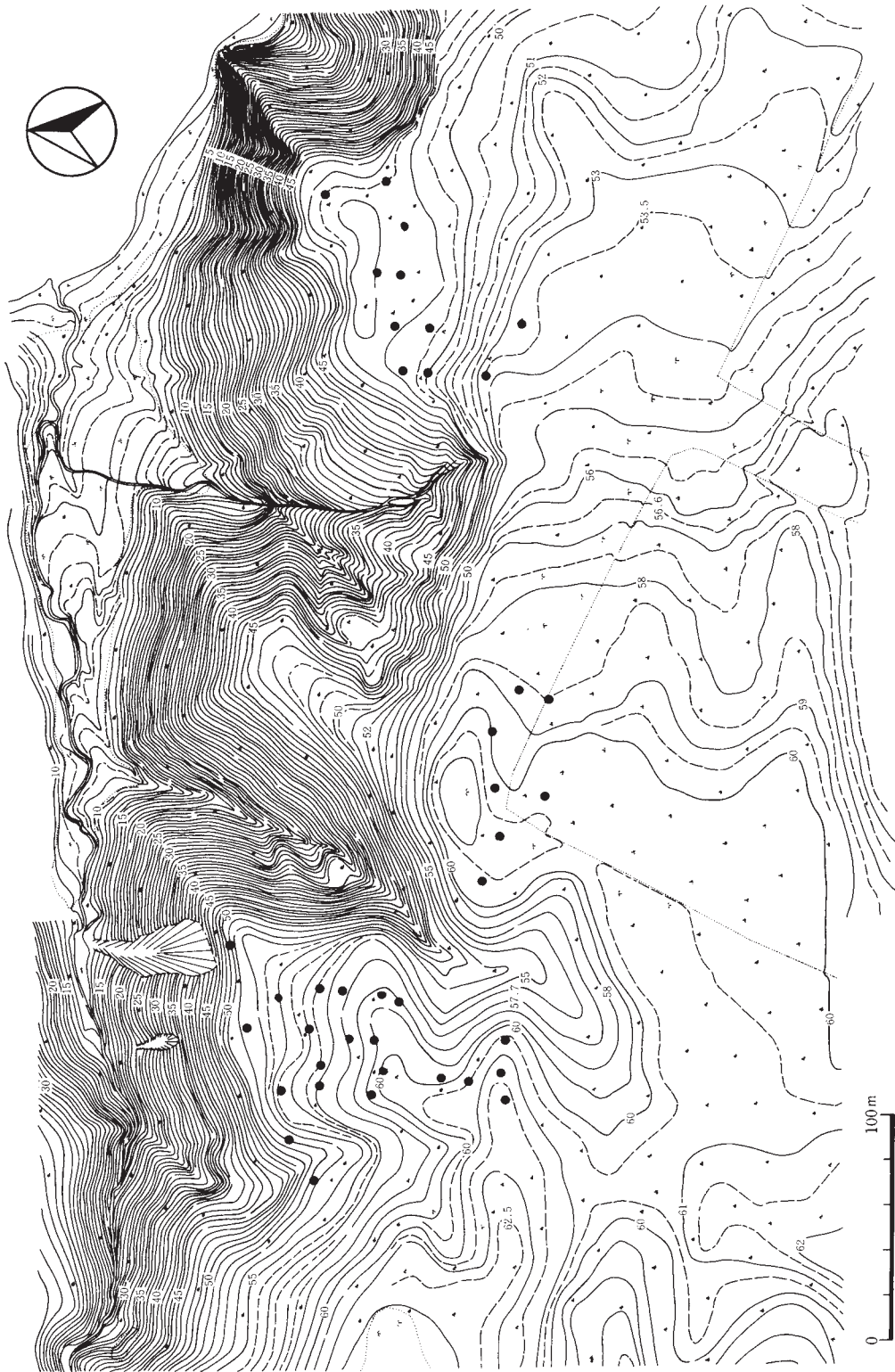
埋もれ切らない竪穴の場合は、粗掘りする以前の段階で確認写真を撮り、窪んでいる状態を平板実測した後、四分法により掘り下げた。遺物が出土した場合、種類ごとに遺物カードに記入し、実測と遺物の取り上げを繰り返しながら実測図を作成した。実測図のスケールは、20分の1か10分の1である。また、遺構の堆積土（覆土）には算用数字、略号（例：ブロック状の場合は③等）を付け、「標準土色帖」により土色等を注記した。

写真撮影は、35ミサ版のモノクロとカラーリバーサルで撮影した。撮影は、遺跡の全景、近景、調査の進行状況、遺物の出土状況、遺構の確認面、土層断面、細部及び完掘状況などが中心となった。

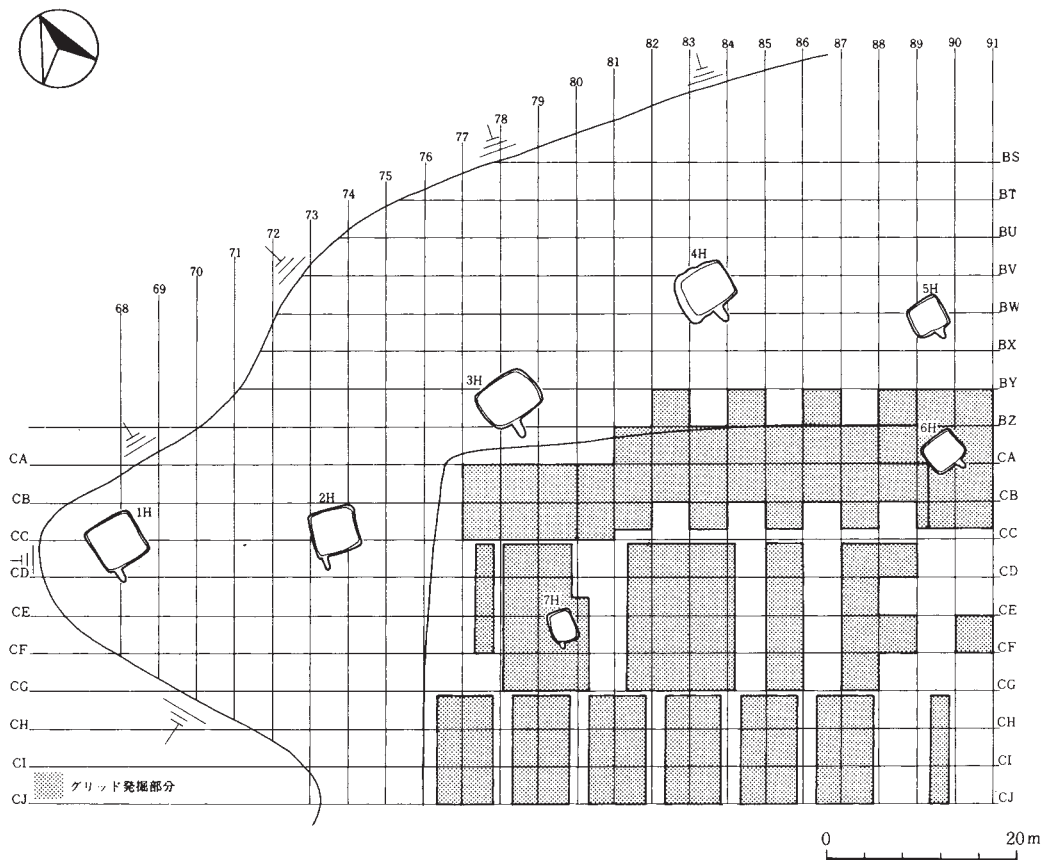
（成田）

第3節 調査概要

本遺跡では、埋もれ切らない竪穴が7基以上ずつ3箇所をなして確認された。これら3箇所は、一連の平坦地ではなく、高低差もあり、小沢によって隔てられているが、同一の段丘上である。発掘調査は、中央地区から始め、西側地区、東側地区の順に進めた。以下、地区ごとに調査の概要を述べる。



第5図 調査区全体図



第 6 図 中央地区遺構配置図

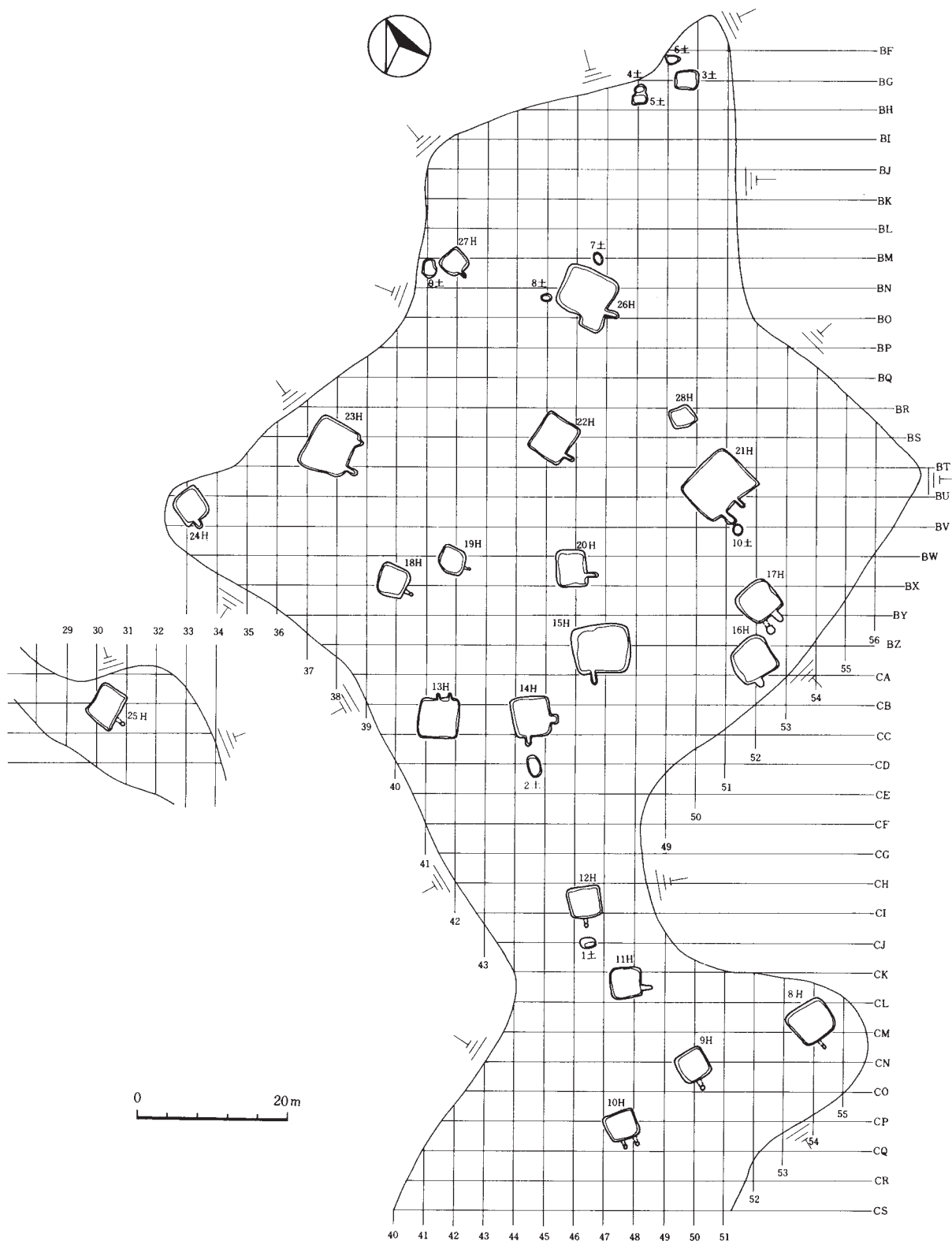
1 . 中央地区 (第 6 図)

標高が58~60mで、北側が崖、西側と南側が沢になっている地区である。現状は、北側と西側に松を主とする保安林があり、中央部分が牧草地である。牧草地は、以前、馬鈴薯原産種農場の圃場であった場所である。66ライン~91ラインに埋もれ切らない竪穴を5基確認した。牧草地は、圃場造成の際に削平しているため、埋もれ切らない竪穴は、みられなかった。

草刈及び雑木の伐採は、5月8日から始め、9日からグリッド設定を開始した。窪んでいる竪穴は、草刈した後、確認写真を撮影し、平板測量を行なった。竪穴の精査は、第3号竪穴から始め、第2号竪穴、第5号竪穴、第1号竪穴、第4号竪穴の順で行なった。旧圃場部分の調査は、第6図のようにトレンチ状及び市松状に粗掘した結果、第6号竪穴、第7号竪穴を確認した。竪穴を検出できなかった。グリッドからも土師器・縄文土器が数片出土したが、無遺物・無遺構のグリッドが多かった。

第1号竪穴~第7号竪穴は方形ないし長方形で南側の壁にかまどを持ち、土師器が出土する住居跡で、7軒とも炭化材及び焼土の堆積状況から焼失家屋と推定されるものである。

精査終了は、7月9日であった。



第7図 西側地区遺構配置図

2．西側地区（第7図）

標高が54～62mで、北側が尾駸沼、東側と西側が沢になり、沢目には湧水がある。南側は、平坦な段丘面に続く地形である。現状は、雑木林で、埋もれ切らない竪穴が22基あった。

6月20日頃から、中央地区と並行して、草刈及び雑木伐採並びにグリッド杭打ち、確認写真撮影、平板測量等を行なった。7月10日から遺構の精査を開始した。南端の第8号竪穴、第9号竪穴、第10号竪穴、第11号竪穴から精査し、順次北側竪穴へ調査を進めた。当初、北東端の竪穴を第28号竪穴としたが、これを精査したところ、他と異なり、かまどが無く、また他の住居跡よりはるかに深く、住居跡とみられなかったため、第3号土壌とした。その後、第21号竪穴周辺で確認された竪穴を第28号住居跡とした。

これらは、方形ないし長方形で、いずれも土師器が出土する住居跡である。

土壌は方形、楕円形合わせて10基の土壌検出したが、覆土の堆積状況は、土師器を伴う住居跡と同じ状態である。

この地区での遺構外出土土器は土師器と須恵器で、他の時期のものは出土しなかった。

精査は、9月5日で終了した。

3．東側地区（第8図）

標高が44～54mで、北東側が急崖で尾駸沼に面し、西側は沢になり、湧水がある。東側と南側は平坦な段丘面に続く地形である。現状は雑木林で、埋もれ切らない竪穴が12基あった。

8月23日頃から西側地域と並行して草刈、雑木伐採をし、その後中央地域のグリッド杭を延ばし、東側の竪穴所在部分のグリッド杭打ちを行なった。また竪穴内外の草刈後、ただちに確認写真を撮影し、深い竪穴の平板測量を行なった。

9月6日から埋もれ切らない竪穴の精査に入った。まず南側にある竪穴から始め、順次北東側へ調査を進めた。第29号～第34号竪穴は土師器を伴う住居跡であるが、当初第35号竪穴としたものは、縄文時代の住居跡で2軒重複しているため、新しい住居跡をJ-2号住居跡とした。また、第37号竪穴は土師器を伴う土壌で、第38号竪穴は縄文土器を伴う土壌であった。

この地区は、ほかの地区と違い、縄文土器や石器及び弥生式土器、土師器、須恵器等が混在していた。最終的には、土師器を伴う住居跡を9軒、土壌を5基検出し、縄文時代の遺構は住居跡を2軒、土壌を23基のほか土器埋設遺構1基、屋外炉1基、焼土状遺構2基検出した。

調査は10月末日に終了した。

第4章 遺構と遺物

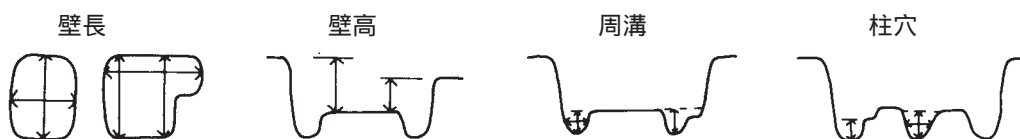
本章では、縄文時代、弥生時代、歴史時代の順に記載することとし、次のような事項については、原則的に統一して記載することとした。

ア．挿図の縮尺は、形態ごと（住居跡、かまど、縄文土器、土師器等）にできるだけ統一を図ったが、例外的なものもあるので図面ごとに縮尺を付した。

イ．遺構に関する表は、次の記載方法によった。

(ア) 法量...mとcm及び m^2 で表現したため表の項目欄内に表示した。

また計測に当り次のように統一した。

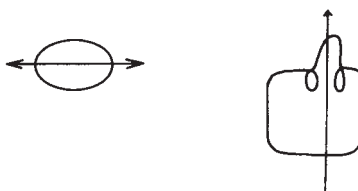


面積 ・ 竪穴内部の全面積を記載した。

・ 計測には、プランメーターを用いた。(値は3回計測の平均値で、小数第2位まで)

主軸方向

{ 縄文...長軸線
土師...かまど本体部分の中線



(イ) 平面形

縄文住居跡・土壇...円形を基本にして形状を表現した。

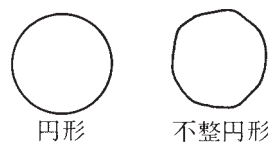
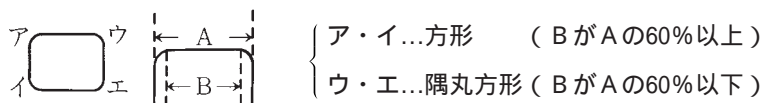
土師住居跡.....方形を基本にして形状を表現した。



・ 張り出し部は、形状表現の中を含めなかった。

方形

・ 方形と隅丸方形の区別



(ウ) 柱穴の形状については、便宜上、下図のように呼称した。



円筒状



角柱状



すり鉢状



円錐状



不定形

ウ．本文、表、挿図における略号、略字、図化については下記のとおりとした。

・遺構平面図	{ 土器..... P 石器..... S (ドットを付す) 炭化物... C (図化する) }	
・土師器実側図		{ ヘラナデ 指ナデ ミガキ ハケメ }
数		
値		

エ．遺構の実側図は、その種別ごとにできるだけ「天」に当たる部分を統一した。

住居跡 { 縄文...北が「天」
 { 土師...かまどが「天」

土壇.....北が「天」

かまど...方位と関係なく煙道方向が「天」

第 1 節 縄文時代の遺構と遺物

1. 住居跡

縄文時代の住居跡は、東側区の 1 段低い場所（標高49m）から検出した。この場所は、本遺跡のうちで最も尾駸沼に近い場所で、沼の対岸には縄文時代後期前半の十腰内 式土器等が出土する上尾駸(2)遺跡が所在し、また同じ台地の南側には縄文時代後期前半の住居跡等が検出された沖附(2)遺跡が所在している。

J - 1 号住居跡（第 9 図）

位置と確認 AP - 124グリッドから J - 1 号住居跡に切られて検出した。

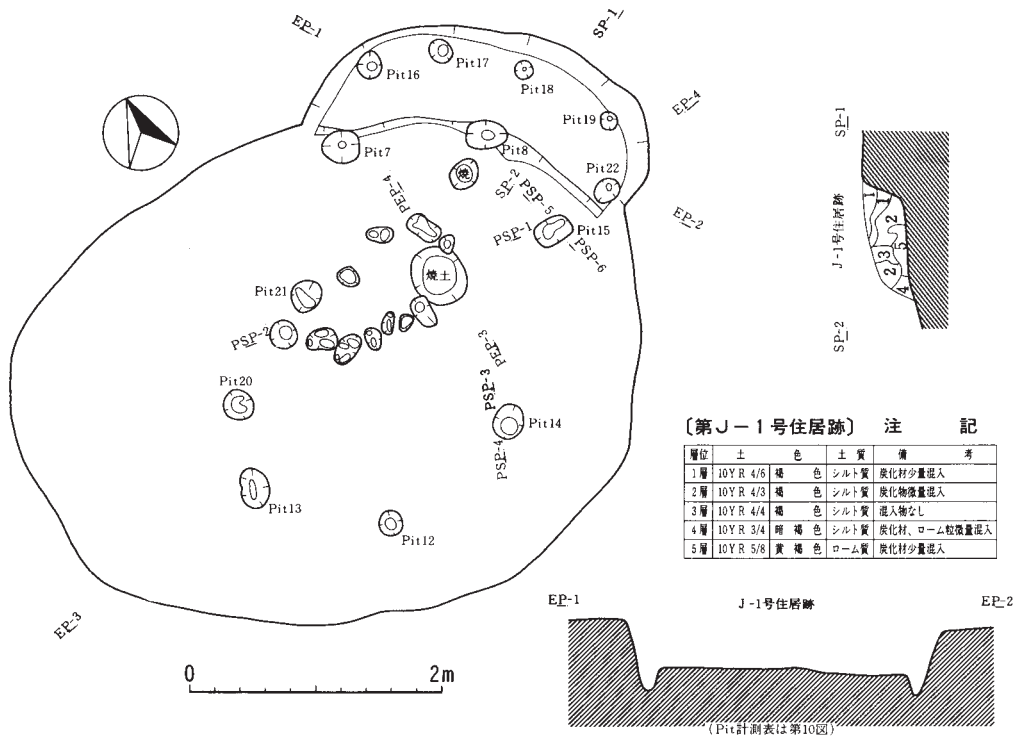
平面形と規模 東西に長軸を持つ（E - 25° - N）楕円形プランと推定され、現存部分は東西80cm、南北270cmである。

堆積土 東北側の壁周辺だけが残存し、ほかには J - 2 号住居跡と重複しているため、全体の堆積土は知り得ない。残存部分の堆積土は 6 層に分層され、最上部は第 b 層と同一である。壁際だけの堆積なので自然堆積かどうかは明確でない。

壁 軟弱で立ち上がりは緩い。

床 平坦で、堅く縮まっているが、壁下はやや軟らかい。

ピット 壁下に柱穴と思われるものを 5 個検出した。J - 2 号住居跡と重複している部



第9図 J-1号住居跡実測図

分では、貼床下から検出したpit - 12・13及びpit - 20・21がこの住居跡の柱穴と判断される。

炉 J - 2号住居跡との重複部分から検出した焼土4が本住居跡の炉と考えられる。上面は削られており、下部だけが残存しているものである。残存部分は平面形が径約40cmの円形で、断面形状は深さ12cmの皿状である。

出土遺物 なし。

(成田)

J - 2号住居跡 (第10図)

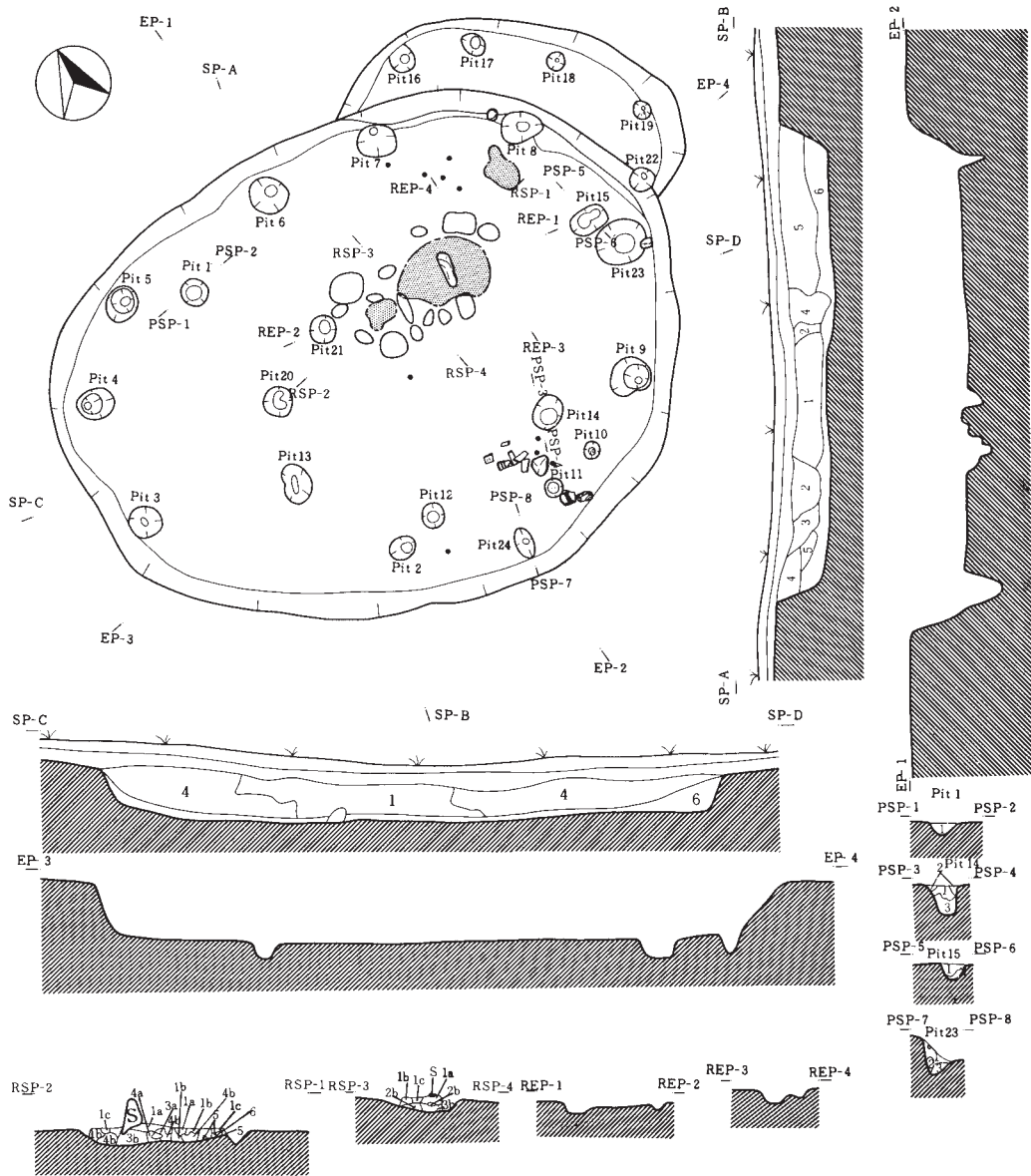
位置と確認 AP - 123・124、AQ - 123・124グリッドから深さ約20cmの浅皿状の窪みを確認した。なお、J - 1号住居跡を切って構築されている。

平面形と規模 平面形は、ほぼ東西に長軸を持つ楕円形で、規模は長径が510cm、短径が400cmで、深さは28～38cmである。

堆積土 6層に分層できた。大別すると黒褐色土、暗褐色土、褐色土、黄褐色土である。黄褐色土は壁際から凹面鏡状に床面を覆っており、その上面の壁周辺には褐色土、暗褐色土が堆積し、中央部分には黒褐色土が堆積している。堆積状況は自然堆積である。

壁 第 a・b層のため軟弱で不明瞭である。立ち上がりはやや緩い。

床 炉周辺及び中央部分は強く締まっているが、壁際は西側のpit - 3と4の間だけは締まっているが、ほかの部分はやや軟らかい。



〔第J-2号住居跡〕 注 記

層位	土色	土質	備考
1層	10Y R 3/2	黒褐色	泥人物なし
2層	10Y R 3/4	暗褐色	シルト質
3層	10Y R 4/4	暗褐色	シルト質
4層	10Y R 3/4	暗褐色	シルト質
5層	10Y R 4/4	暗褐色	シルト質
6層	10Y R 5/6	黄褐色	ローム質
8層	10Y R 4/6	暗褐色	シルト質

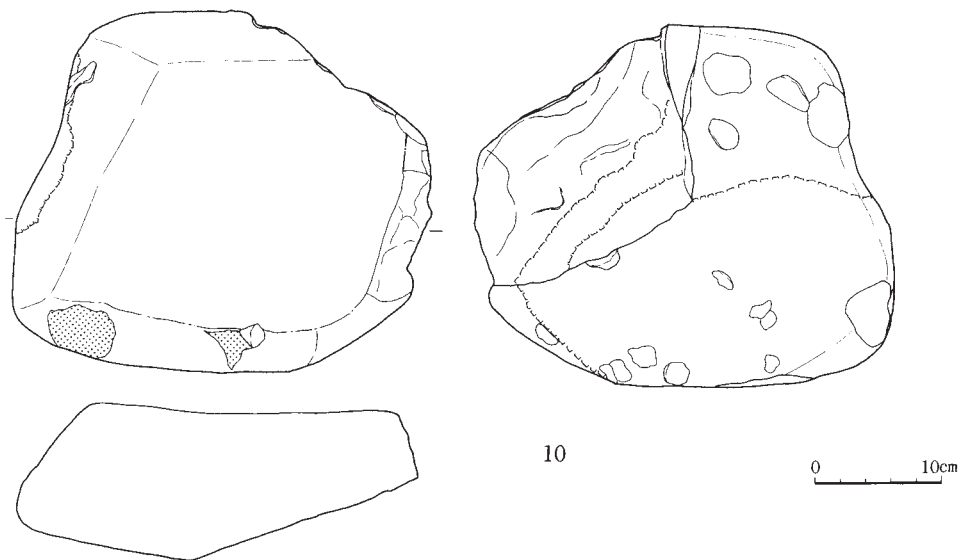
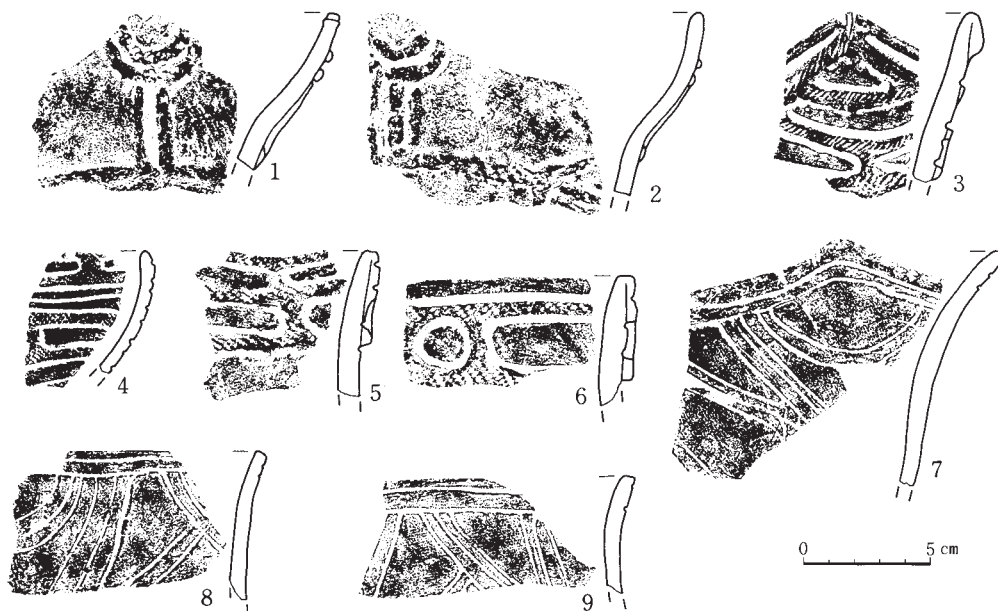
〔第J-2号住居跡〕 注 記

層位	土色	土質	備考
1a層	10Y R 3/4	暗褐色	シルト質
1b層	10Y R 4/6	暗褐色	シルト質
1c層	10Y R 4/6	暗褐色	シルト質
2a層	5Y R 5/8	明赤褐色	焼土
2b層	5Y R 4/6	赤褐色	焼土
3a層	1.5Y R 5/6	明褐色	シルト質
3b層	10Y R 4/8	暗褐色	シルト質
4a層	10Y R 5/8	黄褐色	ローム質
4b層	10Y R 5/6	黄褐色	ローム質
5層	10Y R 5/8	黄褐色	ローム質
6層	10Y R 3/3	暗褐色	シルト質

〔第J-1・2号住居跡 Pit計測表〕

Pit No	規模	深さ	Pit No	規模	深さ
1	22×22	12.2	2	20×21	26.1
3	25×26	35.0	4	26×30	22.6
5	25×32	28.2	6	30×32	35.1
7	26×30	16.3	8	24×32	15.1
9	26×36	37.1	10	13×13	11.5
11	15×16	10.3	12	18×20	10.1
13	22×32	14.3	14	24×28	22.2
15	20×30	13.6	16	18×20	18.3
17	18×20	22.0	18	14×14	16.2
19	14×15	16.0	20	24×25	8.2
21	23×24	11.8	22	18×20	20.2
23	36×42	28.3	24	15×26	28.8

第10図 J-2号住居跡実測図



第11図 J-2号住居跡出土遺物実測図

第3表 J-2号住居跡出土石器計測表

番号	出土位置	長さ m	幅 mm	厚さ mm	重量 g	石質分	類	備	考
10	炉床下	(270)	(320)	147	(16,500)	A	J-I		

ピット 壁際及び中央部に第10図のようなピットを検出したが、柱穴とみられる。なお、炉周辺から検出したピットは形状、底の状況等から炉石の抜取痕とみられるものである。

炉 中央部分より東側に構築されている。石の残存は1個だけであるが、焼土の周辺に抜取痕とみられるピットを検出した。石囲炉と思われる。現存する炉石は、最大幅15cmの石皿（第11図、安山岩）を転用したもので欠けた部分を下にして設置され、炉穴に面する部分が赤

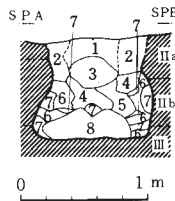
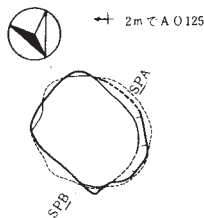
褐色に変色している。また、反対側の面は磨られており、かすかに変色している。炉穴の規模は、上端48×40cm、下端30×28cmで楕円形に近い平面形であり、断面形は最深部10cmの皿状である。焼土は、炉石の西側にも2箇所ブロック状に検出され、それぞれ周囲から覆土が褐色土の不整形ピットを検出した。これらは炉の造り替えの痕跡と考えられる。

出土遺物 すべて縄文土器（後期前半）で、覆土から20片出土した。 (成田)

2. 土壌

縄文時代の土壌は、東側区の中でも縄文時代の住居跡を検出した周辺から23基検出した。

J-1号土壌



〔J-1号土壌〕 注 記

層位	土	色	土質	備	考
1層	10Y R 4/4	褐色	色		
2層	10Y R 4/4	褐色	色		
3層	10Y R 4/6	褐色	色		焼土粒少量、炭化物粒微量
4層	10Y R 3/3	暗褐色	色		微粒ローム粒多量
5層	10Y R 4/4	褐色	色		" 中量
6層	10Y R 4/4	褐色	色		多量(40%)
7層	10Y R 6/8	明黄褐色	色		微粒ローム粒の集合体
8層	10Y R 2/3	黒褐色	色		ローム粒少量、炭化物粒少量

第12図 J-1号土壌実測図

位置・確認 AN-124グリッドの第35号住居跡の東壁・北側の壁面の 層中に暗褐色の締りの緩い部分があったが、その上部の a層を掘り下げて、 a層よりやや暗い褐色の落ちこみを確認した。

重複 第35号住居跡に切られている。

形態 底辺部が外側へ張り出すフラスコ状である。開口部は長径92cm、短径75cmの不整形楕円形である。深さは82cmである。底面はやや凹凸がある。

堆積土 上方及び壁際に褐色土があり、底部の中央には黒褐色土（8層）がある。中ほどからやや上には焼土粒・炭化物粒の混じった層（3層）がある。

出土遺物 覆土中位から縄文時代後期前半のものと思われる無文の土器2片と礫が1個出土した。 (坂本)

J-2号土壌

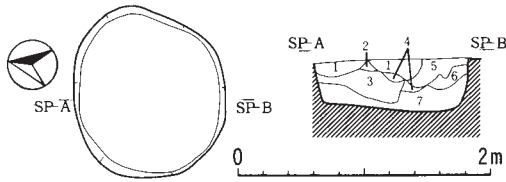
位置と確認 AQ-126グリッドの第 a層上面を精査中に確認した。

平面形と規模 不整な円形で、開口部の径は約130cm、壙底部の径は約120cm、深さ約40cmである。

堆積土 4層に分層できた。各層にローム粒が混入しており、人為的堆積と思われる。

壁 壁の立ち上がりは、垂直に近く、壁面は軟弱である。

底 壙底面は、平坦であるがやや軟弱である。



〔第J-2号土坑〕 注 記

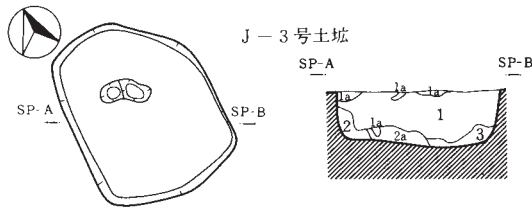
層位	土 色	土 質	備 考
1層	10 Y R 3/4 暗 褐 色	シルト質	ローム粒微量混入
2層	10 Y R 3/3 暗 褐 色	シルト質	混入物なし
3層	10 Y R 4/6 褐 色	シルト質	ローム粒多量混入
4層	10 Y R 4/4 褐 色	シルト質	ローム少量混入
5層	10 Y R 5/6 黄 褐 色	ローム質	ローム粒微量混入
6層	10 Y R 5/6 黄 褐 色	ローム質	ロームブロック微量混入
7層	10 Y R 6/6 明 黄 褐色	ローム質	ロームブロック、ローム粒多量混入

第13図 J-2号土坑実測図

出土遺物 なし。

(成田・佐藤)

J-3号土坑



〔第J-3号土坑〕 注 記

層位	土 色	土 質	備 考
1層	10 Y R 4/6 褐 色	シルト質	ロームブロック混入
2層	10 Y R 5/6 黄 褐色	シルト質	ローム粒混入
3層	10 Y R 6/6 明黄褐色	ローム質	ローム粒多量、炭化物若干混入
4層	10 Y R 6/4 にぶい黄褐色	ローム質	黒色粒混入
5層	10 Y R 7/4 にぶい黄褐色	ローム質	混入物なし

第14図 J-3号土坑実測図

位置と確認 A R - 122・123グリットで第 a 層を精査中に確認した。

平面形と規模 楕円形で開口部が115×160cm、坑底部が110×140cm、深さが15cmである。

堆積土 3層に分層したが、各層にロームブロックが入り人為的堆積と思われる。

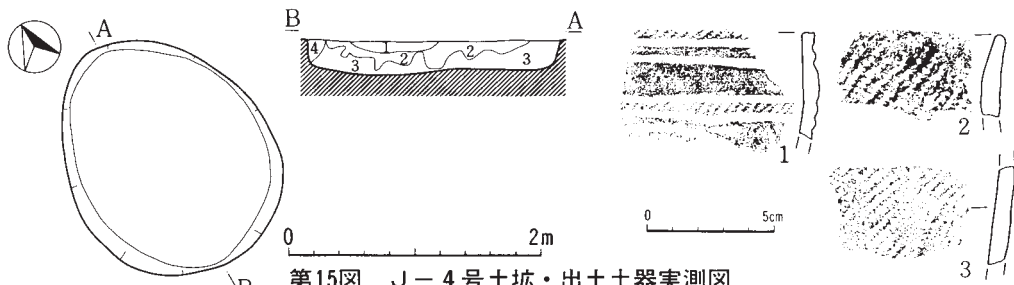
壁 立ち上がりは緩く、壁面は軟弱である。

底 坑底面は平坦であるが、やや軟弱である。

出土遺物 なし。

(成田・佐藤)

J-4号土坑



第15図 J-4号土坑・出土土器実測図

位置と確認 A S - 124グリットで、第 a 層精査中に確認した。

平面形と規模 楕円形で、開口部165~200cm、坑底部145~185cm、深さ約25cmである。

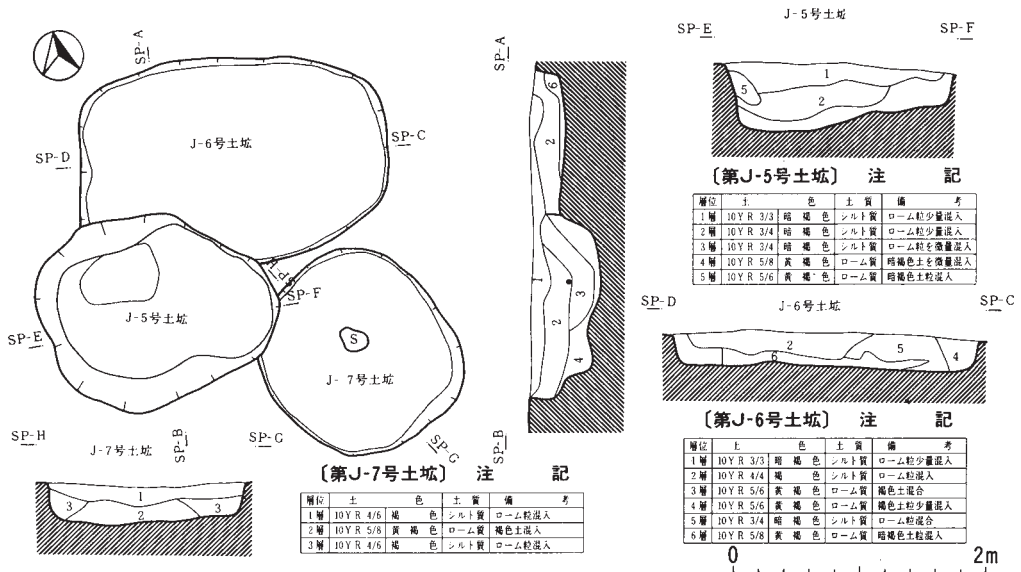
堆積土

壁 立ち上がりは急で、壁面は軟弱である。

底 坑底面は、ほぼ平坦であるが、壁面は軟弱である。

出土遺物 覆土内から縄文土器(第15図)が出土した。

(成田・佐藤)



第16図 J-5・6・7号土坑実測図

J - 5号土坑

位置と確認 AP - 126グリッドから検出した。本土坑よりやや北寄りの第17号土坑、及び東寄りの第18号土坑と切り合っている。

平面形と規模 不整形で、開口部長径186cm、短径146cm、坑底部長径170cm、短径100cmで、深さ44～53cmである。

堆積土 5層に分層できた。大別すると、暗褐色土と黄褐色土で、自然的堆積状況である。本土坑と第17・18号土坑との新旧関係は、堆積状況から判断すると、本土坑が、第17号土坑よりは新しく、第18号土坑よりは古い。

壁 東側以外はやや緩い立ち上がりで、底面近くまで、締まりの弱い暗褐色土が堆積しており、壁は柔らかい。

底 締りがなく、若干凹凸がある。

出土遺物 なし。

(成田・津川)

J - 6号土坑

位置と確認 AP - 126・127グリッドから検出した。本土坑の南に位置する第16号土坑と切り合っている。

平面形・規模 隅丸長方形で、開口部240×165cm、坑底部230×150cmで、深さ約23cmである。

堆積土 6層に分層され、大別すると、暗褐色土、褐色土、黄褐色土である。堆積は、自然的である。本土坑は、第16号土坑に切られている。

壁 ほぼ垂直の立ち上がりで、底面近くまで締りが弱く柔らかい。

底 ほぼ平坦で、締りが強く堅い。

出土遺物 なし。 (成田・津川)

J - 7 号土壌

位置と確認 A P - 126・127グリッドから検出した。本土壌の西に位置する第16号土壌と切り合っている。

平面形・規模 ほぼ円形で、上端160cm、下端140～150cmで、深さ24～33cmである。

堆積土 3層に分層され、大別すると、褐色土、黄褐色土で、自然的堆積状況を呈しており、その堆積から判断すると、本土壌は第16号土壌を切っている。

壁 ほぼ垂直の立ち上がりで、やや堅い。

底 ほぼ平坦で、強く締っている。 (成田・津川)

J - 8 号土壌

位置・確認 A L - 121・A M - 121グリッドの a 層に、径60cmほどの焼土の広がりとその周囲の暗褐色の不明瞭な落ちこみを確認した。

重複 J - 9号土壌と切り合っているが、新旧は不明である。

形態 底部付近が外へ張り出すフラスコ状の形態である。開口部の平面形は、長径190cm・短径168cmの楕円形で、深さは110cmである。底面はやや小さな凹凸があるが、おおむね平坦である。

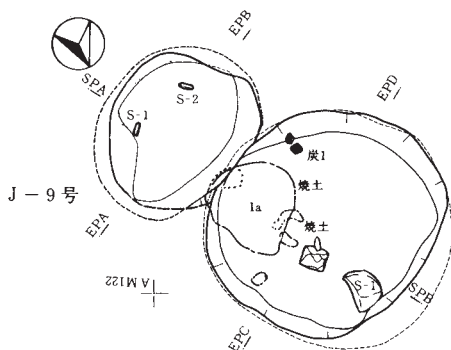
堆積土 上半に暗褐色土、下半に黒褐色土、最下部に褐色土と分かれている。両者の間や、確認面、底面付近の覆土には焼土がある(1 a・2 a・2 b・3 b層)、上方のものは中央部にあり、分布状態などからその場で火を使ったものと考えられる。中位のものも中央付近に一部径15cmほどに広がる堅い塊状になっているものもみられ、下位のものは径2～3cmのブロック状のものが中央から壁際まで炭化物を混じえながら分散している。

出土遺物 土器は数10片の破片で出土し、復原可能なものはなかった。いずれも後期前半のものである。底面直上からは第9類と思われる底辺部と第16類の胴部の小片が出土した。また下位の3層中からは、第5類や第8類のものが出土している。深鉢形が多いが、(8)は鉢形、(12)は壺形の破片と思われる。

石器は底面から磨敲凹石類の類(3)が出土しており、また、底上5～20cmほどのところで石皿類が2個出土した(S1・S2)。10cm上からは縦20cm横15cm厚さ7cmのシルト岩が出土した。その他覆土中から、磨敲凹石類の類(2)が出土した。J - 8・9号両土壌の境からは、磨敲凹石類の類(4)が出土している。 (坂本)

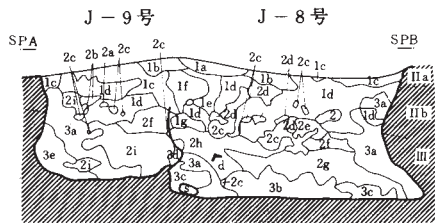
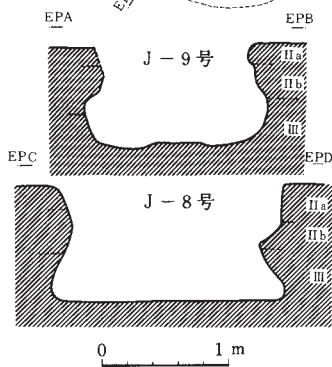
J - 9 号土壌

位置・確認 A M121・122グリッド a層にJ - 8号土壌から連続する暗褐色土の落



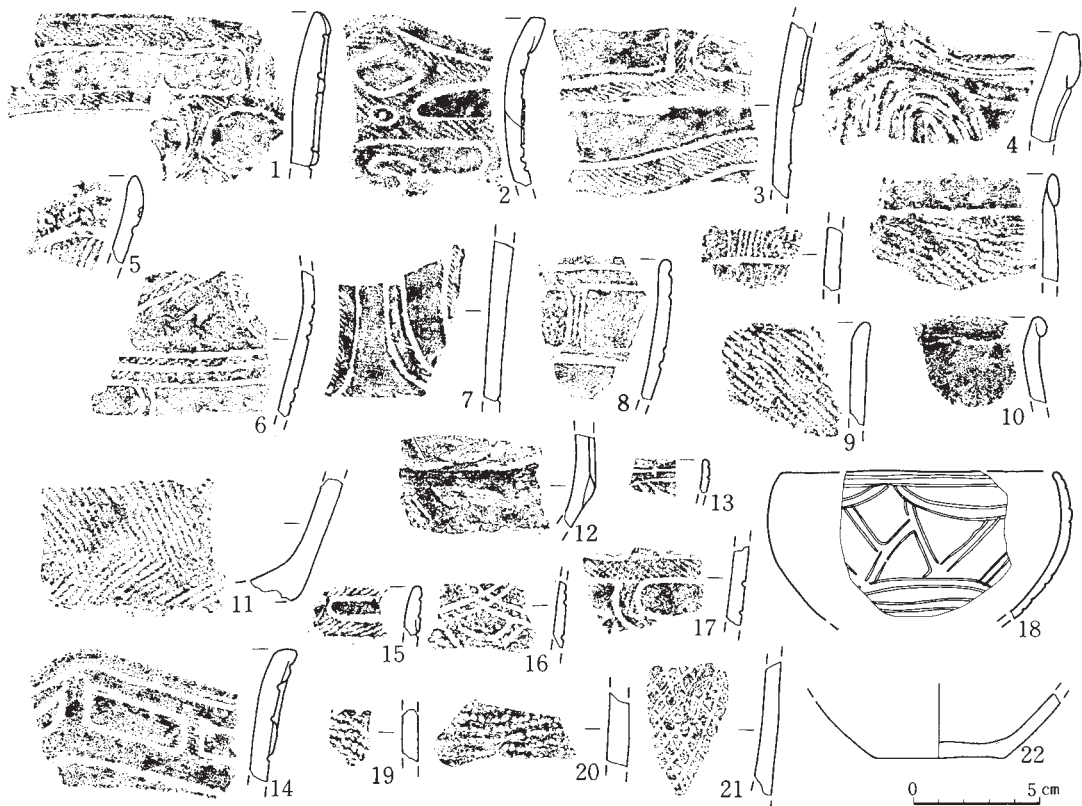
J-9号

J-8号

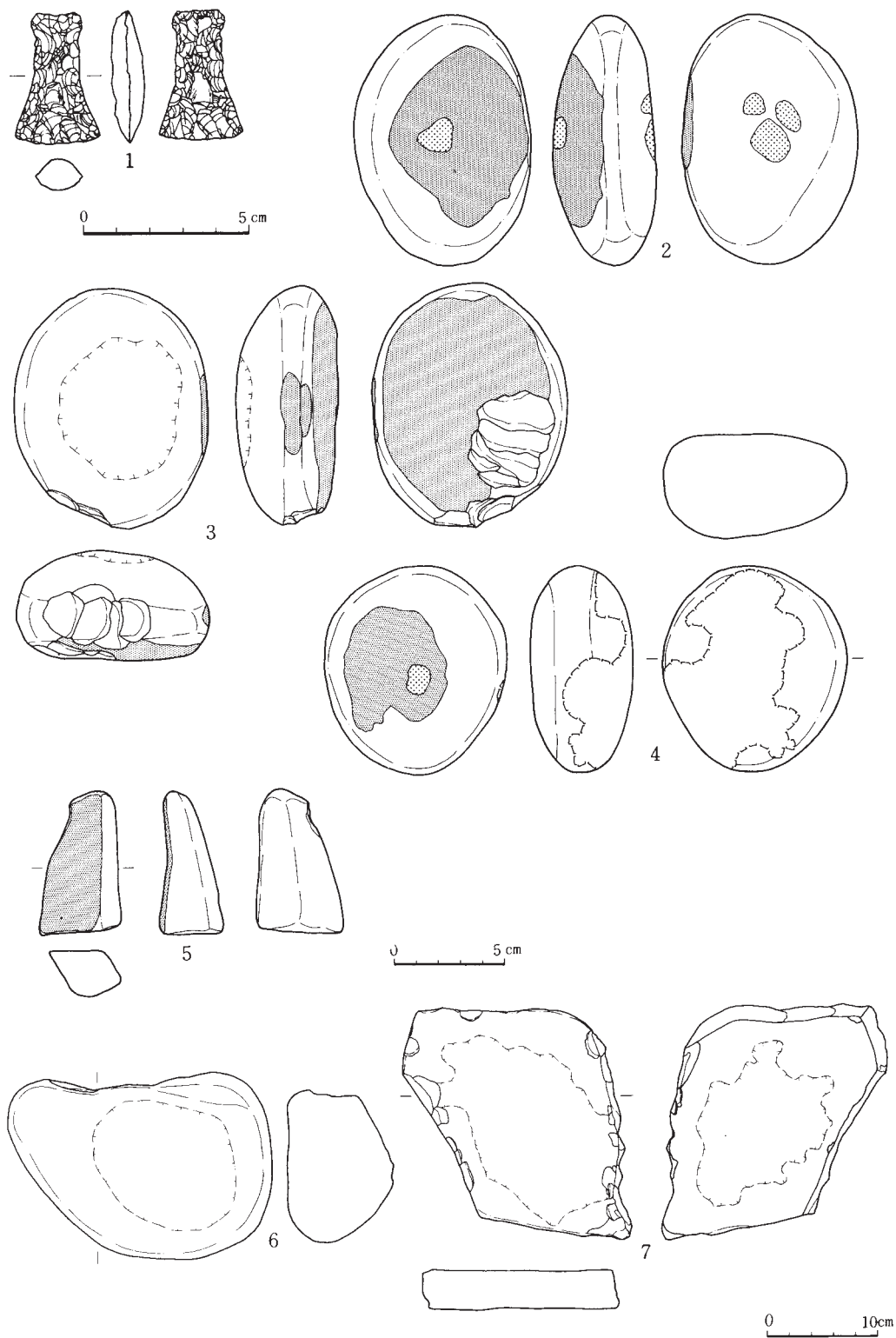


(第J-8・9号土坑) 注 記

層位	土色	土質	備考
1 a層	7.5 Y R 4/4 暗褐色		
1 b層	10 Y R 3/4 暗褐色		炭化物粒少量
1 c層	10 Y R 5/6 黄褐色		" 微量
1 d層	10 Y R 4/4 暗褐色		" 中量
1 e層	10 Y R 4/6 暗褐色		" 少量、焼土粒微量
1 f層	10 Y R 5/6 黄褐色		" 少量
1 g層	10 Y R 4/6 暗褐色		ローム粒ブロック状に混入
2 a層	5 Y R 4/6 赤褐色		焼土、炭化物粒微量
2 b層	7.5 Y R 4/6 暗褐色		焼土、炭化物粒中量、暗褐色土ブロック状に混入
2 c層	10 Y R 3/4 暗褐色		堅いブロック状炭化物粒少量
2 d層	10 Y R 4/6 暗褐色		" " 少量
2 e層	10 Y R 3/4 暗褐色		1 d層に似る 炭化物少量
2 f層	10 Y R 3/4 暗褐色		2 e層よりやや暗い、炭化物粒少量、焼土粒微量
2 g層	10 Y R 3/3 暗褐色		" " 中量 " 少量
2 h層	10 Y R 3/4 暗褐色		" " 少量 " 微量
2 i層	10 Y R 3/4 暗褐色		2 b層に似る、炭化物粒少量
3 a層	10 Y R 6/6 明黄褐色		暗褐色土混入、炭化物粒少量
3 b層	7.5 Y R 5/8 暗褐色		焼けた田層の土、炭化物粒中量、焼土粒中量
3 c層	7.5 Y R 6/6 暗褐色		(田層の土)
3 d層	10 Y R 3/4 暗褐色		炭化物粒少量、ローム粒多量(30%)
3 e層	7.5 Y R 6/6 暗褐色		" 少量、暗褐色土混入



第17図 J-8・9号土坑・出土土器実測図



第18图 J-8·9号土坑·出土石器实测图

こみを確認した。

重複 J - 8号土壇と切りあっているが、新旧関係は不明である。

形態 壁下方が外側へ張り出すフラスコ状である。開口部は長径122cm、短径112cmの楕円形を呈する。深さは93cmである。底面は凹湾している。

堆積土 J - 8号と類似し、上半に褐色土、下半に晴褐色土がある。下半の南東側は層の土のブロックを主体とした層となっている。中位には焼土ブロック(2a、2b層)がみられる。

出土遺物 底面直上から深鉢形土器の第9類の胴部片が2点(19・20)、鉢形土器の第8類の小片(18)が出土した。これは覆土中の13と周一個体と思われる。その他第5・6・7・12類が出土している。(坂本)

第4表 J - 8号土壇出土石器計測表

整理番号	番号	出土位置	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重量 g	石	質	分類	備考
19	1	下位	39.5	25.0	10.0	8.1	J		D	
119	2	中位	114	80	45	459	D		I-IV	Sス、スタボ
124	3	底S-2	(107)	88	49	(749)	A		I-I	Sスケ、eス
122	4	A B土上中位	94	83	46	538	A		I-III	Sス、スタ
118	5	中位	66	27	33	27	D		K	Sス
12	6	S-2	265	169	98	6,000	A		J-I	
11	7	上位S-1	210	205	35	3,000	A		J-II b	eハ

第5表 J - 9号土壇出土土器観察表

番号	出土地区・層位	器高	口径	底径	最大径	器厚	施文	単位文様	単位数	胎土	焼成	外面	内面	備考	分類
18	覆土	(5.8)	(11)		(12)		沈線→研磨	斜線、弧		普通	良好	にぶい橙色	にぶい橙色	-	8

J - 10号土壇

位置と確認 AM - 124グリッドから検出した。

平面形と規模 隅九万形で、開口部122×136cm、壇底部82×96cmで、深さ28～36cmである。

堆積土 4層に分層できた。大別すると、晴褐色土と褐色土で、自然堆積の状況を示している。

壁 底近くまで、第a層なため、脆く柔らかい。緩い立ち上がりを呈している。

底 北東隅が一段低くなっている。強く締りがある。

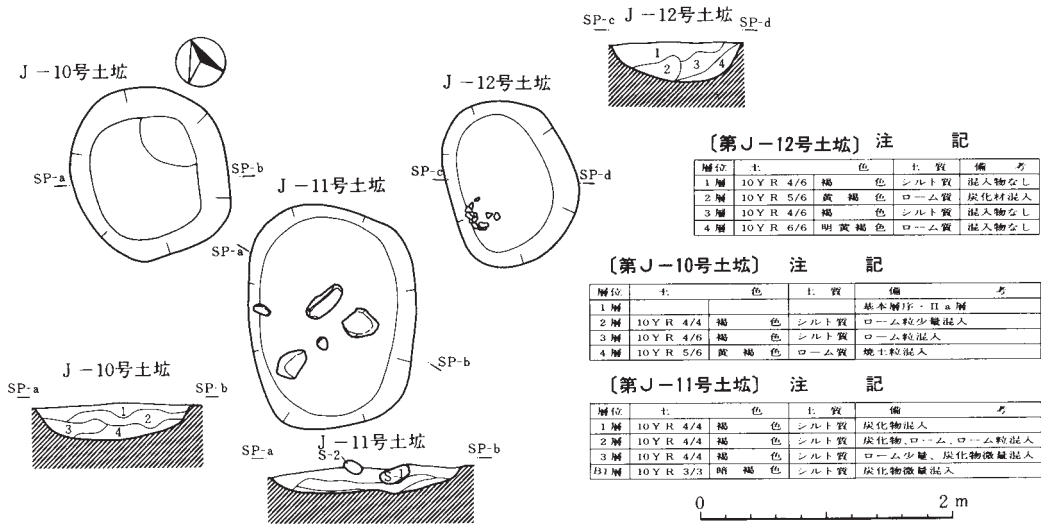
出土遺物 なし。(成田・津川)

J - 11号土壇

位置と確認 AM - 124、AN - 124グリッドで、第層精査中に確認した。

平面形と規模 平面形は楕円形で、開口部の長径170cm、短径130cm、壇底部の長径120cm、短径110cmで深さ20cmである。

堆積土 3層に分層でき、自然堆積である。



第19図 J-10・11・12号土坑実測図

壁 底面から外に開き立ち上がる。

底 若干の凹凸はあるが、ほぼ平坦で、坑底面はやや締っている。

出土遺物 第1層に礫が入り込んでいた。

J-12号土坑

位置と確認 AM-124グリッドから第a層精査中に確認した。

平面形と規模 楕円形で、開口部100×130cm、坑底部70×105cmで、深さ22～35cmである。

堆積土 4層に分層できた。大別すると、褐色土、黄褐色土、明黄褐色土で、自然的堆積状況である。黄褐色土層の第2層内に若干の炭化材が混入している。

壁 緩やかな立ち上がりで、脆く柔らかい。

底 傾斜しており、柔らかい。

出土遺物 ほぼ底面直上から23片の無文で壺形の縄文土器（第28図）が出土した。

J-13号土坑

位置と確認 AL-124グリッドから第a層精査中に確認した。

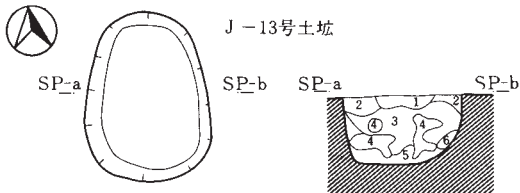
平面形と規模 ほぼ楕円形で、開口部100×136cm、坑底部76×114cmで、深さ15～17cmである。

堆積土 6層に分層できた。大別すると、黒褐色土、暗褐色土、褐色土、黄褐色土で、人為的堆積状況とは思われない。

壁 やや緩やかな立ち上がりで、脆く柔らかい。

底 ほぼ平坦で、柔らかめである。

（成円・津川）

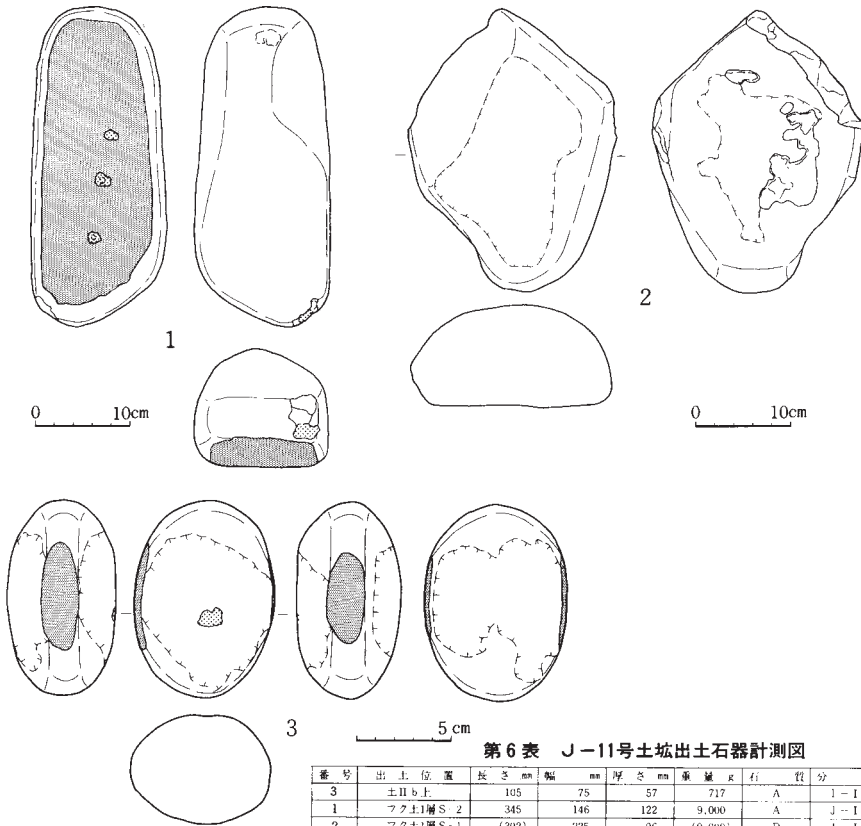


〔第J-13号土坑〕 注 記

層位	土 色	土 質	備 考
1層	10Y R 3/4 暗褐色	シルト質	炭化物微量
2層	10Y R 4/4 褐色	シルト質	ローム粒混入、黒褐色土粒少量混入
3層	10Y R 3/3 褐色	シルト質	ローム粒少量混入
4層	10Y R 2/3 黒褐色	シルト質	ローム粒少量混入
5層	10Y R 5/8 黄褐色	ローム質	黒褐色土、暗褐色土混合
6層	10Y R 4/4 褐色	シルト質	黒褐色土粒、ローム粒少量混入

0 2m

第20 J-13号土坑実測図



第6表 J-11号土坑出土石器計測図

番号	出土位置	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重量 g	石 質	分 類	備 考
3	土IIb上	105	75	57	717	A	J-1	Sヤ、Sダ、eス
1	フク土1層S-2	345	146	122	9,000	A	J-1	Sホ
2	フク土1層S-1	(302)	225	96	(9,000)	D	J-1	

第21図 J-11号土坑出土石器実測図

J-14号土坑

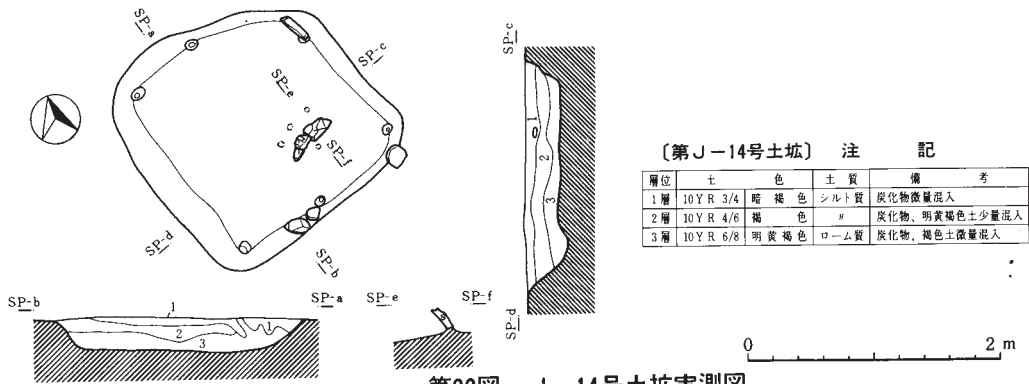
位置と確認 AP・AO-117グリッドで第 a層精査中に確認した。

平面形と規模 平面形は、方形に近い台形、壁長は北壁140cm・南壁180cm・東壁190cm・西壁170cmで、深さは24~28cmである。

堆積土 3層に分層できたが各層に少量の炭化物が混入している。また壁際の覆土中に自然石が4個含まれていた。

壁 立ち上がりは緩く、壁面は軟弱である。

底 多少凹凸はあるが全体的には平坦で、堅く締っている。中央部より北東寄りに自然



第22図 J-14号土坑実測図

石が約3個重なって出土し、その周辺に4～5cmほどの焼土ブロックが散在していた。

東壁・南壁・西壁の壁下に径8～10cm・深さ4～9cmの円形ピットを6個検出した。このピットが柱穴とすれば、簡単な上屋を持つものと考えられる。しかし明確に炉とみなせるものが検出できなかったため土壌とした。

出土遺物 覆土内から石器1点（第23図1）と縄文土器破片10片（第23図2～11）出土したが、このなかに切断壺形土器と思われる破片（第23図2）も含まれている。（成田）

J-15号土坑（第24図）

位置と確認 A Q - 116・117、A P - 117グリッドの第 a 層精査中に確認した。

平面形と規模 平面形は、不整な円形で径約110cm、深さ40～50cmで、断面形はややフラスコ形に近い鍋底状を呈している。

堆積土 8層に分層した。第1～2層は褐色土で、第3～8層は暗褐色土・黒褐色土・黄褐色土である。大まかに分けると第1～8層は、暗褐色土と黒褐色土が互層になっておりしかも各層には20mm大の黒褐色土ブロックが大量に混入している。このような堆積状況から人為的な堆積と思われる。

壁 壁面上部は第 b 層のため軟弱である。

底 凹凸はあるが堅い。

出土遺物 覆土から礫が9個出土したが、この中に第23図12・13のような石器が含まれていた。土器は覆土内から縄文時代後期前半のもの（第23図14～20）が出土した。（成田）

J-16号土坑（第24図）

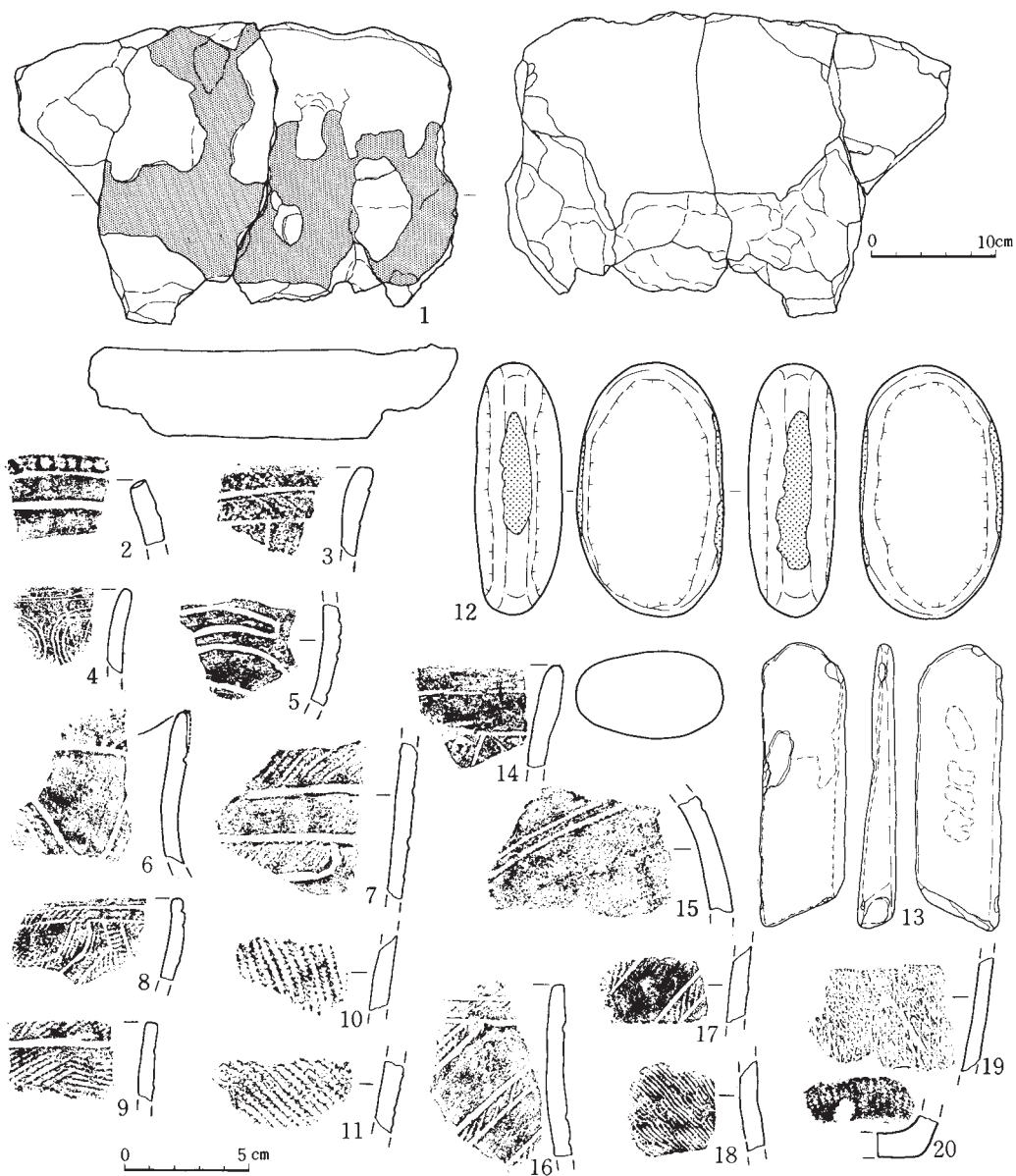
位置と確認 A I - 129・130、A J - 129・130グリッドから深さ30cmのすり鉢状の窪みを確認した。

平面形と規模 ほぼ円形で、開口部235cm・坑底部210cm・深さ120～140cmである。

堆積土 7層に分層され、自然堆積の状況を呈している。

壁 上部は第 a・b 層のため軟弱である。垂直に近い立上がりである。

底 西側がやや深くなっているが全体的には平坦で、砂混じりで堅い。



第23図 J-14号・15号土坑出土遺物実測図

第7表 J-14号・15号土坑出土石器計測表

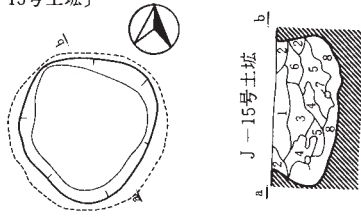
番号	出土位置	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重量 g	石質	分類	備考
1	25号フク土 S-5	(250)	345	69	(7,500)	A	J-I	Sタ
13	25号II a	(230)	67	26	(661)	A	J-II b	eハ
12	26号フク土	102	59	35	332	F	I-III	Sス、eタ

出土遺物 覆土の各層から縄文土器破片（第25図1～18）が出土した。（成田）

J-17号土坑（第24図）

位置と確認 AP-126グリッドの第 b層上面で確認した。

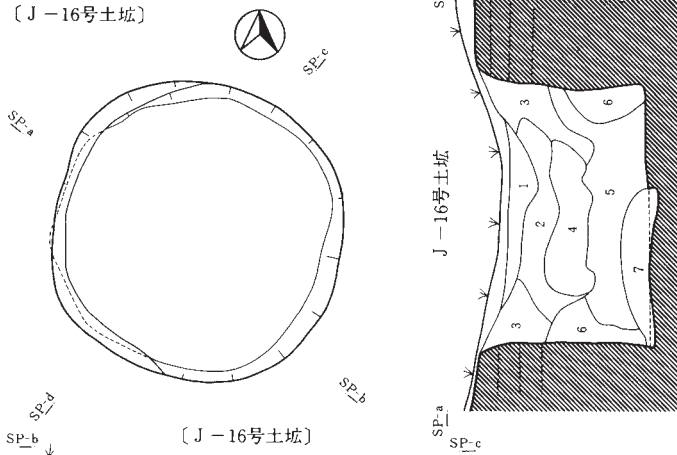
(J-15号土坑)



〔第J-15号土坑〕 注 記

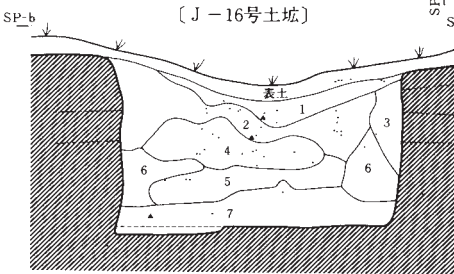
層位	土 色	土 質	備 考
1層	7.5Y R 4/4	褐 色	シルト質
2層	10Y R 4/6	褐 色	流入物なし
3層	10Y R 3/4	暗 褐色	ローム粒多量混入
4層	7.5Y R 3/4	暗 褐色	ローム粒混入
5層	10Y R 3/2	黒 褐色	黒褐色土微量、焼土粒混入
6層	10Y R 3/4	暗 褐色	ローム粒多量混入
7層	10Y R 5/8	黄 褐色	ローム質
8層	10Y R 2/2	黒 褐色	増褐色土、ローム粒混入

(J-16号土坑)

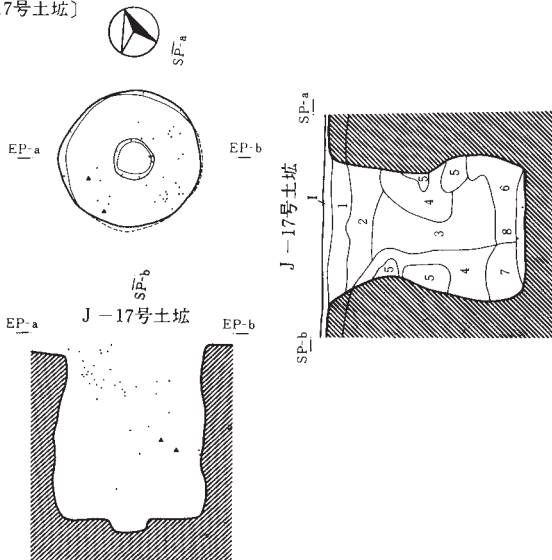


〔第J-16号土坑〕 注 記

層位	土 色	土 質	備 考
1層	10Y R 2/1	黒 色	シルト質
2層	10Y R 3/2	黒 褐色	ローム粒少量、焼土粒微量混入
3層	10Y R 3/3	暗 褐色	ローム粒黒色土粒少量混入
4層	10Y R 2/2	黒 褐色	ローム粒、ロームブロック混入
5層	10Y R 5/6	黄 褐色	シルト質
6層	10Y R 4/6	褐 色	シルト質
7層	10Y R 5/6	黄 褐色	シルト質



(J-17号土坑)

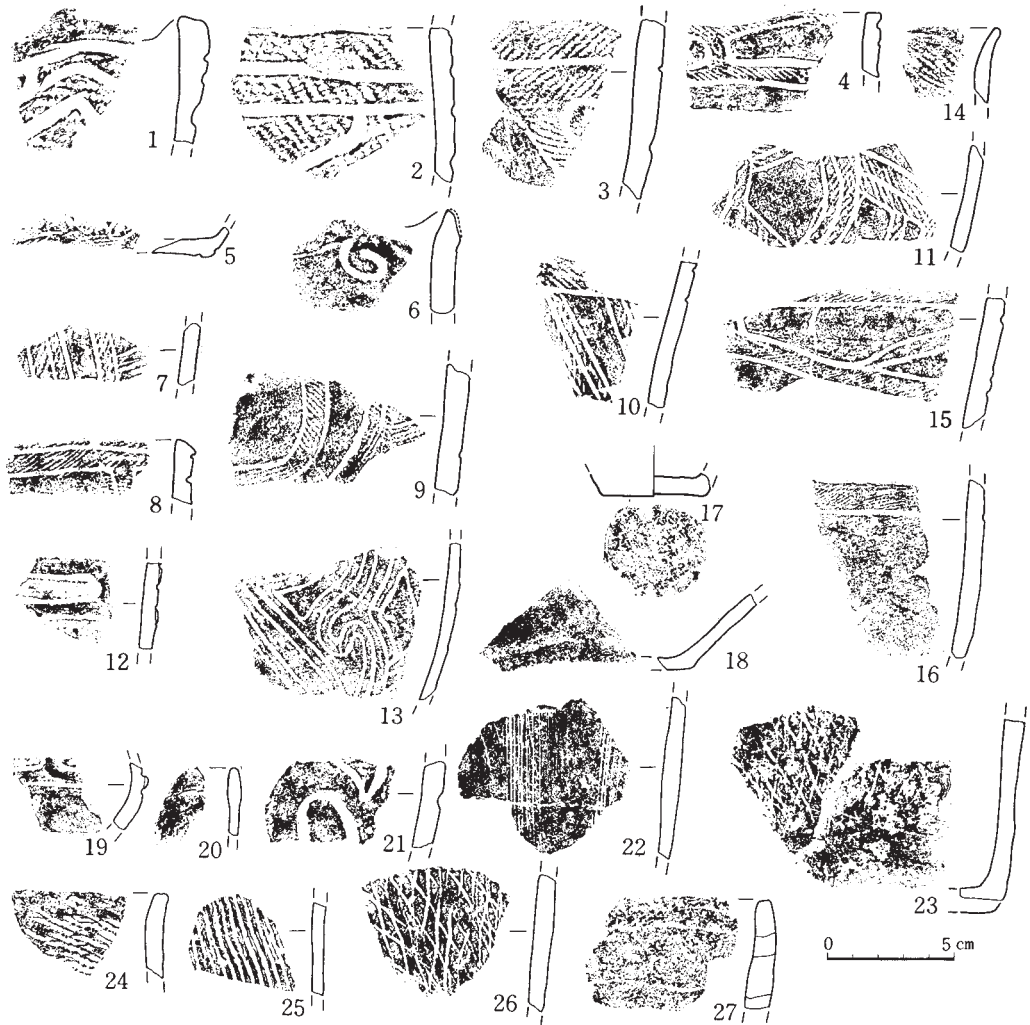


〔第J-17号土坑〕 注 記

層位	土 色	土 質	備 考
1層	10Y R 2/3	黒 褐色	シルト質
2層	10Y R 3/2	黒 褐色	炭化物混入、ローム粒少量混入
3層	10Y R 2/2	黒 褐色	炭化物、ローム粒混入
4層	10Y R 3/4	暗 褐色	ローム粒、黒色粒が若干混入、褐色土少量混入
5層	10Y R 5/6	黄 褐色	ローム質
6層	10Y R 4/6	褐 色	シルト質
7層	10Y R 3/4	暗 褐色	ローム粒若干混入、炭化物少量混入
8層	10Y R 2/3	黒 褐色	ローム粒、黒色粒若干混入



第24図 J15号・16号・17号土坑実測図



第25図 J-16号・17号土坑出土土器拓影図

平面形と規模 円形、径は上端・下端ともほぼ同じで110cm、深さが140～150cmである。

堆積土 8層に分層できた。第1層～第3層は炭化物及びローム粒が混入した層で、第3層が特に多い。自然堆積ではないように思われる。

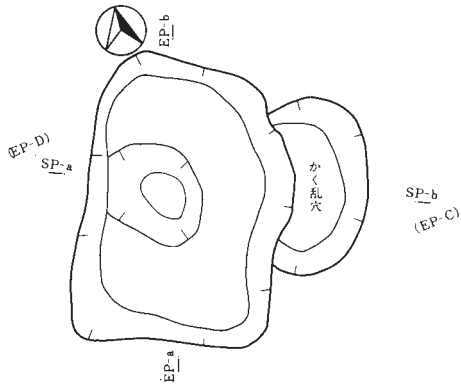
壁 南側は上端より広がる部分があるが、ほかは凹凸はあるもののほぼ垂直に立上がっている。

底 平坦で、堅く締っている。中央部分に径約32cm・深さ10cmの円形ビットがある。

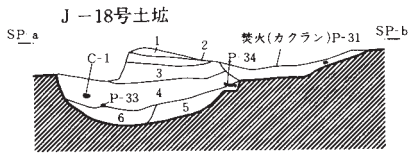
出土遺物 覆土の各層から縄文土器破片（第25図19～27）が出土した。（成田）

J-18号土坑（第26図）

位置と確認 AN-126・127グリッドから検出した。北東隅周辺に攪乱穴があり、南東隅及び北東隅周辺は攪乱穴により切られている。

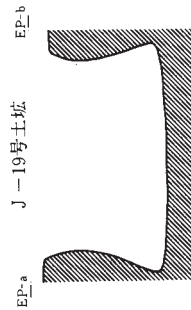
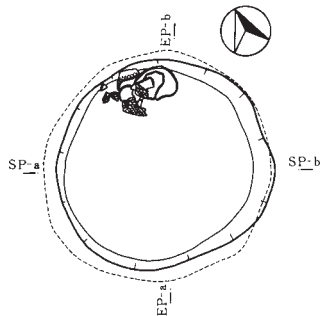


〔J-18号土坑〕



〔第J-18号土坑〕 注 記

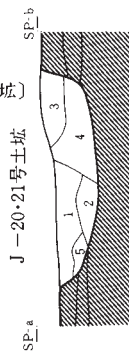
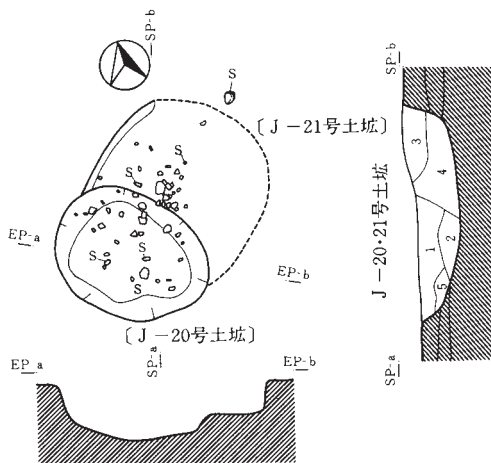
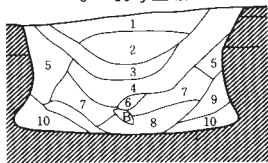
層位	土 色	土 質	備 考
1層	10 Y R 3/4	暗 褐 色	シルト質
2層	10 Y R 4/4	暗 褐 色	炭化物を若干混入、黒色土ブロック混入
3層	10 Y R 3/3	暗 褐 色	炭化物、焼土粒混入
4層	10 Y R 3/2	暗 褐 色	炭化物少量混入
5層	10 Y R 4/3	にがい黄褐色	炭化物若干混入、ロームブロック混入
6層	10 Y R 4/6	暗 褐 色	黒色土粒混入、炭化物若干混入



〔J-19号土坑〕

〔第J-19号土坑〕 注 記

層位	土 色	土 質	備 考
1層	10 Y R 2/3	黒 褐 色	シルト質
2層	10 Y R 2/1	黒 褐 色	炭化物、ローム粒微量混入、暗褐色土ブロック混入
3層	10 Y R 3/2	暗 褐 色	ローム粒、炭化物を微量に混入
4層	10 Y R 3/3	暗 褐 色	ローム粒、炭化物微量混入
5層	10 Y R 4/4	暗 褐 色	ローム粒、炭化物を若干混入、暗褐色土ブロック混入
6層	10 Y R 3/2	暗 褐 色	焼土ブロック混入、炭化物微量に混入
7層	10 Y R 2/3	黒 褐 色	炭化物、焼土粒を微量に混入
8層	10 Y R 3/3	暗 褐 色	炭化物微量、褐色土ブロック混入
9層	10 Y R 4/4	暗 褐 色	炭化物微量、暗褐色土ブロック混入
10層	10 Y R 5/8	黄 褐 色	ローム質
			混入物なし



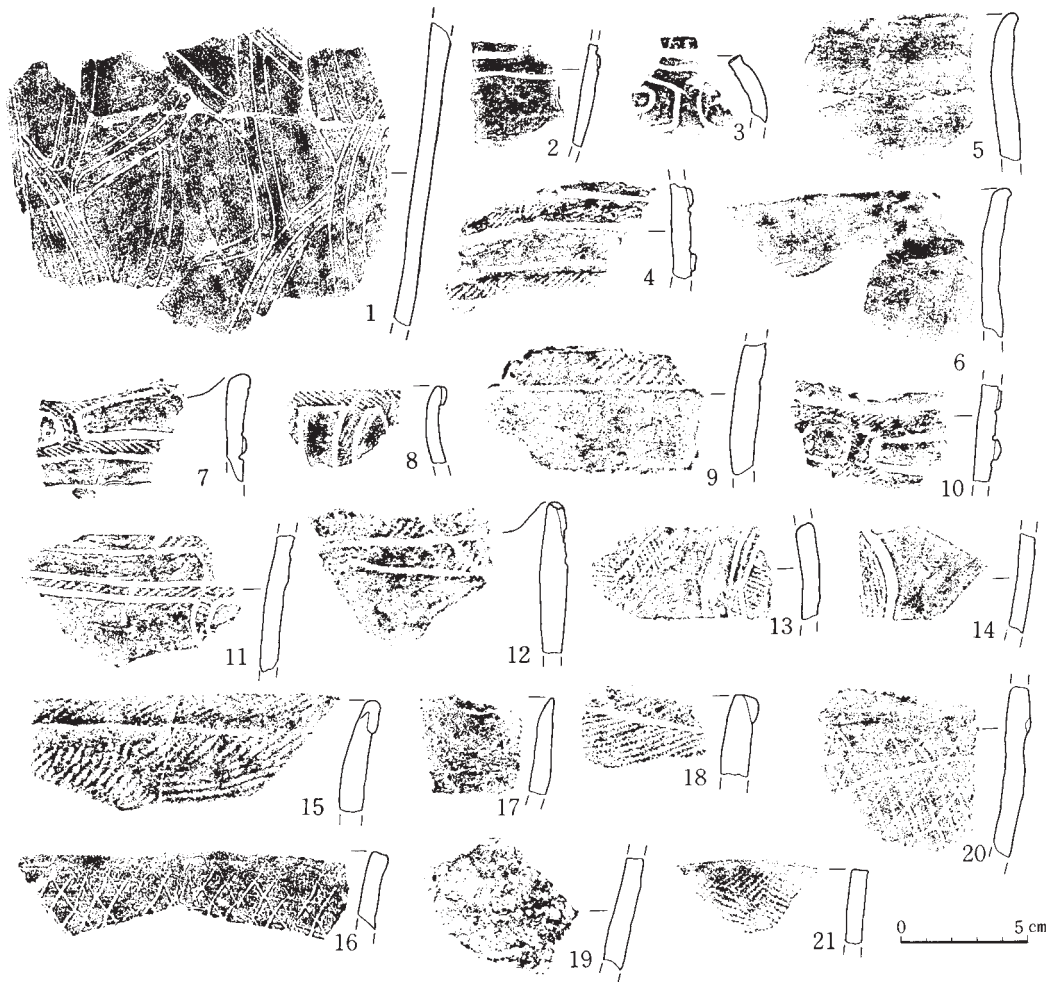
〔J-20・21号土坑〕

〔第J-20・21号土坑〕 注 記

層位	土 色	土 質	備 考
1層	10 Y R 3/2	暗 褐 色	シルト質
2層	10 Y R 2/3	暗 褐 色	炭化物、ローム粒を多量混入
3層	10 Y R 4/4	暗 褐 色	ロームブロック混入、炭化物若干混入
4層	10 Y R 3/4	暗 褐 色	ローム混入、ローム粒多量混入
5層	10 Y R 5/6	黄 褐 色	ローム質
			ローム多量混入、炭化物若干混入



第26図 J-18号・19号・20号・21号土坑実測図



第27図 J-18号土坑出土土器拓影図

平面形と規模 長方形で開口部長辺232×短辺160cm、壙底部190×138cm、深さ40～60cmである。

堆積土 6層に分層できた。上層に焼土粒混入層（第3層）がある。

壁 立ち上がりは緩く、柔らかい。

底 西側壁中央部分に長径75cmほどの不整形の落込みがある。底面は概して軟弱である。

出土遺物 覆土から縄文時代後期前半の土器（第27図・第28図2・3）が出土した。

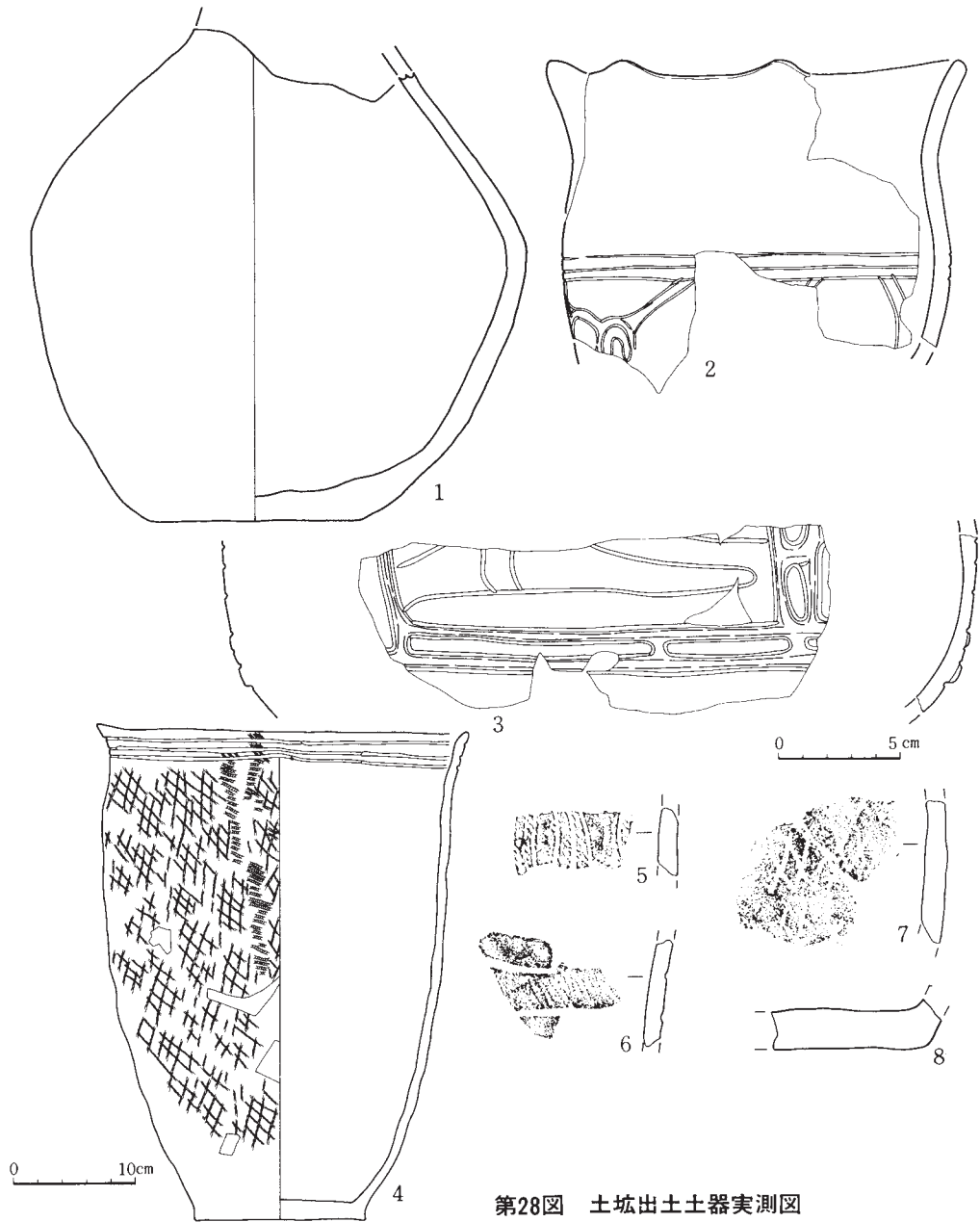
（成田）

J-19号土坑（第26図）

位置と確認 AM-134グリッドから検出した。

平面形と規模 楕円形フラスコ状を呈す。開口部長径87×短径80cm・壙底部94×90cm、深さ42～49cm、なお、第6層に焼土がブロック状に混入している。

堆積土 10層に分層できた。大別すると黒褐色土、黒色土、暗褐色土、褐色土、黄褐色土で、逆放物線状の堆積状況で自然堆積を呈している。



第28図 土坑出土土器実測図

第8表 J-12・18・19号土坑出土土器観察表

番号	出土地区・層位	器高	口径	底径	最大径	器厚	施文	単位文様	単位数	胎土	焼成	外面	内面	備考	分類
1	J-12号土坑1層P13-14-16-18 (20.5)				20.4		無文			普通	良好	黒褐色	黒褐色	-	16
3	J-18号土坑3層P39-78 (7.8)				(31)		降線→沈線→研磨			砂多	良好	橙褐色	橙褐色	外面本色陶 料内面研磨	6
2	5層P47・4層P34 (11.9)	(17)					沈線→擦消	巴	(6)-0-	普通	良好	にぶい橙褐色	明褐色	外面上部	1-8
4	J-19号土坑埋土	41.1	30.6	14.0			LR-RL巻→R巻→沈線			砂多	良好	にぶい橙褐色	にぶい橙褐色	-	Ⅲ-12

壁 上部が第 a・b層で脆く柔らかいが中部以下は堅い。

底 堅く締まり平坦である。

出土遺物 第7層及び第8層から1個体分の縄文土器(第28図4)が出土した。覆土上層からも組文土器片(第28図5~8)及び炭化物(木の実)が出土した。(成田)



第29图J-20号·21号土坑出土土器

J - 20号土壇 (第26図)

位置と確認 A J・A K - 128グリッド表土排土後に確認した。

重複 J - 21号を切って構築されている。

平面形と規模 楕円形で長径126cm、短径92cmである。

堆積土 3層に分層できた。

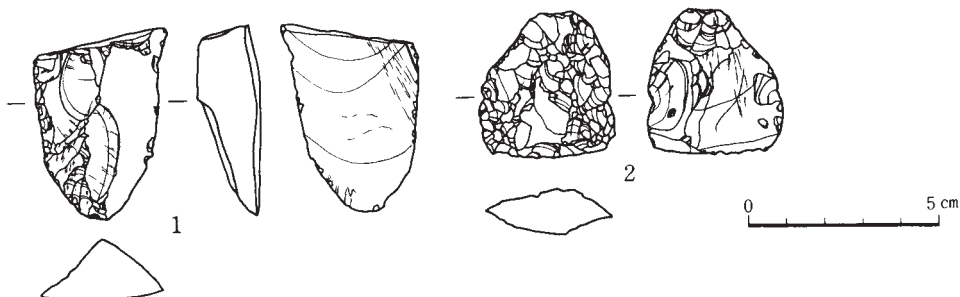
壁 すべて開口部から底面にかけて傾斜している。

底面 ほぼ平坦であり堅い。

出土遺物 底面直上から縄文時代後期前半の土器 (第29図 1) と破片 (第29図 2 ~ 7) が出土したほか覆土内からも同様な土器破片 (第29図 8 ~ 17) 及び石器 (第30図 1・2) が出土した。 (成田)

第9表 J-20号土壇出土土器観察表

番号	出土地区・層位	器高	口径	底径	最大径	器厚	施文	単位文様	単位数	胎土	焼成	外面	内面	焼炭化物	分類
1	床直P39	26.6	31.3	9.5			縄文+沈線+擦消	巴	0-15-2	普通	良好	灰褐色	にふい橙色	外面上方 内面下方	I-76
7	床P37	(17.7)	(18)				RL			粗	良好	明赤褐色	明赤褐色	外面上方 内面下方	[3]-9



第30図 J-20号土壇石器実測図

第10表 J-20号土壇出土石器計測表

番号	出土位置	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重量 g	石質	分類	備考
1	104±2 S-4	(51.9)	34.5	13.0	(22.8)	I	E I	

J - 21号土壇 (第26図)

位置と確認 A J・A K - 128グリッドで、J - 20号精査中に確認した。

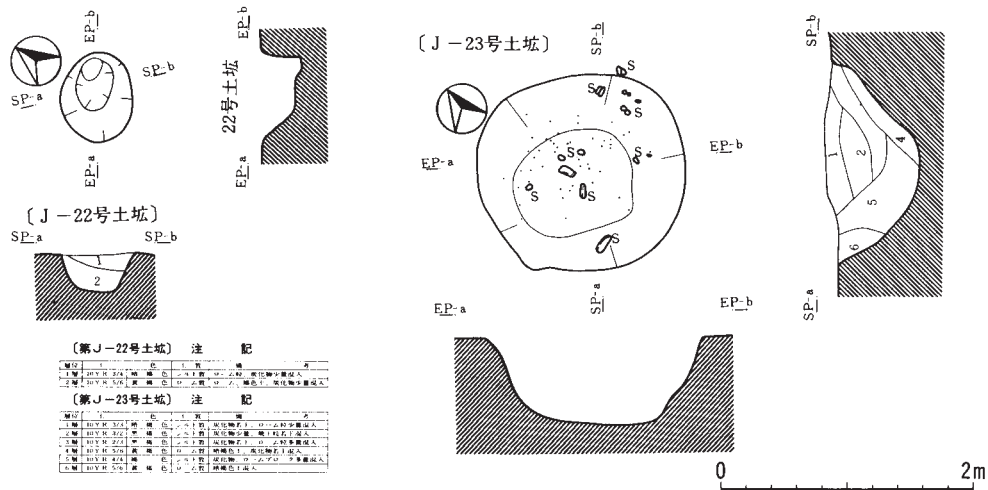
重複 J - 20号に切られている。

平面形と規模 不明。

壁 東側の壁は確認したが他は確認できなかった。確認した壁も軟弱である。

底面 ほぼ平坦だが軟弱である。

出土遺物 縄文土器片が出土している。 (成田)



(第J-22号土坑) 注 記

1層	厚さ約30cm	堆積土	炭化物を含む
2層	厚さ約30cm	堆積土	炭化物を含む

(第J-23号土坑) 注 記

1層	厚さ約55cm	堆積土	炭化物を含む
2層	厚さ約15cm	堆積土	炭化物を含む
3層	厚さ約15cm	堆積土	炭化物を含む
4層	厚さ約15cm	堆積土	炭化物を含む
5層	厚さ約15cm	堆積土	炭化物を含む
6層	厚さ約15cm	堆積土	炭化物を含む

第31図 J-22号・23号土坑実測図

J-22号土坑 (第31図)

位置と確認 AP-127グリッド第 a層上面で確認した。

平面形と規模 不整楕円形で、開口部72×56cm、坑底部42×28cm、深さ約30cmである。

堆積土 2層に分層できた。いずれもローム粒子・炭化物を含んでいる。自然堆積である。

壁 第 a層を掘込んでおり、柔らかい。緩やかな立ち上がりである。

底 締りがなく、若干凹凸があり、東端がピット状に窪んでいる。

出土遺物 なし。

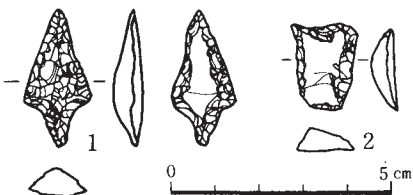
(成田)

J-23号土坑 (第31図)

位置と確認 AJ-128・129グリッドで、第 a層精査中に確認した。

平面形と規模 平面形は楕円形で、規模は166×158cmで、断面形は鍋底状である。坑底部は94×79cmで楕円形を呈している。深さは55～70cmである。

堆積土 6層に分層でき自然堆積とみられる。



第32図 J-23号土坑出土石器実測図

壁 緩やかな立ち上がりで、壁面は軟弱である。

底 平坦であり堅くない。

出土遺物 覆土及び底面から縄文土器破片(第33図)が出土した。石器は石斧1個、すり石1個のほか剥片石器が2

第11表 J-23号土坑出土石器計測表

番号	出土位置	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重量 g	石質	分類	備考
1	III層S-17	31.2	15.0	6.0	1.7	I	A	
2	V層S-21	19.5	13.0	6.0	1.3	J	E1	

個出土した。

(成田)



第33图 J-23号土坑出土遗物实测图

第12表 J-23号土坑出土石器計測表(2)

番号	出土位置	長さmm	幅mm	厚さmm	重量g	石質	分類	備	考
20	土坑V層	(96)	(49)	31	203	F	H		
21	7ヶ土S-2	(74)	50	26	(168)	A	I-I	Sヶ、eス、eダ、eハ	

第13表 J-23号土坑出土土器観察表

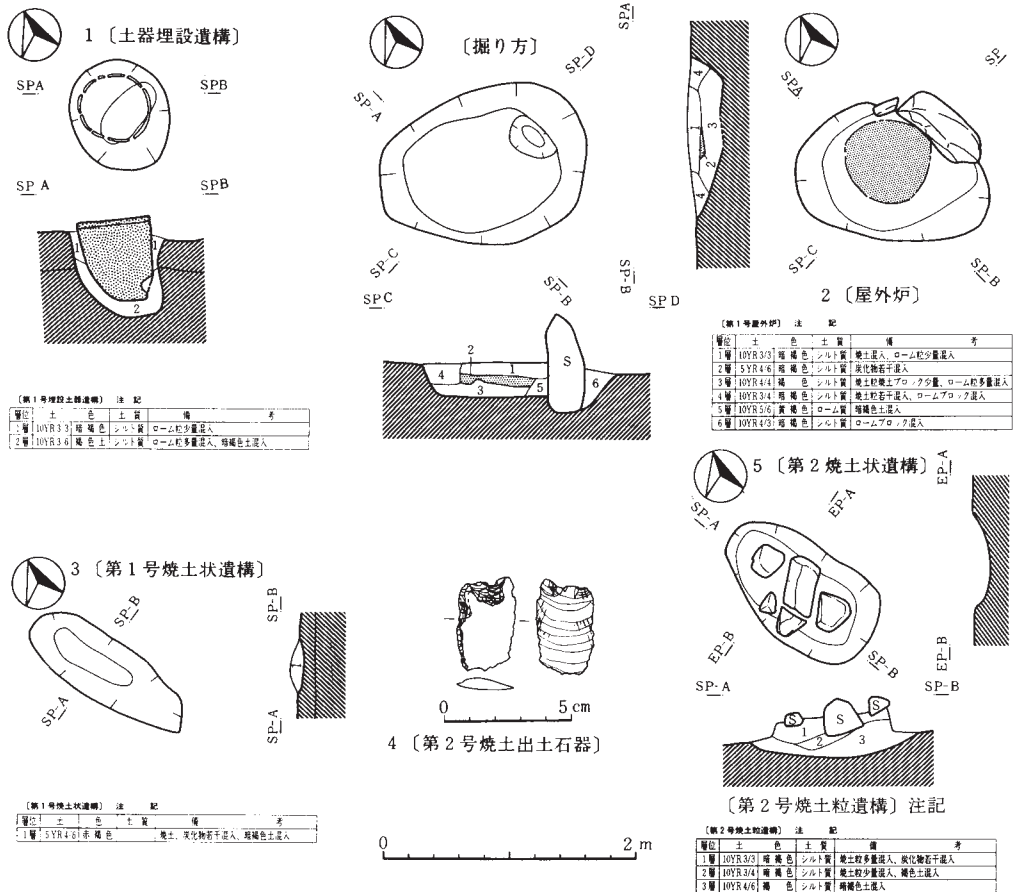
番号	出土地区・層位	器高	口径	底径	最大径	器厚	施文	単位文様	単位数	胎土	焼成	外面	内面	備考	分類
1	1層P16	(25.3)	(34)				沈線→刺突→研磨	弧・斜線		普通	良好	にぶい褐色	にぶい褐色	外面	Ⅲ-8
3	1層P16・27	7.6	(16)	5.7			沈線→研磨			普通	良好	にぶい褐色	にぶい褐色	—	16
4	5層P14	(9.6)		7.9			L.R→擦消			普通	良好	にぶい褐色	にぶい褐色	外面	9
2	覆土	(6.3)		7.0			沈線→研磨	斜線		普通	良好	にぶい褐色	明褐色	内面底辺	8

3. 土器埋設遺構 (第34図)

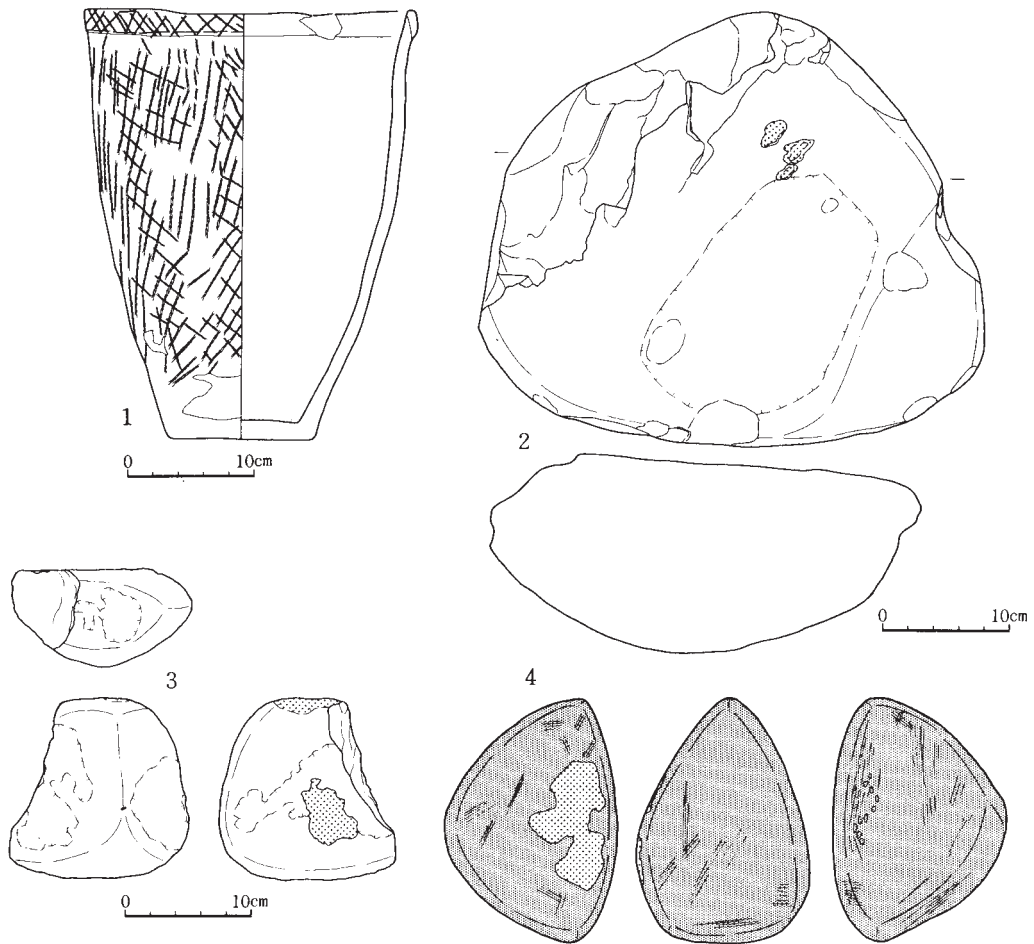
位置と確認 AJ-129グリッドで第 b 層を精査中に確認した。

形態 埋設土器は、やや東側に傾斜しているが、ほぼ直立状態で出土した。掘り方は、開口部が楕円形で43×40cm、壙底面は28×14cmの規模で長楕円形、深さは35cmである。土器は掘り方のほぼ中央部分の底面より若干上に埋設されていた。

堆積土 掘り方の堆積土は2層に分層された。



第34図 土器埋設遺構・屋外炉・焼土状遺構実測図



第35図 埋設土器石器実測図

第14表 埋設土器観察表

番号	出土地区・層位	器高	口径	底径	最大径	器原	施文	単位文様	単位数	胎土	焼成	外面	内面	備考	分類
1		34.3	26.5	11.3			単絡R L巻→R巻→研磨			普通	良好	褐灰色	明褐色	内面上下	Ⅰ-12

第15表 屋外炉・焼土状遺構出土石器計測表

整理番号	番号	出土位置	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重量 g	石質	分類	備考
17		2 焼土1層 S-2	(34.3)	22.0	4.0	3.4	J	E I	
86		2 焼土1層	134	110	58	1,500	A	I	
125	4	2 焼土1層	96	66	71	528	G	I-IV	Sス、Sタ
10	3	2 焼土1層	147	(141)	68	(1,500)	B	J-I	Sタ
9	2	第1号屋外炉	344	398	150	3,000	A	J-I	Sタ

壁 東壁がやや垂直に近い立ち上がりであるが、他は開口部から壙底面にかけて傾斜している。壁面は軟弱である。

底 掘り方の底面は平坦である。

埋設土器 深鉢形で、全面に網目文様を施文している。縄文時代後期前半の土器と思われる。

(成田)

4．屋外炉（第34図）

位置と確認 A K - 128グリッドの表土排土後確認した。炉の周囲には、床及び柱穴等を検出できなかったため屋外炉と判断した。

形態 平面形は楕円形で、規模は長径が78cm、短径が55cmである。2個の炉石が検出したが、ほかに抜取痕を確認できなかった。石は片面が磨られており、石皿（第35図2、石質は安山岩）を転用したと思われるものが1個で、他は自然石である。石皿は、平坦面を内側にし、尖った部分を下にして設置している。この炉は掘り方を持つタイプである。

堆積土 6層に分層でき、第1～3層が焼土混じりて第2層上面が火床面である。

火床面 炉のほぼ中央に位置するが、堅くない。長期間にわたって使用されたとは考えにくい。

掘り方 壁がすべてなだらかで、底面はほぼ平坦である。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

5．焼土状遺構

焼土状遺構は東側区の沼辺から隣接して2基検出した。

第1号焼土状遺構（第34図）

位置と確認 A K - 131グリッドで、第 層精査中に確認した。

形態 平面形は長楕円形で、規模は長径146cm、短径が50cmである。焼土周辺は堅くなく、焼土の状況も、火床面とみられる部分がなく、暗褐色土混じりの焼土堆積状況である。このため炉とは考えられず廃棄された焼土と思われる。

出土遺物 縄文土器の底部破片が1片出土した。

第2号焼土状遺構 第34図

位置と確認 A K - 130グリッドで、第 層を精査中に確認した。

形態 平面形は洋梨形に近い長方形で、規模は長辺68cm、短辺39cmである。上面には焼土が存在したが、火床面と思われるものは確認できなかった。下部は長径70cm、短径37cmの長楕円形プランの鍋底状底面である。

堆積土 3層に分層できたが、1～2層が焼土混入層である。

出土遺物 焼土に混って礫が5個出土したが、土器、その他の遺物は出土しなかった。

（成田）

6. 遺構外の遺物

(1) 東側地区出土の遺物

ア 土器

縄文土器は遺構の内外を含めてほとんどが東側地区から出土した。東側地区の遺構外出土土器はダンボール箱で約40箱分あった。

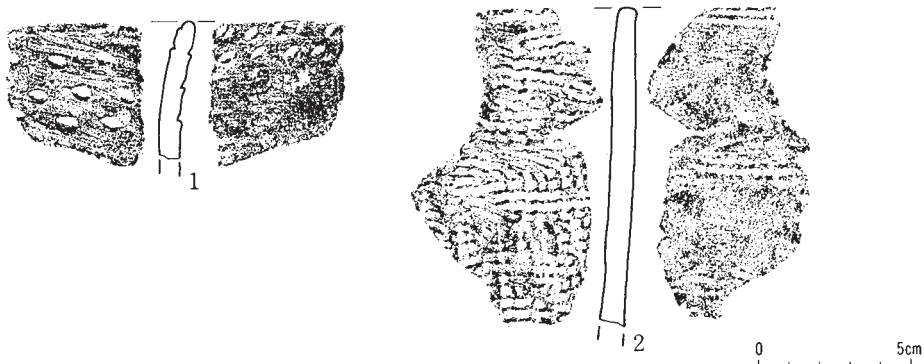
(ア) 早期の土器 (第36図)

第1類 爪形刺突と擦痕のあるもの(1)

胎土中に砂粒を含んでいるが、比較的緻密で焼成も良い。内外面・断面いずれにもぶい橙色を呈する。わずかに外反する口縁で、口唇部は内面側がやや丸みを帯びている。口縁下、横に3列のほぼ一定間隔で爪形刺突がみられる。この刺突は斜め左下に向かって施されたものである。また、内面には2列爪形刺突があるが、これは外面のものより間隔が狭く、刺突は斜め右下に向かってなされている。千歳遺跡(13)の第1群土器(青森県教育委員会:1976b)に比定されると思われる。

第2類 貝殻腹縁による押し引き文のみられるもの(2)

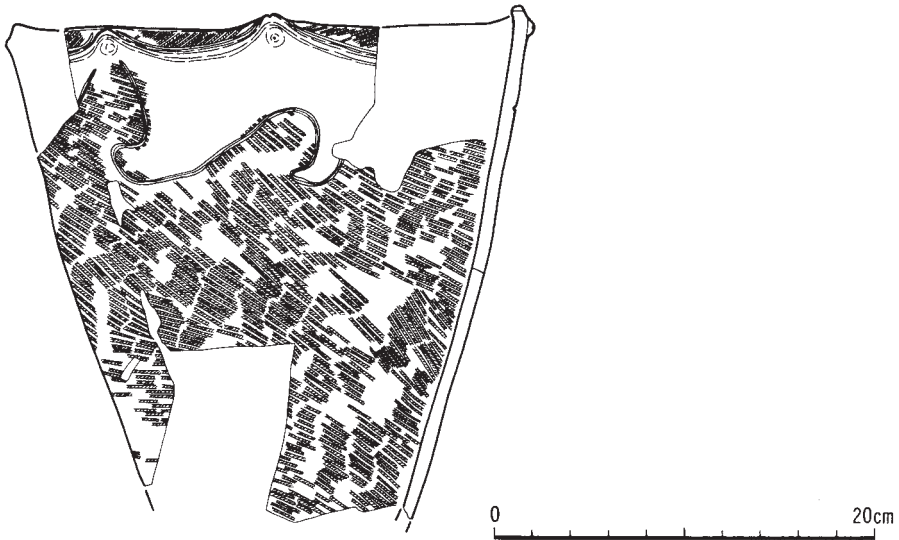
AR-115グリッドのa層で出土した口縁部片とAN-116グリッドのa層の胴部片が接合したものである。胎土は砂粗を含んでいて粗い。焼成は比較的良い。色調は外面が褐灰色ないしにぶい橙色、内面が明褐灰色ないしにぶい橙色、断面が褐灰色である。ほぼ直立する口縁であるが、かすかに外反している。口唇上面は平坦にされ外面側にやや粘土の突出がみられる。器外面全面に左から右方向の貝殻腹縁による押し引き文がみられる。内面には横方向の条痕文が部分的に施されている。本類は新納屋遺跡(2)の第1群土器(青森県教育委員会:1981b)に比定されるものと思われる。(坂本)



第36図 縄文時代早期の土器

(イ) 中期の土器 (第37図)

第37図の土器 1 個体分だけの出土である。胎土は砂粒がかなり含まれ粗い。焼或は普通である。色調は外面が灰褐色ないしにぶい橙色、内面が褐灰色である。底部から口縁に向かってやや内湾しながら開いていく器形で、頂部に刻みのつく 4 個の山形突起をもつ口縁である。山形の部分とその中間部分に半球状の貼付けがある。また、その貼付をまたぐように波状になる隆線が口縁に沿って施されていて、隆線の上に沈線も引かれている。隆線の口縁側には胴部と同じLの縄文が横位回転施文されている。胴部には連続する逆波頭文状の文様が 1 本の沈線で描かれており、この沈線と口縁の隆線の間は無文となっている。また、沈線の下はLの縦位回転文様となっている。なお、外面に縦の筋状に煤状炭化物が付着しているが、これは下端の断面にも付着している。この土器は中期最終末のものと思われる。 (坂本)



第37図 縄文時代中期の土器

(ウ) 後期の土器 (第38 - 54図)

後期の土器は、本遺跡で出土した縄文土器の大部分を占めている。すべて破片で出土し、このうち約50点はおよその器形、文様等が把握できるまで復原できた。土器には深鉢形・鉢形・壺形の各器種及び小形土器がみられた。これらについて各器種ごとに記載する。

分類は各器種を通じて施文技法によって下記のとおりとした。

第 1 類 ヒレ状隆線の付された磨消縄文のもの

第 2 類 無文地に隆線を施文するもの

- 第3類 縄の側面圧痕のあるもの
- 第4類 縄文地に沈線による文様の描かれるもの
- 第5類 隆帯（線）を伴う磨消縄文のもの
- 第6類 隆帯（線）を伴う沈線文のもの
- 第7類 磨消縄文のもの
- 第8類 沈線文のもの

（以上はいわゆる精製土器である）

- 第9類 縦位回転の縄文のもの
- 第10類 横位回転の縄文のもの
- 第11類 回転方向が一定でない純文のもの
- 第12類 単軸絡条体第5類の回転施文されたもの
- 第13類 単軸絡条体第1類の回転施文されたもの
- 第14類 格子状の沈線のもの
- 第15類 縦位方向の沈線・櫛歯状沈線のもの
- 第16類 無文のもの

（以上はいわゆる粗製土器である）

A 深鉢形土器（第38～50図）

a 復原され、全体の器形、文様等の把握できるもの

器形は以下のようなものがある。

- ① 口縁が外反するもので口縁から頸部のくびれまでの距離が口径に比して大きいもの
- ② 口縁が外反するもので口縁から頸部のくびれまでの距離が口径に比して小さいもの
- ③ 頸部にくびれがなく、胴部から口縁までまっすくなものや、やや内湾ぎみに立ちあがるもの

また文様帯の区分と文様構成は次のものがみられる。

口頸部と胴部の文様帯が水平線で区分され、渦巻状又は巴状の文様の施文されるもの

口頸部と胴部の文様帯が区分されず、渦巻状又は巴状の文様の施されるもの

口頸部と胴部の文様帯が区分されず、縦方向の蛇行線や弧、斜めの直線による文様の施されるもの

口頸部と胴部の文様帯が区分されず、文様が胴部上半までに限られるもの

単純な文様のものや無文のもの

～ まではいわゆる精製土器で はいわゆる粗製土器である。

精製土器

深鉢形のいわゆる精製土器は以上の器形と文様帯区分、文様構成を合わせ次のとおり ~ 群に分類し、先の各器種に対する施文技法による分類は下位の分類とする。

	器形	文様帯・文様構成
第 群	①	
第 群	①	
第 群	①	
第 群	②	

各群の土器は以下のとおりである。

第 群 5 類... 1 ~ 4 6 類... 5 8 類... 9

第 群 7 類...10 ~ 13 8 類... 6

第 群 7 類...14、15 8 類...16 ~ 20

第 群 8 類...21

深鉢形の粗製土器 は先にのべた① ~ ③の各種の器形がみられる。

器形① 9 類...22

12 類...23、24

13 類...25

15 類...26

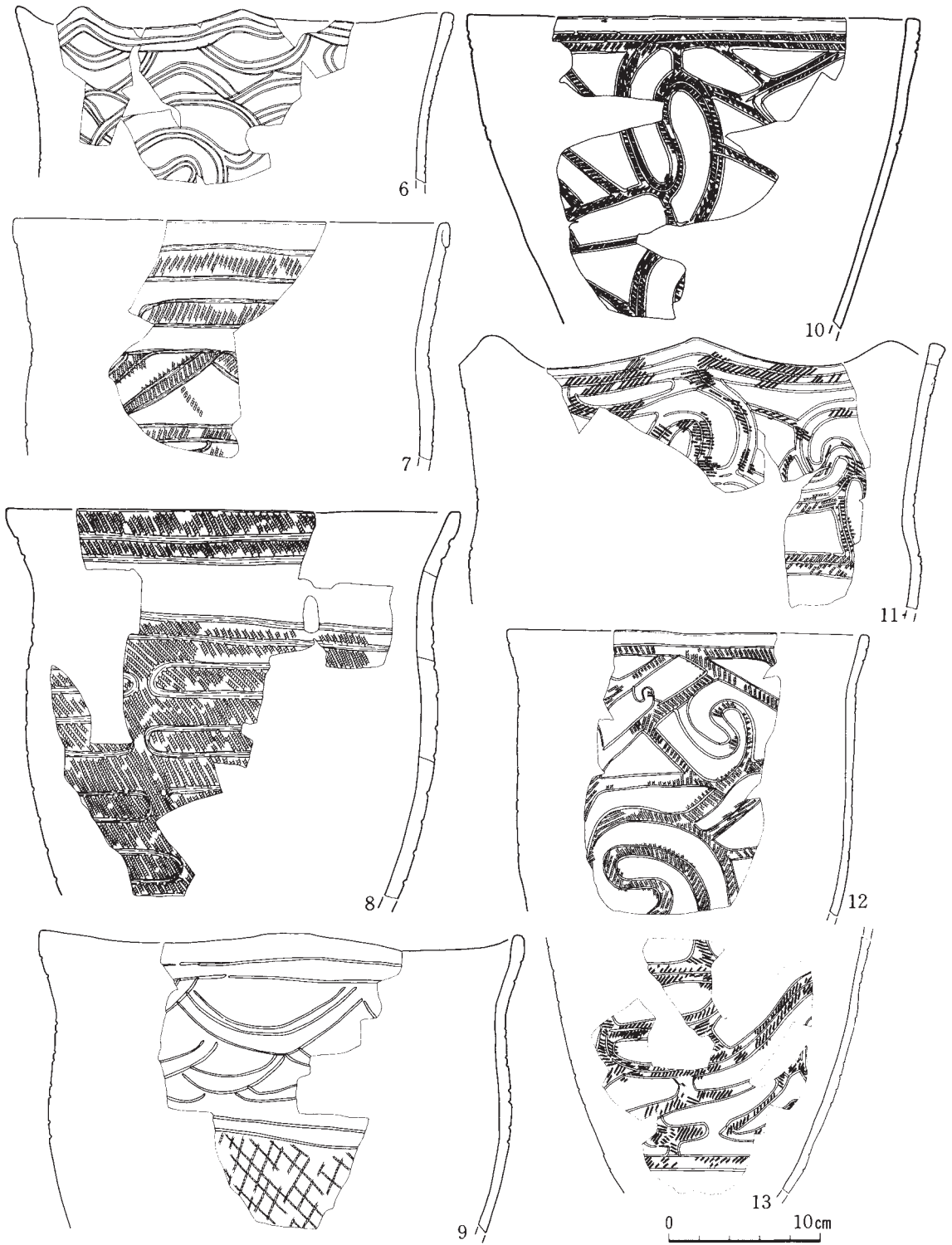
16 類...27

器形② 16 類...28

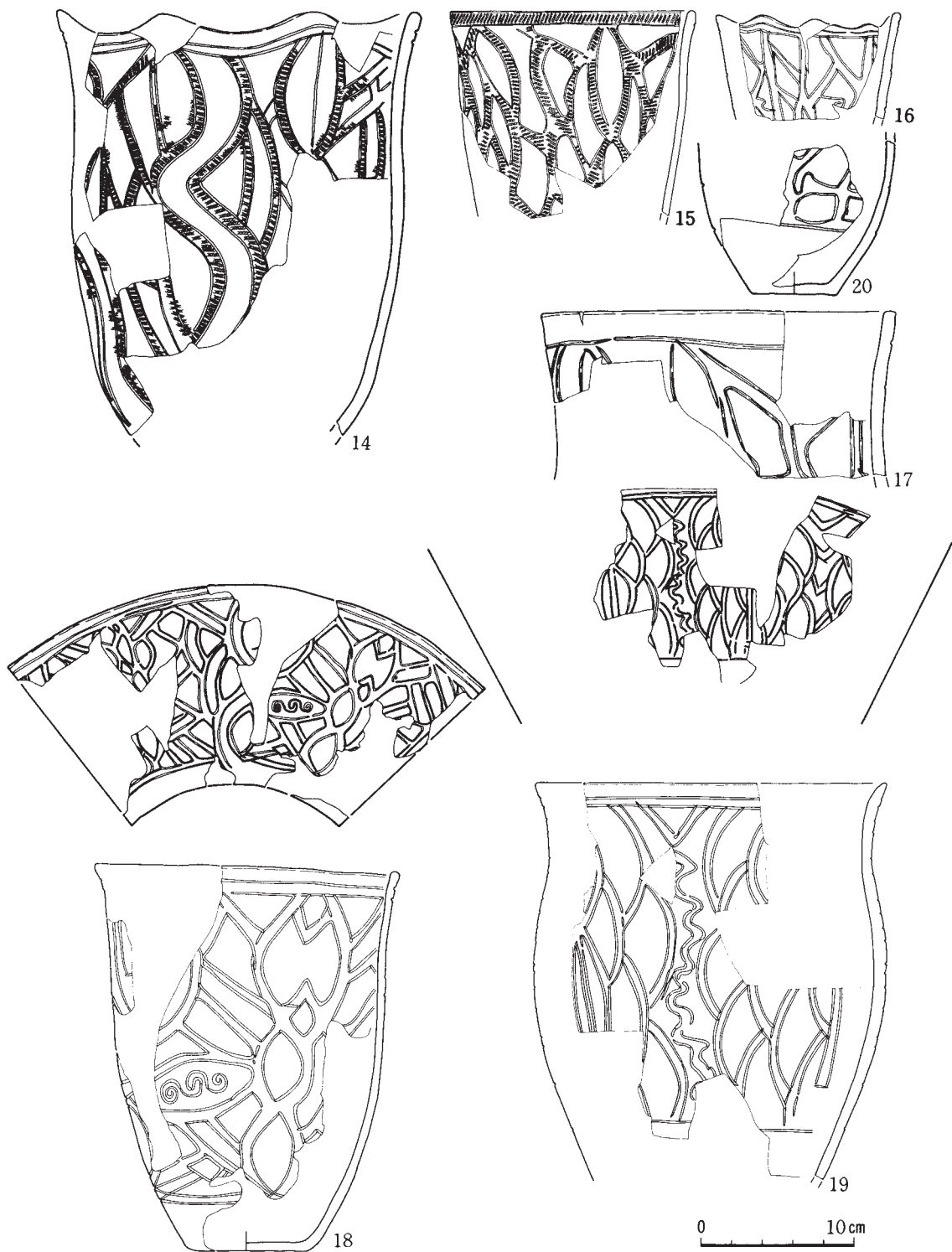
以上の土器については観察表（第16表）により記述する。



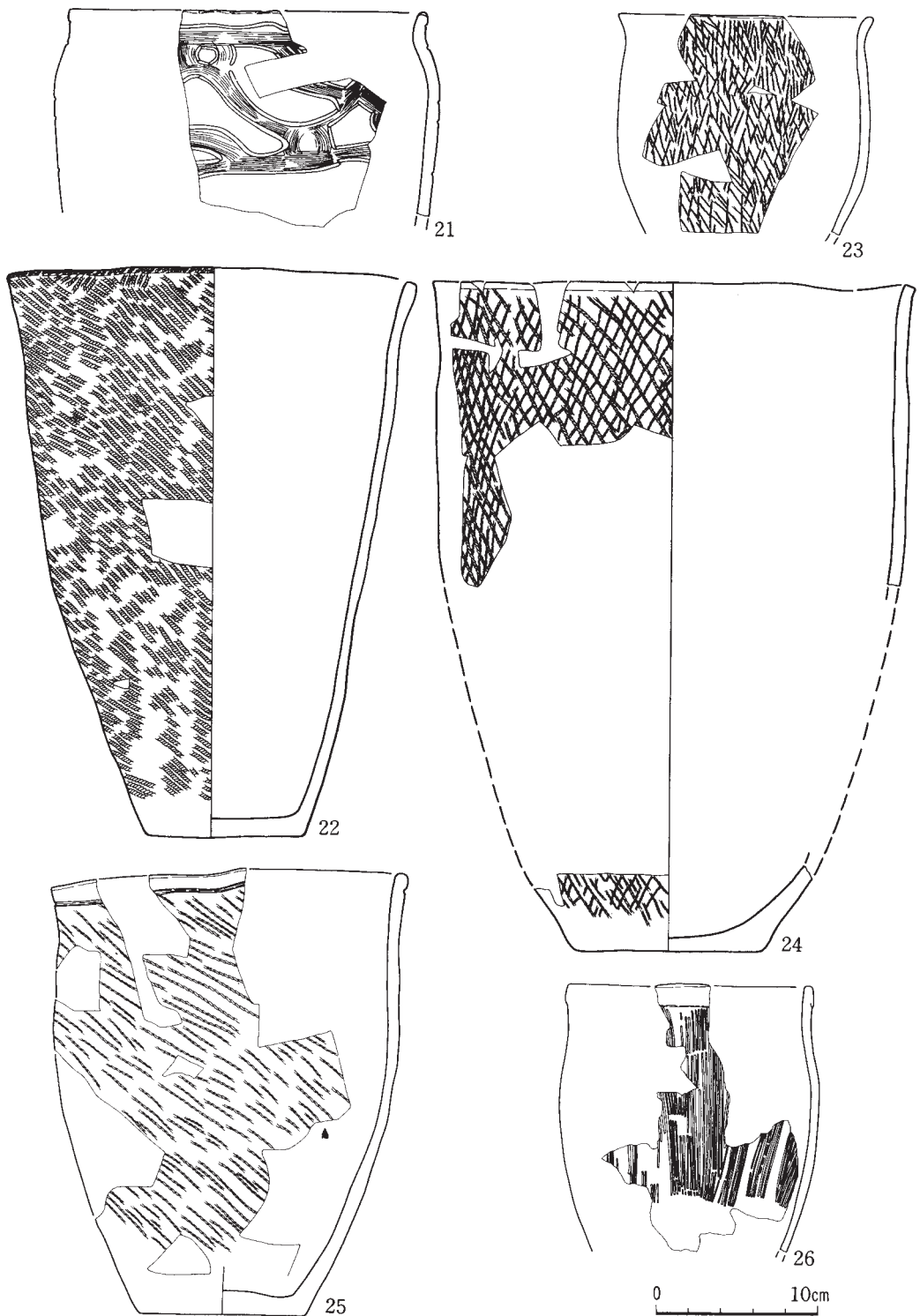
第38図 後期の土器(1)



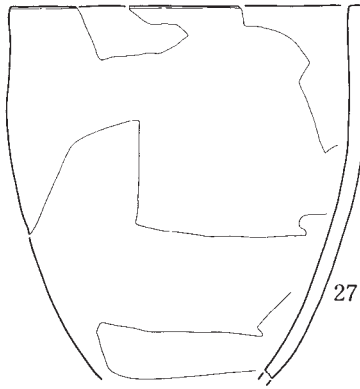
第39図 後期の土器(2)



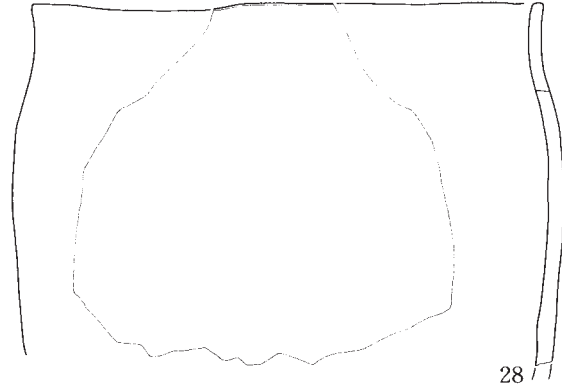
第40図 後期の土器(3)



第41図 後期の土器(4)



27



28



第42図 後期の土器(5)

第16表 縄文時代後期の土器観察表(1)

() は推定値、残存値

番号	出土地区・層位	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	施文	単位文様	胎土	焼成	外面	内面	煤状炭化物・他	分類
1	AO117 IIa 下	(28.5)	24.0		L R→沈線→擦消	渦巻	普通	良好	灰褐色	にぶい黄褐色	————	I-5
2	AP127 IIa	(9.2)	23		隆線→沈線→R L→擦消		良好	橙	にぶい橙色	————	I-5	
3	AP130 IIa	(22.7)	19.8		沈線→L→研磨	巴	普通	良好	橙	にぶい橙色	外面上位	I-5
4	AP129 IIb	(10.4)	(25)		沈線→L→擦消	?	普通	良好	褐灰色	灰褐色	————	I-5
5	AN125-126 IIa	40.5	(28)	11.0	沈線→研磨	巴	普通	良好	褐灰色	橙	内面底辺部	I-6
6	AR115 IIa	(11.7)	26		沈線→研磨	弧(横)・巴	普通	良好	褐灰色	明褐灰色	————	II-8
7	AV-117 IIa	(15.8)	(29)		L R→沈線→擦消		粗	不良	浅黄褐色	浅黄褐色	外面	7b
8	AH129 I	(20)	(30)		R L→沈線→擦消	水平線	粗	不良	にぶい黄褐色	にぶい橙色	外面	7b
9	AM127 IIb	20	(32)		沈線→擦消 R L巻→R巻	弧(上向き)	砂多	良好	橙	にぶい橙色	————	I-8
10	AK128 I	(20.3)	(30)		沈線→L R・R L→擦消	巴・斜線	普通	良好	にぶい黄褐色	浅黄褐色	————	II-7b
11	AI128 I	(10.2)	(31)		沈線→L→擦消	巴・弧	普通	良好	にぶい橙色	にぶい橙色	————	II-7b
12	AK130 IIa	(18.8)	(24)		沈線→R L→擦消	巴・斜線	普通	良好	にぶい黄褐色	橙	外面中央	II-7b
13	AN117 I b	(16.8)			L R→沈線→擦消	(巴)	砂多	良好	灰黄褐色	灰黄褐色	外面	II-7b
14	AK132 IIa	(28)	(24)		沈線→L R→研磨	弧(縦)	普通	良好	にぶい橙色	にぶい黄褐色	外面	III-7b
15	AJ 128 I	(13.5)	(16.5)		L R→沈線→擦消	弧(縦)	粗	不良	褐灰色	にぶい橙色	外面下	III-7b
16	AJ 128 IIa	(7.0)	(12)		沈線→研磨	斜線・垂線	普通	良好	にぶい橙色	灰黄褐色	外面	III-8
17	AI128 I	(10.8)	23		沈線→研磨	斜線(弧)	普通	良好	にぶい橙色	橙	外面	III-8
18	AO-116 IIa 下	25.7	20.2	9.3	沈線→研磨	弧(縦)斜線	普通	良好	にぶい橙色	灰白色	外面上半	III-8
19	AP126	(26.2)	(25)		沈線→研磨	弧(縦)	砂多	良好	浅黄褐色	浅黄褐色	外面口頸部	III-8
20	AT123 IIa	(10)		5.3	沈線→擦消		普通	良好	にぶい橙色	にぶい橙色	外面中央	III-8
21	AN122 IIa	(14)	(22)		歯状沈線→沈線	弧	砂多	良好	浅黄褐色	浅黄褐色	外面	III-8
22	AN128	35.7	25.5	10.0	L R		普通	良好	にぶい橙色	にぶい橙色	外面上半、内面下半	[I]-9
23	第11号土壇覆土	(14)	(16)		単線 R L巻→R巻		粗	良好	にぶい橙色	橙	外面下半	[I]-12
24	AI132 I	(43)	(30)	11.5	単線 R R巻→L巻		粗	良好	浅黄褐色	にぶい橙色	————	[I]-12
25	AS119 IIa	27.8	(22)	10.3	L L巻→沈線→研磨		普通	良好	にぶい橙色	浅黄褐色	外面上半、内面底辺	[I]-13
26	AH129 I	16.7	(14)		沈線		砂多	良好	にぶい橙色	にぶい黄褐色	外面下半	[I]-15
27	AT121 II	(19.8)	(18)		無文		普通	良好	にぶい橙色	明褐灰色	外面上部	[I]-16
28	AK130 IIa	(19.6)	(29)		無文(横位調整)		砂多	良好	にぶい橙色	浅黄褐色	外面中央	[I]-16

b、破片

施文技法による分類ごとに述べる。

第1類(29)

A G 131 層で出土した一片の胴部破片である。胎土はやや粗く径 2 mm位の砂粒を含んでいる。焼成はよく堅緻である。色調は外面がにぶい赤褐色、内面がにぶい赤褐色ないしにぶい褐色である。ヒレ状に隆線が上向きに貼りつけられ、その下にも中央の窪んだボタン状の貼付がみられる。ヒレの両端から 2 条の細い沈線が垂直に引かれ、沈線の間には縦位回転の L R 縄文がみられる。

第2類(30~41)

胎土焼成は、37~40以外は第1類に似て大きい砂粒を含み堅緻なもので、色調はにぶい橙色ないし橙色である。37、38、40は他のものに比べ、砂粒は少いが、焼成はあまりよくなく、浅黄橙色ないし褐灰色の色調である。波状口縁のものが多い。38、41を除き隆線上に縄文がみられる。38は隆線上に爪によるものと思われる刺突がみられる。41は素文の隆線である。

39は胎土が粗く焼成も良くなく脆い。色調は浅黄橙色ないし灰黄褐色である。円形の刺突列をもった 2 条の平行な隆線で水平方向や垂直方向に施文されている。

第3類(42~50)

胎土はやや粗く砂粒を含み、焼成は比較的良いものが多い。色調は外面がにぶい橙色、浅黄橙色、灰褐色、内面がにぶい褐色、褐灰色、にぶい橙色、浅黄橙色などである。43は平縁のものである。口縁と頸部に 2 条の L R の縄の側面圧痕がみられ、その間にはくの字状に同じ縄の圧痕がある。胴部には同じ縄によると思われる縦位回転の文様がみられる。42は43と同じく平縁で文様も似るが、使用原体は無節の L で、口頸部にも地文として縦位回転されている。44は刻みのある山形口縁のものである。山の部分に第1類にみられたような中央の凹んだボタン状の貼付がみられ、そこから左右に 2 条の L R の縄の圧痕がのびている。下方には L R の縦位回転の縄文が施されている。45はやや内湾する口縁部片で、これも L R の側面圧痕と縦位回転の縄文がみられる。47は L の原体を使用している。49と50は素文上に L R の圧痕がみられるものである。

第4類(51~54)

胎土は砂粒を含んでやや粗く、焼成は普通である。54は波状口縁の薄手のもので、色調は内外面黒褐色である。L R と思われる細かい縄文地に細い沈線で同心円などの文様が描かれる。52も薄手で、外面は明赤褐色、内面は褐灰色ないしにぶい赤褐色である。R L の縦位回転の地文に水平や斜行する沈線が描かれ、その接点は弧状に結ばれている。53は、内外面とも浅黄橙色で、R L の縦位回転の地文に 1 本の太い沈線で渦巻状の文様がみられるものである。54は外

面がにぶい橙色、内面がにぶい黄橙色で、縦位回転の節の大きいLR縄文の地に、太い沈線で52に似た文様の施文されるものである。

いずれも外面に煤状炭化物が付着している。

第5類(55~112)

本類は胎土中に砂粒が多く含まれ、焼成は比較的良好のものが多く、にぶい橙色、褐灰色、にぶい黄橙色などの色調を呈するものである。

本類の隆線(帯)はいずれのものにも脇た沈線が伴っており、第2類の隆線だけのものと異なっている。この隆線は口縁に折返し口縁状に幅広く低く施されるものがあり、また断面が楕円形で低いもの、角ばって高いものなどもみられる。60、105では口縁の隆帯の上にさらに垂下する隆線が付されている。縄文はRL(55~68・70~74・76~85)LR(69・86~109・112)L(110・111)がみられる。また、75はLRとRLの両方が用られている。縄文はいずれも隆帯や沈線に沿った方向に回転し、施文されている。55、56、68、79、84には円形の刺突が隆線上加えられている。55~59、87、112は波状口縁の頂部にいわゆる長方形文(青森県教育委員会:1975d)がみられるものである。これは60~71、81、82、84、86、88~91、107、109、111においては頂部以外の口縁や、口縁より下の部分にもみられる。また、それ以外の文様としては、65の連弧文状のものなどがあり、ほとんどが2本平行の沈線によるものであるが、57や60は1本の沈線で渦巻などが描かれている。74は口頸部文様帯は縄文の施された隆線で施文され、胴部は沈線だけで施文されているものである。本類の文様は隆線で全部が描かれるものと、一部のみ隆線で他は縄文の施された平行沈線によるものがある。112は内面にも沈線が引かれている。59、61、63、65、69、71、74、76、79、85、86~89、91~96、103~107、109、110は外面に煤状炭化物が付着している。

第6類(113~135)

胎土・焼成・色調は第5類と似ている。本類の隆線(帯)も第5類と同様沈線でふちどりされている。また、隆線の貼付け方も第5類と似て、口縁などの一部分にみられるものと全体が隆線で施文されるものがある。また、いわゆる長方形文も第5類と同様みられ113~118では波状口縁の頂部左右に、120~122はその他の口縁に、123~127は口縁以外の部分にみられるものである。文様は数条の水平沈線のもの(132、133)、巴状のもの(113)などがみられる。129は頂部に貫通孔がみられるものである。114は内面に、122は口唇上面に沈線がみられる。121は外面に赤色顔料が塗付され、117、118、122、130は外面に煤状炭化物が付着している。

第7類(136~186)

本類には縦位回転の縄文のものと、平行沈線の間沈線に平行な回転方向で施文されるもの

がある。前者を第 7 a 類、後者を第 7 b 類とする。

第 7 a 類 (136~138)

いずれも胎土が粗く砂粒をかなり含んでいる。焼成は比較的良い、色調は内外面とも橙色、にぶい橙色、褐灰色である。第 4 類と同様節の大きい縄文地に太い沈線で文様が描かれている。地文はいずれも R L である。137は 2 本の平行沈線間が磨消されて、その外側に雑文が施文されているものである。138は一部に横位回転で施文されたところもみられる。136は外面に煤状炭化物が付着している。

第 7 b 類 (139~186)

胎土・焼成・色調等は第 5・6 類と似ている。口縁形は波状のものや平縁のものがみられる。縄文は142が沈線と無関係に回転されているほかは、すべて沈線と平行に回転施文されている。原体は R L (139~148)、R (149)、L R (150~162)、L (163~185) がみられる。186は鈍ではなく単軸絡条体第 5 類を施文している。第 5・6 類のような長方形文も少いがみられる (156、158、163、171)。その他斜線の組み合わせによるもの (149、154、155、185) 矩形 (158) 楕円状 (153) 巴状 (161、169、182) カギ状 (155、175、177) などの文様がみられ、142、159などは第 4 類のように斜線と水平沈線の交点が弧状に結ばれる文様のものである。140、141、144、151、155、159、161、162、169、173、175、177~179、182、185は外面に煤状炭化物が付着している。

第 8 類 (187~212)

胎土・焼成・色調は第 5・6・7 b 類に似るものである。器形は波状口縁、平縁がみられ、緩やかに口縁が反るものが多いが、206、207は肩部が張るものようである。文様は 5・6・7 b 類と同様 2 条の平行沈線のものであるが、200、202は 3 本のものであり、210は部分的に 3 条の沈線が用いられている。191、199は第 5・6・7 b 類でみられたいわゆる長方形文のみられるものである。また、第 7 b 類などでみられた斜線の組み合わせによるもの (200、211、212) や渦巻 (197、204)、巴 (193) などがみられる。187は口頸部と胴部を区画するものと思われる、波状口縁頂部からここへ垂下する沈線が引かれるものである。209は外面に赤色顔料が塗付されている。187、189、190、192、200は外面に煤状炭化物が付着している。

第 9 類~第16類までは、いわゆる粗製土器である。胎土・焼成・色調は第 5・6・7 b・8 類と似ているが、中に黒褐色ぎみの色調のものもある。

第 9 類 (213~234・238)

縄文には R L (213~215)、L R (216~224・226・227) L (225・228~234) がある。節は非常に太いもの (227) から細かいもの (228) までみられる。口縁から胴まで縦

位回転のもののほか、口縁に簡単な文様の施されるものがある。横位回転のもの（219）折返し状口縁に横位回転するもの（216・220）折返状口縁で沈線が引かれるもの（217）2条の沈線を引き中が無文化するもの（228）単に無文化するもの（218）などである。224は胴部に縦位回転の結節回転文のあるものである。

無節の230は縦位方向に無文部があり、238は縦位の単節縄文が重複して施文されているものである。229には1条の沈線がみえる。216、218、220、221、224、227、231には煤状炭化物が付着している。また、234には補修孔が穿たれている。

第10類（235～237・240）

縄文はR L（235、237）R L R（236）L（238、240）がある。口縁は折返し状や沈線をひもの、無文化するものがある。235、236は煤状炭化物が付着している。

第11類（239・241～250）

原体はR L（242）L R（243～245）L（246～250）があるが、241はR L R又はL Rの単軸絡条体回転文のものと思われる。条は横走りみのものが多いが、左右両方の条の傾きのもの（246、247）もみられる。242、246では煤状炭化物が付着している。

第12類（251～265）

原体にはRを軸にL巻にしたのちR巻にするもの（251～258）とR巻にしたのちL巻にするもの（259～264）LをR巻にしたのちL巻にするもの（265）とL巻にしたのちR巻にするもの、 \emptyset をL巻にしたのちR巻にするものがあり、口縁以外では全て縦位に回転施文されている。口縁部の文様は折返し口縁上に横位に画転するもの（258）、その上に沈線を引くもの（253）折返し口縁上が無文になるもの（251）がある。262は沈線でいわゆる長方形文が描かれるものである。261は口縁よりやや下のところが貼付により緩く膨らんでいる。254は頸部には水平に、口縁から頸部へは蛇行する隆線が貼付けられている。254、263では煤状炭化物の付着がみられる。

第13類（266～269）

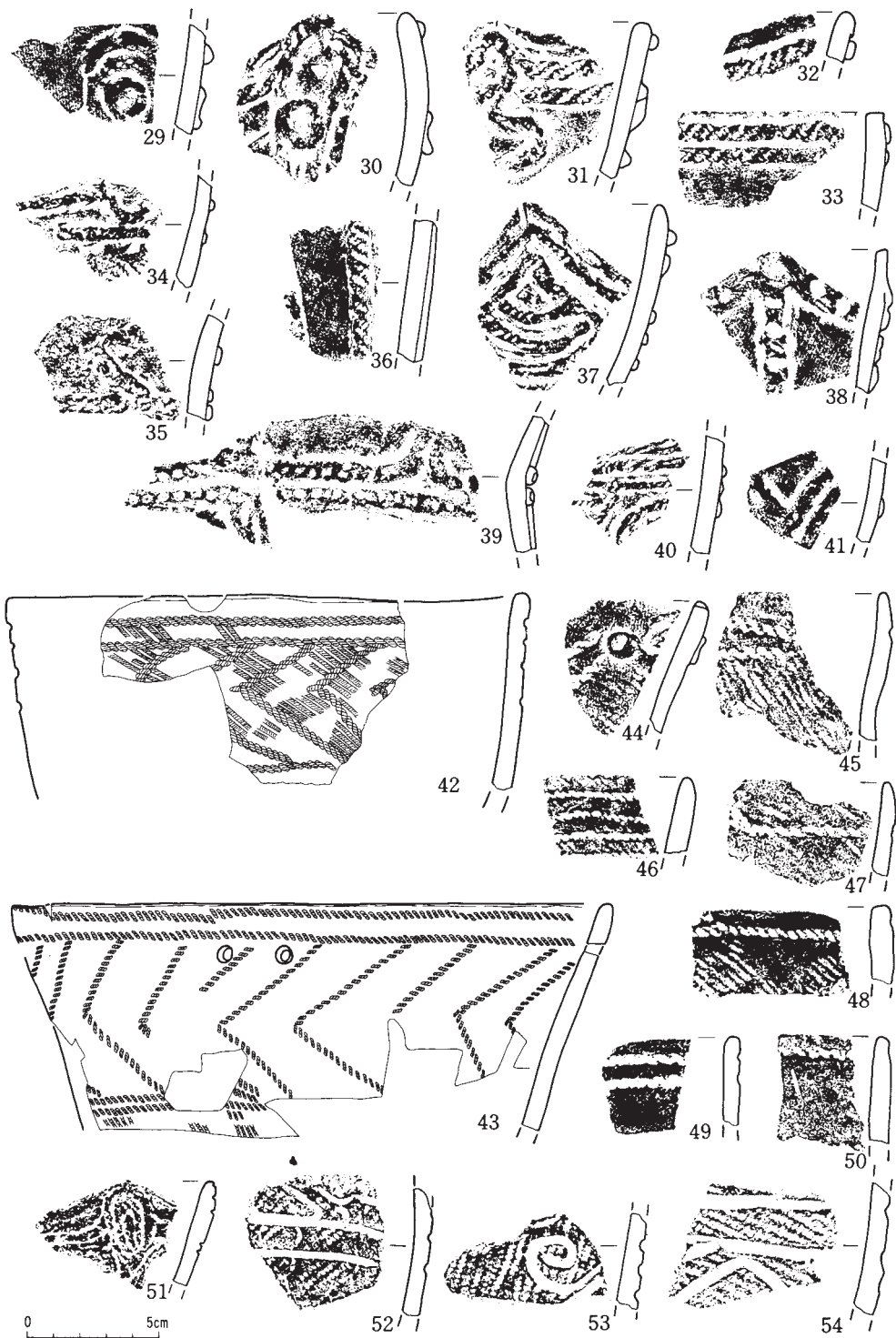
原体はRのものである。条は右下がりと左下がりがみられるが、いずれも縦位回転されたものであろう。266は内外面に煤状炭化物が付着しているものである。

第14類（270～272）

細い沈線で格子状の文様が施されるものである。270と272は口縁に2条と5条の水平な沈線が施されている。270は折返し状の口縁である。270、271は煤状炭化物の付着がみられる。

第15類（273～275）

細い縦位の沈線が引かれるものである。274と275は折返し状口縁のものである。273は口縁に3条の水平沈線が引かれている。



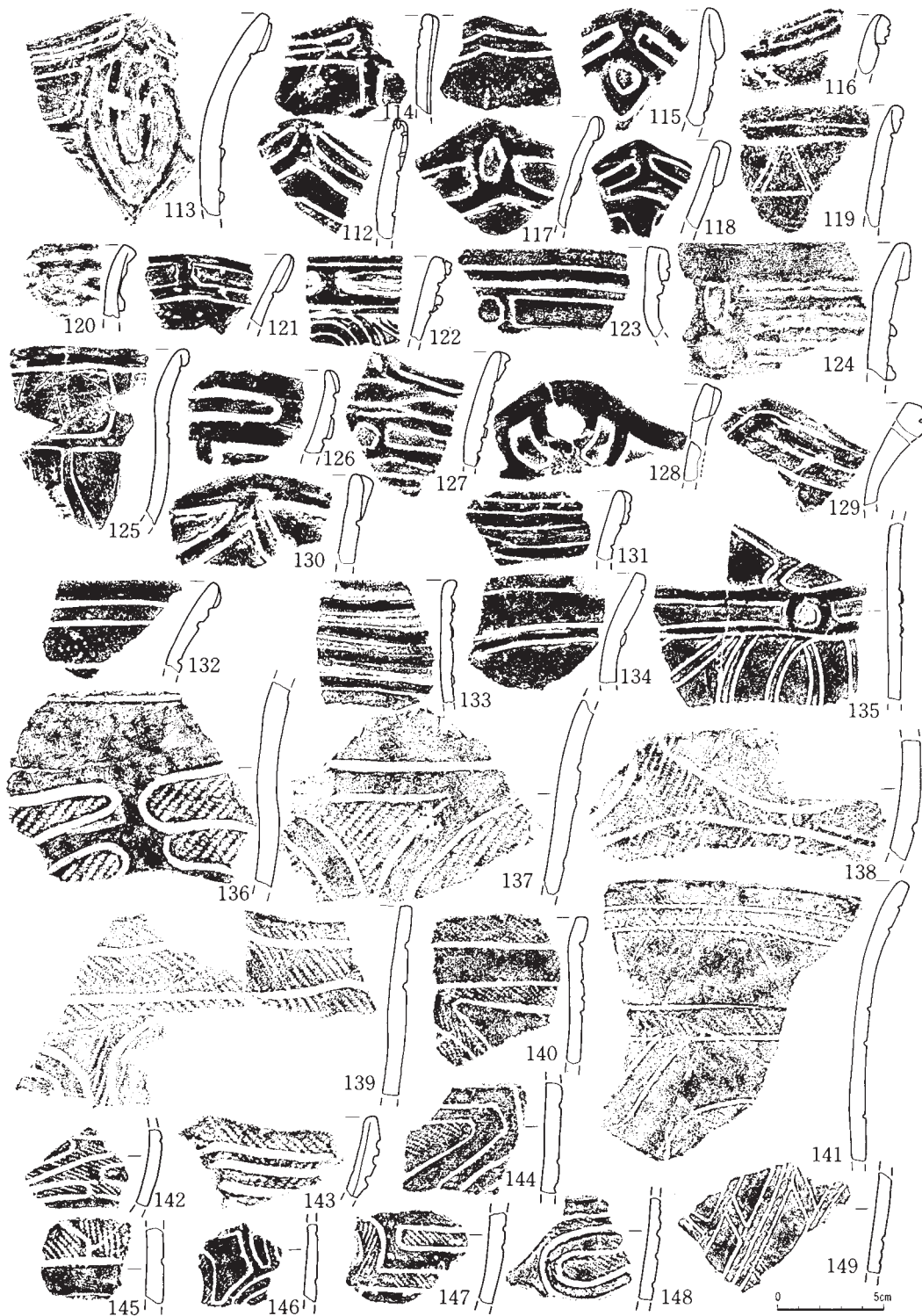
第43図 後期の土器(6)



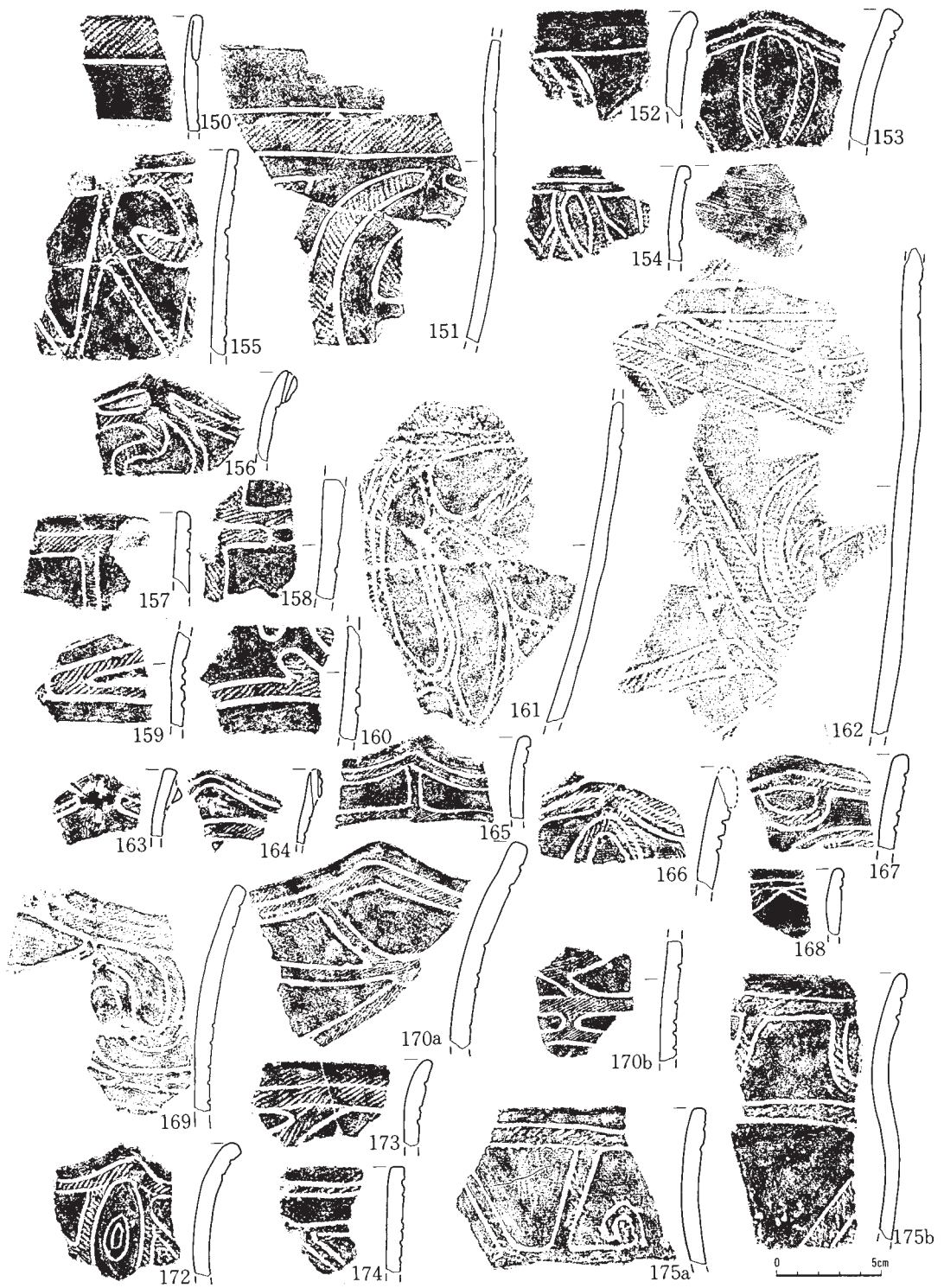
第44図 後期の土器(7)



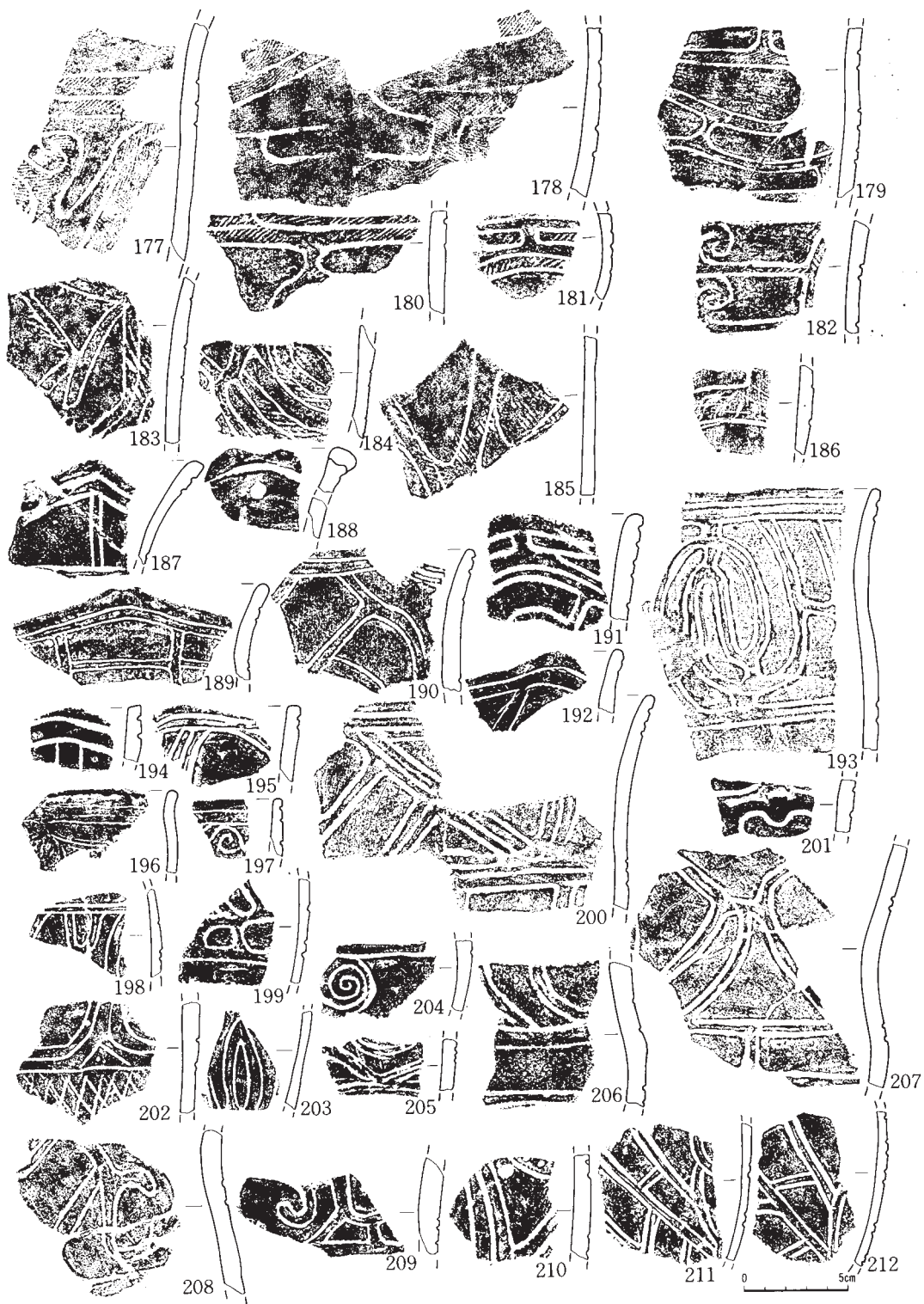
第45図 後期の土器(8)



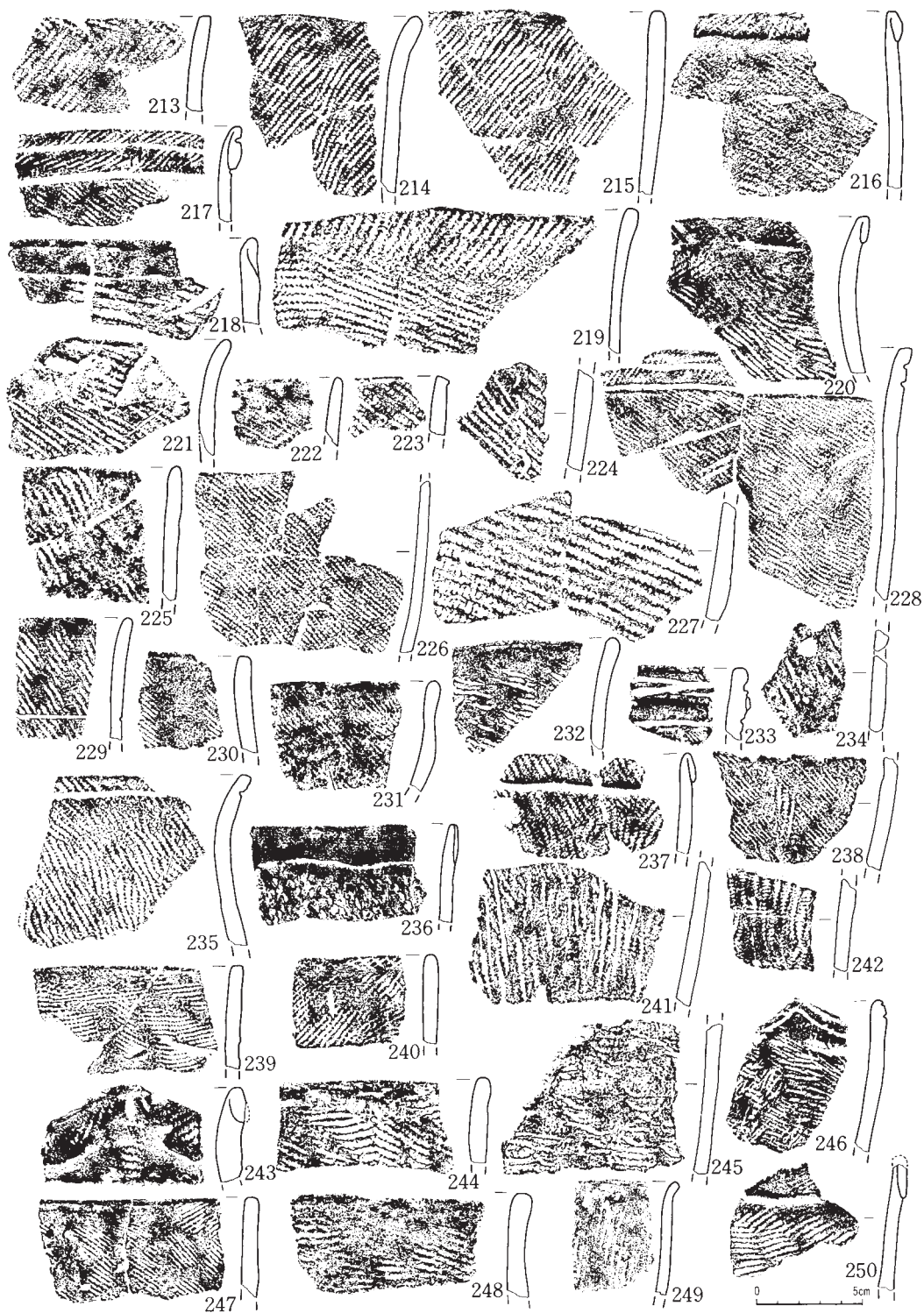
第46図 後期の土器(9)



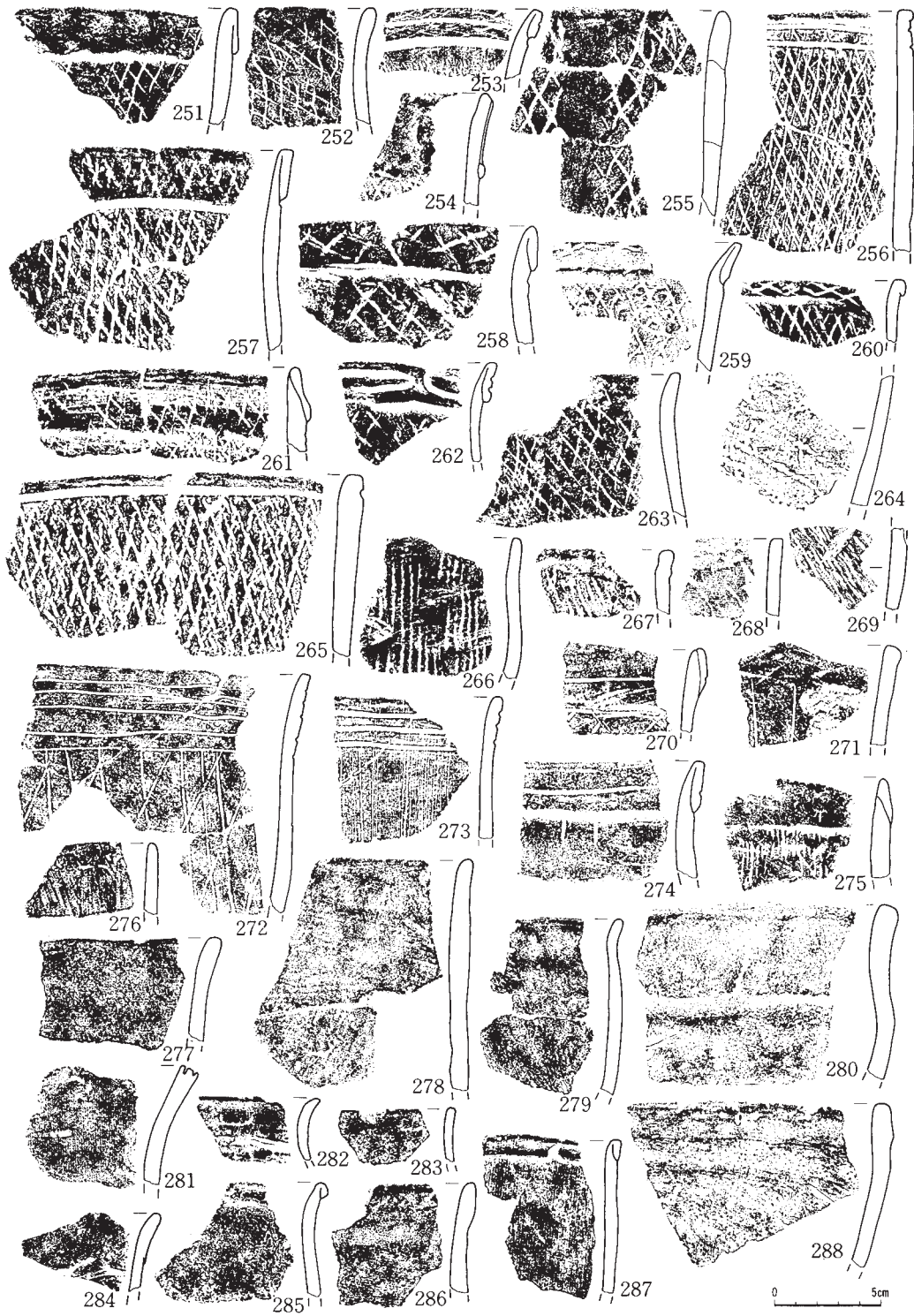
第47図 後期の土器(10)



第48図 後期の土器(1)



第49図 後期の土器(12)



第50図 後期の土器(13)

第16類 (276～288)

器形は直立するもの。緩く外反するもの。肩部に張りのあるものがある。285、287は折返し口縁のものである。281は波状口縁で頂部の上面に沈線で円形の文様が描かれている。

277、279、286、288は外面に煤状炭化物が付着している。

B 鉢形土器 (第51図)

口径が器高より大きいものや、それに近いと思われるものをとりあげた。

a 復原され全体の器形・文様等の把握できるもの

器形には様々なものがみられる。

第5類 (64・291)

291は底部から内湾ぎみに大きく開きながら立ちあがり、上部はやや外反しながら直立に近い角度となるものである。口縁と中ほどに水平な隆帯があり、2条の隆帯に囲まれた中に磨消縄文により菱形などの文様が施されるものである。原体はLRである。

第7類 (297)

297は291と似た形態であるが、口縁付近はやや内側に狭まっていく器形である。上半には中に無文部を残して水平な縄文帯があり、下半は底近くまで8の字を横にしたような文様が見られる。原体はLRである。

第8類 (309)

309は器形は底部からやや開きぎみに急角度で立ちあがり、口縁付近で内湾するものである。文様は2条平行の沈線で向かいあった弧やそれらを結ぶ斜線が描かれている。なお、2条の平行沈線の端部は連結されて閉じている。

第16類

316はやや内湾ぎみに立ちあがる器形で、口唇上面は平坦ぎみで外側へ幾分突出している。

b 破片 (289～315)

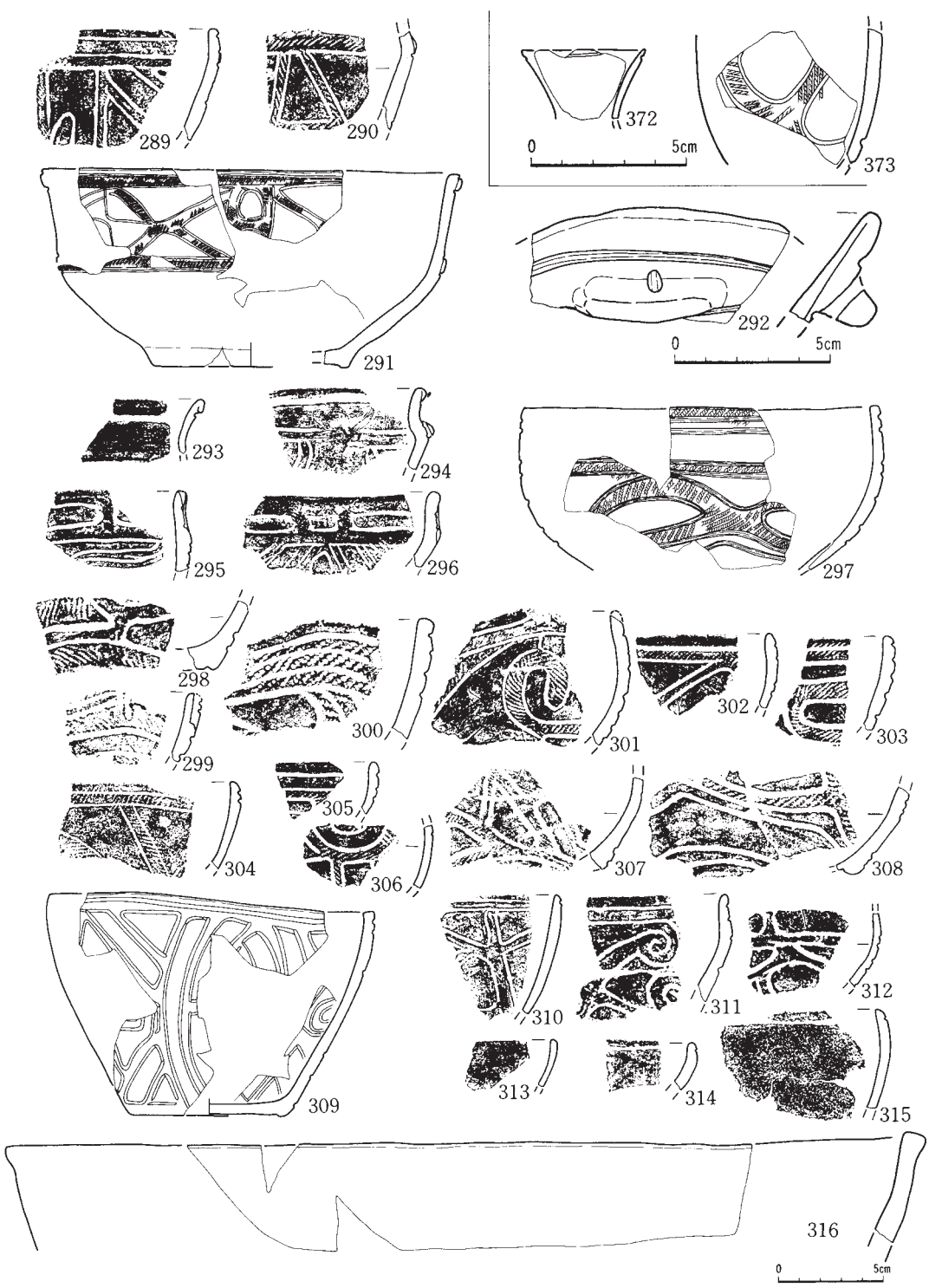
いずれも胎土・焼成・色調は深鉢形土器の第5・6・7b・8類に似るものである。

第5類 (289・290)

いずれも口頸部にゆるい貼付があり、水平、垂直、斜めの2条平行の沈線で施文されている。原体は289がL、290がLRである。

第6類 (293～296)

いずれも口頸部がくびれる器形である。295と296は口縁とくびれの下に水平に貼付があり、ゆるく外側へ膨れている。294は口縁に貼付があるもので、頸部の短い貼付の中に縦方向に貫通する丸棒状工具による刺突の加えられるものである。295はかすかに赤色顔料の付着が見られる。



第51図 後期の土器(14)

第7 a類 (298)

298は外面が赤褐色のものである。底辺には横位回転で、上部には縦位回転で縄文を施文し、底辺の水平沈線と上の斜線を第4・7 a類同様弧で結ぶものである。

第7 b類 (299~308)

299~301は波状口縁のもの、302~305は平縁のものである。内湾しながら立ちあがる器形が多い。文様は間に縄文の回転施文された2条平行の沈線で描かれ、縄文は深鉢形同様沈線に平行に回転されている。縄文原体はR L (299) L R (300~308)がある。300は節が大きい。301は渦巻状の文様がみられ、304、307では縦や斜めの直線により構成された文様が描かれるものである。308は底面にも沈線が引かれている。299は波状口縁の頂部に垂直な丸棒状の工具による刺突がある。301~303、308は内外面が丁寧に磨かれ光沢を帯びている。このうち301、302は外面が黒褐色である。308は外面に煤状炭化物が付着している。

第8類 (309~312)

内湾する器形のものである。文様は2条平行の沈線で描かれる。310は口縁の水平な線と以下の縦位・斜位の線による文様である。311は内外面に赤色顔料が塗布されている。310は内面に、黒色の光沢のある付着物がある。292は口縁部の破片である。胎土は砂粒が比較的多く、焼成は普通のものである。色調は内外面ともいぶい橙色である。ゆるい波状口縁の部分と思われるが、口縁が浅鉢のように大きく開く器形と思われる。口縁下に横に長い、かなり高くつき出た貼付が付され、この中央に上から下への断面の丸い貫通孔がある。貼付の上下には太い沈線がみられる。

第16類 (313~315)

口縁が内湾する器形である。いずれも器外面が磨かれている。314、315は口縁に1条の沈線が引かれている。315は外面に煤状炭化物が付着している。

第17表 縄文後期の土器観察表(2)

番号	出土地区・層位	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	施文	単位文様	胎土	焼成	外面	内面	煤状炭化物・他	分類
291	AS 123 II a	9.6	(20)	(18)	隆縁→L R→沈線→研磨	菱形	普通	良好	にぶい黄褐色	褐灰色	内面研磨	5
297	AT-123 II a	(7.8)	(17)		L R→沈線→研磨		普通	良好	にぶい橙色	にぶい橙色	内面研磨	7b
309	AU-117 II a	10.8	(16)	7.6	沈線→研磨	弧(縦)・斜線	普通	良好	黄褐色	にぶい橙色		8
316	34H アク土	(5)	(44)		無文(横位研磨)		普通	良好	橙褐色	にぶい橙色		16

C 壺形土器 (第52・53図)

317を除いて胎土・焼成・色調は深鉢形土器の第5・6・7 b・8類と同様である。全体の器形を知りうるものはなかった。

第2類 (317)

317は縄文の付された隆線のみで文様の描かれるもので、深鉢形の30~36と胎土・焼成・色

調の似ているものである。外面には煤状炭化物が付着している。

第5類 (318～322)

318と319は頸部及びそれ以下の部分の破片である。いずれも隆線上のみに縄文が施文され、深鉢形土器の第5類と同様隆帯は沈線で縁どられている。水平な隆帯とそれを結ぶ垂直方向の隆帯がある。319では隆線以外の部分は文様がなく磨かれているが、318はいわゆる長方形文などがみられる。320は頸部から肩部にかけての破片で、外面が黒色である。頸部にいわゆる長方形文があり、緩い貼付隆線で縁どられている。下部には弧などの文様の磨消縄文がみられる。無文部分は磨かれている。322は隆線上は無文だが、下方に沈線に沿った縄文の施文がみられる。

第6類 (323～342)

323～338は脇に沈線を伴った隆線で文様を描くもの、339～342は一部にのみ隆線のみられるものである。332は比較的小さい土器の口頸部であり、口縁と把手にいわゆる長方形文があり、そのまわりが隆線で縁取られている。325も把手があり、いわゆる長方形文状の閉じた沈線により文様が構成される。339は胴部下部にのみ隆線があり、輪ゴム状の閉じた沈線で主な文様が描かれるものである。330は大型のもので、長方形文を構成する沈線に縁どられた、垂下する隆線や菱形の文様がみられるものである。323、325、327、328、334、339も長方形文が頸部や最大胴径部分にみられるものである。329は胎土が粗く厚手なもので、円形の刺突がみられる。331は頸部片である。沈線で縁取られた細い隆線が垂直及び斜めに貼付られ、木の枝状の文様となっている。貼付は口唇上面や白線の内面にもある。

となっている。貼付は口唇上面や口縁の内面にもある。

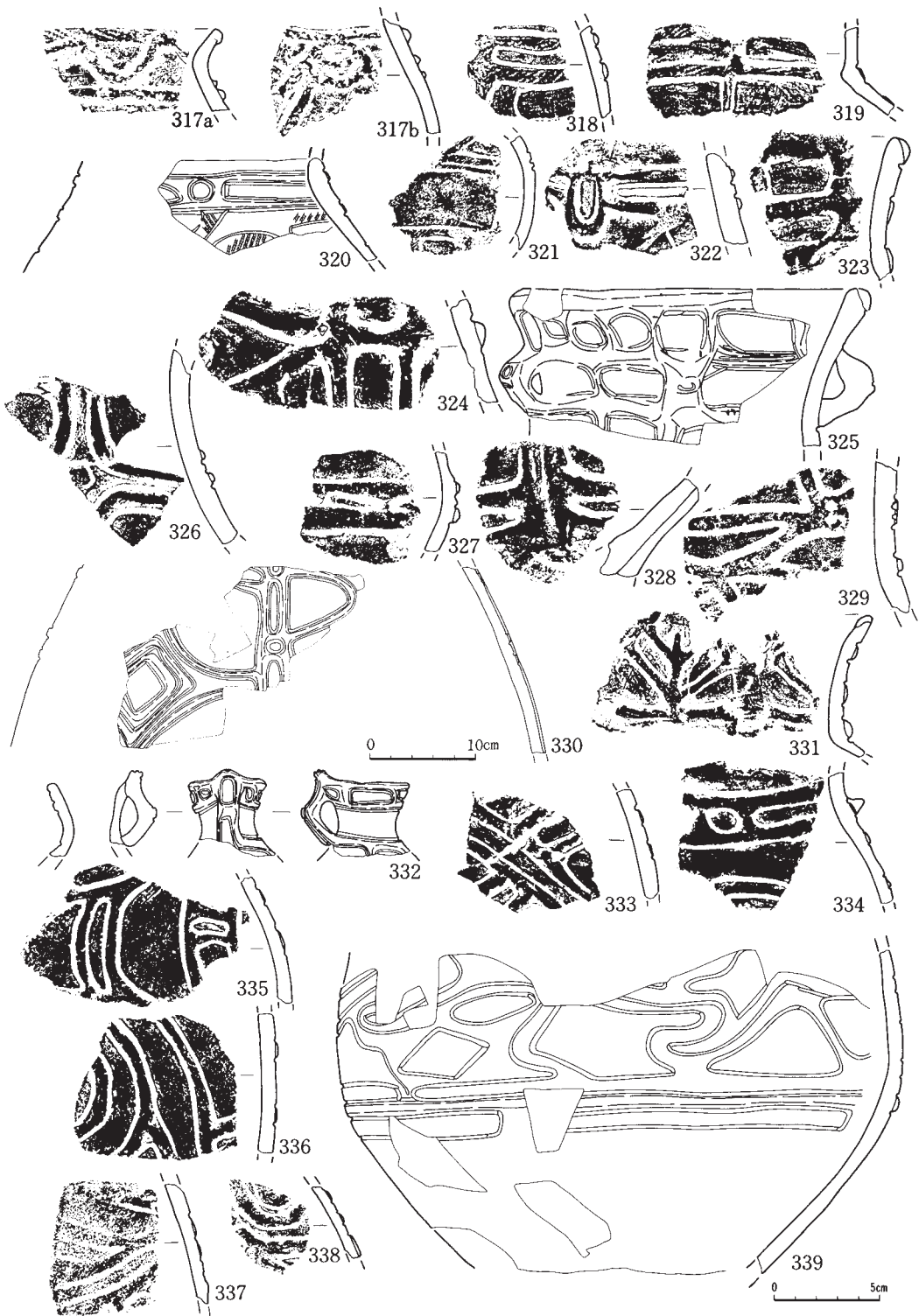
341は胴部の途中に連続する刻状の切り離した跡がみられ、切断蓋付土器といわれるものである。また貫通孔のある貼付もみられる。324、325、339には外面に赤色顔料の付着がみられ、336では煤状炭化物が付着している。

第7b類 (343、345)

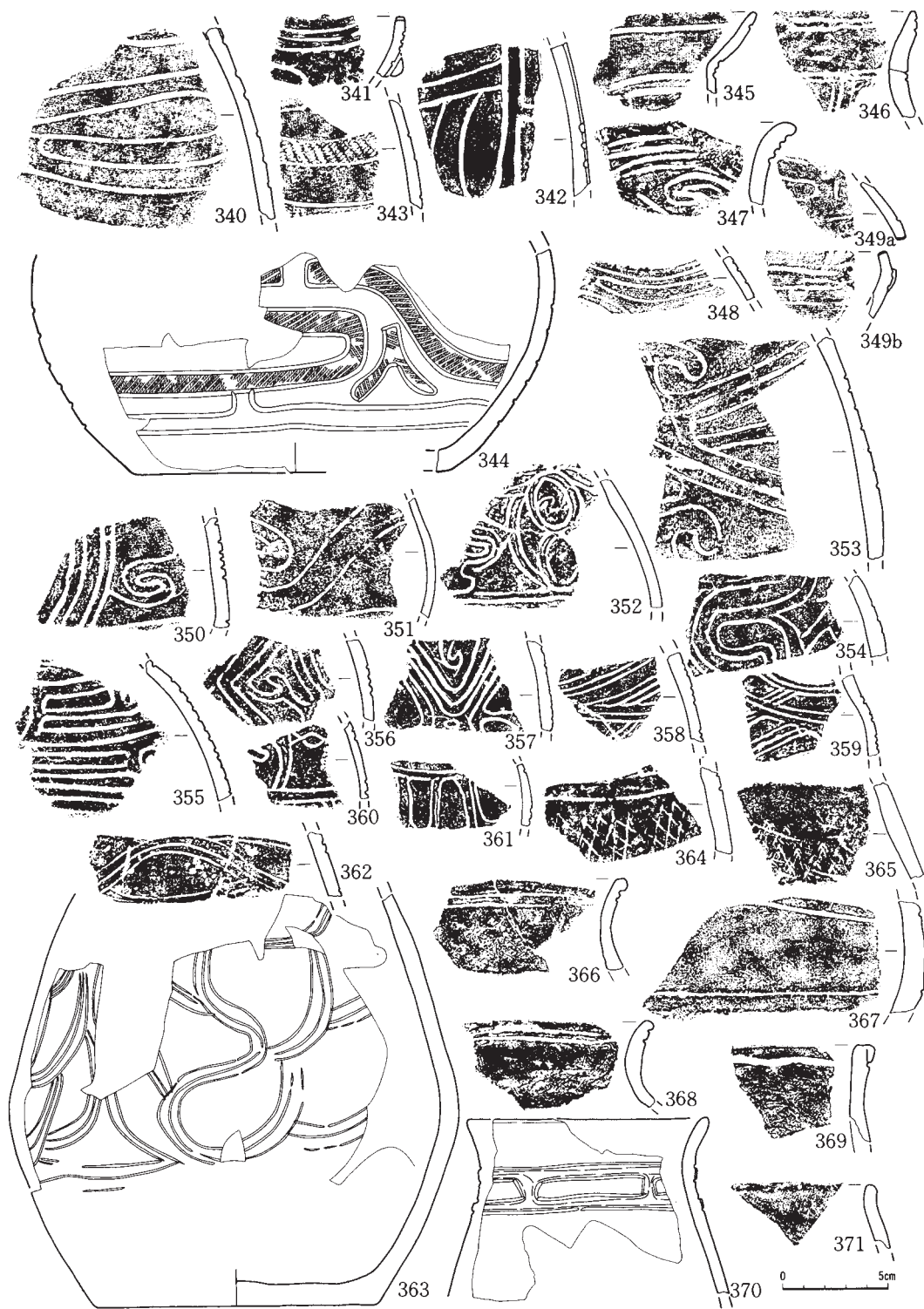
343は肩部のもので、水平な間隔の広い沈線の中にRLの0段多条と思われる節の大きい縄文が横位に回転施文されている。外面には煤状炭化物が付着している。344は胴下半部である。Lの縄文の充填された、端の閉じた2条平行の沈線で文様が描かれている。345は頸部の沈線間にかすかにLRと思われる縄文が施文されている。

第8類 (346～363)

346は内湾ぎみで外へ広がっていく口縁部、347は外反していく口縁部である。348～363は胴部片である。353は山形あるいは逆山形の沈線の頂点の上下に、渦巻ないし巴状の文様がみられるものである。355は水平な沈線が10数条重層するもので、一部は端が上下連結されて、



第52図 後期の土器(15)



第53図 後期の土器(16)

長方形文となっている部分もある。348にも長方形文がみられる。352は楕円を描く沈線が上下に2個重なり、また、巴状や弧状の沈線もみられるものである。363は胴部から底部のもので、主に3条平行の沈線により蛇行する線や弧の連結された文様が描かれるものである。352、355は外面に煤状炭化物が付着している。なお、349は切断蓋付土器といわれるもので、赤色顔料が塗布されているものである。

第12類 (364、365)

肩部の破片と思われる。上方に2条の水平沈線があり、下には縦位回転の単軸絡条体回転文が施文されている。

第16類 (366 - 371)

367は胎土はやや粗く外面が黒褐色を呈する厚手の壺である。口頸部を欠いているが胴部は無文である。367と371は外面に煤状炭化物が付着している。

第18表 縄文時代後期の土器観察表(3)

番号	出土地区・層位	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	施文	単位文様	胎土	焼成	外面	内面	煤状炭化物・他	分類
329	AQ-127 II b	(5.9)			隆線→LR→沈線→擦消	長方形文	砂多	良好	黒色	褐色	—————	5
325	AI-129 I	(7.5)	(17)		隆線→沈線→研磨	長方形文	普通	良好	にぶい橙色	にぶい橙色	—————	6
330	AO-117 II a 下	(17.5)			隆線→沈線→研磨		普通	良好	にぶい橙色	にぶい橙色	—————	6
332	AS-125 II a	(4.3)	4.6		隆線→沈線	長方形文	砂多	良好	浅黄橙色	褐灰色	—————	6
338	AK-129 I	(15.5)			隆線→沈線		砂多	良好	浅黄橙色	浅黄橙色	外面煤状炭化物付着 外面赤色顔料	6
344	AR-125 II a	(9.6)		(14)	L→沈線→研磨	水平線	普通	良好	にぶい橙色	橙色	—————	7b
363	AS-119 II a	(19.8)		13.3	沈線→研磨	弧	普通	良	灰白色 にぶい橙色	にぶい黄橙色	—————	8
370	AV-117 II a	(8.4)	(11)		隆線→沈線→研磨	長方形交	普通	良好	暗青灰色	褐灰色	内面研磨	16

D 小形土器 (第51図372・373)

372、373とも胎土はやや粗く、焼成は普通で、内外面ともににぶい黄橙色である。373は小形の深鉢形土器と思われる。2条平行の沈線の中にLの縄文が沈線と平行な方向に回転施文されている。372は壺の頸部と思われるもので、口縁に1条の沈線がみられる。

E 底部 (第54図374～391)

ここでは本遺跡で出土した種々の底部をとりあげた。形態は揚げ底ぎみのもの(375～377・379)平底のものがある。

文様は網代(381～384)木葉(385・386)板状(388・389)笹の葉状(387)擦痕様のもの(390・391)など種々のものの痕跡が残っている。浅鉢形と思われるものには、外縁近くに沈線が巡っている。なお、376には対向する2箇所に底辺から底面に向かう貫通孔がみられる。

(坂本)



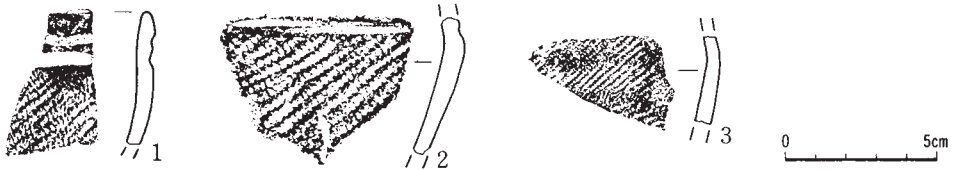
第54図 後期の土器（底部）(17)

(工) 晩期の土器 (第55図)

1 は鉢形土器の口縁部片である。胎土やや粗く、焼成は普通である。色調は内外面ともにぶい橙色である。口縁に2条の沈線があり、以下にL Rの縄が横位回転で施文されている。外面に煤状炭化物が付着している。

2 は大形の鉢形土器の口縁部付近の破片である。胎土は粗く焼成もあまり良くない。外面は浅黄橙色、内面はにぶい橙色である。上方に1条の水平沈線がみられ、その下には横位回転されたL Rの縄文がみられる。

3 は胎土が緻密で、焼成は普通のものである。色調は内外面がにぶい橙色である。L Rの縄の横位回転の文様がみられる。 (坂本)



第55図 晩期の土器

イ 土製品 (第56図)

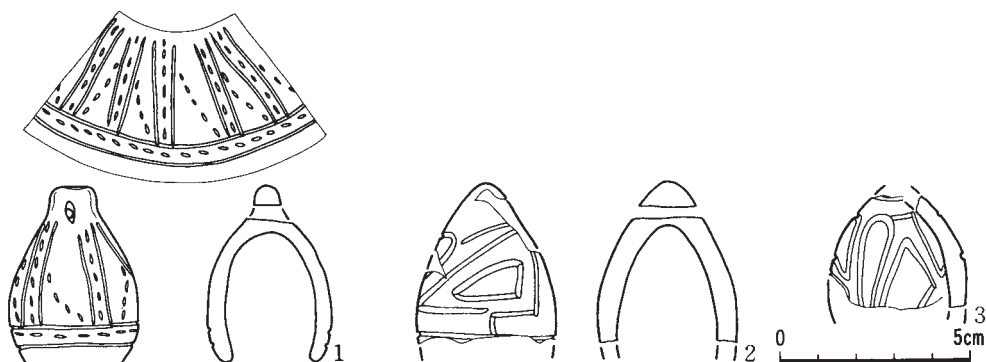
(ア) 鐸形土製品

3個出土した。

1 はA P 118 a層で出土したものである。胎土焼成とも良好である。色調は外面がにぶい橙色、内面が褐灰色である。つり鐘状の形態で、上部に貫通孔のある突起がある。高さ4.7cm、最大胴径3.4cmで、厚さは5mmである。文様は下部に水平な線があり、上部は右下がりの2条の平行沈線が5単位巡っている。平行沈線の内部と外には沈線と同じ施文具によると思われる細く短い刺突列がみられる。刺突列は右下がりであるが、1列だけは左下がりとなっている。なお内部には煤状炭化物がほぼ全面に付着している。

2 はA I 128 層で出土した。胎土やや粗く、焼成は普通である。色調は内外面断面とも黒褐色である。ほぼ円錐形の形態で頂部は扁平にされている。そこに貫通孔がみられる。残存高4.7cm、最大胴径3.7cmで、厚さは6mmである。文様は比較的太い沈線で、重層する三角形が描かれている。

3 はA O 128 層で出土したものである。胎土はやや粗く焼成は普通である。色調は外面がにぶい橙色で内面が橙色であるが断面は褐灰色である。残存高2.9cm、残存部の最大胴径は3.7cmと推定される小型のものであり、厚さも4mmと薄い。文様は上下を水平な沈線で区画した中に、縦位と斜位の2条平行の沈線により文様が描かれる。外面は丁寧に整えられている。 (坂本)



第56図 土製品

ウ 石器 (第57～66図)

遺構外からは石器やその他の礫が多数出土した。このうち石器は167点、剥片 点、石核 点の出土であった。これらを以下のように分類した。(遺構内のものも以下の分類に従った)

A類 石鏃		G類 磨製石斧	12点
(本類は遺構内だけで出土した)		H類 打製石斧	2点
B類 石錐	1点	I類 磨敲凹石類	89点
C類 石ヒ	1点	J類 石皿・台石類	15点
D類 石篋	1点	K類 軽石・軟質凝灰岩の石製品	
E類 その他の剥片石器	12点	(本類は遺構内だけで出土した)	
F類 剥片、石核類	93点	L類 その他の石器	1点

B類 石錐 (1)

1は基部に大きいつまみをもち、両面の加工された先端部をもつものである。

C類 石ヒ (2)

2は稜をもつ縦長の剥片で表面の両側縁に細部加工を施している。刃部先端は丸みをもって加工されている。つまみは打瘤のふくらみと左側裏面に加えられた剥離により刃部側と区別されるが、あまり明瞭な決りはみられない。

D類 石篋 (3)

3は正面形は三角形のものである。側面形は表面側の刃部付近が最も高くなっており、また、裏面もやや反っていて中央部が膨らんでいる。主に表面に深い細部加工が施されて成形されており、裏面は刃部に小さい剥離が並んでいるほかは、不規則で雑な剥離があるだけである。刃部は正面からみてやや左下がり傾いている。

E類 その他の剥片石器（4～15）

本類は剥片石器のうちA～D類に含まれないもので、従来、不定形石器、スクレーパー、Rフレイクなどと呼ばれてきた定形化の認めがたい石器を一括したものである。本類は側縁の加工の状態により2分した。

類 側縁に連続した浅い剥離のあるもの（4・11・15）

5、7、8は表面にのみ連続した浅い剥離がみられ11、15は両面にみられる。8は縦長の厚みのある剥片の表面の末端とそこから続く左側縁下方に浅い細部加工がある。形態的にD類の石筥に類似するものである。その他は薄い剥片を用いている。

類 側縁に連続した浅い剥離がなくほとんど粗雑な深い剥離だけがみられるもの（12～14）

12は形態は無茎石鉄に似る。表面の加工は比較的規則的だが、裏面は雑な加工である。14はほぼ四角形を呈するもので、打点側がかなり厚い。表裏とも全体に不規則な加工が施されている。

13は小形で厚い縦長の剥片を利用している。表面側には礫表皮を残し、1側縁の全体にわたって加工がみられる。裏面は無加工である。

G類 磨製石斧（17～28）

いずれも破損品である。形態は、基部の端が細く、刃部側に向かって幅広く厚くなっていくものである。基部の端の形態は20のように尖ったものから、22のように平らなものまでであるが、尖っている20も含めていずれも端が平面的に加工されている。刃部の形態は、中央部よりやや幅がせまくなり、刃部縁は円刃である。中心部の断面形は楕円又は長辺の膨らんだ長方形（□）である。加工はほとんどのものが、全体をきれいに磨いて行なっているが、11や12のように大部分敲打痕で覆われているものもある。11は刃部のみ磨かれている。

H類 打製石斧（29、30）

29は基部側のみ残るものである。ほとんど片面だけが加工されている。表面は両側縁に加工痕があり、中央には大きな1枚の剥離面があるだけで、基端側は自然面をそのまま残している。裏面は側縁に浅い不規則な剥離があるだけで自然面がそのまま残っている。両側縁の辺には磨滅あるいは敲打の痕跡が認められる。表裏面の自然面から考えて扁平な礫を素材としたものと思われる。30は表面側は中央部にわずかな自然面を残し、その周囲に敲打痕がとりまき、さらにその外側が剥離面となっている。裏面はわずかに剥離がみられるが大部分自然面である。表裏の境の縁辺は全体が磨滅している。この石器は刃部断面の角度が90°に近く、鋭さがない。また左例が大きく抉れた形態であり、この部分は1回の打ち欠き（あるいは欠損）により形成された

ものであるが、剥離面の辺にも敲打痕がみられるため、この面が生じた後に、更に加工または使用されたものと思われる。







類 磨敲凹石類 (31 - 119)

本類の石器は従来「磨石」「敲石」「凹石」などと呼ばれてきたものである。しかし同一の個体に複数の成形・使用痕が認められるものが多いため一括して細分した。本類の石器及びJ類の石器の計測表中での成形・使用痕の略号及び、実測図中での表現のしかたは大石平遺跡の1985年報告書(青森県教育委員会:1955b)を踏襲し、第57図のとおりとした。

類 側縁部が「擦り」のため平面化し、平坦面には「擦り」または「磨き」のみられるもの(31~49)

比較的扁平で長軸に平行な側縁に「擦り」がみられる。このため正面形が短辺の膨らんだ長方形(□)、縦の断面形が楕円形、横断面形が長辺の膨らんだ長方形(□)のものが一般的である。中には39のように角ばったものもある。側縁の「擦り」平坦面の「擦り」「磨き」とも1縁(面)のものと両縁(面)にみられるものがある。1縁にみられるものではその度合が強くて33、46のように左右が明らかに非対称のものがみられる。また、厚みは36、39、40のよ

成形・使用痕の種類

- | | |
|--|--|
| 名称 記号 | |
| 「磨き」(ケ)…表面の凹凸がなく自然面より滑らかとなり、光沢をもつもの |  |
| 「擦り」(ス)…表面の凹凸や自然の膨らみがとれて平面化するが「磨き」より荒れているもの |  |
| 「敲き」(ク)…表面が荒れてざらつきができ、白っぽくみえるもの 細かい傷状のものが集中しているものも含む |  |
| 「凹み」(ホ)…面の状態は「擦り」「敲き」と同様で、周囲よりもおよそ2mm以上窪んでいるもの |  |
| 「剥離」(ハ)…打欠きにより剥がされた面 |  |
| 「変色」(ヘ)…周囲に比べ色が変化しているもの 主に黒色になる 「敲き」に伴う場合や荒れている場合が多い |  |

成形・使用痕の位置

平坦面(s)、側縁(e)、端部(t)

「+ハ」は主要なものの周囲に「剥離」の伴うもの

石質略号

- | | |
|--------|--------|
| A 安山岩 | G 泥炭 |
| B 砂岩 | H 流紋岩 |
| C チャート | I 珪質頁岩 |
| D 凝灰岩 | J 玉髓 |
| E 頁岩 | K 輝緑岩 |
| F 閃緑岩 | L 鉄石英 |

第57図 石器実測模式図

うに薄いものや 4 のように厚いものがある。また長さとの差が大きく 1、117 のように細長いものや 4 のようにずんぐりしたものがある。複合している成形、使用痕としては 31、114 などに見られる側縁の「剥離」69 や、114 にみられる「凹み」、1 や 35 にみられる平坦面の「敲き」などがある。

類 側縁部が「擦り」により平面化しているもの（50～57）

形態は、類に類似するものが多いが、50 のようにかなり不整な形態のものもある。複合する成形・使用痕としては、51～53、56 のような側縁の「剥離」、51、52 にみられる平坦面の「敲」がある。

類 平坦面に「擦り」または「磨き」があり、正面形が楕円形のもの（58～65）

形態は 類よりやや厚みの大きい傾向があるようである。複合する成形・使用痕としては、59、61、63、65 の平坦面の「敲き」や 59 にみられる側縁の「敲き」がある。

類 平坦面に「擦り」または「磨き」があり、正面形が楕円形以外のもの（101 - 104）
不整な形態のものが多い。複合する成形、使用痕は、16、110 の端部の「敲き」60、110 の平坦面の「敲き」があげられる。110 は多孔質な素材のものである。

類 端部に「擦り」または「敲き」のあるもので棒状の形態のもの（66～69）

66 は正面がきれいな卵形、断面の扁平なもので、端部は成形、使用痕により生じた 2 面により山形の形態をなしている。67 は細く尖った端部に向かう 2 側縁に「剥離」がみられ三角屋根状の形態をとるものである。その先端部には「擦り」の痕跡がある。その他はずんぐりした形態である。ほかに複合する成形、使用痕としては 68 の側縁の「敲き」がある。

類 端部に「擦り」「敲き」「剥離」のあるもので、棒状以外の形態のもの（70～100）

形態は ～ ・ 類に比べ、長さとの差が少いものが多い。71 は長軸両端と 1 側縁に「剥離」があり 類（磨敲凹石類）ではなく石錘の可能性もある。90、97 は円盤状の形態のものである。複合する成形、使用痕としては 97 の端部と側縁の 4 カ所にある「剥離」を伴う「敲き」や、83 の表裏両面の中央付近の「敲き」、80 の同じく両面の「凹み」などがある。

類 側縁に「敲き」または「剥離」のみられるもの（105～109）

105 を除いては 類と同様の形態をとるものである。105 は柱状節理の細長い棒状の安山岩を利用したものである。横断面は、平行四辺形であるがその二つの鋭角な対角に「剥離」がみられる。108 は「剥離」が深く、抉れている。このほか複合する成形、使用痕としては、106、107、109 の平坦面の「敲き」があげられる。

類 平坦面に「敲き」または「凹み」のあるもの（110～119）

本類の成形、使用痕は他の類においてもかなり複合してみられたものである。形態は 110、112、115 のように円盤状のものもあるが、113 や 118 のように棒状に近いものもある。88 は「凹み」の深

さが5mmほどもあるが、この「凹み」は細い溝状を呈する痕跡である。

J類 石皿・台石類(120~135)

本類は従来石皿・台石などといわれ、比較的大形の礫にあまり加工を加えず、おもに平坦面に「擦り」や「敲き」の成形、使用痕のあるものを一括したものである。本類の計測表や実測図における表現は 類と同じとした。本類は主に形態により細分した。

類 1面が平坦でそこに「擦り」のみられるもの(120)

120は「擦り」がほぼ平坦面の全面に及んでいるものである。

類 2面が平坦で、1面又は2面に「擦り」のみられるもの。

a類 1面だけに「擦り」のみられるもの(121~125)

121・122・124・125は1面の全面に「擦り」がみられる。125は他のものに比べかなり厚手で、側面に「敲き」のあるものである。121は側縁に剥離がみられる。また、121・122・125は平坦面に「敲き」がみられる。

b類 2面に「擦り」のみられるもの(126~130)

126・128は一つの平坦面のほぼ全面に「擦り」のあるものである。128は「擦り」のある平坦面がやや凹湾している。130は他のものより厚手で、断面が楕円形をしている。

類「擦り」のある面が凹湾しているもの(132~134)

132、134とも縞目のある砂岩を用いているもので、同一個体である可能性もある。

類「擦り」のある面の側縁に高まりをもつもの(135)

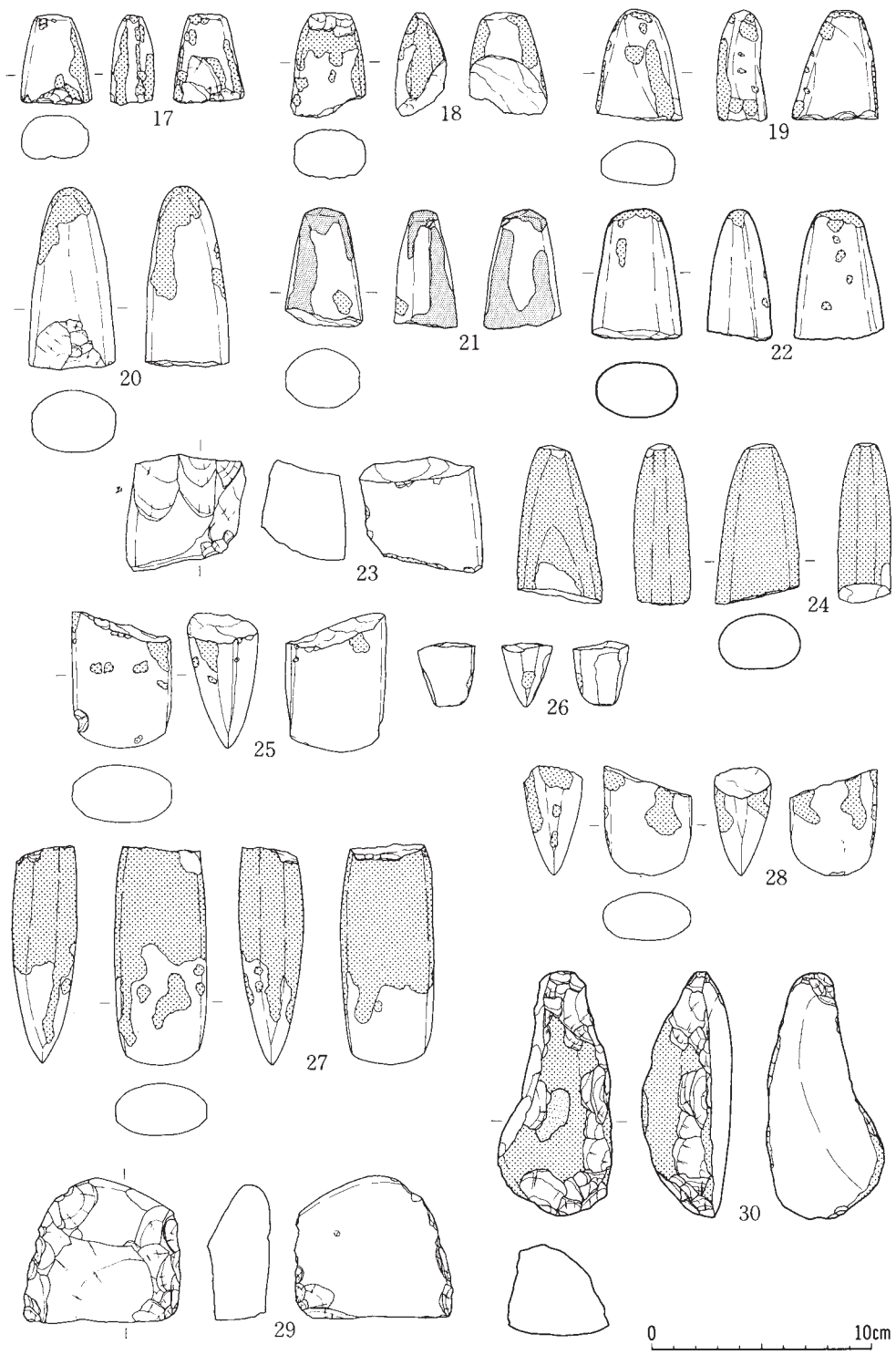
一部欠損しているが、隅丸長方形のものと思われる。全面が「敲打」と「擦り」により成形されていると思われ、側縁の高まりの上部には全体に「敲き」が残り、他はほとんど全面「擦り」となっている。高まりのつく側の面は緩く凹湾していて、中央部には長軸に平行かやや斜めの溝が多数ある。また、裏面には2箇所広く「敲き」のみられる部分があり、また、擦痕が多数残っている。

L類 その他の石器(第64図131)

AQ125 層から出土したものである。類例のみられない凝灰岩の石製品である。実測図に従って説明すると左面にはやや凹湾する平坦な面がみられる。その裏面は両側を挟られて1cm強の高さに膨隆する尾根状の部分があり、これは上方へ伸びて突出する。この突出した部分は元の部分の周囲が溝により囲まれて、つまみ状の形態となっている。(坂本)



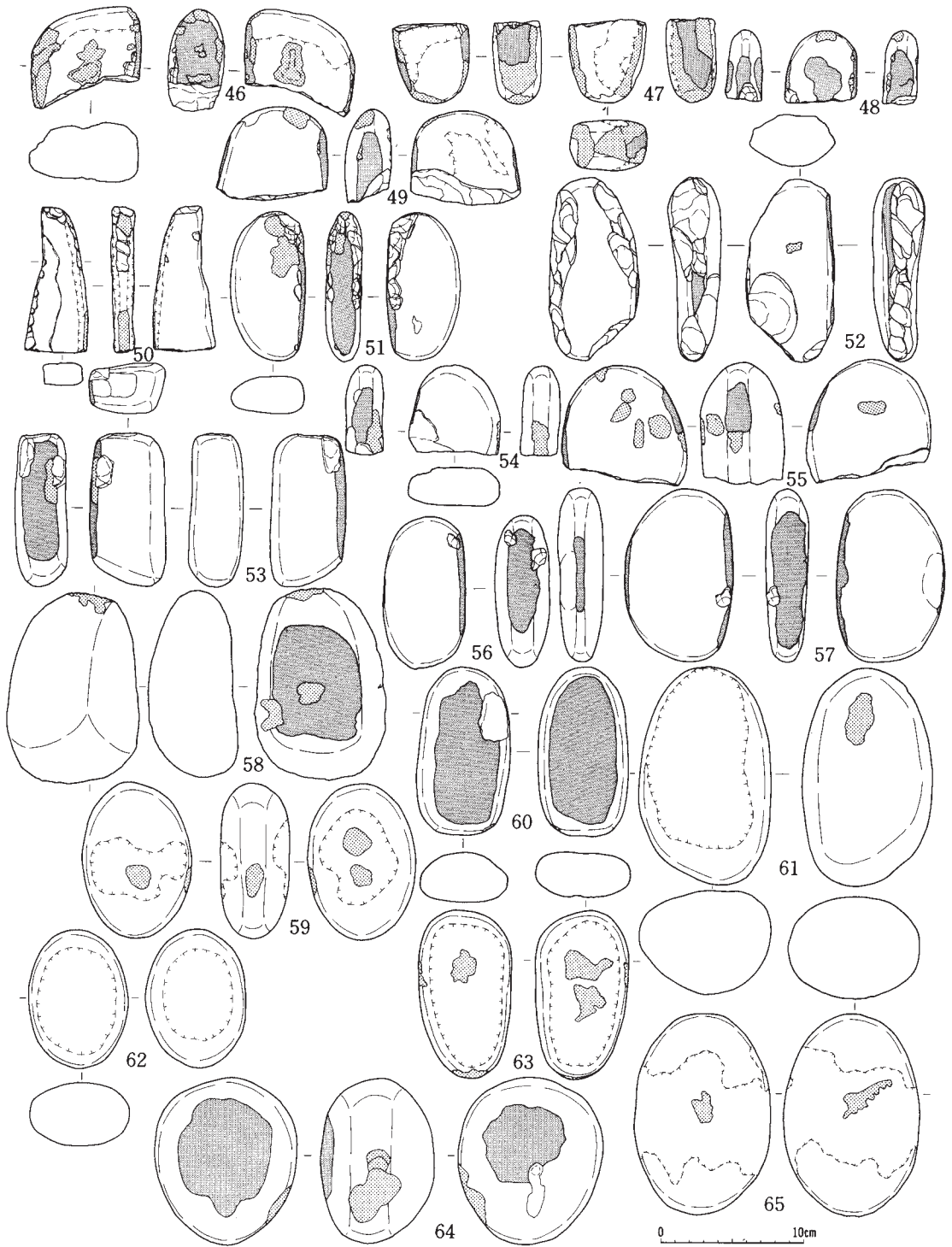
第58図 石器(1)



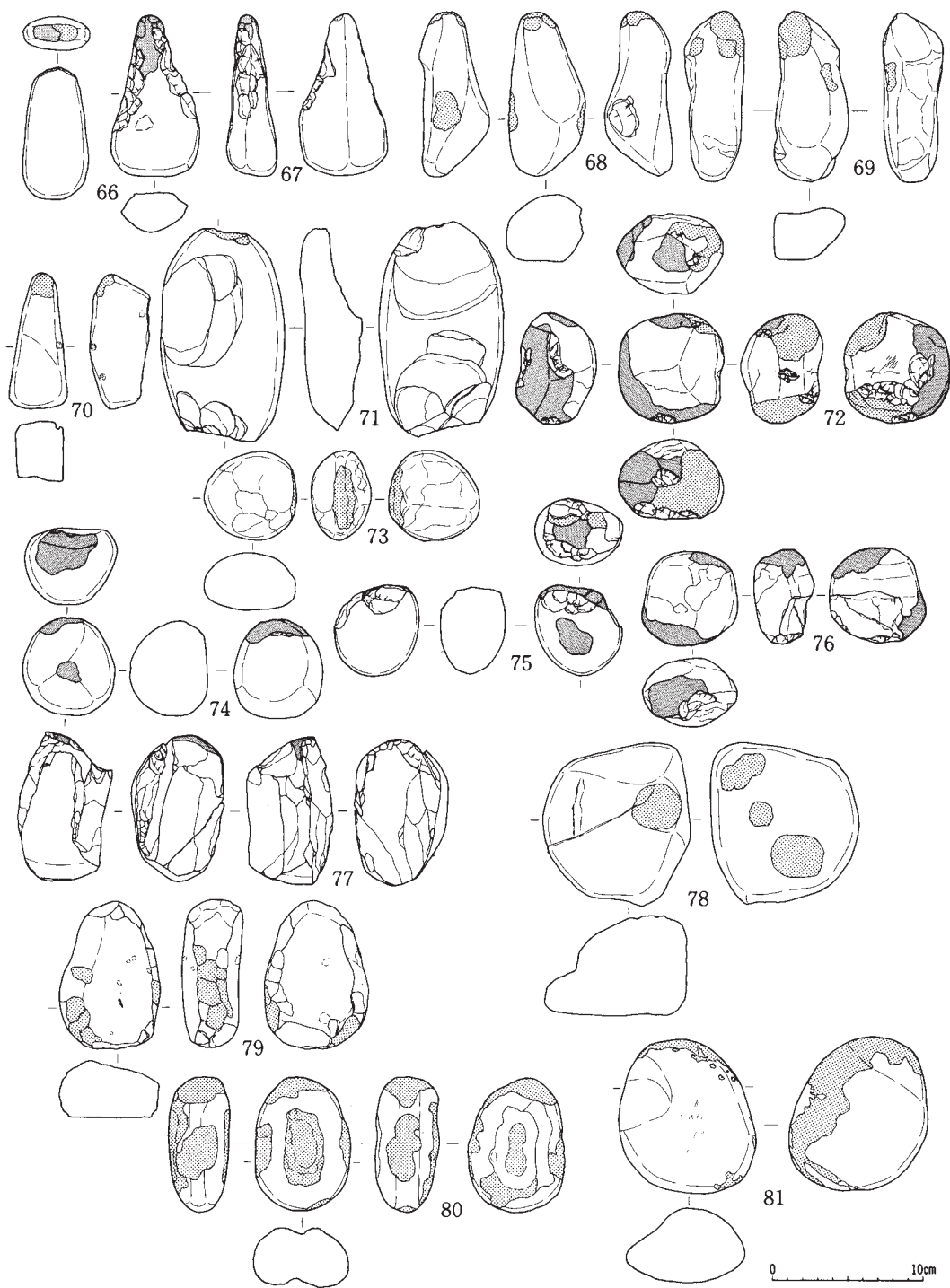
第59图 石器(2)



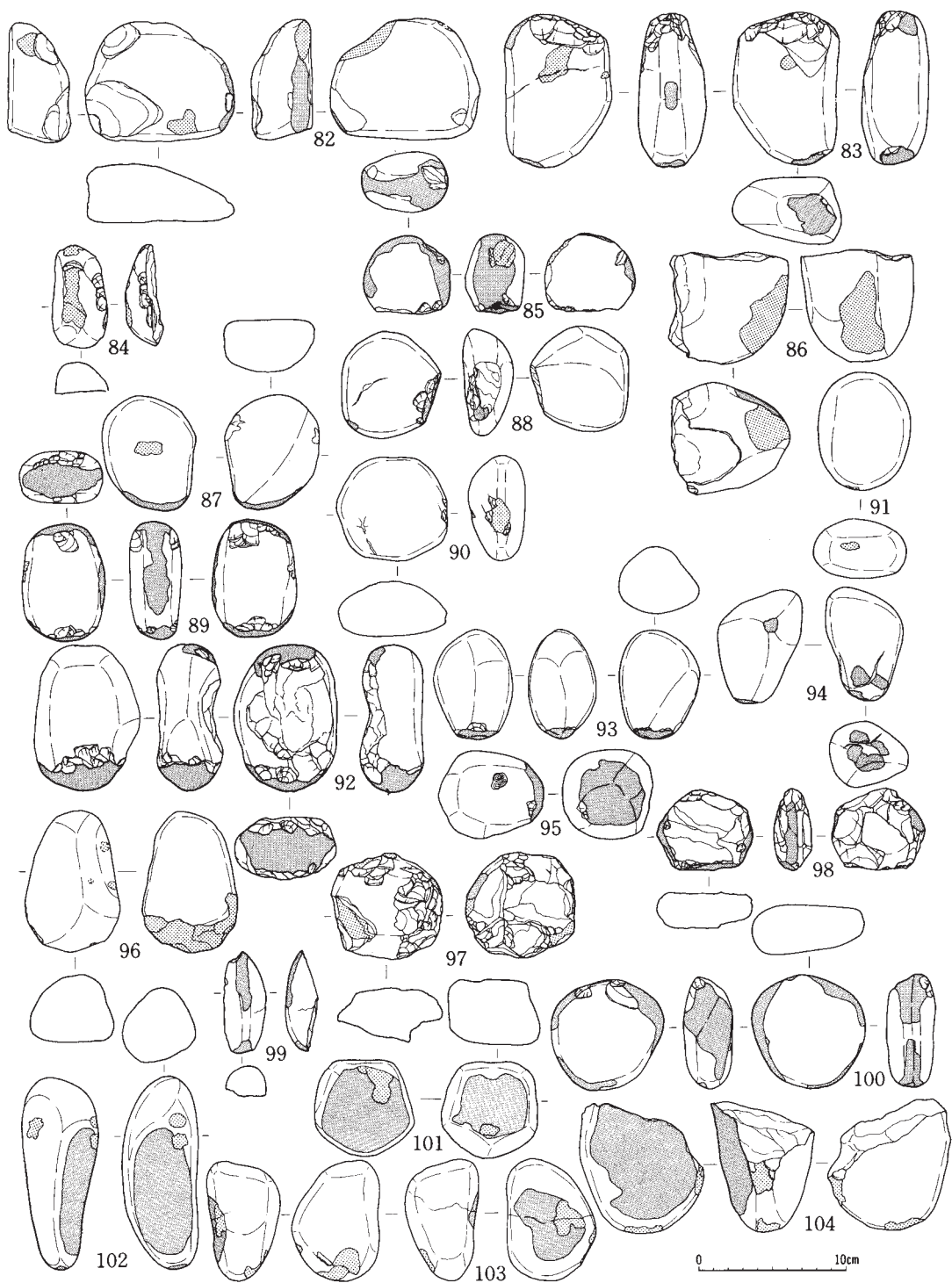
第60図 石器(3)



第61図 石器(4)



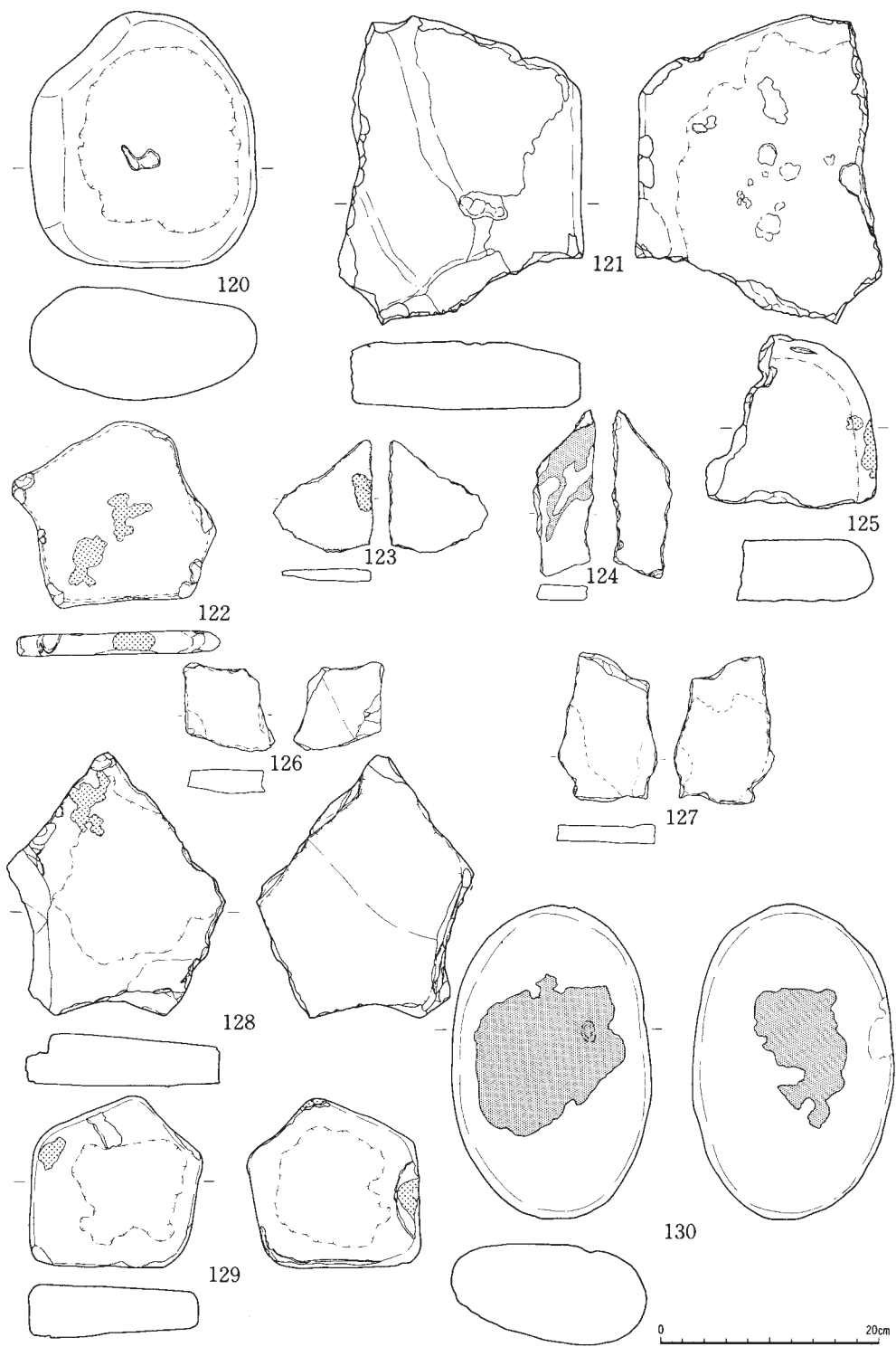
第62図 石器(5)



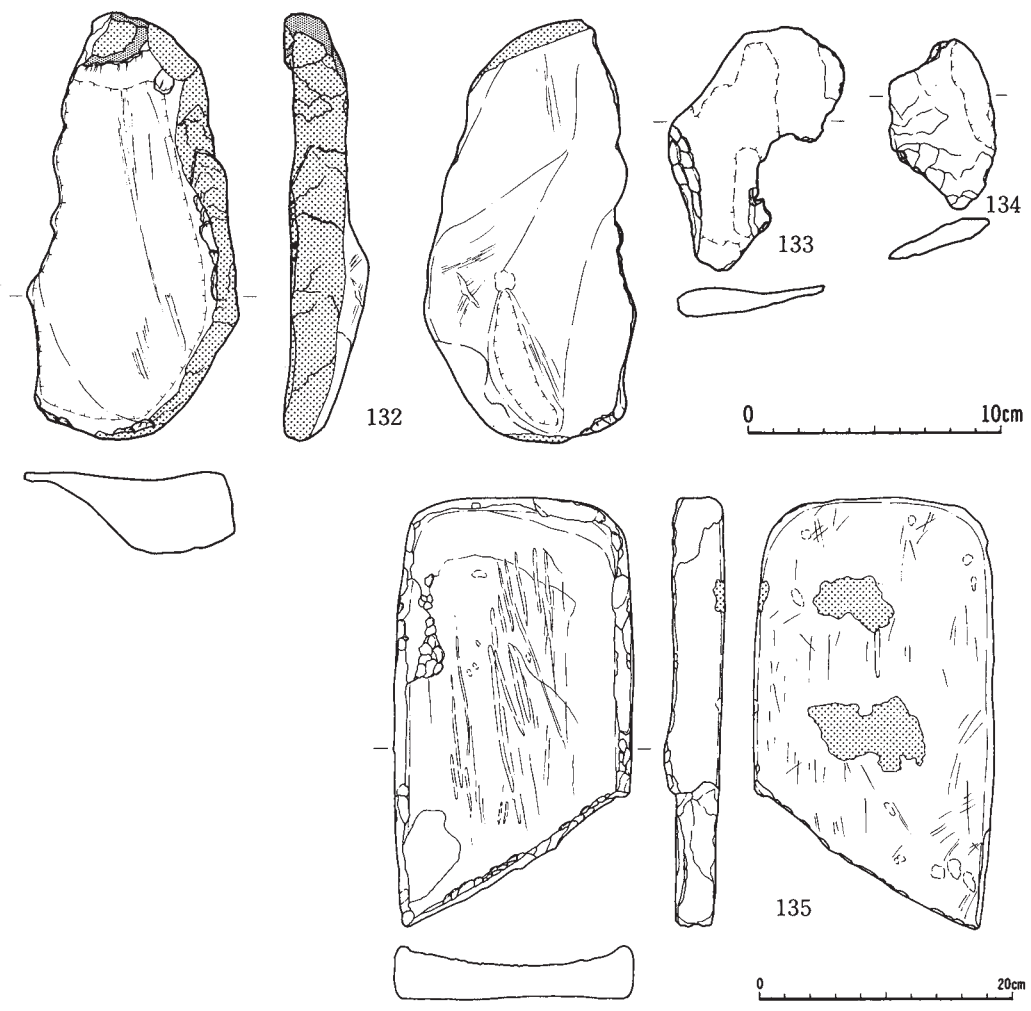
第63图 石器(6)



第64図 石器(7)



第65图 石器(8)



第66图 石器(9)

第19表 石器計測表

()は欠損品の残存値

番号	出土位置	長さmm	幅mm	厚さmm	重量g	石質	分類	備考
1	AJ 132 I	45.0	22.5	19.8	13.9	I	B	
2	AM131 IIb	76.2	19.0	14.0	12.5	I	C	
3	AR122 I b	74.0	29.5	13.0	33.0	I	D	
4	36Hフク土上	(21.0)	16.0	5.0	(1.8)	J	E I	
5	AM128 I	39.2	(31.5)	6.0	(8.1)	I	E I	
6	38Hフク土	(29.0)	22.1	7.0	(7.8)	J	E I	
7	AK130 IIa	35.0	22.5	6.0	4.0	I	E I	
8	AN129 I	38.0	17.0	10.0	6.8	J	E I	
9	11土フク土	48.5	31.2	8.0	14.2	I	E I	
10	AL122 IIa	76.5	41.2	7.0	29.1	I	E I	
11	AK128 I	60.0	55.9	11.0	36.9	I	E I	
12	AK130 IIa	31.0	(20.0)	9.0	6.1	J	E II	
13	AH131 I	32.9	12.0	6.0	2.8	J	E II	
14	AK126 I	40.5	34.5	16.5	20.7	I	E II	
15	J-16土フク土	62.9	(35.9)	7.0	(20.9)	I	E II	
16	AK129 I	38.0	38.0	31.0	46.9	E	F	
17	AK131 I	(40)	31	19	42	F	G	
18	AS131 II	(48)	34	22	(45)	F	G	
19	AP129 IIb	(51)	37	20	(63)	F	G	
20	AN126 IIb	(82)	38	27	(141)	F	G	
21	AQ127 IIb	(53)	31	27	(75)	F	G	
22	AR117 IIa	(58)	38	27	(108)	K	G	
23	AN135 IIa	(53)	(47)	(36)	(137)	B	G	
24	AK131 IIa	(72)	37	25	(104)	F	G	
25	API24 IIa	(57)	45	29	(112)	F	G	
26	AO126 IIa	(29)	(24)	(23)	(20)	F	G	
27	AP126 I	(96)	41	30	(209)	F	G	
28	AI 128 I	(43)	40	24	(61)	F	G	
29	AR125 IIa	(65)	(71)	(27)	(197)	F	H	
30	AQ127 IIb	(111)	(52)	(40)	(268)	F	H	
31	AR122 IIa	137	69	45	695	A	I-I	Sケ、Sタ、eケ、eタ
32	AM124 IIa	110	86	66	918	A	I	Sス、eス、tタ
33	AJ 122 IIa	95	61	36	350	A	I	Sケ、eス+ハ
34	AK129 IIa	98	60	34	322	D	I	Sケ、eス
35	AN124 IIa	115	78	36	546	A	I	Sス、eス+ハ
36		105	66	29	367	A	I	Sス、eス+ハ
37	AS119 IIa	119	73	37	485	D	I	Sケ、Sタ、eス+ハ
38	AP126 IIb	105	75	32	479	A	I	Sケ、Sタ、eス
39	中央地区	118	72	27	410	D	I	Sス、eス+ハ
40	AM126 IIa	113	86	36	591	A	I	Sケ、Sタ、eス
41	AN121 IIa	105	76	42	472	A	I	Sケ、eス
42	AL130 IIa	106	73	31	403	A	I	Sス、eス+ハ
43	AO121 IIa	167	69	45	748	D	I	
44	AM128 I	120	70	47	657	A	I	Sケ、eス、eス+ハ
45	AS124 I b	(107)	(52)	(34)	(327)	D	I	Sス、Sタ、eス+ハ
46	AI 128 I	(56)	77	37	(301)	A	I	Sケ、Sボ、eス+ハ
47	AM128 I	(56)	52	33	(180)	A	I	Sケ、eス、eタ
48	AK128 I	(50)	49	24	(103)	A	I	Sス、eス+ハ

番号	出土位置	長さmm	幅mm	厚さmm	重量g	石質	分類	備考
49	AP129 IIb	(64)	75	31	(245)	A	I	Sケ、eス+ハ
50	AN132 I	(102)	43	15	(110)	A	I-II	eス、eハ
51	AO126 IIa	105	52	25	234	B	II	Sタ、eス+ハ
52	AO128 I	(128)	(63)	(34)	(406)	A	II	Sタ、eス+ハ
53	AP130 I	106	52	37	374	A	II	eス
54	AP130 I	(60)	53	26	(145)	A	II	eス+ハ
55	AG131 I	(81)	88	58	(645)	A	II	Sタ、eス
56		106	68	37	361	A	II	eス+ハ
57		30	76	29	462	A	II	eス
58	AO125 I	134	93	61	816	A	I-III	Sス、Sタ、tタ
59	AQ120 IIa	110	75	51	670	A	III	Sケ、Sス、eタ
60	AS122 IIa	117	64	34	437	A	III	Sス、eハ
61	AM122 II	151	93	69	1,000	B	III	Sケ、Sタ
62	AG131 I	96	70	45	458	A	III	Sケ
63		118	65	30	383	A	III	Sケ、Sタ
64		117	100	79	1,000	A	III	Sス、eタ
65	API26 IIa	140	97	71	1,000	A	III	S-ケ、Sタ
66	AP127 IIa	89	43	21	129	D	I-V	tス、tタ
67	AP127 IIa	107	(57)	31	(200)	A	V	eハ、tス
68	AG131 I	99	44	47	307	A	V	eタ、tタ
69	AF127 I	112	46	32	247	A	V	tタ
70	AP130 I	88	(32)	39	(185)	A	I-VI	Sタ
71	AM122 II	(140)	(82)	(38)	(549)	A	VI	eハ、tハ
72	AM122 II	71	70	49	373	C	VI	tス+ハ、tタ
73	AJ 127 I	59	61	38	180	A	VI	eタ、eス、eタ、eタ
74	AJ 132 I	66	61	50	292	B	VI	tス+ハ
75	AJ 132 I	(61)	(54)	(43)	(219)	A	VI	tス+ハ
76	AJ 129 I	62	59	(40)	(210)	C	VI	tス+ハ
77	AR124 IIa	(98)	(50)	(60)	(385)	C	VI	tタ+ハ
78	AH128 I	94	104	74	948	A	VI	tタ
79	AQ127 IIb	96	68	38	397	A	VI	eタ、tタ
80	東側126以东	90	63	40	298	A	VI	Sボ、eタ、tハ
81	35H附近表土	107	87	53	693	C	VI	eタ、tタ
82	AR125 IIa	81	102	44	518	A	VI	tス+ハ、tタ+ハ
83	AJ128 I	(102)	69	45	(508)	C	VI	Sタ、tス、tハ
84	AG131 I	69	(37)	21	(70)	C	VI	eタ、tタ
85	AJ129 IIb	(52)	60	41	(191)	C	VI	eタ、tタ
86	AN121 IIa	(75)	(74)	74	(635)	A	VI	tタ
87	AJ 130 I	80	62	36	263	C	VI	eス、eタ
88	AQ117 IIa	71	68	36	254	C	VI	tハ
89	AJ 128 I	80	57	33	269	C	VI	eス、eタ、tス+ハ
90	AR120 IIb	71	74	38	269	C	VI	tタ+ハ
91	AH128 I	73	62	40	302	C	VI	eタ、tタ
92	AJ 130 II	98	71	(36)	(452)	C	VI	tス+ハ
93	AK128 I	73	54	46	229	C	VI	tス+ハ
94	AL121	67	56	42	220	C	VI	tス
95	AN122	71	59	57	357	C	VI	tス
96	AI 128 I	95	65	44	414	A	VI	

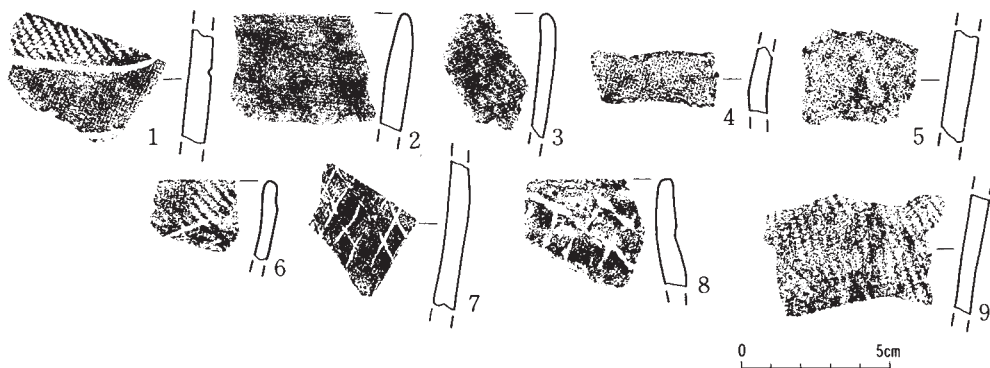
番号	出土位置	長さmm	幅 mm	厚さmm	重量g	石質	分類	備考
97	AN126Ⅱb	(71)	(76)	(37)	(264)	C	Ⅵ	eタ+ハ、tタ+ハ
98	AV117	(55)	(63)	(23)	(110)	C	Ⅵ	tス+ハ
99	AO128Ⅱb	69	(29)	19	(48)	C	Ⅵ	eス、tス
100	AK128 I	76	76	33	290	C	I-Ⅵ	tス+ハ
101	AT128 I	64	66	42	317	A	Ⅳ	Sス
102	東側126以北	130	53	44	473	A	Ⅳ	Sス、Sタ
103	AH129 I	82	60	49	346	A	Ⅳ	Sス
104	AP121Ⅱ	(81)	(63)	93	(550)	A	Ⅳ	Sス、Sタ
105	AP116	224	46	28	492	A	I-Ⅶ	eタ、eハ
106	AO125 I	126	82	49	743	B	Ⅶ	Sタ、eタ
107	AP124Ⅱa	(93)	(49)	36	(205)	A	Ⅶ	Sタ、eタ
108	AG131 I	123	61	22	267	A	Ⅶ	Sハ、eハ
109		112	(63)	49	(477)	E	Ⅶ	Sタ、eタ+ハ、eハ
110	AK132Ⅱ	84	67	40	326	A	I-Ⅷ	Sタ
111	AG131 I	(70)	(57)	26	(122)	A	Ⅷ	Sタ
112	AS124Ⅱa	87	62	25	195	A	Ⅷ	Sタ
113	AJ 129 I	112	60	50	426	A	Ⅷ	Sボ
114	AI 127 I	(74)	68	24	(201)	A	Ⅷ	Sタ 熱を受けている
115	AM122Ⅱ	95	84	46	604	A	Ⅷ	Sタ
116	AP127Ⅱa	(71)	(88)	(62)	(651)	A	Ⅷ	Sボ

番号	出土位置	長さmm	幅 mm	厚さmm	重量g	石質	分類	備考
117	AK132Ⅱb	94	60	(35)	(271)	A	Ⅷ	Sタ
118	AQ117Ⅱa	110	49	54	425	B	Ⅷ	Sタ
119	AK131 I	101	68	38	367	B	Ⅷ	Sタ
120	AJ 127 I	230	270	98	7,000	A	J-I	
121	AI 128 I	(279)	(250)	(53)	(6,000)	A	J-IIa	eハ
122	AJ 129 I	164	162	19	1,131	A	Ⅱa	Sタ
123	AI 128 I	(98)	(88)	10	(115)	A	Ⅱa	
124	AH129 I	(143)	(53)	14	(199)	A	Ⅱa	
125	AL130Ⅱa	(155)	(156)	(55)	(2,000)	A	Ⅱa	
126	AS124 I b	(77)	(70)	20	(219)	A	J-IIb	
127	AK130Ⅱa	(135)	(88)	16	(339)	A	Ⅱb	
128	33H附近表土	(242)	(201)	(36)	(2,500)	A	Ⅱb	
129	AP122Ⅱ	157	156	39	2,000	A	Ⅱb	
130	AK130Ⅱa	291	185	85	7,400	A	Ⅱb	
131	AQ-125Ⅱa	96	63	52	176	D	L	
132	AL127Ⅱb	165	(80)	29	(373)	E	J-Ⅲb	
133		(100)	(61)	(1.0)	(52)	B	J-IIa	
134		(67)	(42)	(1.0)	(28)	B	Ⅲb	
135	AH130Ⅱ	(342)	188	41	(2,500)	D	J-Ⅳ	

(2) 中央地区出土の遺物 (第67図)

中央地区からは11片の土器片および1点の石器(第60図39)が出土した。いずれも縄文時代後期前半のものと思われる。

(坂本)



第67図 中央地区の土器

第2節 弥生時代の遺物（土器）（第68・69図）

本遺跡では、東側地区から弥生時代の3個体分の復原可能土器と約12個体分の破片が出土した。遺構外と土師器を伴う住居跡内覆土の出土である。本節では遺構外の土器とともに土師器を伴う住居跡内からの土器についても記載する。

第1類 口縁部及び胴部に文様のみられるもの（1、4）

1 第34号住居跡の覆土中から出土した甕の上半部である。胎土中に1mm位の砂粒が多量に混入されていて、焼成はあまり良くない。色調は外面が灰白色、内面の口縁側が灰白色ないしにぶい橙色、下方が褐灰色である。断面の色調は外面側の1mmほどと、口縁寄りの部分の内面側1mm足らずが灰白色、その中間の部分が黒色で、この二つの色調の境界は画然と分かれている。胎土・焼成・色調等は、他類の土器とかなり異なっている。形態は、胴部がかすかに上方へ開きぎみに立ち上り、頸部で急に外へ開き、口縁がやや内湾ぎみとなるものである。残存高9・5cm、推定口径25cmである。胴部器厚は6mmほどであるが、頸部は薄くなり約5mmとなる。頸部の上方では急に厚さが増して6mmほどとなり、器外面側に膨らんでいる。さらに口縁に向かうと薄くなっていく。口縁外面には粘土の貼付けがみられ、この部分では6mmの厚さとなっているが、これも先端は薄い。この貼付の部分には1箇所楕円形の突起が付されている。文様は、細い沈線で描かれている。口縁の貼付部分には3条の水平な線があり、そこに一定間隔で縦の短い沈線が引かれている。その下の膨らんでいる部分には、鋸歯状の沈線がみられる。この膨みの下に1条と、頸部の屈曲する部分に2条の水平沈線が引かれる。胴部には2条平行な沈線で、直線や弧により文様が描かれ、変形工字文（方形文）や蛇行する線もみられるが、胴部を縦に分ける一種の文様区画が形成されているようである。器面には部分的にRLの縄の横位回転による縄文がみられる。この縄文は沈線施文前に付されている。口縁の貼付の下には擦痕がみられる。なお、器外面には煤状炭化物が付着している。

4 甕の胴部である。胎土中に1mm位の砂粒がかなり含まれている。焼成はあまり良くなく脆い。色調は外面が淡橙色ないしにぶい橙色、内面が黒褐色である。胎土・焼成・色調は本類の1に似ている。器形は頸部までやや内湾ぎみに立ち上るものである。厚さは6mm前後である。文様は細い沈線で描かれている。上部に水平線があり、その下に等間隔に上向きの弧が付され、さらにその下には下向きの半円状の大きな弧が描かれている。この大きな弧の内側には条が縦走する節の細かいRLの縄文が施されている。

第2類 鋸歯文のみられるもの（5～8）

6 甕の口縁部片である。胎土には砂粒は少く、焼成は普通である。色調は外面が暗赤褐色ないし褐灰色、内面は褐灰色である。口縁付近が外反して頸部は垂直となり以下肩部が膨んでいく器形のようなものである。厚さは6mmである。文様は全面にRLの縄文を横位回転施文したあと、

口端付近を除いてすり消し、その後ほぼ等間隔な水平な沈線とその間の角の丸い鋸歯文を施文している。沈線は比較的太い丸みのある工具により引かれている。内面は口縁下 2 cmほどまでは横位の調整痕があり滑らかであるが、以下はザラついている。

5 甕の胴部片である。胎土中にはやや細かい砂粒を多く含んでおり、焼成はあまり良くなか脆い。色調は外面がにぶい橙色、内面が灰褐色である。内面に段があり、ここから上が外傾していき、下は内湾して彪らみをもつものと思われる。

文様は R L の縄文を斜位回転させ条が縦走するように施文し、その上に 6 と同じ水平な沈線と角の丸い鋸歯文の交互の配置がみられる。施文工具も丸みをもったもので 6 と似ている。地文の縄文は一部施文されないところや条の斜めになるところがある。内面の段の下には横位の調整痕がみられる。5 a の外面には煤状炭化物が付着している。

7 胴部破片である。胎土に砂粒は少なく、焼成は普通である。外面の色調は浅黄橙色ないし灰褐色、内面はにぶい橙色である。条が右下がり急な傾きの R L の縄文を施文後、細い沈線で、高さ幅とも小さな鋸歯文を施文している。

8 a、8 b、8 c 同一個体と思われる。口縁・胴・底の各部分の破片で喪と思われる。胎土中には砂粒の混入が少なく、焼成は比較的良く堅緻である。色調は外面がにぶい橙色、内面はにぶい黄橙色ないし褐灰色である。器厚は、口縁は口唇上端が薄い(5.5mm)がその下が厚くなっていき(7mm)折返し状になっている。それ以下はまた薄くなる。胴部は緩く外反しているが厚さは 6 mm である。底部はやや揚げ底ぎみになっている。文様は R L の縄文地に沈線を引いて描いている。縄文の条は口縁の部分では縦走し、その下は右下がりとなっており、さらに下には縄文の施されない部分がある。この下と胴部では縦走しているが、底辺ではまた右下がりとなっている。折返し状の部分とその下の無文部分に鋸歯状の沈線がみられるが、上のものは傾きがきつく頂点が離れており、下のものは傾きが緩く頂点は連続している。また、2 条の沈線が平行している部分もある。なお、無文部分には横位の擦痕がみられ、内面にも同様の擦痕がみられる。

第 3 類 連弧文のみられるもの(2、9)

2 A K 132 層で出土した。甕の上半部である。胎土中に砂粒を含むが焼成は良く比較的堅緻である。色調は外面がにぶい赤褐色ないし褐灰色、内面がにぶい赤褐色ないしにぶい褐色である。器形は胴部がやや膨らみ頸部がくびれ、口縁に向かって外へ開いていくものである。残存高 10.0 cm、推定口径 16 cm である。器厚は胴部が 5~6 mm であるが、頸部のくびれでは 3 mm、その上はやや厚くなり 4 mm、口唇部は 3 mm となっている。口唇上面にはところどころに刻みや V 字形に決られたところがあるが、おおむね平坦にされている。文様は弧状の沈線と縄文により構成されている。頸部のくびれ部分と胴部の最も膨らんだ部分に横に連続した上向きの弧が沈線で引かれ、胴部の弧の下には縦の弧が 2 本ずつ向かい合っ描かれている。縄文本体は R L

であるが、頸部から口縁にかけての部分には横位に、連弧文の下には縦位に回転押捺されている。下の縄文の施文は各回転ごとに間隔をあけて行われ、無文部分と縄文部分が縞状になっている。口唇上面にもR Lの縄による回転施文がみられる。なお、沈線は縄文施文後に引かれている。内面には胴部の膨らんでいる部分から下方に斜め右下がりの幅4 mmほどのなでつけたような痕跡がみられ、その付近には指で押圧した跡もある。器外面の上半と口縁内面付近に煤状炭化物の付着がある。

9a、9b、9c 甕の頸部の破片である。胎土に砂粒の混入は少く焼成も普通である。色調は外面が褐灰色ないし灰褐色、内面がにぶい橙色ないし灰褐色である。口縁は外へ開くが内湾している。口唇上面は平坦に整えられているが、口唇の外側には等間隔で刻みが付されている。器厚は全体に薄い口縁外面側がやや厚くなって5 mmあり、以下は4 mmである。文様は、2条の水平な沈線の間互いに向きの反対な2段の連弧文が施される。縄文はR Lで、口縁側と胴部側は条が縦走し、水平線と弧の間は右下がりとなっていて、沈線施文後に施されている。また、口縁側と2段の連弧文の間には無文部分がある。内面は、口縁側に横位の調整痕が、下方には斜位の擦痕がみられる。内外面の一部に煤状炭化物が付着している。

第4類 磨消縄文のもの(10、11)

10 甕の口縁部片である。胎土中にはやや砂粒の混入が多い。焼成は普通である。色調は内外面ともににぶい橙色である。頸部に屈曲がみられ、そこからかなり口縁が外へ開くと思われるが、口縁付近はやや内湾みである。頸部より口縁側の方がやや厚くなっている。文様は頸部に水平な沈線が引かれ、その上には条が縦走に近い右下がりのR L縄文がみられる。水平沈線の下は無文であるがその部分には斜めの沈線もみられる。口唇上面にもR Lの縄文が施文されている。口縁付近は横位に調整されている。なお、内外面の一部に煤状炭化物が付着している。

11 胴部破片である。器厚が4 mmと薄い。胎土に砂粒の混入はほとんどみられない。焼成はあまり良くなく脆い。色調は内外面ともににぶい橙色である。文様は上端に水平な沈線があり、下方に曲線の沈線が描かれ、一部平行沈線間に縄文がある。縄文は節の細かいL Rで沈線に平行する方向に回転施文されている。内面には横位の調整痕がみられる。外面に煤状炭化物が付着している。

第5類 沈線だけの文様のもの(13)

13 胎土はやや粗く、焼成は普通である。色調は外面がにぶい赤褐色ないし褐灰色、内面がにぶい橙色である。甕の頸部と思われる。上下が薄く中ほどが厚い。文様は、浅く角の鋭い沈線だけがみられる。

第6類 縄文だけの文様のもの(3、14~16)

3 A U115グリッド 6層で出土した。甕の上半部である。胎土中には砂粒が混入してお

り、焼成は良く堅い。色調は外面が明赤褐色、内面がにぶい橙色、明赤褐色、褐灰色を呈している。器形は胴部がわずかに上方で開きぎみで、頸部から上がやや内湾しながら外へ大きく開いていくものである。残存高14.0cm、推定口径約45cmである。胴部の厚さは7～8mm、頸部はやや薄くなっており6mmある。その上が再び厚く7mm、口縁で4mmとなっている。口唇上には指の押圧によると思われる窪みがあり、内面に粘土が寄せられたために生じた突出部ができています。口唇は比較的平らな部分と丸みを帯びている部分がある。文様は粗いRLの縄文である。頸部と胴部には、帯状に無文部分がみられるが、この無文部分には横位の調整痕が残っており、頸部には指頭による圧痕がみられる。口唇上面にも同じ縄文がみられる。縄文は斜位回転により施文されており、条は縦走に近い右下がりであるが、頸部の無文部分の上下では横位回転で施文されている。外面口縁付近の一部には煤状炭化物がこびりついている。

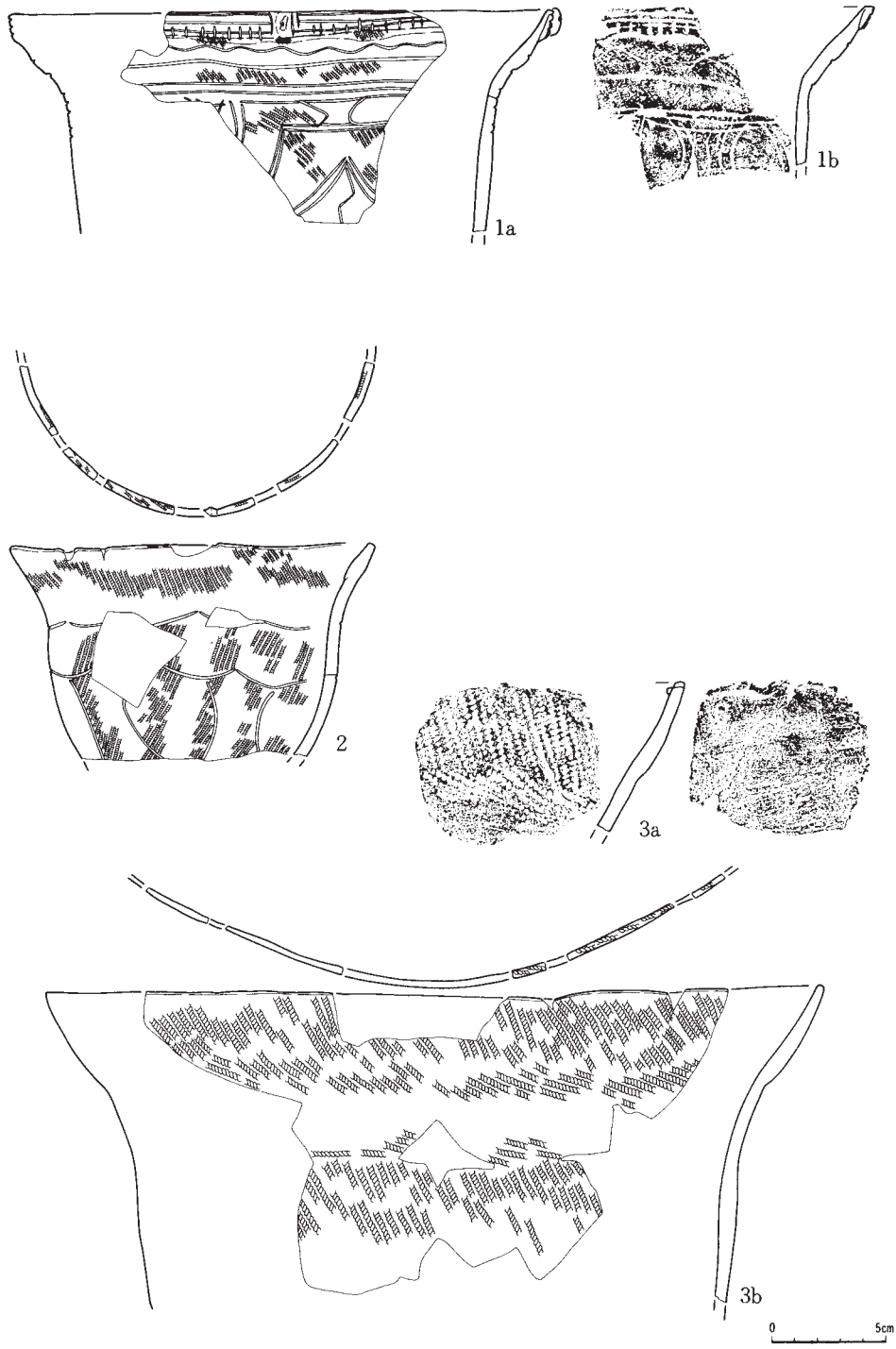
14、15は胴部の小片であり、沈線が施されている可能性もあるが便宜上本類とした。

15 口縁に向かって外反していく頸部の破片である。胎土中に砂粒がやや多く、焼成は普通である。色調は内外面とも灰褐色である。やや右下がりの縦走する条をもつRL縄文が全体に施文されている。内面は比較的平滑である。外面全体に煤状炭化物が付着しており、一部黒光りしている。(図は、上下が逆になっている。)

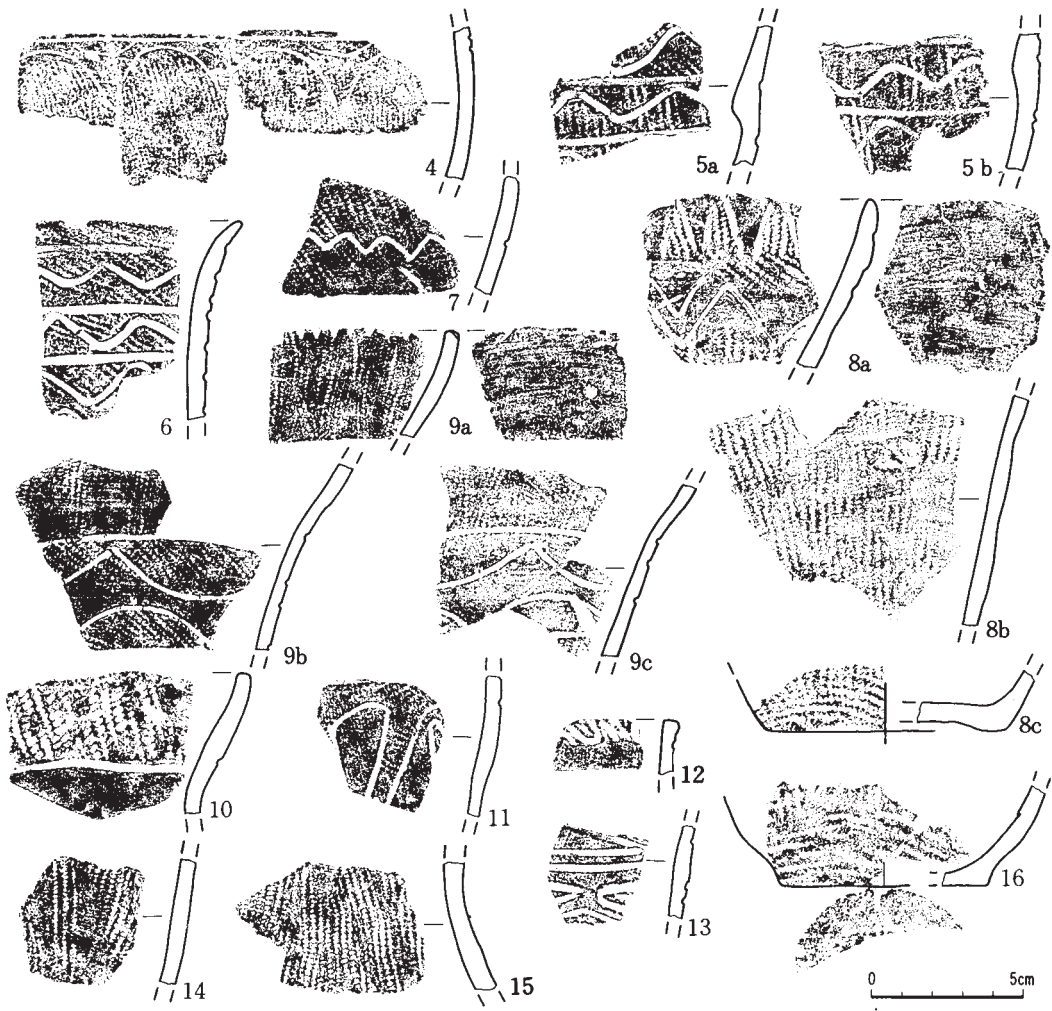
14 胎土中に砂粒の混入多く焼成は普通である。色調は外面がにぶい橙色ないし褐灰色、内面が褐灰色である。ほぼ縦走するRLの縄文が施文されている。内面には横位・斜位の擦痕がみられる。

16 底部だけの破片であるが、便宜上本類に含めた。平底で底辺は垂直に近く立ちあがり、その上は内湾ぎみに膨らみながら外へ開いていく形態である。文様はRLの縄文あるいはLの縄の絡条体回転文である。底辺では横走に近い斜走、その上は縦走しており、底面にも同じ原体の縄文がみられる。

(坂本)



第68図 弥生時代の土器(1)



第69図 弥生時代の土器(2)

第3節 歴史時代の遺構と遺物

1. 住居跡

いずれも土師器を伴う住居跡で、第1号住居跡から第7号住居跡までは中央区、第8号住居跡から第28号住居跡までは西側区、第29号住居跡から第37号住居跡までは東側区から検出した。

第1号住居跡(第70~73図)

位置と確認 中央区西側の沢地に突出する部分であるCB-67、CB-68、CC-67、CC-68で、表土がおよそ直径10m深さ70cmほどの円形のレンズ状に窪む部分を確認した。本住居跡は昭和53年の試掘調査時にトレンチ掘で一部試掘されている。

平面形と規模

平面形	主 軸	規 模								
		壁 長 (m)				壁 高 (cm)				面積(m ²)
長 方 形	S-3°-E	南	西	北	東	南	西	北	東	
				5.28	5.00	5.48	5.04	72	76	66

第20表 第1号住居跡出土土器観察表

遺物番号	種類	器種	器部	法 量(cm)			調 整			胎 土	焼 成	色 調	備 考	出土位置
				口径	底径	器高	口縁部	胴 部	底辺部					
1	土師器	甕	口縁	(14)			横ナデ 横ナデ	ケズリ ヘラナデ		1mm大の砂粒が若干、石英粒多	良好	7.5YR5/4 5/3	煤状炭化物	ピット2底
2	"	"	"	(12)			横ナデ 横ナデ	ケズリ ヘラナデ		砂粒多、石英粒若干	"	5YR5/6 4/4		カマドP-21 周堤上P-31
3	"	"	"	(17)			横ナデ 横ナデ	ケズリ ヘラナデ		砂粒多、石英粒若干密、やや砂っぽい	"	10YR6/3 6/4		
4	"	"	"	(18)			横ナデ 横ナデ	ケズリ ヘラナデ		0.2mm位の砂粒、良質粘土	"	7.5YR7/4 7/6	外面鋭いヘラケズリ	床P-15 カマド
5	"	"	"	(17)			横ナデ 横ナデ	ケズリ ヘラナデ		0.1-0.25mm砂粒多量、良質粘土	"	7.5YR8/4 7/4		カマド P-27・28
6	"	"	"	21			横ナデ 横ナデ	ケズリ ヘラナデ		2×3mm大の砂粒多量、石英粉若干	"	10YR6/4 7.5YR6/4	良質粘土	覆土

第21表 第1号住居跡出土鉄製品計測表

挿図番号	図版番号	種 類	法 量(cm)				出 土 地 点 (層 位)	備 考
			全 長	刃部長	背部厚	基 厚		
1		刀子	(8.6)	(3.9)	0.72	0.68	カマド袖Fe-1	木質部付着

竪穴周囲 竪穴の周囲を盛土と思われる層に類似する火山灰質土（5層）及び、火山灰質土と黒色土の混りあったような層（6層）が2mほどの幅でとりまいていた。6層はa層と同質であるが、やや練りが強く黄色味がかっている。また、この盛土下には灰褐色火山灰がところどころにみられた。

堆積土 壁際に火山灰質土、中央にレンズ状に黒色土が堆積しており、自然堆積と思われる。床上5～30cmの覆土中に焼土と黒色土の斑状の土層がみられた。西半には壁際を除いて広くみられ、東半の焼土はブロック的である。また、西半の焼土の下からは、黒色土の混らない焼土（焼土5）がみられた。これらの焼土混り層は上面のレベルをみるとほとんど壁側が高く、中央側が低い堆積状態を示している。

壁 下半部は急角度で立ち上がり、上部はゆるく外側へ開いて立ちあがっていく。

床 a、b、層を掘りこんで層を床面としている。床面には数箇所強く火を受けたと思われる赤変した部分がある。このうち焼土1は赤変の範囲が径75×45cmに広がり、床面下10cmまで及ぶもので、中央の部分は青灰色に変色している。

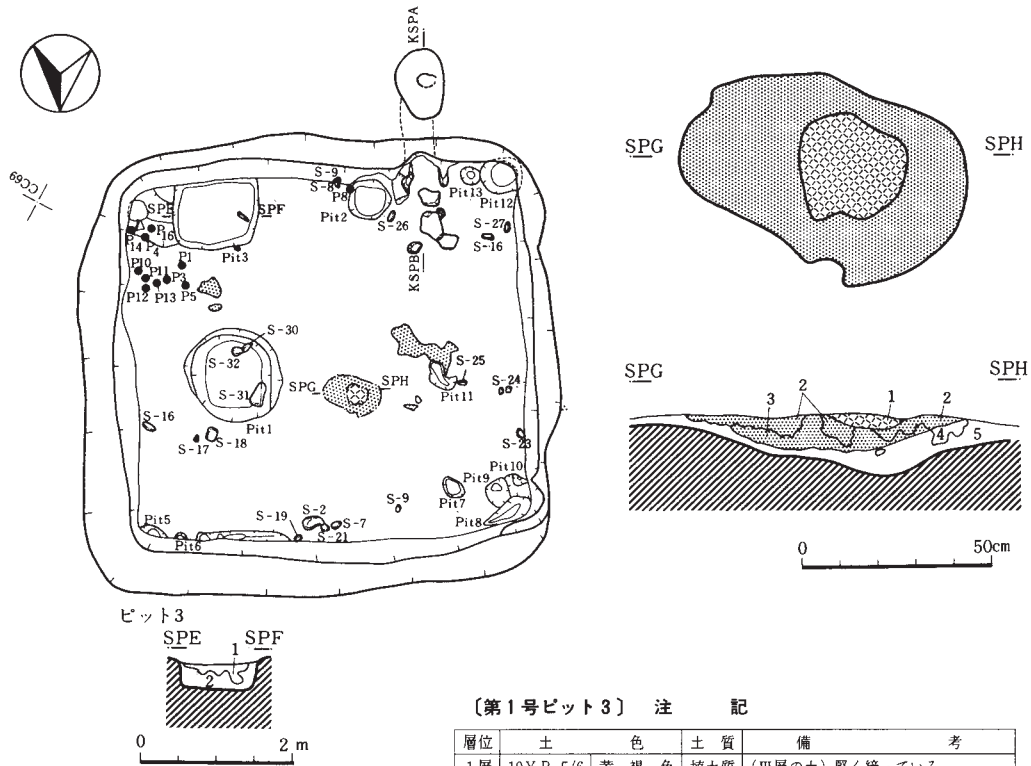
壁溝 北壁の西側の一部に幅約15cm深さ5～10cmで、1mほどの長さで確認した。

ピット 13個検出したが、各隅のピット4、5、8、12は浅いが柱穴の可能性がある。ピット3は層に似る覆土が堆積し上方が強く締まっており、埋めもどされたあと上面が床の一部とされたものと思われる。ピット1内からは礫が3点出土した。

かまど トネル式である。煙道は燃焼部から壁外に向かい緩く下降し、煙出しの部分でほぼ垂直に立ち上がる。煙出し付近は、層の土の混入した土（8、15層）により構築されている。燃焼部には、大きい礫が、その下からは数個体分の甕形の土師器片と炭化物が出土した。煙道入口付近は左右に礫が埋置されており、骨材と考えられる。燃焼部の底面は、6cmほどの深さまで赤変している。

出土遺物 かまどの崩落した礫の下にあたる火床面から、土師器甕の破片が多数出土した（3、5）。また、左側の袖の、火床面と同レベルのところから刀子の柄側の部分が山土した（1）。かまどの脇のピット2の周辺（A）や東隅の床面（4）、ピット2の床面（1）からも土師器甕が出土した。ピット1の覆土や底面からは礫が出土した。また、床面からは礫が多数出土した。また本住居からは板状・丸太状などの炭化材が出土したが、多くのものは南西半の焼土の下方に壁から中央に向かって放射状に遺存し、おおむね壁側が高く中央側が低い傾斜をしている。覆土中からも土師器甕（6）が出土している。2は、かまど内と竪穴外の周堤上の破片が接合したものである。

（坂本）



【第1号ピット3】注記

層位	土色	土質	備考
1層	10Y R 5/6 黄褐色	埴土質	(Ⅲ層の土) 強く締っている
2層	10Y R 5/6 黄褐色	〃	(Ⅲ層の土) 灰白色粘土塊、炭化物、粒混入

【第1号焼土】注記

層位	土色	土質	備考
1層	2.5Y 5/2 暗灰黄色	埴土質	堅い
2層	2.5Y R 5/8 明赤褐色	〃	焼土、堅い
3層	5 Y R 4/6 赤褐色	〃	焼土、粒状でボソボソしている
4層	10Y R 5/6 黄褐色	〃	堅い
5層	10Y R 5/6 黄褐色	〃	ボソボソしている。貼床の土と思われる

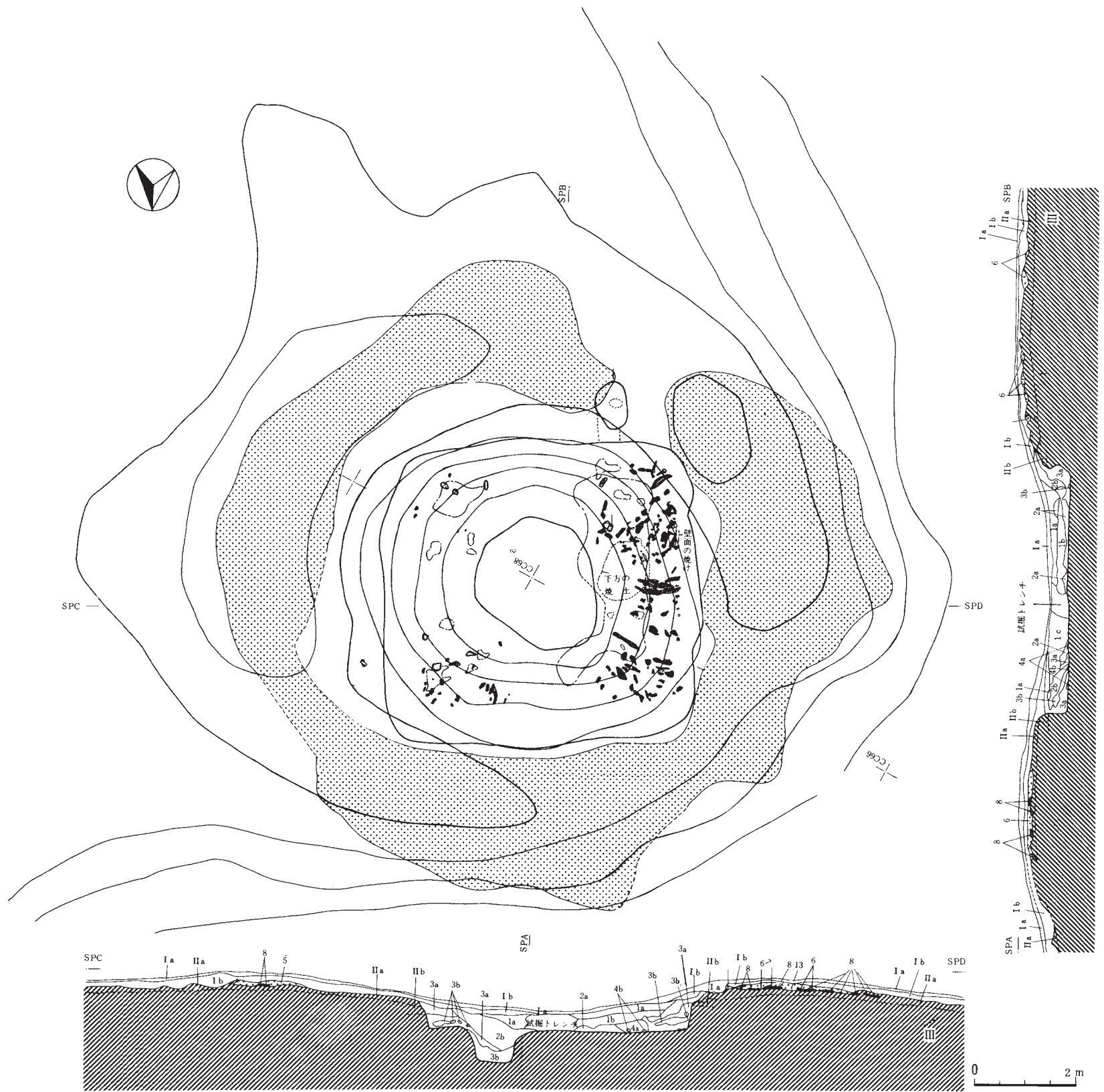
【第1号住居跡 Pit計測表】

Pit No.	規模	深さ	Pit No.	規模	深さ
1	126×120	63	2	54×52	25
3	113×88	43	4	26×25	10
5	36×12	9	6	14×8	2
7	34×23	8	8	72×32	9
9	38×30	9	10	24×15	11
11	46×19	10	12	56×46	9
13	26×23	6			

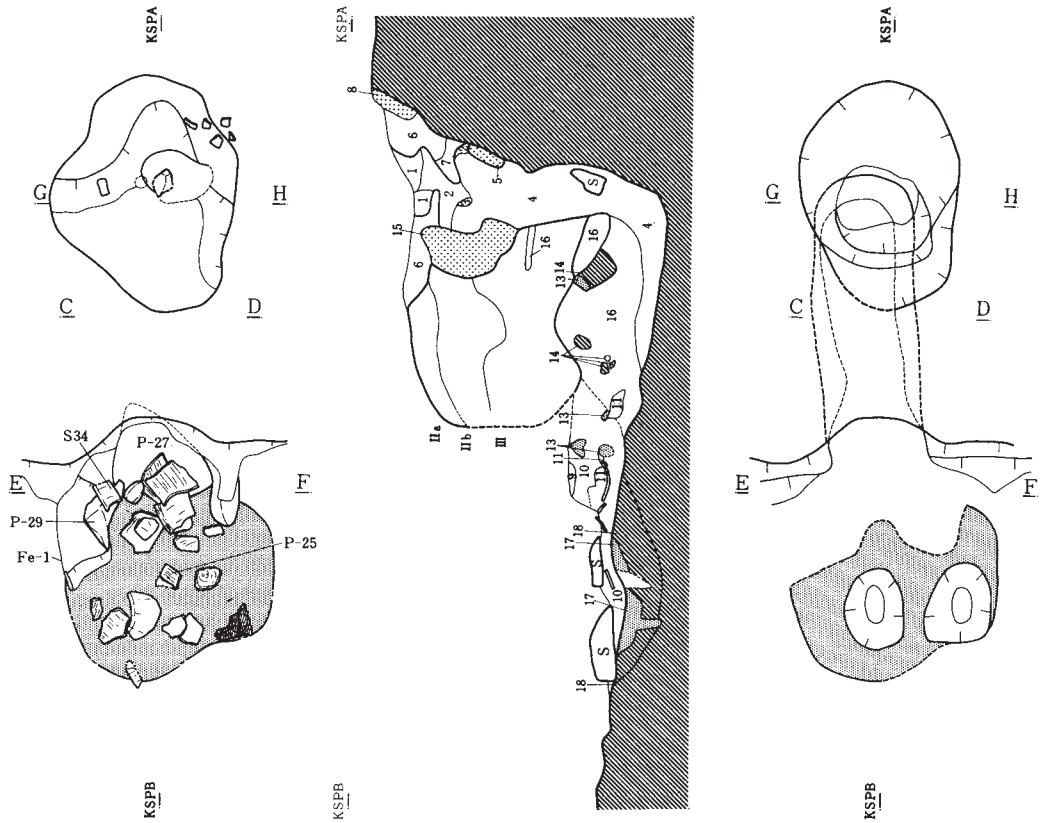
【第1号住居跡】注記

層位	土色	土質	備考
1a層	10Y R 2/1 黒色	埴土質	ローム粒中量
1b層	10Y R 1.7/1 黒色	〃	〃 少量
1c層	10Y R 2/1 黒色	〃	〃 少量
2a層	10Y R 2/1 黒色	〃	〃 多量
2b層	10Y R 3/2 黒褐色	〃	多量
3a層	7.5Y R 2/2 黒褐色	〃	多量 (50%)
3b層	5 Y R 4/6 赤褐色	〃	細粒ロームの集合体
4a層	10Y R 4/4 褐色	〃	ローム粒多量、焼土粒多量
4b層	8 Y R 4/6 褐色	〃	細粒焼土の集合体
5層	10Y R 5/6 黄褐色	〃	(Ⅲ層の土)
6層	10Y R 3/4 暗褐色	埴土質	
7層	10Y R 3/1 黒褐色	〃	土色土少量、炭化物粒中量
8層	10Y R 6/6 明黄褐色	シルト	細粒のシルトの集合 (灰褐色火山灰)

第70図 第1号住居跡実測図



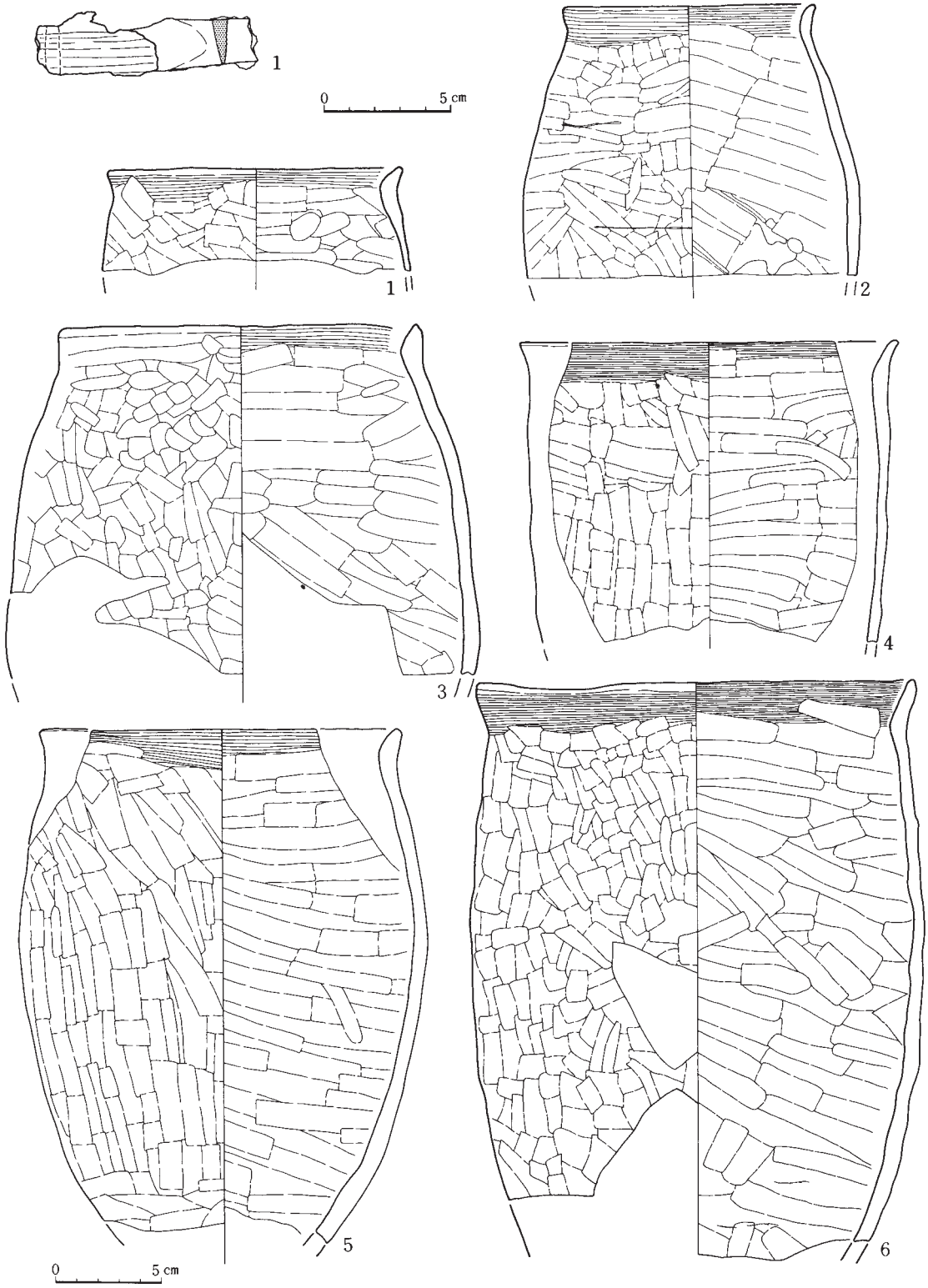
第70図 第1号住居跡



〔第1号カマド〕 注 記

層位	土	色	土質	備 考
1層	10Y R 3/2	黒褐色	埴土質	ローム粒中量
2層	10Y R 2/1	黒褐色	"	" 少量
3層	10Y R 2/1	黒褐色	"	" 多量
4層	10Y R 3/4	暗褐色	"	" 多量 (50%)
5層	10Y R 5/8	黄褐色	"	(III層の土)
6層	10Y R 2/3	黒褐色	"	ローム粒中量
7層	10Y R 3/4	暗褐色	"	(II a層と似る)
8層	10Y R 5/8	黄褐色	"	堅いローム粒の集合体
9層	2.5Y R 4/8	赤褐色	"	焼土
10層	7.5Y R 4/4	褐色	"	ローム粒多量
11層	7.5Y R 2/2	黒褐色	埴土質	ローム粒多量
12層	7.5Y R 5/8	明褐色	"	やや焼けたローム粒の集合体
13層	10Y R 3/4	暗褐色	"	堅い焼土粒の集合体
14層	10Y R 5/8	黄褐色	"	ロームの集合体
15層	10Y R 3/4	暗褐色	"	黄白色ローム多量
16層	10Y R 3/4	暗褐色	"	ローム粒多量
17層	3 Y R 4/6	赤褐色	"	焼土
18層	10Y R 5/8	黄褐色	"	(III層の土)

第72図 第1号住居跡かまど



第73図 第1号住居跡出土遺物実測図

第2号住居跡（第74図、第75図）

位置と確認 CA - 73・74、CB - 72・73・74、CC - 73・74グリットから約65cmほどの窪みを確認した。

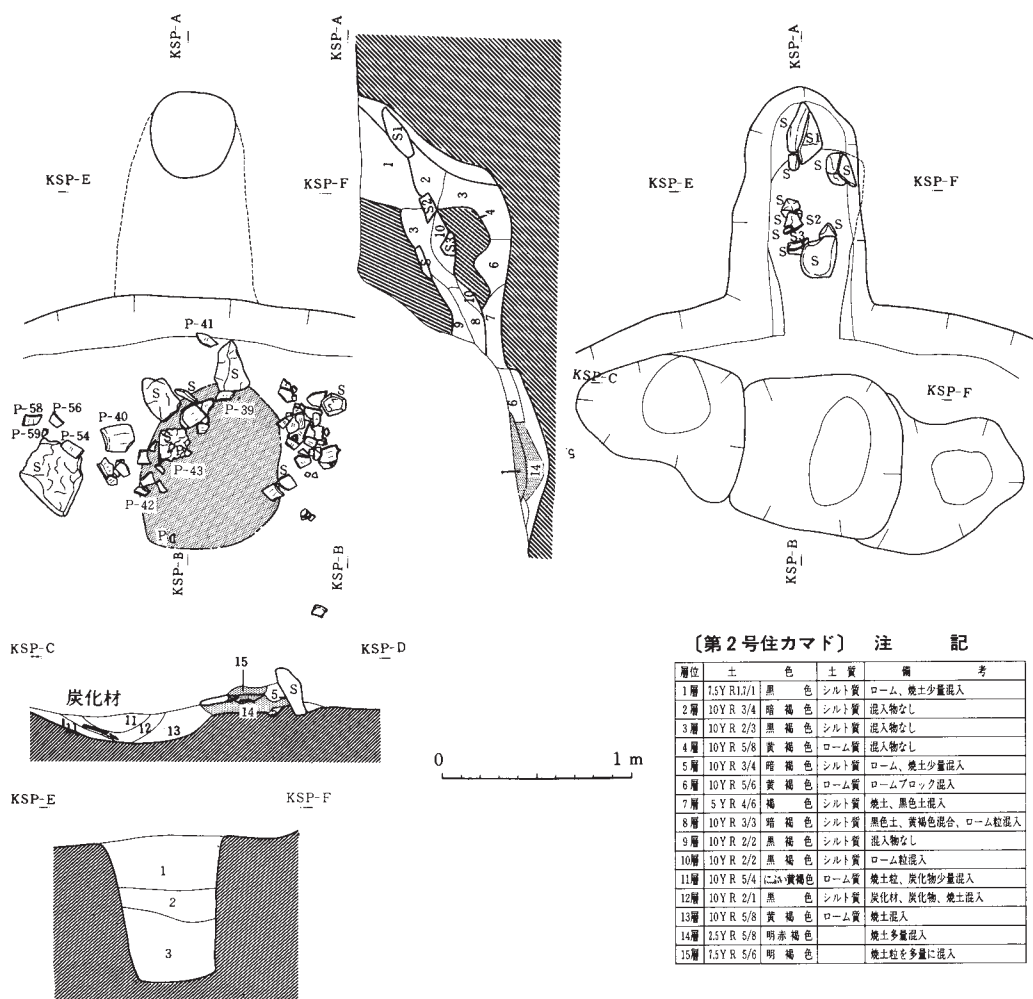
平面形と規模

平面形	主 軸	規 模								
		壁 長 (m)				壁 高 (cm)				面積(m ²)
方 形	S - 9° - W	南	西	北	東	南	西	北	東	
		4.8	4.6	4.7	4.5	64	90	102	74	

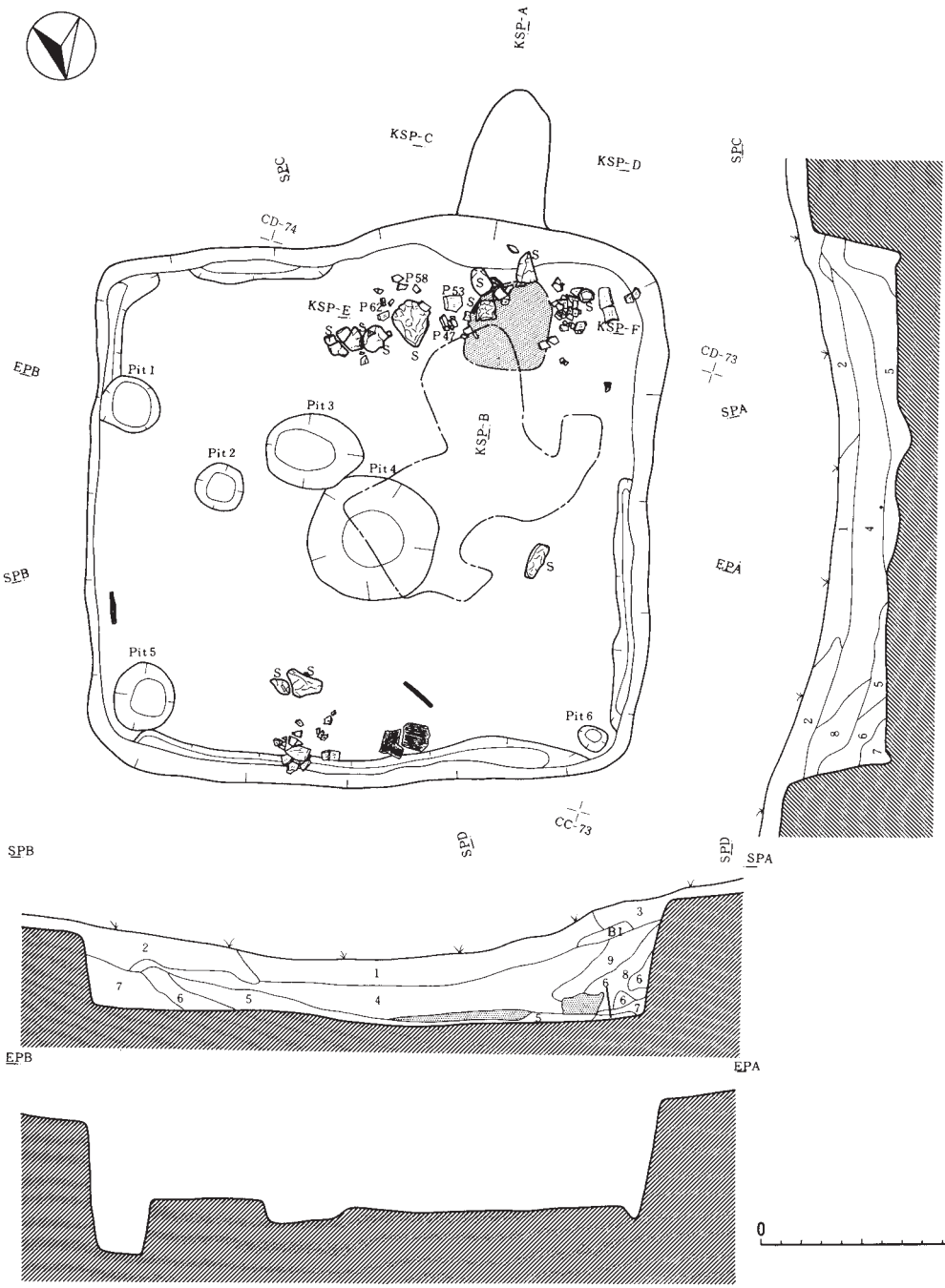
堆積土 9層に区分できた。大別すると黒色土、黒褐色土、暗褐色土、褐色土で西壁の中央で焼土層を検出した。中央部分まで黒褐色土が堆積し、壁側では崩落があり逆放物線状を呈し、自然堆積である。

壁 南壁が床面からやや緩く立ち上がり、ほかは垂直に近い立ち上がりである。

床 かまど周辺は堅く締まっているが、ほかは柔らかである。ほぼ平坦である。



第74図 第2号住居跡かまど実測図



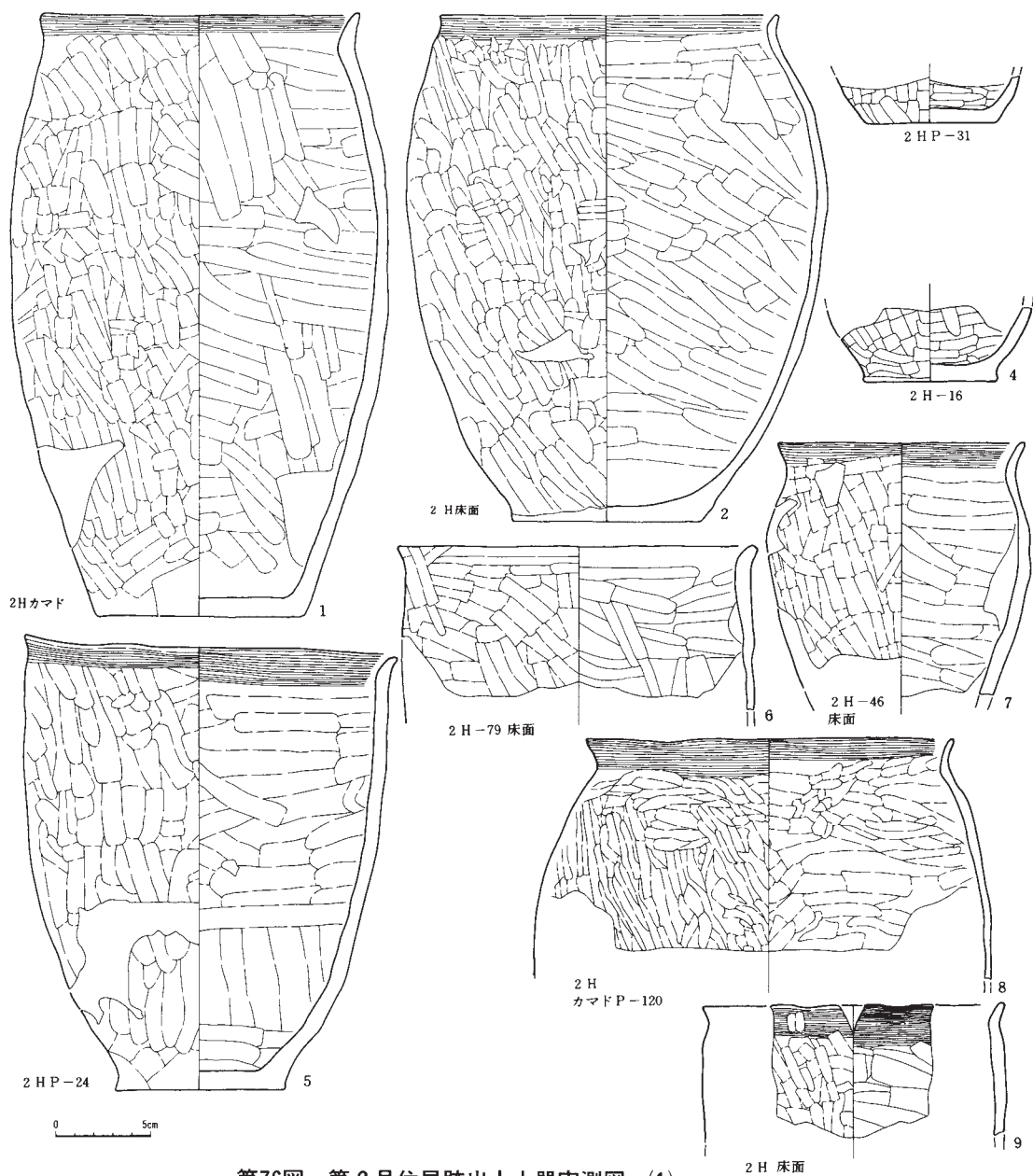
〔第2号住居跡〕 注 記

層位	土色	土質	備考	層位	土色	土質	備考
1層	10 Y R 1.7/1	黒色	シルト質 混入物なし	7層	10 Y R 4/4	褐色	シルト質 炭化物を混入
2層	10 Y R 3/3	暗褐色	シルト質 ローム混入	8層	10 Y R 2/3	黒色	シルト質 ロームを少量に混入
3層	10 Y R 2/2	黒褐色	シルト質 混入物なし	9層	2.5 Y 2/1	黒色	シルト質 焼土を少量混入
4層	N 1.5/1	黒色	シルト質 ローム微塵に混入	10層	5 Y R 2/4	暗暗赤褐色	焼土
5層	10 Y R 2/2	黒褐色	シルト質 炭化物、ローム粒を少量に混入	B1層	7.5 Y R 2/3	暗褐色	シルト質 ローム少量混入
6層	10 Y R 3/4	暗褐色	シルト質 混入物なし				

〔第2号住居跡 Pit計測表〕

Pit No.	規模	深さ
1	54×46	50
2	41×52	6
3	66×86	18
4	112×114	10
5	60×56	7

第75図 第2号住居跡実測図

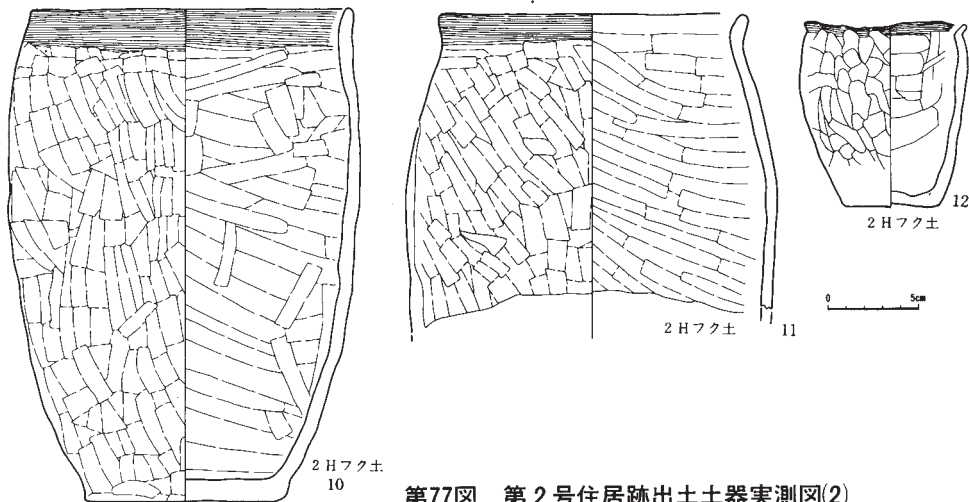


第76図 第2号住居跡出土土器実測図一(1)

壁溝 すべての壁下に認められるが連続しない。幅は上端が10～25cm、下端が5～16cmで深さは5～12cmである。

ピット 住居跡内から5個検出(第74図)した。pit - 1からは、土師器片が2片出土した。pit - 2～5は、浅皿状である。

かまど 南壁の西寄りに位置する。煙道部は地山を掘り込で再構築されたものである。一度目はトンネル式で作られ、二度目は半地下式に変えられているが、二度目の煙道部は遺存状態はあまり良好でなく、シルト岩が散在していた。燃烧部分の周辺には、シルト岩及び土



第77図 第2号住居跡出土土器実測図(2)

第22表 第2号住居跡出土土器観察表

遺物番号	種類	器種	器部	法 量(cm)			調 整			胎 土 (mm)	焼 成	色 調	備 考	出土位置
				口径	底径	器高	口縁部	胴 部	底辺部					
1	土師器	甕形	完形	17	(11)	32	強いヨコナテ	ヘラナテ	ヘラナテ	砂粒(2~3)	良好	5YR7/3 5YR6/6		カマドP-括
2	"	"	"	18~20	10	27	"	"	"	砂粒(2~3)	"	5YR6/6 5YR6/4		床面
3	"	"	胸底辺	—	7	—	—	"	ヘラナテ	石英(多2) 長石(多2)	"	2.5YR5/4 5YR5/4	内面煤・炭	P-31
4	"	"	"	—	7	—	—	"	強いヘラナテ	"	"	7.5YR5/3 10YR4/1		P-16
5	"	"	半完形	20	8.5~9	24~25.5	"	"	"	砂 (1~2) 石英(若1~2)	"	5YR6/3 7.5YR7/4		P-24床面
6	"	"	口縁胴	(21)	—	—	—	"	—	砂粒(多2~4) 石英(若)	"	2.5YR5/8 10YR5/6		床面
7	"	小型甕	"	13	—	—	強いヨコナテ	"	—	"	"	7.5YR7/6 5YR6/6		床面P内土壌
8	"	甕形	"	(20)	—	—	"	"	—	砂粒(多2)	"	7.5YR6/4 7.5YR5/6		カマドP-120 P-122
9	"	"	"	(16)	—	—	"	"	—	砂粒(多1) 石英(若)	"	5YR5/4 5YR5/3		床面
10	"	"	完形	18	10.5	27	"	"	強いヘラナテ	砂粒(多3)	"	5YR5/4 5YR6/3		覆土
11	"	"	口縁胴	(17)	—	—	"	"	—	砂粒(多1)	"	7.5YR6/6 7.5YR6/4		床面P-40 覆土
12	"	小型甕	完形	9	10~10.3	5	"	ユビナテ	強いヘラナテ	砂 (多1~3) 石英(2~3)	良・堅	2.5YR6/6 10YR7/4		覆土

※煤・炭は煤状炭化物の略

師器が散在していた。袖石は右側だけに残存していた。燃烧部の焼土範囲は、80×75cmの方形を呈し、断面は浅皿状で中央の厚さは10cmである。

出土遺物 かまど内及び周辺からは、第76図1・8、床面からは、第76図2～7・9で、そのほか覆土内からも土師器片が数片出土した。(成田・佐藤)

第3号住居跡(第78~82図)

位置と確認 中央区の中ほどのBX-77・78、BY-77・78・79、BZ-78で、およそ直径8m深さ80cmほどに表土が窪む部分を確認した。

平面形と規模

平面形	主 軸	規 模								
		壁 長 (m)				壁 高 (cm)				面積(m ²)
長 方 形	S-1f-E	南	西	北	東	南	西	北	東	
				5.44	4.50	5.33	4.43	52	68	84

竪穴周囲 南側を除く周囲に、幅1.5mほどの、層に類似する火山灰質土（12層）がとりまいていた。この層の下には明黄褐色シルト質の水山灰層（灰褐色・火山灰15層）が炭化物まじりの黒土色を狭んで堆積しており、さらにやや青みがかってやや粗粒のシルト質の火山灰（青灰色火山灰B層）もわずかにみられた。この下には a層より明色の暗褐色土層（13層）があった。この下部の a層は標準土層の a層よりかなり暗い色調である。東側の12層の内部には土師器の破片の密集する部分が見られた。

堆積土 壁際に 層類似の土、中央にレンズ状の黒色土がある。自然堆積と思われる。焼土層は焼土と黒色土が斑状に混る層（・5 a層）で、住居の北西側に床面直上から20cm上までの間に堆積し、かまどの周囲と南東隅側には床面直上に、径1～10mmの堅い焼土粒・火山灰質土・弱色土・炭化物の混じりあった層（・10層）があった。南壁寄りの、の間には、径1～10mmの堅い焼土粒と黒褐色土の混在する非常に強く締った層（）がある。また主にはブロック状に堅い焼土粒が密集する層（）が見られた。の上には2～5cmの黒褐色土層を狭んで、堅く締った明黄褐色火山灰質粘土層（）が2～3cmの厚さで残っていた。

壁 ほぼ垂直に立ち上がっている。上部では、層を斜めに掘りこんでいる。

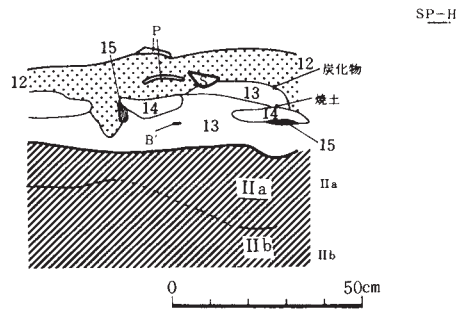
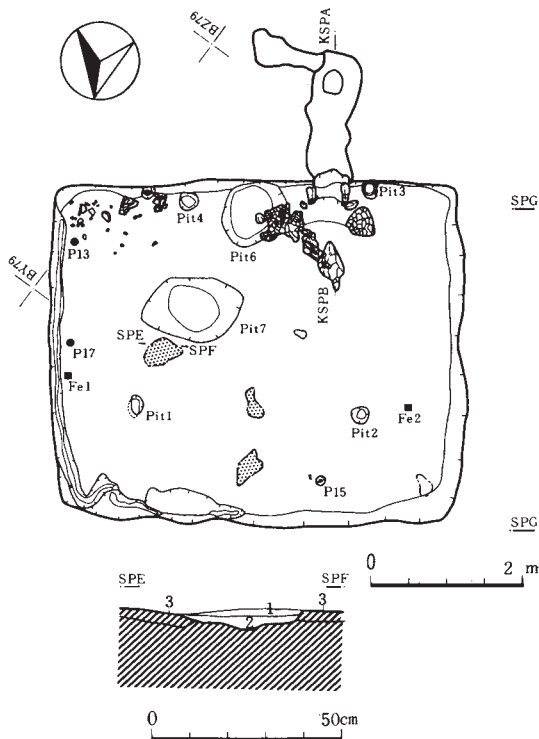
床 層まで掘りこみ、その上に 層類似の土と暗褐色土の混じった土（16層）が貼床となっている。

壁溝 東壁から北壁の東側にかけて、幅10～15cm深さ2～6cmに掘りこまれている。

ピット 7個検出した。ピット1～4が柱穴と思われる。

かまど 半地下式のもの、トンネル式のもの重複しており、半地下式の方が新しい。トンネル式の煙道は、燃焼部からほぼ水平に壁外へのび、煙出し直下でやや下降し、上方に立ちあがる。燃焼部は深さ8cmほどまで焼けている（17、18層）。半地下式のかまどの煙道は、緩く斜め上方に立ちあがっており、底面には 層類似の火山灰質土粒をしき（12層）天井部も同様の土（17層）により構築されている。煙道入口付近には、両側に扁平な礫（シルト岩）が立てられている。燃焼部周辺にも扁平な礫が倒れて遺存していた。この礫の下方の燃焼部一帯には甕形土師器の破片が多数あった。この土師器の直下に焼土層（9層）があり、10cmほどの厚さで広く残っていた。

出土遺物 かまどの崩落した礫の下から土師器窪の破片が多数出土した（5～8）。燃焼部の周辺には炭化物もみられた。北壁近くの西寄りには床面に置かれた状態でほぼ完形の土師器坏が遺存していた。また、南東隅の床面上から甕の破片や容器の一部と思われる炭化材が多数みられた。東壁近くの床からは紡錘車（1）、また西壁近くの床からも紡錘車の一部（2）が出土した。北壁際及び東壁・西壁際の北寄りの床面直上ないし15cmほど上方から炭化材が多数出土した（第79図）。竪穴外の周堤の上部及び内部からも甕や礫が出土した（10）。また、



〔第3号住焼土〕 注 記

層位	土 色	土 質	備 考
1層	4 Y R 4/8 黒 褐 色	埴土質	堅い焼土粒の集合体
2層	5 Y R 4/8 赤 褐 色	〃	微粒焼土粒の集合体
3層	10 Y R 2/2 黒 褐 色	〃	ローム粒多量・貼床土

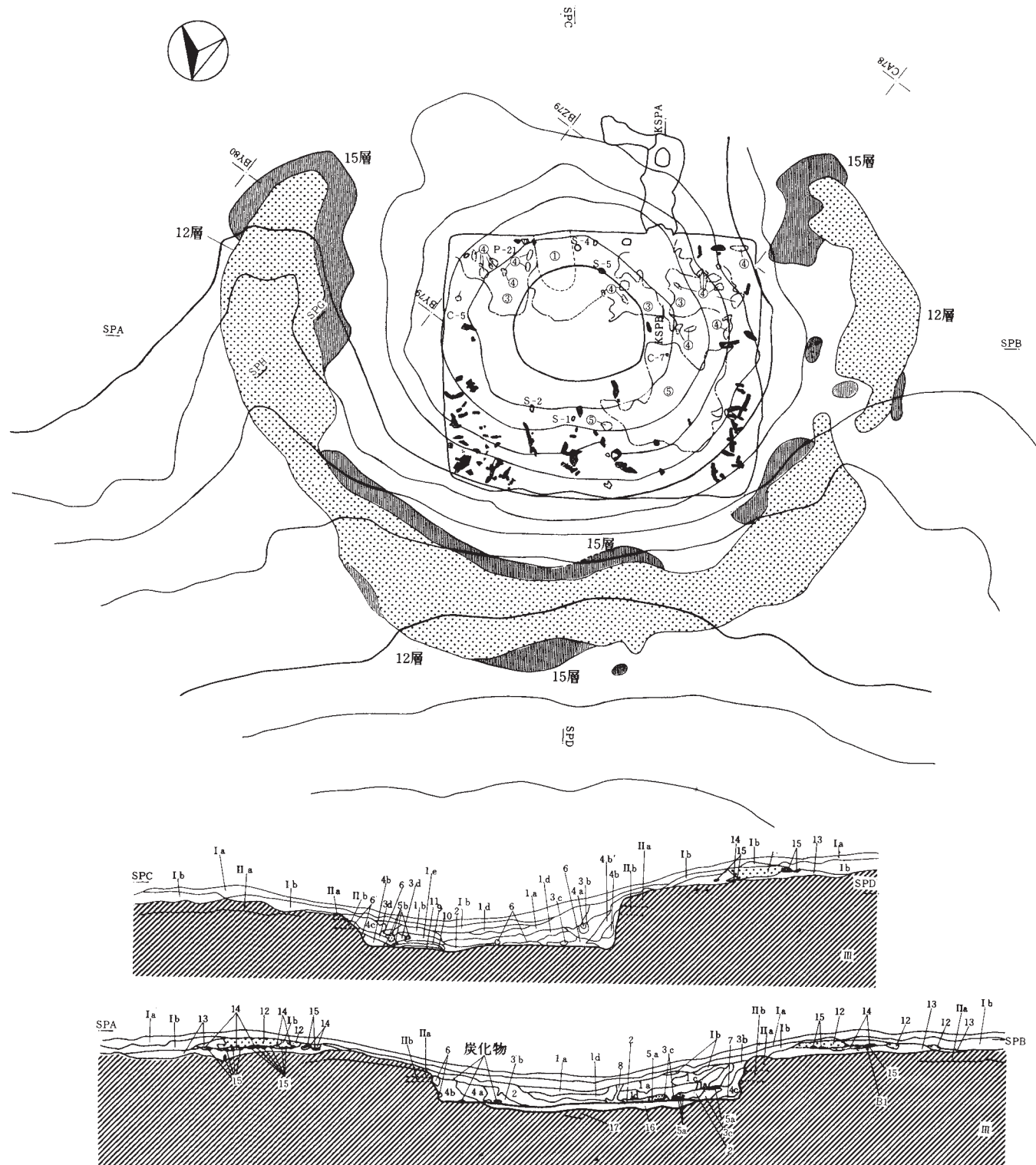
〔第3号住居跡 Pit計測表〕

Pit No.	規 模	深 さ	Pit No.	規 模	深 さ
1	26×16	36	2	25×22	59
3	24×20	42	4	18×16	27
5	138×80	8	6	93×76	33
7	28×24	10			

〔第3号住カマド〕 注 記

層位	土 色	土 質	備 考
1層	10 Y R 2/1 黒 色	埴土質	
2層	10 Y R 2/3 黒 褐 色	〃	ローム粒少量
3層	10 Y R 2/3 黒 褐 色	〃	〃 中量・焼土粒多量
4層	10 Y R 3/3 暗 褐 色	〃	〃 中量
5層	10 Y R 3/4 暗 褐 色	〃	〃 多量
6層	10 Y R 2/2 黒 褐 色	〃	〃 多量・焼土粒多量
7層	10 Y R 4/3 にぶい黄褐色	〃	〃 の集合体
8層	10 Y R 3/3 暗 褐 色	〃	ローム粒中量・焼土粒少量
9層	7.5 Y R 4/6 褐 色	〃	粘土質焼土の集合体
11層	7.5 Y R 3/4 暗 褐 色	〃	焼けたローム粒の集合体
12層	7.5 Y R 5/6 明 褐 色	〃	11層と同じ土の焼けていない部分
13層	10 Y R 3/4 暗 褐 色	〃	ローム粒少量
14層	10 Y R 4/6 褐 色	〃	ローム粒多量
15層	7.5 Y R 3/3 暗 褐 色	〃	
16層	5 Y R 4/6 赤 褐 色	〃	堅い焼けたロームの集合体
17層	5 Y R 4/8 赤 褐 色	〃	19層の強く焼けたもの
18層	7.5 Y R 4/6 褐 色	〃	19層の弱く焼けたもの
19層	7.5 Y R 5/6 明 褐 色	〃	暗褐色土少量
20層	10 Y R 4/6 褐 色	〃	〃 多量

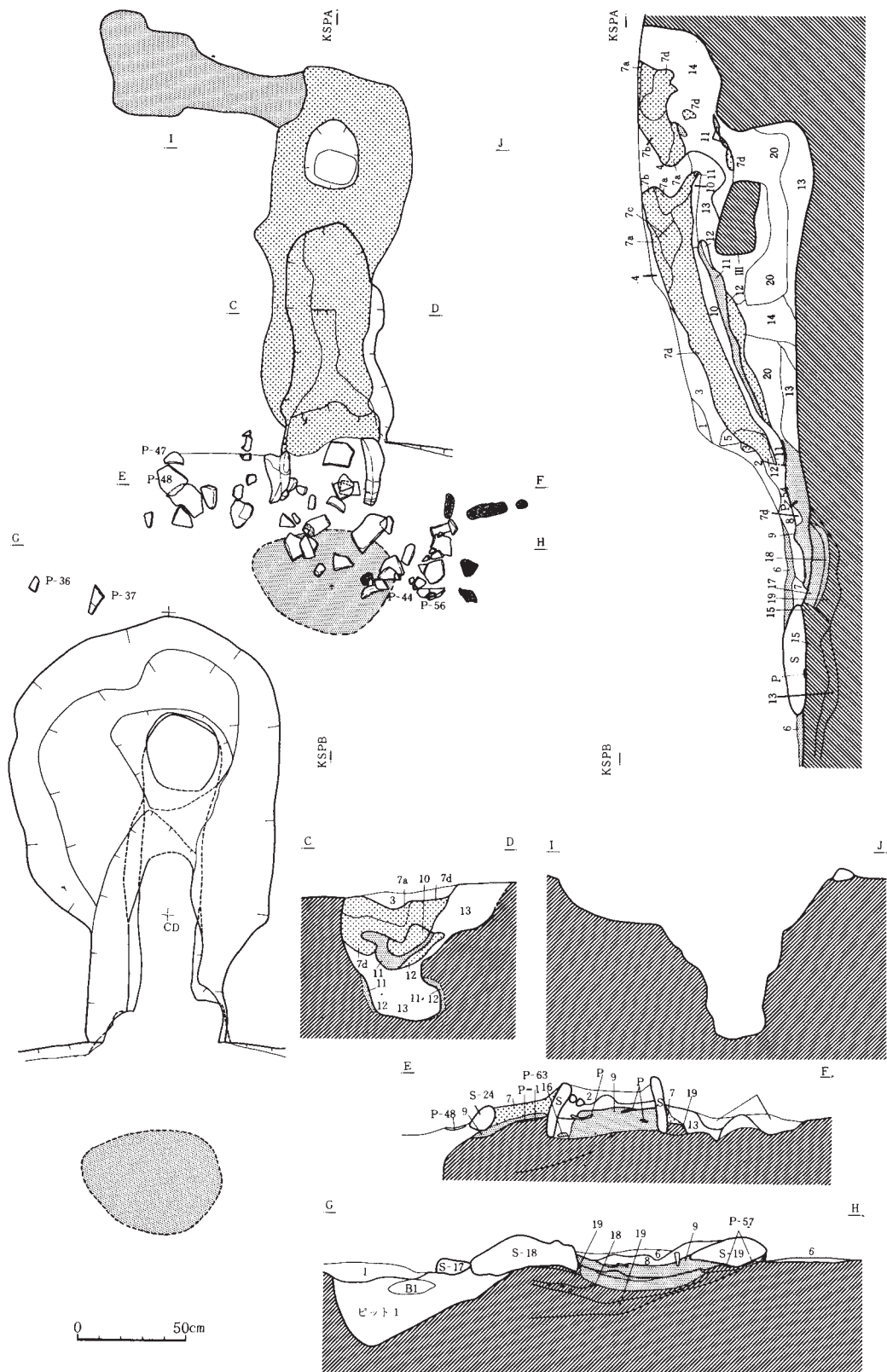
第78図 第3号住居跡実測図・周堤内遺物出土状態



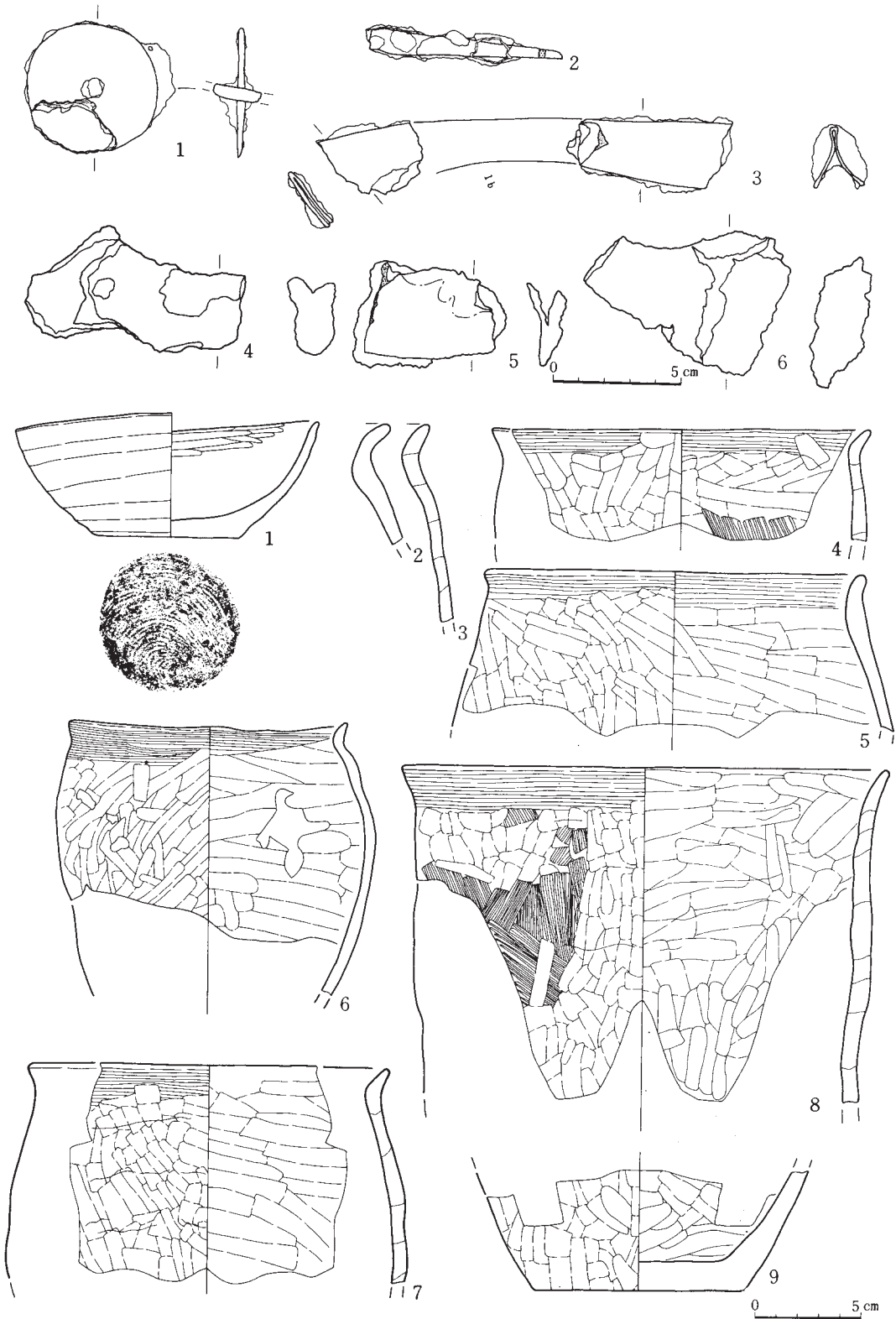
〔第3号住居跡〕 注 記

層位	土色	土質	備考
1 a層	10Y R 2/1 黒色	埴土質	ローム粒少量
1 b層	10Y R 4/4 褐色	"	黒褐色土が斑状に混在
1 c層	10Y R 4/4 褐色	"	ローム粒少量 黒色土混入
1 d層	10Y R 1.7/1 黒色	"	" 少量
1 e層	10Y R 2/1 黒色	"	焼土粒少量
2層	10Y R 2/2 黒褐色	"	ローム粒多量
3 a層	10Y R 3/3 暗褐色	"	" 少量 黒褐色土斑状に混在
3 b層	10Y R 2/3 黒褐色	"	" 多量
3 c層	10Y R 2/1 黒色	"	黄褐色土粒 斑状に混入
3 d層	10Y R 4/3 にぶい黄褐色	"	ローム粒少量 黒褐色土斑状に混在
4 a層	10Y R 3/3 暗褐色	"	" 多量
4 b層	10Y R 4/4 褐色	"	" 中量
4 b層	10Y R 4/4 褐色	"	4 bよりしまり粘り強い
4 c層	10Y R 5/8 明黄褐色	"	にぶい黄褐色土斑状に混在
5 a層	10Y R 2/2 黒褐色	"	焼土粒多量
5 b層	10Y R 3/3 暗褐色	"	ローム中量 堅い焼土粒多量
6 a層	10Y R 5/8 黄褐色	"	ローム粒の集合体
6 b層	10Y R 5/8 黄褐色	"	" 6 aよりしまり強い
7層	10Y R 3/3 暗褐色	"	ローム微粒多量 (50%)
8層	10Y R 2/1 黒色	"	明黄褐色土多量
9層	10Y R 2/1 黒色	"	焼土粒多量
10層	10Y R 2/2 黒褐色	"	明赤褐色焼土多量混入
11層	10Y R 3/4 暗褐色	"	黄褐色土斑状に混在
12層	10Y R 5/6 黄褐色	"	(III層の土)
13層	10Y R 3/4 暗褐色	"	
14層	10Y R 3/1 黒褐色	"	黒色土少量 炭化物粒中量
15層	10Y R 6/6 明黄褐色	シルト	細粒のシルトの集合 (灰褐色火山灰)
16層	10Y R 5/6 黄褐色	埴土質	暗褐色土が斑状に混在
17層	7.5Y R 5/6 明褐色	"	(III層) 20mm大の斑状に赤い
B 1層	2.5Y R 6/4 にぶい黄色	シルト	やや粗粒のシルトの集合 (青灰色火山灰)

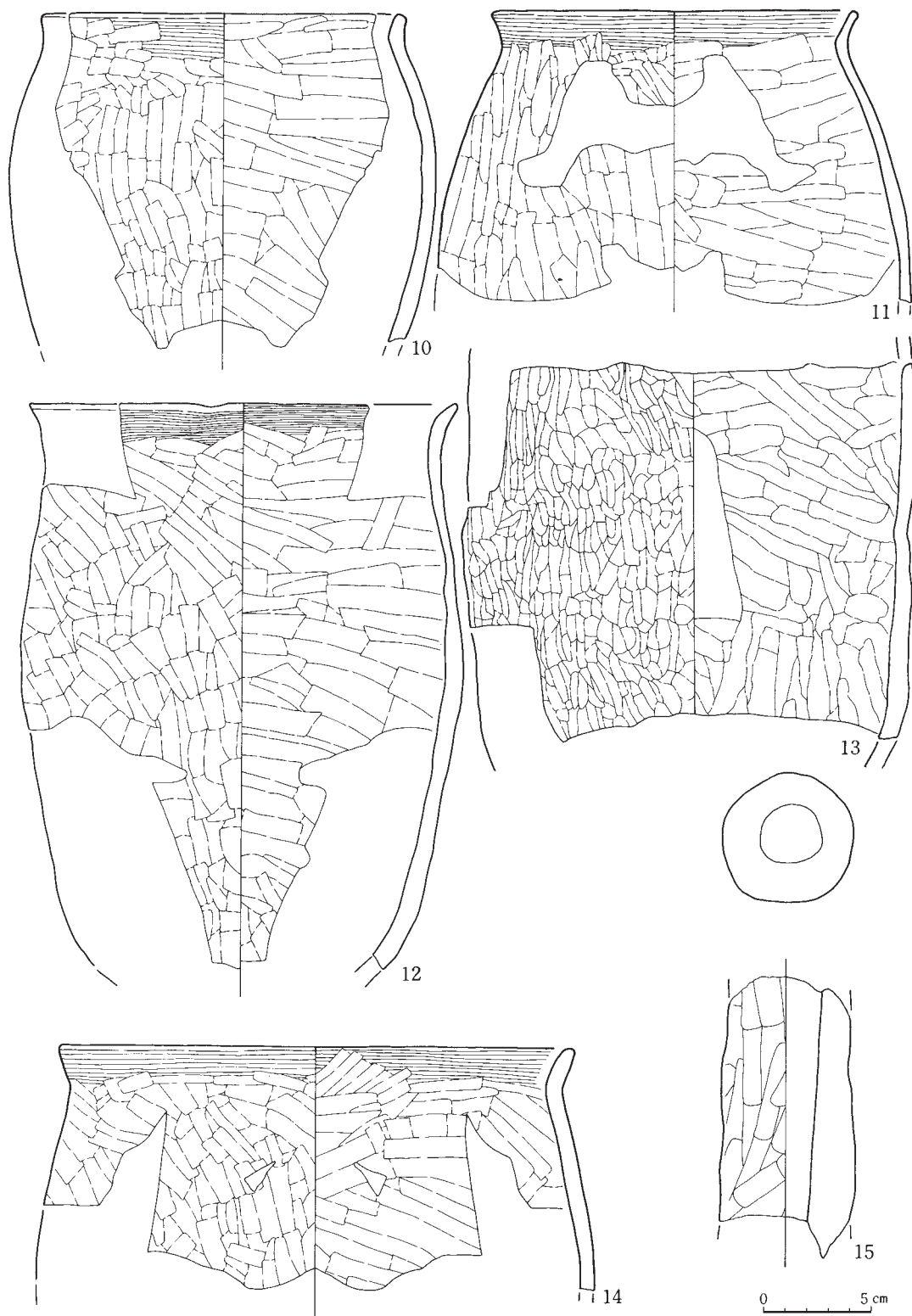
第79図 第3号住居跡確認状況・遺物分布図



第80図 第3号住居跡かまど実測図



第81図 第3号住居跡出土鉄製品・土器実測図(1)



第82図 第3号住居跡出土遺物実測図(2)

第23表 第3号住居跡出土遺物観察表

遺物 番号	種類	器種	器部	法 量(cm)			調 整			胎 土	焼 成	色 調	備 考	出土位置
				口径	底径	器高	口縁部 (ロクロ) ミガキ	胴 部 (ロクロ) ミガキ	底 辺 部					
1	土師器	坏	口縁	14	6.8	5.8			ケズリ?	砂粒含む密	良好	5YR7/6 6/6	底面回転糸切り痕	床面P-15
2	"	甕	"	(18)			横ナデ	ヘラナデ?	横ナデ	多少の砂粒を含むが密	"	5YR6/6 5/6		周境P-41
3	"	"	"	(16)			"	ケズリ	ヘラナデ	砂粒多量粗	"	7.5YR6/6 6/4	変色し非常に脆い	カマド
4	"	"	"	(18)			"	ヘラナデ	ケズリ	砂粒多 石英粒若干 良質粘土		5YR4/2 10YR6/4	外面に煤状炭化物付着	4層P-21
5	"	"	"	(18)			"	ケズリ	ヘラナデ	砂粒が多、石英粒若干含まれる。	良好	7.5YR6/4 5YR6/6		カマド 床面P-57
6	"	"	"	12~ 13.6			"	ヘラナデ	ヘラナデ	砂粒が混入	"	2.5YR5/8 5/6	変色し脆くなっている部分がある	カマド
7	"	"	"	(17)			横ナデ	"		砂粒が多、石英粒若干含まれる。	"	7.5YR6/6 7/4	変色し脆くなっている	カマドP-48
8	"	"	"	(23)			横ナデ ヘラナデ	ハケ目 ヘラナデ	ヘラナデ →ケズリ	砂粒が多 石英粒若干 良質粘土	"	7.5YR6/4 5/3		カマドP-49
9	"	"	底面	(10)				ヘラナデ	ヘラナデ	2mm大の砂粒多量、底部に石英粒	"	10YR4/2 6/3	底部に多量の砂粒付着	カマド堀方A 中央南床下 煙道堀方
10	"	"	口縁	(17)			横ナデ ヘラナデ	"		細砂粒多 砂っぽい	"	7.5YR6/3 5YR6/2		周境P-44
11	"	"	"	(17)			横ナデ 横ナデ	ケズリ ヘラナデ		砂粒多少含むが密	"	7.5YR6/6 5/4	外面煤状炭化物が薄く付着	カマドP-54 P-51 床面P-56・60
12	"	"	"	20			"	"		砂粒多量 石英粒若干 良質粘土	"	7.5YR6/4 1.7/1 5YR7/4 4/2	煤状炭化物口唇へラナデ平垣になっている部分あり	
13	"	"	胴部					ヘラナデ	ヘラナデ	2mmの砂粒混入	"	7.5YR7/4 3/3		カマド
14	"	"	口縁	(24)			横ナデ 横ナデ	ケズリ ヘラナデ		3mm大の砂粒多	"	5YR5/4 7.5YR5/3		ビット上面 P-37・45、I 層カマド直上
15	"	羽口	胴部					ケズリ			"	7.5YR7/4		カマドP-50

第24表 第3号住居跡出土鉄製品計測表

挿 図 番 号	図 版 番 号	種 類	法 量(cm)				出 土 地 点 (層 位)	備 考
			法 径	厚	軸 長	軸 幅		
1	第81図	紡錘車	5.39	0.42	(1.96)	0.39	床Fe-1	
2	"	紡錘車			(7.69)	0.42	床Fe-2	
3	"	鋤 先					南東周境上	
4	"	鋤 先					I 層	
5	"	鋤 先						
6	"	鋤 先					I 層	

南東側の周堤上や覆土上の・層から鋤先が出土した(3~6)。

(坂本)

第4号住居跡(第84図、第85区)

位置と確認 BV-82・83・84、BU-83、BW-83から深さ約60cmの窪みを確認した。

平面形と規模

平面形	主 軸	規 模								
		壁 長 (m)				壁 高 (cm)				面積(m ²)
長方形	S-8°-E	南	西	北	東	南	西	北	東	
				6.0	4.7	5.8	4.2	50	102	115

堆積土 大別すると黒褐色土、暗褐色土、暗黄褐色土の層で、このほかに第 層と同質のものと焼土が西壁から住居跡のほぼ中央部分まで部分的に堆積していた。また、西側の床面直上には炭化材が散在していた。焼土と炭化材の堆積状況から焼失したものと考えられる。

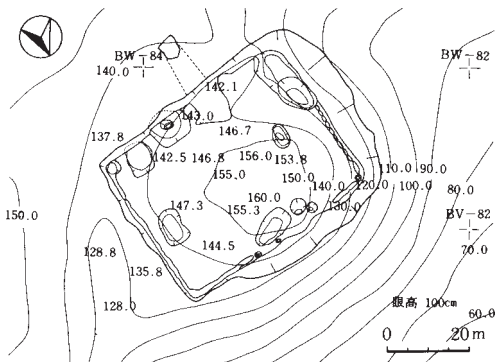
壁 南壁と東壁は、ほぼ垂直に立ち上がっているが、北壁と西壁は、柔らかく、緩く傾斜している。覆土の堆積状況から崩落のためとも考えられる。

床 北壁に沿った部分は、柔らかいがほかは堅く締っている。

壁溝 東壁・北壁(中央部分を除く)・西壁(南半部分を除く)の壁下に検出した。幅は、上端が8~10cm、下端が4~6cmで深さは5~21cmである。

ピット 住居跡内から検出したピットは、第84図のように13個である。このうち柱穴と思われるのは、Pit-5、Pit-6、Pit-9~13であるが、Pit-2もセクションベルトからはずれた部分に柱痕と思われる黒色土が存在していたもので、柱穴とも考えられる。Pit-4は浅皿状を呈しており、中央部に焼土が存在するものである。Pit-1、Pit-3、Pit-7、Pit-8は、住居跡に伴うものである。

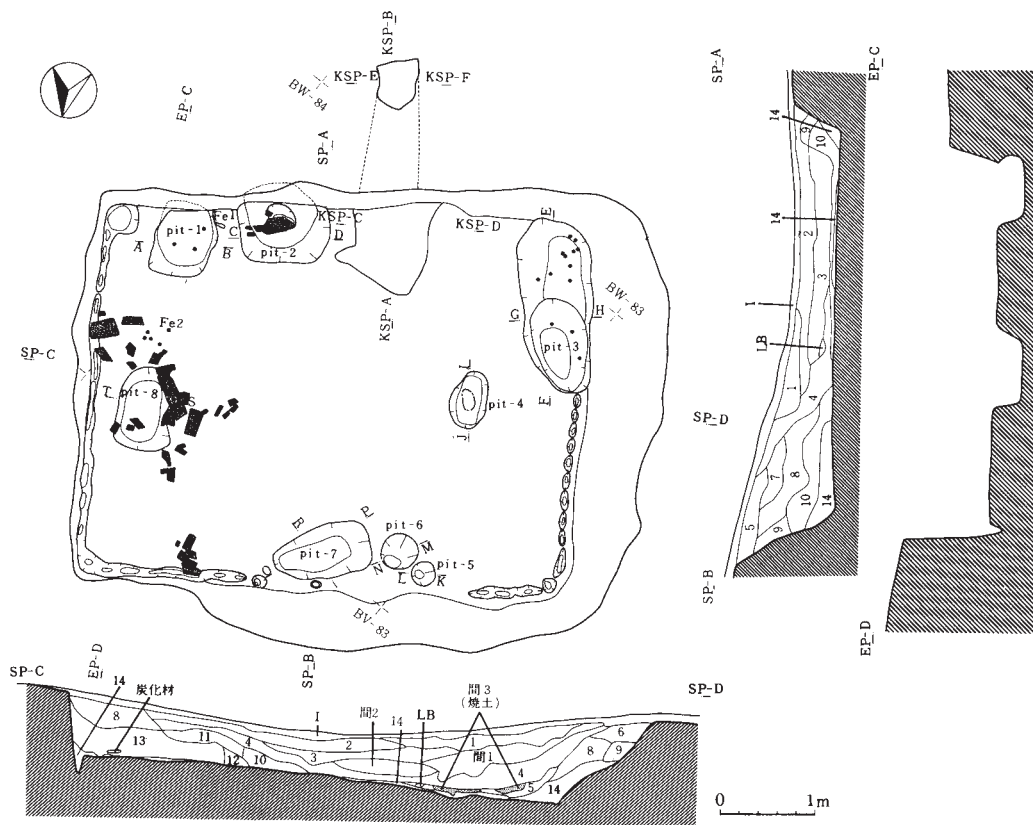
かまど 南壁のほぼ中央部に構築されているが、かまど本体部分は残存せず、焼土部分の周辺にはシルト岩及び土師器破片が散在していた。焼土範囲は、径45cmの円形を呈し、断面



第83図 第4号住居跡確認状況実測図

は浅皿状で中央の厚さは10cmである。煙道は天井部崩落のため不明瞭であるが、煙出し部の石組が良好に残存していた。

出土遺物 かまど内及び周辺からは、第86図2~3のような土師器が出土した。床面に密着して出土した遺物は、第87図3の刀子で、住居跡内西側部分から多数出土した炭化物(第84図)は、床直上から出土した。これらとほぼ同じ



【第4号住居跡】 注 記

層位	土色	土質	備 考
1層	10Y R 2/2 黒褐色	シルト質	遺人物なし
2層	10Y R 2/2 黒褐色	シルト質	遺人物なし
3層	10Y R 2/1 赤褐色	シルト質	遺人物なし
4層	10Y R 3/2 赤褐色	シルト質	炭化物、焼土粒若干混入
5層	10Y R 3/4 暗褐色	シルト質	炭化物、焼土粒混入
6層	10Y R 3/3 暗褐色	シルト質	暗褐色土粒混入
7層	10Y R 3/3 暗褐色	シルト質	暗褐色土粒混入
8層	10Y R 3/3 暗褐色	シルト質	暗褐色土粒混入
間層1層	10Y R 6/8 明黄褐色	ローム質	遺人物なし
間層2層	10Y R 6/8 明黄褐色		火山灰
間層3層	5Y R 4/4 緑黄色		焼土、炭化物混入
9層	10Y R 4/6 褐色	シルト質	ローム混入
10層	10Y R 3/3 暗褐色	シルト質	炭化物、焼土ブロック混入
11層	10Y R 3/3 暗褐色	シルト質	炭化物混入
12層	10Y R 3/3 暗褐色	シルト質	炭化物混入
13層	10Y R 4/4 褐色	シルト質	炭化物、炭化材混入
14層	10Y R 5/6 黄褐色	ローム質	褐色土混入、炭化材混入

【第4号住Pit 1】 注 記

層位	土色	土質	備 考
1層	10Y R 3/2 黒褐色	シルト質	炭化物多量混入
2層	10Y R 5/4 黄褐色	ローム質	炭化物若干混入
3層	10Y R 5/8 黄褐色	ローム質	混入物なし
4層	10Y R 3/8 暗褐色	シルト質	炭化物多量、ロームブロック混入
5層	10Y R 5/8 黄褐色	ローム質	ロームブロック多量混入

【第4号住Pit 2】 注 記

層位	土色	土質	備 考
1層	10Y R 3/3 暗褐色	シルト質	炭化材、焼土粒混入
2層	10Y R 5/6 黄褐色	ローム質	炭化物、焼土粒混入
3層	10Y R 5/8 黄褐色	ローム質	混入物なし
4層	10Y R 5/6 黄褐色	ローム質	炭化物多量、焼土粒若干混入
5層	10Y R 5/8 黄褐色	ローム質	ロームブロック混入

【第4号住Pit 3】 注 記

層位	土色	土質	備 考
1層	10Y R 2/1 赤褐色	シルト質	炭化物、焼土粒多量混入
2層	10Y R 4/6 褐色	シルト質	炭化物、ローム粒、焼土粒混入
3層	10Y R 4/4 褐色	シルト質	炭化物、焼土粒混入
4層	10Y R 4/4 褐色	シルト質	炭化物、焼土粒混入
5層	10Y R 5/8 黄褐色	ローム質	焼土ブロック混入

【第4号住Pit 4】 注 記

層位	土色	土質	備 考
1層	10Y R 2/1 黒褐色	シルト質	炭化物多量、焼土ブロック若干混入
2層	10Y R 3/3 暗褐色	シルト質	混入物なし

【第4号住Pit 5】 注 記

層位	土色	土質	備 考
1層	10Y R 5/6 黄褐色	ローム質	炭化物混入、焼土粒若干混入
2層	10Y R 5/8 黄褐色	ローム質	混入物なし

【第4号住Pit 6】 注 記

層位	土色	土質	備 考
1層	10Y R 5/6 黄褐色	ローム質	焼土粒、炭化物混入
2層	10Y R 5/8 黄褐色	ローム質	焼土粒混入

【第4号住Pit 7】 注 記

層位	土色	土質	備 考
1層	10Y R 5/6 黄褐色	ローム質	炭化物、焼土粒、ロームブロック混入
2層	10Y R 5/8 黄褐色	ローム質	ロームブロック混入

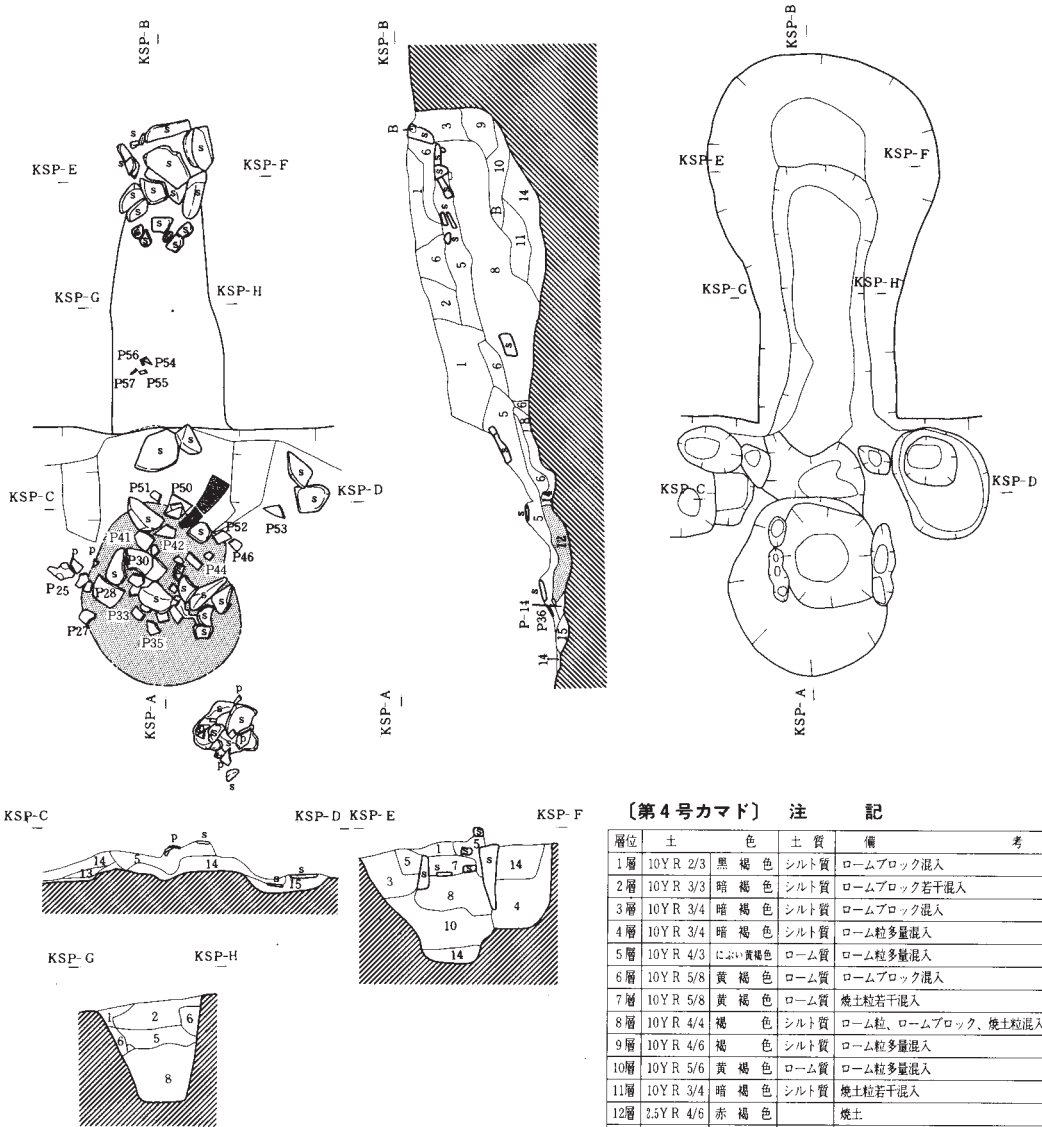
【第4号住Pit 8】 注 記

層位	土色	土質	備 考
1層	10Y R 4/6 褐色	シルト質	炭化物混入
2層	10Y R 5/8 黄褐色	ローム質	ロームブロック多量混入

【第4号住居跡 Pit 計測表】

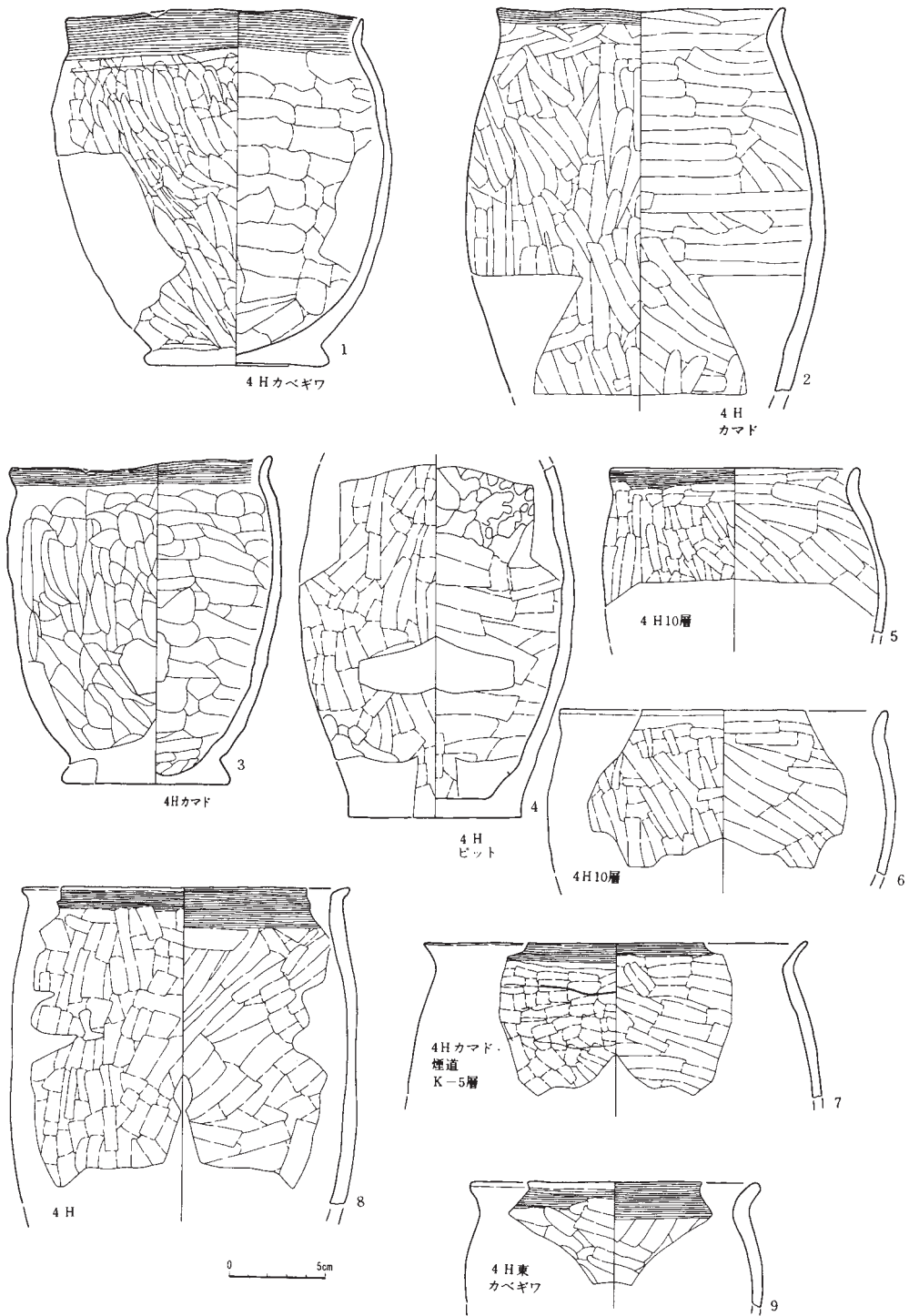
Pit No.	規模	深さ	Pit a	規模	深さ
1	70×84	41	2	96×86	67
3	180×72	30	4	62×38	8
5	24×26	16	6	40×40	24
7	106×58	28	8	90×50	29

第84図 第4号住居跡実測図

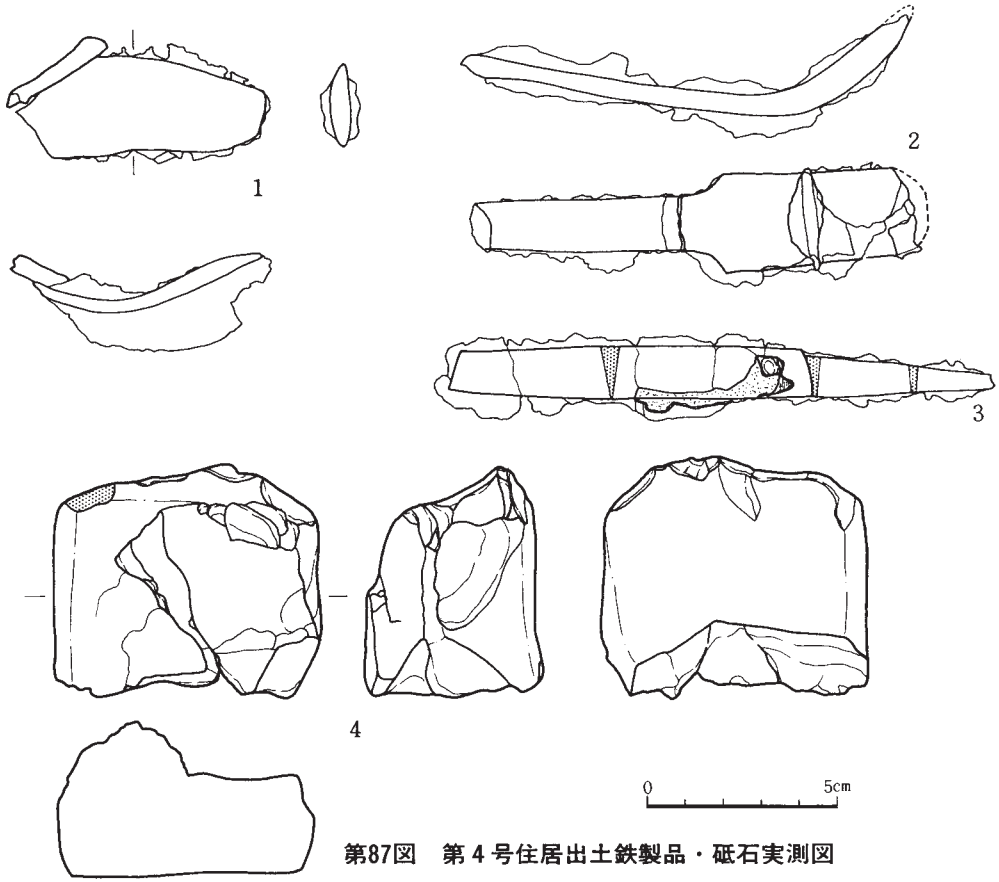


第85図 第4号住居跡かまど実測図

レベルから第86図 8 ~ 9 のような土師器が出土した。住居跡のピット 1 ~ 3 内からも第86図4のような土師器が出土した。覆土からは、第87図 1 ~ 2 のような鉄製品や第86図 5 ~ 6 のような土師器、が出土した。 (成田)



第86図 第4号住居跡出土土器実測図



第87図 第4号住居出土鉄製品・砥石実測図

第25表 第4号住居跡出土土器観察表

遺物番号	種類	器種	器部	法量(cm)			調整			胎土(mm)	焼成	色調	備考	出土位置
				口径	底径	器高	口縁部	胴部	底辺部					
1	土師器	甕形	半完形	15.5	10	18.5	強いヨコナテ	ヘラナテ	強いヘラナテ		良・堅	5 YR3/4 5 YR5/3		東カベギワ
2	"	"	口縁胴	(15)	—	—	"	ユビナテ	—	砂粒(2)	良好	5 YR6/6 2.5 YR6/6		カマド
3	"	小型甕	半完形	12~13.5	8.5	16.5 17.5	"	ヘラナテ	強いヘラナテ	砂粒(2~5)	良・堅	7.5 YR5/6 7.5 YR4/4	いびつ	カマド
4	"	甕形	胴底辺	—	(9)	—	—	"	"	砂粒(2)	良好	5 YR6/3 10 YR6/6		ビット
5	"	小型甕	口縁胴	13	—	—	強いヨコナテ	"	—	砂粒(1)	"	5 YR6/6 5 YR6/4	煤状炭化物	10層
6	"	甕形	"	(17)	—	—	"	"	—	砂粒(多1)	"	5 YR6/6 5 YR6/4	煤状炭化物	10層
7	"	"	"	(17)	—	—	"	"	—	石英粒(多1)	"	7.5 YR4/3 7.5 YR6/6		カマド煙道 K-5層
8	"	"	"	(17)	—	—	"	"	—	砂粒(多3)	"	2.5 YR4/4 2.5 YR3/3		
9	"	"	"	(15)	—	—	"	"	—	砂粒(1) 石英粒(1)	"	5 YR6/3 5 YR4/2		東カベギワ

第26表 第4号住居跡出土鉄製品・砥石計測表

挿図番号	図版番号	種類	法量 (cm)			出土地点(層)	備考
87-1		やりかん	全長 (6.5)	幅 1.3~2.7	厚さ 0.3~0.5	フク土層 10	
87-2		やりかん	全長 (12.5)	刃部長 (4.5)	幅 1.1~2.6 厚さ 0.5~0.8	フク土層 10	基部長 (6.2) 幅 1.3~1.5 厚さ 0.5
87-3		刀子	全長 (14.3)	刃部長 (9.2)	幅 1.0~1.3 厚さ 0.55	フク土層 7	基部 幅 0.35~1.05 厚さ 0.25~0.40
87-4		砥石	縦 (6.1)	横 7.0	幅 (4.1)	5層	1面使用 石質(流紋岩)

第5号住居跡（第89図、第90図）

位置と確認 BV - 88・89、BW - 88・89グリッドから深さ約20cmの浅皿状の窪みを確認した。

平面形と規模

平面形	主 軸	規 模								面積(m ²)
		壁 長 (m)				壁 高 (cm)				
方 形	S - 4° - E	南	西	北	東	南	西	北	東	14.99
		4.0	3.8	4.0	4.0	55	70	74	62	

堆積土 14層に分層されたが、大別すると、壁際には褐色土及び黄褐色土、床面には褐色土、にぶい黄褐色土、明赤褐色土（焼土）、その上層には暗褐色土、黒褐色土、黒色土が堆積している。焼失家屋とみられる、堆積状況は自然的である。

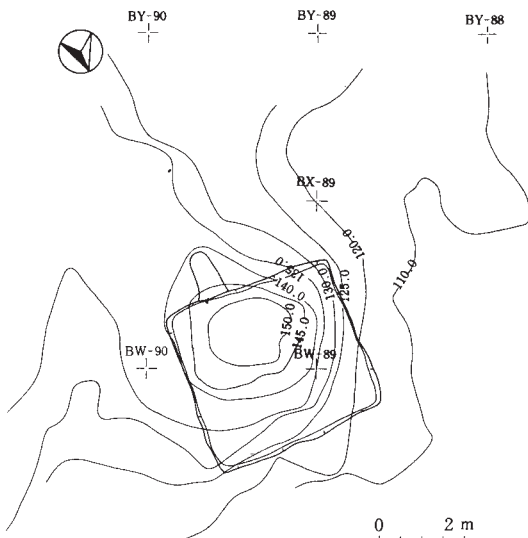
壁 南壁は軟弱であるが、ほかは堅い。立ち上がりは急である。

床 凹凸が激しく、貼床部分が多い。かまど周辺と北壁に近い部分が堅く、特にかまど周辺は締っていた。

壁溝 東壁の壁下から検出した。上端幅10～20cm、下端幅6～12cm、深さ10～20cmである。

ピット 南西隅からかまど右脇にかけて不整形のピット（深さ25cm）を検出し、土師器が多数出土した。柱穴は検出できなかった。

かまど 本体部分は、袖及び天井の骨材としてシルト岩を使用している。焼土は2箇所にあり、焼土Aは平面形が径40cmの円形で、断面形は最深部分12cmの浅皿状である。焼土Bは平面形が径40cmの円形で、断面形は最深部分10cmの浅皿状である。



煙道は、半地下式で崩落が著しいため構造の詳細は不明確である。掘り方は上端幅56cm、下端幅26cmで、長さは上端が114cm、下端が94cmで深さは35～50cmである。

出土遺物 かまど内及び周辺出土の土師器は、第91図8～9、床面出土は第91図1～7煙道内出土は第92図10～14、覆土内出土は第92図6～8である。また、炭化材が床面及び直上から多数出土した。（成田）

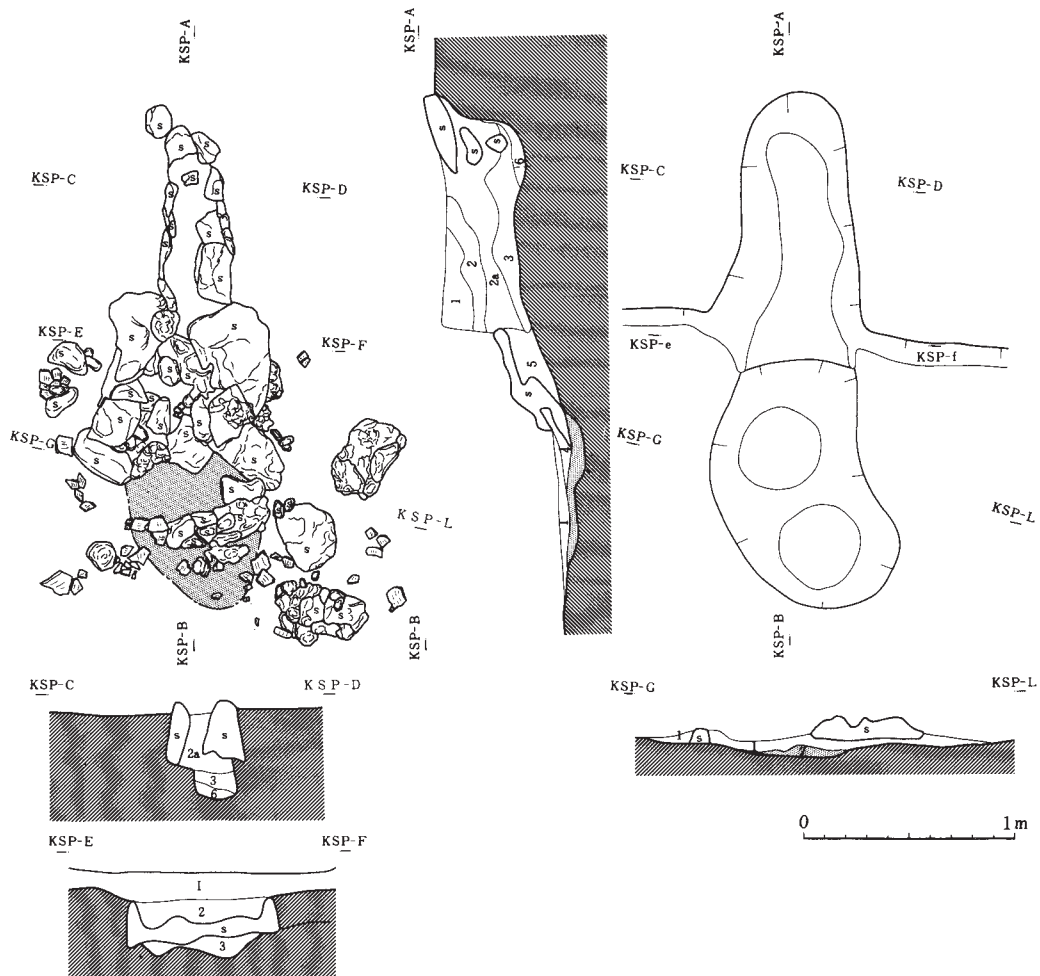
第88図 第5号住居跡確認状況実測図



〔第5号住居跡〕 注 記

層位	土	色	土質	備 考
1層	10 Y R	2/2	黒 褐色	シルト質 流入物なし
2a層	10 Y R	3/3	暗 褐色	シルト質 ローム粒多量混入
2b層	10 Y R	2/2	黒 褐色	シルト質 暗褐色土混入、ローム粒多量混入
3a層	10 Y R	2/1	黒 色	シルト質 焼土粒少量、ローム粒少量混入
3b層	10 Y R	1.7/1	黒 色	シルト質 ローム、焼土粒少量混入
3c層	10 Y R	2/1	黒 色	シルト質 暗褐色土混入、ローム粒少量混入、炭化物微量混入
4a層	10 Y R	2/1	黒 色	シルト質 焼土粒少量混入
4b層	10 Y R	2/2	黒 褐色	シルト質 ローム粒多量、焼土粒少量混入
4c層	10 Y R	2/3	黒 褐色	シルト質 ローム粒、焼土粒混入
5a層	10 Y R	4/3	紅 赤 褐色	ローム質
5b層	10 Y R	5/8	明 赤 褐色	焼土、ローム粒少量
5c層	10 Y R	4/4	褐 色	シルト質 ローム粒混入、粒土粒多量混入
6層	10 Y R	3/3	暗 褐色	シルト質 ローム粒多量、炭化物微量混入
7層	10 Y R	4/6	褐 色	シルト質 ローム粒多量、炭化物微量混入
8層	10 Y R	5/6	黄 褐色	ローム質 褐色土混入

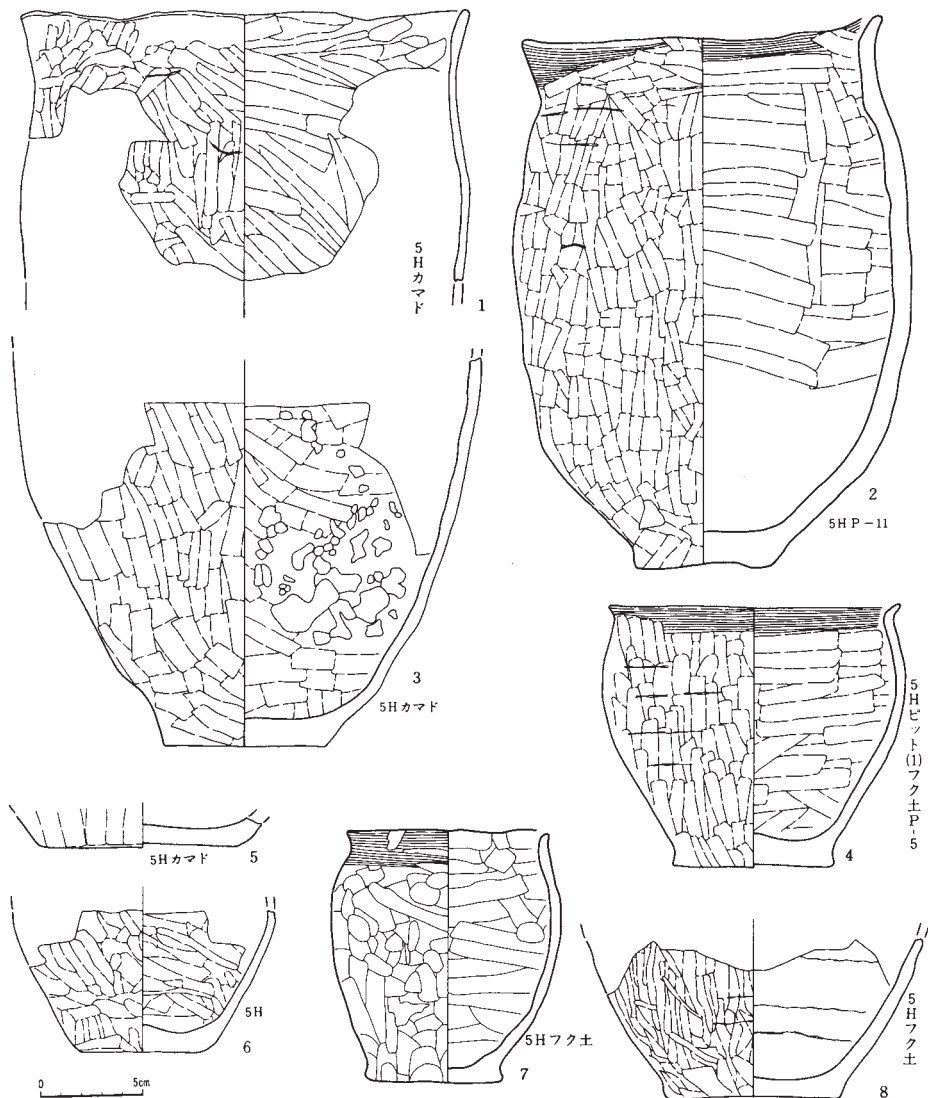
第89図 第5号住居跡実測図



〔第5号住カマド〕 注 記

層位	土色	土質	備考
1層	10YR 2/3 黒褐色	シルト質	混入物なし
2層	10YR 3/3 暗褐色	シルト質	ローム、褐色土多量混入
2a層	10YR 3/3 暗褐色	シルト質	ローム、褐色土混入
3層	10YR 3/4 暗褐色	シルト質	混入物なし
4層	10YR 4/6 褐色	シルト質	混入物なし
5層	7.5YR 5/6 明褐色	シルト質	焼土粒多量混入
6層	10YR 4/4 褐色	シルト質	ローム粒混入
7層	5YR 5/8 明赤褐色		焼土

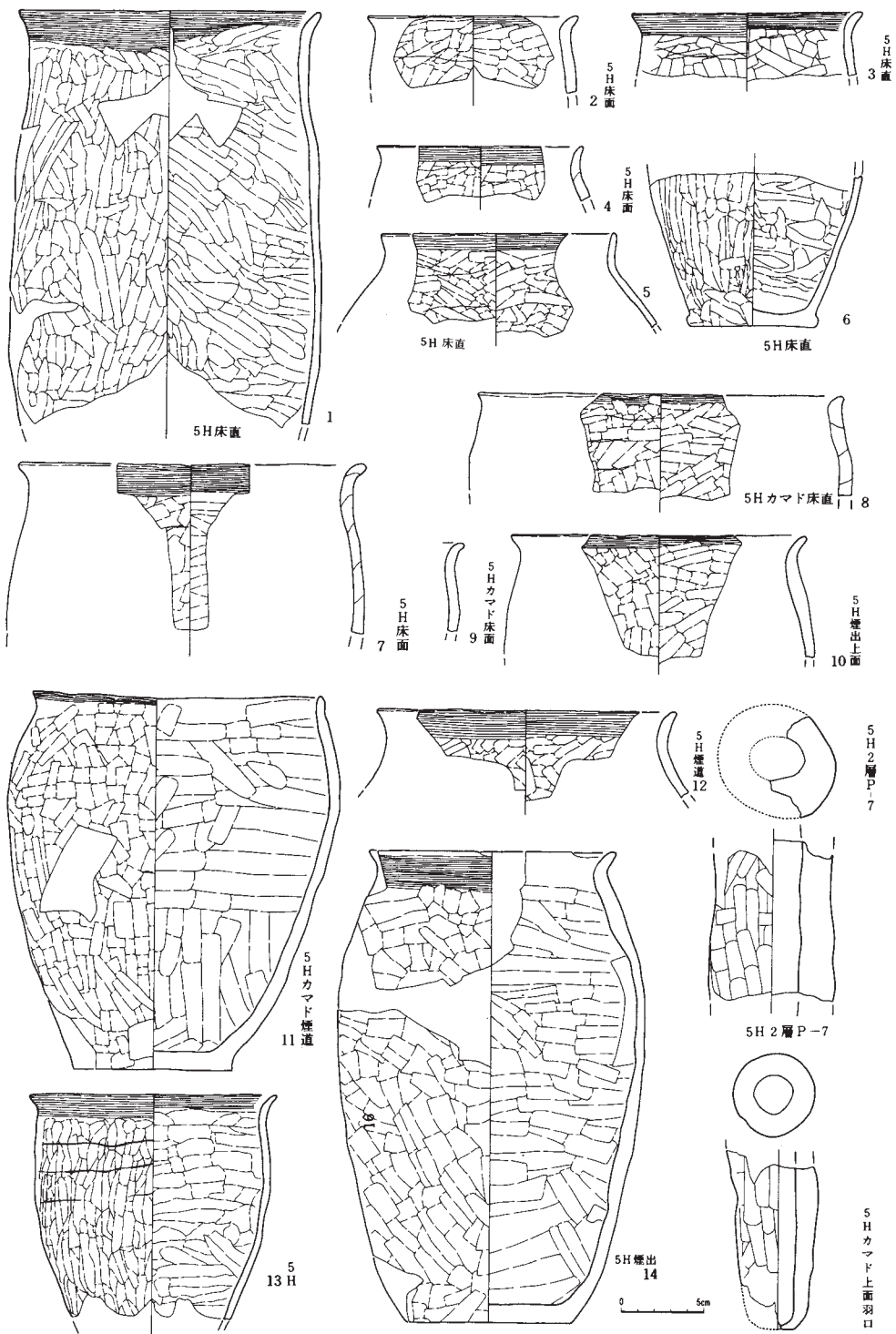
第90図 第5号住居跡確認状況・かまど実測図



第91図 第5号住居跡確認状況かまと実測図

第27表 第5号住居跡出土土器観察表(1)

遺物 番号	種類	器種	器部	法 量 (cm)			調 整			胎 土 (mm)	焼 成	色 調	備 考	出 土 位 置
				口径	底径	器高	口縁部	胴 部	底辺部					
1	土師器	甕形	口縁 胴	22	—	—	ヘラナデ	ヘラナデ	—	砂(多1) 良質粘土	良・堅	7.5YR6/4 2.5YR6/8		カマド
2	"	"	半完形 胴 底辺	17.5 ~20	6.5	27	強い ヨコナデ	"	強い ヘラナデ	砂(多2) 石英(若1)	良 好	7.5YR6/6 5YR5/4 7.5YR5/6 5YR5/6	煤状炭化物	P-11I層
3	"	"	胴 底辺	—	8	—	—	"	"	砂粒(多2)	"	5YR7/4 5YR4/2		カマド
4	"	小型甕	完形 底辺	14	8	12.9	強い ヨコナデ	"	"	砂(多1) 良質粘土	"	2.5YR6/3 2.5YR6/2	木葉痕	ビット(1) 覆土P-5
5	"	甕形	底辺	—	10	—	—	"	"	砂(多1) 底部(若2~4)	"	10YR3/1 10YR5/3		カマド
6	"	"	胴 底辺	—	6	—	—	"	"	砂粒(2) 良質粘土	良・堅	5YR6/4 5YR5/1		
7	"	小型甕	半完形 胴 底辺	10	6.5	12.5	強い ヨコナデ	ユビナデ	強い ユビナデ	砂粒(若1)	良 好	7.5YR2/2 7.5YR6/6	外面煤状炭化物	覆土
8	"	甕形	胴 底辺	—	8.5~ 9.5	—	—	"	"	砂粒を含みも ろい	やや不良		木葉痕	覆土



第92図 第5号住居跡出土土器実測図

第28表 第5号住居跡出土土器観察表(2)

遺物番号	種類	器種	器部	法 量 (cm)			調 整			胎 土 (mm)	焼 成	色 調	備 考	出土位置
				口径	底径	器高	口縁部	胴 部	底辺部					
1	土師器	甕形	口縁胴	18.5	—	—	強いヨコナデ	強いヘラナデ	—	砂粒(多2~3) 良質粘土	良 好	7.5YR7/6 7.5YR8/6		床直
2	"	小型甕	"	(13)	—	—	"	ヘラナデ	—	砂粒(少2~3) 良質粘土	"	7.5YR7/4 7.5YR7/4		床面
3	"	甕形	"	(14)	—	—	"	"	—	砂粒(少1)	"	10YR7/1 10YR6/1		床直
4	"	小型甕	"	(12)	—	—	"	"	—	砂粒(少1) 石英(若) 良質	"	10YR7/3 10YR8/3	外面煤・炭	床面
5	"	甕形	"	(14)	—	—	"	"	—	石英粒(1)	良・堅	7.5YR6/4 7.5YR5/4		カマド床直
6	"	"	胴底辺	—	8	—	—	"	強いヘラナデ	砂粒 良質	良 好	2.5YR5/6 2.5YR4/8		床直
7	"	"	口縁胴	(21.5)	—	—	強いヨコナデ	"	—	砂粒(多1) 石英(2)	"	7.5YR7/3 5 YR7/3		床面
8	"	"	"	(22)	—	—	"	"	—	砂粒(若1) 石・石英(微) 混入物(多)	もろい	2.5YR8/2 10YR8/2		カマド床直
9	"	小型甕	"	(14)	—	—	"	"	—	砂粒 石英(若) 良質	良・堅	5 YR7/4 5 YR6/4		カマド床直
10	"	甕形	"	(18)	—	—	"	"	—	砂粒(若1) 石英(若)	良 好	7.5YR7/6 7.5YR7/4	内面煤・炭	煙出上面
11	"	"	半完形	16 17.5	(9.5)	23	"	"	強いヘラナデ	砂粒(1) 良質粘土	"	7.5YR6/3 7.5YR8/4		カマド煙道
12	"	"	口縁胴	(18)	—	—	"	"	—	砂粒(多1) 裏(石2)	"	7.5YR8/2 7.5YR8/1		煙道
13	"	"	"	15	—	—	"	"	—	砂粒(多1~2) 良質粘土	"	7.5YR2/1 5 YR3/1		
14	"	"	半完形	15 16	10	28.8	"	"	強いヘラナデ	砂粒(多2) 石英(若)	"	7.5YR6/3 7.5YR1.7/1 7.5YR7/4		煙出
15	羽口		胴	胴径 (7.4)	—	—	—	ユビナデ	—		"	5 YR6/6	胴部 3つの突起物	2層P-7
16	"	"	"	(1.8)	—	—	—	"	—	砂粒(若1) 石英粒(若)	少し焼きすぎ、 底部にこげ	5 YR4/8		カマド 上面羽口1

※煤・炭は煤状炭化物の略

第6号住居跡(第94図・第95図)

位置と確認 B Z - 89・90、C A - 89・90グリッドの表土排土して黒色土の落込みを確認した。

平面形と規模

平面形	主 軸	規 模								
		壁 長 (m)				壁 高 (cm)				面積 (m ²)
長 方 形	S-24-E	南	西	北	東	南	西	北	東	
				3.9	3.56	3.7	3.2	42	50	46

堆積土 11層に分層できたが、床面及び床面直上には焼土が斑状にあり、炭化材が散在し、黄褐色土及び黒褐色土が堆積していた。壁際には褐色土及び黒褐色土で、ほかは大半が黒色土である。焼失家屋と思われる。堆積は自然的である。

壁 強く、立ち上がりはやや急である。

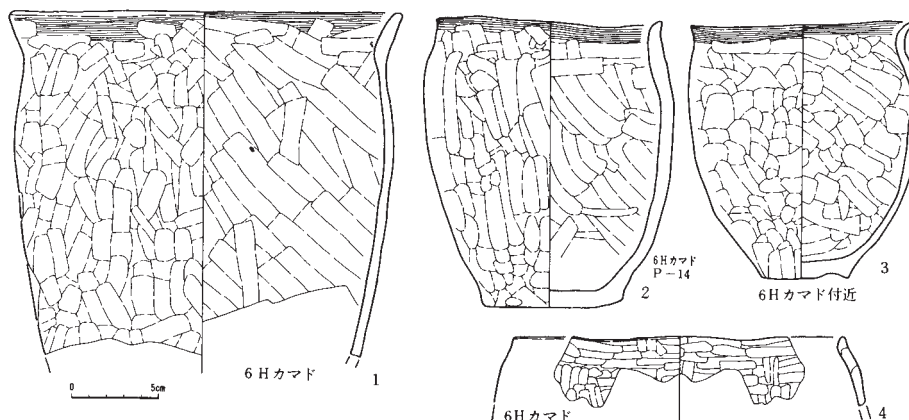
床 全体的に平坦で強く締っているが、特にかまど周辺は著しく堅い。

壁溝 確認できなかった。

ピット かまどの北側に2個検出した。Pit - 1は、平面形が不整形形で、上端の長辺48cm、短辺42cmで、下端の長辺36cm・短辺32cmである。深さは約24cmで断面形はU字状である。Pit - 2は、平面形が不整形長方形で上端の長辺56cm・短辺46cmで、下端の長辺22cm・短辺20cmで深さは約26cmで断面形は円錐状である。柱穴と思われるピットは竪穴内外から検出できなかった。

かまど 本体部分から煙道部までシルト岩で構築されたかまどで、天井部が所々崩れている部分があるもののほぼ原形を知り得る。かまどの全長は204cm、幅が40～50cmで、このうち本体部分の長さが55cmである。燃烧部の焼土は一辺約50cmの不整形な方形で最深部分13cmの浅皿状を呈している。

出土遺物 かまど内及び周辺から完形及び復原土器（第95図2～3）のほか、第91図1～2のような破片が出土し、床面から第96図8、覆土から第96図3～7・9・14の土師器が出土した。（成田）

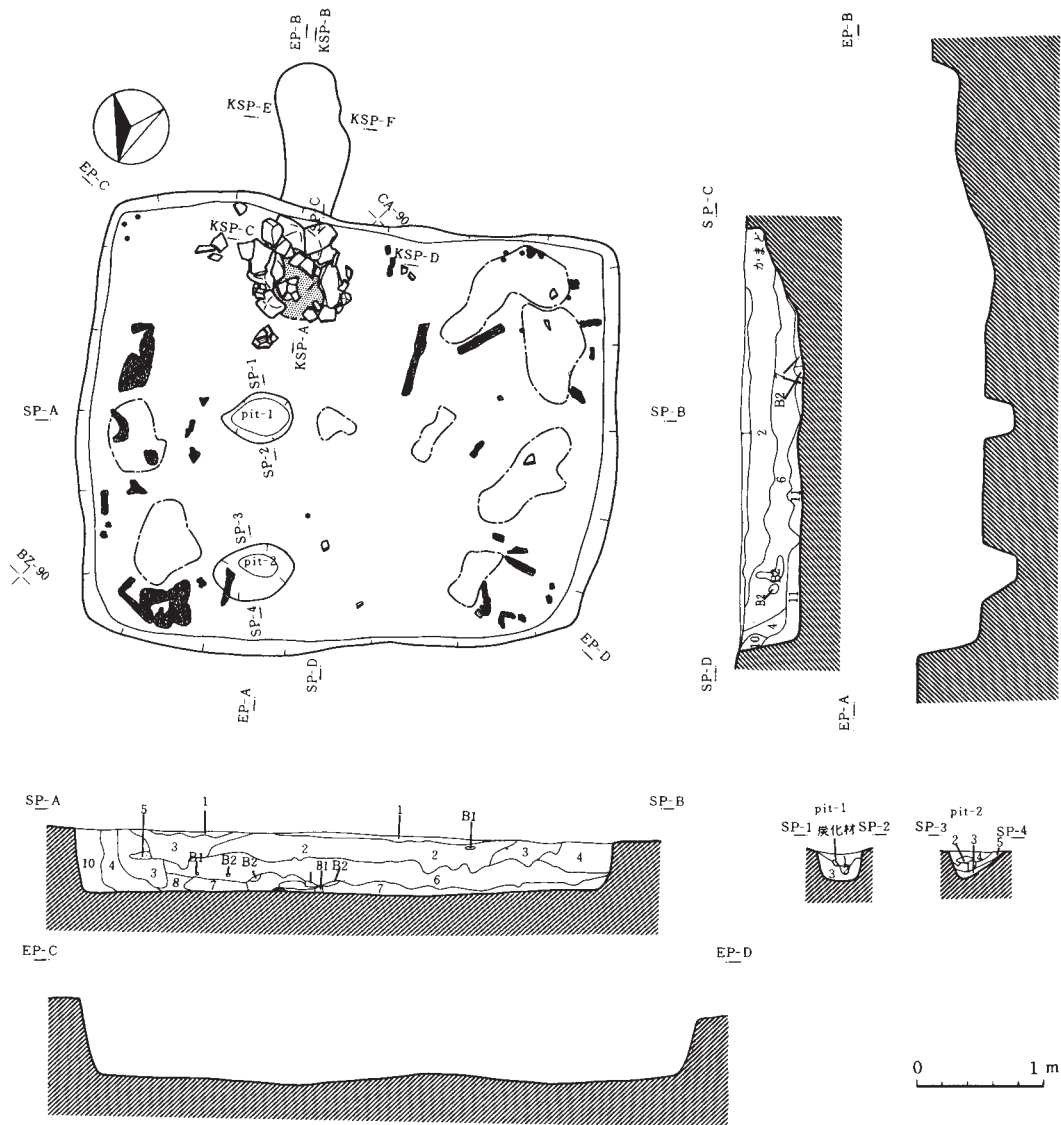


第93図 第6号住居跡出土土器実測図

第29表 第6号住居跡出土土器観察表(1)

遺物番号	種類	器種	器部	法量 cm			調整			胎土(mm)	焼成	色調	備考	出土位置
				口径	底径	器高	口縁部	胴部	底辺部					
1	土師器	甕形	口縁胴	23	—	—	強いヨコナデ	ヘラナデ	—	砂(多・1)石英(若)	良好	7.5YR7/4 7.5YR7/3		カマド
2	土師器	甕形	完形	11.5 ～13	7.5 ～8	16.7 ～17.3	”	”	強いヘラナデ	砂(多・1)砂っぽい	”	5YR5/4 5YR4/1	いびつ	P-14 カマド付近
3	土師器	甕形	完形	12.5 ～13	4.5 ～5.4	14.5	”	”	”	砂(多・1)石英(若)	”	2.5YR6/6 5YR5/3		カマド付近
4	土師器	甕形	口縁胴	(19)	—	—	”	”	—	砂(1)石英(若)	”	7.5YR5/1 7.5YR7/4		カマド

※胎土の砂は砂粒の略



〔第6号住居跡〕 注 記

層位	土 色	土 質	備 考
1層	10Y R 4/1 褐 灰 色	シルト質	混入物なし
2層	10Y R 2/1 黒 色	シルト質	焼土粒微量混入
3層	10Y R 2/2 黒 褐 色	シルト質	焼土粒微量混入
4層	10Y R 2/2 黒 褐 色	シルト質	焼土粒微量混入
5層	7.5Y R 2/2 黒 褐 色	シルト質	焼土粒微量混入
6層	10Y R1.7/1 黒 色	シルト質	炭化物混入
7層	7.5Y R 2/1 黒 色	シルト質	焼土粒混入
8層	7.5Y R 3/4 暗 褐 色	シルト質	焼土粒混入
9層	10Y R 2/1 黒 色	シルト質	焼土粒微量混入
10層	10Y R 4/4 褐 色	シルト質	混入物なし
11層	10Y R 5/1 黄 褐 色	ローム質	混入物なし
B1層	7.5Y R 3/4 暗 褐 色	シルト質	混入物なし
B2層	10Y R 2/2 黒 褐 色	シルト質	混入物なし
焼土層	5 Y R 4/8 赤 褐 色		焼土

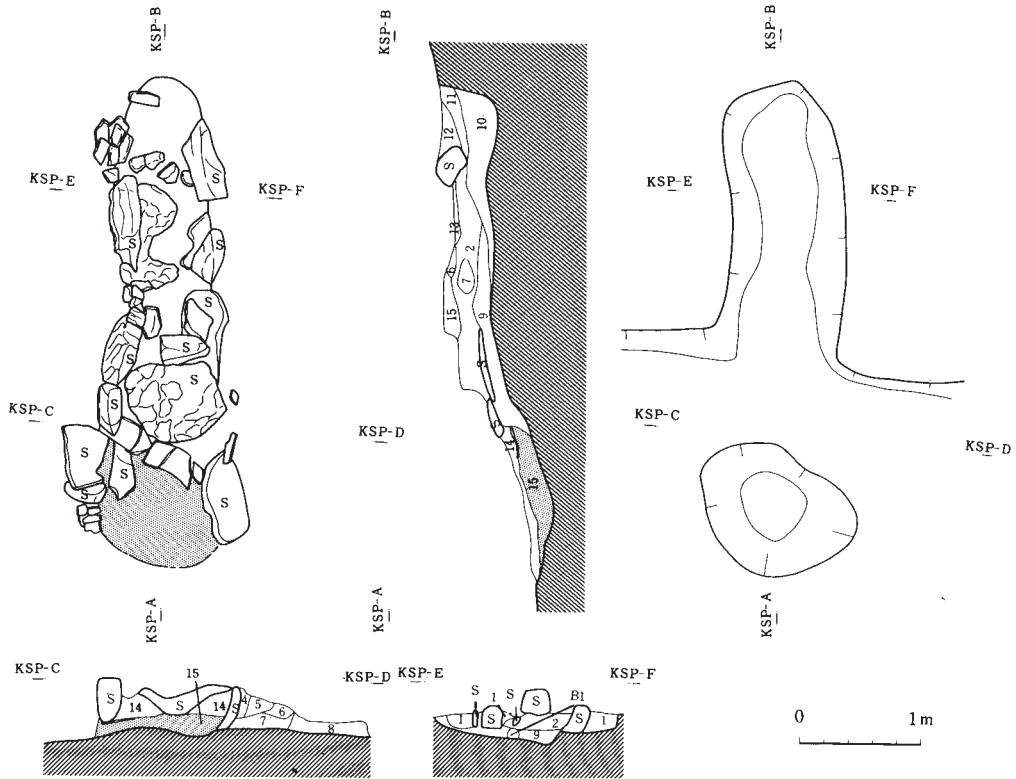
〔第6号住Pit2〕 注 記

層位	土 色	土 質	備 考
1層	10Y R 2/3 黒 褐 色	シルト質	焼土粒を微量に混入
2層	10Y R 6/4 に ぶ い 黄 橙 色	ローム質	混入物なし
3層	10Y R 6/4 に ぶ い 黄 橙 色	ローム質	焼土粒混入
4層	10Y R 2/3 黒 褐 色	シルト質	混入物なし
5層	10Y R 3/4 暗 褐 色	シルト質	混入物なし

〔第6号住居跡 Pit計測表〕

Pit No	規 模	深 さ	Pit No	規 模	深 さ
1	56×42	22	2	64×56	22

第94図 第6号住居跡実測図



【第6号住カマド】 注 記

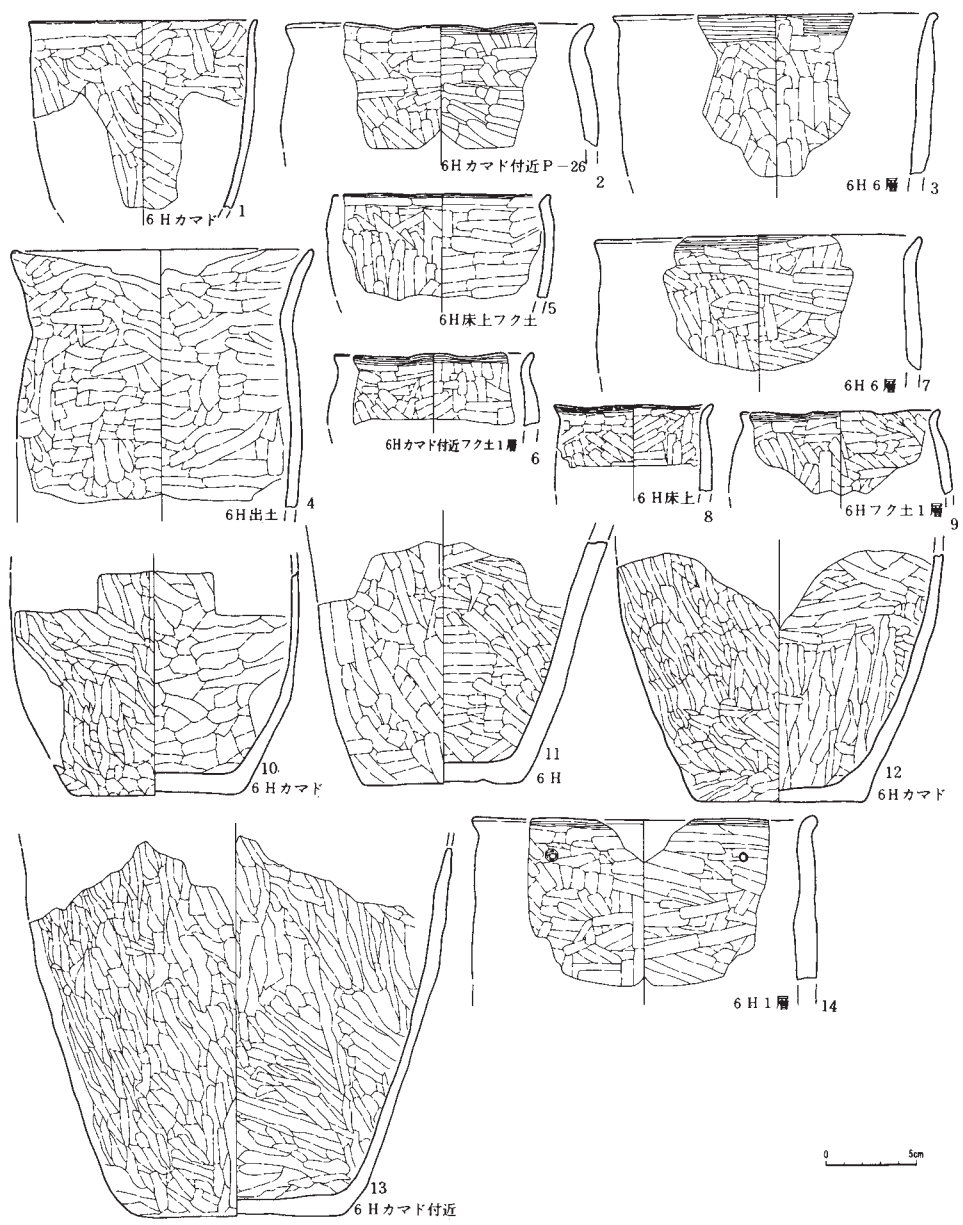
層位	土 色	土 質	備 考	層位	土 色	土 質	備 考
1層	10Y R 4/3	にぶい黄褐色	ローム質 ローム粒微量混入	10層	10Y R 3/2	黒褐色	シルト質 焼土粒少量混入
2層	10Y R 2/3	黒褐色	シルト質 焼土粒微量混入	11層	10Y R 3/4	暗褐色	シルト質 ローム粒混入
3層	10Y R 4/6	褐色	シルト質 混入物なし	12層	10Y R 2/2	黒褐色	シルト質 黒色土混入
4層	10Y R 2/3	黒褐色	シルト質 焼土粒混入	13層	10Y R 2/1	黒色	シルト質 ローム粒混入
5層	10Y R 3/3	暗褐色	シルト質 焼土粒混入	14層	10Y R 4/4	褐色	シルト質 ローム粒混入
6層	5Y R 5/8	明赤褐色	焼土	15層	10Y R 3/4	暗褐色	シルト質 ローム粒混入
7層	10Y R 4/6	褐色	シルト質 焼土、暗褐色土混入	16層	7.5Y R 4/6	褐色	シルト質 焼土粒混入
8層	10Y R 5/6	黄褐色	ローム質 混入物なし	17層	5Y R 3/6	暗赤褐色	シルト質 焼土
9層	10Y R 4/4	褐色	シルト質 ローム粒混入	B層			

第95図 第6号住居跡・かまど実測図

第30表 第6号住居跡出土土器観察表(2)

遺物番号	種類	器種	器部	法量 cm			調整			胎土(mm)	焼成	色調	備考	出土位置
				口径	底径	器高	口縁部	胴部	底辺部					
1	土師器	甕形	口縁 胴	(13)	—	—	ヘラナデ	ヘラナデ	—	砂粒(多・1)	良好	7.5YR8/4 5YR6/6		カマド
2	土師器	甕形	口縁 胴	(17)	—	—	強い ヨコナデ	〃	—	砂粒(1)	〃	10YR5/4 10YR6/4		カマド付近 P-26
3	土師器	甕形	口縁 胴	(18)	—	—	〃	〃	—	砂石(多) 英(若) やや砂っぽい	〃	10YR6/4 10YR6/4		6層
4	土師器	甕形	口縁 胴	(16.8)	—	—	—	〃	—	砂粒(2)	〃	7.5YR7/6 5YR6/6		カマド左脇 床から少し上
5	土師器	小型甕	口縁 胴	(12)	—	—	強い ヨコナデ	〃	—	砂粒(1) 石英(若)	〃	7.5YR5/3 7.5YR6/3		床上、フク土
6	土師器	小型甕	口縁 胴	(11)	—	—	〃	〃	—	砂(多・1) 石英(若)	〃	7.5YR6/6 7.5YR7/6		カマド付近 フク土一層
7	土師器	甕形	口縁 胴	(18)	—	—	〃	〃	—	砂(2-3) 石英(若) 非常に砂っぽい	〃	7.5YR7/3 7.5YR7/4		6層
8	土師器	小型甕	口縁 胴	(9)	—	—	〃	〃	—	砂粒(多・1)	〃	5YR5/2 5YR6/4		床土
9	土師器	小型甕	口縁 胴	(11)	—	—	〃	〃	—	砂(若・1) 石英(若)	〃	7.5YR6/3 7.5YR7/6		フク土1層
10	土師器	甕形	胴 底辺	—	9.5	—	—	〃	強い ヘラナデ	砂粒(1-2) 良質粘土	〃	7.5YR4/2 5YR5/6		カマド
11	土師器	甕形	胴 底辺	—	9	—	—	〃	〃	砂(若2-3) 良質粘土	〃	5YR6/6 5YR7/4	木業痕	付近 P-13
12	土師器	甕形	胴 底辺	—	9.5	—	—	強い ヘラナデ	〃	砂(多・2) 砂っぽい	〃	5YR3/2 5YR3/2	煤・炭 外面もろい	カマド
13	土師器	甕形	胴 底辺	—	11.5	—	—	〃	〃	小礫(4-10) 砂粒を多	〃	7.5YR5/4 7.5YR4/3	木業痕	カマド付近
14	土師器	甕形	口縁 胴	(9)	—	—	ヨコナデ	ヘラナデ	—	砂粒2-3)	〃	10YR8/3 10YR7/3	口縁直下に 穿孔	1層

※胎土の砂は砂粒 若は若干



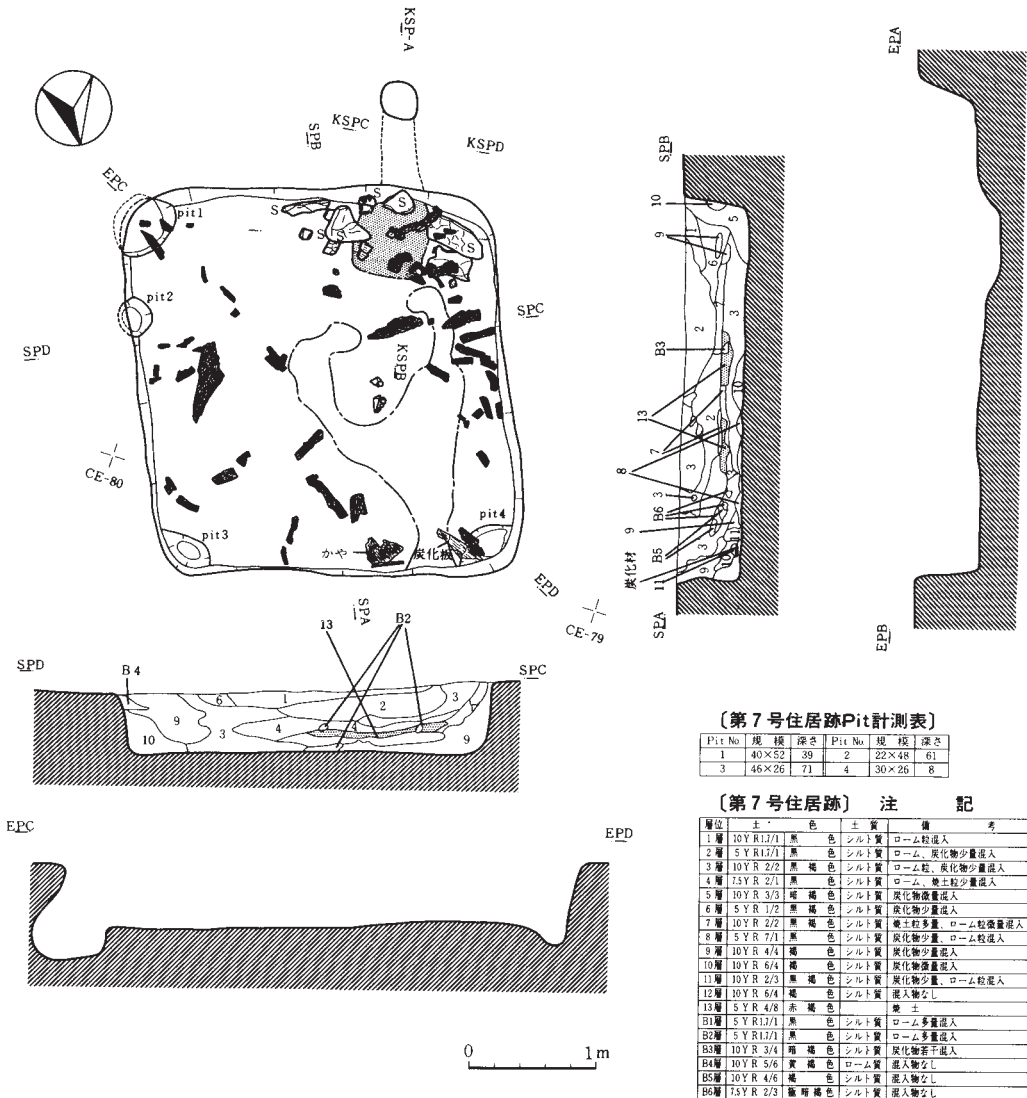
第96図 第6号住居跡出土土器実測図

第7号住居跡（第97図、第98図）

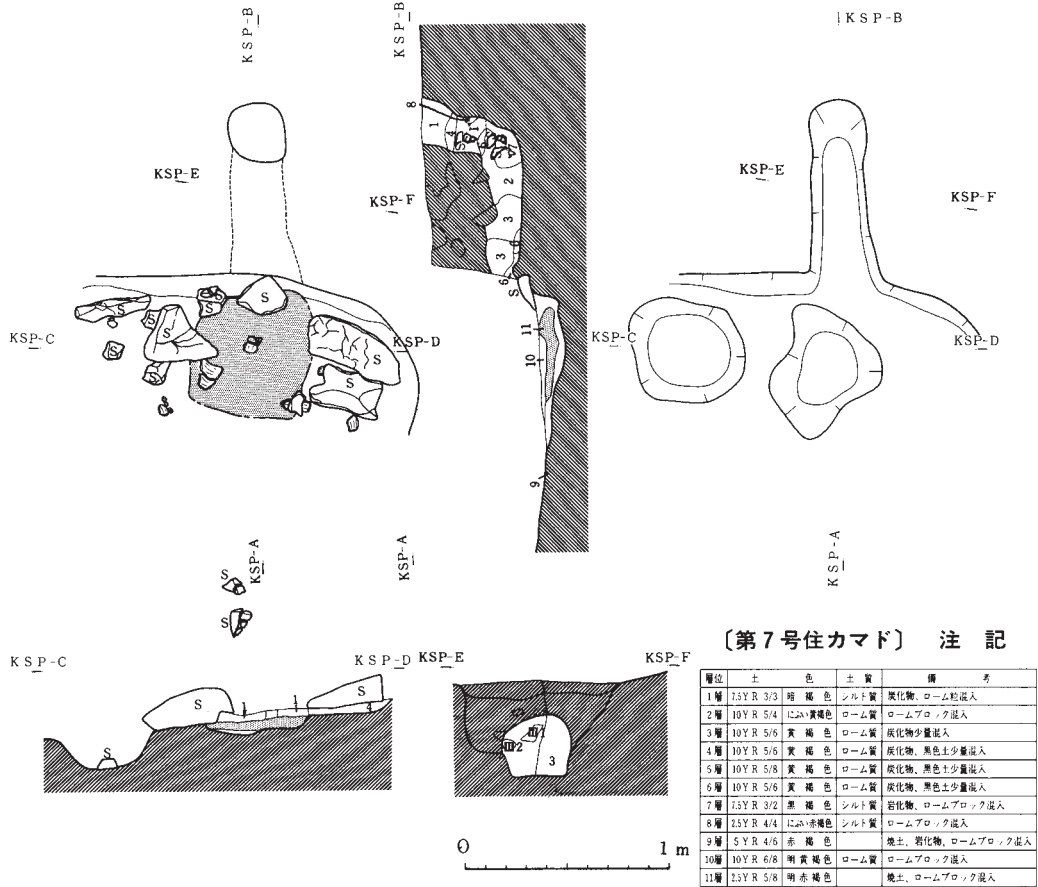
位置と確認 C D - 79・80、C E - 79・80から黄褐色土層上面で方形の落ちこみを確認した。
 平面形と規模

平面形	主 軸	規 模								面積 (m ²)
		壁 長 (m)				壁 高 (cm)				
方 形	S-11°-E	南	西	北	東	南	西	北	東	8.21
		2.9	3.0	2.8	3.1	50	50	50	58	

堆積土 12層に区分できた。大別すると黒色土、黒褐色土、暗褐色土、褐色土の層となる。
 このほか第 層と同質のものが壁から中央部の手前まで堆積していた。覆土内に約10cmの厚さの焼土を検出した。及び禾本料植物の茎部の炭化物が検出され、焼失家屋とみられる。堆積状



第97図 第7号住居跡実測図



第98図 第7号住居跡かまど実測図

況は自然的である。

壁 全体に、急な立ち上がりである。東壁が部分的に攪乱を受けている。

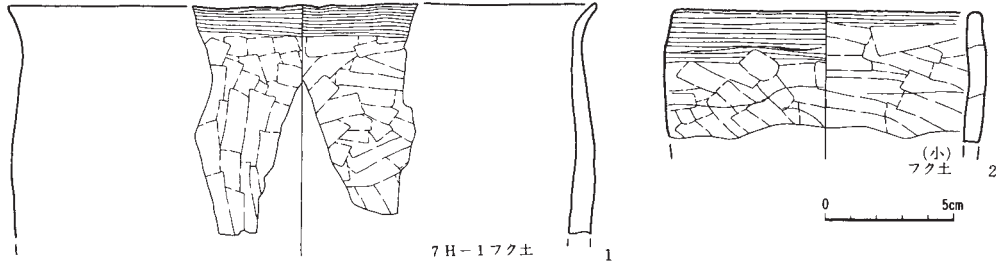
床 堅く締っている。ほぼ平坦である。

壁溝 検出できなかった。

ピット 住居跡内から4個検出(第97図)したが、柱穴とみられるものは、Pit 1 ~ 3で住居跡の4隅の内3隅から検出した。Pit - 4からは、土師器片が2片出土したことから住居跡に伴うものと思われる。

かまど 南壁の西寄りに地山を掘り込んでトンネル式に構築されていた。燃烧部分の周辺には、土師器片、シルト岩が散在していた。燃烧部の焼土範囲は、110×110cmの方形を呈し、断面は、浅皿状で中央の厚さは10cmである。

出土遺物 多量の炭化材が床面直上に散在していた。かまど内及び周辺からは、袖骨材のシルト岩覆土内からは、第99図の土師器が出土した。(成田・佐藤)



第99図 第7号住居跡出土土器実測図

第33表 第7号住居跡出土土器観察表

遺物番号	種類	器種	器部	法量 (cm)			調整			胎土 (mm)	焼成	色調	備考	出土位置
				口径	底径	器高	口縁部	胴部	底辺部					
1	土師器	小型甕	口縁部	(23)	—	—	強いヨコナデ	ヘラナデ	—	砂粒 (若・1×1)	良好	7.5Y R8/4 5Y R7/4		フク土
2	土師器	小型甕	口縁部	(12)	—	—	強いヨコナデ	ヘラナデ	—	砂(多1×1) 石英(若)	良好	7.5Y R8/4 5Y R7/6		フク土

※胎土の砂は砂粒の略

第8号住居跡(第100図、第101図)

位置と確認 C N・C M・C L - 54・55の位置から約50cmの窪みを確認した。

平面形と規模

平面形	主軸	規模								面積 (m ²)
		壁長 (m)				壁高 (cm)				
		南	西	北	東	南	西	北	東	
方形	S-16°-E	5.6	5.2	5.6	5.0	56	50	66	102	19.85

堆積土 9層に区分できた。床面近くから厚さ8cm位の焼土ブロックを3ヶ所検出した。自然堆積である。大別すると黒色土、黒褐色土、暗褐色土、黄褐色土の層となる。

壁 全体にほぼ垂直に立ち上がる。

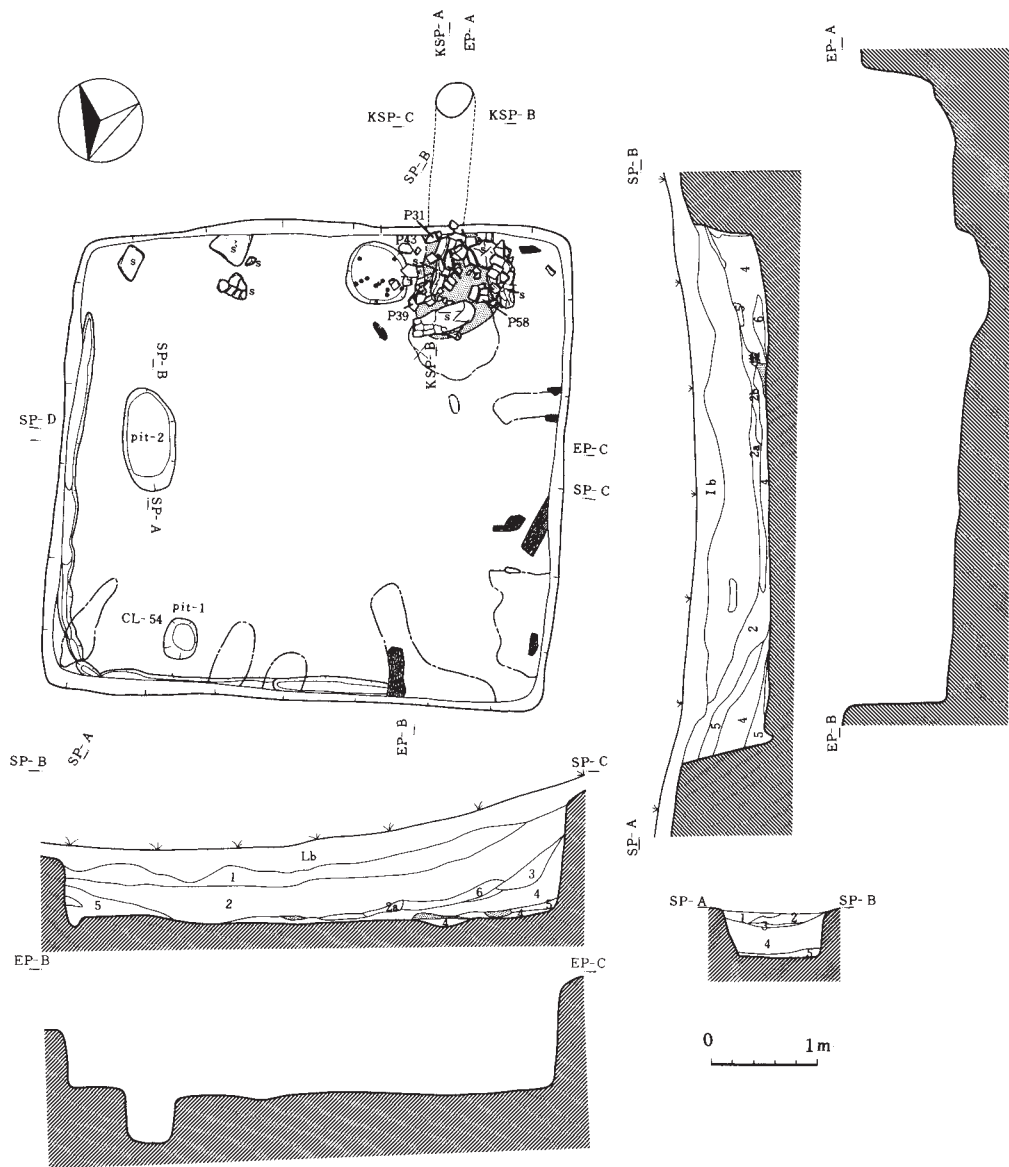
床 ほぼ平坦で、全体に堅くしまった。

壁溝 北壁、東壁の壁下から検出した。幅は上端が7~20cm、下端が3~10cm、深さ11~18cmである。

ピット 住居跡内から3個検出(第100図)したが、柱穴とみられるものは、検出されなかった。Pit 1~2からは土師器が数片出土して貯蔵穴と思われる、Pit 3は浅皿状で住居跡に伴うものである。

かまど 南壁の西寄りに地山を掘り込んで、トンネル式に構築されている。燃烧部の焼土上面には、シルト岩、土師器片が散在していた。焼土範囲は径90cmの円形を呈し、中央の深さ15cmで浅皿状である。

出土遺物 かまど内及び周辺からは、第102図、覆土内からは第103図9~11の土師器、土師器片が出土した。



【第8号住居跡】 注 記

層位	土色	土質	備 考
1層	10Y R 7/1 黒色	シルト質	混入物なし
2層	10Y R 7/1 黒色	シルト質	混入物なし
2a層	10Y R 2/1 黒色	シルト質	焼土若干混入
2b層	7.5Y R 3/3 極暗褐色	シルト質	焼土少量混入
3層	10Y R 3/4 暗褐色	シルト質	混入物なし
4層	10Y R 5/6 黄褐色	ローム質	混入物なし
5層	10Y R 3/4 暗褐色	シルト質	ローム粒若干混入
6層	10Y R 3/2 黒褐色	シルト質	焼土少量混入
7層	5 Y R 4/8 赤褐色		焼土
8層	7.5Y R 4/6 褐色	シルト質	混入物なし
9層	7.5Y R 5/8 明褐色	シルト質	混入物なし
10層	7.5Y R 4/4 褐色	シルト質	混入物なし
B ₁ 層	10Y R 2/3 黒褐色	シルト質	混入物なし
B ₂ 層	10Y R 2/2 黒褐色	シルト質	焼土粒微量混入

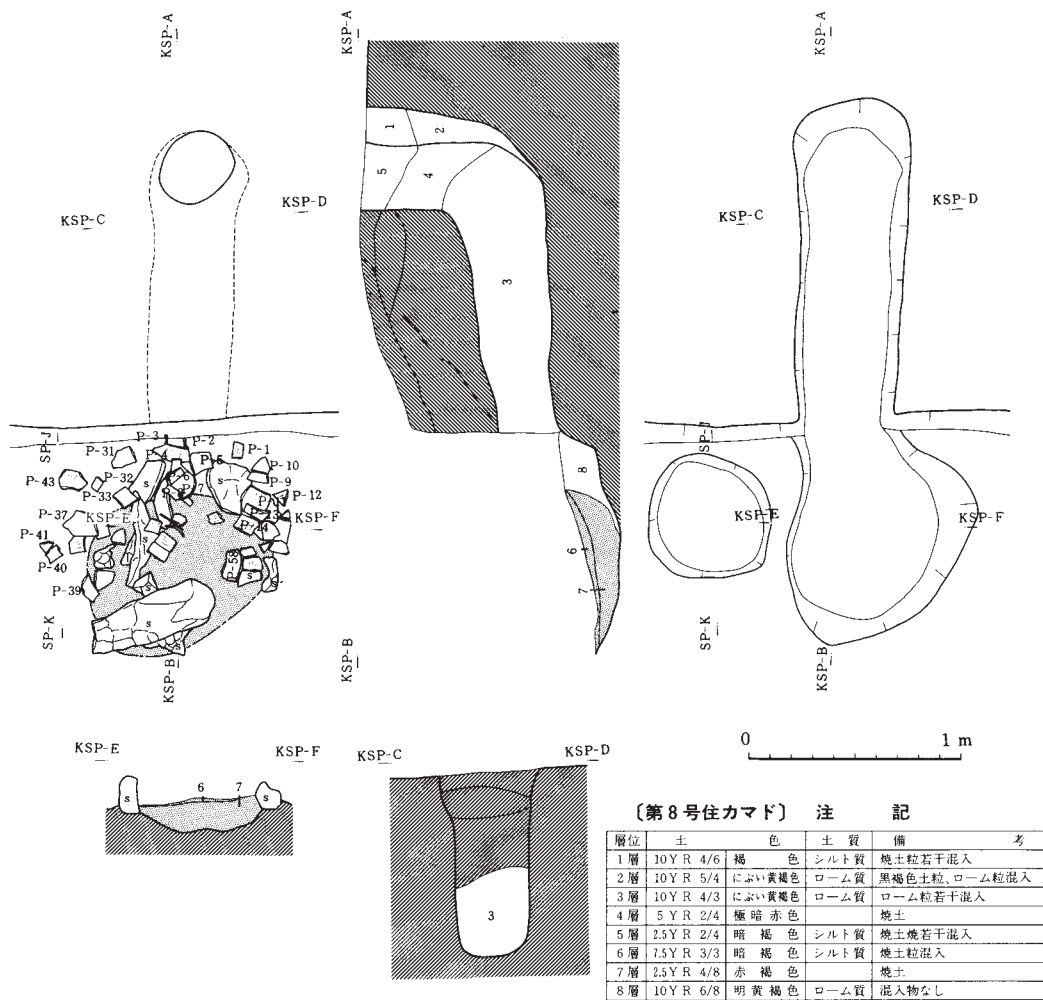
【第8号住居跡 Pit計測表】

層位	土色	土質	備 考
1層	10Y R 4/2 灰黄褐色	ローム質	明黄褐色土粒を若干混入
2層	10Y R 6/4 に近い黄褐色	ローム質	ロームブロックを少量混入
3層	10Y R 6/6 明黄褐色	ローム質	砂粒を少量混入
4層	10Y R 7/3 に近い黄褐色	ローム質	焼土粒を若干混入
5層	10Y R 7/6 明黄褐色	ローム質	混入物なし

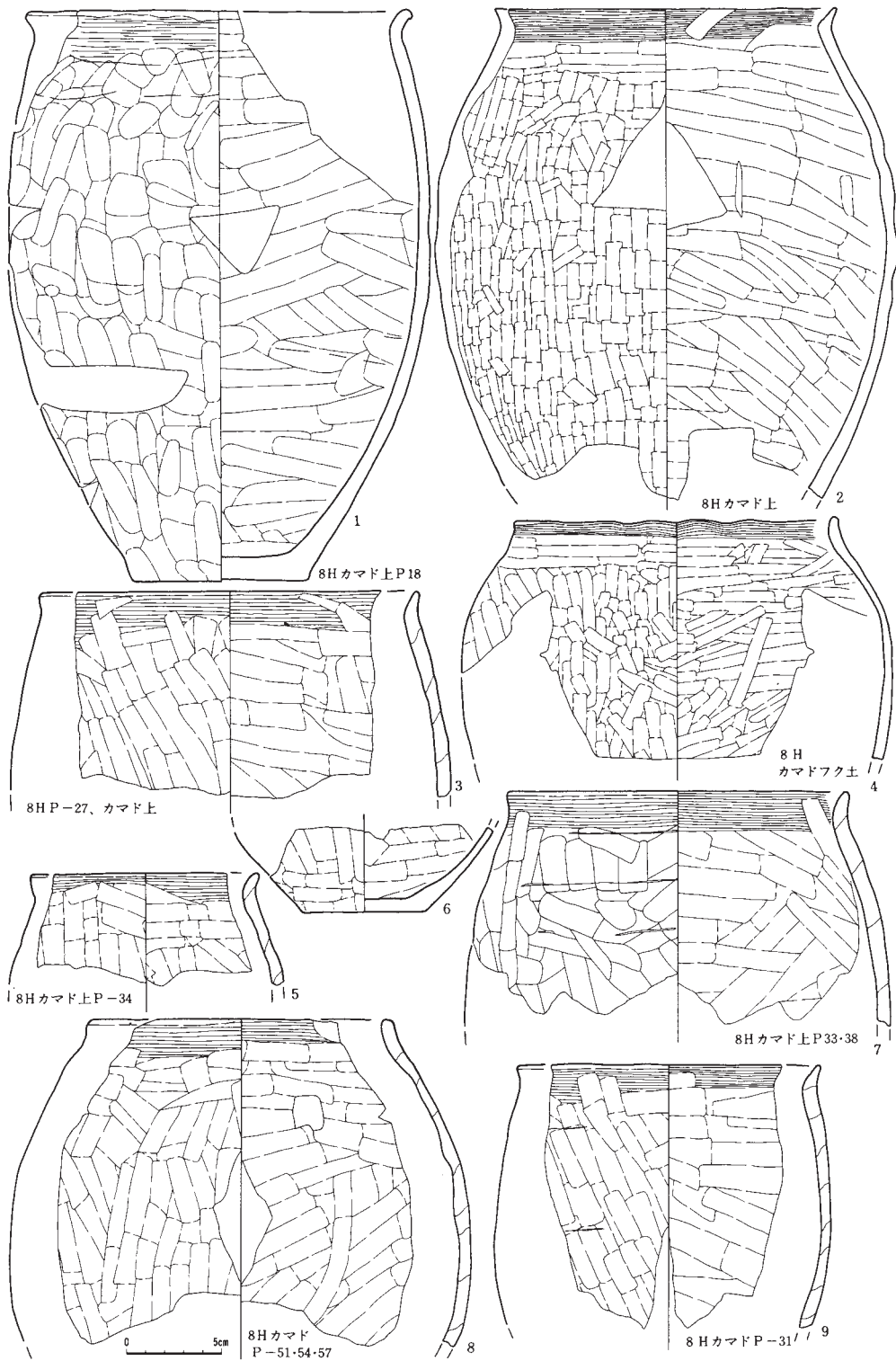
【第8号住居跡 Pit計測表】

pit No.	規模	深さ	pit No.	規模	深さ
1	58×60	32	2	100×50	45

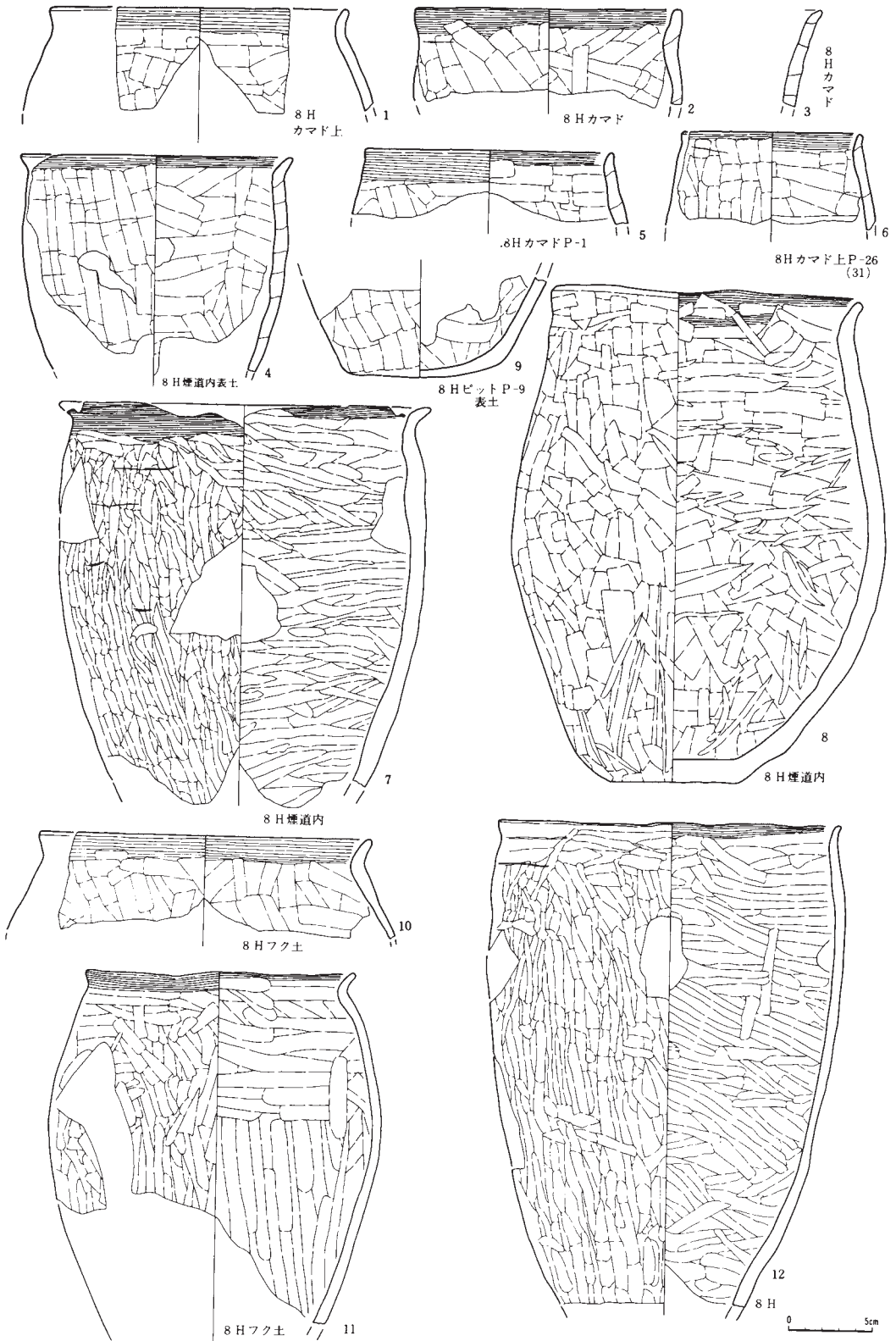
第100図 第8号住居跡実測図



第101図 第8号住居跡かまど実測図



第 102 図 第 8 号住居跡出土土器実測図(1)



第 103 図 第 8 号住居跡出土土器実測図(2)

第32表 第8号住居跡出土土器観察表—(1)

遺番	物号	種類	器種	器部	法量 (cm)			調整			胎土 (mm)	焼成	色調	備考	出土位置
					口径	底径	器高	口縁部	胴部	底辺部					
1		土師器	甕形	完形	20	9	30.5	強いヨコナテ	ヘラナテ	強いヘラナテ	砂(多1)石英(若)良・粘	良好	7.5Y R8/6 7.5Y R7/4		カマド上 P10
2		土師器	甕形	口縁	18	—	—	”	”	—	砂粒(多3-5)	”	5 Y R6/4 7.5 Y R6/3		カマド上
3		土師器	甕形	口縁	(20)	—	—	”	”	—	砂礫(1-2)良・粘	”	7.5 Y R6/8 7.5 Y R7/6		カマド上 P27
4		土師器	甕形	口縁	17	—	—	”	”	—	砂(多1-2)小石(若・3)	”	7.5 Y R6/6 7.5 Y R7/4		カマド上 フク土
5		土師器	小形甕	口縁	(12)	—	—	”	”	—	砂粒(多・1)	”	7.5 Y R6/6 7.5 Y R6/2		カマド上 P34
6		土師器	甕形	底辺	—	6.5	—	—	”	強いヘラナテ	砂粒(多・2)特に底面	”	5 Y R6/4 7.5 Y R6/3	外面色	カマド上 P62
7		土師器	甕形	口縁	(18)	—	—	強いヨコナテ	ユヒナテ	—	砂礫(多2-7)良・粘	”	5 Y R7/4 5 Y R7/4		カマド P33 P38
8		土師器	甕形	口縁	(16)	—	—	”	ヘラナテ	—	砂礫(若・1-5)石英(少)	”	7.5 Y R6/6 7.5 Y R6/8		P51 カマド上 P54 P57
9		土師器	甕形	口縁	(16)	—	—	”	”	—	砂・石英(若・1)	”	7.5 Y R6/4 7.5 Y R7/2		カマド上 P31

※胎土の砂は砂粒の略

第33表 第8号住居跡出土土器観察表—(2)

遺番	物号	種類	器種	器部	法量 (cm)			調整			胎土 (mm)	焼成	色調	備考	出土位置
					口径	底径	器高	口縁部	胴部	底辺部					
1		土師器	甕形	口縁	(18)	—	—	強いヨコナテ	ヘラナテ	—	砂礫(少5)	良・堅	7.5 Y R7/6 5 Y R5/4		カマド上
2		土師器	甕形	口縁	(16)	—	—	”	”	—	砂粒(2-5)	”	7.5 Y R6/8 7.5 Y R7/6	10と同一	カマド
3		土師器	鉢形	口縁	(16)	—	—	”	”	—	砂粒(2-3)	”	2.5 Y R6/6 2.5 Y R5/6		カマド
4		土師器	甕形	口縁	(16)	—	—	”	”	—	砂礫(多2-7)	”	7.5 Y R8/6 7.5 Y R7/4	9と同一 焼成が局部的 に斑状	煙道内 表土
5		土師器	甕形	口縁	(15)	—	—	”	”	—	砂礫(3-8)石英(微)	”	5 Y R6/8 5 Y R5/4		カマド上 P1
6		土師器	小甕形	口縁	(11)	—	—	”	”	—	砂(多・1)石英(微)	”	5 Y R7/4 7.5 Y R4/8		カマド上 P26
7		土師器	甕形	口縁	(22)	—	—	”	”	—	砂(多2-3)砂っぽい	”	5 Y R7/4 7.5 Y R7/4		煙道内 カマド上 P57
8		土師器	甕形	完形	18.5	8	30	ヘラナテ	強いヘラナテ	強いヘラナテ	砂粒(2-3)良質	”	7.5 Y R7/4 7.5 Y R7/4	煤炭 (外面底部)	煙道内
9		土師器	甕形	底辺	—	9	—	—	ヘラナテ	”	砂(多3-5)石英(多)	”	5 Y R7/8 5 Y R7/4		ビット P9 表土
10		土師器	甕形	口縁	(20)	—	—	強いヨコナテ	”	—	砂礫(微・3)やや粗	”	7.5 Y R7/3 7.5 Y R6/3		フク土
11		土師器	甕形	口縁	16	—	—	”	”	—	砂礫(若1-2)石英(少)	”	5 Y R6/6 5 Y R6/3		フク土
12		土師器	甕形	口縁	20	—	—	ヘラナテ	”	—	砂粒(多3-5)	”	2.5 Y R4/6 5 Y R4/4		

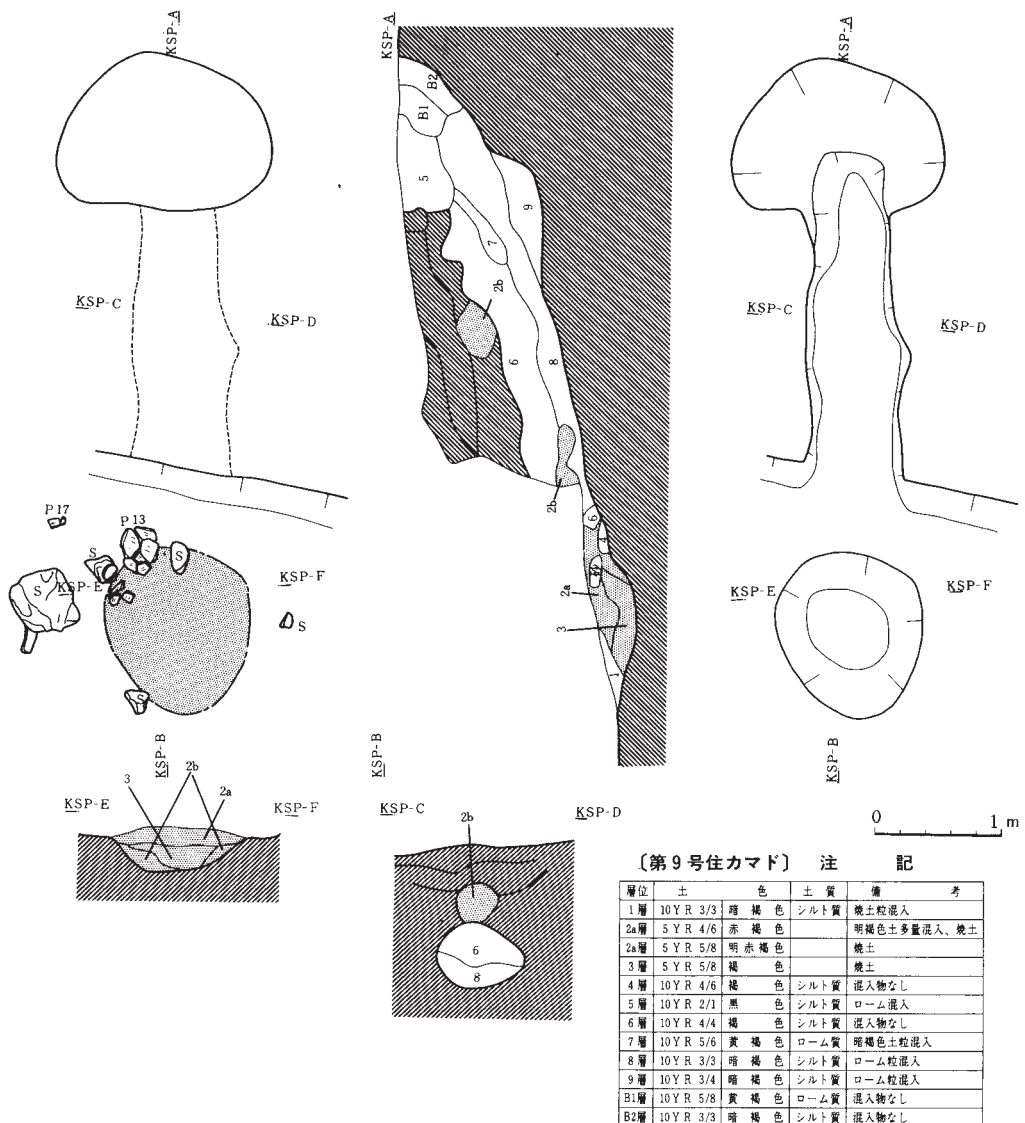
第9号住居跡(第104図、第105図)

位置と確認 C M・C N - 50・51の位置から約20cmの窪みを確認した。

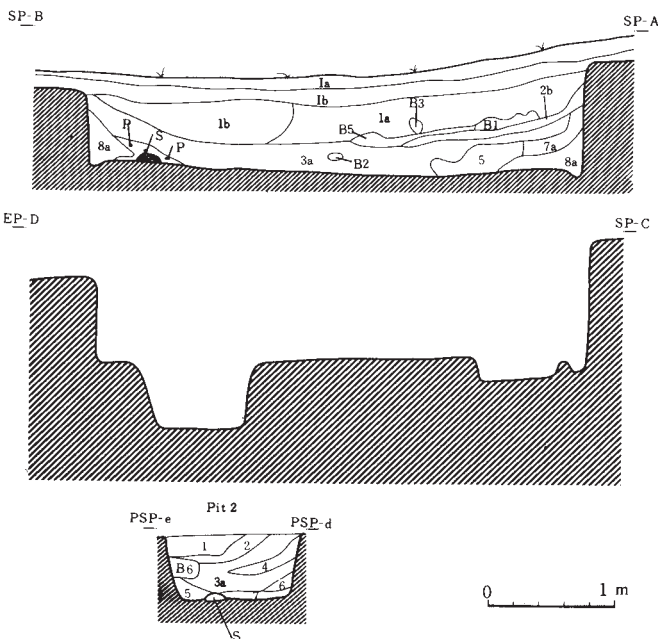
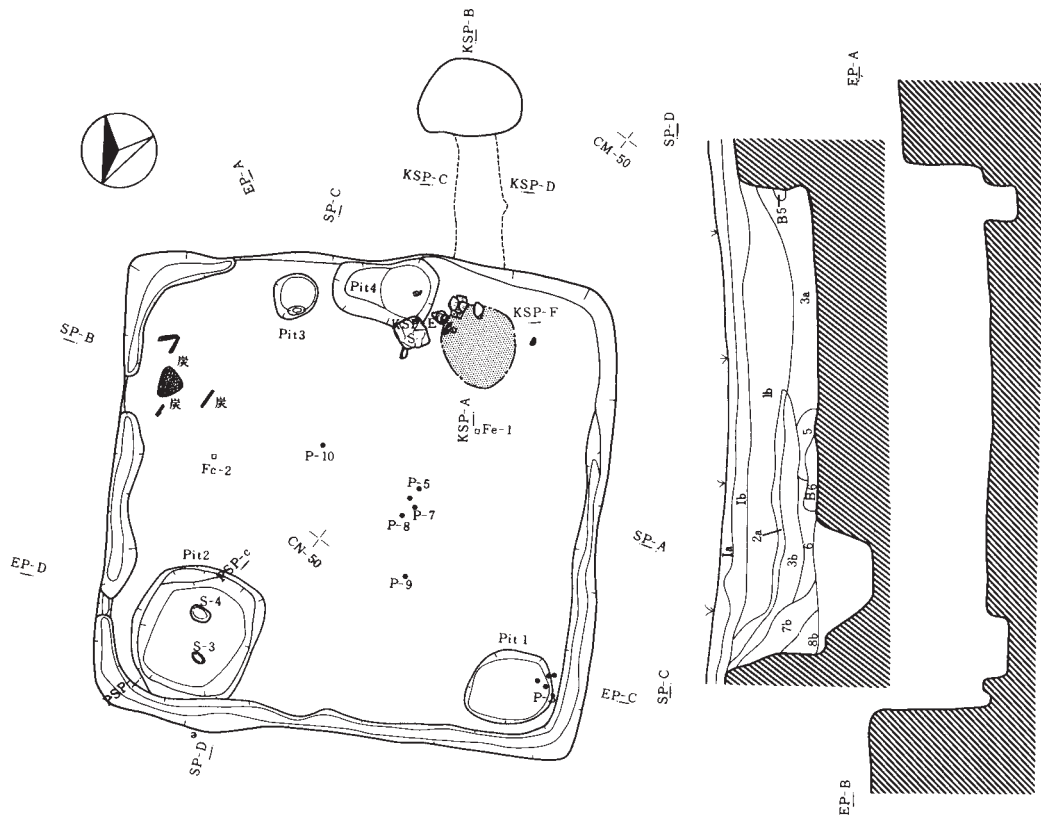
平面形と規模

平面形	主 軸	規 模								
		壁 長 (m)				壁 高 (cm)				面積(m ²)
方 形	S-4°-E	南	西	北	東	南	西	北	東	
		4.2	4.2	4.0	4.0	60	90	68	53	

堆積土 8層に区分できた。大別すると黒色土、黒褐色土、暗褐色土、褐色土、黄褐色土の層となる。



第104図 第9号住居跡かまど実測図



〔第9号住居跡〕 注 記

層位	土色	土質	備考
1a層	10Y R17/1	黒色シルト層	ローム粒少量混入
1b層	10Y R 2/1	黒色シルト層	ローム粒少量混入
2a層	10Y R 2/2	黒褐色シルト層	ローム粒、ロームブロック混入
2b層	10Y R 3/3	暗褐色シルト層	黒色土、ローム少量混入
3a層	10Y R 3/3	暗褐色シルト層	ローム粒、ロームブロック、炭化物少量混入
3b層	10Y R 3/3	暗褐色シルト層	ローム粒多量、ロームブロック混入
4層	10Y R 3/4	暗褐色シルト層	ローム粒、炭化物混入
5層	10Y R 3/2	黒褐色シルト層	ローム粒多量、ロームブロック混入
6層	10Y R 3/3	暗褐色シルト層	ロームブロック少量混入
7a層	10Y R 4/4	暗褐色シルト層	ローム、黄土粒少量混入
7b層	10Y R 5/6	暗褐色シルト層	黒色土粒少量、炭化物混入
8a層	10Y R 2/3	暗褐色シルト層	褐色土、ローム粒、炭化物少量混入
8b層	10Y R 2/2	暗褐色シルト層	ローム多量混入
B1層	10Y R17/1	黒色シルト層	黄土粒多量、ローム粒少量混入
B2層	10Y R 2/1	黒色シルト層	黄土粒、ローム粒少量混入
B3層	10Y R 4/4	暗褐色シルト層	黒色土、ローム粒少量混入
B4層	10Y R 5/8	黄褐色ローム層	混入物なし
B5層	10Y R 5/8	黄褐色ローム層	混入物なし
B6層	10Y R 5/6	黄褐色ローム層	混入物なし

〔第9号住居跡 Pit 2〕 注 記

層位	土色	土質	備考
1層	10Y R 2/3	暗褐色シルト質	ローム多量混入
2層	10Y R 5/6	黄褐色ローム質	黒褐色土粒混入
3a層	10Y R 3/3	暗褐色シルト質	ローム粒混入
3b層	10Y R 3/3	暗褐色シルト質	ローム混入
4層	10Y R 5/6	黄褐色ローム質	暗褐色土多量、ローム混入
5層	10Y R 2/2	暗褐色シルト質	ローム粒少量混入
6層	10Y R 5/6	黄褐色ローム質	暗褐色土粒少量混入
7層	10Y R 5/6	黄褐色ローム質	暗褐色土粒混入

〔第9号住居跡 Pit 計測表〕

Pit No.	規模	深さ	Pit No.	規模	深さ
1	72×58	14	2	116×98	52
3	36×38	26	4	82×48	24

第105図 第9号住居跡実測図

壁 東壁、西壁は、底面から外に開きながら立ち上がり、他はほぼ垂直に近い立ち上がりである。

床 かまど周辺は強く締まっているが、他は柔かである。

壁溝 全壁から検出したが、連続しない。幅は上端が15～30cm、下端が5～15cm、深さは5～21cmである。

ピット 住居跡内から4個検出（第105図）した。Pit - 3が柱穴、Pit - 2からシルト岩が出土し貯蔵穴と思われる。Pit - 1・4は住居跡に伴うものである。

かまど 南壁の西寄りに地山を掘り込んでトンネル式に構築されており、燃烧部の焼土周辺にシルト岩、土師器片が散在していた。焼土範囲は径60cmの円形を呈し、断面では中央の厚さ7cmの浅皿状である。

出土遺物 かまど内及び周辺から、第108図1、ピット内からは、第108図2 - 3の土師器、土師器片が出土した。（成田・佐藤）

第34表 第9号住居跡出土土器観察表

遺物番号	種類	器種	器部	法量 (cm)			調整			胎土 (mm)	焼成	色調	備考	出土位置
				口径	底径	器高	口縁部	胴部	底辺部					
1	土師器	袋形	口縁胴	(17)	—	—	強いヨコナテ	ヘラナテ	—	砂粒(多1)	やや悪い	7.5YR4/4 7.5YR6/4		かまど
2	土師器	小型袋	口縁胴底辺	(13.8)	8	13	"	"	強いヘラナテ	石英(多1)	良好	10YR5/3 2.5YR4/2	煤状炭化物	ピット
3	土師器	"	口縁胴	(10)	—	—	"	"	—	砂礫(微5)	良・堅	7.5YR6/4 7.5YR5/1		{ピット4 底面P-19}
4	土師器	袋形	底辺	—	9	—	—	"	強いヘラナテ	砂粒、石英(多1)	"	5YR6/6 5YR7/4	木葉痕	床直P-9

第10号住居跡（第106図、第107図）

位置と確認 CO - 47、CP - 47・48の位置で深さ約20cmの窪みを確認した。

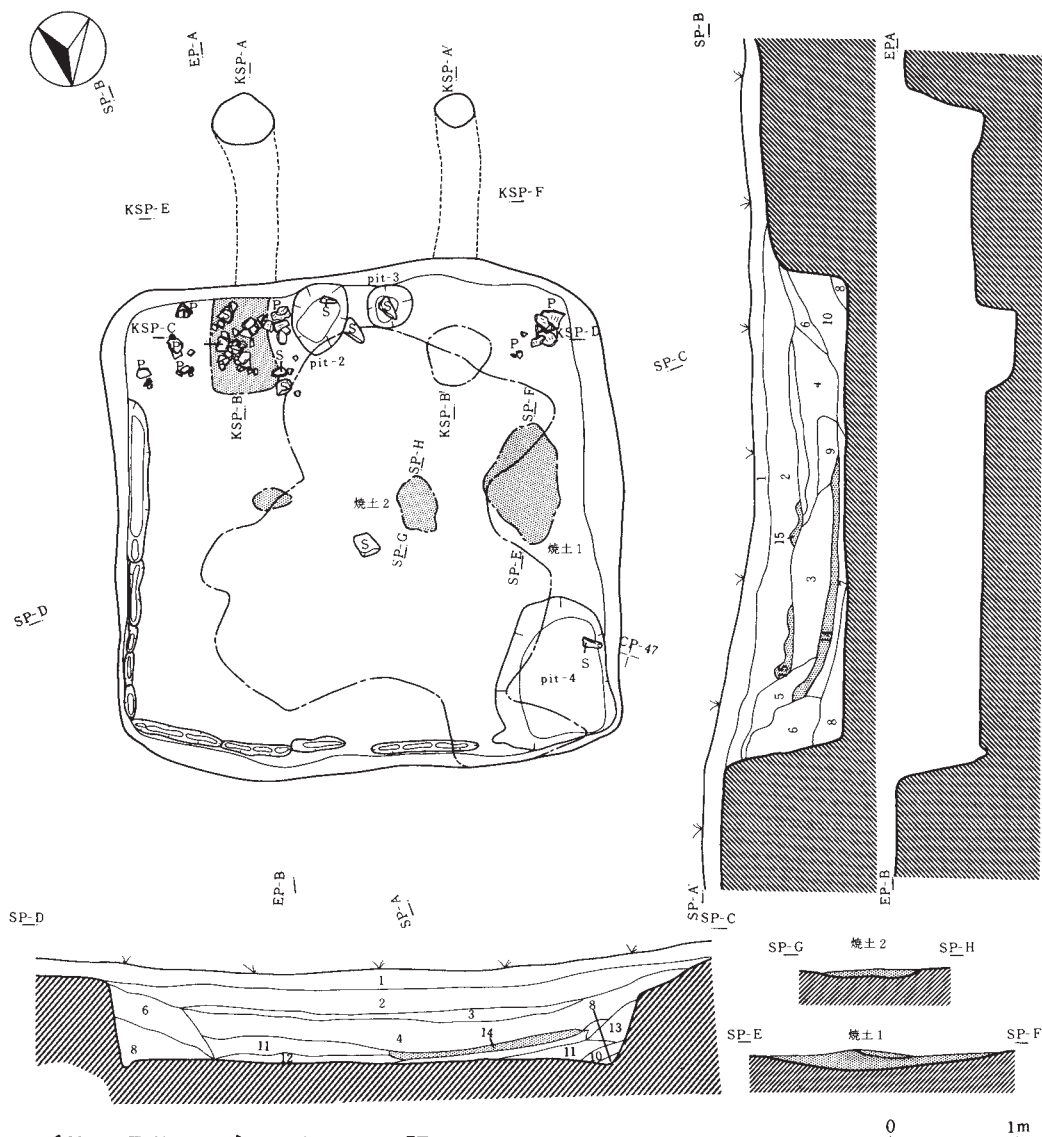
平面形と規模

平面形	主軸	規模							
		壁長 (m)				壁高 (cm)			
方形	S - 5° - W	南	西	北	東	南	西	北	東
		5.1	5.3	5.2	5.7	40	46	60	76

堆積土 13層に区分でき大別すると黒色土、黒褐色土、暗褐色土、褐色土、黄褐色土の層となる。焼土層が2重に堆積していた。上の方が厚さ6cmで、下の方は12cmで住居跡の半分以上位まで覆われていた。自然堆積である。

壁 全体にほぼ垂直に立ち上がっている。

床 南壁から中央付近までは、強く締まっているほかは、柔らかい。中央の床面に焼土を2箇所検出した。60cm×90cm厚さ8cmで浅皿状楕円形と、30cm×45cm厚さ4cmの浅皿状楕円形で、ほぼ平坦である。



〔第10号住居跡〕 注 記

層位	土色	土質	備考
1層	10Y R1.7/1	黒色シルト質	混入物なし
2層	10Y R1.7/1	黒色シルト質	混入物なし
3層	10Y R1.5/0	黒色シルト質	混入物なし
4層	7.5Y R1.7/1	黒色シルト質	ローム少量混入
5層	10Y R 2/1	黒色シルト質	焼土、焼土粒少量混入
6層	10Y R 3/4	暗褐色シルト質	炭化物微量、ロームブロック多量混入
7層	2.5Y R 2/1	黒色シルト質	ローム、焼土多量混入
8層	10Y R 4/4	褐色シルト質	黒色土、ローム微量混入
9層	10Y R1.7/1	黒色シルト質	ロームブロック少量混入
10層	10Y R 5/6	黄褐色ローム質	炭化物微量混入
11層	10Y R 2/3	黒褐色シルト質	ローム粒、炭化物微量混入
12層	10Y R 4/4	褐色シルト質	ローム多量混入
13層	10Y R 3/3	暗褐色シルト質	炭化物、ローム粒微量混入
14層	5 Y R 5/8	明赤褐色	焼土
15層	7.5Y R 4/6	褐色	焼土

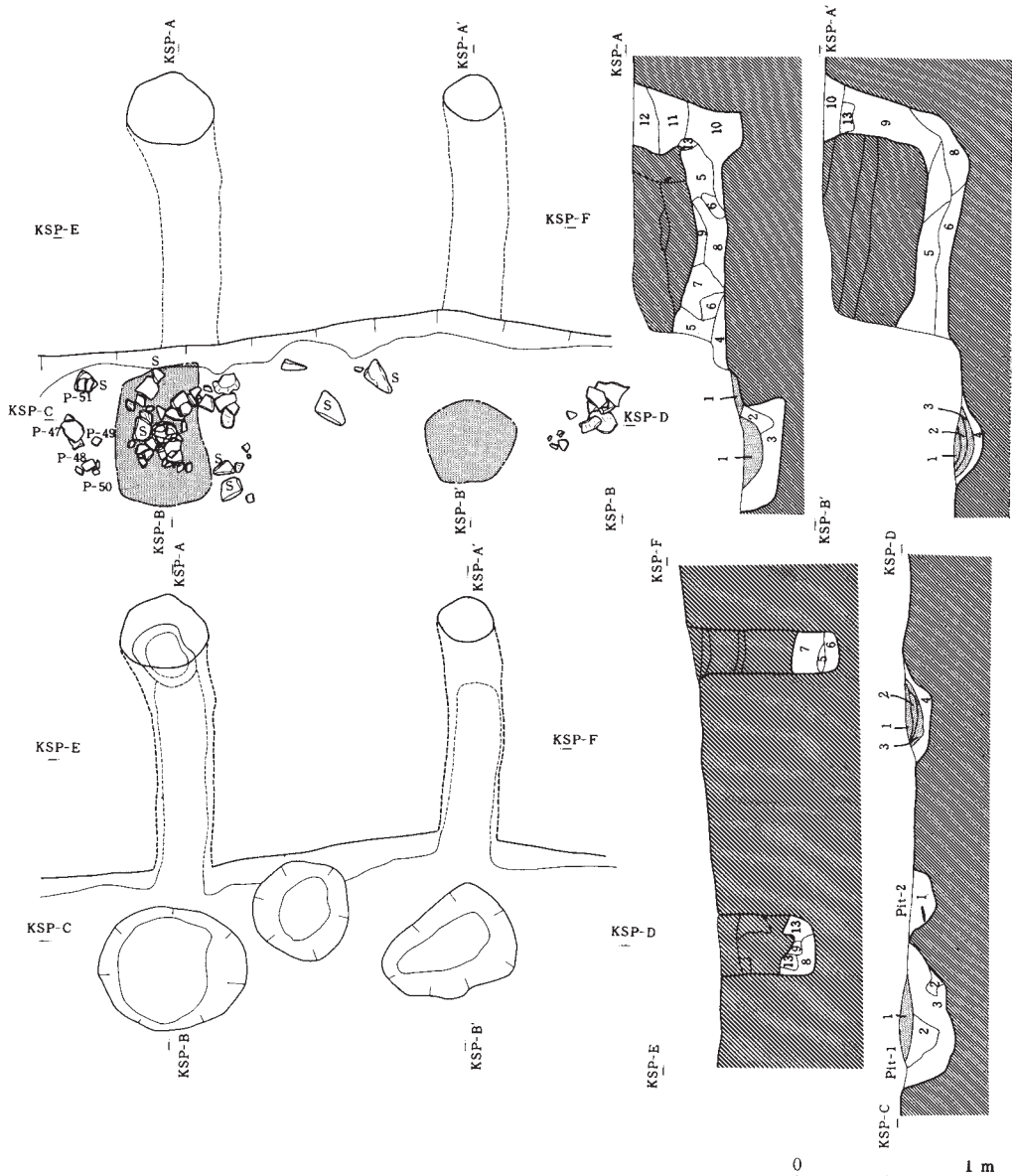
〔第10号Pit 2〕 注 記

層位	土色	土質	備考
1層	10Y R 4/6	褐色土シルト質	炭化物少量、焼土粒微量混入

〔第10号住居跡 Pit計測表〕

Pit No	規模	深さ	Pit No	規模	深さ
1	72×74	44	2	112×78	25
3	58×48	7	4	36×34	6

第106図 第10号住居跡実測図



【第10号住居跡 Aカマド】 注 記

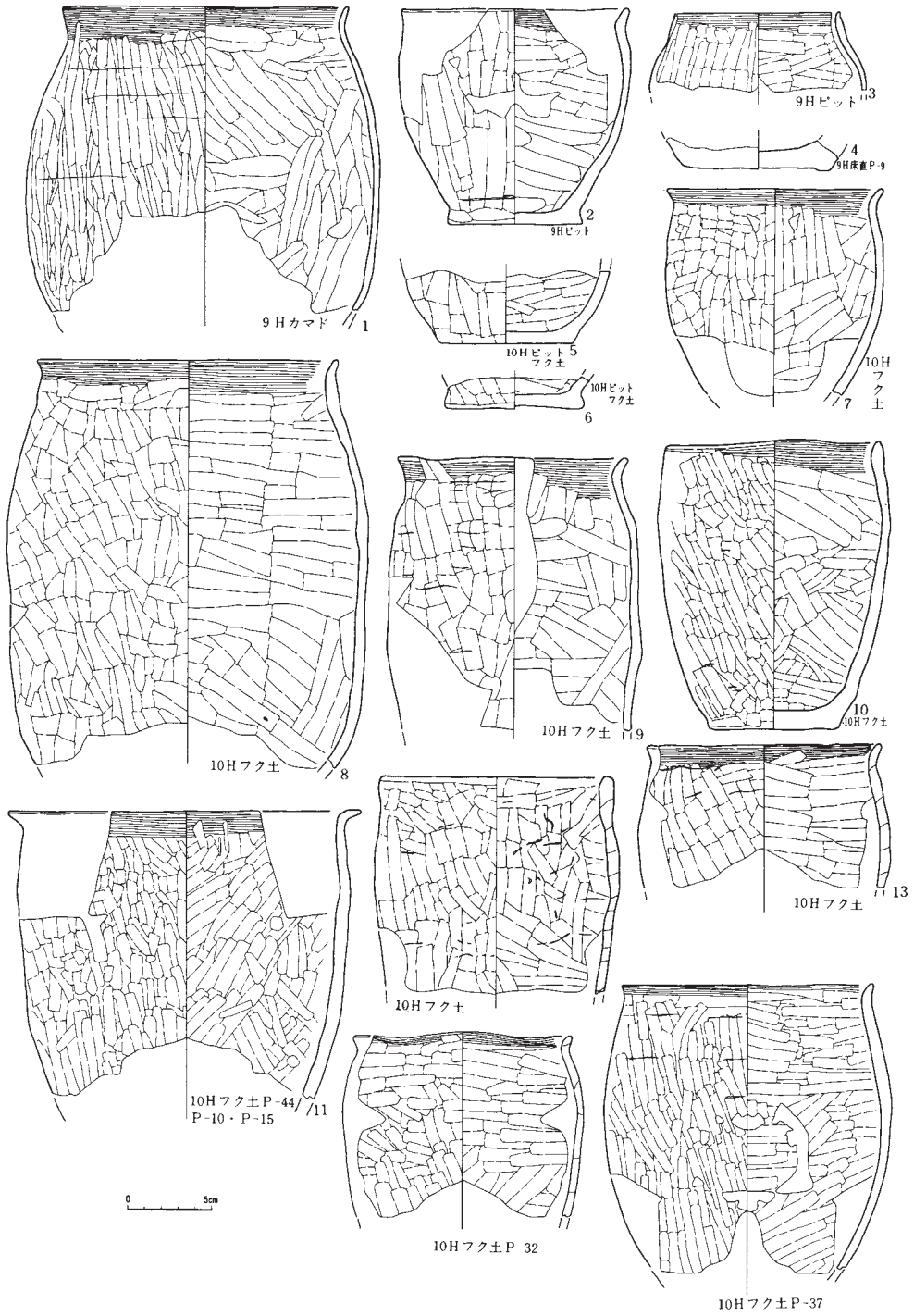
層位	土 色	土 質	備 考
12層	5 Y R 5/8	明赤褐色	焼土
14層	2.5 Y R 5/8	明赤褐色	焼土
15層	2.5 Y R 5/8	明赤褐色	焼土
13層	7.5 Y R 5/6	暗褐色	シルト質 炭化物微量混入
7層	10 Y R 5/6	黄褐色	ローム質 焼土少量混入
8層	7.5 Y R 3/4	暗褐色	シルト質 焼土少量混入
6層	10 Y R 4/6	暗褐色	シルト質 炭化物少量、焼土微量混入
11層	7.5 Y R 2/1	黒色	シルト質 ローム微量混入
10層	10 Y R 3/3	暗褐色	シルト質 ローム多量混入
9層	10 Y R 3/4	暗褐色	シルト質 ローム微量混入
B層	10 Y R 5/6	黄褐色	ローム質 火山灰

【第10号住居跡 Bカマド】 注 記

層位	土 色	土 質	備 考
1層	2.5 Y R 5/8	明赤褐色	焼土
2層	10 Y R 5/8	黄褐色	ローム質 黒色土少量混入
3層	10 Y R 4/6	暗褐色	シルト質 黒色土少量混入
4層	7.5 Y R 4/4	暗褐色	シルト質 焼土混入
5層	10 Y R 4/4	暗褐色	シルト質 ローム少量、焼土微量混入
6層	10 Y R 5/6	黄褐色	ローム質 黒色土微量混入
7層	10 Y R 5/6	黄褐色	ローム質 黒色土少量、ローム微量混入
8層	10 Y R 4/6	暗褐色	シルト質 混入物なし
9層	10 Y R 3/1	黒褐色	シルト質 ローム少量混入
10層	10 Y R 2/2	暗褐色	シルト質 ローム、炭化物微量混入
11層	10 Y R 3/3	暗褐色	シルト質 炭化物微量混入
12層	10 Y R 2/2	暗褐色	シルト質 ローム、炭化物混入
13層	10 Y R 5/8	黄褐色	ローム質 黒色土微量混入
B層	10 Y R 2/1	黒色	シルト質 混入物なし

第107図 第10号住居跡かまど実測図

壁溝 北壁と西壁の壁下に検出した。幅は上端が7～15cm、下端が4～10cmで深さは、6～12cmである。



第108図 第9号：第10号住居跡出土土器実測図

ピット 住居跡内から検出したピットは、第106図の4個である。Pit - 1からは、土師器片が数片出土した。Pit - 2はかまどの改築のために埋めもどされたものと考えられる。Pit - 3・4は、住居跡に伴うものである。

かまど 南壁の西寄り（Aかまどとする）と東寄り（Bかまどとする）に地山を掘り込んで構築されている。両方ともトンネル式であるが、Aかまどは、燃焼部と煙道部分が残存するだけである。焼土範囲は、径50cmの円形を呈し、断面は浅皿状で中央の厚さは12cmである。再構築されたBかまどの焼土上面にシルト岩、土師器片が散在していた。焼土範囲は、70×45cmの方形を呈し、断面は浅皿状で中央の厚さは10cmである。

出土遺物 かまど内及び周辺からは神骨材のシルト岩、覆土内からは、第108図7～15のような土師器が出土した。

第35表 第10号住居跡出土土器観察表

遺物番号	種類	器種	器部	法量 (cm)			調整			胎土 (mm)	焼成	色調	備考	出土位置
				口径	底径	器高	口縁部	胴部	底辺部					
5	土師器	甕形	胴底辺	—	8	—	—	ヘラナア	強い ヘラナア	砂(多・1) 石英(若・2)	良好	2.5Y R4/4 5 Y R4/2		ピット フク土
6	土師器	甕形	底辺	—	8.5	—	—	”	強い ヘラナア	砂(多・1) 石英(若)	”	5 Y R4/1 10 Y R7/3	煤・炭 木炭痕	ピット フク土
7	土師器	甕形	口縁 胴	13	—	—	強い ヨコナア	”	—	砂(多・1) 石英(若)	”	2.5Y R6/4 5 Y R6/2	二次火焼 変色・もろい	フク土
8	土師器	甕形	口縁 胴	(18)	—	—	”	”	—	砂(多・2) 石英(若)	”	10 Y R7/4 7.5 Y R7/3	外 煤・炭	フク土
9	土師器	甕形	口縁 胴	14	—	—	”	”	—	砂(多・1) 石英(若)	”	7.5 Y R6/3 7.5 Y R6/4	内外 煤・炭	フク土
10	土師器	甕形	半完形	13	8	17 17.5	”	”	強い ヘラナア	砂(多・1) 石英(若)	”	5 Y R6/6 5 Y R7/6		フク土
11	土師器	甕形	口縁 胴	(21)	—	—	”	”	—	砂(多2~3) 砂っぽい	”	2.5 Y R4/6 2.5 Y R4/6		フク土 P-10 P-15 P-44
12	土師器	小型甕	口縁 胴	(14)	—	—	ヘラナア	”	—	砂(多・1) 石英(若)	”	7.5 Y R7/4 7.5 Y R6/2	煤状 炭化物	フク土
13	土師器	小型甕	口縁 胴	(14)	—	—	強い ヨコナア	”	—	砂(多・2) 石英(若)	”	10 Y R6/3 5 Y R6/4		フク土
14	土師器	小型甕	口縁 胴	(13)	—	—	”	”	—	砂(2) 石英(若)	”	5 Y R6/6 5 Y R6/4		フク土 P32
15	土師器	甕形	口縁 胴	(15)	—	—	”	”	—	砂(多・1) 石英(若)	不良	5 Y R5/4 5 Y R6/3		フク土 P37

※胎土の砂は砂粒の略
若は若干の略

第11号住居跡（第109～111図）

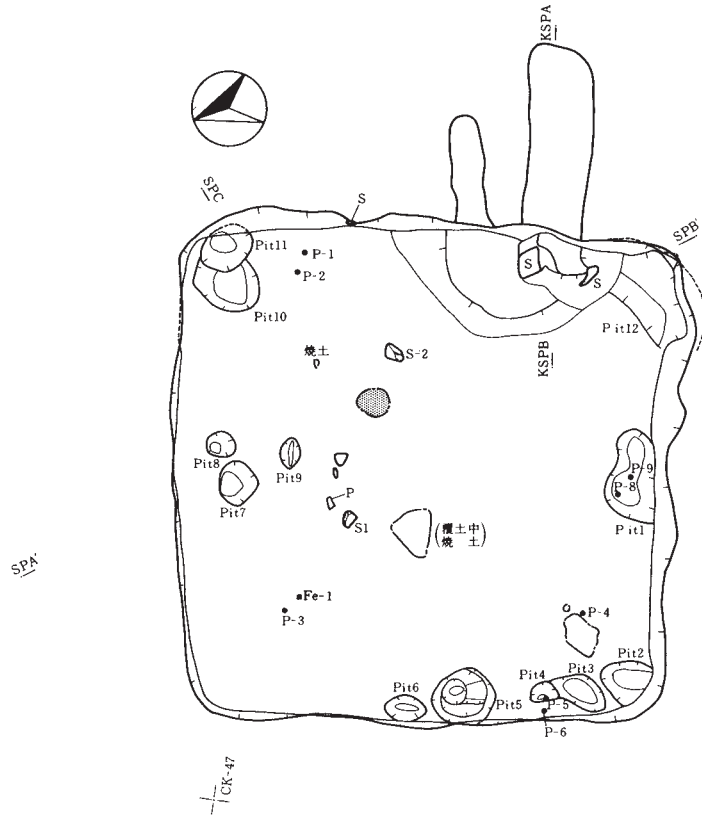
位置と確認 西区の南半部、東側の間近に沢が位置するG J - 47・48、G K - 47・48で、表土の緩い窪みを確認した。

平面形と規模

平面形	主軸	規模								
		壁長 (m)				壁高 (cm)				面積 (㎡)
隅丸方形	S - 73° - E	南	西	北	東	南	西	北	東	
		3.86	3.80	4.09	4.08	80	66	48	23	

竪穴周囲 周囲には部分的に、層類似の火山灰質土の盛土（3a層）がみられた。

堆積土 下方壁寄りに褐色土、中央にレンズ状に黒色土があり自然堆積である。西壁側

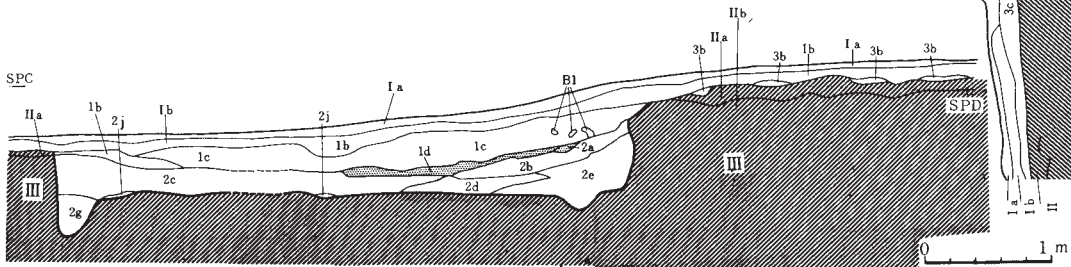
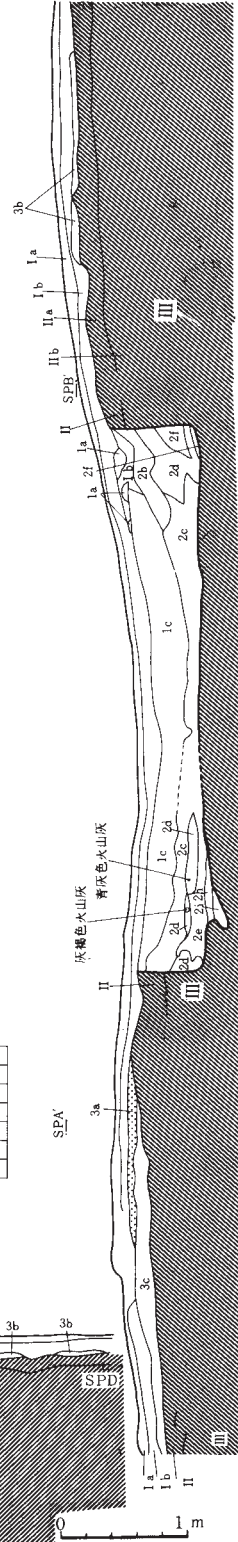


〔第11号住居跡〕 注 記

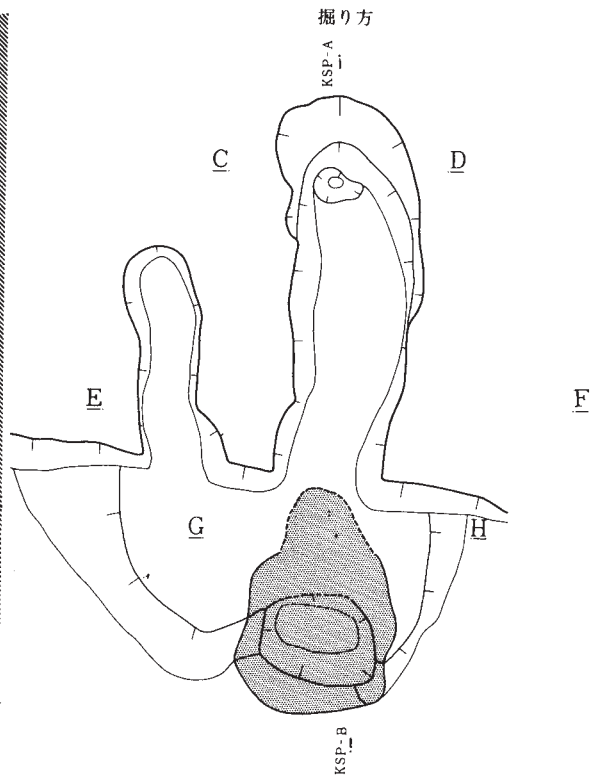
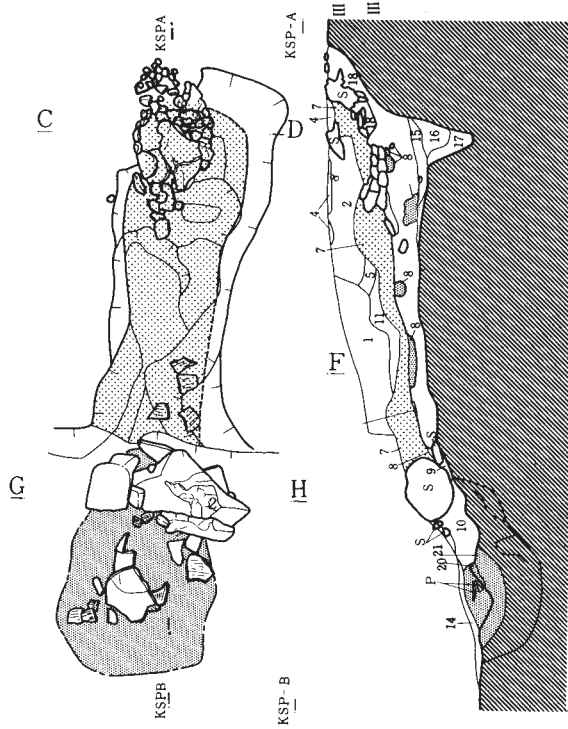
層位	土	色	土質	備 考
1 a層	10Y R 4/4	褐 色	埴土質	暗褐色土ブロック状に混入
1 b層	10Y R 3/3	暗 褐色	"	"
1 c層	10Y R 1.7/1	黒 褐色	"	ローム粒上半中量、下半多量
1 d層	7.5Y R 2/2	黒 褐色	"	" 多量、焼土粒中量
2 a層	7.5Y R 3/4	暗 褐色	"	焼土粒多量
2 b層	10Y R 5/6	黄 褐色	"	"
2 c層	10Y R 4/6	褐 色	"	ローム粒中量
2 d層	10Y R 3/4	暗 褐色	"	ボソボソしている
2 e層	10Y R 5/6	黄 褐色	"	"
2 f層	10Y R 6/8	明黄褐色	"	(III層の土)ボソボソしている
2 g層	10Y R 3/3	暗 褐色	"	ローム粒、焼土粒中量
2 h層	10Y R 5/6	黄 褐色	"	(III層の上)
2 i層	10Y R 4/6	褐 色	"	ボソボソしている
2 j層	10Y R 4/6	褐 色	"	"
3 a層	10Y R 4/4	褐 色	"	3 b・3 c層より黄色味強い
3 b層	10Y R 4/4	褐 色	"	暗褐色土、シミ状に混入
3 c層	10Y R 4/4	褐 色	"	"
B 1層	10Y R 2/3	黒 褐色	"	ローム粒多量 (80%)

〔第11号住居跡Pit計測表〕

PitNo.	規模	深さ	PitNo.	規模	深さ
1	72×40	10	2	40×36	2
3	50×14	6	4	22×14	7
5	52×44	17	6	34×20	6
7	36×32	13	8	24×20	15
9	24×17	8	10	52×32	4
11	44×32	30	12	82×52	4



第109図 第11号住居跡実測図



〔第11号住カマド〕 注 記

層位	土 色	土 質	備 考
1	10Y R 3/4 暗 褐 色	埴土質	ローム粒中量
2	10Y R 4/4 褐 色	"	焼土粒少量
3	10Y R 4/6 赤 褐 色	"	" 多量
4	10Y R 5/6 黄 褐 色	"	ローム粒多量
5	10Y R 4/4 褐 色	"	" 多量
6	10Y R 5/6 黄 褐 色	"	" 多量
7	10Y R 5/8 黄 褐 色	"	ローム粒の集合体
8	5 Y R 4/8 赤 褐 色	"	堅く、脆い焼土粒の集合体
9	10Y R 3/4 暗 褐 色	"	ローム粒多量、焼土粒中量
11	10Y R 3/4 暗 褐 色	"	ローム粒中量
12	10Y R 4/6 褐 色	"	"
13	7.5Y R 4/6 褐 色	"	堅い焼土粒多量
14	10Y R 4/6 褐 色	"	ローム粒多量
15	10Y R 2/2 黒 褐 色	"	細粒ローム多量
16	10Y R 5/6 黄 褐 色	"	細粒ロームの集合体、暗褐色土混入
17	7.5Y R 5/6 明 褐 色	"	(Ⅲ層の土)
18	10Y R 4/6 褐 色	"	ローム粒少量
19	10Y R 3/3 暗 褐 色	"	" 少量
20	7.5Y R 5/8 明 褐 色	"	焼けたローム塊の集合体
21	5 Y R 5/8 明 赤 褐 色	"	焼けたロームの集合体
22	10Y R 5/6 黄 褐 色	"	(Ⅲ層の土) 粒状
23	10Y R 5/6 黄 褐 色	"	(Ⅲ層の土)

第110図 第11号住居跡かまど実測図

は覆土中に焼土層（1 d・2 a層）がある。また、灰褐色火山灰、青灰色火山灰が2 d層中にブロック状に混在していた。

壁 ほぼ垂直に立ちあがる。

床 層を掘りこんで使用しており、ほぼ平坦である。中央やや東寄りには火を受けたためか赤変している箇所がみられる。

壁溝 存在しない。

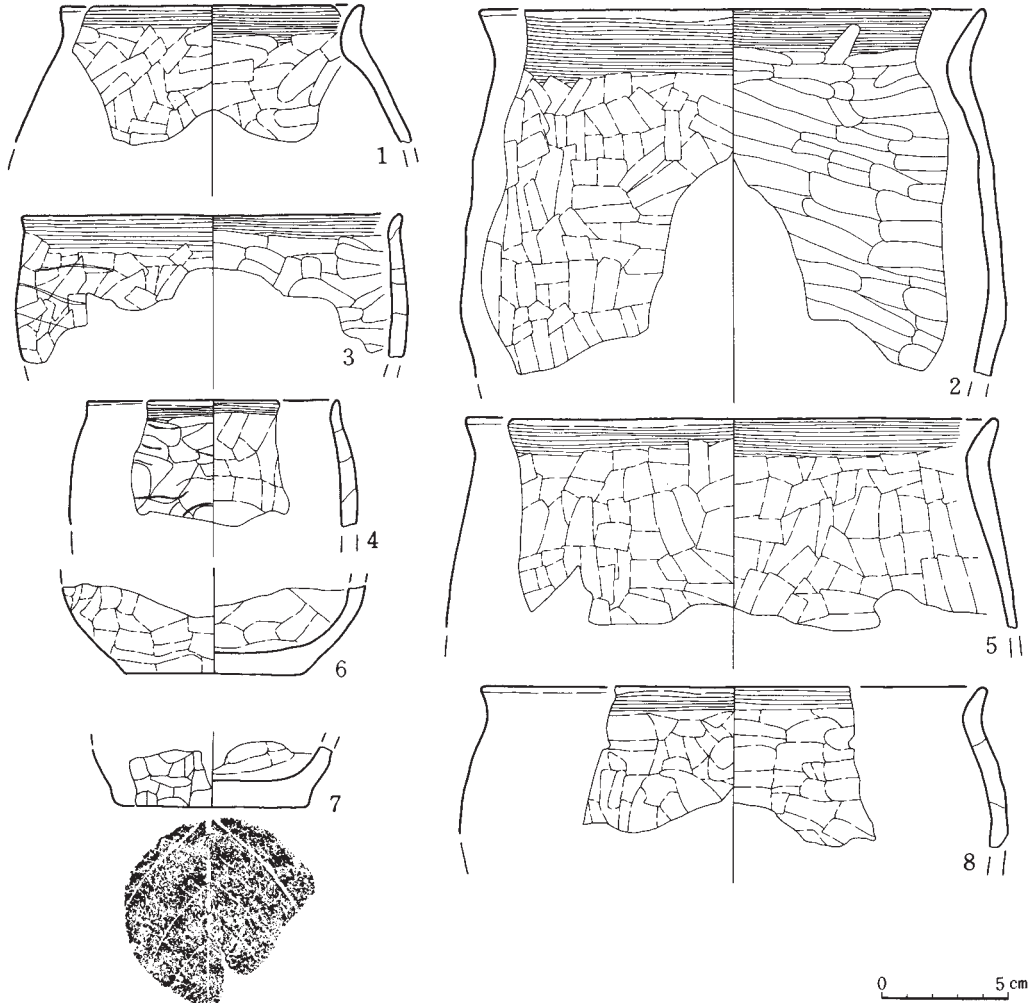
ピット 11個検出した。Pit 5と11は柱穴と思われる。

かまど 煙道部は半地下式である。燃焼部から壁外に向かって緩く立ちあがっているが、煙出直下で20cmほど落ちこんでいる。煙出しとその周辺には礫（シルト岩）が密集しており、これと火山灰質土（7層）により煙出し部分と天井部が構築されている。煙道の入口付近には礫がみられ、かまど本体も礫を骨材として構築されていたものと思われる。燃焼部には土師器の破片が散在している。その下は搦鉢状に窪んで焼土粒混じりの褐色土が堆積しており、底面が火を受けて10cmほど下まで赤変している。なお、煙道部の北側に煙道と並行する深さ10cmほどで壁外にのびる溝があった。若干焼土が混入し、これも別なかまどの煙道となる可能性があるが、このほかの施設はまったくみられなかった。

出土遺物 かまど燃焼部の上部には多数の土師器甕の破片があり、かまど燃焼部の崩落した大きな礫の下部の火床面の直上にも多数の土師器甕の破片があった。燃焼部から煙道に入った所にも甕の破片があった（2）。かまど北側の床面では大きな礫が出土した。床面からはそのほか数は少ないが土師器甕の破片や羽口の断片が出土した。覆土中からは鉄棒が1点出土した。かまどの脇のピット2の周辺や（3）東隅の床面からも甕が出土した。（坂本）

第36表 第11号住居跡出土土器観察表

遺物番号	種類	器種	器部	法量(cm)			調整			胎土	焼成	色調	備考	出土位置
				口径	底径	器高	口縁部	胴部	底辺部					
1	土師器	甕	口縁	(12)				ヘラナデ ヘラナデ		1~3mm位の砂粒が混入	良好	2.5YR5/6 6/6		カマドP-11
2	"	"	"	(20)				横ナデ 横ナデ		1~2mm位の砂粒混入 砂っぽい	"	7.5YR5/3 5YR6/2	煤状炭化物が 薄く付着して いる	カマドP-12・ 14・15
3	"	"	"	(15)				"		1~2mm位の砂粒が少	"	2.5YR5/6 5YR5/4		カマド
4	"	"						"	ケズリ ヘラナデ		"			
5	"	"	口縁	(21)				"		1~2mm位の砂粒が多	良好で堅い	5YR8/4 7.5YR8/4	煤状炭化物が 薄く付着して いる	カマド P-19・13
6	"	"	底面		7			ヘラナデ ヘラナデ	ケズリ ヘラナデ		良好	2.5YR5/3 7.5YR4/2	外面が変色して いる	2層 床P-7・10・8
7	"	"	"		7.5			ヘラナデ ヘラナデ		1mm位の砂粒 少量 良質粘土	"	2.5YR6/6 6/8	底面木葉痕	カマド P-22・23
8	"	"	口縁	(20)				横ナデ 横ナデ	ヘラナデ ヘラナデ	ケズリ	"	5YR7/4 6/4		床P-3



第111図 第11号住居跡出土遺物実測図

第12号住居跡 (第112図、第113図)

位置と確認 CH - 46・47、CI - 46・47から約30cmほどの窪みを確認した。

平面形と規模

平面形	主 軸	規 模								面積 (m ²)
		壁 長 (m)				壁 高 (cm)				
方 形	S - 15° - W	南	西	北	東	南	西	北	東	15.44
		4.2	3.7	3.8	4.2	74	74	84	74	

堆積土 13層に分層できた。大別すると、黒色土、黒褐色土、暗褐色土、褐色土、黄褐色土、明黄褐色土である。黒色土、黒褐色土、暗褐色土は中央部分に、褐色土、黄褐色土、明黄褐色土は壁際及び床面真上に堆積していた。西壁下から中央部分にかけて、広範囲に焼土が存在することから焼失したものとされる。

壁 北壁はほぼ垂直に近い立ち上がりであるが、その他は、やや緩い傾斜である。壁上部は柔くて脆いが、下部は堅い。

床 ほぼ平坦で、強く締っている。

壁溝 北西の隅と南西・南東の隅の一部分から検出した。幅は上端が6～20cm、下端が2～12cmで、深さは4～14cmである。

ピット 住居跡内から4個検出した。pit - 1は90×110cmの不整楕円形で、深さが110cmと深く断面形は挿鉢状である。pit - 2は不整形で深さが50cm、pit - 3・4は、不整形ではあるが、深さが6cmと26cmで浅い。ピットの配置が不規則であり、各ピットは柱穴かどうか不明である。

かまど 南壁のほぼ中央寄りに構築されている。本体部分では、天井部に使用したと思われるシルト岩が崩れた状態で出土した。両袖もシルト岩を骨材として使用しているが、残存状態はあまり良くない。焼土範囲は径70×90cmの楕円形で、中央部分の深さが10cmの浅皿状を呈している。また、その付近からは、土師器片が密集して出土した。煙道上部に自然層の第層が堆積していることから、この住居跡の煙道はトンネル式だと思われるが、崩落が著しく、煙道の規模及び天井部の構造は知り得ない。

出土遺物 住居跡内に土師器須恵器片が散在していた。 (成田・津川)

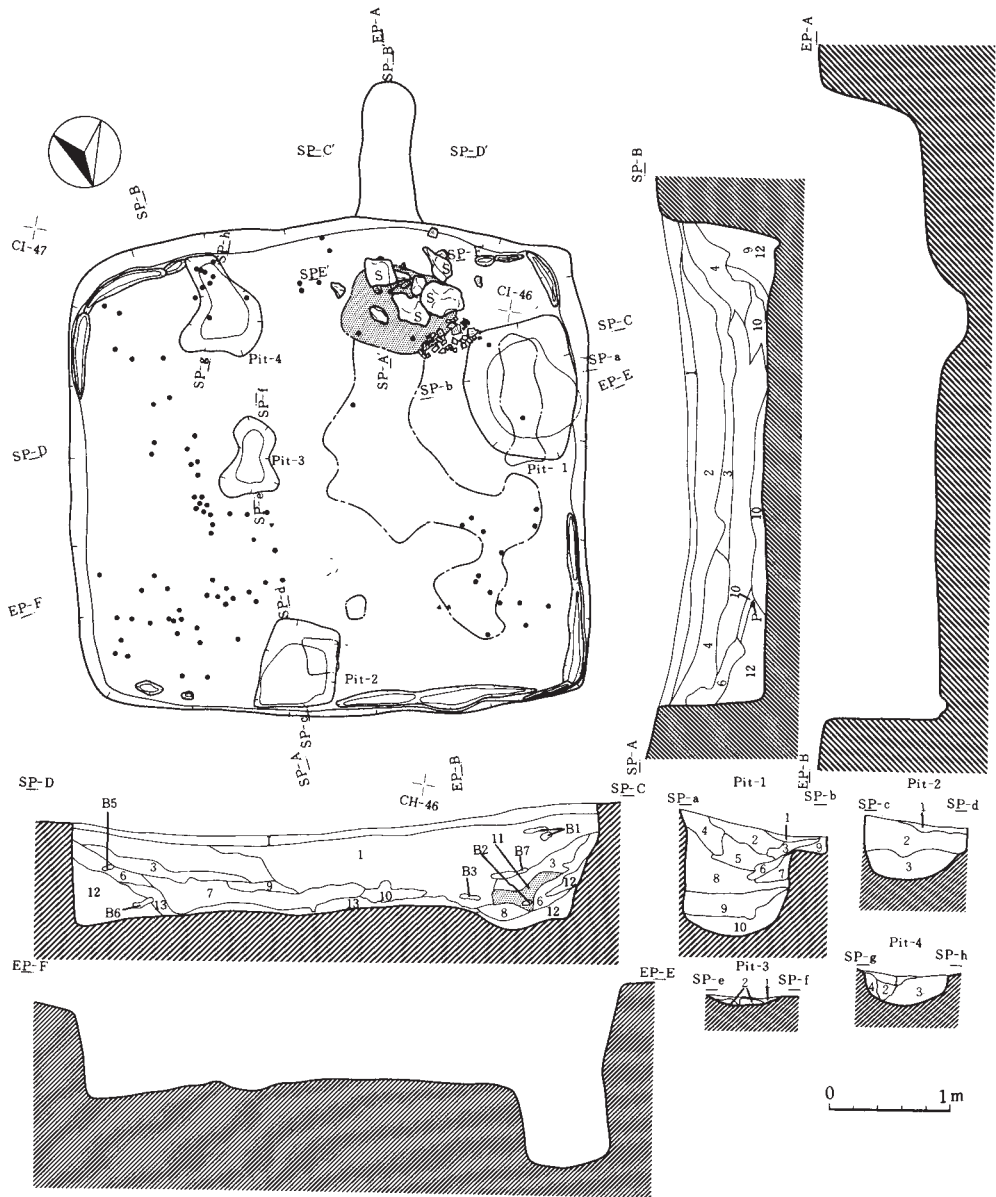
第37表 第12号住居跡出土土器観察表(1)

遺番	物号	種類	器種	器部	法量 (cm)			調整			胎土 (mm)	焼成	色調	備考	出土位置
					口径	底径	器高	口縁部	胴部	底辺部					
1		土師器	甕形	口縁胴	(22)	—	—	強いヨコナデ	ヘラナデ	—	砂(多・3)	良好	5 Y R7/6 5 Y R6/3	二次火焼 変色・もろい	床面
2		土師器	甕形	口縁胴	(16)	—	—	〃	〃	—	砂(少2~3) 石英	〃	5 Y R7/4 5 Y R6/6		床面
3		土師器	甕形	口縁胴	(15)	—	—	〃	〃	—	砂(少2~3) 石(若・5)	〃	7.5 Y R7/4 5 Y R6/6		床面
4		土師器	甕形	口縁胴	(13)	—	—	〃	〃	—	砂(少・1)	〃	7.5 Y R7/4 7.5 Y R7/4		床面P73
5		土師器	甕形	完形	12.5	8	15.3	〃	ユビナデ ヘラナデ	強い ヘラナデ	砂(多1~3)	〃	5 Y R7/4 5 Y R8/3		カマド P130
6		土師器	甕形	口縁胴	(12)	—	—	〃	ヘラナデ	—	砂(少)	〃	2.5 Y R6/4 2.5 Y R6/4		カマド P121・123
7		土師器	甕形	口縁胴	(13)	—	—	〃	〃	—	砂(多・1) 石英(1)	〃	7.5 Y R7/4 7.5 Y R7/6		カマド
8		須恵器	小型甕	完形	14.5 16	6.5 7	12.5 12.8	〃	ロクロ ケズリ	ケズリ	石粒を少量 混入	〃	2.5 Y R4/1 2.5 Y R4/1	糸切痕を ケズリで 整えている	2層P16 P54

*胎土の砂は砂粒の略

第13号住居跡(第116図、第117図)

位置と確認 CA、CB、CC - 40・41、42の位置から深さ約60cmの窪みを確認した。



〔第12号住居跡〕 注 記

層位	土 色	土 質	備 考
1層	10Y R 2/1	黒 色	シルト質 混入物なし
2層	10Y R 3/3	暗 褐色	シルト質 混入物なし
3層	10Y R 3/4	暗 褐色	シルト質 ローム粒混入
4層	10Y R 4/4	暗 褐色	シルト質 ローム粒少量混入
5層	10Y R 3/2	黒 褐色	シルト質 ローム粒混入
6層	10Y R 4/6	暗 褐色	シルト質 ローム粒少量混入
7層	10Y R 4/3	こげみ黄褐色	ローム質 ローム粒混入
8層	10Y R11/1	黒 色	シルト質 ローム粒多量混入
9層	10Y R 2/2	黒 褐色	シルト質 ローム粒少量混入
10層	7.5Y R 3/3	暗 褐色	シルト質 焼土混入
11層	5 Y R 5/8	明赤 褐色	焼土
12層	10Y R 6/8	明黄 褐色	ローム質 混入物なし
13層	10Y R 6/6	明黄 褐色	ローム質 混入物なし
B1層	10Y R 5/6	黄 褐色	ローム質 ローム粒少量混入
B2層	10Y R 5/8	黄 褐色	ローム質 混入物なし
B3層	10Y R 4/4	暗 褐色	シルト質 黒色土混入
B4層	10Y R 5/8	黄 褐色	ローム質 混入物なし
B5層	10Y R 2/2	黒 褐色	シルト質 黒褐色土混入
B6層	10Y R 3/4	暗 褐色	シルト質 混入物なし
B7層	10Y R 3/4	暗 褐色	シルト質 ローム粒少量混入

〔第12号住居跡Pit 1〕 注 記

層位	土 色	土 質	備 考
1層	10Y R 2/3	黒 褐色	シルト質 ローム粒少量混入
2層	10Y R 2/3	黒 褐色	シルト質 ローム粒、焼土粒多量混入
3層	10Y R11/1	黒 色	シルト質 ローム粒混入
4層	10Y R 2/1	黒 褐色	シルト質 ローム粒多量混入
5層	10Y R 2/2	黒 褐色	シルト質 ローム粒少量混入
6層	10Y R11/1	黒 色	シルト質 ローム粒少量混入
7層	10Y R 2/2	黒 褐色	シルト質 ローム粒多量混入
8層	10Y R 6/8	明黄 褐色	ローム質 混入物なし
9層	10Y R 5/6	黄 褐色	ローム質 混入物なし
10層	10Y R 5/8	黄 褐色	ローム質 混入物なし

〔第12号住居跡Pit計測表〕

Pit No.	規 模	深 さ	Pit No.	規 模	深 さ
1	92 × 120	96	2	70 × 62	48
3	26 × 66	6	4	84 × 54	26

〔第12号住居跡Pit 3〕 注 記

層位	土 色	土 質	備 考
1層	10Y R 4/6	暗 褐色	シルト質 焼土多量混入
2層	10Y R 6/8	明黄 褐色	ローム質 混入物なし

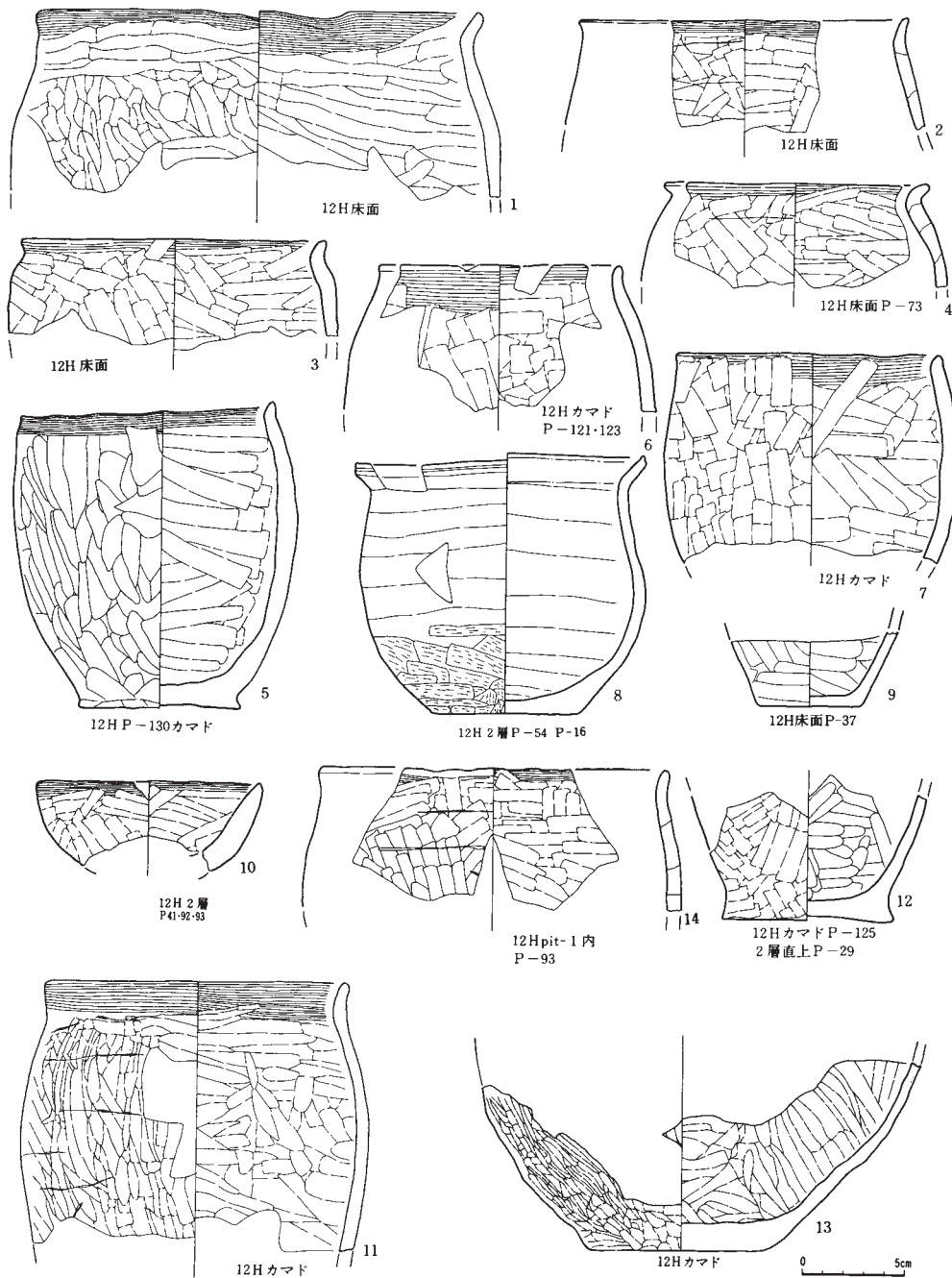
〔第12号住居跡Pit 4〕 注 記

層位	土 色	土 質	備 考
1層	10Y R 3/2	黒 褐色	シルト質 ローム粒少量混入
2層	10Y R 4/4	暗 褐色	シルト質 ローム粒少量混入
3層	10Y R 6/8	明黄 褐色	ローム質 混入物なし
4層	10Y R 6/6	明黄 褐色	ローム質 混入物なし

〔第12号住居跡Pit 2〕 注 記

層位	土 色	土 質	備 考
1層	10Y R 5/8	黄 褐色	ローム質 ローム粒多量混入
2層	10Y R 6/8	明黄 褐色	ローム質 混入物なし
3層	10Y R 7/8	黄 褐色	ローム質 混入物なし

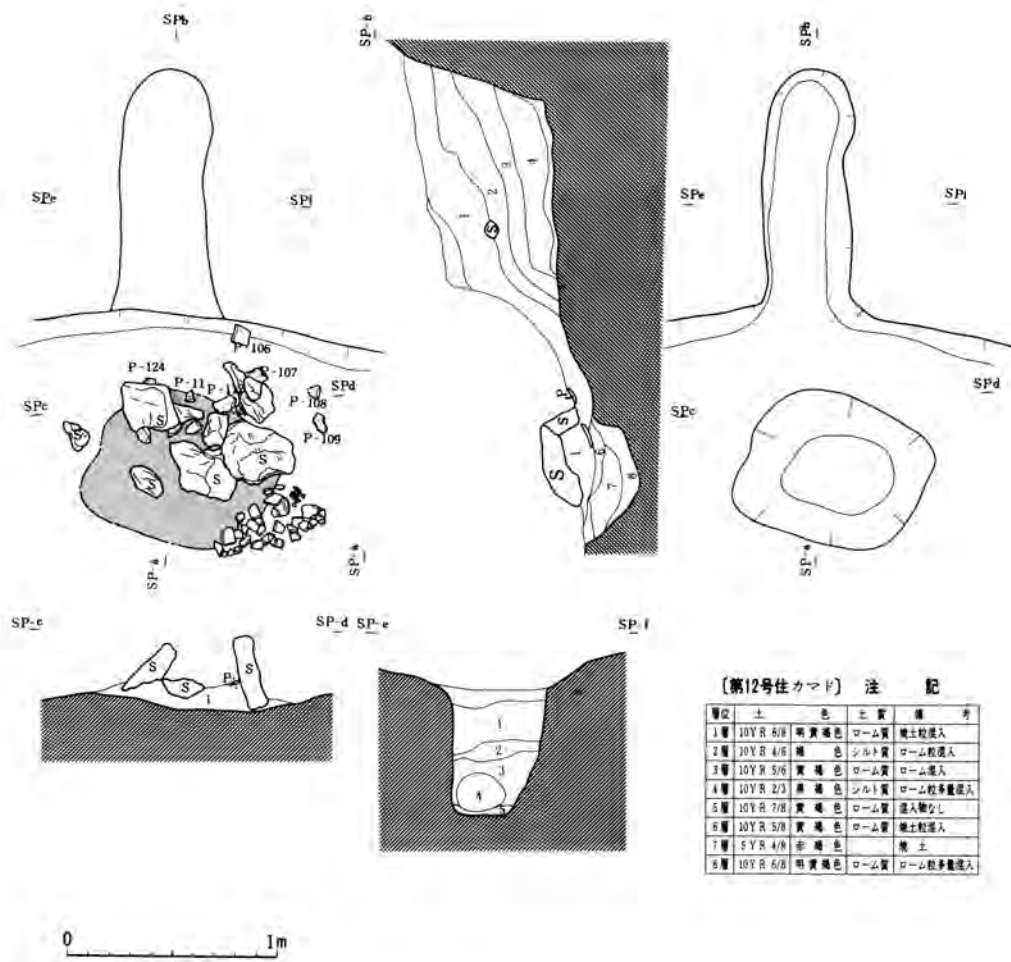
第 112 図 第12号住居跡実測図



第113図 第12号住居跡出土土器実測図

〈平面形と規模〉

平面形	主 軸	規 模								面積(m ²)
		壁 長 (m)				壁 高 (cm)				
方 形	N-27°-W	南	西	北	東	南	西	北	東	26.35
		5.1	5.3	5.2	5.7	40	46	60	76	



第114図 第12号住居跡かまど実測図

堆積土 9層に区分できた。大別すると黒色土、黒褐色土、褐色土の層となる。壁際には黄褐色土層(第 層と同質)があった。南西壁側の覆土内に焼土を検出した。規模は約1 × 1 mで厚さ15cmである。

第38表 第12号住居跡出土土器観察表(2)

遺物番号	種類	器種	器部	法 量 (cm)			調 整			胎 土 (mm)	焼 成	色 調	備 考	出土位置
				口 径	底 径	器 高	口 縁部	胴 部	底 辺部					
9	土師器	甕形	胴 辺	5	—	—	—	ヘラナデ	強い ヘラナデ	砂粒 (多1)	良 好	7.5Y R6/4 7.5Y R7/6		床面P-37
10	土師器	坏	口 縁 胴	11	—	—	強い ヨコナデ	強い ヨコナデ ヘラナデ	—	砂粒を含む が密	不 良	7.5Y R4/1 7.5Y R5/1	粘土紐 巻上げ成形	2層 P-22 P-92 P-93
11	土師器	甕形	口 縁 胴	(15)	—	—	"	"	—	砂(若1) 良粘	良 好	5 Y R2/2 5 Y R4/2		カマド
12	土師器	甕形	胴 辺	—	8.4	—	—	"	強い ヘラナデ	—	"	7.5Y R6/6 10YR8/9		カマドP-125 2層直上P-29
13	土師器	甕形	胴 底 辺	—	8.5 1 9	—	—	強い ヘラナデ	"	砂粒 (多1)	"	2.5Y R3/2 5 YR5/3		カマド
14	土師器	甕形	口 縁 胴	(17)	—	—	強い ヨコナデ	ヘラナデ	—	砂(多1-2) 石英(少)	"	7.5Y R7/4 7.5Y R7/4		ピット1 P93

壁 全体にほぼ垂直に近い立ち上がりである。

床 かまど周辺は、堅く締っているがほかは柔かである。ほぼ平坦である。

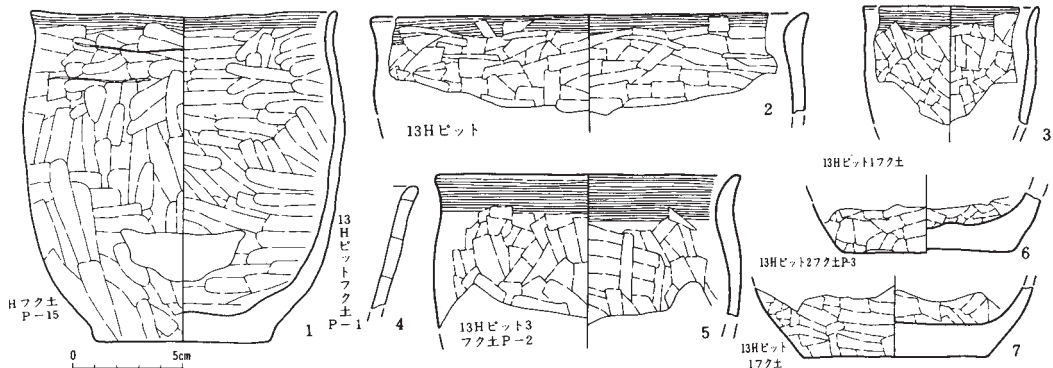
壁溝 南壁、東壁、西壁の壁下から検出した。幅は上端が8~18cm、下端が3~6cmで深さは5~15cmである。

ピット 住居跡内から検出したピットは、第 図の10個である。柱穴とみられるものは pit - 4 ~ 6 で、pit - 1 ~ 3 からは、土師器片が数10個出土していることから貯蔵穴と思われる。pit - 7 ~ 10は住居跡に伴うものである。

かまど 北壁の西寄り（Aかまど）と東寄り（Bかまど）に構築されており、Aかまどは、燃烧部の焼土が残存しているだけで、焼土範囲は、径60cmの円形を呈し、深さ9cmの浅皿状である。Bかまどは、燃烧部の焼土上面にシルト岩、土師器片が散在していたことから、Aかまどは古く、Bかまどは新しいものと思われる。Bかまどの焼土範囲は25cmの円形を呈し深さ5cmで浅皿状である。両方とも半地下式の煙道である。

出土遺物 pit 1 ~ 3 内及びかまど周辺の覆土から土師器破片（第115図）が出土した。

（成田・佐藤）

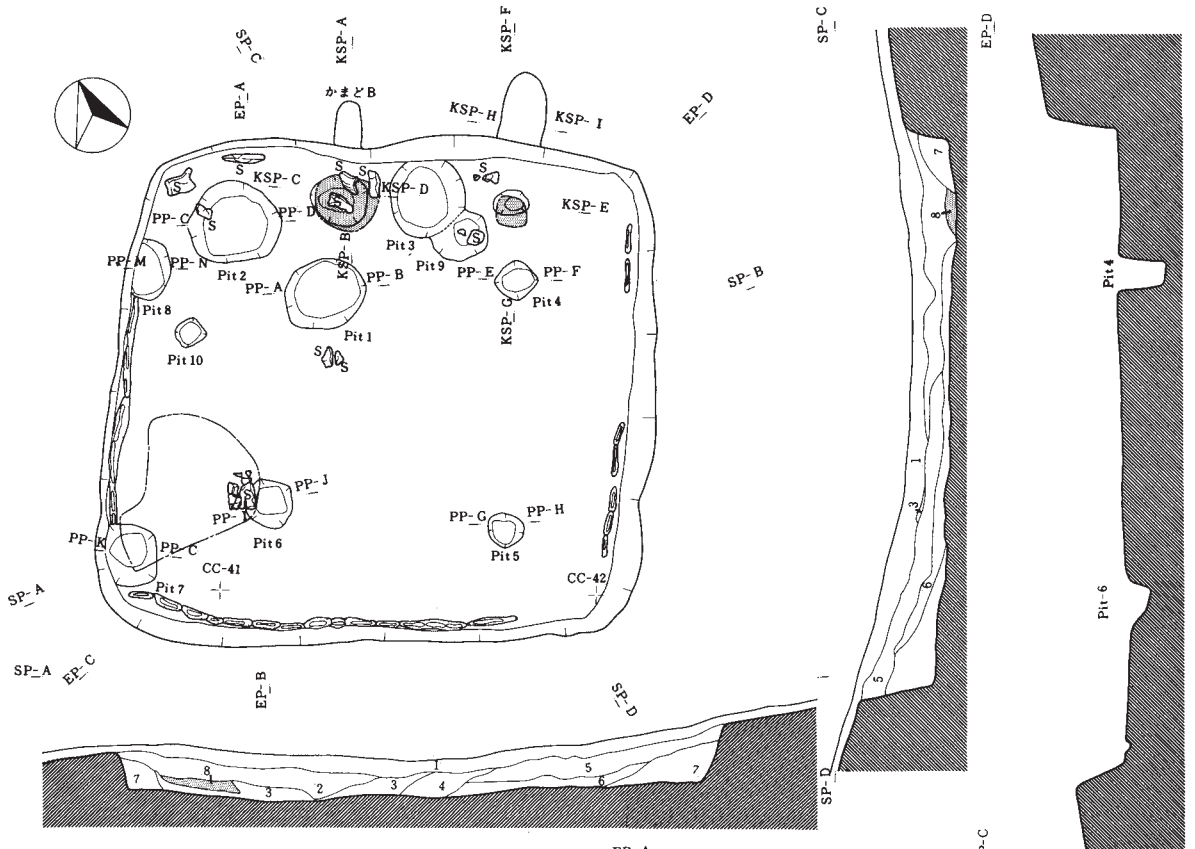


第 115 図 第13号住居跡出土土器実測図

第39表 第13号住居跡出土土器観察表

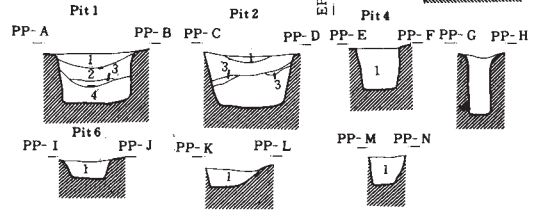
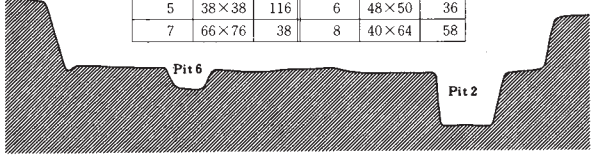
遺物番号	種類	器種	器部	法量 (cm)			調 整			胎 (mm) 土	焼成	色 調	備 考	出土位置
				口 径	底 径	器 高	口縁部	胴 部	底辺部					
1	土師器	甕形	半完形	(13.5) (15)	8	15	強い ヨコナデ	ヘラナデ	強い ヘラナデ	砂粒 (2~3)	良 好	5 Y R 7/4 5 Y R 7/8	☉ 煤 炭	フク土 P-15
2	土師器	甕形	口 縁 胴	(10)	—	—	”	”	—	砂(少2~3) 良粘	良・堅	2.5 Y R 6/6 2.5 Y R 6/4		ピット
3	土師器	小形甕	口 縁 胴	(8)	—	—	”	”	—	石英(微) (1~2)	”	7.5 Y R 4/2 7.5 Y R 7/4	内面の口縁 が黒褐色	ピット1 フク土
4	土師器	鉢形	口 縁 胴	(19)	—	—	”	”	—	石英(1~2)	良 好	5 Y R 4/2 5 Y R 6/3	煤 炭 ☉	ピット1 フク土P-1
5	土師器	小形甕	口 縁 胴	(14)	—	—	”	”	—	砂(少1~2) 良粘	良・堅	2.5 Y R 7/4 5 Y R 6/4		ピット3 フク土P-2
6	土師器	甕形	胴 底 辺	—	(7.5)	—	—	”	強い ヘラナデ	砂(少1~4)	”	2.5 Y R 6/6 10 R 5/6	☉ 煤 炭	ピット2 フク土P-3
7	土師器	甕形	胴 底 辺	—	(8.5)	—	—	”	”	砂(微2~3)	”	2.5 Y R 6/4 7.5 Y R 6/3	☉ 変 色	ピット1 フク土

※胎土の砂は砂粒の略



EP_B (第13号住居跡 Pit計測図) EP_A

Pit No	規模	深さ	Pit No	規模	深さ
1	88×76	104	2	88×96	110
3	80×86	70	4	44×40	88
5	38×38	116	6	48×50	36
7	66×76	38	8	40×64	58



0 1 m

【第13号住居跡】注記

層位	土色	土質	備考
1層	7.5Y R1/1	黒色シルト質	混入物なし
2層	10Y R1/1	黒色シルト質	混入物なし
3層	10Y R 2/3	黒褐色シルト質	ロームブロック
4層	10Y R 3/2	黒褐色シルト質	シルト粒少量混入
5層	10Y R 4/6	褐色シルト質	黒色土混入
6層	10Y R 5/4	にぶい黄褐色ローム質	混入物なし
7層	10Y R 5/6	黄褐色ローム質	炭化物微量、黒色土微量混入
8層	5 Y R 4/8	赤褐色	焼土

【第13号住居跡Pit1】注記

層位	土色	土質	備考
1層	10Y R 2/2	黒色シルト質	ローム少量混入
2層	10Y R 4/6	褐色シルト質	炭化物微量混入
3層	10Y R 3/4	暗褐色シルト質	炭化物、焼土微量混入
4層	10Y R 5/6	黄褐色ローム質	混入物なし

【第13号住居跡 pit 2】注記

層位	土色	土質	備考
1層	10Y R 2/3	黒褐色シルト質	ローム混入、焼土少量混入
2層	10Y R 5/8	黄褐色シルト質	黒色土微量混入
3層	10Y R 4/6	褐色シルト質	混入物なし
4層	10Y R 5/6	黄褐色ローム質	炭化物微量混入

【第13号住居跡 pit 3】注記

層位	土色	土質	備考
1層	10Y R 4/6	褐色シルト質	焼土、炭化物微量混入
2層	10Y R 5/6	黄褐色ローム質	炭化物・焼土粒・少量混入
3層	7.5Y R 4/4	褐色シルト質	焼土粒微量混入

【第13号住居跡 Pit 4】注記

層位	土色	土質	備考
1層	10Y R 4/4	褐色シルト質	炭化物少量混入

【第13号住居跡Pit 5】注記

層位	土色	土質	備考
1層	10Y R 5/6	黄褐色ローム質	混入物なし

【第13号住居跡Pit 6】注記

層位	土色	土質	備考
1層	10Y R 5/6	黄褐色ローム質	混入物なし

【第13号住居跡Pit 7】注記

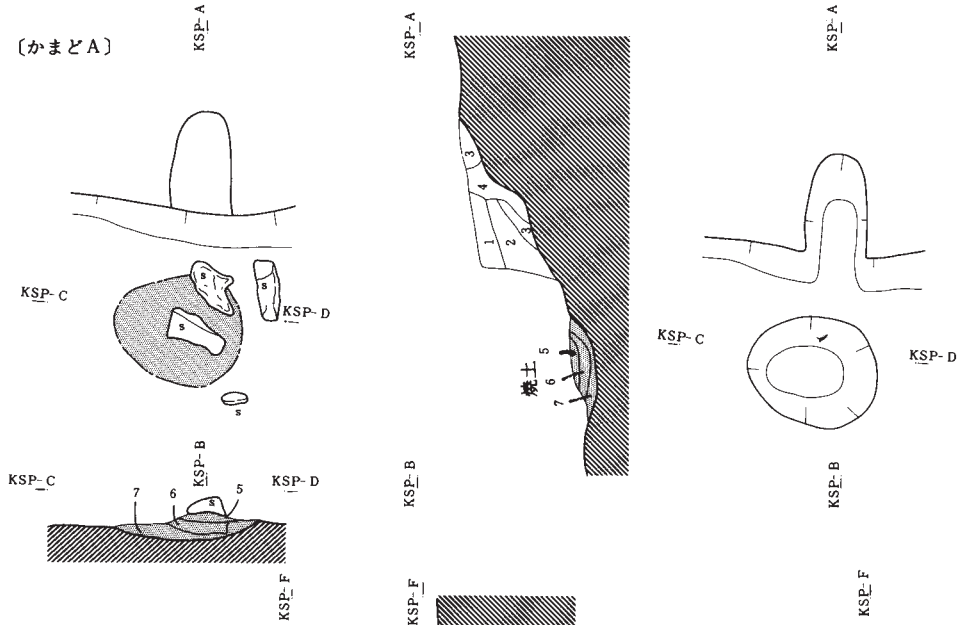
層位	土色	土質	備考
1層	10Y R 5/6	黄褐色ローム質	混入物なし

【第13号住居跡Pit 8】注記

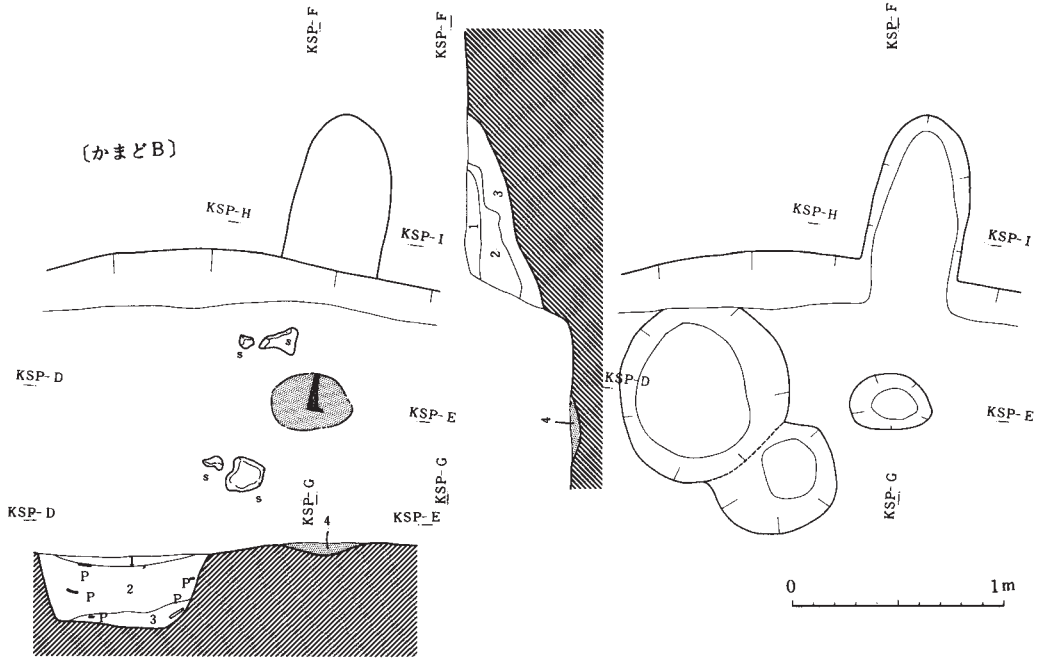
層位	土色	土質	備考
1層	10Y R 5/6	黄褐色ローム質	混入物なし

第116図 第13号住居跡実測図

〔かまどA〕



〔かまどB〕



〔第13号住居跡カマドA〕 注 記

層位	土 色	土 質	備 考
1層	10YR 5/6 黄褐色	ローム質	黒色土混入
2層	10YR 4/6 褐色	シルト質	ローム粒、焼土少量混入
3層	10YR 6/8 明黄褐色	ローム質	混入物なし
4層	10YR 3/4 暗褐色	シルト質	炭化物微量混入
5層	5YR 4/8 赤褐色		焼土、炭化物微量混入
6層	5YR 5/8 明赤褐色		焼土、混入物なし
7層	5YR 5/8 明赤褐色		焼土、

〔第13号住居跡カマドB〕 注 記

層位	土 色	土 質	備 考
1層	10YR 4/6 褐色	シルト質	黒色土混入
2層	10YR 5/8 黄褐色	ローム質	混入物なし
3層	10YR 5/4 暗褐色	シルト質	炭化物微量混入、ローム粒少量混入
4層	5YR 4/8 赤褐色		焼土、炭化物微量混入

第117図 第12号住居跡かまど実測図

第14号住居跡（第118図、第119図）

位置と確認 C A・C B - 44・45・46、C C - 45・46の位置から約50cmの窪みを確認した。

平面形と規模

平面形	主 軸	規 模								
		壁 長 (m)				壁 高 (cm)				面積 (㎡)
		南	西	北	東	南	西	北	東	
・ 方 形	S - 18° - W	4.8	5.4	5.2	5.2	74	92	98	58	22.88

堆積土 13層に区分できたが大別すると黒色土、黒褐色土、暗褐色土、褐色土、明黄褐色土、黄褐色土層に区分できた。覆土内に厚さ10cmの焼土ブロックを検出した。自然堆積である。

壁 全壁が、底面から外に開きながら立ち上がる。覆土の堆積状況から崩落したものと考えられる。

床 かまど周辺は堅く締まっているがほかは締りがいい、ほぼ平坦である。

壁溝 北壁、東壁、西壁に検出したが連続しない。幅は、上端が5～15cm、下端が3～5cmで深さ7～12cmである。

ピット 住居跡内から、4個検出したが、柱穴と思われるpitは検出できなかった。pit - 2は浅皿状で、pit - 1・3・4は柱穴以外のものと思われる。

かまど 南壁の西寄りに地山を掘り込んで構築されている。煙出し部の石組が良好に残存しているが、煙道部分は、残存状況がよくない。燃烧部の焼土周辺に、シルト岩、土師器が散在していた。焼土範囲は径65cmの円形を呈し中央の厚さ10cmで浅皿状である。

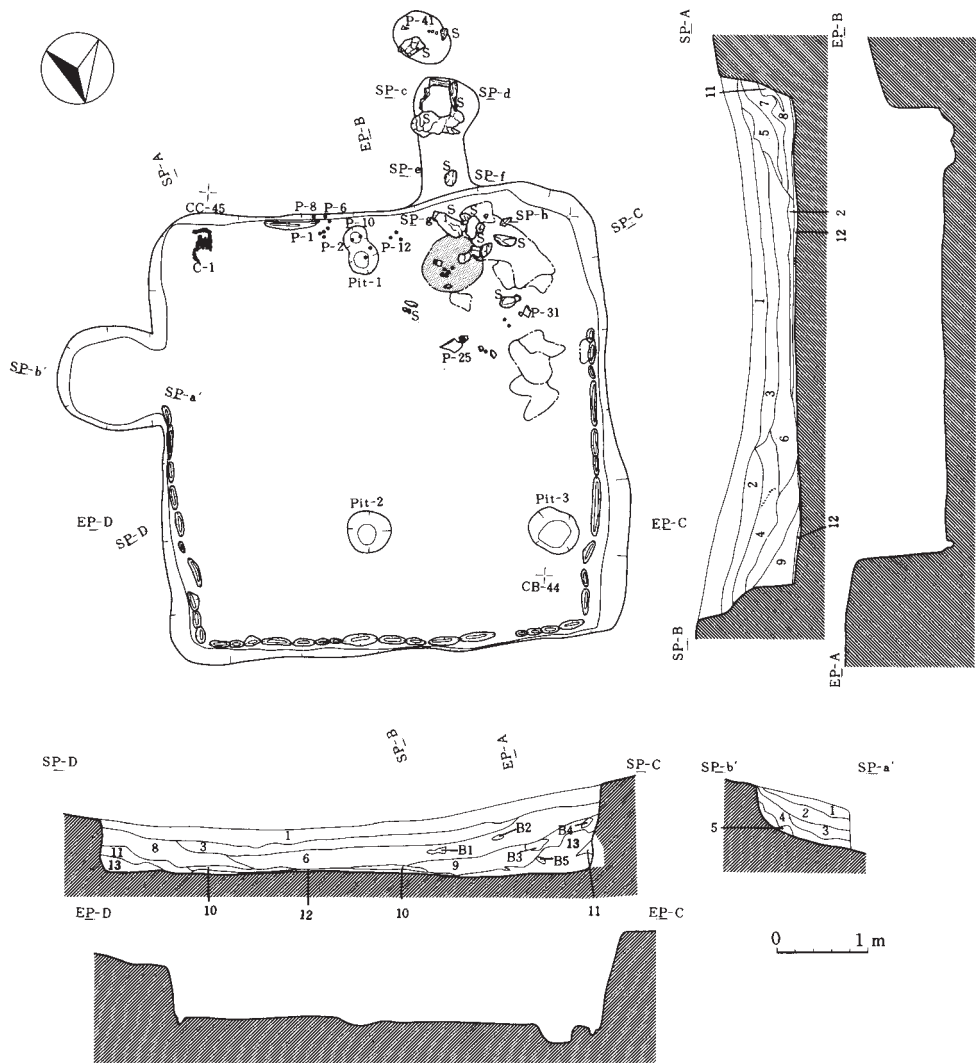
その他の施設 東壁の南寄りに位置する張り出した施設である。幅1.2m、長さ1.1mほどの規模である。床面が踏み固められたように締まっていることから出入口ではないかと考えられる。

出土遺物 かまど内及び周辺からは、第120図1～3、床直上からは、第120図5～7の土師器破片が出土した。 (成田・佐藤)

第40表 第14号住居跡出土土器観察表-(1)

遺物番号	種類	器種	器部	法 量 cm			調 整			胎 土 mm	焼 成	色 調	備 考	出土位置
				口 径	底 径	器 高	口縁部	胴 部	底辺部					
1	土師器	甕形	口縁部	(18)	—	—	強いヨコナデ	ヘラナデ	—	砂(多・1)粒	良好	5YR6/3 5YR6/4		かまど周辺 P-31
2	土師器	甕形	口縁部	(18)	—	—	〃	〃	—	砂(1~2) 石英(微)	〃	7.5YR3/1 5YR5/4		かまど周辺 P-25
3	土師器	甕形	口縁部	(14)	—	—	〃	〃	—	砂(2~3) 石英(少・1)	〃	7.5YR7/4 5YR8/3		かまど煙道 上II層P-16
4	土師器	甕形	口縁部	(15)	—	—	〃	〃	—	砂(少1~2)	〃	5YR2/2 5YR4/3		床直P-7・9・ 20・22
5	土師器	甕形	口縁部	(23.5)	—	—	〃	強いヘラナデ	—	砂(少・1)	〃	5YR6/4 7.5YR6/4	外・内 煤 炭	床 直
6	土師器	甕形	口縁部	(15)	—	—	〃	〃	—	砂(微・1~2)	〃	2.5YR6/4 5YR5/3	内面・断面 煤炭(破片になっ てから二次火焼)	床 直P-11

※胎土の砂は砂粒の略



【第14号住】 注 記

層位	土 色	土 質	備 考
1層	10Y R 2/1 黒 色	シルト質	混入物なし
2層	10Y R 2/2 黒 褐色	シルト質	混入物なし
3層	10Y R 2/3 黒 褐色	シルト質	混入物なし
4層	10Y R 4/2 灰黄褐色	ローム質	ローム粒少量混入
5層	10Y R 3/3 暗 褐色	ツルト質	ローム粒混入
6層	10Y R 2/3 黒 褐色	シルト質	ローム粒混入
7層	10Y R 5/8 黄 褐色	ローム質	ローム混入
8層	10Y R 4/3 にぶい黄褐色	ローム質	ローム混入
9層	10Y R 5/4 にぶい黄褐色	ローム質	ローム混入
10層	10Y R 4/6 褐 色	シルト質	ローム少量混入
11層	10Y R 5/8 黄 褐色	ローム質	混入物なし
12層	10Y R 6/8 明黄褐色	ローム質	混入物なし
13層	10Y R 5/6 黄 褐色	ローム質	ローム粒少量混入
B ₁ 層	7.5Y R 4/6 褐 色	シルト質	混入物なし
B ₂ 層	7.5Y R 4/4 褐 色	シルト質	混入物なし

層位	土 色	土 質	備 考
B ₃ 層	5 Y R 4/6 赤 褐色		焼土
B ₄ 層	10Y R 3/3 暗 褐色	シルト質	混入物なし
B ₅ 層	10Y R 2/3 極暗褐色	シルト質	ローム粒混入

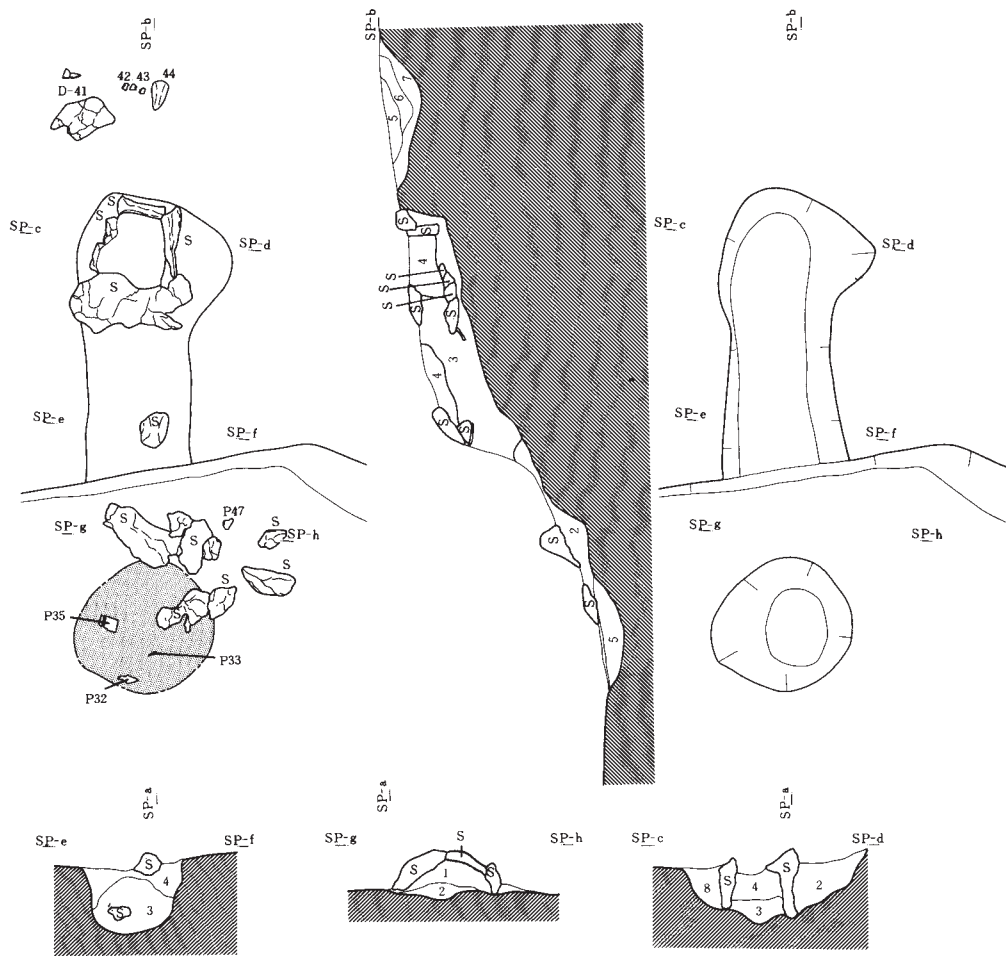
【第14号住張り出し部】 注 記

層位	土 色	土 質	備 考
1層	10Y R 2/2 黒 褐色	シルト質	混入物なし
2層	10Y R 2/3 黒 褐色	シルト質	混入物なし
3層	10Y R 3/4 暗 褐色	シルト質	褐色粒混入
4層	10Y R 3/4 暗 褐色	シルト質	褐色粒多量混入
5層	10Y R 4/6 褐 色	シルト質	混入物なし

【第14号住居跡 pit計測表】

pit No.	規 模	深 さ	pit No.	規 模	深 さ
1	56×24	13	2	46×50	9
3	56×48	35			

第118図 第14号住居跡実測図



〔第14号住カマド〕 注 記

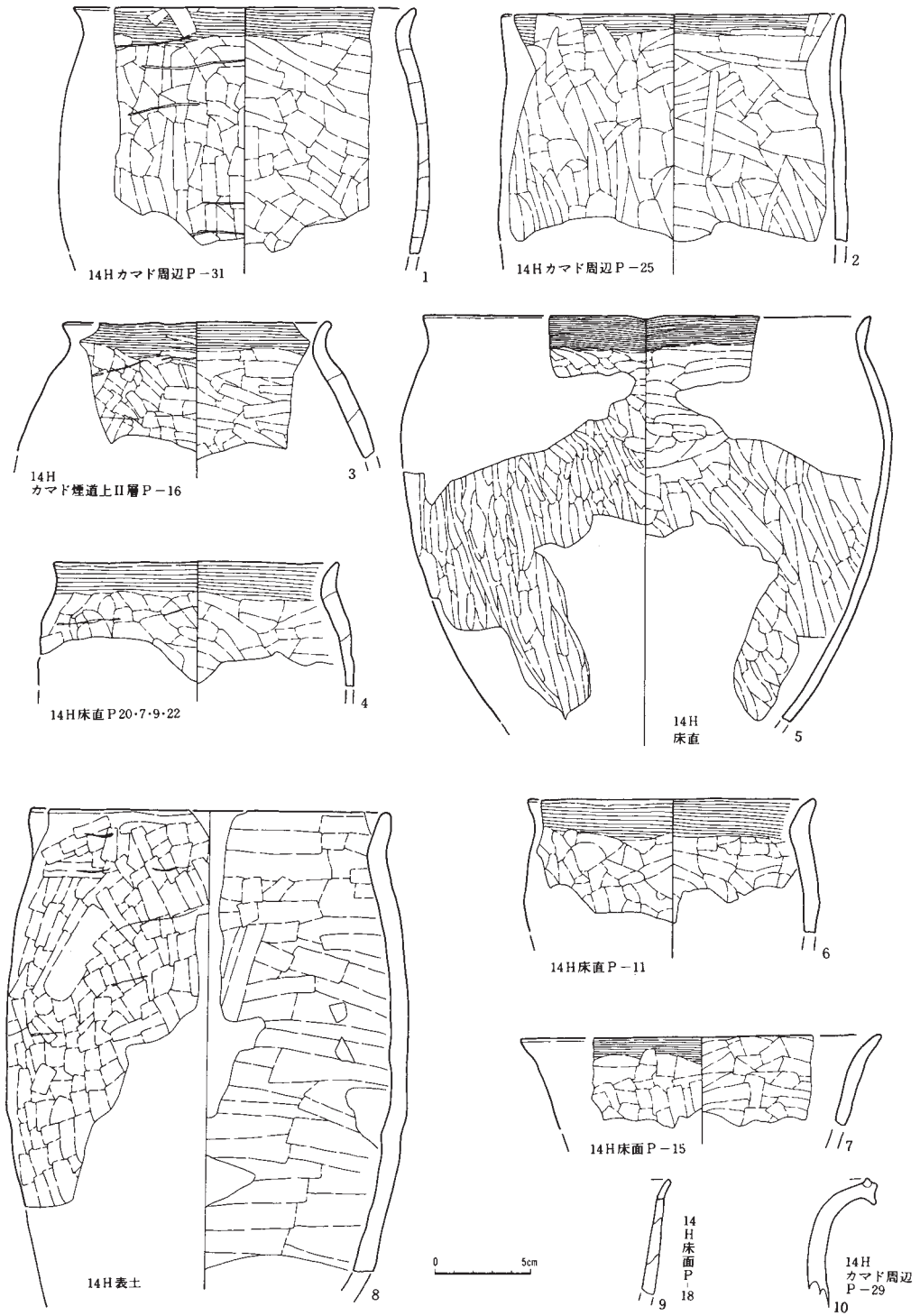
層位	土 色	土 質	備 考
1層	10 Y R 4/4 褐色	シルト質	混入物なし
2層	10 Y R 5/6 黄褐色	ローム質	混入物なし
3層	10 Y R 3/3 暗褐色	シルト質	ローム粒混入
4層	10 Y R 5/8 黄褐色	ローム質	ローム粒混入
5層	10 Y R 5/8 明赤褐色		焼土
6層	10 Y R 5/6 黄褐色	ローム質	混入物なし
7層	10 Y R 6/6 明黄褐色	ローム質	混入物なし
8層	10 Y R 4/6 褐色	シルト質	ローム粒少量混入
9層	2.5 Y R 5/8 明赤褐色		焼土

第119 図第14号住居跡かまど実測図

第41表 第14号住居跡出土土器観察表(2)

遺物番号	種類	器種	器部	法 量 cm			調 整			胎土mm	焼成	色 調	備 考	出土位置
				口 径	底 径	器 高	口縁部	胴 部	底辺部					
7	土師器	鉢形	口縁胴	(19)	—	—	強いヨコナテ	強いヘラナテ	—	砂(少・1~2)	良好	2.5YR6/4 5YR5/2		床面 P-15
8	土師器	甕形	口縁胴	(19)	—	—	ヘラナテ	〃	—	砂(多・2) 石英(若)	〃	2.5YR4/4 5YR4/3		表 土
9	土師器	鉢形	口縁胴	(20)	—	—	強いヨコナテ	〃	—	砂(少・2~3)	〃	2.5YR4/6 2.5YR6/4		床面 P-18
10	須恵器	長壺形	口縁胴	(14)	—	—	ロクロ	ロクロ	—		良・堅	N31 N51		カマド周辺 P-29

※胎土の砂は砂粒の略



第120図 第14号住居跡出土土器実測図

第15号住居跡（第121図、第122図）

位置と確認 B Y - 46・47・48、B Z - 46・47・48から約70cmの窪みを確認した。

平面形と規模

平面形	主 軸	規 模								面積(m ²)
		壁 長 (m)				壁 高 (cm)				
長 方 形	S - 18° - W	南	西	北	東	南	西	北	東	39.15
		6.6	5.9	6.8	6.0	57	94	52	56	

堆積土 7層に分層できた。大別すると、黒色土、黒褐色土、暗褐色土、褐色土である。住居跡の中央部では、黒褐色土と暗褐色土の2層だけで、壁際では暗褐色土と褐色土が堆積しており、西壁際の下層に火山灰らしいものがブロック状にみられる。自然的堆積状況である。

壁 どの壁もほぼ垂直に近い立ち上がりである。壁上部はやや脆く柔らかいが、下部は堅い。

床 壁溝沿いの部分は柔らかいが、他は全体的に締っていて堅い。南東隅の部分、床面は堅い締めをもって他の床面より一段高くなっている以外はほぼ平坦である。

壁溝 東壁北寄り部分とかまど周辺を除く四方の壁下から検出した。上端幅6～30cm、下端幅4～16cm、深さ3～12cmである。また、住居跡の四隅には小ピット状の窪みがみられる。

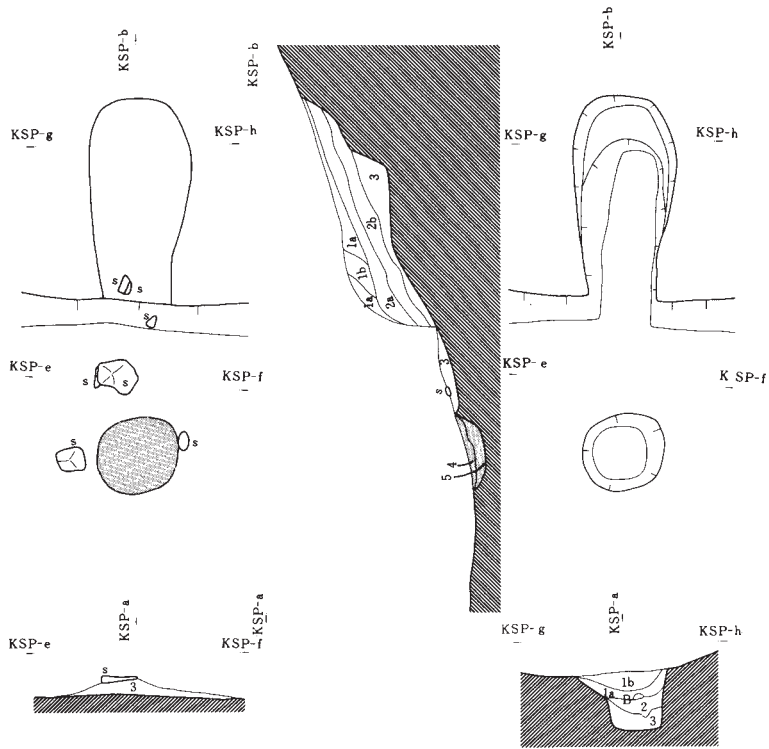
ピット 住居跡内から4個検出した。すべて周溝より内側にあり、形状は、ほぼ方形で一辺32～50cm、深さは65～80cmで、台形状に配列されている。

かまど 南壁のやや西寄りに構築されている。本体部分の袖部・天井部が残存せず、焼土面のみが検出できた。焼土範囲は、径55cmの円形で、中央部分の深さが13cmの浅皿状を呈している。その焼土付近にシルト岩が3個残存していた。煙道は煙出口へ向かって立ち上がるタイプであり、傾斜角は18°で、長さ150cm、幅45～67cmである。煙道の両側に3個のシルト岩が残存していたが、煙出口の施設は残存していない。

出土遺物 かまど内及び周辺からシルト岩、床面から土師器破片（第123図4～7）が出土したが、他の住居跡よりも遺物が少ない。（成田・津川）

第42表 第15号住居跡出土土器観察

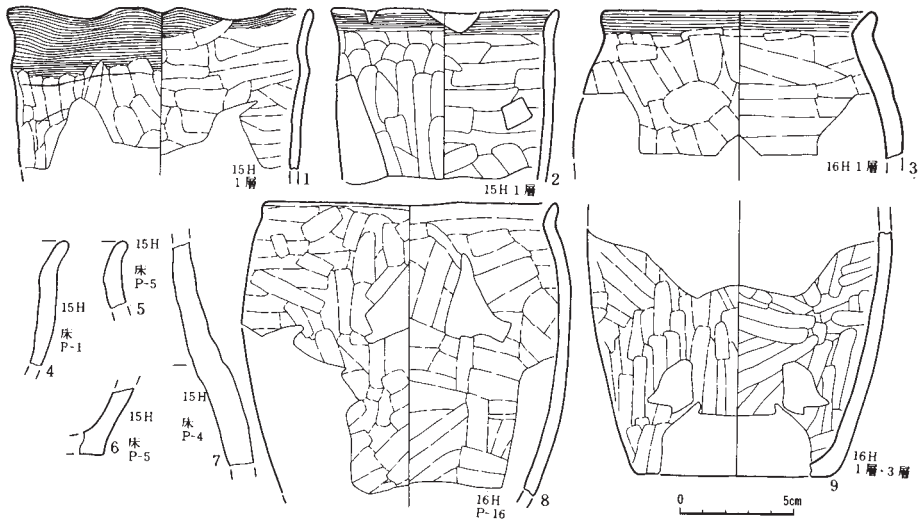
遺物番号	種類	器種	器部	法量(cm)			調 整			胎土mm	焼成	色 調	備 考	出土位置
				口 径	底 径	器 高	口縁部	胴 部	底辺部					
1	土師器	甕形	口縁胴	(13.5)	—	—	強い ヨコナテ	ヘラナテ	—	砂(多・2)	良好	10YR6/3 10YR3/7	薄手	1層
2	土師器	甕形	口縁胴	(10)	—	—	〃	エビナテ	—	砂(多・2)	〃	7.5YR6/3 7.5YR7/4		1層



【第15号住カマド】 注 記

層位	土	色	土質	備 考
1a層	10Y R 2/3	黒 褐 色	シルト質	混入物なし
1b層	10Y R 5/6	黄 褐 色	ローム質	ローム多量混入
2a層	10Y R 3/4	暗 褐 色	シルト質	ローム粒混入
2b層	10Y R 3/4	暗 褐 色	シルト質	ローム粒混入
3層	10Y R 4/6	褐 色	シルト質	混入物なし
4層	7.5Y R 5/8	明 褐 色	シルト質	混入物なし
5層	2.5Y R 4/8	赤 褐 色		焼土

第121図 第15号住居跡かまど実測図



第122図 第15号・第16号住居跡出土土器実測図

第16号住居跡（第124図、第125図）

位置と確認 B Y - 52・53、B Z - 52・53、C A - 52・53から約30cmほどの窪みを確認した。

平面形と規模

平面形	主 軸	規 模								面積(m ²)
		壁 長 (m)				壁 高 (cm)				
方 形	S - 7° - E	南	西	北	東	南	西	北	東	22.71
		5.2	4.8	5.0	5.0	43	90	70	34	

堆積土 8層に分層できた。大別すると、黒褐色土、暗褐色土、褐色土、黄褐色土の層で、床直上の褐色土と暗褐色土の混合層の他は、中央部では、黒褐色土と暗褐色土、壁際では褐色土が堆積しており、その堆積状況は自然的である。

壁 西壁と南壁の西寄り部分がやや緩い傾斜を呈しているが、その他はいずれも垂直に近い立ち上がりである。壁上部は脆く柔らかいが、下部は堅い。

床 壁溝沿いの部分は、やや柔らかいが、かまど周辺と中央部は堅く締っている。

壁溝 かまど付近を除く四方の壁下から検出した。上端幅10～30cm、下端幅4～16cm、深さが3～11cmである。

ピット 住居跡内から2個検出した。2個とも浅皿状のもので、柱穴とは思われない。pit - 1からは、シルト岩が1個出土した。

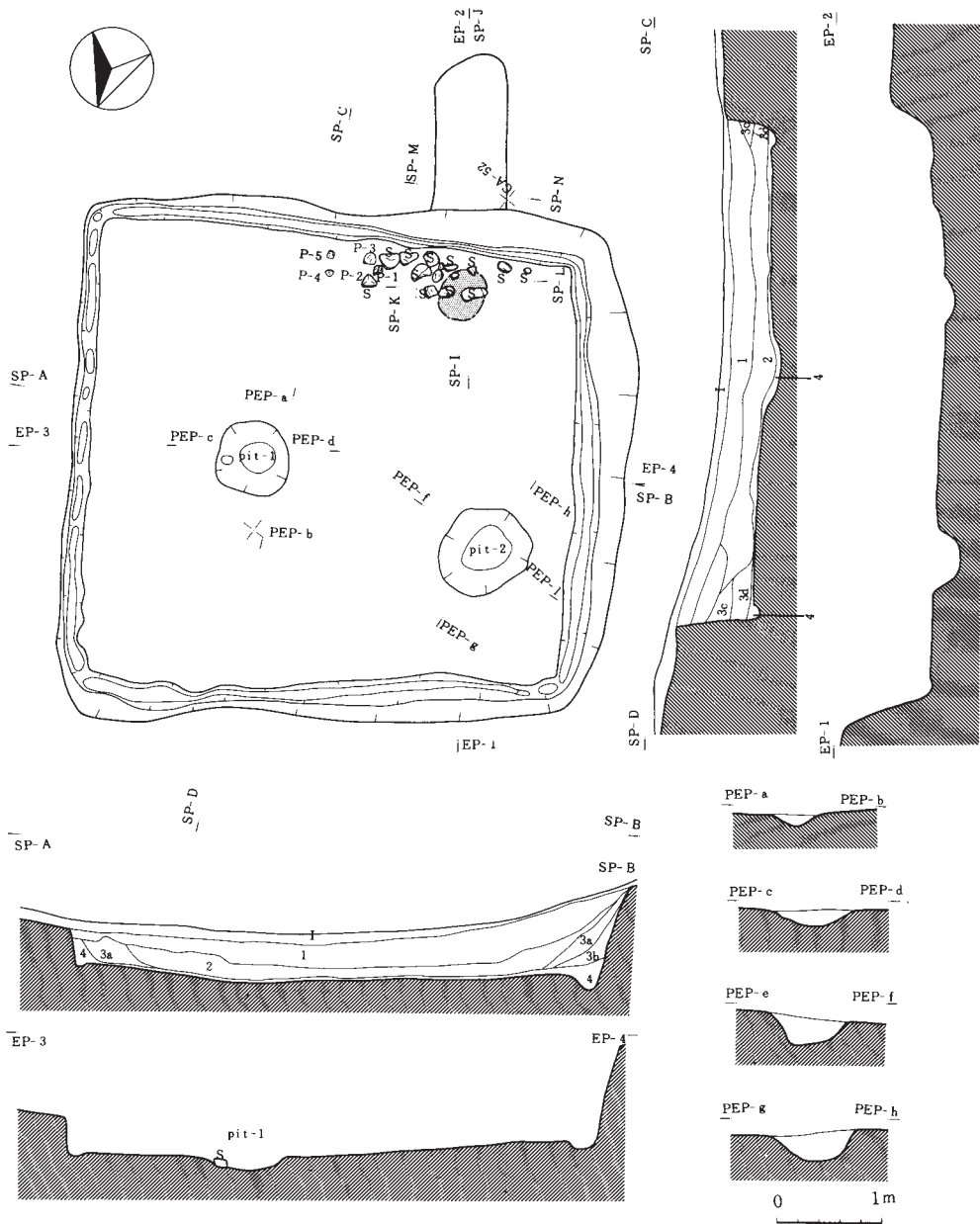
かまど 南壁の西寄り部分に構築されている。かまど本体部分の天井部は残存しないが、左右の袖の骨材として使用したと思われるシルト岩が残存していた。焼土範囲は、径45cmの円形中央部分の深さ10cmの浅皿状を呈している。その焼土付近にシルト岩と土師器片が散在していた。煙道は煙出口へ向かって立ち上がるタイプで、シルト岩で煙道、煙出部を構築している。傾斜角は12°で、長さ140cm、幅40～50cmである。

出土遺物 かまど付近から、シルト岩及び土師器破片（123図8～9）が出土しただけで遺物の少ない住居跡である。（成田・津川）

第43表 第16号住居跡出土土器観察表

遺物番号	種類	器種	器部	法量 cm			調 整			胎土mm	焼成	色 調	備 考	出土位置
				口 径	底 径	器 高	口縁部	胴 部	底辺部					
3	土師器	小型甕	口縁部	(12)	—	—	強いゴコナテ	ヘラナテ	—	砂(多・1) 石英(少)	良 好	5YR5/4 7.5YR6/4		1層
4	土師器	甕形	口縁部	(17)	—	—	〃	〃	—	砂・石英(多・1)	〃	5YR5/4 5YR5/2	変色してもろい	床P-1
5	土師器	小型甕	口縁部	(13)	—	—	〃	〃	—	砂・石英(少・1)	〃	5YR7/4 5YR7/6		床P-5
6	土師器	甕形	底辺部	—	—	—	—	〃	ヘラナテ	砂(多・1) 粒	〃	5YR7/4 5YR6/3		床P-5
7	土師器	甕形	胴部	—	—	—	—	〃	—	砂(多・1) 石英(多)	〃	7.5YR6/6 5YR6/4		床P-4
8	土師器	甕形	口縁部	13	—	—	ヘラナテ	〃	—	砂(若・2) 石英(若)	〃	7.5YR7/4 7.5YR7/3	変色してもろい	P-16
9	土師器	甕形	胴底辺部	—	(9)	—	—	〃	ヘラナテ	砂(若・2) 石英(若) やや砂っぽい	〃	7.5YR6/6 7.5YR7/4		1層・3層

※胎土の砂は砂粒の略、若は若干



〔第16号住〕 注 記

層位	土色	土質	備	考
1層	10Y R 2/1	黒色シルト質	暗褐色土混入	
2層	10Y R 3/4	暗褐色シルト質	黒色土混入	
3a層	10Y R 4/6	褐色シルト質	流入物なし	
3b層	10Y R 3/3	暗褐色シルト質	ローム粒混入	
3c層	10Y R 4/4	褐色シルト質	ロームブロック混入	
3d層	10Y R 3/3	暗褐色シルト質	ロームブロック混入	
4層	10Y R 5/8	黄褐色ローム質	ロームブロック、暗褐色土混入	

〔第16号住pit 1〕 注 記

層位	土色	土質	備	考
1層	10Y R 5/8	黄褐色ローム質	混入物なし	

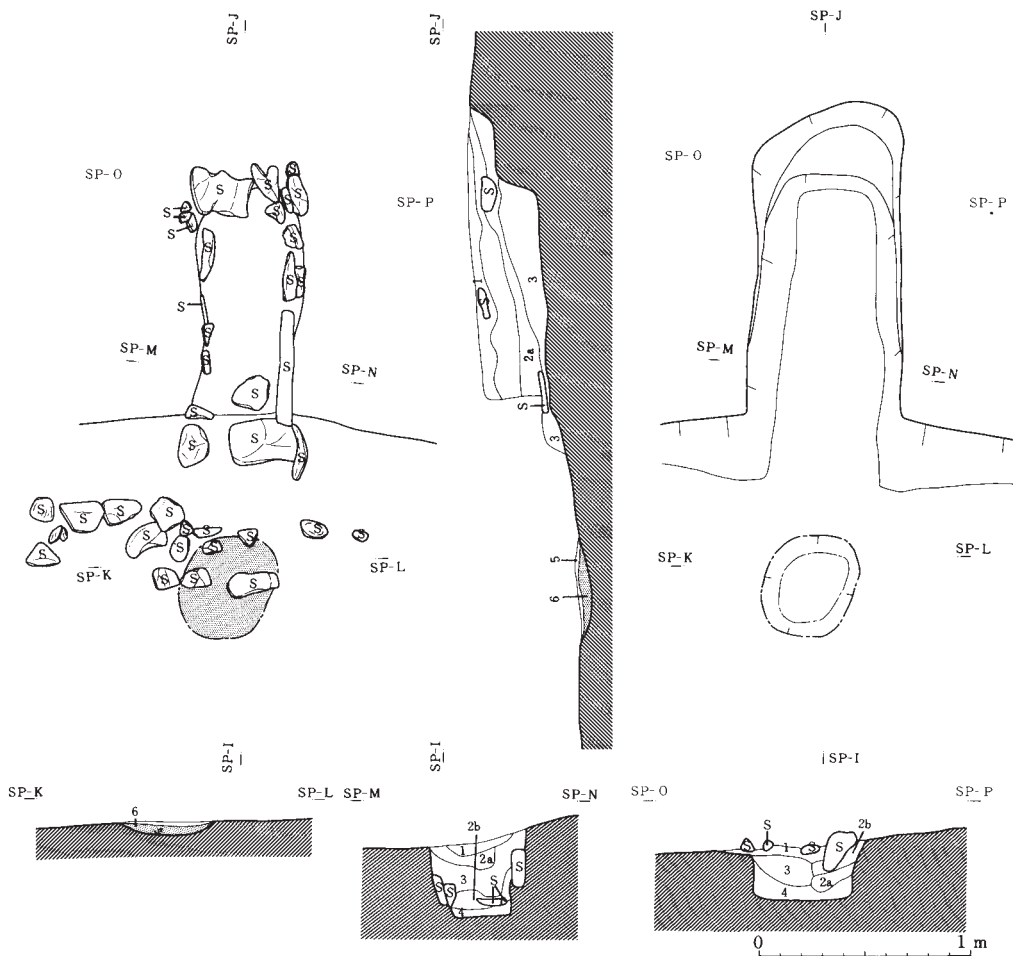
〔第16号住pit 2〕 注 記

層位	土色	土質	備	考
1層	10Y R 5/8	黄褐色ローム質	混入物なし	

〔第16号住居跡 pit計測表〕

pit No.	規模	pit No.	規模	深さ	
1	70×70	15	2	88×90	28

第124図 第16号住居跡実測図



〔第16号住カマド〕 注 記

層位	土 色	土 質	備 考
1層	10Y R 4/6 褐色	シルト質	ロームブロック混入
2a層	10Y R 3/4 暗褐色	シルト質	混入物なし
2b層	7.5Y R 4/4 褐色	シルト質	混入物なし
3層	7.5Y R 4/6 褐色	シルト質	混入物なし
4層	10Y R 5/8 黄褐色	ローム質	混入物なし
5層	7.5Y R 4/4 褐色	シルト質	混入物なし
6層	5 Y R 4/6 赤褐色		焼土

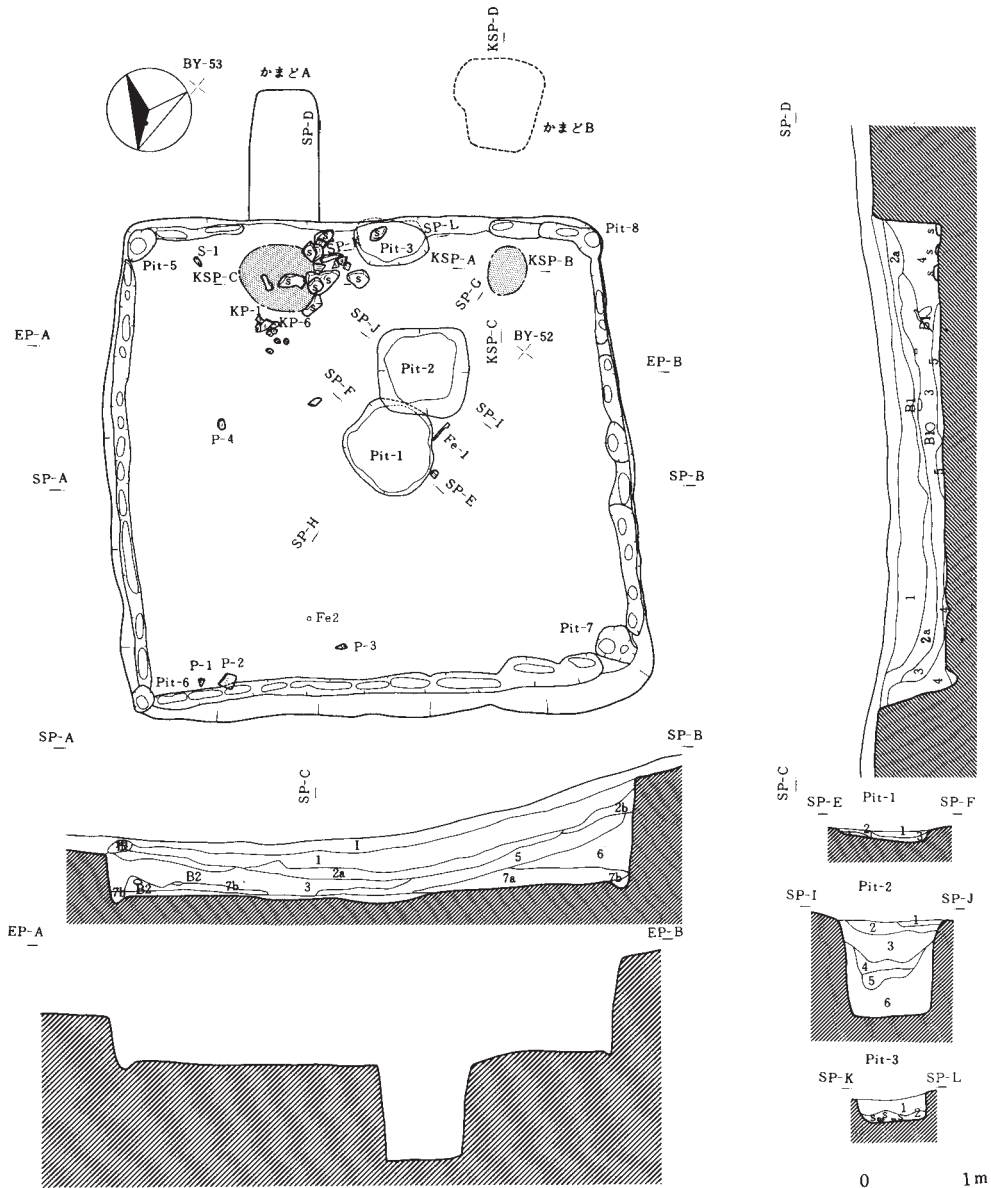
第125図 第16号住居跡かまど実測図

第17号住居跡（第126図、第127図）

位置と確認 B X - 51・52、B Y - 51・52、B W - 51・52から約30cmほどの窪みを確認した。

平面形と規模

平面形	主 軸	規 模							
		壁 長 (m)				壁 高 (cm)			
方 形	S - 7° - E	南	西	北	東	南	西	北	東
		4.6	4.7	5.0	4.8	76	106	66	58



【第17号住居跡】 注 記

層位	土色	土質	備考
1層	10Y R 2/2 黒褐色	シルト質	混入物なし
2a層	10Y R 3/3 暗褐色	シルト質	炭化物、焼土粒混入
2b層	10Y R 4/4 褐色	シルト質	黒褐色土の混合、ローム粒混入
3層	10Y R 4/4 褐色	シルト質	ローム粒、ロームブロック、焼土、ブロック混入
4層	10Y R 4/6 褐色	シルト質	ローム粒、ロームブロック多量混入
5層	10Y R 5/6 黄褐色	ローム質	混入物なし
6層	10Y R 4/6 褐色	ローム質	ローム粒多量混入
7a層	10Y R 3/4 暗褐色	シルト質	ローム粒混入
7b層	10Y R 4/4 褐色	シルト質	ローム粒多量、焼土粒、炭化物少量混入
B1層	10Y R 6/8 明黄褐色	ローム質	ロームブロック
B2層	2.5Y 4/4 オリーブ褐色		火山灰

【第17号住居跡Pit計測表】

Pit No.	規模	深さ	Pit No.	規模	深さ
1	94×86	10	2	88×84	92
3	68×42	22	4	85×80	16.4
5	22×36	80.1	6	22×22	72.7
7	40×38	22.3	8	30×20	13.9

【第17号住居跡Pit 1】 注 記

層位	土色	土質	備考
1層	10Y R 4/6 褐色	シルト質	炭化物、ロームブロック混入
2層	10Y R 5/6 黄褐色	ローム質	ロームブロック少量混入
3層	10Y R 5/8 黄褐色	ローム質	混入物なし

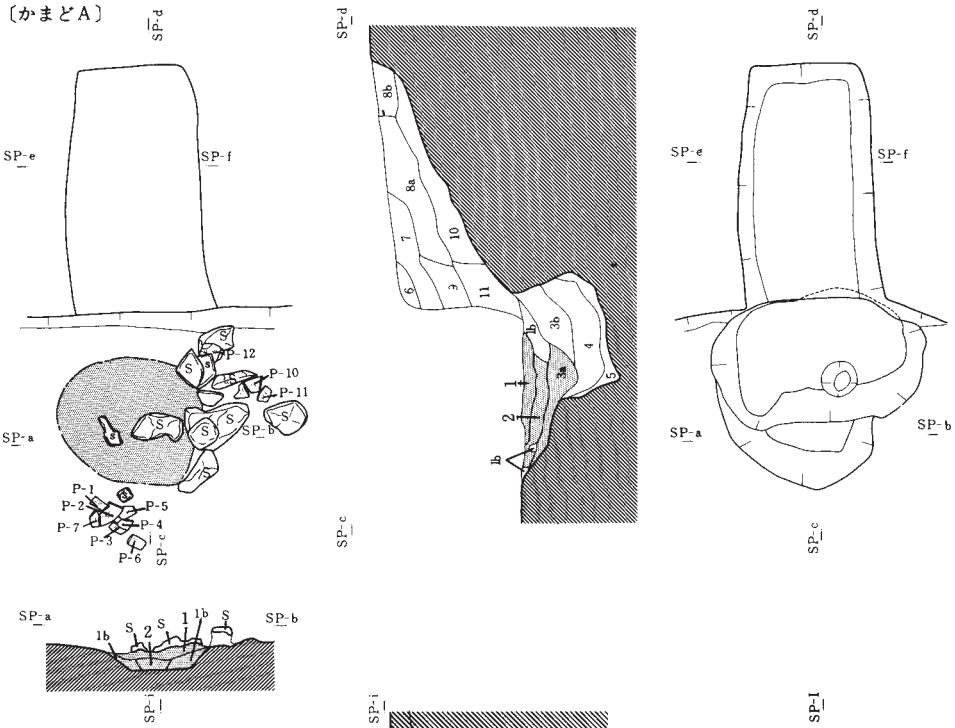
【第17号住居跡Pit 2】 注 記

層位	土色	土質	備考
1層	10Y R 4/6 褐色	シルト質	混入物少ない
2層	10Y R 4/4 褐色	シルト質	混入物少ない
3層	10Y R 5/6 黄褐色	シルト質	ロームブロック多量混入
4層	10Y R 3/4 暗褐色	シルト質	焼土、炭化物混入
5層	10Y R 5/6 黄褐色	シルト質	ロームブロック混入
6層	10Y R 4/6 褐色	シルト質	ロームブロック多量混入

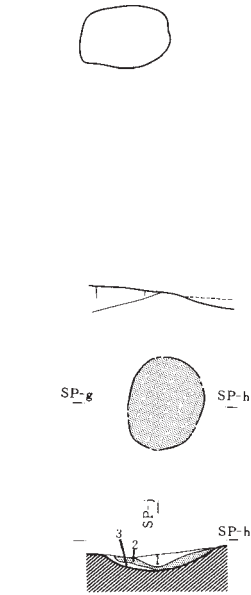
【第17号住居跡Pit 3】 注 記

層位	土色	土質	備考
1層	10Y R 5/6 黄褐色	シルト質	ロームブロック多量混入
2層	10Y R 3/4 明褐色	シルト質	炭化物、ローム混入

第126図 第17号住居跡実測図



〔かまどA〕



〔かまどB〕

〔第17号住カマドA〕 注 記

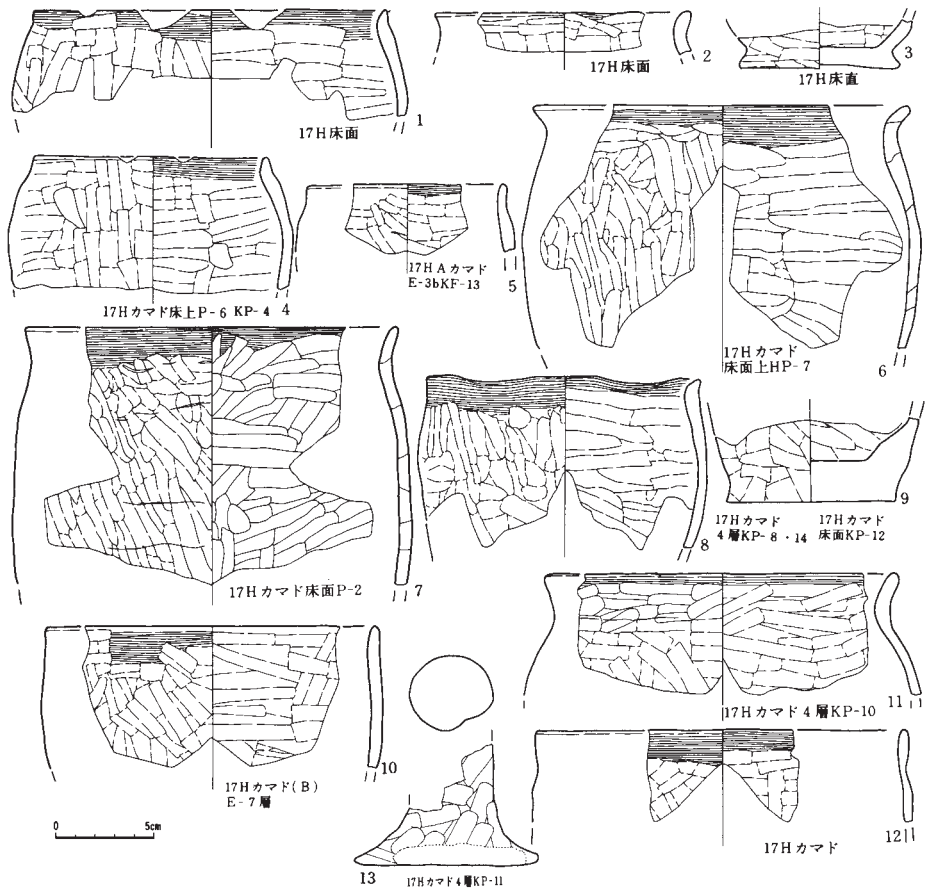
層位	土 色	土 質	備 考
1a層	5 Y R 4/6 赤 褐色		焼土
1b層	7.5 Y R 3/4 暗 褐色	シルト質	混入物少ない
2層	7.5 Y R 4/8 赤 褐色		焼土
3a層	5 Y R 4/6 赤 褐色		焼土
3b層	7.5 Y R 4/6 暗 褐色	シルト質	混入物少ない
4層	7.5 Y R 4/8 暗 褐色	シルト質	混入物少ない
5層	10 Y R 4/6 暗 褐色	シルト質	混入物少ない
6層	10 Y R 4/4 暗 褐色	シルト質	ローム粒混入
7層	10 Y R 4/4 暗 褐色	シルト質	ロームブロック混入
8a層	10 Y R 4/6 暗 褐色	シルト質	ロームブロック多量混入
8b層	10 Y R 4/6 暗 褐色	シルト質	砂粒混入
9層	10 Y R 3/4 暗 褐色	シルト質	炭化物少量混入
10層	10 Y R 3/3 暗 褐色	シルト質	炭化物、焼土、ロームブロック混入
11層	10 Y R 4/6 暗 褐色	シルト質	混入物少ない

〔第17号住カマドB〕 注 記

層位	土 色	土 質	備 考
1層	7.5 Y R 4/4 暗 褐色	シルト質	焼土粒少量混入
2層	10 Y R 4/6 赤 褐色		焼土
3層	10 Y R 5/6 黄 褐色	ローム質	混入物なし
4層	10 Y R 5/6 黄 褐色	ローム質	混入物なし
5層	10 Y R 4/6 暗 褐色	シルト質	混入物なし
6層	10 Y R 5/6 黄 褐色	ローム質	混入物なし
7層	10 Y R 5/6 黄 褐色	ローム質	混入物なし
8層	10 Y R 4/6 暗 褐色	シルト質	混入物なし
9層	10 Y R 4/6 暗 褐色	シルト質	ロームブロック混入
10層	10 Y R 2/3 黒 褐色	シルト質	焼土粒、焼土、炭化物混入
11層	10 Y R 5/8 暗 褐色	ローム質	黒色土粒少量混入
12層	10 Y R 5/6 黄 褐色	ローム質	混入物少ない

0 1m

第127図 第17号住居跡かまど実測図



第128図 第17号住居跡出土遺物実測図

第44表 第17号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	種類	器種	器部	法量 cm			調整			胎土 mm	焼成	色調	備考	出土位置
				口径	底径	器高	口縁部	胴部	底辺部					
1	土師器	甕形	口縁胴	18	—	—	強いヨコナテ	ヘラナテ	—	砂(多・1) 石英(若)	良好	10YR5/4 5YR4/3	内変色・もろい	床面
2	土師器	小型甕	口縁	(13)	—	—	〃	〃	—	砂(多・1) 石英(若)	〃	2.5YR6/6 5YR7/4		床面
3	土師器	甕形	底辺	—	9~11	—	〃	強いヘラナテ	砂(多・1) やや砂っぽい	〃	7.5YR5/3 7.5YR6/4	木葉痕	床直	
4	土師器	小型甕	口縁胴	(12)	—	—	〃	〃	—	砂(多・3) 石英(若)	〃	7.5YR6/6 2.5YR5/6	内外煤炭変色・もろい	カマド床 KP-4 KP-6
5	土師器	小型甕	口縁胴	(10)	—	—	〃	〃	—	砂(多・1) 石英(若)	〃	10YR3/4 7.5YR5/4	煤炭	AカマドE3 bKF-13
6	土師器	甕形	口縁胴	(19)	—	—	〃	〃	—	砂(多・3) 良質粘土	〃	5YR5/6 7.5YR5/6		カマド床直上 KP-7
7	土師器	甕形	口縁胴	(19)	—	—	〃	〃	—	砂(多・2) 粒	〃	5YR6/7 7.5YR7/4		カマド床面 P-2
8	土師器	小型甕	口縁胴	(14)	—	—	〃	〃	—	砂(多・1~2)	〃	7.5YR5/4 10YR4/3		カマド4層 KP-8, KP-14
9	土師器	甕形	胴底辺	—	8.5	—	強いヘラナテ	強いヘラナテ	砂(多・2) 石英(若)	〃	5YR6/4 7.5YR6/3		カマド床面 KP-12	
10	土師器	甕形	口縁胴	(17)	—	—	強いヨコナテ	ヘラナテ	—	砂(多・2) 石英(若)	〃	7.5YR6/4 7.5YR5/3		カマド(B) E-7層
11	土師器	甕形	口縁胴	(20)	—	—	〃	〃	—	砂(多・1)	良・堅	5YR7/6 5YR7/4		カマド4層 KP-10
12	土師器	甕形	口縁胴	(19)	—	—	〃	〃	—	砂(多・1)	良好	7.5YR7/4 7.5YR5/3		カマド
13	支脚		底辺	—	9.4	—	—	ユビナテ	—	—	—	5YR8/4		カマド4層 KP-11

※胎土の砂は砂粒の略、若は若干

堆積土 大別すると黒褐色土、暗褐色土、褐色土、黄褐色土の層である。黄褐色土層（第5層）は、第1層と同質で、自然堆積の状態では住居跡の最下部に黒褐色土と混合した層になるのが普通であるが、この住居跡では、西壁から中央部床面にかけて斜めに堆積し、この下層には、褐色土及び暗褐色土が堆積していた。しかも西壁には崩落の痕跡がないので、第5層の黄褐色土は、自然堆積とは考え難い堆積状況である。

壁 北壁は、緩い角度で傾斜しているが、ほかの壁は、ほぼ垂直に近い立ち上がりである。壁の上部は脆いが下部は堅めである。

床 かまどAの周辺は堅く締まっているが、ほかは柔かめである。

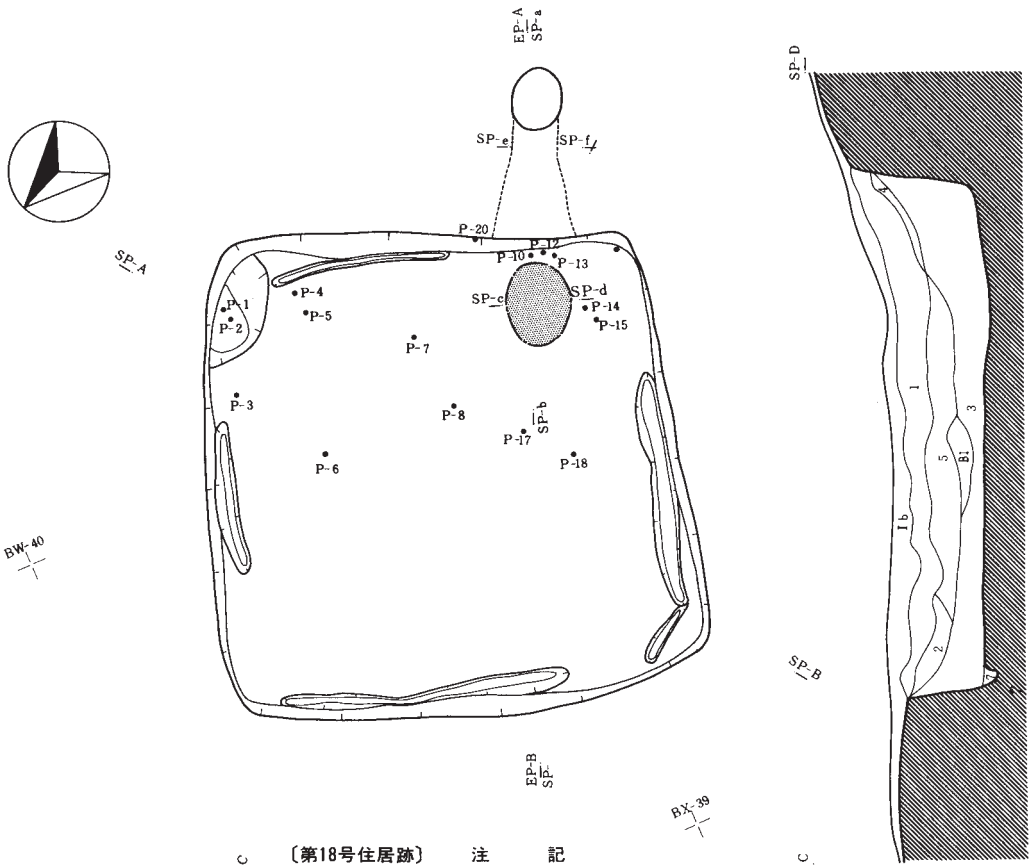
壁溝 東壁・北壁・西壁の壁下から検出したが、かまどが構築されている南壁では部分的に検出した。幅は上端が10～20cm、下端が6～10cmで、深さは5.5～21cmである。

ピット 住居跡内から8個検出（第126図）したが、柱穴とみられるものは、pit - 5～8で住居跡の4隅から検出したものである。pit - 1は浅皿状のもので、pit - 2に伴うものと思われる。pit - 2は、深く、覆土の堆積状況から判断すると、この住居跡に伴うものと考えられる。pit - 3は、かまど脇にあり、少量の土師器片、シルト岩が出土した。pit - 4は、かまどAを構築する際埋められたものと思われる。

かまど 南壁の東寄りと西寄りの部分に構築されているが、西寄りのものは、かまど本体下部の焼土部分とトンネル式の煙道部分が残存するだけで、しかも壁溝によって切られていることなどから東寄りのものより古いものと考えられる。ここでは東寄りに構築されたものをかまどA、西寄りに構築されたものをかまどBと呼称することとした。かまどAは本体部分の袖部・天井部が残存せず、焼土面直上にシルト岩、土師器片が散在していた。焼土範囲は、ほぼ円形で径64cm、深さ（最深部分）13cmである。煙道は、煙出部へ向かって立ち上がるタイプで傾斜角は25°で、長さ130cm、幅55～69cmである。煙道部の残存状態が悪く、構造は知り得ない。かまどBは、焼土範囲が径40cm、中央部分の深さ7cmの浅皿状を呈し、煙道は方形（44×70cm）のトンネル式で長さ150cmである。煙出孔は50×90cmの方形で、深さが90cmである。

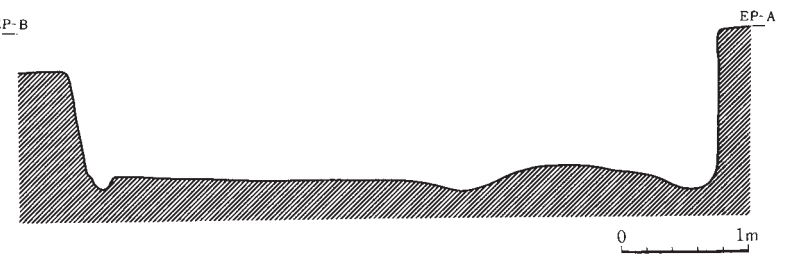
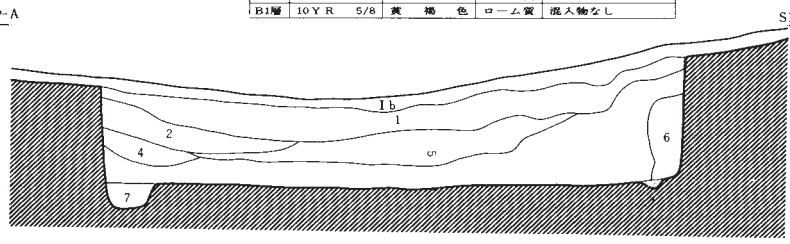
出土遺物 かまど内及び周辺からは、第128図4～12のような土師器片が出土した。床面に密着して出土した遺物は、第128図の鉄製刀子及び第128図1～3の土師器片である。覆土内出土の遺物は土師器片である。またかまど上面から支脚片、床から鉄滓が出土した。（成田）
第18号住居跡（第129図、第130図）

位置と確認 B X - 40・41、B W - 40・41から約40cmほどの窪みを確認した。

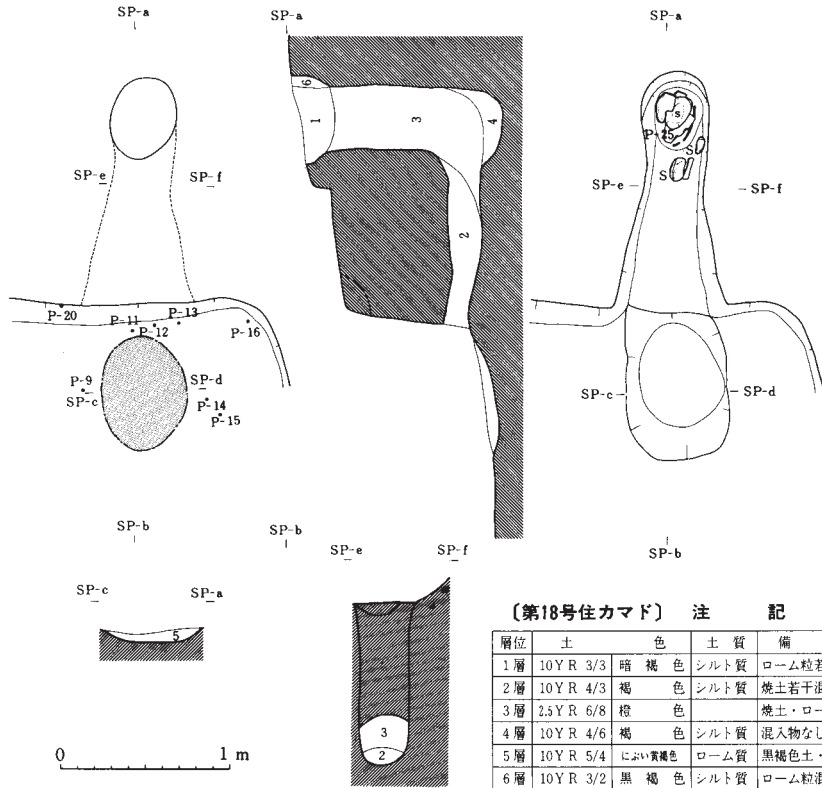


〔第18号住居跡〕 注 記

層位	土 色	土 質	備 考
1層	10 Y R 1.7/1 黒 色	シルト質	ローム粒混入
2層	10 Y R 5/6 黄 褐 色	ローム質	混入物なし
3層	10 Y R 4/6 褐 色	シルト質	混入物なし
4層	10 Y R 6/8 明 黄 褐 色	ローム質	混入物なし
5層	10 Y R 3/3 暗 褐 色	シルト質	混入物なし
6層	10 Y R 7/8 黄 褐 色	ローム質	混入物なし
8層	10 Y R 5/4 上い黄褐色	ローム質	混入物なし
B1層	10 Y R 5/8 黄 褐 色	ローム質	混入物なし



第129図 第18号住居跡実測図



第130図 第18号住居かまど実測図

平面形と規模

平面形	主 軸	規 模							
		壁 長 (m)				壁 高 (cm)			
方 形	S-36°-E	南	西	北	東	南	西	北	東
		3.2	3.6	3.7	3.4	100	50	78	94

堆積土 大別すると黒色土、褐色土、黄褐色土の層で、自然堆積と思われる。

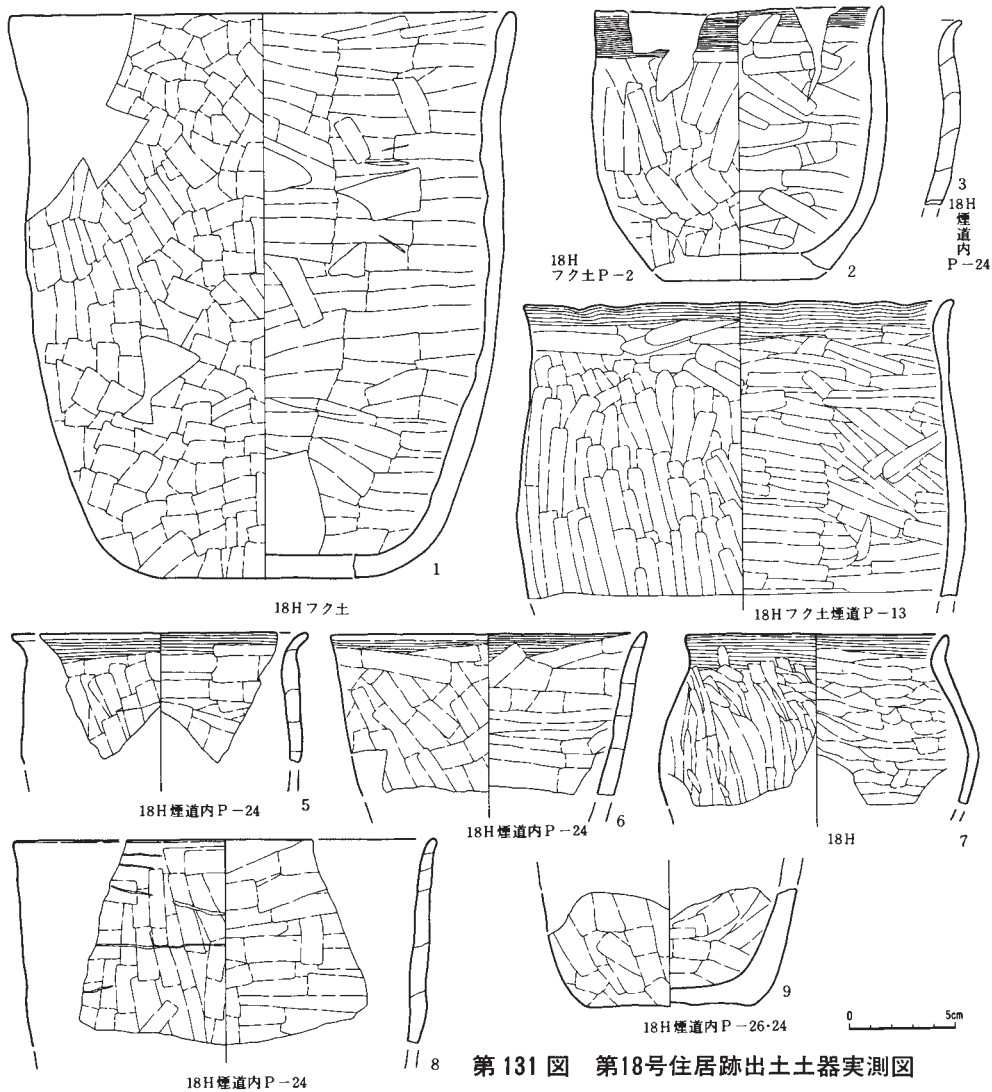
壁 西側と東壁はやや緩い傾斜を呈しているが、北壁と南壁はほぼ垂直に近い立ち上がりである。西壁は、上部から下部まで脆く柔くて、検出し難かったが、他の壁は下部の方では堅く締っていた。

床 ロームを直接床として使用しており、ほぼ平坦で堅い。

壁溝 かまど周辺と各壁の一部を除いた壁下から検出した。上端幅4~10cm、下端幅2.5~7cmで深さは9~15cmである。

ピット 北東の隅から1個検出した。深さが約20cm位でにぶい黄褐色土が堆積しており柱穴かどうかは不明である。

かまど 東壁の南寄りに構築されている。かまど本体部分は、袖部・天井部とも残存せず、焼土面のみが検出できた。焼土は33×25cmの楕円形で、中央部分の深さ7cmの浅皿状を呈



第131図 第18号住居跡出土土器実測図

第45表 第18号住居跡出土土器観察表

遺物番号	種類	器種	器部	法量cm			調整			胎土mm	焼成	色調	備考	出土位置
				口径	底径	器高	口縁部	胴部	底辺部					
1	土師器	甕形	口縁底辺	(24)	—	27	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	砂石(多・1) 英(若)	良好	7.5YR7/2 10YR7/3		フク土
2	土師器	小型甕	口縁胴	13.6	(8) 1 (8.5)	(13)	強い ヨコナデ	〃	—	砂石(少・1) 英(若)	〃	10YR6/4 5YR6/6		フク土
3	土師器	甕形	口縁胴	(15)	—	—	〃	〃	—	砂(1~3)	〃	7.5YR7/3 10YR7/2		煙道内 P-24
4	土師器	甕形	口縁胴	(20)	—	—	〃	〃	—	砂 礫 (若・2~3)	〃	7.5YR7/4 7.5YR7/6		フク土 煙道 P-13
5	土師器	小型甕	口縁胴	(14)	—	—	〃	〃	—	石英(微・1) やや砂っぽい	〃	7.5YR7/2 7.5YR8/3		煙道内 P-24
6	土師器	甕形	口縁胴	(15)	—	—	〃	〃	—	砂 (若・1~3)	〃	7.5YR8/2 7.5YR8/3		煙道内 P-24
7	土師器	小型甕	口縁胴	12.3	—	—	〃	〃	—	砂良 (若・1) ・粘	〃	5YR5/3 7.5YR7/6	④煤・炭	煙道内 P-24
8	土師器	小型甕	口縁胴	(20)	—	—	〃	〃	—	砂良 礫 ・粘	〃	5YR7/4 5YR6/4		煙道内 P-24
9	土師器	甕形	胴底辺	—	8	—	—	〃	強い ヘラナデ	砂礫(2~3)	〃	7.5YR8/3 7.5YR7/3	木葉痕	煙道内 P-24、P-26

※胎土の砂は砂粒の略、若は若干

している。煙道は長さ140cm、幅35～60cmのトンネル式で、底面は下降し、煙出しでほぼ垂直に立ち上がっている。煙出孔は円筒状で、深さが120cmである。煙出孔の底の部分からシルト岩と土師器破片が密集して出土した。

出土遺物 煙出孔からシルト岩・土師器破片（第131図 3～6）が出土したほか、住居跡内に土師器破片（第131図 1・7）が数片散在していた。（成田・津川）

第19号住居跡（第133図、第134図）

位置と確認 B V - 41・42、B W - 41・42から深さ約40cmの窪みを確認した。

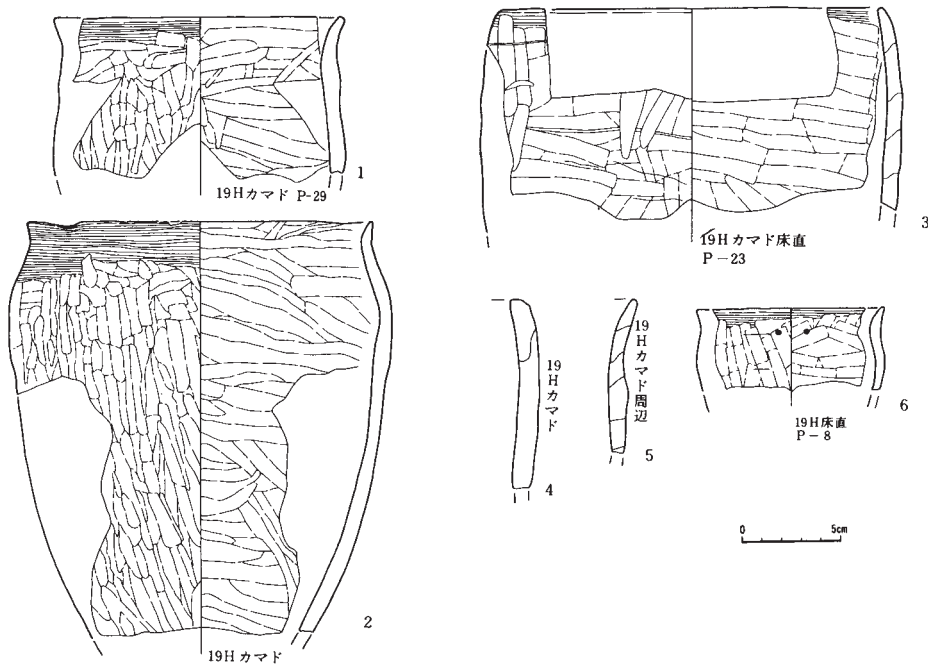
平面形と規模

平面形	主 軸	規 模								面積 (m ²)
		壁 長 (m)				壁 高 (cm)				
方 形	S - 42° - E	南	西	北	東	南	西	北	東	9.61
		3.3	3.1	3.1	3.4	75	100	86	80	

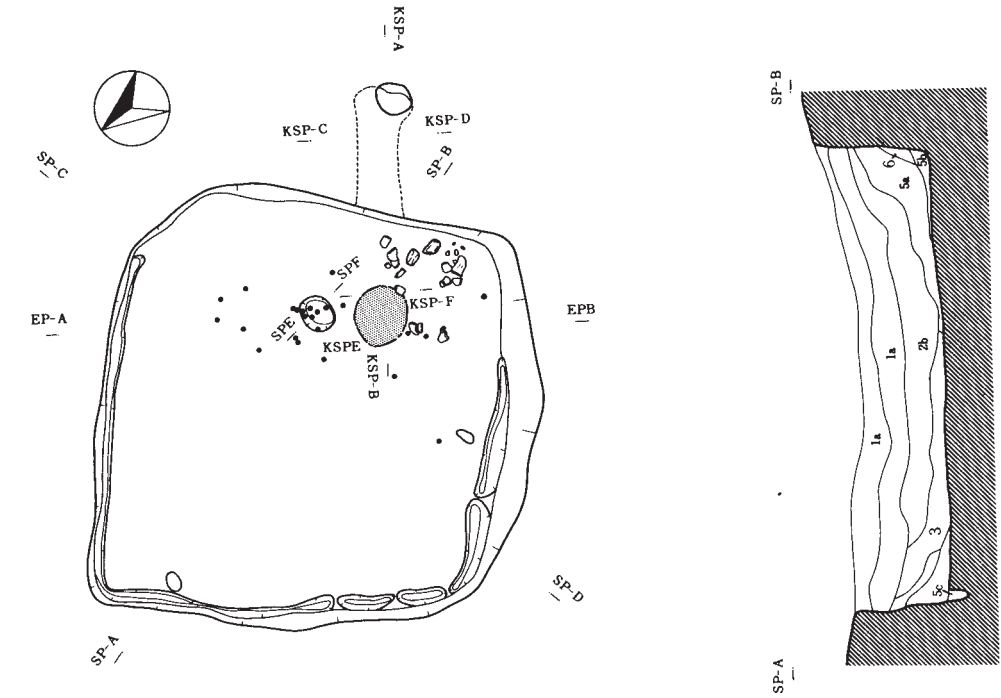
堆積土 12層に分層できた。大別すると、黒色土、黒褐色土、暗褐色土、黄褐色土の層で、中央部分では床面まで黒色土と暗褐色土のみが堆積しており、壁際床面近くに黄褐色土の層がみられる。堆積状況は自然的である。

壁 西壁を除いては、ほぼ垂直に近い立ち上がりであり、堅く締っている。

床 中央部分とかまど周辺は堅く締りがありやや低くなっているが、壁溝沿いは柔らかい。

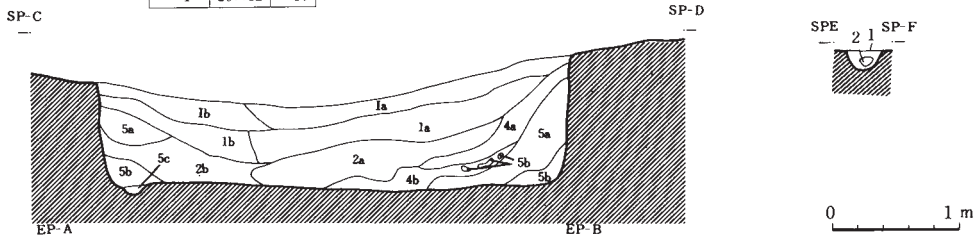


第 132 図 第19号住居跡出土土器実測図



〔第19号住居跡
Pit計測表〕

Pit No	規模	深さ
1	26×32	16



〔第19号住居跡〕 注 記

層位	土 色	土 質	備 考
1層	10Y R 3/4 暗 褐色	シルト質	ローム粒混入
2層	10Y R 5/8 黄 褐色	ローム質	混入物なし

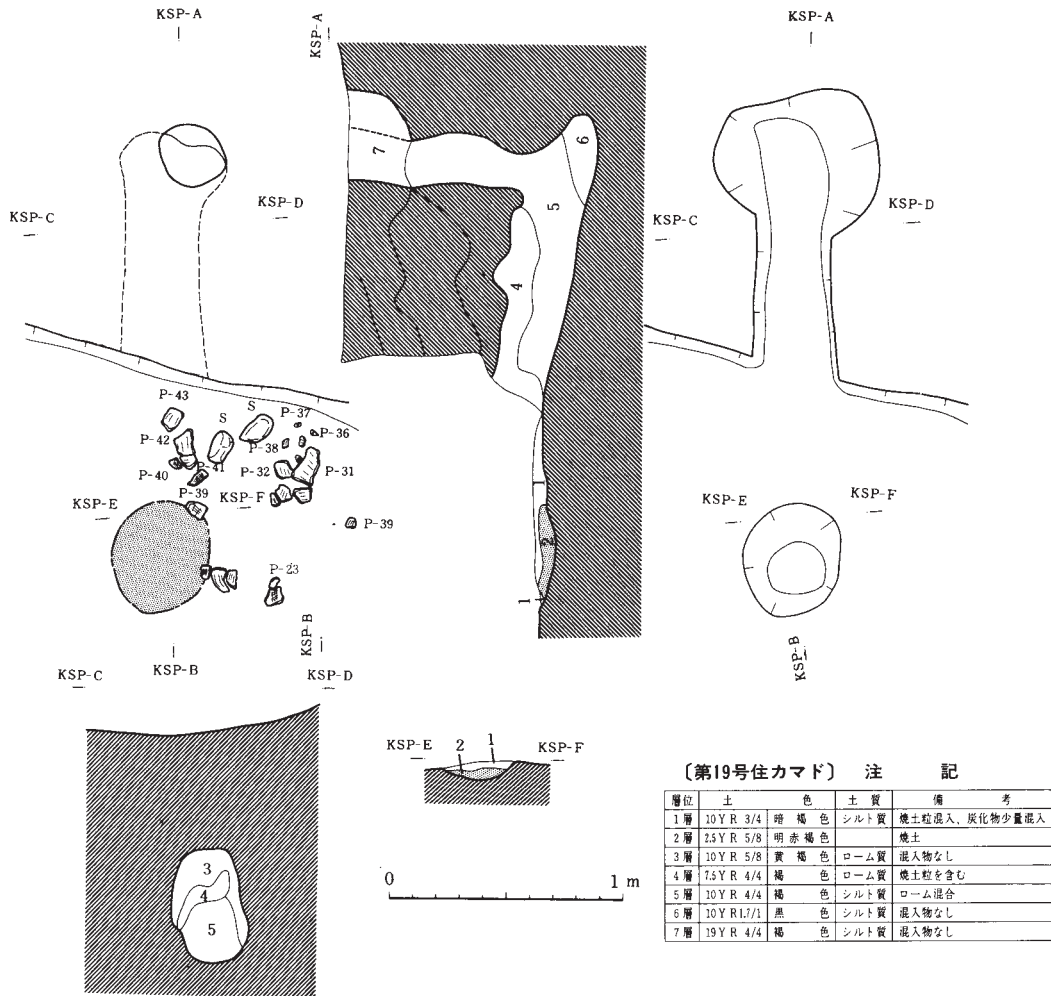
〔第19号住居跡〕 注 記

層位	土 色	土 質	備 考
1a層	10Y R 1.7/3 黒 色	シルト質	ローム粒少量混入
1b層	10Y R 2/2 黒 褐色	シルト質	ローム混入
2a層	10Y R 1.7/3 黒 色	シルト質	ローム混入
2b層	10Y R 3/3 暗 褐色	シルト質	ローム多量混入
3層	10Y R 2/2 黒 褐色	シルト質	ローム粒混入
4a層	10Y R 3/3 黒 色	シルト質	ローム混入
4b層	10Y R 2/1 黒 色	シルト質	ローム、ロームブロック混入
5a層	10Y R 3/4 暗 褐色	シルト質	暗褐色土粒、ローム粒混入
5b層	10Y R 5/8 黄 褐色	ローム質	混入物なし
5c層	10Y R 5/6 黄 褐色	ローム質	混入物なし
6層	10Y R 3/4 暗 褐色	シルト質	ローム粒、ロームブロック微量混入

第 133 図 第19号住居跡実測図

壁溝 西壁の南寄り部分とかまどが構築されている南壁を除く各壁下から検出した。幅は、上端が4～20cm、下端が3～8cm、深さが5～20cmである。

ピット 住居跡内から1個検出した。平面形は径30cmの円形で、その断面は深さ15cmのすり鉢状を呈しており、覆土内から土師器片が8片出土した。



第 134 図 第19号住居跡かまど実測図

かまど 南壁のほぼ中央に構築されている。かまど本体部分の袖部・天井部が残存せず、焼土面のみが検出できた。焼土範囲は径42×50cmの楕円形で、断面は深さ10cmの皿状である。また、その焼土周辺に土師器片と2個のシルト岩が散在していた。煙道はトンネル式で径25cm位の円筒形で、13°の角度で下降し、煙出孔の壁をさらに奥に掘り込んだ後、ほぼ垂直に立ち上がり煙出口へ続いている。煙出孔は、幅20cm、深さ105cmの円筒形である。

出土遺物 ビット内から8片、その周辺から11片土師器片が出土したほか、かまど内及び周辺からも土師器片が出土した。

(成田・津川)

第46表 第19号住居跡出土土器観察表

遺物番号	煙類	器種	器部	法 量cm			調 整			胎土 ^{mm}	焼成	色 調	備 考	出土位置
				口 径	底 径	器 高	口縁部	胴 部	底辺部					
1	土師器	甕形	口縁部	(15)	—	—	強い ヨコナテ	ヘラナテ	—	砂良 (若・1) 粘	や や 不 良	5YR2/1 5YR3/1		カマドP-29 床直 P-30
2	土師器	甕形	口縁部	(17)	—	—	・	”	—	砂(多・2~3) 良	良 好	5YR5/6 7.5YR6/4		カマド
3	土師器	甕形	口縁部	(19.7)	—	—	”	”	—	砂石 (多・2) 美(若)	”	2.5YR5/6 2.5YR5/6	内 変 外 色	カマド床直P-23 周辺床直P-43
4	土師器	甕形	口縁部	(19)	—	—	”	”	—	砂石 (多・1) 美(若)	”	10YR5/4 2.5YR5/6	3 と 同 一 個	カマド
5	土師器	甕形	口縁部	(19)	—	—	”	”	—	砂石 (多・1) 美(若)	”	5YR6/6 5YR6/4		カマド周辺
6	土師器	甕形	口縁部	(9.5)	—	—	”	”	—	砂 (少・1)	”	7.5YR4/2 10YR7/2	胴上部に穴	床直 P-8

※胎土の砂は砂粒、若は若干

第20号住居跡 (第135図、第136図)

位置と確認 西区のほぼ中央BV - 45・46、BW - 45・46、BX - 45・46の表土で深さ120cmほどの窪みを確認した。

平面形と規模

平面形	主 軸	規 模								
		壁 長 (m)				壁 高 (cm)				面積(m ²)
隅丸方形	S-70°-E	南東	南西	北東	北西	南東	南西	北東	北西	
		4.42	4.51	4.40	4.62	56	126	65	77	

竪穴周囲 竪穴の周辺には、盛土(3a層)がみられる。この下には灰褐色火山灰(3b層)が薄層をなしている。南側の3a層の上に別の火山灰質土(5a層)がみられるが、これは14号住居跡の排土と思われる。

堆積土 壁寄りに褐色土が堆積し、中央にレンズ状に黒色土があり、自然堆積と思われる。西側には焼土まじりの黒色土(15層)があった。

壁 南側・西側がほぼ直立するが、北側と東側がいくぶん緩い傾斜となつている。

床 層を掘りこんで使用している。床面中央とその北側・西側のそれぞれに火を受けて赤変している部分が見られる。

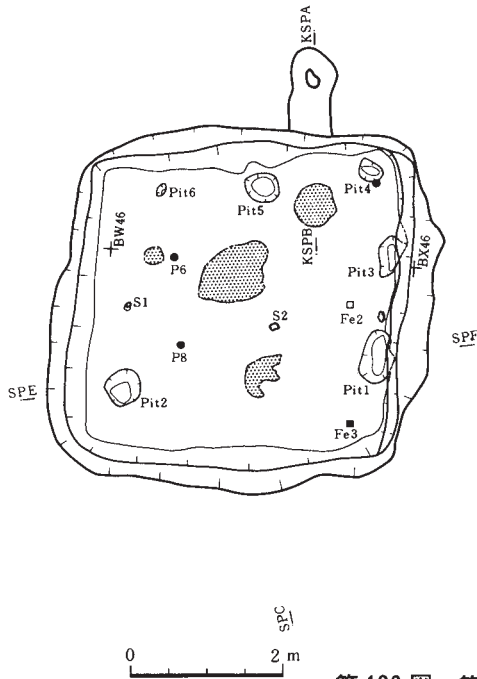
壁溝 存在しない。

ピット 6個検出した。柱穴と判断できるものはない。ピット2の覆土中からは礫と土師器が数片出土した。

かまど 半地下式の煙道である。緩く壁外に立ちあがっていき、煙出し部分で直立する。煙出し部及び天井部は 層類似の火山灰質土粒(6、7、8層)により構築されている。煙道人口付近の天井部は火を受けて赤変している。この直下には扁平な礫(シルト岩)が底面に置かれている。燃烧部には、礫や土師器が数片残存している。底面は強く火を受けたと思われ、10cmほどの厚さで赤変していた(16、17層)。この部分の周囲には約10cmの深さのピットがみられた。

SPD

〔第20号住居跡〕 注 記



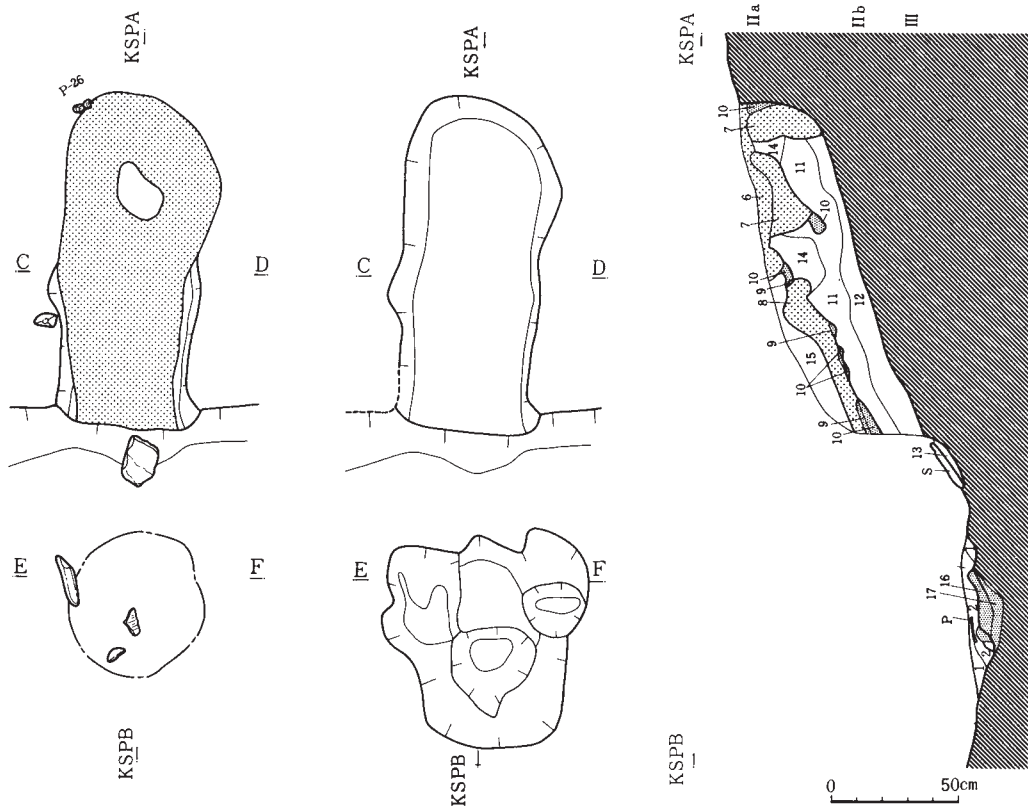
層位	土色	土質	備考
1 a層	10Y R 2/1 黒色	埴土質	微粒ローム粒少量
1 b層	10Y R 1.7/1 黒色	"	" 中量(斑状)
1 c層	10Y R 1.7/1 黒色	"	" 微量
1 d層	10Y R 2/1 黒色	"	ローム粒中量、焼土粒少量
1 e層	10Y R 2/2 黒褐色	"	" 中量
1 f層	7.5 Y R 2/1 黒色	"	焼土粒中量
1 g層	10Y R 2/1 黒色	"	ローム粒多量、炭化物粒多量
2 a層	10Y R 4/4 褐色	"	微粒ローム粒多量(70%)炭化物粒少量
2 b層	10Y R 3/3 暗褐色	"	ローム粒多量(50%)炭化物粒中量
2 c層	10Y R 6/6 明黄褐色	"	(Ⅲ層の土)
2 d層	10Y R 5/4 にぶい黄褐色	"	Ⅲ層の土に似る
3 a層	9 Y R 5/6 黄褐色	"	締り強い
3 b層	10Y R 4/4 褐色	"	灰褐色、火山灰?ブロック状に混入
3 c層	10Y R 4/4 褐色	"	"
4 a層	10Y R 3/2 黒褐色	"	ローム粒少量
4 b層	10Y R 2/3 黒褐色	"	" 中量
4 c層	10Y R 3/2 黒褐色	"	"
5 a層	10Y R 5/6 黄褐色	"	"
5 b層	10Y R 4/3 にぶい黄褐色	"	ローム粒少量、焼土粒微粒、炭化物粒少量
5 c層	10Y R 4/4 褐色	"	" 少量、3 C層に似る
5 d層	10Y R 2/3 黒褐色	"	"
5 e層	2.5 Y 5/6 黄褐色	"	3 C層に灰褐色火山灰?混入
B 1層	7.5 Y R 5/6 明褐色	"	締りゆるい
B 3層	7.5 Y R 2/3 極暗褐色	"	焼土多量
B 4層	5 Y R 5/8 明赤褐色	"	焼土、砂まじり、締り強い
B 5層	10Y R 2/3 黒褐色	"	下部に青灰色火山灰混入炭化物粒多量
B 6層	10Y R 6/6 明黄褐色	"	(Ⅲ層の土)
B 7層	10Y R 6/6 明黄褐色	"	(Ⅲ層の土)非常に堅い
B 8層	2.5 Y 5/4	シルト質	シルト質B 9層より粗粒
B 9層	2.5 Y 5/6	黄	シルト質灰褐色、火山灰

第136図 第20号住居跡実測図

出土遺物 かまど燃焼部からは遺物が少なく、土師器甕の破片と小さい礫が出土しただけである。北東隅の床面では蜜(8、11)や礫・炭化材が出土した。また内面が黒色処理された坏(1)やその他の鉄製品(1)も床面に出土した。ピット2内部には窯の破片(2)や礫・炭化材・鉄滓が出土した。(坂本)

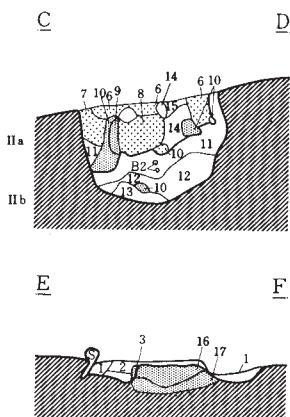
第47表 第20号住居跡出土土器観察表

遺物番号	種類	器種	器部	法量(cm)			調整			胎土	焼成	色調	備考	出土位置
				口径	底径	器高	口縁部	胴部	底辺部					
1	土師器	坏	口縁	12.1	6	5.8	(ロクロ)ミガキ	(ロクロ)ミガキ	無調整			5YR6/6 1.7/1	底面回転系切り痕	床直P-18 2層P-6
2	"	甕		17			横ナデ	横ナデ		良好		5YR6/6 7/6		ピット2 2層
3	"	"	口縁	(16)			"	"		"		7.5YR7/6 6/4		床直P-17
4	"	"	"	(12)			"	"		"		5YR4/3 5/3	外面に煤状炭化物附着	床直P-18
5	"	"	"	(14)			"	"		"		5YR6/6 6/4		カマド燻道 P-13
6	"	"	"	(9)			ユビナデ	ケズリ		"		5YR6/4 5/6		ピット4上面
7	"	坏	"				横ナデ	ヘラミガキ						床直
8	"	"	"	(15)			横ナデ	ヘラナデ				7.5YR6/3 7/4		床P-7
9	"	"	"	(18)			横ナデ	"				5YR5/6 5/4		カマド燻道 P-26
10	"	"	"	(16)			"	"				2.5YR6/6 5/4	手ざわりは須恵器の様	1層
11	"	鉢	"	(20)			横ナデ	"				7.5YR6/4 7/6	外面に煤状炭化物附着	床直P-2
12	"	甕	底面	(7)			ヘラナデ	ケズリ				10YR4/2 7.5YR4/3	底面木葉痕	床直

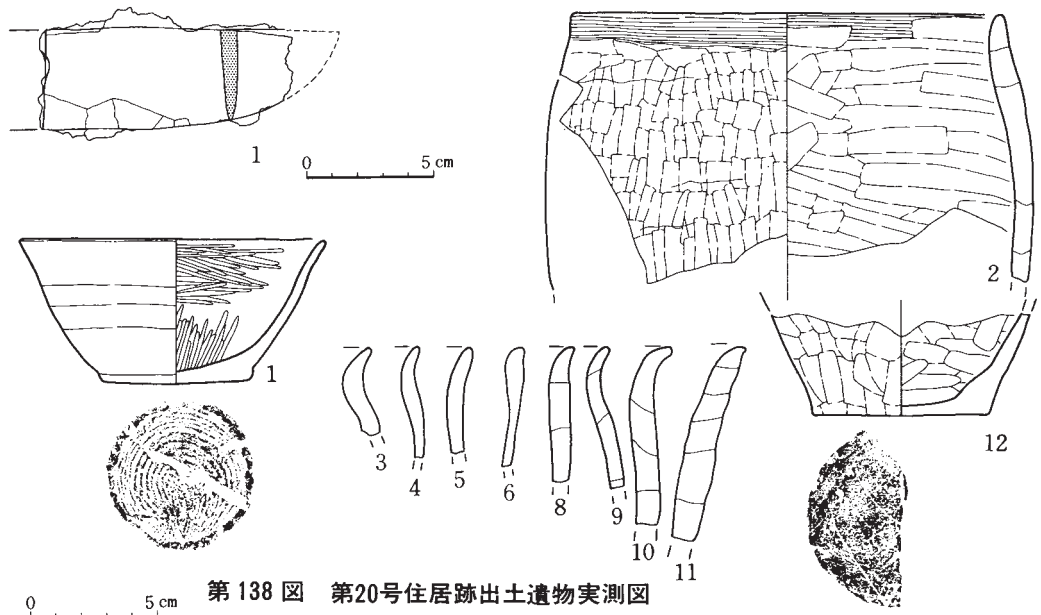


〔第20号住カマド〕 注 記

層位	土 色	土 質	備 考
1層	10Y R 5/6 黄褐色	埴土質	
2層	7.5Y R 4/6 褐色	"	やや焼けた土
3層	2.5Y R 5/8 明赤褐色	"	焼土
4層	7.5Y R 5/8 明褐色	"	焼土、ローム混入
5層	/	"	
6層	10Y R 3/2 黒褐色	"	ローム粒多量(70%)
7層	10Y R 5/8 黄褐色	"	ローム粒の集合体
8層	10Y R 5/8 黄褐色	"	(III層の土)
9層	5 Y R 4/6 赤褐色	"	焼けたIII層の土
10層	5 Y R 3/4 暗赤褐色	"	焼土
11層	10Y R 3/4 暗褐色	"	ローム粒多量(30%)焼土粒中量
12層	10Y R 2/3 黒褐色	"	" 少量 " 多量
13層	10Y R 2/3 黒褐色	"	" 多量(60%)
14層	5 Y R 3/4 暗赤褐色	"	焼土粒の集合体、ローム粒中量・暗褐色土混入
15層	10Y R 3/4 暗褐色	"	ローム粒少量
16層	2.5Y R 5/8 明赤褐色	"	堅い焼土
17層	10Y R 6/8 明黄褐色	"	III層の土



第 137 図 第20号住居跡かまど実測図



第138図 第20号住居跡出土遺物実測図

第 表 第20号住居跡出土鉄製品計測表

挿図 番号	図版 番号	種 類	法 量(cm)		出 土 地 点 (層 位)	備 考
			全 長	背 部 厚		
1		刀?	(8.5)	0.60	床Fe-3	

第21号住居跡 (第141図、第142図)

位置と確認 B T - 49・50・51、B U - 49・50・51、B S - 50・51から深さ90cmほどの窪みを確認した。

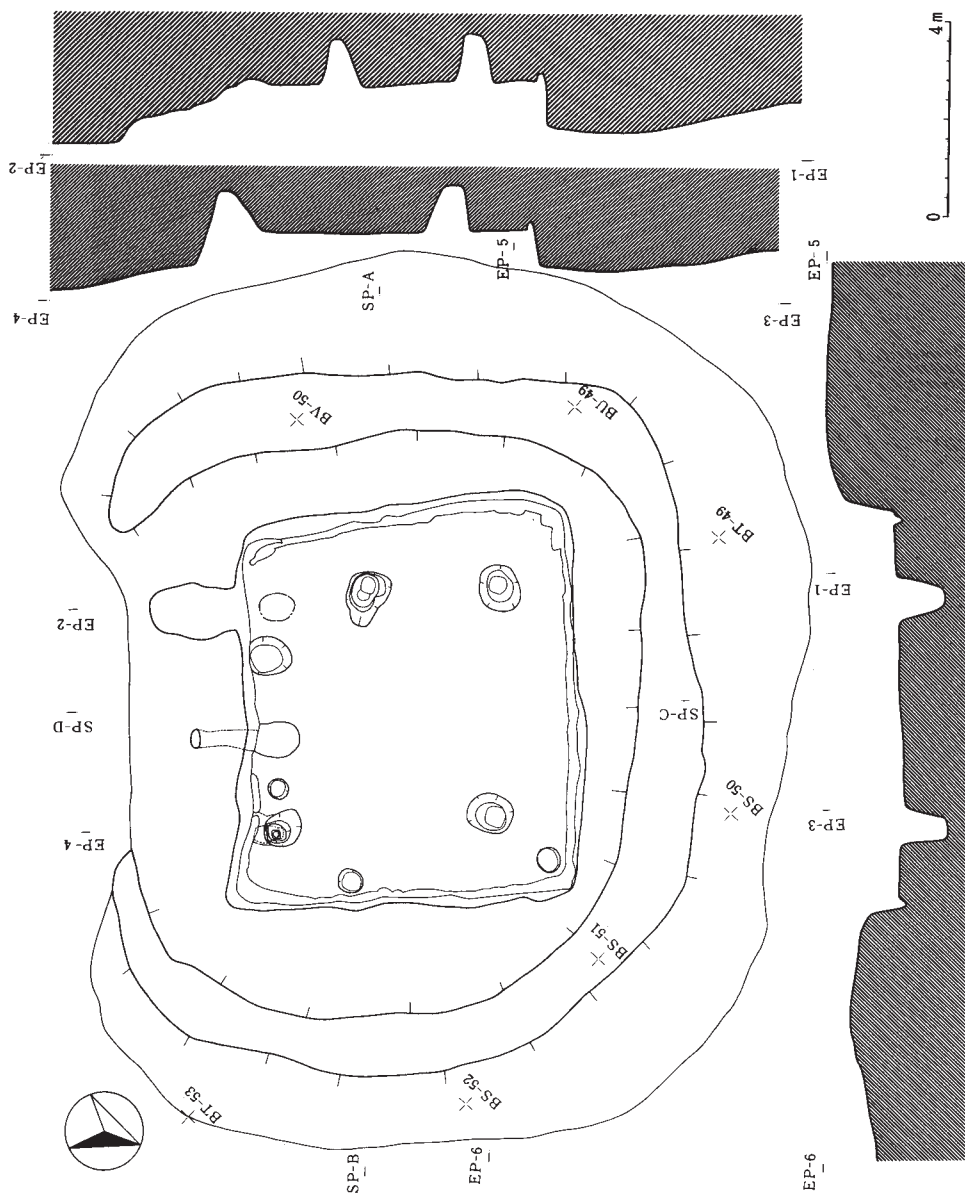
平 面 形	主 軸	規 模								面 積 (m ²)
		壁 長 (m)				壁 高 (cm)				
		南	西	北	東	南	西	北	東	
長 方 形	S-16°-E	7.9	6.8	8.4	7.0	86	100	78	70	51.63

堆積土 住居跡の中央部では、黒色土と暗褐色土の2層だけで、壁際では暗褐色土と黄褐色土、また、壁溝には黄褐色土が堆積している。東壁と北壁及び西壁の外側には、第1層と第2層が盛上げられ、その下層には黄色みを帯びた火山灰層がほぼ水平に存在している。また、この火山灰直下に青みを帯びた火山灰がブロック状にみられる。

壁 南壁と西壁南より部分がやや緩い傾斜しているが、その他はいずれも垂直に近い立上がりである。壁上部はやや脆く柔らかいが、下部は堅い。

床 東壁の南寄りの部分とかまどが構築されている南壁沿いは堅く締っているが、他の壁沿いの部分は比較的柔らかい。中央部分は、かまど周辺ほどではないが堅い。また、pit-4の南側に2箇所、pit-7に切られた部分1箇所、小範囲の火床面がみられた。

壁溝 南壁東寄り部分と東壁・北壁・西壁の壁下から検出した。上端幅10~20cm、下端



第 140 图 第21号居跡周堤実測図

第21号住居跡Pit計測表

Pit No.	規模	深さ	Pit No.	規模	深さ
1	111×82	118	2	96×82	75
3	78×94	93	4	70×86	96
5	66×60	78	6	42×42	18
7	50×50	22	8	52×48	30
9	80×84	20			

第21号住居Pit 1

層位	土色	土質	備考
1層	10YR2/2 黒褐色	シルト質	焼土粒混入
2層	10YR2/1 黒色	シルト質	焼土粒、炭化物若干混入
3層	10YR5/8 黄褐色	ローム質	混入物なし
4層	10YR3/3 暗褐色	シルト質	ローム粒混入
5a層	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト質	ローム粒、炭化物若干混入
5b層	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト質	ローム粒多量混入
6a層	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト質	ロームブロック多量混入
6b層	10YR5/6 黄褐色	シルト質	ロームブロック多量混入
7a層	10YR5/8 黄褐色	シルト質	ロームブロック多量混入
7b層	10YR5/6 黄褐色	ローム質	混入物なし
B1層	10YR6/6 明黄褐色	ローム質	混入物なし
B2層	2.5YR3/3 暗赤褐色		焼土

第21号住居Pit 2

層位	土色	土質	備考
1層	10YR3/3 暗褐色	シルト質	ローム粒多量、炭化物微量混入
2層	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト質	ローム粒、炭化物微量混入
3層	10YR4/4 褐色	シルト質	ロームブロック、炭化物微量混入
4層	10YR5/6 黄褐色	シルト質	ロームブロック少量、炭化物微量混入
5層	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト質	ローム粒多量、炭化物若干混入
6層	10YR5/8 黄褐色	シルト質	ロームブロック微量、炭化物若干混入
6b層	10YR5/6 黄褐色	シルト質	ローム粒多量混入
7層	10YR5/8 黄褐色	シルト質	ロームブロック、砂質土混入

第21号住居Pit 3

層位	土色	土質	備考
1層	10YR3/3 暗褐色	シルト質	ロームブロック多量混入
2層	10YR3/2 暗褐色	シルト質	ローム粒少量混入
3層	10YR2/2 黒褐色	シルト質	炭化物少量、ロームブロック微量混入
3b層	10YR3/3 暗褐色	シルト質	ロームブロック微量混入
4層	10YR3/4 暗褐色	シルト質	ロームブロック微量混入
5層	10YR5/8 黄褐色	シルト質	ロームブロック多量混入
6層	10YR5/8 黄褐色	シルト質	ロームブロック多量混入
7層	10YR5/8 黄褐色	シルト質	ロームブロック多量混入

第21号住居Pit 4

層位	土色	土質	備考
1層	10YR2/1 黒色	シルト質	焼土粒混入
2層	10YR3/3 暗褐色	シルト質	ローム少量混入
3層	2.5YR3/3 暗赤褐色		焼土
4層	5YR2/2 黒褐色	シルト質	焼土粒多量混入
5層	5YR3/2 暗赤褐色		焼土
6層	10YR3/3 暗褐色	シルト質	ローム微量混入
7層	10YR4/4 褐色	シルト質	ロームブロック多量混入
7b層	10YR4/4 褐色	シルト質	ロームブロック微量混入
8層	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト質	ロームブロック微量混入
9層	10YR5/6 黄褐色	シルト質	ロームブロック多量混入
10層	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト質	ロームブロック微量混入
11層	10YR5/8 黄褐色	ローム質	混入物なし
12層	10YR5/6 黄褐色	シルト質	ロームブロック多量混入

第21号住居跡

層位	土色	土質	備考
1層	10YR2/1 黒色	シルト質	混入物なし
1b層	10YR3/4 暗褐色	シルト質	ローム粒混入
1c層	10YR3/2 暗褐色	シルト質	焼土混入
2層	10YR4/4 暗褐色	シルト質	ローム粒混入
3層	10YR5/6 黄褐色	シルト質	炭化物、ロームブロック混入
3b層	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト質	黒褐色土、ロームブロック混入
3c層	10YR3/3 暗褐色	シルト質	ローム混入
4層	10YR1.7/1 黒色	シルト質	ローム粒若干混入
5層	10YR5/6 黄褐色	シルト質	ロームブロック混入
5b層	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト質	ロームブロック混入
6層	10YR5/6 黄褐色	シルト質	ローム粒多量混入

第21号住居Pit 5

層位	土色	土質	備考
1層	10YR4/6 褐色	シルト質	炭化物若干混入
2層	10YR5/8 黄褐色	シルト質	ロームブロック多量、炭化物若干混入
3層	10YR5/6 黄褐色	シルト質	ロームブロック多量混入
4層	10YR5/8 黄褐色	シルト質	ロームブロック微量混入
5層	10YR5/8 黄褐色	シルト質	ロームブロック微量混入
6層	10YR5/8 黄褐色	ローム質	灰褐色土ブロック混入
7層	10YR5/6 黄褐色	ローム質	混入物なし
8層	10YR5/8 黄褐色	シルト質	灰褐色土ブロック混入
9層	10YR5/6 黄褐色	シルト質	ロームブロック若干混入
10層	10YR5/8 黄褐色	シルト質	ロームブロック多量混入

第21号住居Pit 6

層位	土色	土質	備考
1層	10YR5/4 黄褐色	シルト質	ローム粒混入
2層	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト質	ローム粒多量混入
3層	10YR3/4 暗褐色	シルト質	焼土ブロック、ロームブロック、炭化物混入
4層	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト質	ローム粒多量、炭化物微量混入
5層	10YR5/6 黄褐色	ローム質	焼土粒混入
6層	10YR5/8 黄褐色	シルト質	ローム粒多量混入

第21号住居Pit 7

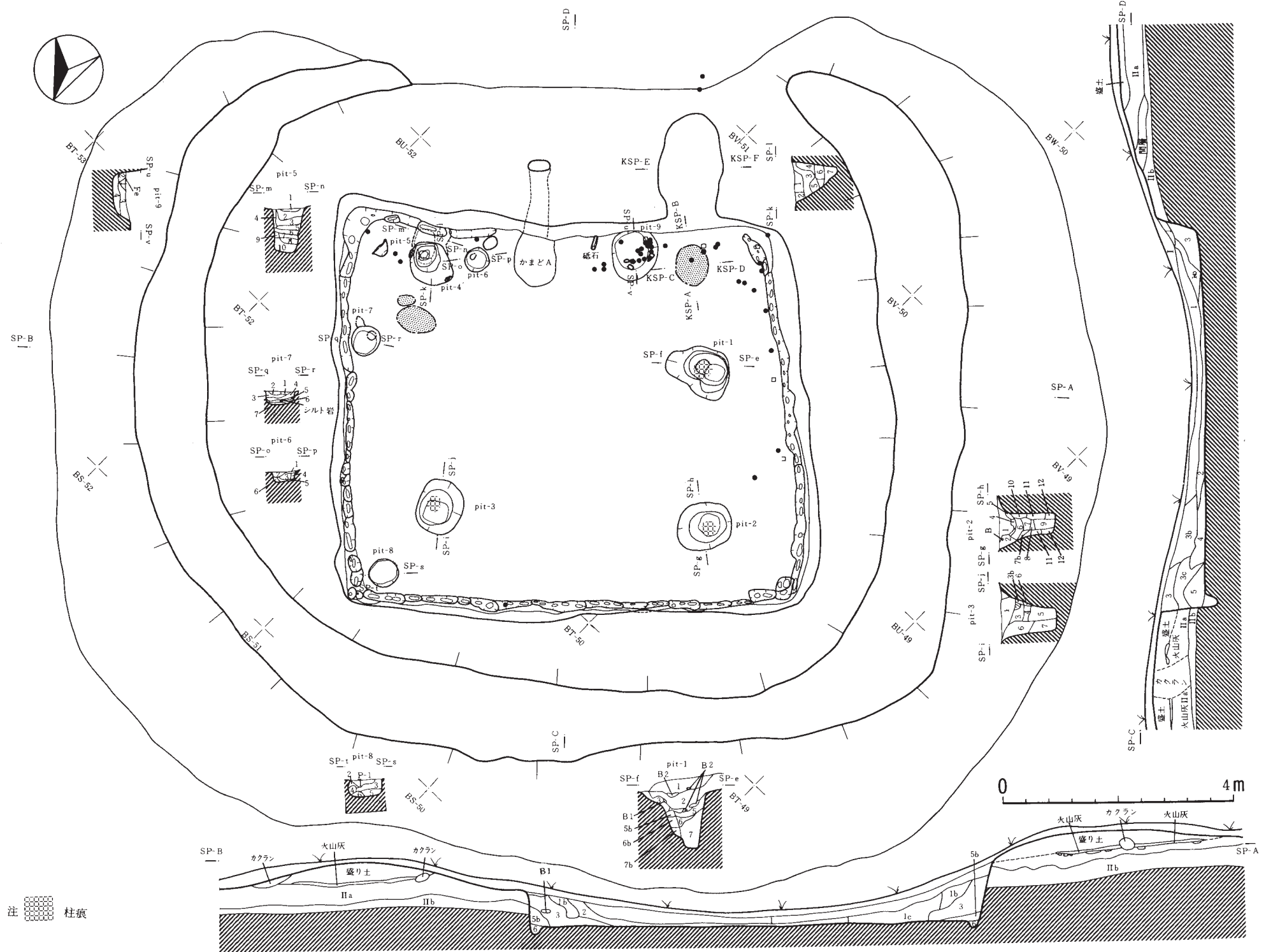
層位	土色	土質	備考
1層	10YR5/6 黄褐色	シルト質	ローム粒多量混入
2層	10YR3/4 暗褐色	シルト質	焼土粒混入
3層	10YR5/4 にぶい黄褐色	ローム質	炭化物若干混入
4層	10YR4/4 褐色	シルト質	炭化物、ロームブロック若干混入
5層	10YR5/6 黄褐色	シルト質	ロームブロック多量混入
6層	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト質	ローム粒多量、炭化物微量混入
7層	10YR5/8 黄褐色	シルト質	ロームブロック多量、炭化物、焼土粒若干混入

第21号住居Pit 8

層位	土色	土質	備考
1層	10YR3/4 暗褐色	シルト質	ロームブロック、焼土粒若干、炭化物混入
2層	10YR5/8 黄褐色	ローム質	混入物なし
3層	10YR4/6 褐色	シルト質	ロームブロック混入
4層	10YR5/6 黄褐色	シルト質	ロームブロック多量混入
5層	10YR5/4 にぶい黄褐色	ローム質	混入物なし
6層	10YR5/8 黄褐色	ローム質	混入物なし

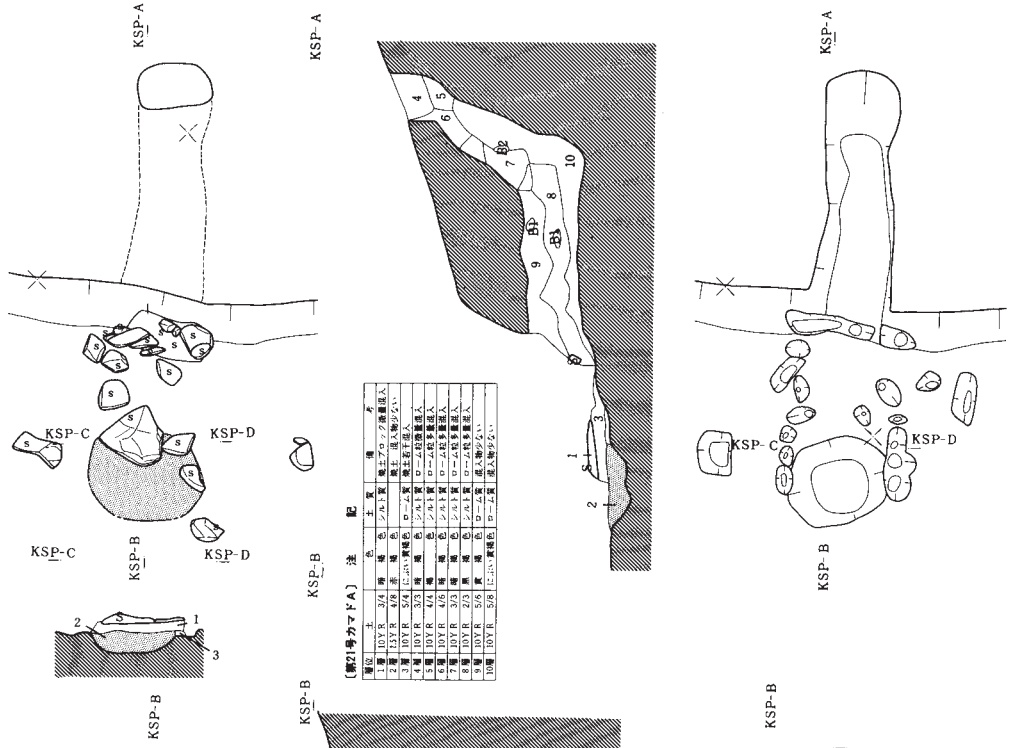
第21号住居Pit 9

層位	土色	土質	備考
1層	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト質	ローム粒多量、炭化物微量混入
2層	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト質	ロームブロック微量、炭化物混入
3層	10YR3/4 暗褐色	シルト質	ロームブロック微量混入
4層	10YR5/6 黄褐色	シルト質	ロームブロック多量混入

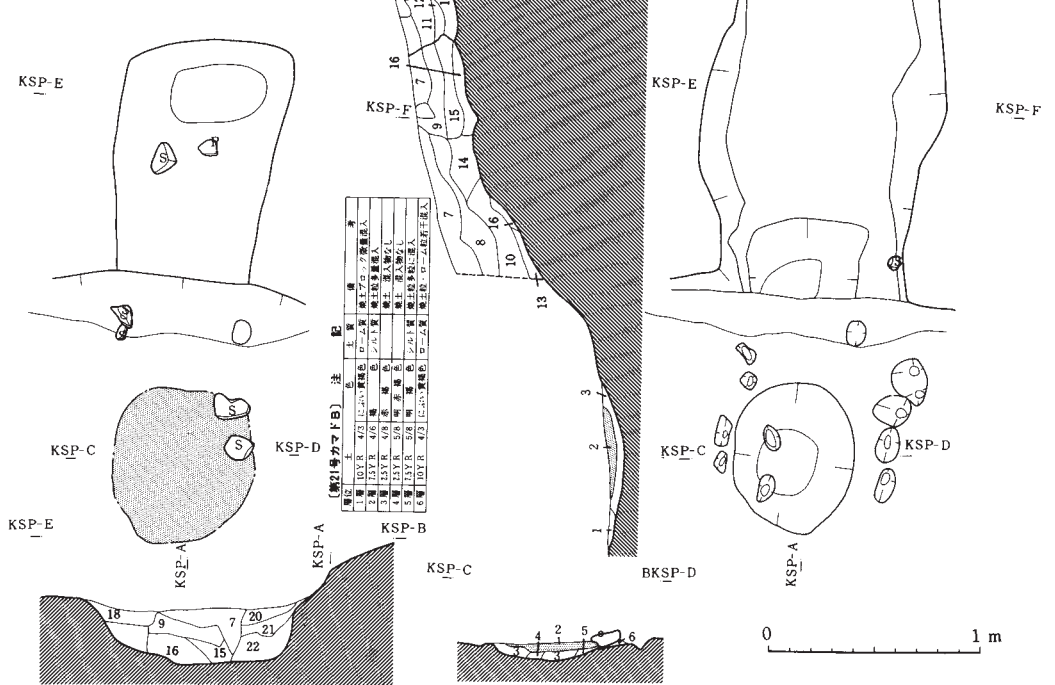


第141図 第21号住居跡実測図

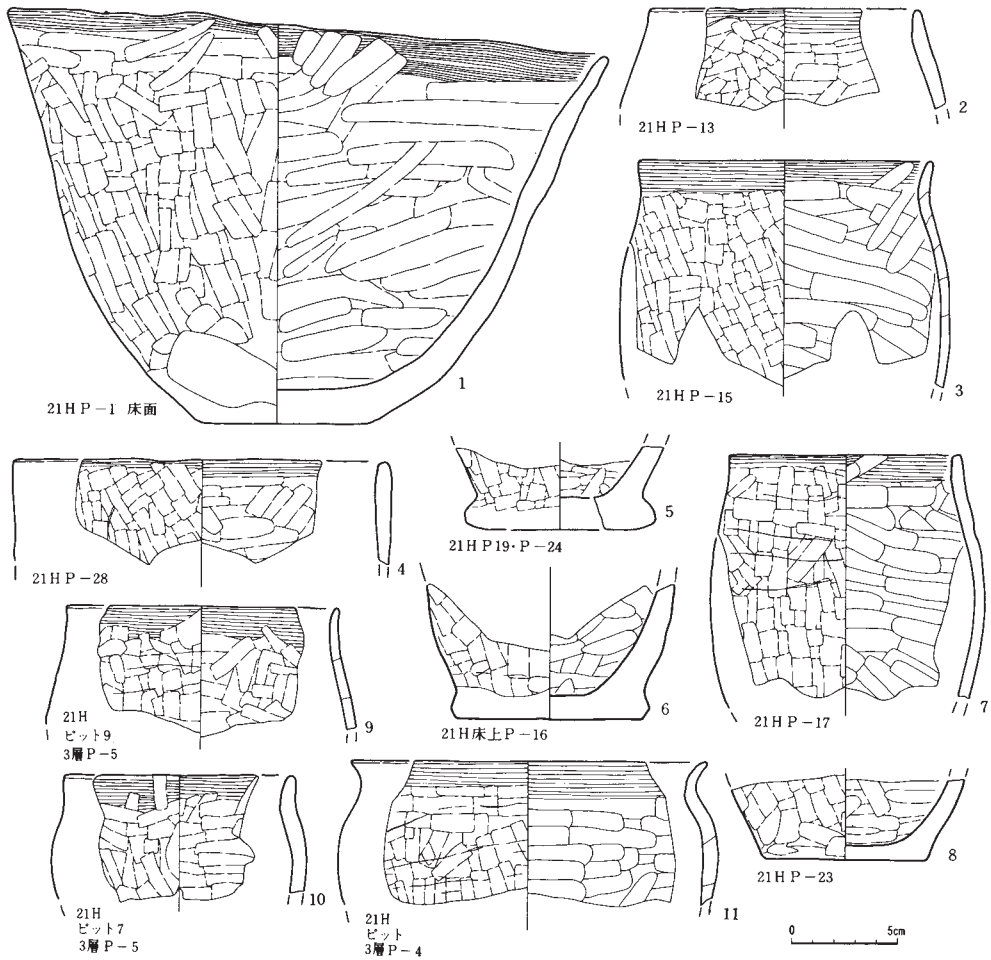
〔かまどA〕



〔かまどB〕



第141図 第21号住居跡かまど実測図

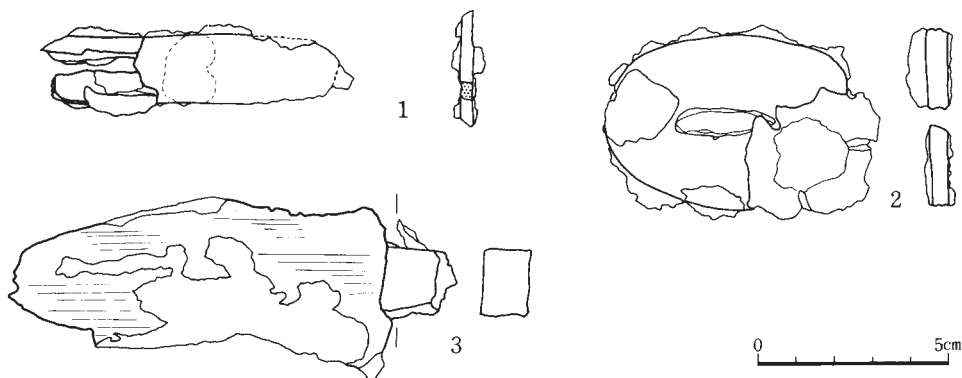


第143図 第21号住居跡出土土器実測図

第50表 第21号住居跡出土土器観察表

遺物番号	種類	器種	器部	法量 (mm)			調整			胎土 (mm)	焼成	色調	備考	出土位置
				口径	底径	器高	口縁部	胴部	底辺部					
1	土師器	甕形	完形	28.5	7.5	17.5 19.5	強い ヨコナテ	ヘラナテ	強い ヘラナテ		良好	7.5Y R6/4 7.5Y R7/6	Ⓢ 煤・炭	P-1 土壌 サンプル床面
2	土師器	小形甕	口縁	(13)	—	—	”	”	—	砂(若・1)	”	5Y R4/1 5Y R6/6		P-13
3	土師器	小形甕	口縁	(14)	—	—	”	”	—	砂(多1-2)	やや 不良	10Y R7/6 10Y R7/3		P-15
4	土師器	甕形	口縁	(18)	—	—	”	”	—	砂(若・1) 石英(1)	良好	2.5YR4/1・6/6 5Y R6/6		P-28
5	土師器	甕形	底辺	—	(9)	—	—	強い ヘラナテ	強い ヘラナテ	砂(少・2)	”	5Y R7/6 5Y R2/1	底面に砂 粒付着	P-19 P-24
6	土師器	甕形	底辺	—	9	—	—	”	”	砂(若・2) 良	”	5Y R6/4 10Y R7/3		床上P-16
7	土師器	小形甕	口縁	(11)	—	—	強い ヨコナテ	”	—	砂・石英 (若・1)	不良	5Y R6/4 7.5Y R4/1	内外 煤・炭	P-17
8	土師器	甕形	底辺	—	(8)	—	—	”	ヘラナテ	砂(多・1) 砂っぽい	良好	2.5Y R5/6 7.5Y R5/2	Ⓢ 変色	P-23
9	土師器	小形甕	口縁	(13)	—	—	強い ヨコナテ	”	—	砂(多・1) 良	”	7.5Y R7/4 10Y R7/4		ビット3 3層P-5
10	土師器	小形甕	口縁	(11)	—	—	”	”	—	砂(微1-2)	”	5Y R5/6 7.5Y R7/4		ビット7 3層P-5
11	土師器	甕形	口縁	(17)	—	—	”	”	—	砂(若・1) 良粘	”	7.5Y R5/3 10Y R7/4	Ⓢ 煤・炭	ビット9 3層P-4

※胎土の砂は砂粒の略
若は若干の略



第144図 第21号住居跡出土鉄製品実測図

第51表 第21号住居跡鉄製品計測表

挿図番号	図版番号	種類	法	量 (cm)	出土地点 (層位)	備	考
144-1		刀子柄部	全長	太さ (8.0) 1.8 × 1.4	F e - 3	茎の計測不可	
144-2		銚	全長	最大幅 厚さ 6.5 4.6 0.5	F e - 1	茎孔 (2.6 × 0.7)	
144-3		不明(柄)	全長	木部長 幅 身部幅 厚さ (11.2) (9.8) 3.9 1.8 1.2	F e - 2	茎の計測不可	

幅6～8cm、深さ6～27cmである。また、それぞれの隅は小ピット状である。

ピット 住居跡内から16個(第141図)検出した。柱穴とみられるものは、pit - 1～4、pit - 10～16で、このうちpit - 1～4及びpit - 10が主柱穴、pit - 11～16は支柱穴と推定される。支柱穴は、壁溝部分に存在した可能性もあるが、明確でない。主柱穴のうち、柱痕がみられたものはpit - 1～3で、pit - 10は埋め戻され、新しくpit - 4が構築されている。このような重複はpit - 1にもみられる。pit - 6～7は底面直上に焼土が入り込み、pit - 9には、シルト岩・土師器片が入り込んでいた。

かまど 南壁の西寄り部分とほぼ中央部分に構築されている。中央部分のもの(かまどA)は、西寄り部分のもの(かまどB)より残存状態が良く、かまど本体部分に使用されたとと思われるシルト岩が散在していたが、かまどBは、焼土だけの残存である。このような確認時の状況からかまどAがBより新しいものと考えられる。かまどAの焼土範囲は55×43cmで、深さが約20cmである。煙道はトンネル式で燃焼部から段状に立ち上がった後、ほぼ水平に延び、煙出口へ約66°の傾斜で立ち上がっている。トンネル部分の規模は、40×25cmで長方形を呈し、長さは横の部分が85cm、縦の部分が100cmで、煙出口は35×23cmの長方形である。かまどBは焼土範囲が72×68cmの隅丸方形で、底面は浅皿状を呈し中央部の深さは9cmである。煙道は段上に立ち上がっている。煙出口は45×30cmの長方形で煙道の長さは115cmである。煙道の掘り方は、幅115cm、長さ205cmであるが埋戻して構築したものと思われる。なお、煙道のセクションには造り替えの痕跡もみられる。

その他の付属施設 竪穴外の施設として、かまど構築の南壁以外の壁を囲むように上端幅60～170cm、下端幅280～460cm、高さ30～40cmの盛土が巡らされている。

出土遺物 床面出土のものは、東南隅出土のほぼ完形の丸底甕形土師器（第143図1）とかまどA右脇出土の砥石（第202図14）である。かまど周辺の覆土から出土したものは、第143図2～3で、ほかは、北壁周辺の覆土から第143図4～5の土師器、西壁周辺の覆土から第144図1～3の鉄製品及び土師器等が出土している。また、竪穴外からは須恵器が出土した。（成田）

第22号住居跡（第145図、第146図）

位置と確認 B R - 44・45・46、B S - 44・45・46から約90cmほどの窪みを確認した。

平面形と規模

平面形	主 軸	規				模				面積(m ²)
		壁 長 (m)				壁 高 (cm)				
長 方 形	S-34°-E	南	西	北	東	南	西	北	東	26.59
		5.8	5.2	5.6	5.2	66	60	66	104	

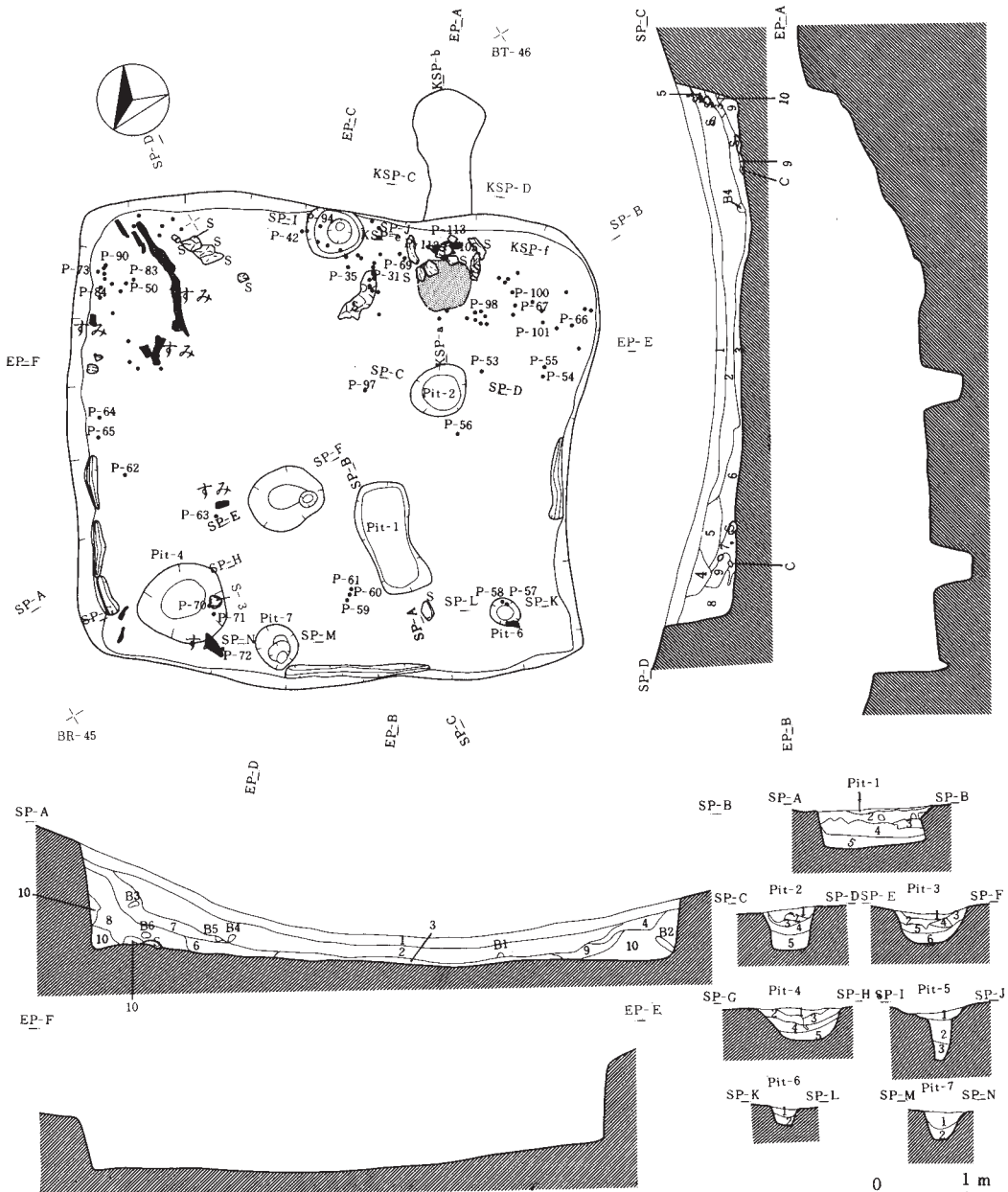
堆積土 大別すると、黒色土、黒褐色土、暗褐色土、褐色土、明黄褐色土の10層に区分できた。住居跡の中央部では黒色土と黒褐色土の層だけで、壁際では褐色土と明黄褐色土が堆積していた。

壁 南壁と東壁及び西壁北寄りの一部がやや緩い傾斜を呈しているが、その他はほぼ垂直に近い立ち上がりである。壁上部は脆く柔らかいが、下部は堅い。

床 かまど周辺は締っていて堅いが、南東の隅の一画が貼り床になっていて柔らかい。貼り床部分を除けば、ほぼ平坦である。

壁溝 北壁・東壁・西壁の各々壁下の一部分から検出した。上端幅3～7cm、下端幅1～4cm、深さ4～13cmである。

ピット 住居跡内から7個検出した。このうち柱穴と思われるのは、pit - 3・5である。



【第22号住居跡】注記

層位	土色	土質	備考
1層	10Y R 2/1	黒色シルト質	混入物なし
2層	10Y R 2/1	黒色シルト質	混入物なし
3層	10Y R 3/2	黒褐色シルト質	褐色土粒混入
4層	10Y R 3/4	暗褐色シルト質	褐色土粒少量混入
5層	10Y R 2/2	黒褐色シルト質	ローム質少量混入
6層	10Y R 2/3	黒褐色シルト質	褐色土粒混入
7層	10Y R 4/4	褐色シルト質	褐色土粒少量混入
8層	10Y R 4/6	褐色シルト質	炭化物少量混入
9層	10Y R 4/7	褐色シルト質	混入物なし
10層	10Y R 6/8	明黄褐色ローム質	混入物なし
B1層	10Y R 3/3	暗褐色シルト質	褐色土粒少量混入
B2層	10Y R 5/6	黄褐色ローム質	褐色土粒混入
B3層	10Y R 4/6	褐色シルト質	炭化物混入
B4層	10Y R 3/3	暗褐色シルト質	褐色土粒少量混入
B5層	10Y R 3/1	黒褐色シルト質	褐色土粒少量混入
B6層	10Y R 5/6	黄褐色ローム質	混入物なし

【第22号住居跡 Pit計測表】

Pit No.	縦横	深さ	Pit No.	縦横	深さ
1	48 × 130	42	2	66 × 56	46
3	84 × 70	80	4	98 × 92	36
5	52 × 64	54	6	46 × 48	18
7	30 × 36	32			

【第22号住居 Pit 1】注記

層位	土色	土質	備考
1層	10Y R 2/1	黒色シルト質	混入物なし
2層	10Y R 2/2	黒褐色シルト質	ローム粒混入
3層	10Y R 3/4	暗褐色シルト質	ローム粒混入
4層	10Y R 4/6	褐色シルト質	混入物なし
5層	10Y R 5/8	黄褐色ローム質	混入物なし
B1層	10Y R 2/3	黒褐色シルト質	混入物なし
B2層	10Y R 4/6	褐色シルト質	混入物なし
B3層	10Y R 5/8	黄褐色ローム質	混入物なし

【第22号住居 Pit 2】注記

層位	土色	土質	備考
1層	10Y R 2/2	黒褐色シルト質	炭化物混入
2層	10Y R 3/3	暗褐色シルト質	炭化物少量混入
3層	10Y R 4/6	褐色シルト質	ローム質少量混入
4層	10Y R 5/8	黄褐色ローム質	混入物なし
5層	10Y R 5/6	黄褐色ローム質	混入物なし

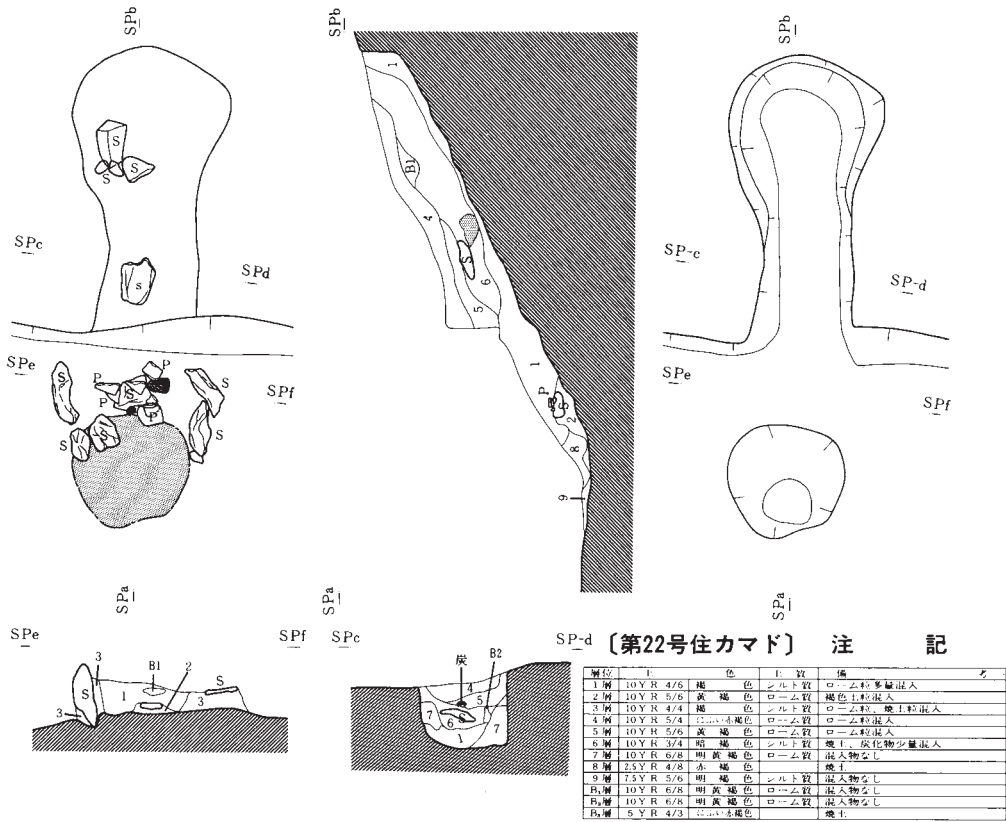
【第22号住居 Pit 4】注記

層位	土色	土質	備考
1層	10Y R 3/4	暗褐色シルト質	ローム粒混入
2層	10Y R 4/4	褐色シルト質	ローム粒混入
3層	10Y R 5/6	黄褐色ローム質	混入物なし
4層	10Y R 5/8	黄褐色ローム質	混入物なし
5層	10Y R 6/8	明黄褐色ローム質	混入物なし
B1層	10Y R 6/6	明黄褐色ローム質	混入物なし

【第22号住居 Pit 5】注記

層位	土色	土質	備考
1層	10Y R 3/4	暗褐色シルト質	ローム粒少量混入
2層	10Y R 4/6	褐色シルト質	ローム粒少量混入
3層	10Y R 6/2	灰黄褐色ローム質	混入物なし

第145図 第22号住居跡実測図



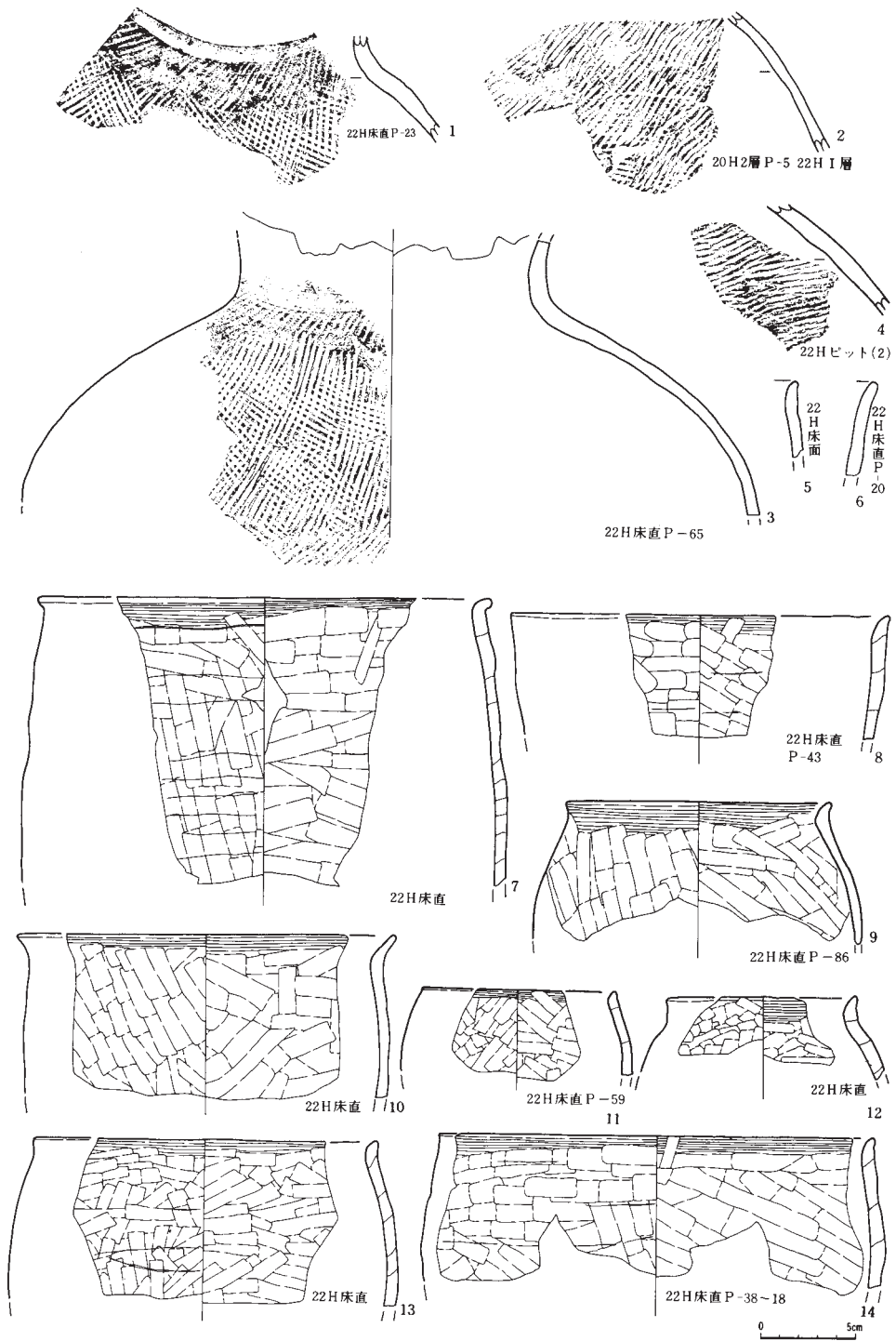
第146図 第22号住居跡かまど実測図

Pit - 3 - は深さ60cm、Pit - 5 は50cmで、どちらも円筒状で、掘り方を有する。Pit 1・2・4・6・7 は、深さが20～40cmで、Pit - 1 が不定形のほかは、すべて掘鉢状で、柱穴かどうかは不明である。

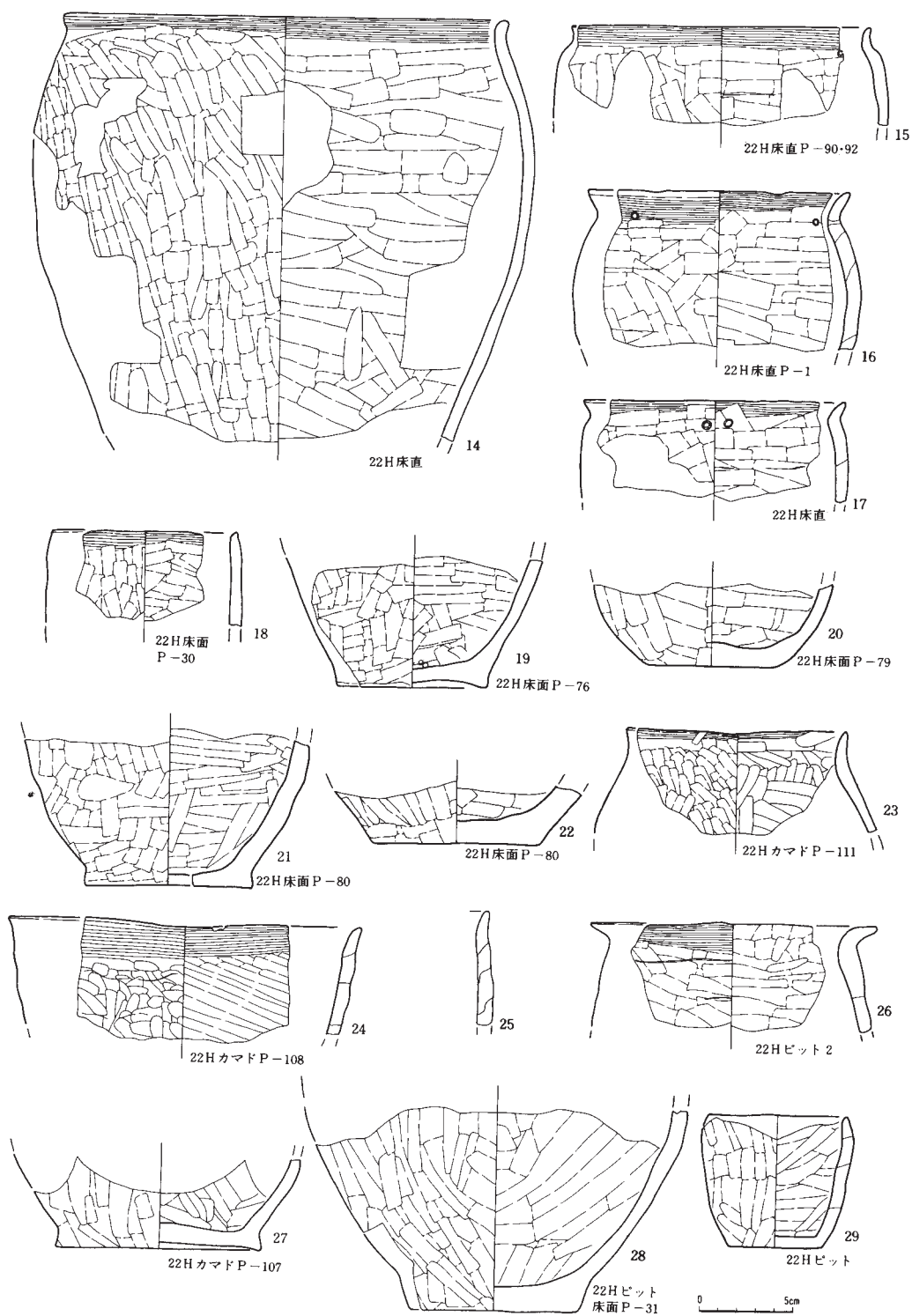
かまど 南壁のやや西寄り部分に構築されている。本体部分の天井部が残存せず、左右の袖にシルト岩を骨材として使用しているが、残存状態はあまり良くない。焼土範囲は径60cmの円形で、最深部分が13cmだが、全体的に薄い堆積を示している。煙道は、煙出部へ向かって立ち上がるタイプで、傾斜角は30°で、長さ150cm、幅45～80cmで、煙道の中央付近のlf層上面に長さ22cm、厚さ6cmの偏平なシルト岩及び焼土ブロックがあった。その他にも煙出孔付近に4個のシルト岩があった。煙出口の残存状態は不良である。

出土遺物 南東の隅に幅6～10cm、厚さ3.5～6cmの炭化物が140cmの長さで床面直上に出土した。また、北東と北西の隅からも炭化物が、丸太状及び板状に残存していた。南東の隅の炭化物近くに紡錘車出土したほか、住居跡内からシルト岩及び土師器片、須恵器片が散在していた。

(成田・津川)



第147図 第22号住居跡出土土器実測図(1)

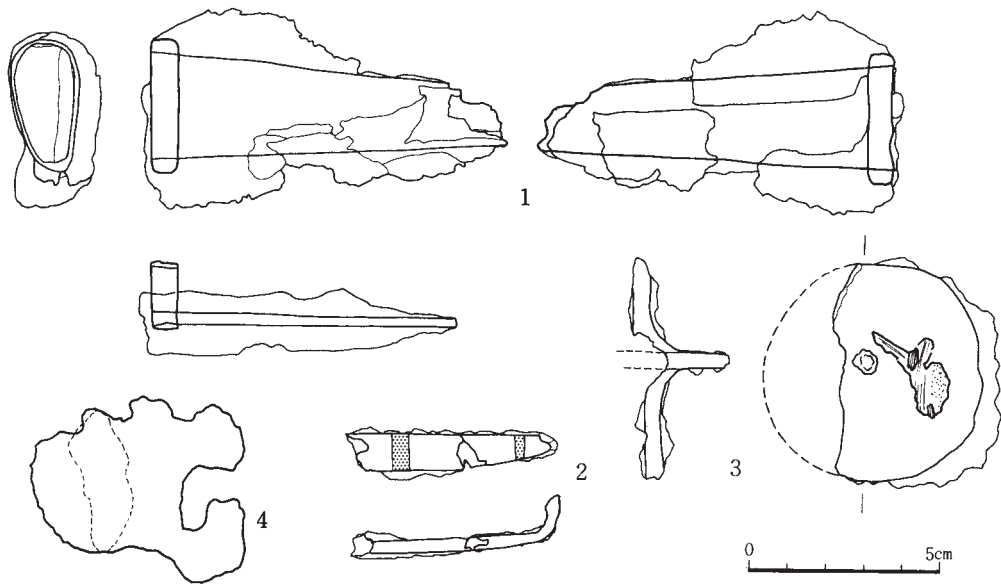


第148図 第22号住居跡出土土器実測図(2)

第52表 第22号住居跡出土土器観察表

遺物番号	種類	器種	器部	法量 (cm)			調整			胎土 (mm)	焼成	色調	備考	出土位置
				口径	底径	器高	口縁部	胴部	底辺部					
1	須恵器	甕形	胴	—	—	—	—	ヘラナデ	—	砂(少・1)	良好	7.5Y R8/4 7.5Y R8/4		床直 P23
2	須恵器	甕形	胴	—	—	—	—	〃	—	砂(少・1)	〃	7.5Y R8/6 7.5Y R8/4		2層 P5
3	須恵器	甕形	胴	—	—	—	—	〃	—	砂(微・1)	〃	7.5Y R7/6 7.5Y R8/4		床直 P65
4	須恵器	甕形	胴	—	—	—	—	〃	—	砂(微・1)	〃	7.5Y R7/4 7.5Y R7/4		ビット2
5	土師器	甕形	口縁 胴	(19)	—	—	強い ヨコナデ	ヘラナデ	—	砂・石英 (多・1)	〃	7.5Y R7/4 7.5Y R7/3		床直
6	土師器	甕形	口縁 胴	(17)	—	—	〃	〃	—	砂(多・1)	〃	2.5Y R7/4 7.5Y R7/4		床直 P20
7	土師器	甕形	口縁 胴	(24)	—	—	〃	〃	—	砂(若・1)	良・堅	7.5Y R8/8 5Y R7/4	㊦ 煤炭	床直
8	土師器	甕形	口縁 胴	(20)	—	—	〃	ユビナデ	—	砂(多1~2) 石英(若)	〃	5Y R7/4 5Y R6/4		床直 P93
9	土師器	小形甕	口縁 胴	(14)	—	—	〃	ヘラナデ	—	砂(多1~3)	〃	5Y R6/6 7.5Y R6/6		床直 P80 P82 P111
10	土師器	甕形	口縁 胴	(20)	—	—	〃	〃	—	砂(多・1) 石英(微)	〃	7.5Y R7/4 7.5Y R6/6		床直 P14 P15
11	土師器	小形甕	口縁 胴	(10)	—	—	〃	〃	—	砂・石英 (多・1)	不良	7.5Y R3/1 7.5Y R4/1		床直 P59
12	土師器	小形甕	口縁 胴	(10)	—	—	〃	〃	—	砂(多・1)	良好	5Y R5/4 5Y R6/3	㊦ 変色	床直 P34
13	土師器	甕形	口縁 胴	(18)	—	—	〃	〃	—	砂(多・1)	〃	5Y R7/6 2.5Y R6/6		床直 P22
14	土師器	甕形	口縁 胴	(23)	—	—	強い ヨコナデ	ヘラナデ	—	砂(多・1)	良・堅	7.5Y R7/3 7.5Y R7/4		床直 P18 P38
25	土師器	甕形	口縁 胴	(24)	—	—	—	—	—	(多・1) 砂・石英	良好	5Y R4/3 5Y R5/3		床直 1層
26	土師器	甕形	口縁 胴	(15)	—	—	—	〃	—	(微・1) 砂・石英	良・堅	5Y R4/3 7.5Y R7/4		床直 P90 P92
27	土師器	小型甕	口縁 胴	(14)	—	—	—	〃	—	砂(多・1)	〃	7.5Y R8/3 7.5Y R7/6	口縁くびれに 部分に穿孔	床直 P1
28	土師器	小型甕	口縁 胴	(14)	—	—	—	〃	—	砂(若・1)	や 不 良	5Y R5/6 7.5Y R8/3	㊦ 煤炭 穿孔	床面 P82
29	土師器	甕形	口縁 胴	(10)	—	—	—	〃	—	砂・石英 (多・1)	良好	7.5Y R7/4 10Y R5/2		床面 P30
30	土師器	甕形	胴 底辺	—	(8)	—	—	強い ヘラナデ	—	砂(少・1)	〃	5Y R6/4 7.5Y R8/3		床面 P76
31	土師器	甕形	胴 底辺	—	7	—	—	強い ヘラナデ	—	砂(多1~2)	〃	5Y R6/4 7.5Y R6/4		床面 P79
32	土師器	甕形	胴 底辺	—	(9)	—	—	〃	〃	砂(少・1)	〃	10Y R6/6 5Y R7/4	㊦ 煤炭	1層、床面 床直
33	土師器	甕形	胴 底辺	—	9	—	—	強い ヘラナデ	〃	砂(多・1)	〃	7.5Y R8/4 7.5Y R7/6	木葉痕	床面 P80 P81
34	土師器	小型甕	口縁 胴	(12)	—	—	強い ヨコナデ	ヘラナデ	—	砂(若・1) 石英(少)	〃	7.5Y R6/4 7.5Y R5/4		カマド P111
35	土師器	鉢形	口縁 胴	(19)	—	—	—	ユビナデ	—	砂(多・1) 良質粘土	〃	5Y R7/4 5Y R6/6		カマド P108
36	土師器	甕形	口縁 胴	(20)	—	—	—	ヘラナデ	—	砂(多・1)	〃	5Y R7/4 5Y R6/6		カマド P108
37	土師器	甕形	口縁 胴	(15.5)	—	—	—	強い ヘラナデ	—	砂(多・1)	〃	5Y R7/4 5Y R6/3		ビット2
38	土師器	甕形	胴 底辺	—	10 11	—	—	〃	強い ヘラナデ	砂(多・1) 良質粘土	良好	2.5Y R5/4 2.5Y R5/3		カマド P107 P110,105
39	土師器	甕形	胴 底辺	—	9	—	—	+	〃	砂(多・2)	〃	5Y R4/1 5Y R5/3		ビット1,2 床直 P31
40	土師器	小型甕	半完形	(7.5)	5	7.2	強い ヨコナデ	+	〃	砂(多・1)	〃	5Y R5/3 7.5Y R5/4		ビット (1)

※胎土の砂は砂粒の略



第149図 第22号住居跡出土鉄製品実測図

第53表 第22号住居跡鉄製品・鉄滓計測表

挿図番号	図版番号	種類	法 量 (cm)				出土地点 (層位)	備 考
			全 長 (8.3)	茎 幅 1.6~2.8	止め金幅 0.7	厚 さ 0.1		
149-1		不明(柄)					ピット-1内	
149-2		不明	全 長 (6.6)	幅 0.6~1.0	厚 さ 0.3~0.5		ピット-1内	曲っている
149-3		紡錘車	径 5.8	厚 さ 0.5	軸 部 0.5×0.6		床 直	木片付着
149-4		鉄 滓	5.6×4.0	厚 1.3			床 直	

第23号住居跡(第151図、第152図)

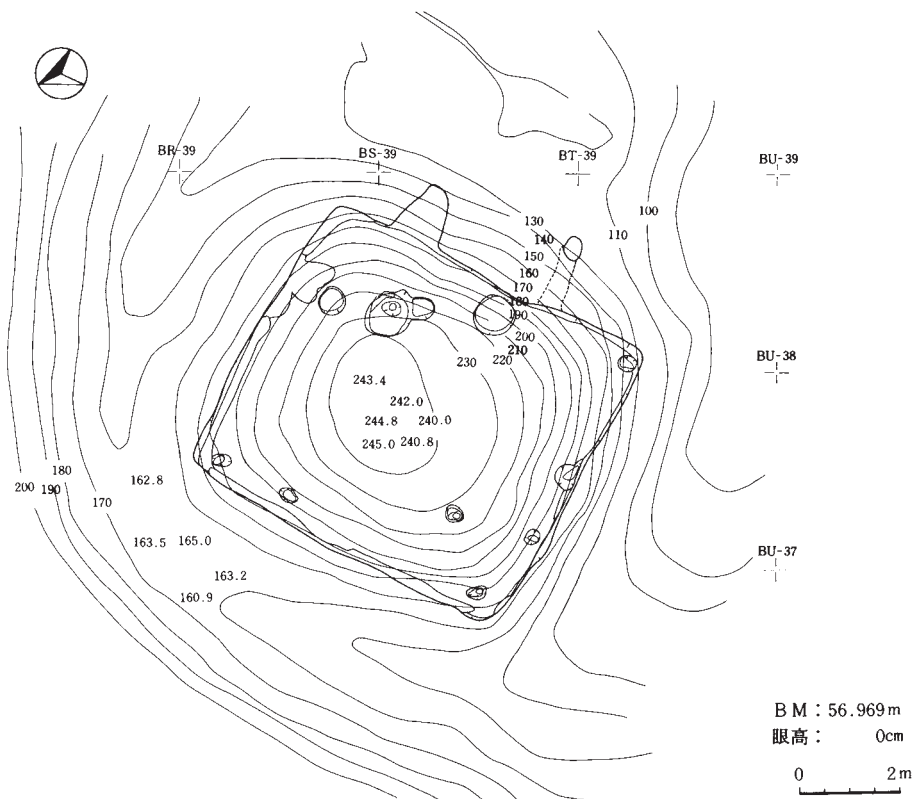
位置と確認 B R - 38・39、B S - 37・38・39、B T - 38・39グリッドから約100cmほどの窪みを確認した。

平面形	主 軸	規 模								
		壁 長 (m)				壁 高 (cm)				面積(m ²)
長 方 形	S-38°-E	南	西	北	東	南	西	北	東	
		7.1	6.4	7.0	6.1	90	35	85	60	

堆積土 大別すると、黒色土、黒褐色土、暗褐色土、黄褐色土である。黒色土と黒褐色土は中央部分に、黄褐色土は壁際に堆積していた。その堆積状況は自然的である。中央付近に長さ120cm、幅60cm、厚さ2cm位のロームが堆積していた。

壁 ほぼ垂直の立ち上がりで、締りが強く堅い。

床 中央部分と、かまど周辺は堅く締っているが、壁溝沿いは柔らかい。ほぼ平坦である。



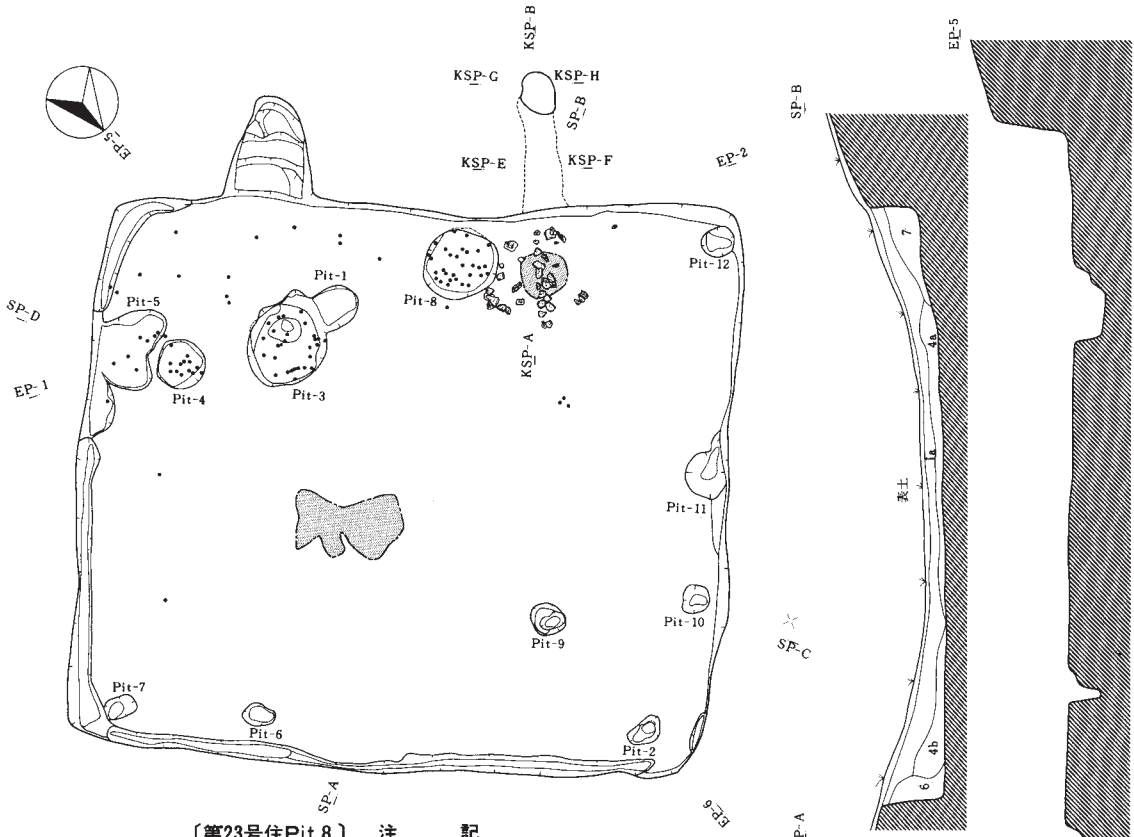
第150図 第23号住居跡確認状況実測図

壁溝 北壁・東壁下から検出した。上端幅 8 ~ 30cm、下端幅 4 ~ 23cmで、深さ 3 ~ 15cm である。

ピット 住居跡内から12個検出（第151図）した。このうち、柱穴と思われるものは、Pit - b ~ Pit - 12である。どのピットも壁下際に位置する。Pit - 1 ~ Pit - 5 は直径50 ~ 90cmの大きなピットで、その覆土内から多数の土師器片が出土した。Pit 2 とPit - 3 は重複しており、新旧関係は不明である。また、かまど脇のPit - 1 から刀子が出土した。

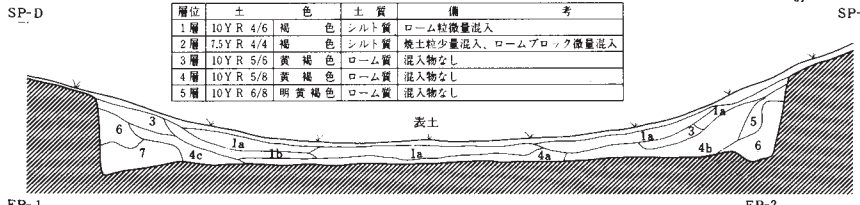
かまど 南壁のやや西寄りに構築されている。本体部の袖部、天井部が残存せず、焼土面とトンネル式煙道のみ検出できた。焼土範囲は、径50cmの円形で断面の最深部分は20cmである。その焼土面の上に土師器片とシルト岩が散在していた。煙道は長さ145cm、幅約50cmで、底面は下降する。煙出孔は幅約80cm、長さ135cmで、煙道に対して85°の傾斜角で立ち上がる。煙道の上の層は、黄褐色土と褐色土の混合層や褐色土層で、軟くなっていた。

付属施設 南壁のかまどよりやや東側に張り出しがある。壁際では、幅100cm、で南へ125cm張り出しており、その先端は、幅が50cm位である。堆積土は、大別すると、暗褐色土、褐色土、にぶい黄褐色土、黄褐色土である。黄褐色土を強く踏み固めており、その断面形は段状であることから、この張り出し部分は出入口として使われたのではないかと考えられる。



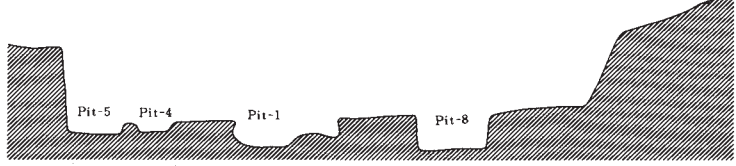
【第23号住Pit 8】注記

層位	土色	土質	備考
1層	10Y R 4/6 褐色	シルト質	ローム粒微量混入
2層	7.5Y R 4/4 褐色	シルト質	黄土粒少量混入、ロームブロック微量混入
3層	10Y R 5/6 黄褐色	ローム質	混入物なし
4層	10Y R 5/8 黄褐色	ローム質	混入物なし
5層	10Y R 6/8 明黄褐色	ローム質	混入物なし



EP-1

EP-2



【第23号住張り出し部】注記

層位	土色	土質	備考
1層	10Y R 5/4 に近い黄褐色	ローム質	混入物なし
2層	10Y R 4/4 褐色	シルト質	ローム粒を多量に含む
3層	10Y R 4/4 褐色	シルト質	ローム少量混入
4層	10Y R 4/4 褐色	シルト質	ローム少量混入
5層	10Y R 3/4 暗褐色	シルト質	ローム混入
6層	10Y R 4/6 褐色	シルト質	ローム混入
7層	10Y R 4/4 褐色	シルト質	暗褐色土、ローム混入
8層	10Y R 4/4 褐色	シルト質	ローム混入
9層	10Y R 5/6 黄褐色	ローム質	混入物なし
10層	10Y R 4/4 褐色	シルト質	ローム混入
11層	10Y R 5/6 黄褐色	ローム質	混入物なし
12層	10Y R 5/6 黄褐色	ローム質	褐色土混入
13層	10Y R 5/4 に近い黄褐色	ローム質	ローム粒少量混入
14層	10Y R 5/6 黄褐色	ローム質	褐色土粒少量混入
15層	10Y R 4/4 褐色	シルト質	ローム粒少量混入
15b層	10Y R 4/4 褐色	シルト質	ローム粒少量混入

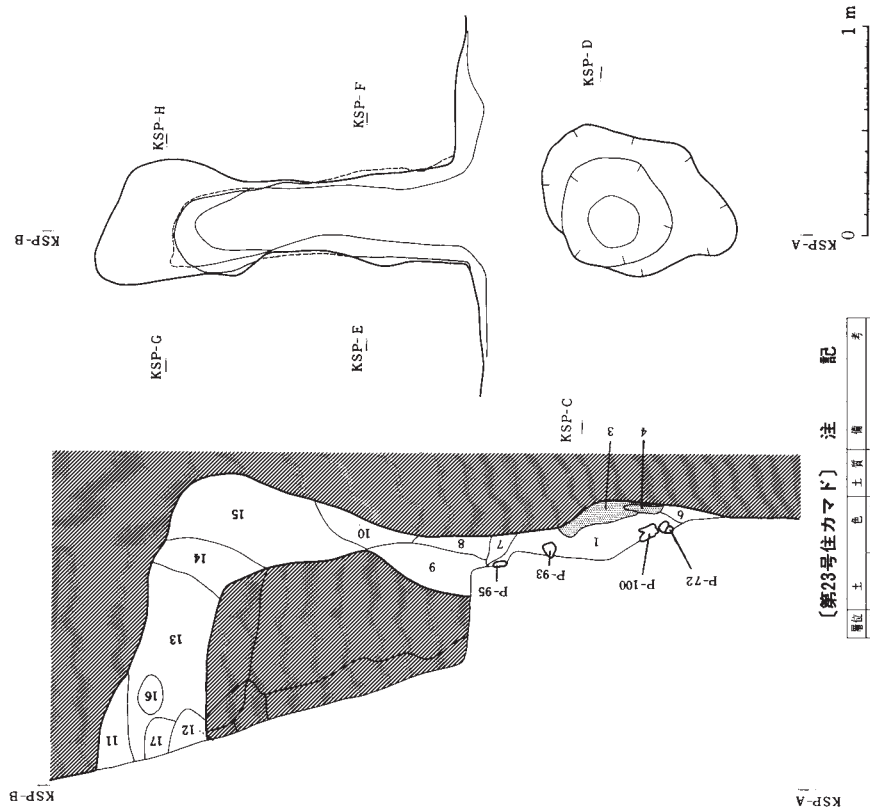
【第23号住居跡】注記

層位	土色	土質	備考
1a層	10Y R 2/1 黒色	シルト質	ローム粒少量混入
1b層	10Y R 2/2 黒褐色	シルト質	ローム粒混入
2層	10Y R 1.7/1 黒色	シルト質	ローム粒混入
3層	10Y R 3/3 暗褐色	シルト質	ローム粒微量混入
4a層	10Y R 5/8 黄褐色	ローム質	黒褐色土混入
4b層	10Y R 1.7/1 黒色	シルト質	ローム粒混入
4c層	10Y R 3/3 暗褐色	シルト質	ローム粒混入
5層	10Y R 3/2 黒褐色	シルト質	ローム粒混入
6層	10Y R 5/6 黄褐色	ローム質	混入物なし
7層	10Y R 5/6 黄褐色	ローム質	混入物なし

【第23号住居跡Pit計測表】

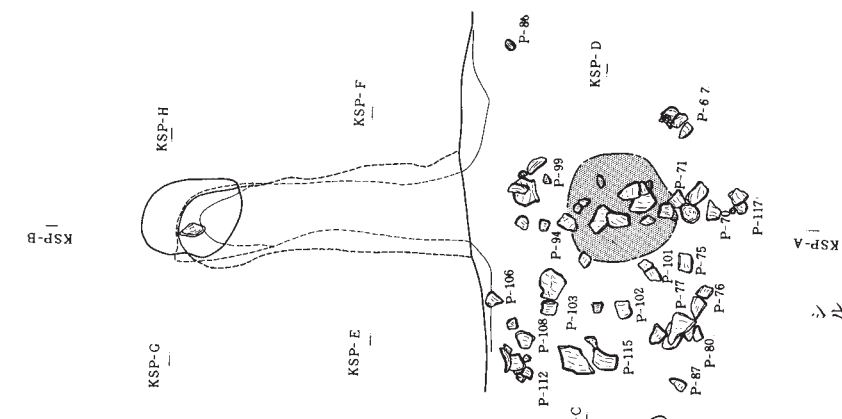
Pit No	規模	深さ	Pit No	規模	深さ
1	50 × 56	18	2	40 × 36	28
3	92 × 110	45	4	58 × 56	13
5	130 × 80	14	6	38 × 26	11
7	36 × 24	5	8	86 × 96	66
9	36 × 42	37	10	32 × 30	5
11	48 × 74	8	12	32 × 38	18

第151図 第23号住居跡実測図



〔第23号住カマド〕 注 記

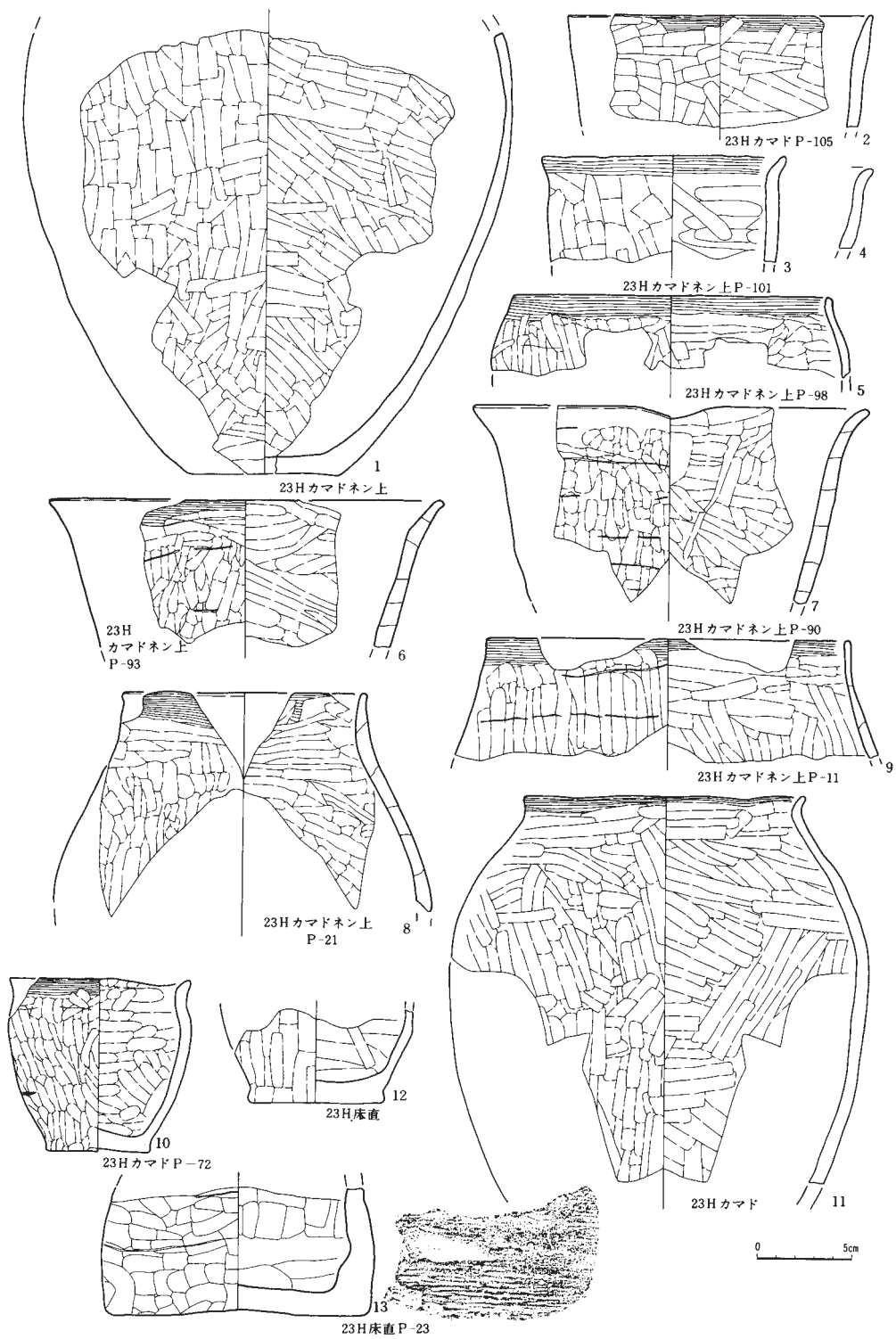
層位	土 色	土 質	備 考
10層	10YR 3/3 黄褐色	シルト質	ローム状少量堆積層
11層	10YR 4/4 黄 色	シルト質	ローム状堆積層
12層	10YR 3/2 黄褐色	シルト質	ローム状少量堆積層
13層	10YR 3/2 黄褐色	シルト質	堆積層なし
14層	10YR 3/2 黄褐色	シルト質	ローム状堆積層
15層	10YR 3/3 黄褐色	シルト質	堆積層少量堆積層
16層	10YR 3/3 黄褐色	シルト質	ローム状少量堆積層
17層	10YR 4/4 黄 色	シルト質	ローム状少量堆積層



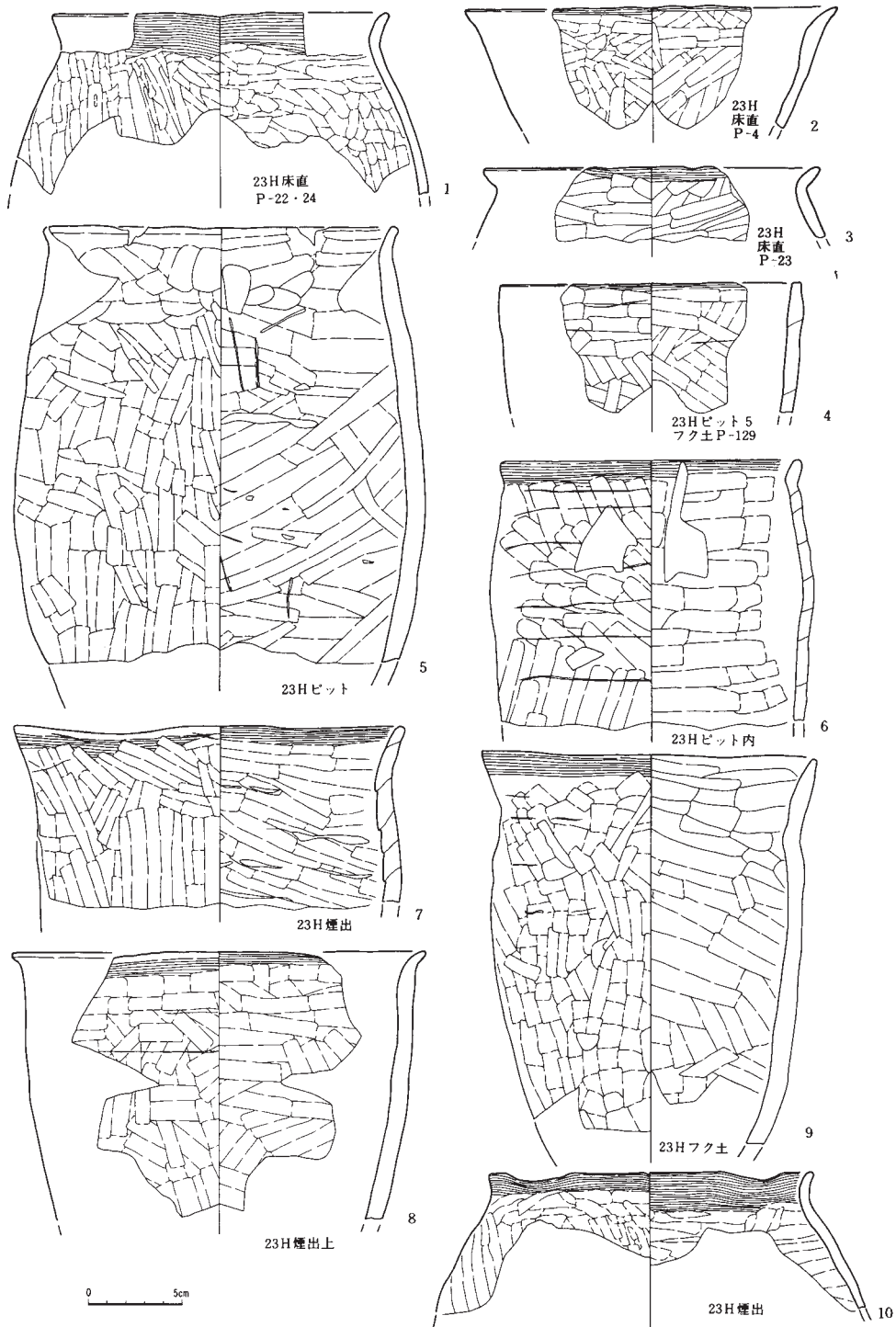
〔第23号住カマド〕 注 記

層位	土 色	土 質	備 考
1層	10YR 4/6 黄 色	シルト質	堆積層なし
2層	10YR 3/4 黄 色	シルト質	堆積層少量に侵入する
3層	10YR 5/8 黄褐色	粘土	
4層	5YR 4/6 赤褐色	粘土	堆積層なし
5層	10YR 5/8 黄褐色	ローム状	堆積層なし
6層	10YR 3/3 黄褐色	シルト質	ローム状少量に侵入する
7層	10YR 3/3 黄褐色	ローム状	堆積層少量堆積層
8層	10YR 4/6 黄 色	シルト質	堆積層なし
9層	10YR 5/6 黄褐色	シルト質	堆積層少量に侵入する

第152図 第23号住居跡かまど実測図



第153図 第23号住居跡出土土器実測図(1)

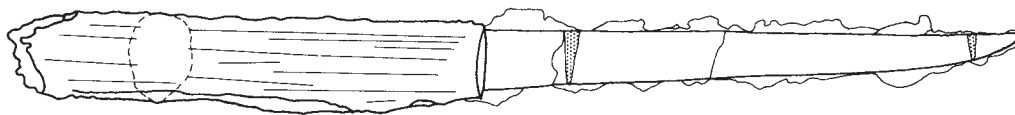


第154図 第23号住居跡出土土器実測図(2)

第56表 第23号住居跡出土土器観察表

遺物番号	種類	器種	器部	法 量(cm)			調 整			胎土(mm)	焼成	色 調	備 考	出土位置
				口 径	底 径	器 高	口縁部	胴 部	底辺部					
1	土師器	甕形	口縁部	(18)	—	—	強いヨコメテ	ヘラメテ	—	砂(多)1-2 やや粗	良・堅	7.5YR 5/6 7.5YR 6/6		床直P-22, 24 煙出し上P-8
2	土師器	甕形	口縁部	(20)	—	—	"	"	—	砂(多)1 良・粘	良好	10YR 6/4 7.5YR 7/6		床直P-4
3	土師器	甕形	口縁部	(18)	—	—	"	"	—	砂(多)1 硬(若)	"	7.5YR 8/2 7.5YR 8/3		床直P-23
4	土師器	甕形	口縁部	(16)	—	—	"	"	—	砂(多)1	良・堅	10YR 8/3 10YR 7/1		ビット5 フク土P-129
5	土師器	甕形	口縁部	(19)	—	—	ヘラメテ	"	—	砂(多)2 硬(若)	良好	7.5YR 5/3 7.5YR 5/1		ビット
6	土師器	甕形	口縁部	(16)	—	—	強いヘラメテ	"	—	砂(多)1-2	良好	7.5YR 8/1 7.5YR 7/3		ビット内
7	土師器	甕形	口縁部	(20)	—	—	"	"	—	砂(多)1 良・粘	良好	5YR 6/3 2.5YR 6/4		煙出
8	土師器	甕形	口縁部	(22)	—	—	"	"	—	砂(少)1-3 やや粗	"	2.5YR 6/6 2.5YR 5/2		煙出し上P-2
9	土師器	甕形	口縁部	(19)	—	—	"	"	—	砂(多)2 硬(若)	"	10YR 6/2 10YR 6/3	◎煤炭	フク土
10	土師器	甕形	口縁部	(18)	—	—	"	"	—	砂(多)1	"	5YR 6/4 5YR 3/3	1と同一	煙出
11	土師器	甕形	胴部	—	(8)	—	強いヘラナテ	強いヘラナテ	—	砂(多)1 やや粗	良好	7.5YR 6/8 7.5YR 5/4		カマド1 カマド1 125-体直P-25
12	土師器	甕形	口縁部	(16.2)	—	—	強いヨコナテ	ユビナテ	—	砂(多)1 砂(多)2	良・堅	10YR 8/2 10YR 8/3		カマド-1
13	土師器	甕形	口縁部	(12)	—	—	"	強いヘラナテ	—	砂(多)1 石(1-2)	良好	10YR 7/4 10YR 8/4		
14	土師器	甕形	口縁部	(18)	—	—	"	ヘラナテ	—	砂(多)2 やや粗	"	5YR 4/6 5YR 6/8		カマド-1
15	土師器	甕形	口縁部	(17)	—	—	"	"	—	砂(多)1-2 硬	"	10YR 5/3 10YR 3/4		カマド カマド P-98 床直P-5
16	土師器	鉢形	口縁部	(21)	—	—	"	"	—	砂(多)1 良・粗	"	5YR 5/6 3YR 4/8		カマド カマド P-93
17	土師器	鉢形	口縁部	(21)	—	—	ヘラナテ	"	—	やや粗	"	10YR 7/3 10YR 7/3	◎赤 褐色・もろい	カマド カマド P-90
18	土師器	甕形	口縁部	(13)	—	—	強いヨコナテ	"	—	砂(多)1 やや粗	"	5YR 5/6 7.5YR 5/4		カマド カマド P-121
19	土師器	甕形	口縁部	(19)	—	—	"	"	—	砂(多)1 やや粗	"	10YR 6/3 10YR 6/3		カマド カマド P-111
20	土師器	甕形	半完形	9.5	5.5	9.3	"	強いヘラナテ	—	砂(若)1 良	"	5YR 6/6 5YR 5/4		カマド カマド P-72
21	土師器	甕形	口縁部	—	—	—	"	"	—	砂(多)1 硬(少)	"	5YR 7/4 5YR 6/6		カマド
22	土師器	甕形	胴底辺	—	(7)	—	—	ヘラナテ	—	砂(多)2 硬(若)	"	7.5YR 6/3 7.5YR 6/2		床直
23	製塩土器	甕形	胴底辺	—	(14)	—	ユビナテ	強いユビナテ	—	砂(多)1 硬(若)	"	2.5YR 6/4 2.5YR 6/6	白砂式 (製塩土器)	床直P-21 P-74, 65

※胎土の砂、砂粒の略



0 5 cm

第155図 第23号住居跡出土鉄製品

第55表 第23号住居跡鉄製品計測表

挿図番号	図版番号	種類	法 量 (cm)				出土地点 (層位)	備考
155-1		刀子	全長 26.5	刃部長 14.0	幅 1.6	厚さ 0.2~0.4	pit-8内	柄の太さ 2.4×1.7

出土遺物 かまど内及び周辺からは、第153図1～11のような土師器片が出土した。ピット内及び周辺からは第155図4～5のような土師器片が出土した。また、覆土内出土の土師器は第154図9である。また、床面から製塩土器(第154図13)が出土した。(成田・津川)

第24号住居跡(第156図、第157図)

位置と確認 BT - 43・44、BU - 33・34、BY - 33・34から約50cmほどの窪みを確認した。

平面形と規模

平面形	主 軸	規 模								面積(m ²)
		壁 長 (m)				壁 高 (cm)				
方 形	S-8°-E	南	西	北	東	南	西	北	東	14.41
		4.0	4.0	4.3	4.2	43	47	46	50	

堆積土 住居跡の中央部では、黒褐色土と暗褐色土の2層だけで、壁際ではにぶい黄褐色土と黄褐色土が堆積していた。自然堆積である。

壁 どの壁もやや緩い傾斜を呈している。壁は、強く締っている。

床 全体的に強く締っているが、特にかまど周辺は堅緻である。

壁溝 南壁の西寄り部分と西壁の南寄り部分を除く各々壁下から検出した。上端幅8～15cm、下端幅6～8cm、深さ2～17cmである。

ピット 住居跡内から2個検出したが、柱痕とみられるものは無く、2個とも浅皿状で、かまど付近から検出した。

かまど 南壁のほぼ中央に構築されている。かまど燃焼部の焼土とトンネル式の煙道部分のみが残し袖石抜き取り痕らしきものが煙道口から燃焼部までみられる。使道部と煙道部は掘り方を有する。煙道部は直接ロームを掘り込み、底面は下降し、煙出して65°の傾斜をもって立ち上がり、長さ88cm、幅40～48cmである。焼土範囲は径44cm、中央部分の深さ5cmの浅皿状を呈している。

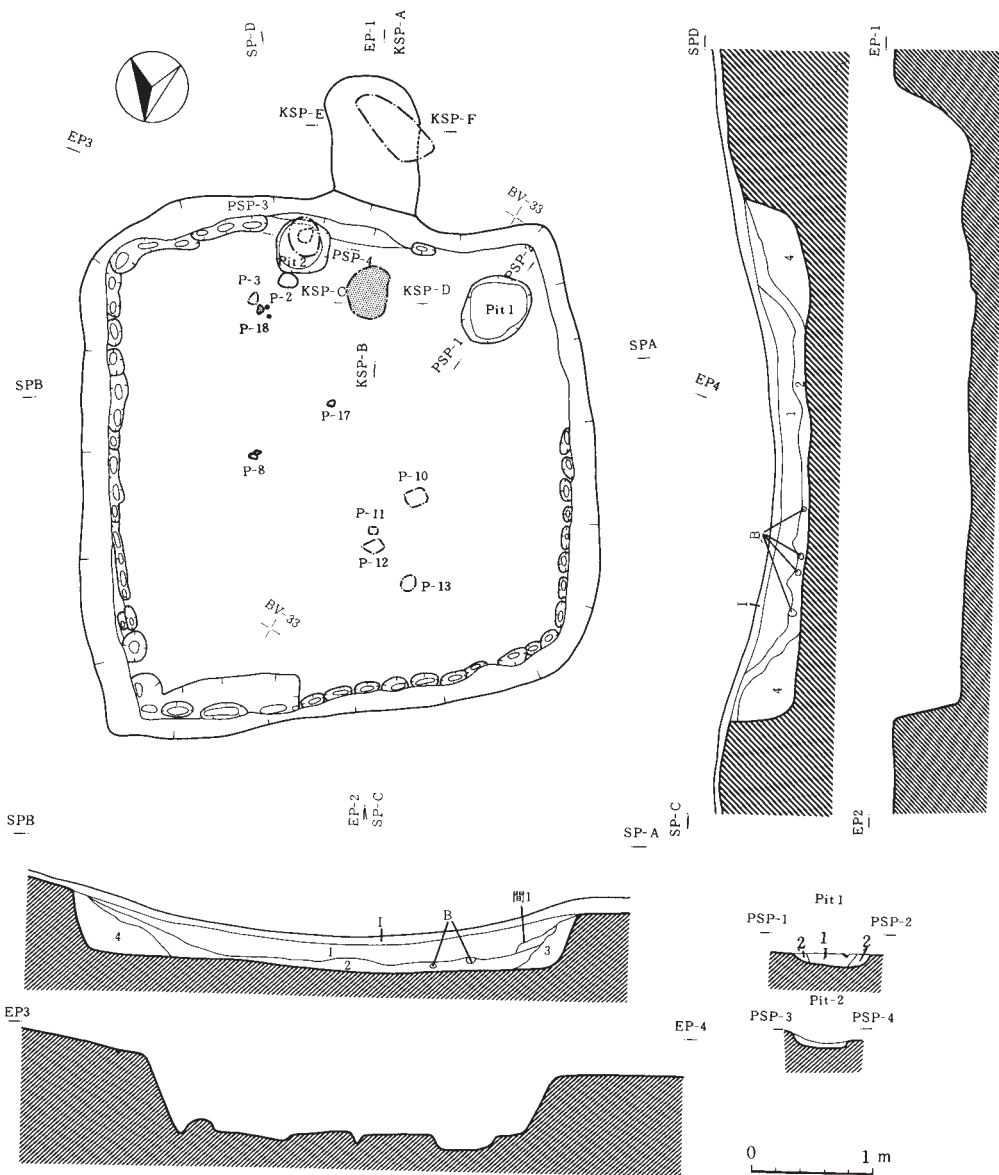
出土遺物 Pit - 2の上からシルト岩が1個、その他に床面から数片の土師器(第170図1～3)が出土した。(成田・津川)

第56表 第24号住居跡出土土器観察表

遺物番号	種類	器種	器部	法 量cm			調 整			胎土 mm	焼 成	色 調	備 考	出土位置
				口 径	底 径	器 高	口縁部	胴 部	底辺部					
1	土師器	半完形	半完形	(14.4)	9.5	15	強いヨコナデ	ユビナデ	ユビナデ	砂(5)	良 好	7.5Y R ^{5/2} 7.5Y R ^{3/2}	二次火焼 木葉痕	かまど煙道 上II層P16
2	土師器	口縁胴	口縁胴	(17)	—	—	〃	ヘラナデ	—	砂粒(多,1)	〃	10Y R ^{5/2} 10Y R ^{3/2}		床面
3	土師器	口縁胴	口縁胴	(19)	—	—	〃	〃	—	砂(多,1)	〃	5Y R ^{5/2} 7.5Y R ^{3/2}	煤炭	床面P-12

※胎土の砂は砂粒の略

(実測図は第170図)



【第24号住居跡】 注 記

【第24号住居跡 Pit 計測表】

Pit No	規模	深さ	Pit No	規模	深さ
1	66×52	22	2	50×48	12

層位	土 色	土 質	備 考
1 層	10Y R 2/2 黒 褐色	シルト質	ローム粒混入
2 層	10Y R 3/4 暗 褐色	シルト質	ローム粒多量、火山灰ブロック混入
間1層	10Y R 3/2 黒 褐色	シルト質	ローム粒混入
3 層	10Y R 5/4 によい黄褐色	ローム質	ロームブロック多量混入
4 層	10Y R 5/8 黄 褐色	ローム質	ロームブロック多量混入

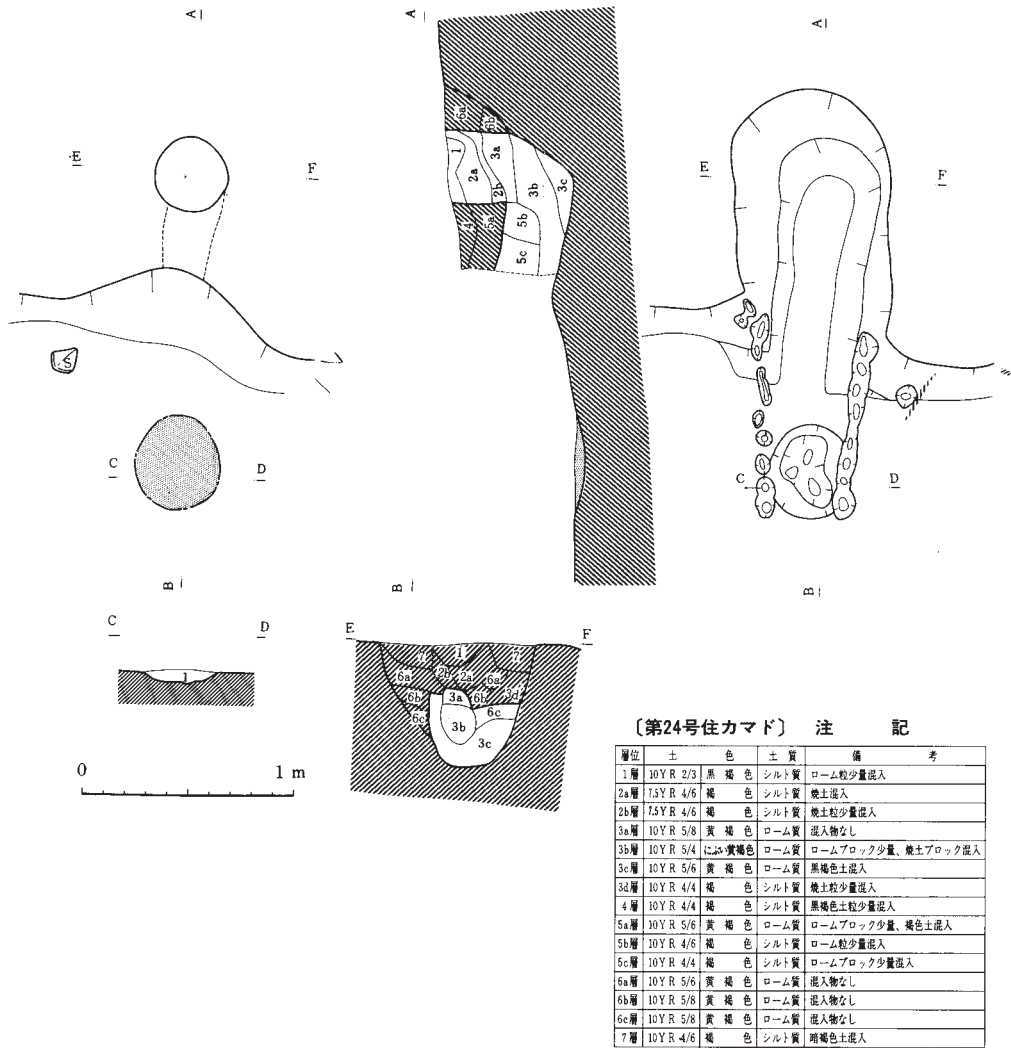
【第24号住Pit 1】

層位	土 色	土 質	備 考
1 層	2.5Y 3/3 暗オリーブ褐色		火山灰、ロームブロック、焼土ブロック少量混入
2 層	2.5Y 4/6 オリーブ褐色		火山灰

【第24号住Pit 2】

層位	土 色	土 質	備 考
1 層	10Y R 5/6 黄 褐色	ローム質	焼土粒微量、オリーブ褐色土多量混入

第156図 第24号住居跡実測図



第157図 第24号住居跡かまど実測図

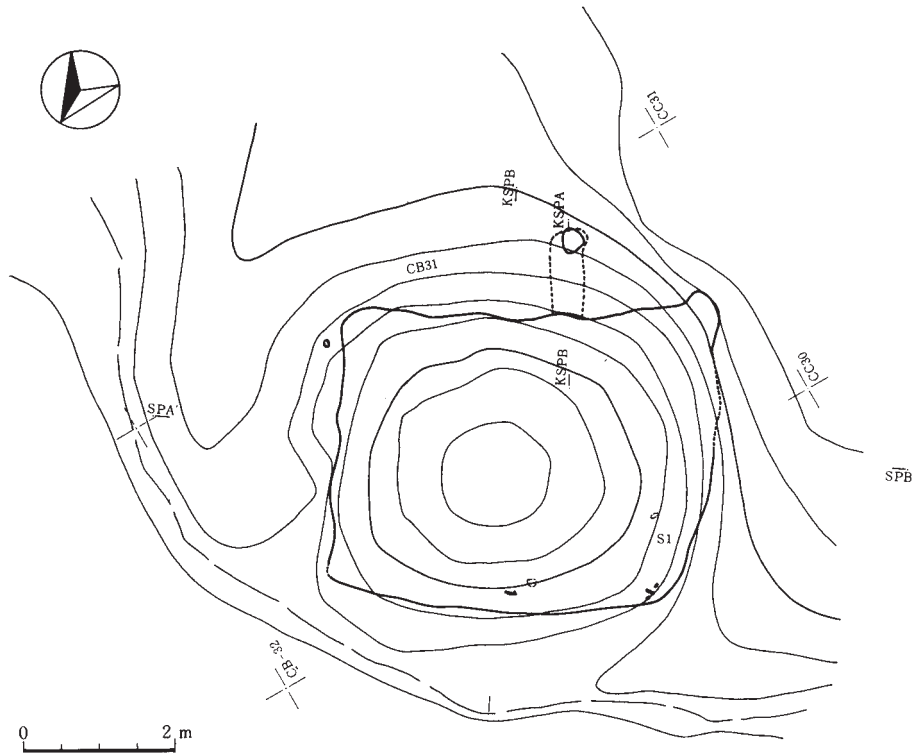
第25号住居跡 (第159図、第160図)

位置と確認 西側地区の沢を狭んでさらに西側にあたるC A - 29・30、C B - 29・30でおよそ直径6m、深さ60cmほどの円形のレンズ状の窪みを確認した。

平面形と規模

平面形	主 軸	規 模							
		壁 長 (m)				壁 高 (cm)			
隅丸方形	S-35°-E	南東	南西	北東	北西	南東	南西	北東	北西
		5.00	3.92	3.79	4.74	46	88	47	55

竪穴周囲 南東側を除く周囲に盛土(3b層)がみられた。この下には、火山灰のブロック(4a・4b層)がみられた。4a層は灰褐色火山灰、4bは青灰色火山灰に相当する。



第158図 第25号住居跡確認状況・遺物分布図

堆積土 壁際の火山灰質土と中央のレンズ状の黒色土に大別できる。確認の状態から、自然堆積と考えられる。

壁 ほぼ垂直に立ち上がるが、北東、南東壁の上方は壁外側の a 層が住居の内側に向かって切られたようになっており、この部分より上方から竪穴を掘りこんでいたものと思われる。

床 大部分・層まで掘りこんでいる。

壁溝 かまどの下と南西壁の中央部を除いて全体に巡っている。北西壁側と北東壁側は一部30cmほどの幅に広がったが、これは掘り方と思われる。

ピット ピット6～10は、貼床の下から検出した。ピット1の覆土は2 a 層に似る黒褐色土であるが、他のピットの覆土は褐色土である。ピット7～10は柱穴と思われる。

かまど トンネル式である。煙道は燃烧部から壁外に向かい下降し、煙出しのところで垂直に立ち上がる。周囲の 層は部分的に焼けている（8 層）。袖部は崩れて、燃烧部付近に暗褐色土があり、中に礫も残っている。右側の礫は、 層を掘り窪めて埋置され、これらが袖の骨材とされたものと思われる。また、礫の埋置されていたと思われるピットも左右にあった。燃烧部底面は、よく焼けている。これから20cmほど奥の壁直下の部分も底面が焼けている。

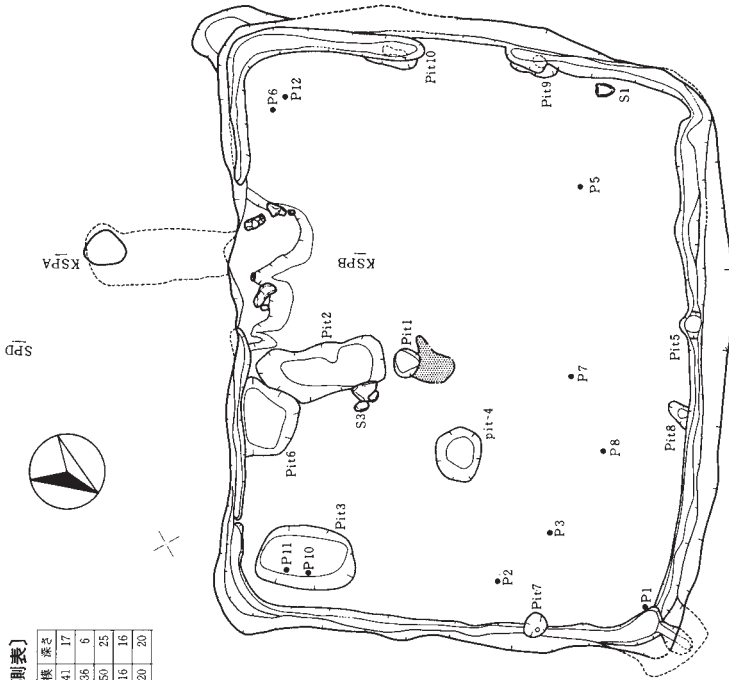
出土遺物 かまどの崩落土上及び火床面上から土師器甕（2、5～7、10）や礫が出土した。

[第25号住居跡] 注記

層位	土質	土質	土質	考
14層	10YR 6/1	黒色	硬土質	
15層	10YR 6/2	黒色	#	1. 5層に似る
16層	10YR 2/1	黒色	#	1. 5層に似る
17層	10YR 2/2	黒褐色	#	1. 5層に似る
18層	10YR 2/3	暗褐色	#	中央部だけいさ
24層	10YR 3/2	黒褐色	#	1. 5層に似る
25層	10YR 4/4	褐色	#	ローム状多量
26層	10YR 4/4	褐色	#	黒ローム状多量 (4%)
27層	10YR 3/4	暗褐色	#	5層に似る
28層	10YR 4/4	褐色	#	5層に似る
34層	10YR 3/2	黒褐色	#	3. 5層に似る、黄白色微細ローム状多量
35層	10YR 6/6	明黄褐色	#	III・IV層に似る
36層	10YR 4/4	褐色	#	2. dに似る
44層	2.5Y 5/6	黄褐色	少く多量	(赤褐色火山灰)
45層	2.5Y 5/4	黄褐色	少く多量	(赤褐色火山灰)
5層	1.5YR 3/3	暗褐色	硬土質	

(第25号住居跡 Pit計測表)

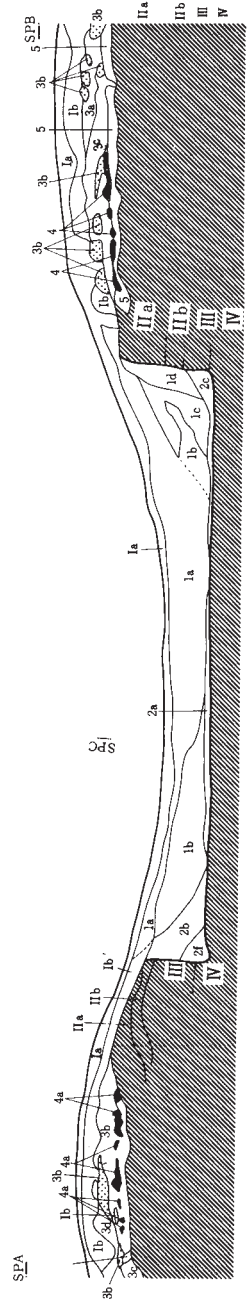
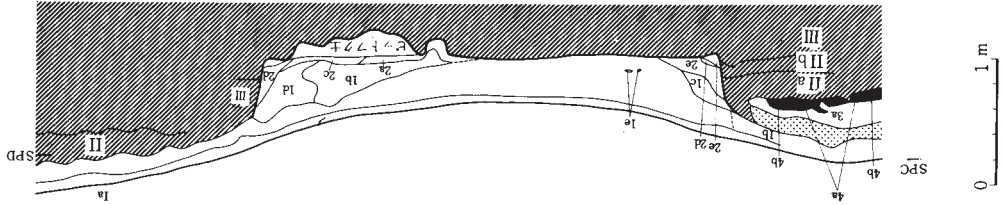
Pit No.	規模	深さ	Pit No.	規模	深さ
1	23×20	12	2	30×41	17
3	78×51	10	4	43×26	5
5	22×18	6	6	54×50	25
7	20×17	8	8	24×16	16
9	37×20	23	10	42×20	20



SPA

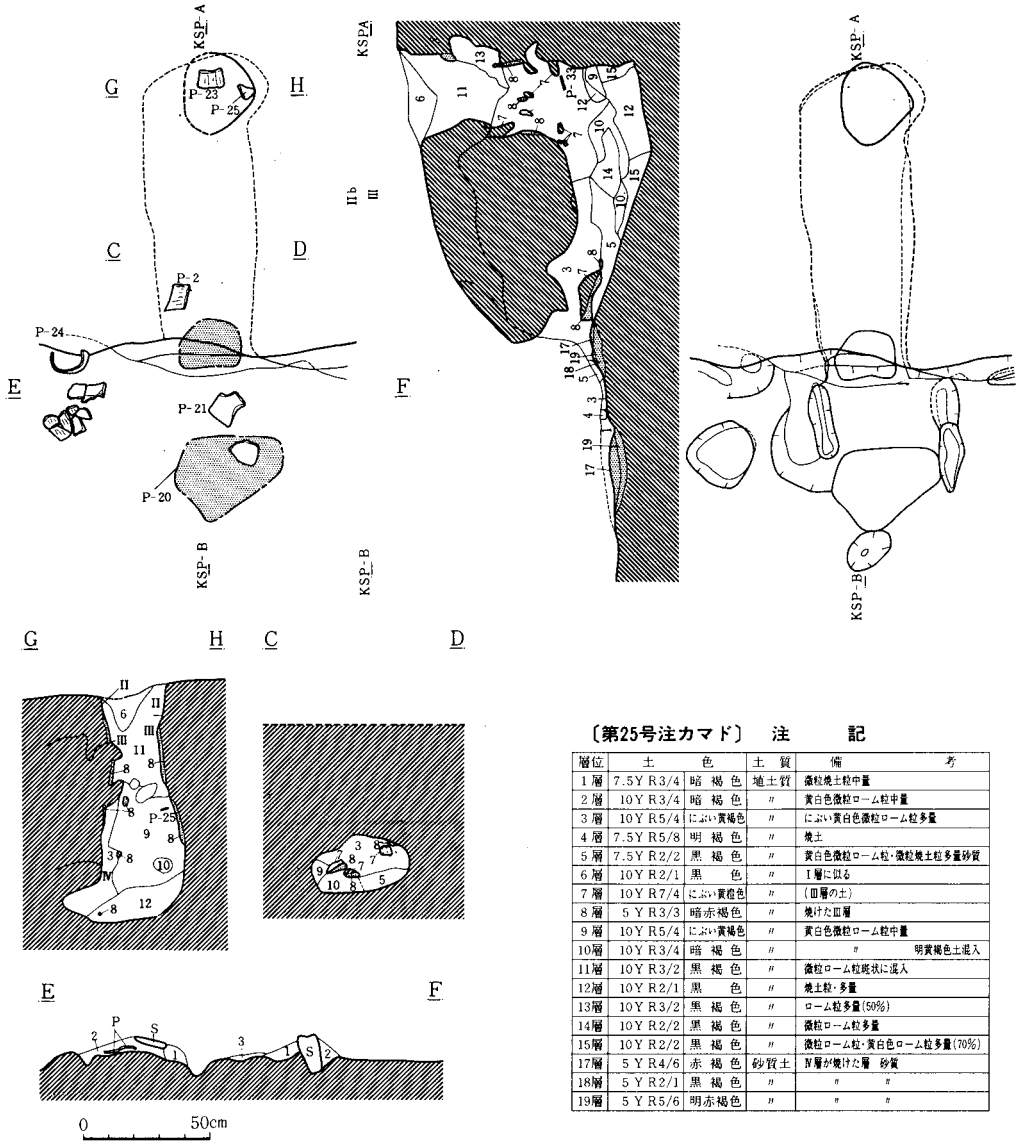
SPB

CC-30



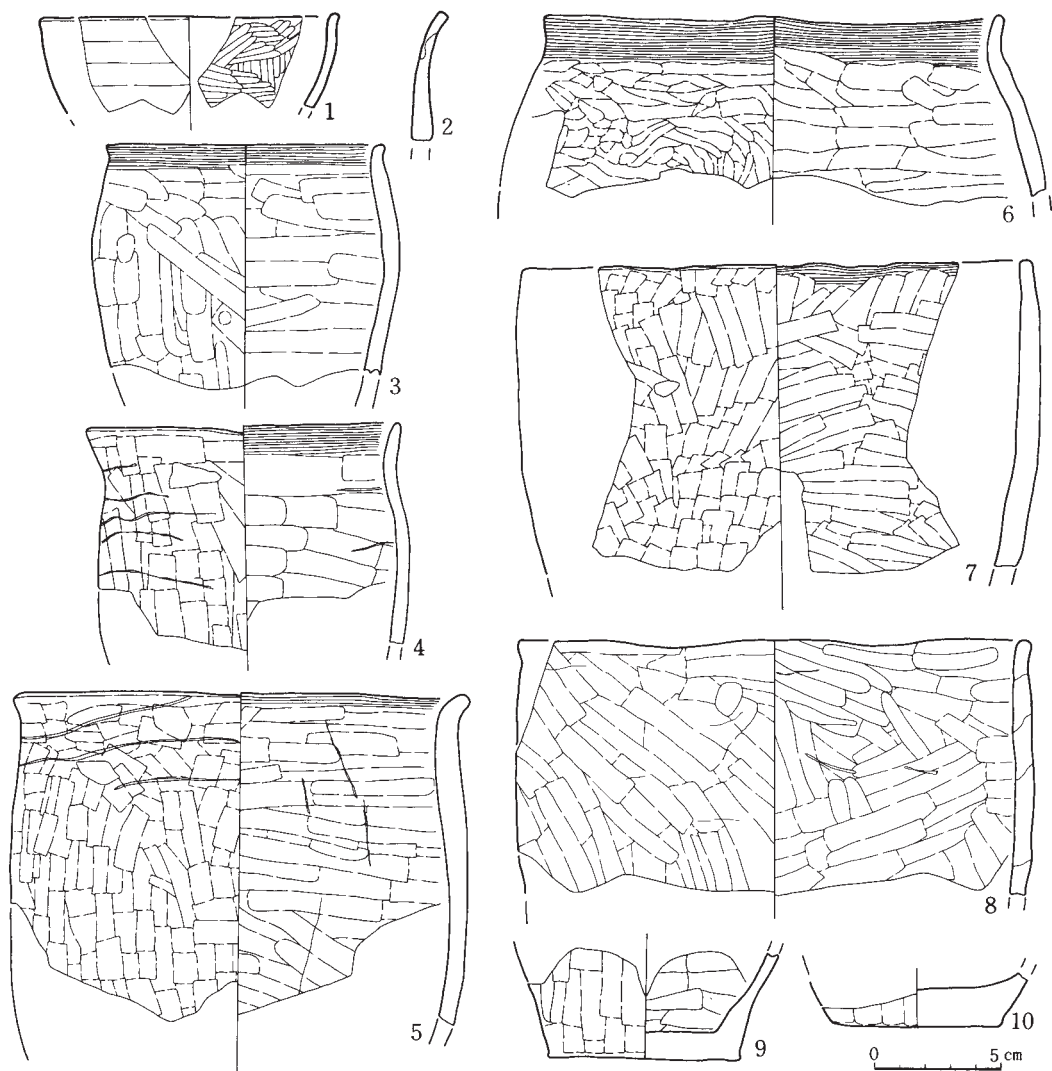
第159図 第25号住居跡

第159図 第25号住居跡実測図



第160図 第25号住居跡かまど実測図

煙出しの下部からも甕の破片(4)が出土した。またかまどの右側の床面上からは内面黒色処理された甕の破片(1)が出土した。その他の床面からも甕(8)や礫が出土した。西隅や北西壁寄りのところからは炭化材が出土した。(坂本)



第161图 第25号住居跡出土遺物実測図

第57表 第25号住居跡出土土器観察表

遺物番号	種類	器種	器部	法 量 (cm)			調 整			胎 土	焼 成	色 調	備 考	出土位置
				口径	底径	器高	口縁部	胴 部	底辺部					
1	土師器	杯	口縁	(12)			(ロクロ)ミガキ	(ロクロ)ミガキ		砂粒若干、精選され緻密	良好でやや軟らかい	7.5YR8/3 1.7/1	ロクロ	床直P-6
2	"	甕	"	(16)			横ナデ 横ナデ	ヘラナデ ヘラナデ		砂粒多、石英粒若干含む	良 好	5YR7/4 6/4		カマド
3	"	"	"	11			"	"		2×3mm大の砂粒を若干含む	"	7.5YR5/4 5/2	煤状炭化物 外面一部変色	ビットP-11
4	"	"	"	12.4			ヘラナデ 横ナデ	"		2×2mm位の砂粒	"	7.5YR7/3 3/1 6/3 3/1		カマドP-23
5	"	"	"	18			横ナデ 横ナデ	ケズリ ヘラナデ		1.5mm位の砂粒多量 良質粘土	"	5YR7/6 6/6		カマドP-20
6	"	"	"	18			"	ヘラナデ ヘラナデ		2×1mmの砂粒が多	"	7.5YR7/4 8/4		カマドP-24
7	"	"	"	(20)			横ナデ	"		細砂粒少 石英粒若干 やや砂っぽい	"	2.5YR8/3 8/3		カマドP-21
8	"	"	"	(22)			ケズリ ヘラナデ	ケズリ ヘラナデ		細砂粒多 石英粒若干	良好で堅い	5YR6/6 2.5YR6/6		床直P-1、P-2
9	"	"	底面		7.5			ヘラナデ ヘラナデ		1mm大の砂粒が多 石英粒若干	良 好	5YR4/2 7.5YR4/3	底面ヘラ調整	ビット3 P-10
10	"	"	"		6.7 ~7			ケズリ ケズリ		2mm大の石英粒多	良好で堅い	7.5YR6/3 5YR7/3	外面砂粒多量に 付着	カマドP-19

第58表 第26号住居跡出土土器観察表

遺物番号	種類	器種	器部	法 量 cm			調 整			胎 土mm	焼 成	色 調	備 考	出土位置
				口径	底径	器高	口縁部	胴 部	底辺部					
1	土師器	袖珍	完形	3.4~ 3.6	1.9~ 2.4	5.8	強い ヨコナデ	ヘラナデ	ヘラナデ ユビナデ	石英(多1)	良 好	7.5YR $\frac{5}{4}$ 10YR $\frac{3}{4}$		床直P-4
2	土師器	袖珍	完形	2.4	2	3.7	"	"	"	砂(多1) 石英(多1)	"	7.5YR $\frac{3}{4}$ 7.5YR $\frac{3}{4}$		床直上P-7
3	土師器	袖珍	完形	1.7	1.2~ 1.8	3.6	"	"	"	砂(多1) 石英(若)	"	7.5YR $\frac{3}{4}$ 7.5YR $\frac{3}{4}$		床直上P-10
4	土師器	袖珍	完形	2.7~ 2.8	1.9~ 2.1	3.4	"	指押し 調整	"	砂(1)	"	7.5YR $\frac{2}{4}$ 7.5YR $\frac{2}{4}$		床直上P-9
5	土師器	袖珍	完形	3.8	2~ 2.5	4.4	"	指押し 調整	"	砂(少1)	"	5YR $\frac{7}{4}$ 5YR $\frac{7}{4}$		床直上P-11
6	土師器	壺	胴底辺	—	12	—	—	ヘラナデ	1.5cm幅 叩き、ヘ ラ調整	砂(多2) 石英(若)	"	2.5YR $\frac{8}{4}$ 7.5YR $\frac{9}{4}$		床直上P-8
7	土師器	甕形	口縁 胴	(23)	—	—	強い ヨコナデ	ヘラナデ	—	砂(多1)	やや不良	7.5YR $\frac{5}{4}$ 7.5YR $\frac{5}{4}$	(表)煤灰	床直上P-2
8	土師器	甕形	口縁 胴	(20)	—	—	"	"	—	砂、石英 (少1)	や良好	7.5YR $\frac{5}{4}$ 7.5YR $\frac{5}{4}$		カマドP-40
9	土師器	袖珍	胴 半完形	(4.2)	2.5	(4.6)	強い ヨコナデ	ヘラナデ	ユビナデ ヘラナデ	砂(少1)	良 堅	7.5YR $\frac{5}{4}$ 10YR $\frac{5}{4}$		カマドP-39
10	土師器	甕形	口縁 底辺	—	12	—	—	ヘラナデ	へ強い ヘラナデ	砂礫 (微1)	良 好	7.5YR $\frac{2}{4}$ 7.5YR $\frac{2}{4}$	木葉痕	カマド
11	土師器	甕形	胴	(15)	—	—	強い ヨコナデ	"	—	砂(若1.2) 良質粘土	"	7.5YR $\frac{2}{4}$ 7.5YR $\frac{2}{4}$		カマド
12	土師器	甕形	底辺	—	(5)	—	—	強い ヘラナデ	強い ヘラナデ	石(少2~3) 石英(若)	"	7.5YR $\frac{2}{4}$ 10YR $\frac{3}{4}$		カベギワ
13	支脚		端	—	—	(6.4)	—	指ナデ	指ナデ		"	5YR $\frac{8}{4}$		カベギワ
14	土師器	小型甕	口縁 胴	(14)	—	—	強い ヨコナデ	ヘラナデ	—	砂(少1)	良 好	2.5YR $\frac{8}{4}$ 2.5YR $\frac{8}{4}$		ビット5 フク土P-19
15	土師器	小型甕	口縁 胴	(14)	—	—	"	"	—	石(多2~3) 良質粘土	"	7.5YR $\frac{8}{4}$ 7.5YR $\frac{8}{4}$		ビット5 フク土P-16
16	土師器	甕形	口縁 胴	(22)	—	—	"	"	—	砂(若1)	やや不良	10YR $\frac{7}{6}$ 5YR $\frac{7}{4}$		ビット
17	土師器	甕形	口縁 胴	(17)	—	—	"	"	—	砂(少1)	良 好	7.5YR $\frac{8}{4}$ 7.5YR $\frac{8}{4}$		ビット
18	土師器	甕形	胴 底辺	—	(8.5)	—	"	ヘラナデ	強い ヘラナデ	砂(少1)	良 堅	7.5YR $\frac{2}{4}$ 7.5YR $\frac{2}{4}$	木葉痕	ビット5 フク土P-17

第26号住居跡（第162図、第163図）

位置と確認 B N、B M - 46・47・48、B O - 47・48の位置から約90cmの窪みの状態で確認した。

平面形と規模

平面形	主 軸	規 模								
		壁 長 (m)				壁 高 (cm)				面積(m ²)
不 整 形	S-45°-E	南	西	北	東	南	西	北	東	
		7.6	6.6	6.6	6.5	74	88	74	50	

堆積土 7層に区分できた。大別すると黒褐色土、にぶい黄褐色土、明黄褐色土の層となる。覆土内にブロックで焼土を検出した。自然堆積である。

壁 北壁は、底面から外に開きながら立ち上がり、覆土の堆積状況から崩落しさものと考えられる。ほかは、ほぼ垂直に近い立ち上がりである。

床 ほぼ平坦で、かまど周辺は堅く締まっているが、ほかは柔かめである。

壁溝 南東隅の周近からは検出できなかったが、ほかは壁下から幅、上端が5～30cmで下端が3～15cmで深さ15～20cmで検出した。

ピット 住居跡内から6個検出(162図)したが、柱穴とみられるものは、pit-1・6で、pit-2～5は、貯蔵穴と思われる。

かまど 南壁の西寄りに二重に構築されているが、煙道は、半地下式とトンネル式が使用されており、トンネル式を埋めて半地下式に造りかえられている。半地下式の煙道部の残存状態は悪い。燃烧部の焼土周辺には、シルト岩及び土師器が散在し、袖石は良好に残存していた。焼土範囲は、径70cmの円形を呈し、断面は中央の厚さが10cmで浅皿状である。

その他の施設 南西壁の南寄りに張り出した施設がある。幅2m、長さ0.75mほどの規模で壁下には壁溝を検出した。

出土遺物 かまど内及び周辺からは、第164図8～11、床直上からは第164図1～7の土器と鉄斧・刀子、北西壁外からノミが出土した。

(成田・佐藤)

〔第26号住居跡〕 注 記

層位	土 色	土 質	備 考
1層	10 Y R 2/2 黒 褐 色	シルト質	黄褐色土粒多量混入
2層	10 Y R 1.7/1 黒 褐 色	シルト質	黄褐色土粒多量混入
3a層	10 Y R 7/6 明 黄 褐 色	ローム質	混入物なし
3b層	10 Y R 6/4 にぶい黄褐色	ローム質	黒褐色土少量混入
4a層	10 Y R 5/3 にぶい黄褐色	ローム質	黒色土混入
4b層	10 Y R 4/4 褐 色	シルト質	黒色土、黄褐色土混入
5層	10 Y R 3/2 黒 褐 色	シルト質	黄色土混入
6層	10 Y R 6/6 明 黄 褐 色	ローム質	黒色土若干混入
7層	10 Y R 5/3 にぶい黄褐色	ローム質	混入物なし
B1層	5 Y R 3/4 暗 赤 褐 色		焼土
B2層	10 Y R 6/6 明 黄 褐 色	ローム質	混入物なし

〔第26号住Pit 4〕 注 記

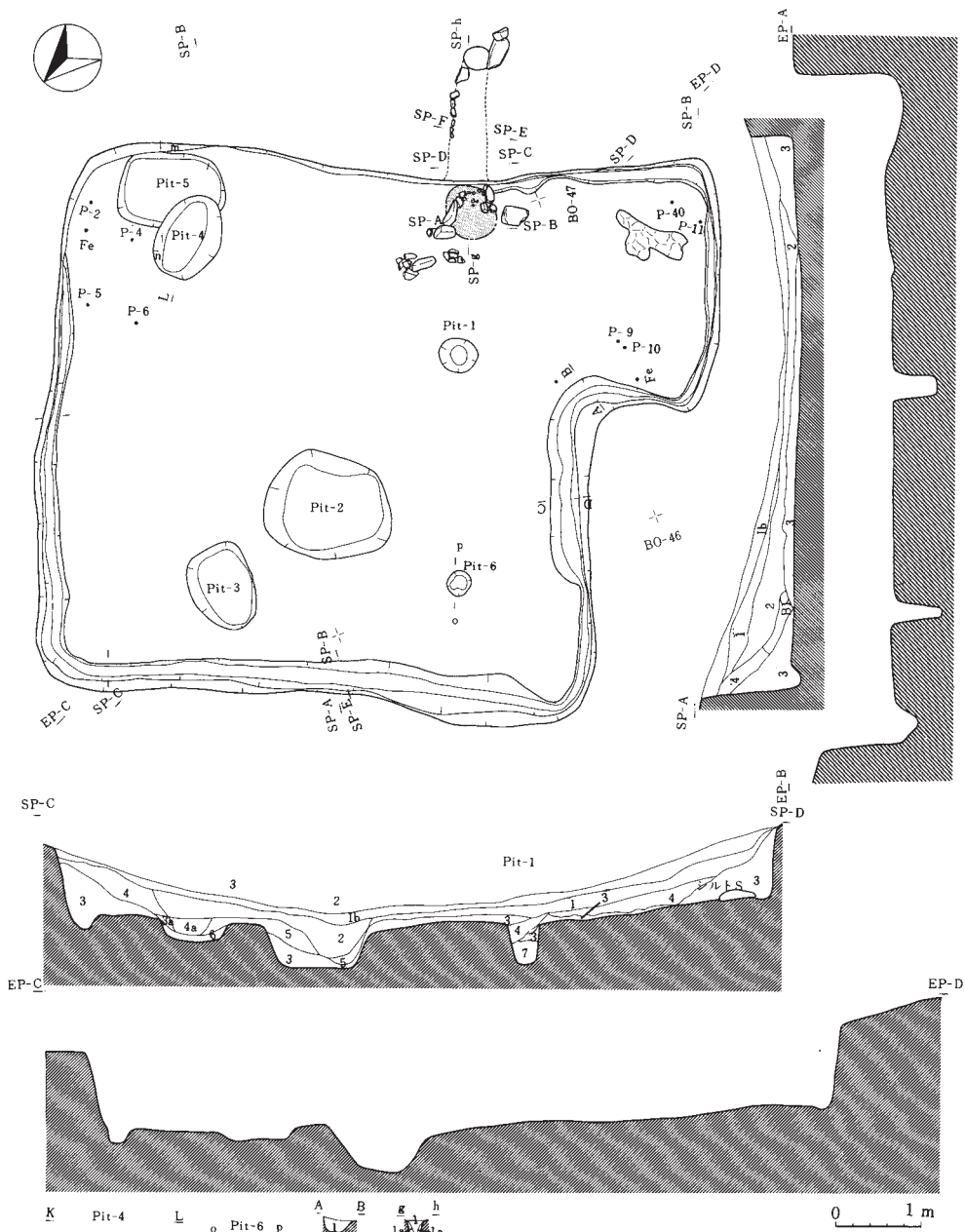
層位	土 色	土 質	備 考
1層	10 Y R 7/6 明 黄 褐 色	ローム質	黒色土混入
2層	10 Y R 5/3 にぶい黄色	ローム質	黒色土、ローム混入
3層	10 Y R 4/4 褐 色	シルト質	黒色土、ローム粒混入

〔第26号住Pit 5〕 注 記

層位	土 色	土 質	備 考
1層	10 Y R 5/8 黄 褐 色	ローム質	混入物なし
2層	10 Y R 5/6 黄 褐 色	ローム質	混入物なし

〔第26号住Pit 6〕 注 記

層位	土 色	土 質	備 考
1層	10 Y R 5/6 黄 褐 色	ローム質	ローム粒混入
2層	10 Y R 6/4 にぶい黄褐色	ローム質	ローム粒若干混入
3層	10 Y R 6/3 にぶい黄褐色	ローム質	ローム粒混入
4層	10 Y R 3/2 黒 褐 色	シルト質	ローム粒混入



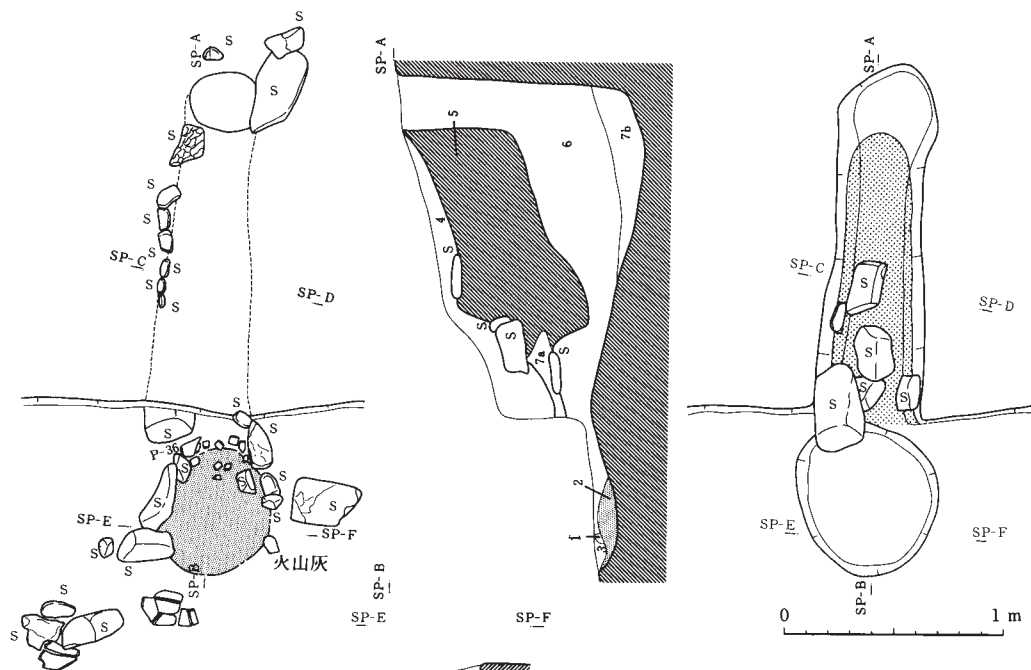
〔第26号住居跡 Pit計測表〕

Pit No.	規模	深さ	Pit No.	規模	深さ
1	45×42	48	2	153×123	52
3	78×105	24	4	75×102	48
5	126×90	28	6	27×30	56

〔第26号住居周溝〕 注 記

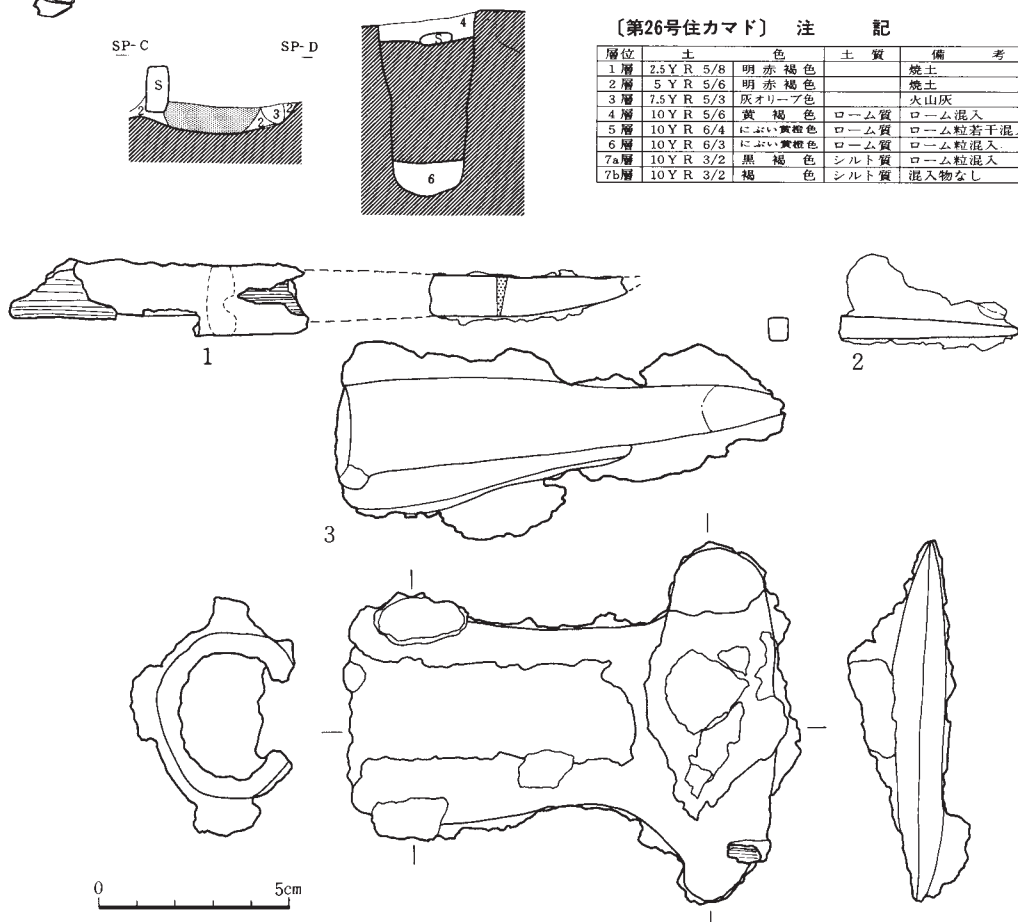
層位	土 色	土 質	備 考
1層	10 Y R 7/6 明黄褐色	ローム質	混入物なし
1a層	10 Y R 7/3 にぶい黄橙色	ローム質	混入物なし

第162図 第26号住居跡実測図

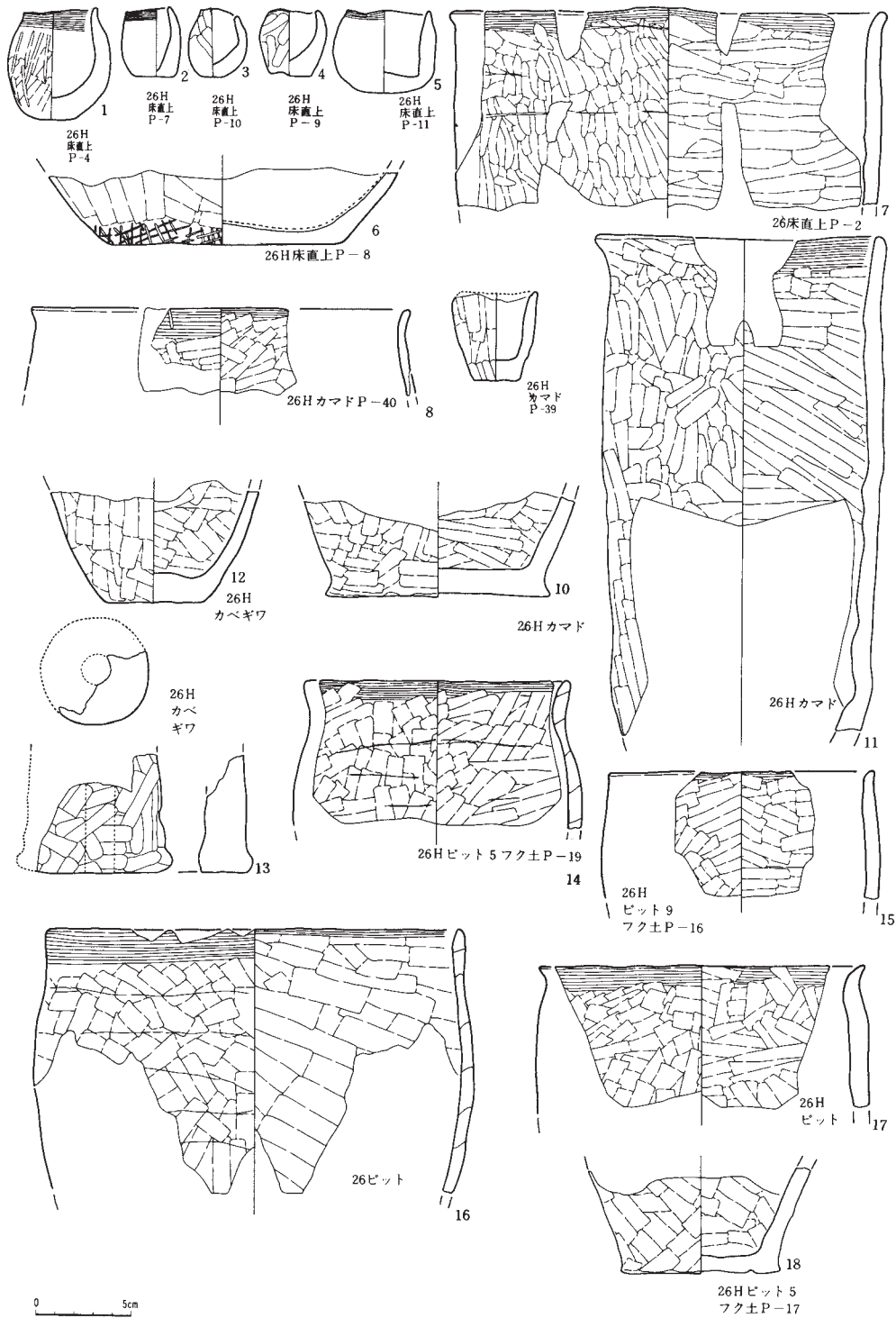


〔第26号住かまど〕 注 記

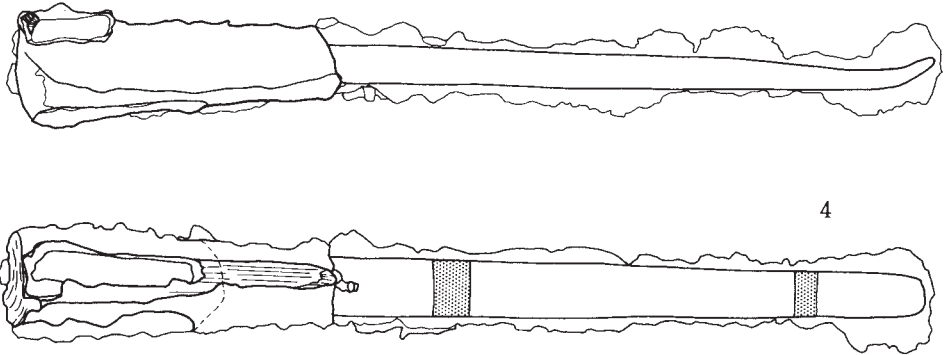
層位	土 色	土 質	備 考
1層	2.5 Y R 5/8 明赤褐色		焼土
2層	5 Y R 5/6 明赤褐色		焼土
3層	7.5 Y R 5/3 灰オリーブ色		火山灰
4層	10 Y R 5/6 黄褐色	ローム質	ローム混入
5層	10 Y R 6/4 に近い黄褐色	ローム質	ローム粒若干混入
6層	10 Y R 6/3 に近い黄褐色	ローム質	ローム粒混入
7a層	10 Y R 3/2 黒褐色	シルト質	ローム粒混入
7b層	10 Y R 3/2 褐色	シルト質	混入物なし



第163図 第26号住居跡かまど・鉄製品実測図



第164図 第26号住居跡出土土器実測図



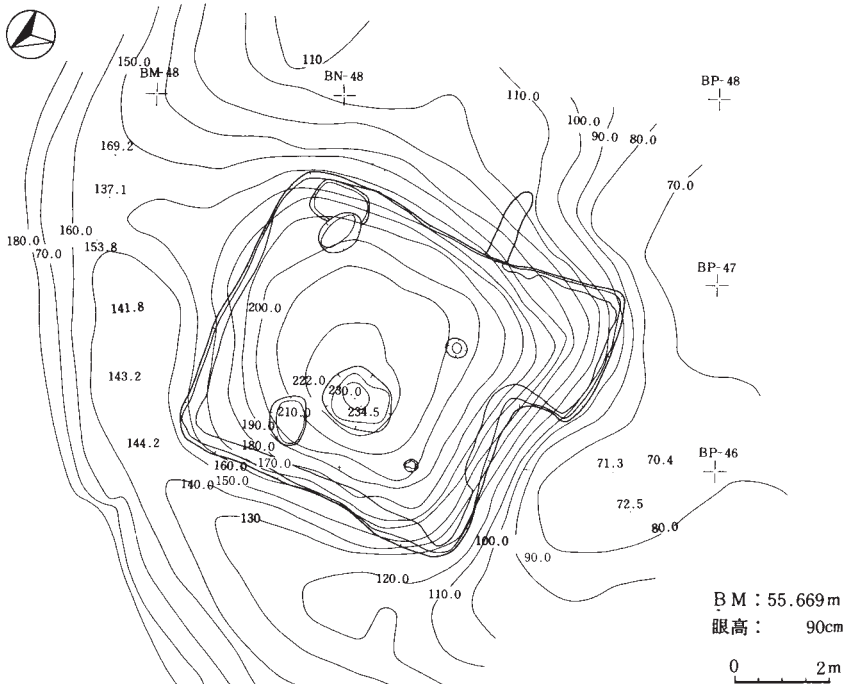
4

0 5cm

第165図 第26号住居跡出土鉄製品実測図

第59表 第26号住居跡鉄製品計測表

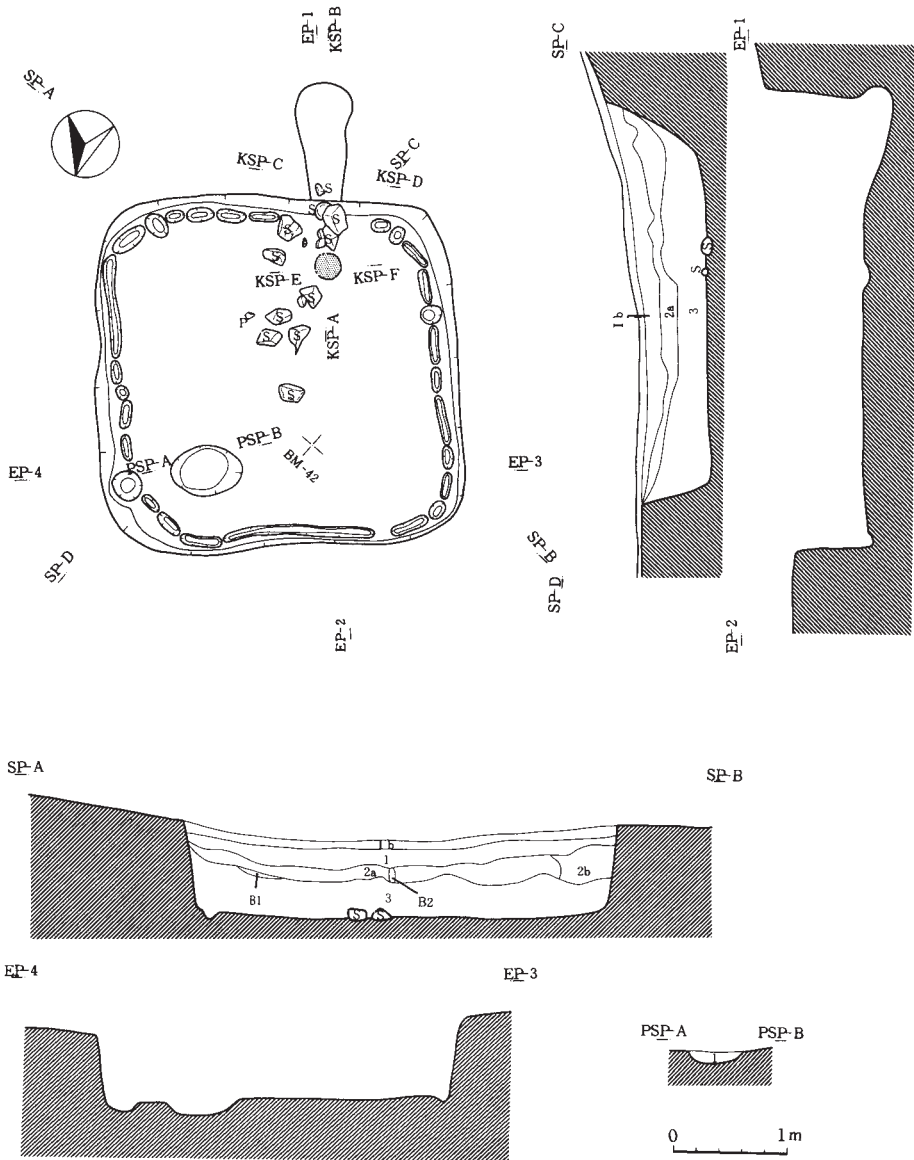
挿図番号	図版番号	種類	法	量 (cm)	出土地点 (層位)	備考			
163-1		刀子	刃部長 (5.1)	幅 0.4~1.1	厚さ 0.3	柄部長 (7.8)	太さ 1.8×0.7	床直上	
163-2	II	紡錘車の軸部	全長 (6.5)	幅 0.2~0.6	厚さ 0.5				
163-3	II	鉄斧	全長 11.2	刃幅 9.5	最大厚 1.5	柄はめ込み孔 3.3×2.6		床直上 F e - 2	
165-4		ノミ	全長 24.0	刃幅 0.8	身部長 15.5	幅 1.6	厚さ 1.0	フク土・1層 北側ベリレト	頭部径 2.5cm



第166図 第26号住居跡確認状況実測図

第27号住居跡（第167図、第168図）

位置と確認 B L - 42・43、B M - 42・43から約24cmほどの窪みを確認した。



〔第27号住〕 注 記

層位	土 色	土 質	備 考
1 層	10Y R 2/2 黒褐色	シルト質	混入物なし
2 a 層	10Y R 4/4 褐色	シルト質	暗褐色土混入
2 b 層	7.5Y R 4/4 褐色	シルト質	混入物なし
3 層	10Y R 4/6 褐色	シルト質	混入物なし
B 1 層	10Y R 5/8 黄褐色		火山灰
B 2 層	10Y R 2/1 黒色	シルト質	混入物なし

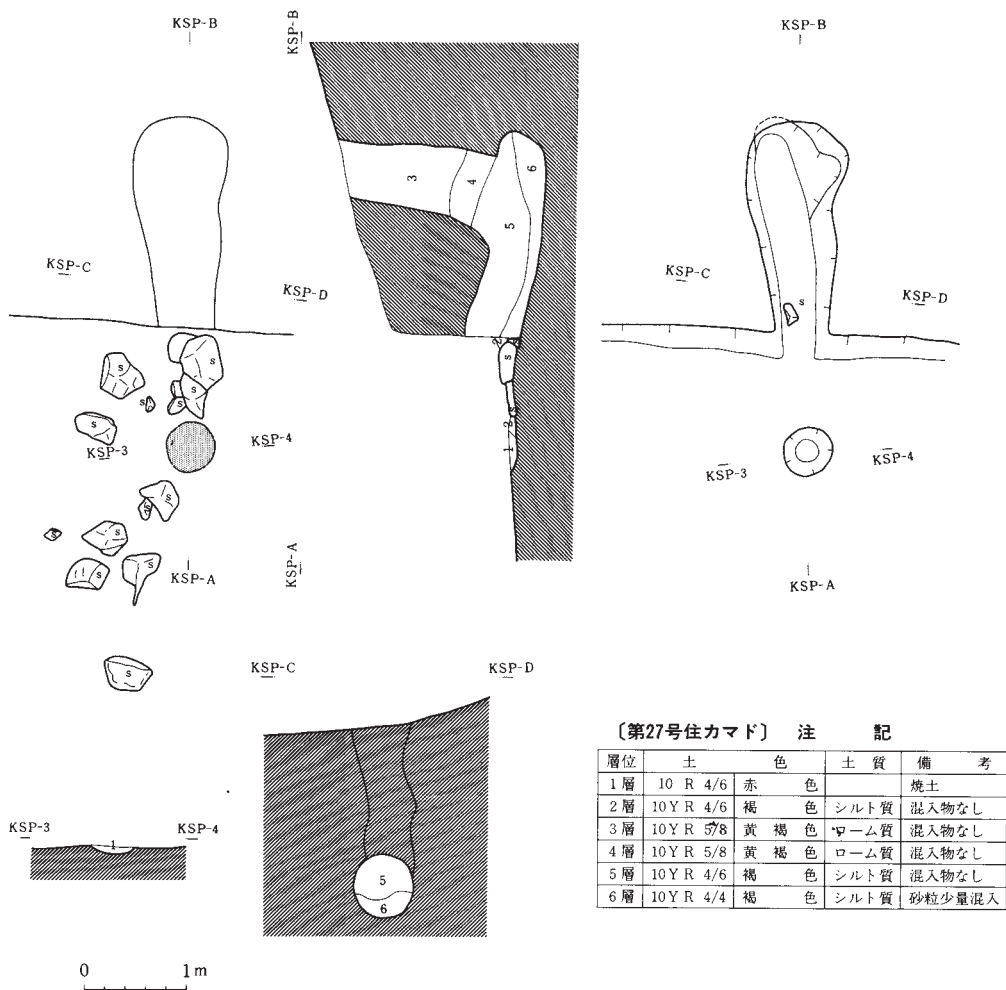
〔第27号 pit〕 注 記

層位	土 色	土 質	備 考
1 層	10Y R 5/8 黄褐色	ローム質	混入物なし

〔第27号住居跡 pit計測表〕

pit No	規 模	深 さ	pit No	規 模	深 さ
1	45×62	10	2		

第167図 第27号住居跡実測図



第168図 第27号住居跡かまど実測図

平面形と規模

平面形	主 軸	規				模				面積 (m ²)
		壁 長 (m)				壁 高 (cm)				
方 形	S-19°-E	南	西	北	東	南	西	北	東	8.72
		3.0	3.0	3.2	3.1	80	70	60	70	

堆積土 5層に分層できた。大別すると、黒褐色土と褐色土の層である。南壁東寄り部分に黄色みを帯びた火山灰がブロック状に堆積していた。堆積状況は自然的である。

壁 北壁・西壁はほぼ垂直に近い立ち上がりであるが、南壁・東壁は緩い角度で傾斜している。床面近くの壁は強く締っているが、他は柔らかめである。

床 かまどの周辺は強く締っているが、他は柔らかめである。

壁溝 東壁・北壁・西壁の壁下から検出したが、かまどが構築されている南壁からは部

分的に検出した。幅は、上端が6～25cm、下端が4～12cmで、深さは4～17cmで、それぞれ隅は小ピット状である。

ピット 住居跡内から3個検出した。Pit - 2・3は壁下間際にあり、柱穴とみられる。Pit - 1は浅皿状である。

かまど 南壁のほぼ中央寄りに構築されている。かまど本体部分の天井部は残存せず、袖部に数個のシルト岩が散在していた。焼土範囲は径23cmの円形を呈し、断面は浅皿状で中央の厚さは4cmである。煙道はトンネル式で径30cm位の円筒形である。底面は下降し、煙出孔の壁よりさらに奥に入り込んだ後、85°の傾斜角の煙出口へ続いている。煙出孔は深さ110cm、幅35cmである。煙道の上の層は、柔らかくなっていた。

出土遺物 かまど周辺から数個のシルト岩が出土した。 (成田・津川)

第28号住居跡(第169図)

位置と確認 BR - 49グリッドから深さ約10cmほどのかすかな窪みを確認した。

平面形と規模

平面形	主 軸	規 模				規 模				面積(m ²)
		壁 長 (m)				壁 高 (cm)				
不整形	—	南	西	北	東	南	西	北	東	7.43
		3.2	2.6	2.9	2.9	64	50	46	54	

堆積土 7層に分層され、このほかにブロック状に火山灰と焼土が床面を覆っている箇所があった。土層は大別すると、黒色土、黒褐色土、褐色土、黄褐色土で、黄褐色土が最下層である。この黄褐色土は第 層と同質で、本遺構はこの層を少し掘り込んでいるだけで、自然堆積では厚い層をなすことは考えられない。

壁 軟弱で立ち上がりは緩い。

床 東側は軟弱であるが、ほかは締っている。

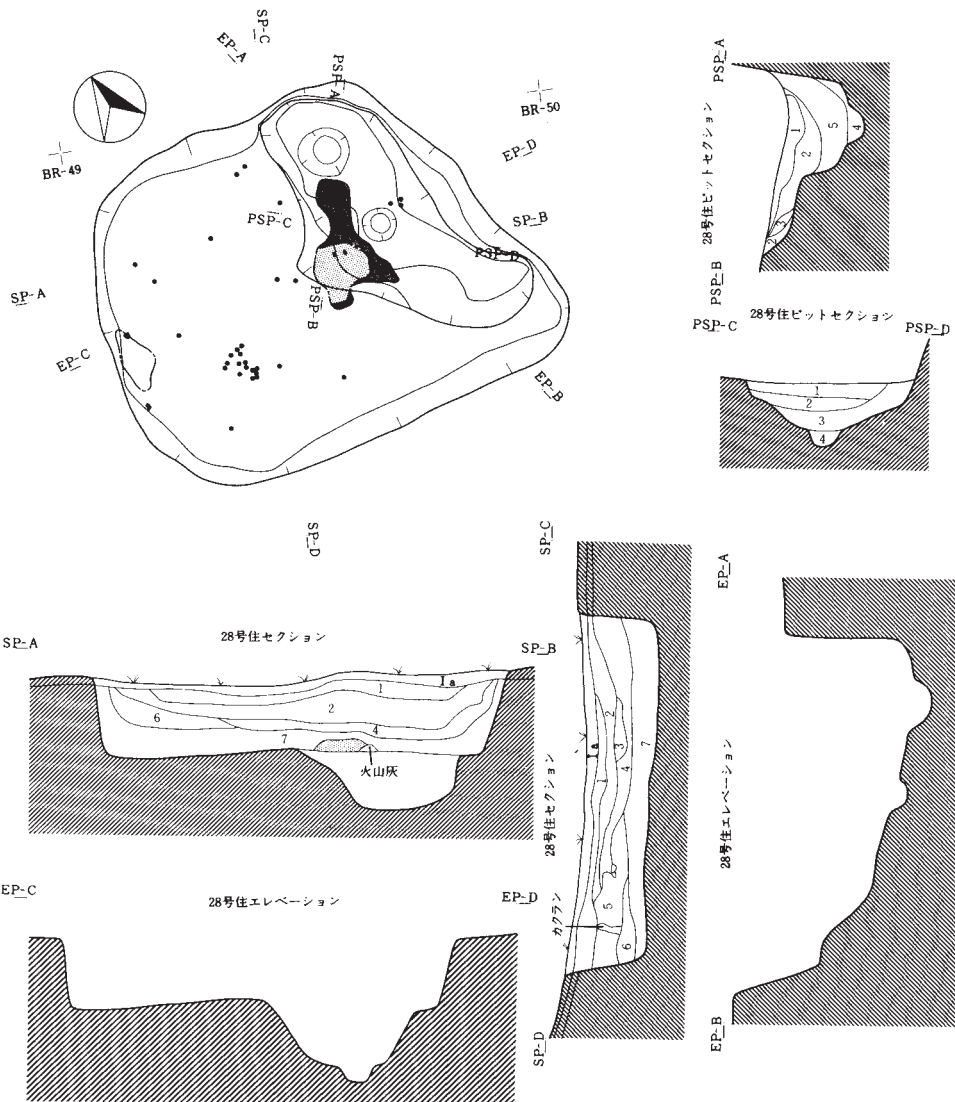
壁溝 なし。

ピット 東側に南北に長軸を持つ不整形円形プランのピットを検出したが、本遺構が構築される以前のピットと思われる。このピットの、底は締りなく、凹凸があり、遺物も出土しなかった。

かまど なし。

出土遺物 床面から粒状になった炭化物が出土したほか、土師器(第170図4～5)が出土した。遺構外の北側からも土師器片が多数出土した。

(成田)



【第28号住居跡】 注 記

層位	土 色	土 質	備 考
1層	10Y R 2/1 黒 色	シルト質	混入物なし
2層	10Y R 2/1 黒 色	シルト質	混入物なし
3層	10Y R 2/2 黒 褐色	シルト質	ローム粒微量混入
4層	10Y R 3/2 黒 褐色	シルト質	ローム粒多量混入
5層	10Y R 4/4 褐 色	シルト質	ローム多量混入
6層	10Y R 5/6 黄 褐色	ローム質	微量に砂粒を混入
7層	10Y R 5/8 黄 褐色	ローム質	混入物なし
8層	7.5Y R 5/8 明黄褐色		焼土
9層	2.5Y 6/6 明黄褐色		火山灰

【第28号住居跡 pit計測表】

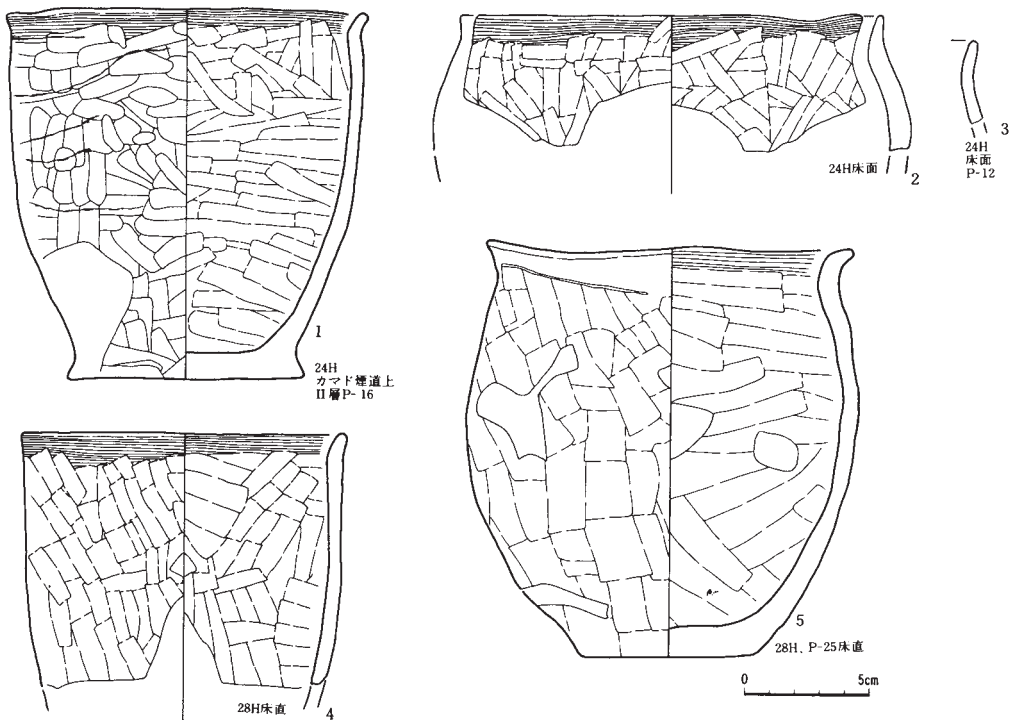
pit No.	規 模	深 さ
1	260×126	79

【第28号住居跡 pit】 注 記

層位	土 色	土 質	備 考
1層	10Y R 4/4 褐 色	シルト質	混入物なし
2層	10Y R 4/6 褐 色	シルト質	混入物なし
3層	10Y R 5/6 黄 褐色	ローム質	混入物なし
4層	10Y R 6/8 明黄褐色	ローム質	混入物なし
5層	10Y R 4/4 褐 色	シルト質	混入物なし



第169図 第28号住居跡実測図



第170図 第24号・第28号住居跡出土土器実測図

第60表 第28号住居跡出土土器観察表

遺物番号	種類	器種	器部	決 量 cm			調 整			胎土mm	焼 成	色 調	備 考	出土位置
				口 径	底 径	器 高	口縁部	胴 部	底辺部					
1	土師器	小型甕	口 縁 胴	(13)	—	—	強い ヘラナテ	ヘラナテ	—	砂(多,1)	良 好	5 Y R 7/5 7.5 Y R 5/5	(内外) もろい・煤炭	床 直
2	土師器	甕 形	完 形	14.5~ 15.4	6.5~ 7	16.4~ 16.8	ヘラナテ	強い ヘラナテ	強い ヘラナテ	砂(多,1,3) 石英(若)	良 好	10 R 2.5 2.5 Y R 7/5	(外) 変色・もろい	床直P-25

※胎土の砂は砂粒の略

第29号住居跡(第177図、第一72図)

位置と確認 B E - 124・125、B D - 125、B F - 125から深さ約20cmの浅皿状の窪みを確認した。

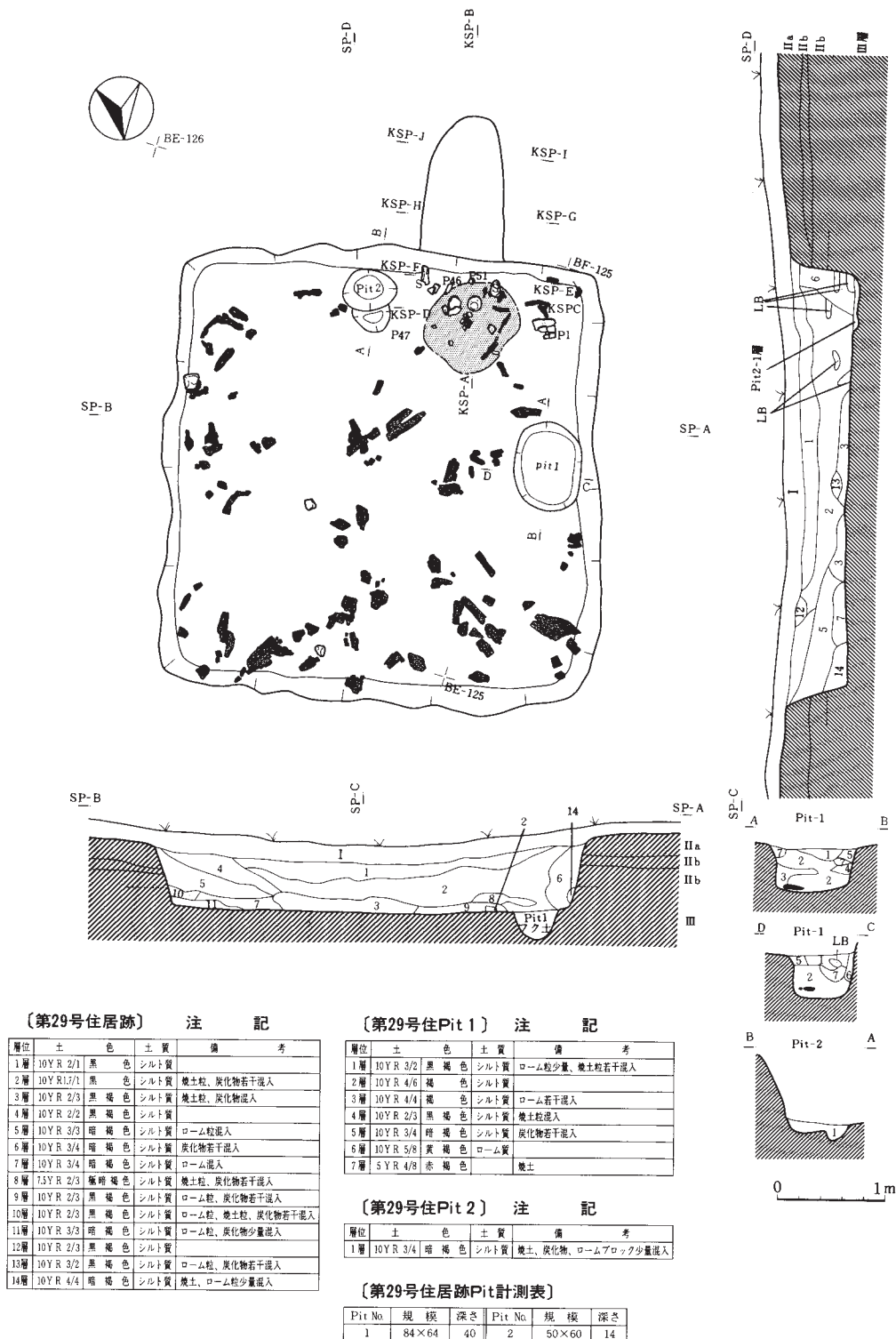
平面形と規模

平面形	主 軸	規 模								
		壁 長 (m)				壁 高 (cm)				面積(m ²)
方 形	S - 8° - E	南	西	北	東	南	西	北	東	
				3.9	4.0	4.0	4.0	76	64	68

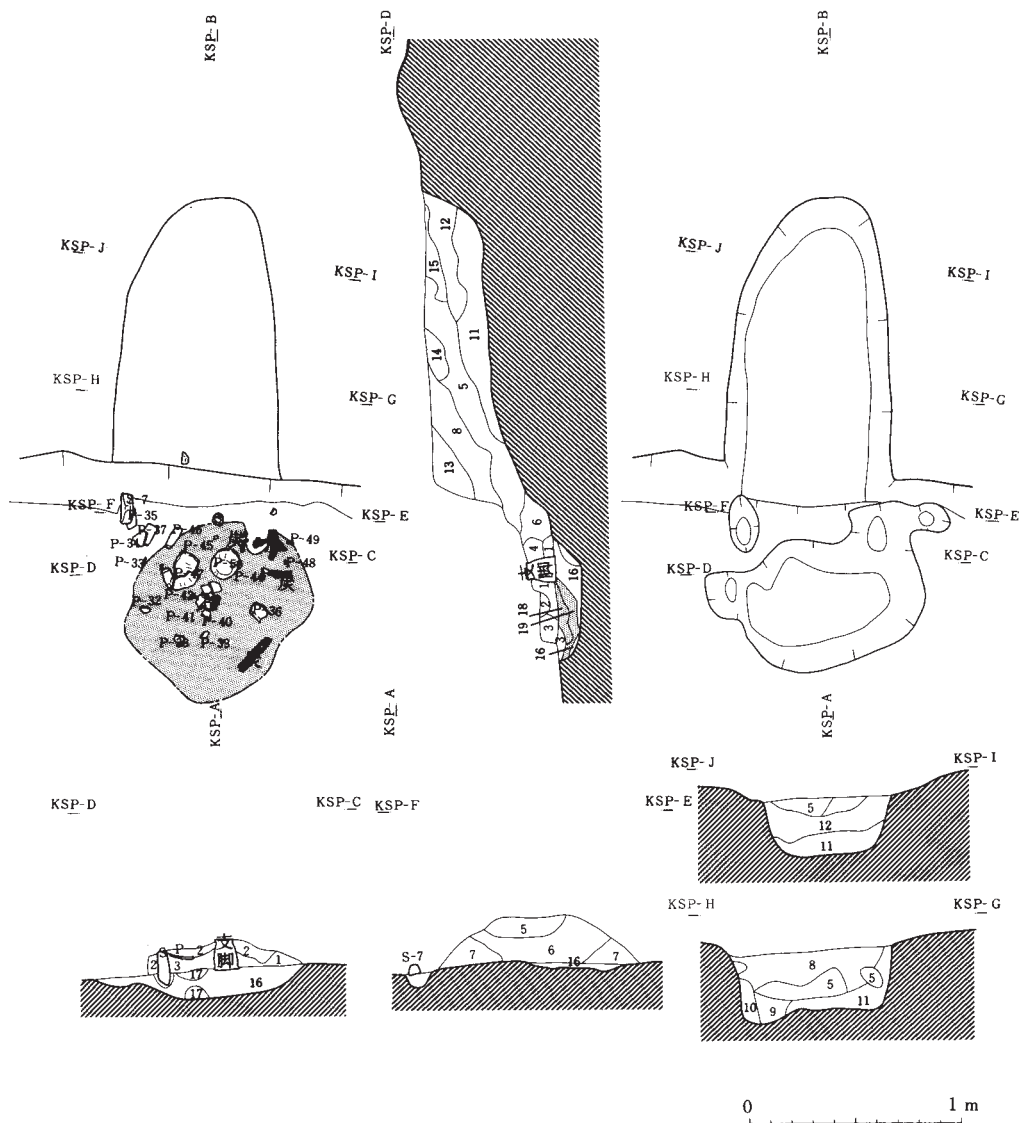
堆積土 14層に分層できた。大別すると、黒色土、黒褐色土、暗褐色土、褐色土である。竪穴の中央には黒色土と黒褐色土が入り込み、黒褐色土が床面に接し、壁際には暗褐色土と褐色土が堆積している。

壁 下部近くまで第 a・b層のため軟弱である。各壁とも立ち上がりはやや緩い。

床 平坦で堅い。かまど周辺は特に堅く締っていた。



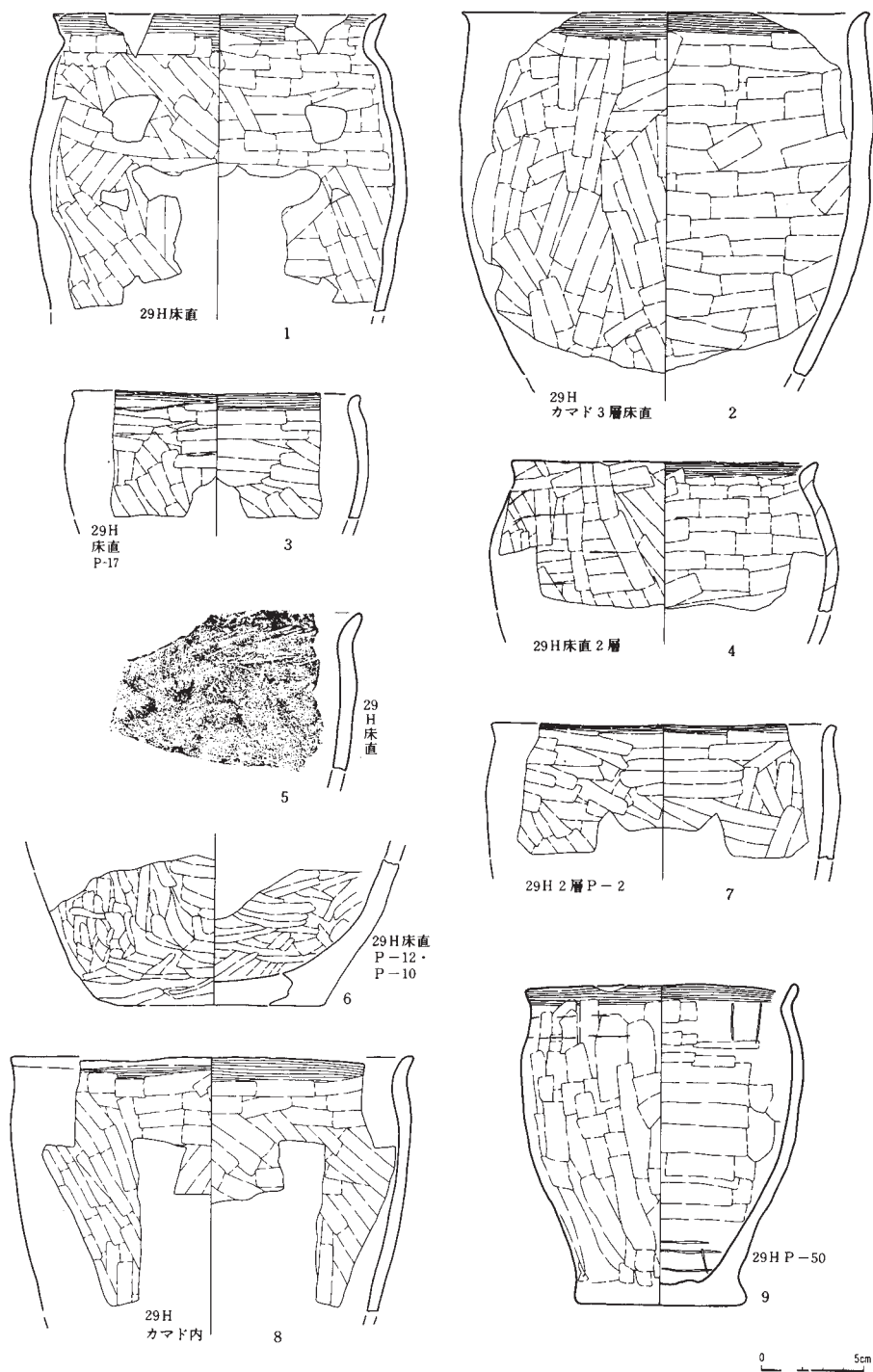
第171図 第29号住居跡実測図



【第29号住カマド】 注 記

層位	土色	土質	備考
1層	7.5Y R 3/4 暗褐色	シルト質	焼土粒、炭化物少量混入
2層	10Y R 2/3 黒褐色	シルト質	ローム粒若干混入
3層	7.5Y R 4/6 褐色	シルト質	
4層	10Y R 2/3 黒褐色	シルト質	焼土粒、ローム粒少量に混入
5層	10Y R 3/4 暗褐色	シルト質	焼土ブロック混入
6層	10Y R 3/4 暗褐色	シルト質	ロームブロック、焼土粒若干混入
7層	10Y R 4/6 褐色	シルト質	ローム粒混入
8層	10Y R 3/3 暗褐色	シルト質	焼土ブロック、ロームブロック混入
9層	10Y R 4/6 褐色	シルト質	ローム粒若干混入
10層	10Y R 2/2 黒褐色	シルト質	ローム粒若干混入
11層	10Y R 5/6 黄褐色	ローム質	
12層	10Y R 3/4 暗褐色	シルト質	ローム粒若干混入
13層	10Y R 2/3 黒褐色	シルト質	ローム粒若干混入
14層	10Y R 4/4 褐色	シルト質	ローム粒混入
15層	7.5Y R 4/6 褐色	シルト質	焼土粒が多量に混入
16層	10Y R 4/6 褐色	シルト質	ロームブロック混入
17層	7.5Y R 4/6 褐色	シルト質	焼土粒若干混入
18層	2.5Y R 4/8 赤褐色		焼土ブロック
19層	5 Y R 4/8 赤褐色		焼土

第172図 第29号住居跡かまど実測図



第173図 第29号住居跡出土土器実測図

壁溝 確認できなかった。

ピット 西壁中央部（Pit - 1）とかまど左脇から 2 個検出した。計測値等は第171図のとおりである。柱穴とみられるものは検出できなかった。

かまど 南壁西寄りから検出した。支脚及び袖部骨材のシルト岩 2 個が残存していたが本体部及び煙道部の天上は残存していなかった。焼土範囲は、径約40cmほどの円形で断面形は、最深部分約10cmのすり鉢状である。左袖の骨材として使用されているシルト岩は、厚さ 5 cmで、深さ 7 cmのピットに埋め込まれていた。支脚は器高15cmの小型甕形土器を倒立させて使用している。煙道は天上部の崩落が著しいため、形態は不明確であるが、掘り方は、長さ約150cm、幅約70cm、深さ約30cmである。

出土遺物 かまど内からは支脚に使用された小型甕形土師器（第173図 9）のほか、第173図 2・8のような土師器が出土している。また、床直上からは第173図 1～6、覆土からも土師器が出土した。床面及び直上から炭化物片が多数出土した。この中には板状のもの、丸太状及び角状のものもあった。（第171図参照）。このような炭化物の出土状況から焼失家屋と思われる。

（成田）

第61表 第29号住居跡出土土器観察表

遺物番号	種類	器種	器部	法量 cm			調整			胎土mm	焼成	色調	備考	出土位置
				口径	底径	器高								
1	土師器	甕形	□縁胴	(16.4)	—	—	強い ヨコナテ	ヘラナテ	—	砂(多・1) 砂礫(3~5)	やや 不良	2.5YR6/6 5YR6/6		
2	土師器	甕形	□縁胴	(20)	—	—	〃	〃	—	砂(多・1~5) 良質粘土	良堅	7.5YR6/6 7.5YR7/3		床直かまど 3層
3	土師器	甕形	□縁胴	(14)	—	—	〃	〃	—	砂(若・1) 英	良好	5YR5/6 5YR6/4		床直 R-17
4	土師器	甕形	□縁胴	(15)	—	—	〃	〃	—	砂(微・1~2)	良堅	5YR5/3 5YR7/3	㊦ 煤炭	床直 2層
5	土師器	甕形	□縁胴	(19)	—	—	〃	〃	—	砂(若・1)	良好	7.5YR6/4 7.5YR6/6		床直
6	土師器	甕形	□縁胴	—	(11)	—	—	ヘラナテ	強い ヘラナテ	砂礫・多 (1~3)	〃	7.5YR6/8 7.5YR5/4		床直 P-10 R-12
7	土師器	甕形	□縁胴	(17)	—	—	強い ヨコナテ	〃	—	砂(多・2)	〃	5YR6/4 5YR6/3		2層 R-2
8	土師器	甕形	□縁胴	(19.8)	—	—	〃	〃	—	砂礫 (多・1~3)	良・堅	7.5YR6/4 7.5YR7/2		かまど内
9	土師器	小型甕	完形	13.4	8	15.7	〃	〃	強い ヘラナテ	砂(多・2~3)	良好	2.5YR5/6 2.5YR5/6	㊦ 煤炭	かまど床面 P-50

※胎土の砂は砂粒の略

第30号住居跡（第174図、第175図）

位置と確認 B C - 119、B D - 118・119・120、B E - 119・120の位置から約35cmの窪みを確認した。

平面形と規模

平面形	主 軸	規 模								
		壁 長 (m)				壁 高 (cm)				面積 (m ²)
長 方 形	S - 7° - E	南	西	北	東	南	西	北	東	
		4.6	5.3	4.5	5.4	80	82	78	72	

堆積土 15層に区分できた大別すると黒色土、黒褐色土、暗褐色土、褐色土、黄褐色土の層となる。覆土内に、炭化材が出土した。

壁 東壁は、ほぼ垂直に立ち上がっているが、その他の壁は、底面から外に開きながら立ち上がっている。覆土の堆積状況から崩落したものと考えられる。

床 若干の凹凸がある。かまど周辺は堅く締まっているが、他は、若干のしまりがある。

壁溝 北壁・東壁・西壁に検出したが、連続しない。幅は上端が6～15cm、下端が3～5cm、深さ4～12cmである。

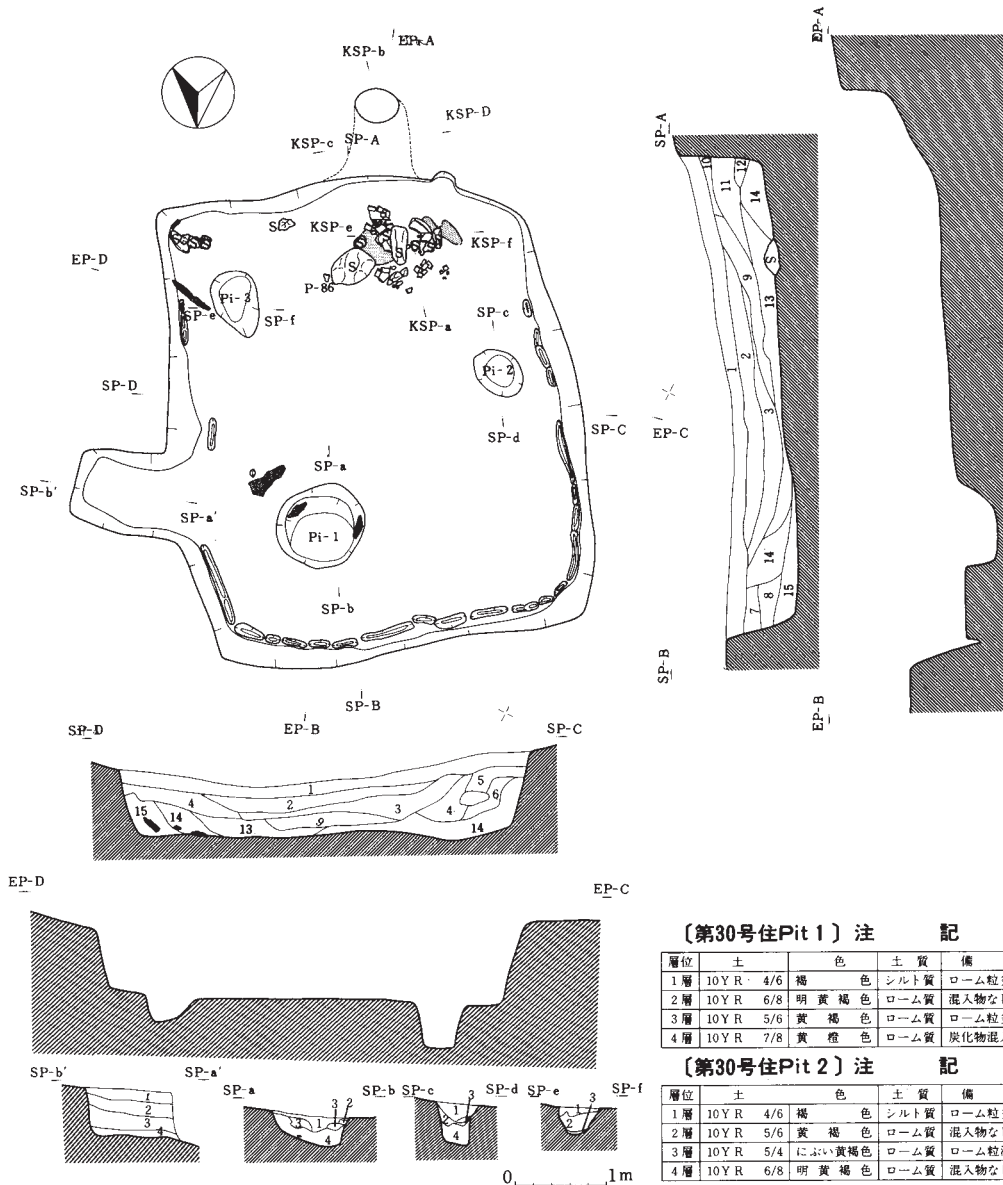
ピット 住居跡内かち3個検出（第174図）したが、柱穴と思われるものは検出できなかった。Pit - 1～3は貯蔵穴と思われる。

かまど 南壁の西寄りに地山を掘り込んでトンネル式に構築されていた。燃焼部の焼土周辺には、シルト岩、土師器破片が散在していた。焼土範囲は径45cmの円形を呈し、断面は中央の厚さ10cmで浅皿状である。

第62表 第30号住居跡出土土器観察表

遺物番号	種類	器種	器部	法 量 mm			調 整			胎土mm	焼成	色 調	備 考	出土位置
				口 径	底 径	器 高	口縁部	胴 部	底辺部					
1	土師器	甕形	口縁部	(21.5)	—	—	ヘラナデ	ヘラナデ	—	砂(多・2)	不良	7.5YR5/1 2.5YR2/1	㊦も変色	床直
2	土師器	甕形	口縁部	(16)	—	—	強いヨコナデ	〃	—	砂礫(2~3)	良好	7.5YR6/6 7.5YR7/4		P-109
3	土師器	甕形	口縁部	(17)	—	—	強いヨコナデ	〃	—	砂(若・1~2)	〃	5YR6/6 5YR6/4		P-32
4	土師器	甕形	胴底辺	—	(8.6)	—	—	〃	強いヘラナデ	砂 礫 (多・1~3)	〃	5YR6/6 7.5YR7/4	二次火焼変色もろい	P-80 P-106
5	土師器	鉢形	口縁部	(31.4)	(9.8)	(15)	ヘラナデ	〃	ヘラナデ	砂(多・2) 石英(若・1)	〃	7.5YR7/3 2.5YR7/4		ピット
6	土師器	鉢形	口縁部	(24)	—	—	強いヨコナデ	〃	—	砂(若・2) 石英(少)	やや不良	7.5YR7/4 7.5YR6/3		P-70,72, 80,83,105
7	土師器	鉢形	口縁部	(28.2)	—	—	ヘラナデ	〃	—	砂(多・1) 石英(若)	良好	7.5YR6/3 7.5YR5/1		ピット
8	土師器	甕形	胴底辺	—	8	—	—	ヘラナデ	ヘラナデ	砂(多・1) 石英(若) 砂	〃	5YR6/4 5YR6/8	㊦も変色	床直

※胎土の砂は砂粒



〔第30号住居跡〕 注 記

層位	土	色	土質	備 考
1層	10Y R 2/1	黒 色	シルト質	混入物なし
2層	10Y R 2/2	黒 褐色	シルト質	混入物なし
3層	10Y R 2/2	黒 褐色	シルト質	混入物なし
4層	10Y R 2/3	黒 褐色	シルト質	ローム粒混入
5層	10Y R 3/4	暗 褐色	シルト質	ローム粒多量混入
6層	10Y R 3/3	暗 褐色	シルト質	ローム粒多量混入
7層	10Y R 4/4	褐 色	シルト質	ローム粒多量混入
8層	10Y R 4/6	褐 色	シルト質	ローム粒多量混入
9層	10Y R 4/6	褐 色	シルト質	ローム粒多量混入
10層	10Y R 3/4	暗 褐	シルト質	混入物なし
11層	10Y R 5/6	黄 褐色	ローム質	ローム粒多量混入
12層	10Y R 5/8	黄 褐色	ローム質	混入物なし
13層	10Y R 3/2	黒 褐色	シルト質	ローム粒多量混入
14層	10Y R 5/4	にぶい黄褐色	ローム質	ローム粒多量混入
15層	10Y R 4/2	褐 色	シルト質	ローム粒多量混入

〔第30号住Pit 1〕 注 記

層位	土	色	土質	備 考
1層	10Y R 4/6	褐 色	シルト質	ローム粒多量混入
2層	10Y R 6/8	明黄褐色	ローム質	混入物なし
3層	10Y R 5/6	黄 褐色	ローム質	ローム粒多量混入
4層	10Y R 7/8	黄 橙 色	ローム質	炭化物混入

〔第30号住Pit 2〕 注 記

層位	土	色	土質	備 考
1層	10Y R 4/6	褐 色	シルト質	ローム粒多量混入
2層	10Y R 5/6	黄 褐色	ローム質	混入物なし
3層	10Y R 5/4	にぶい黄褐色	ローム質	ローム粒混入
4層	10Y R 6/8	明黄褐色	ローム質	混入物なし

〔第30号住Pit 3〕 注 記

層位	土	色	土質	備 考
1層	10Y R 4/4	褐 色	シルト質	ローム粒多量混入
2層	10Y R 6/8	明黄褐色	ローム質	混入物なし
3層	10Y R 7/8	黄 橙 色	ローム質	混入物なし

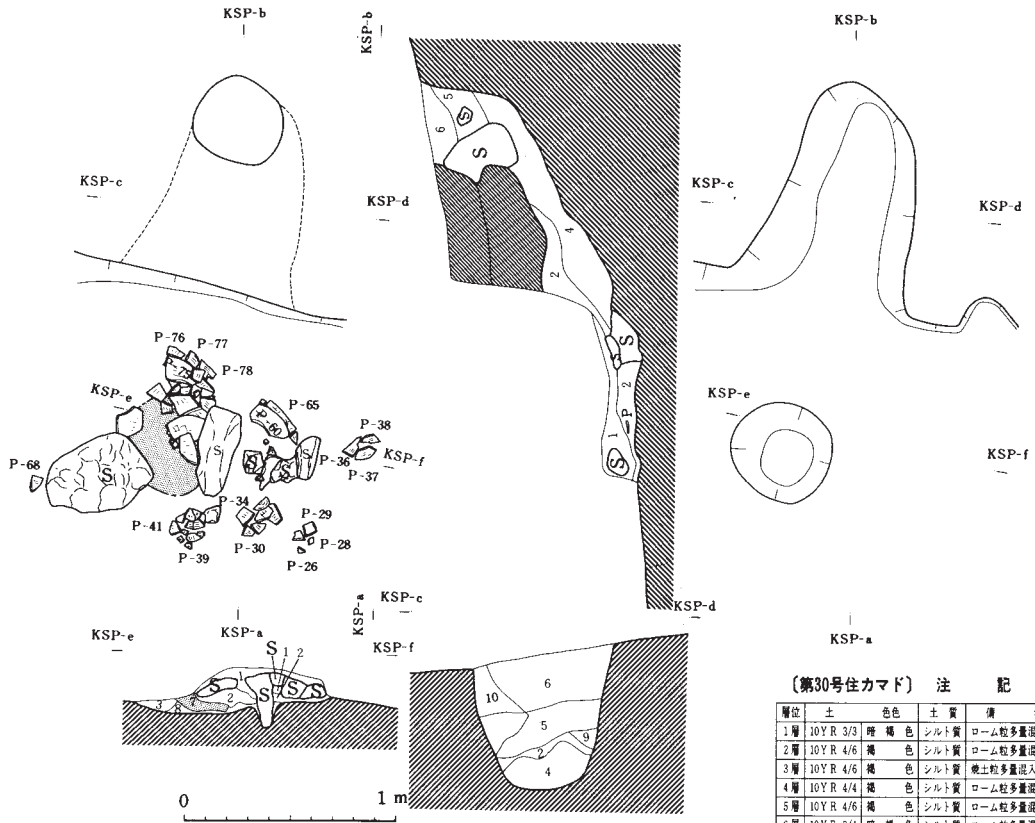
〔第30号住玄関or物置〕 注 記

層位	土	色	土質	備 考
1層	10Y R 3/4	暗 褐色	シルト質	混入物なし
2層	10Y R 3/4	暗 褐色	シルト質	褐色土多量混入
3層	10Y R 4/6	褐 色	シルト質	混入物なし
4層	10Y R 5/6	黄 褐色	ローム質	混入物なし

〔第30号住居跡 Pit計測図〕

Pit No	規模	深さ	Pit No	規模	深さ
1	96×92	32	2	50×76	46
3	62×46	30			

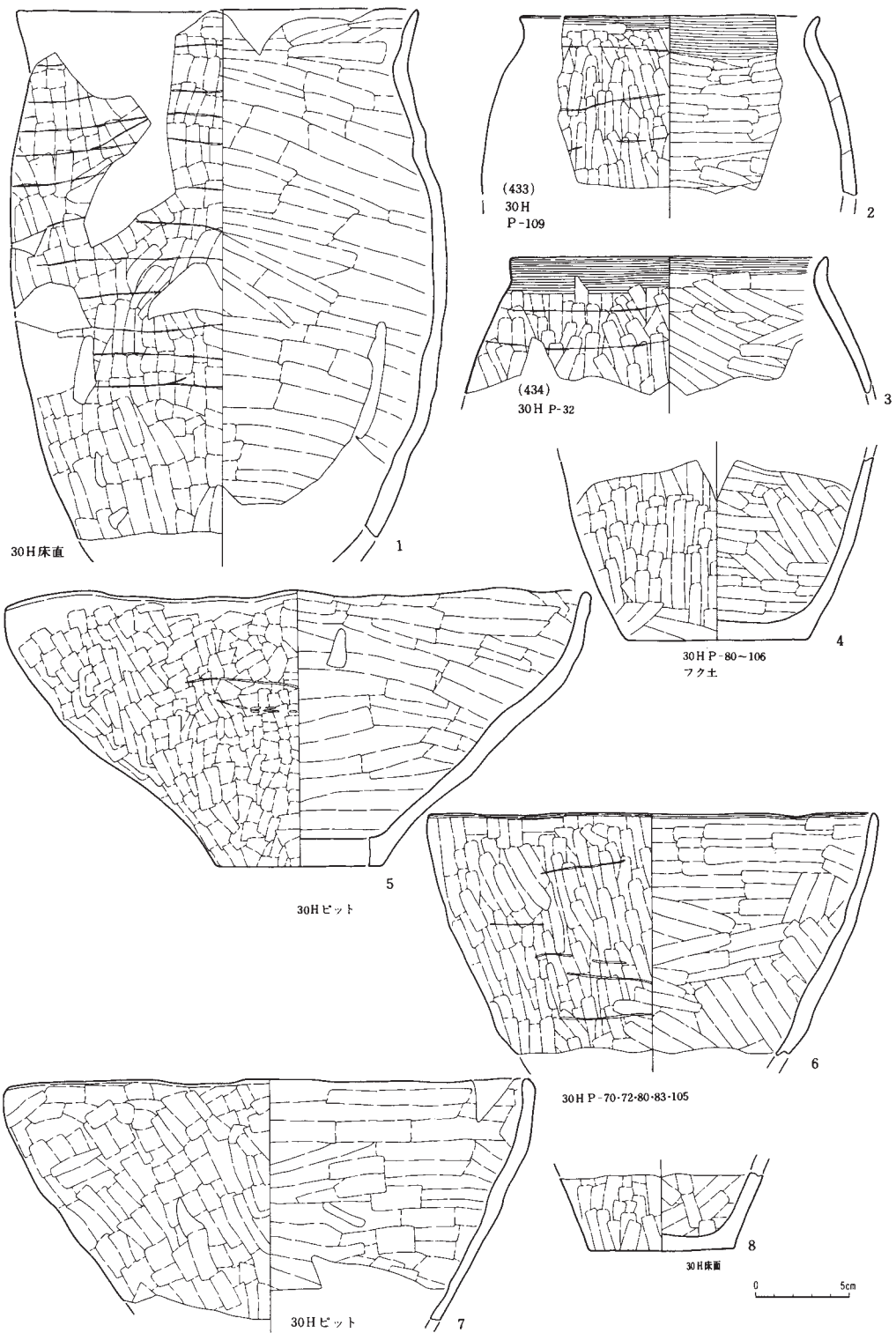
第174図 第30号住居跡実測図



【第30号住カマド】 注 記

層位	土	色色	土質	備	考
1層	10Y R 3/3	暗褐色	シルト質	ローム粒多量混入	
2層	10Y R 4/6	褐色	シルト質	ローム粒多量混入	
3層	10Y R 4/6	褐色	シルト質	燧土粒多量混入	
4層	10Y R 4/4	褐色	シルト質	ローム粒多量混入	
5層	10Y R 4/6	褐色	シルト質	ローム粒多量混入	
6層	10Y R 3/4	暗褐色	シルト質	ローム粒多量混入	
7層	10Y R 4/8	赤褐色		焼土	
8層	10Y R 6/8	明黄褐色	ローム質	混入物なし	
9層	10Y R 6/8	明黄褐色	ローム質	混入物なし	
10層	10Y R 5/6	黄褐色	ローム質	混入物なし	

第175図 第30号住居跡かまど実測図



第176図 第30号住居跡出土土器実測図

その他の施設 東壁の北寄りに張り出した施設がある。幅70cm、長さ95cmで床面が、軽く締っており、出入口ではないかと思われる。

出土遺物 かまど内及び周辺からは、第176図1～5、覆土内から第176図6～8のような土師器が出土した。 (成田・佐藤)

第31号住居跡(第177図、第178図)

位置と確認 AY - 115・116・117、AZ - 115・116から約50cmほどの窪みを確認した。

平面形と規模

平面形	主 軸	規 模								
		壁 長 (m)				壁 高 (cm)				面積(m ²)
長方形	S-80°-E	南	西	北	東	南	西	北	東	
				3.6	3.3	4.5	3.0	55	83	72

堆積土 大別すると、黒色土、暗褐色土、褐色土、黄褐色土の層で、堆積の上の方は、黒色土及び暗褐色土、下部の方は、褐色及び黄褐色土である。また、壁際には明黄褐色土が堆積しており、住居跡の中央の床上面の堆積土に赤褐色土粒が混入していた。

壁 南壁・東壁・西壁は緩い角度で傾斜しているが、北壁はほぼ垂直に近い立ち上がりである。壁の上部は脆いが、下部は堅めである。

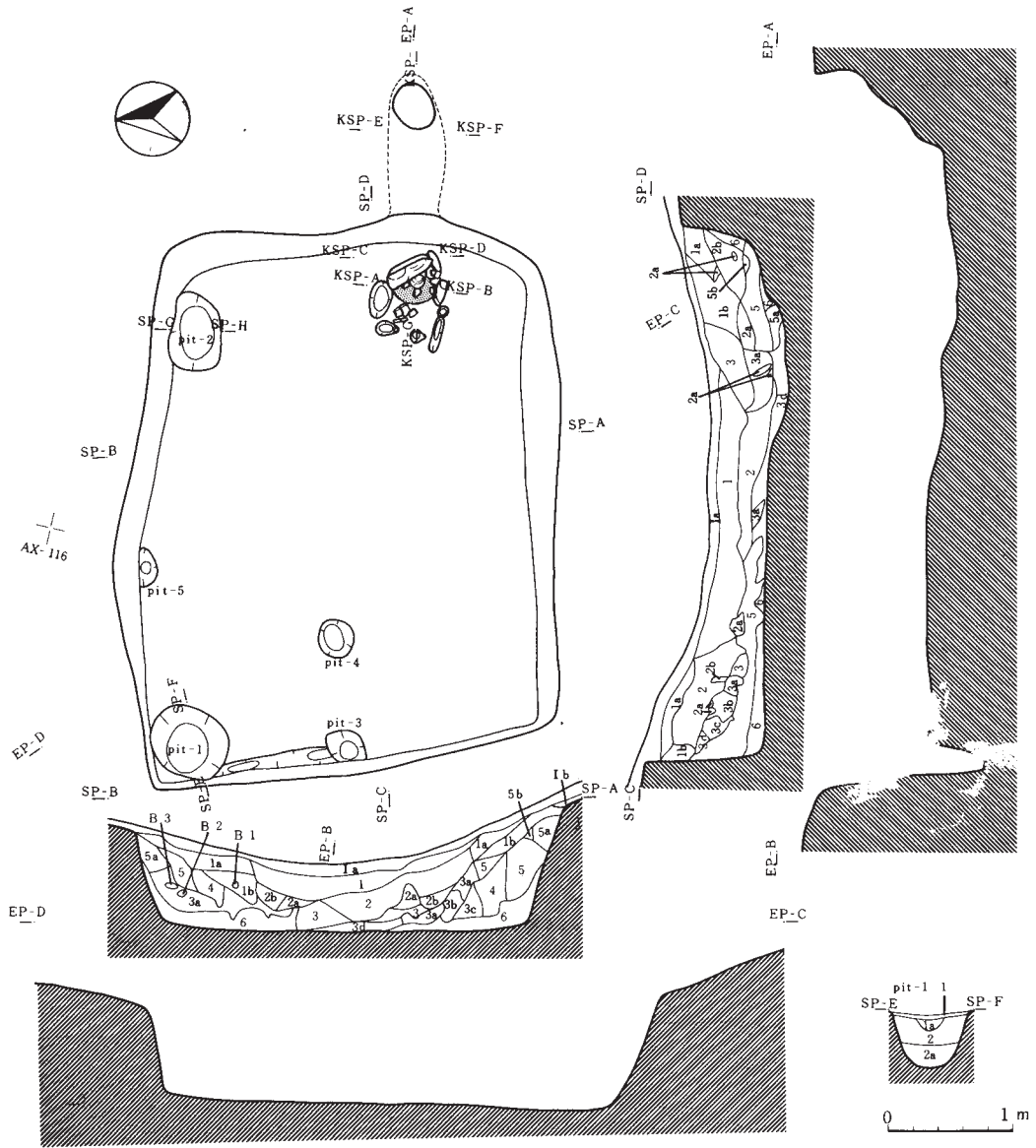
床 全体的に堅く締っている。かまど周辺が少し低く凹凸がある他はほぼ平坦である。

壁溝 西壁の北寄りの一部の壁下からだけ検出した。幅は上端幅4～6cm、下端幅2～4cmである。

ピット 住居跡内から5個検出した。このうち、Pit-1は北西の隅に位置し、中央部分の深さが50cmの掘鉢状で、柱穴と思われる。Pit-2も北東隅近くに位置するが、深さ4cmの浅皿状で柱穴とは思われない。Pit-3・4・5は不規則な配置を呈し、柱穴かどうかは不明である。

かまど 東壁の隅近くに構築されている。かまど本体部分の天井部は残存せず、焼土面を囲むように、シルト岩及び袖石抜き取り痕らしきものが配置されており、土師器片が散在していた。焼土範囲は径2.7×3.5cmの楕円形で最深部分の深さ7cmで、黒褐色土が中央部分に入り込んでいる。煙道はトンネル式で、底面は段差をもって緩やかに上昇し、煙出孔は55°の傾斜角で立ち上がる。煙道の掘り方は、幅30～40cm、長さ50cmである。

出土遺物 かまどの燃焼部からシルト岩と土師器片が出土したほかは、住居跡内から数片(第178図)しか出土しなかった。 (成田・津川)



〔第31号住居跡〕 注 記

層位	土 色	土 質	備 考
1層	10Y R 1.7/1 黒 色	シルト質	黒褐色土混入
1a層	10Y R 2/1 黒 色	シルト質	ローム粒若干混入
1b層	10Y R 2/2 黒 褐色	シルト質	混入物なし
2層	10Y R 2/1 黒 色	シルト質	ローム粒少量混入
2a層	10Y R 3/3 暗 褐色	シルト質	ローム粒少量混入
2b層	10Y R 4/4 褐 色	シルト質	ローム粒少量混入
3層	10Y R 4/2 灰 黄 褐色	ローム質	ローム粒少量混入
3a層	10Y R 5/3 にぶい黄褐色	ローム質	ローム粒、黒褐色土混入
3b層	10Y R 4/3 にぶい黄褐色	ローム質	黒褐色土少量混入
3c層	10Y R 4/2 灰 黄 褐色	ローム質	ロームアロックス混入
3d層	10Y R 5/2 灰 黄 褐色	ローム質	粘土粒若干混入
4層	10Y R 4/6 褐 色	シルト質	黒色土混入
5層	10Y R 5/8 黄 褐色	ローム質	ローム粒若干混入
5a層	10Y R 5/4 にぶい黄褐色	ローム質	黒色土粒若干混入
5b層	10Y R 4/3 にぶい黄褐色	ローム質	炭化物微量混入
6層	10Y R 6/8 明 黄 褐色	ローム質	混入物なし
B1層	10Y R 5/1 褐 灰 色	シルト質	混入物なし
B2層	10Y R 6/4 にぶい黄褐色	ローム質	混入物なし
B3層	10Y R 5/2 灰 黄 褐色	ローム質	混入物なし

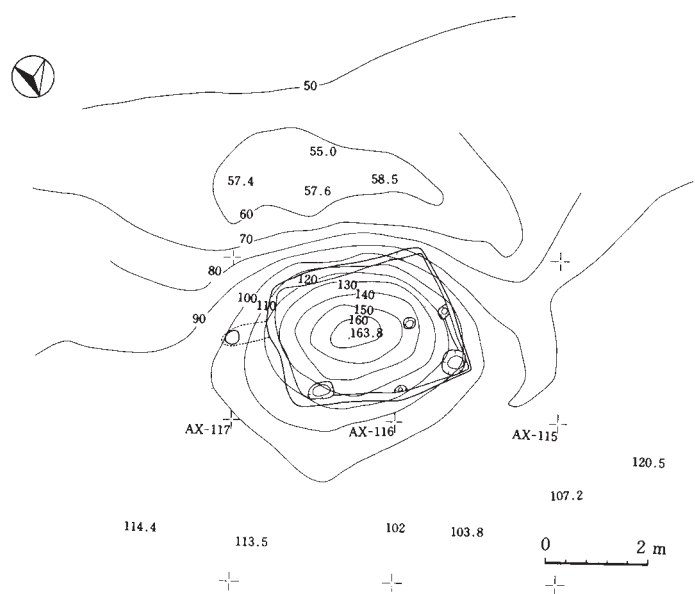
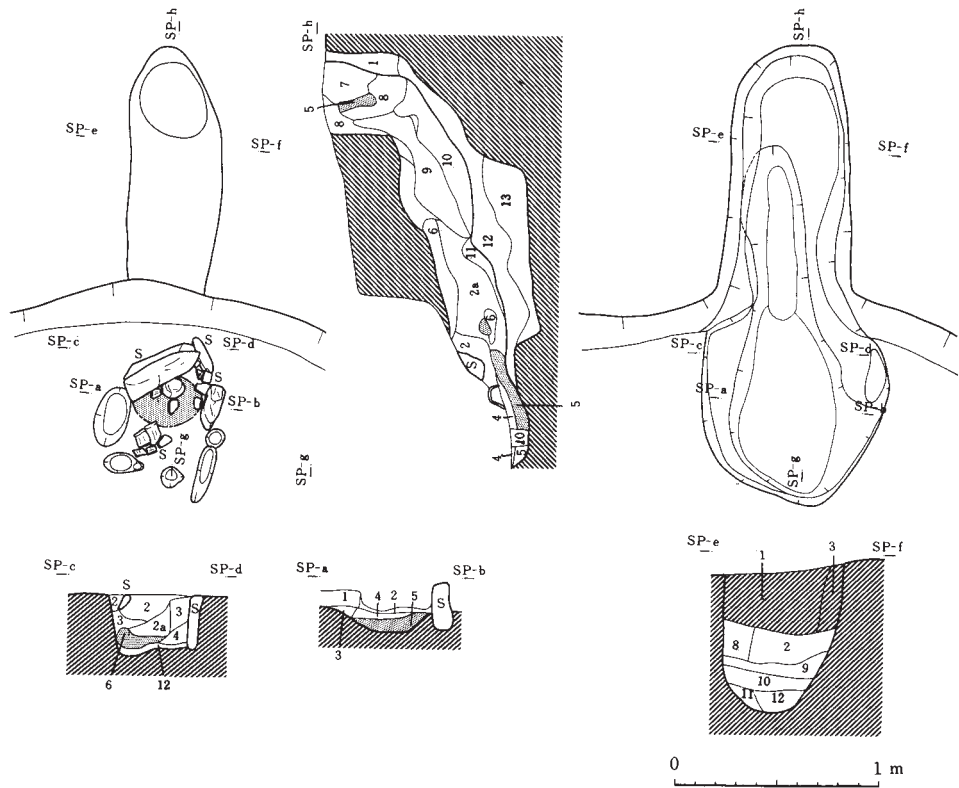
〔第31号住居跡pit 1〕 注 記

層位	土 色	土 質	備 考
1層	10Y R 6/4 にぶい黄褐色	ローム質	黒色土混入
1a層	10Y R 6/3 にぶい黄褐色	ローム質	混入物なし
2層	10Y R 6/6 明 黄 褐色	ローム質	混入物なし
2a層	10Y R 6/6 明 黄 褐色	ローム質	混入物なし

〔第31号住居跡 pit計測表〕

pit No.	規 模	深 さ	pit No.	規 模	深 さ
1	64×56	44	2	74×40	6
3	30×26	4	4	32×16	16
			5	28×28	8

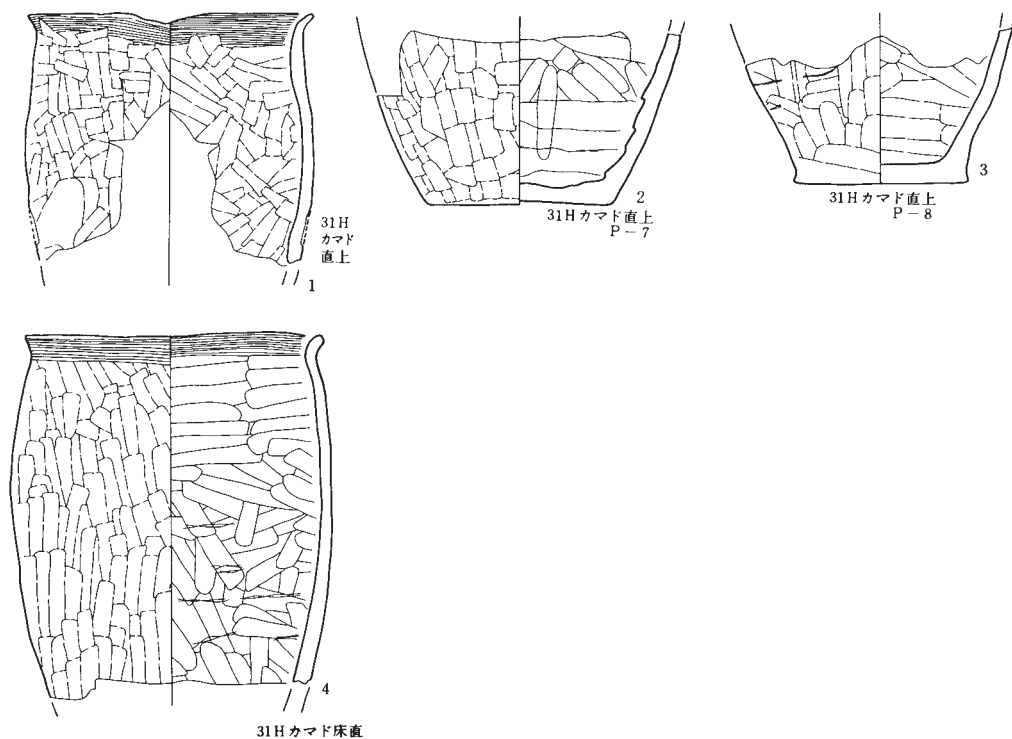
第177図 第31号住居跡実測図



【第31号住カマド】 注 記

層位	土 色	土 質	備 考
1層	15Y R 4/4 褐色	シルト質	焼土ブロック混入
2層	15Y R 4/6 褐色	シルト質	焼土粒混入
2a層	15Y R 4/6 褐色	シルト質	焼土混入
3層	10Y R 8/4 淡黄褐色	ローム質	黒色粒若干混入
4層	10Y R 6/2 灰黄褐色	ローム質	黒色粒若干混入
5層	1.5Y R 4/8 赤褐色		焼土、焼土ブロック混入
6層	5 Y R 3/6 明赤褐色		焼土、ローム粒混入
7層	10Y R 8/6 黄褐色	ローム質	黒色粒混入
8層	10Y R 6/3 にごり黄褐色	ローム質	ローム粒若干混入
9層	10Y R 5/1 暗灰褐色	シルト質	焼土混入
10層	10Y R 3/1 黒褐色	シルト質	ローム粒混入
11層	10Y R 4/1 雑灰褐色	シルト質	ローム粒混入
12層	10Y R 6/3 にごり黄褐色	ローム質	黒色土混入
13層	10Y R 7/6 明黄褐色	ローム質	黒色土混入

第178図 第31号住居跡確認状況・かまど実測図



第178図 第31号住居跡出土土器実測図

第66表 第31号住居跡出土土器観察表

遺物番号	種類	器種	器部	法量 (cm)			調整			胎土 (mm)	焼成	色調	備考	出土位置
				口径	底径	器高	口縁部	胴部	底辺部					
1	土師器	小型甕	口縁部	(13)	—	—	強いヨコナテ	ヘラナテ	—	砂(少1~2)	良好	10Y R4/1 10Y R5/1		カマド直上
2	土師器	甕形	胴底辺	—	8.5	—	—	強いヘラナテ	強いヘラナテ	砂(多1~3)	—	2.5Y R7/4 5Y R7/6		カマド直上 P 7
3	土師器	甕形	胴底辺	—	8	—	—	—	—	砂(若・2) 石英(若)	—	2.5Y R6/6 5Y R5/6		カマド直上 P 8
4	土師器	甕形	口縁部	13.5	—	—	強いヨコナテ	—	—	砂(多・1)	—	5Y R7/2 5Y R7/4	二次火焼 胴下変色	カマド直上

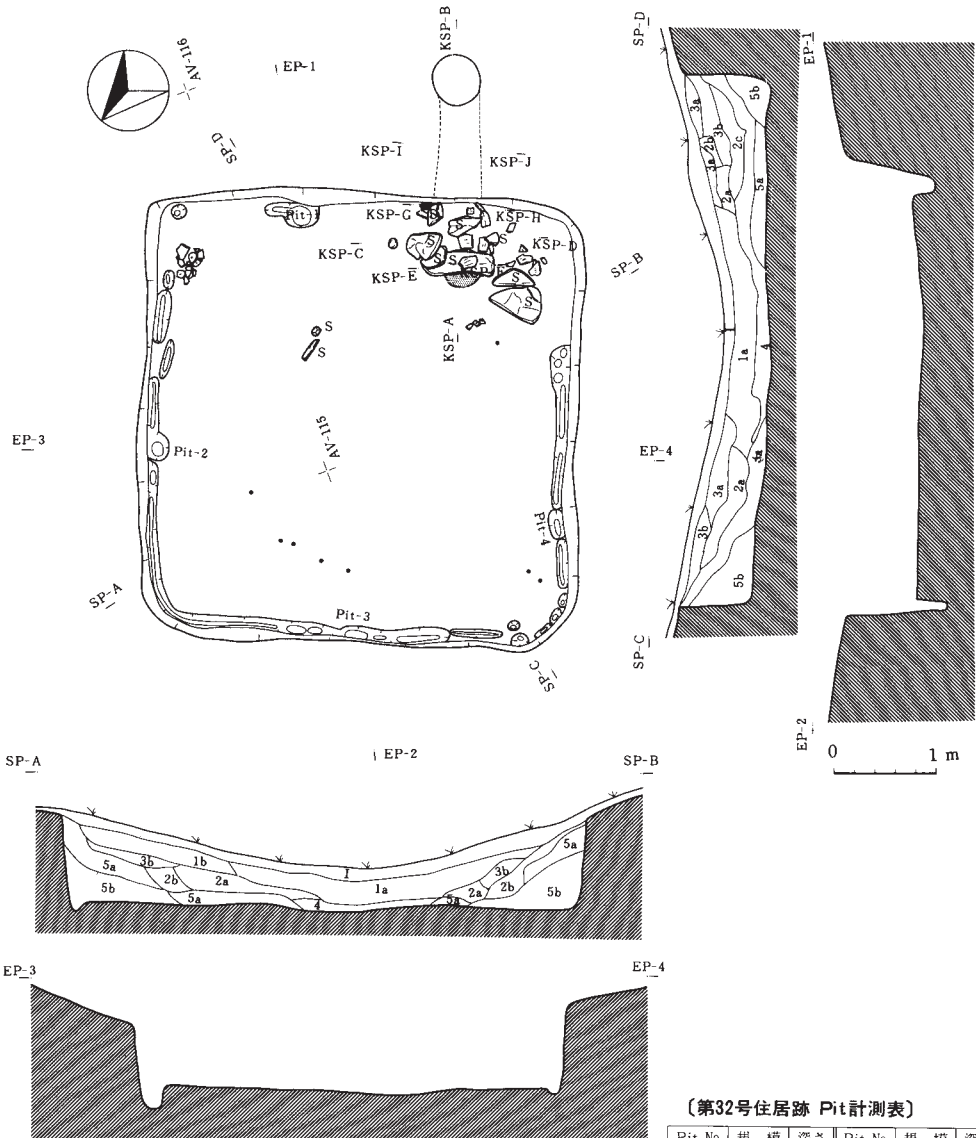
※胎土の砂は砂粒
若は若干

第32号住居跡 (第178図 - 3・第179図)

位置と確認 AU - 114・115、AV - 114・115から深さ約40cmの窪みを確認した。

平面形と規模

平面形	主軸	規				模				面積 (m ²)
		壁長 (m)				壁高 (cm)				
方形	S-37°E	南	西	北	東	南	西	北	東	17.36
		5.2	4.9	5.6	5.0	86	88	65	80	



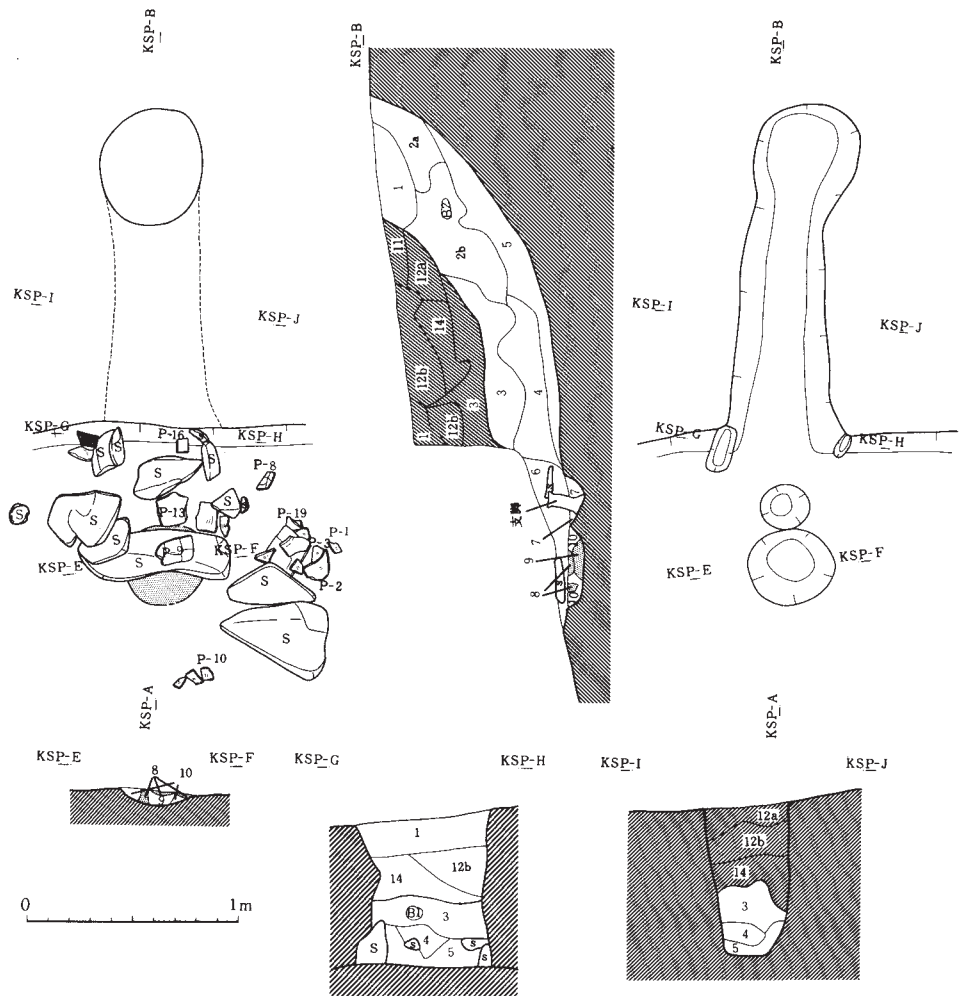
【第32号住居跡 Pit計測表】

Pit No.	規模	深さ	Pit No.	規模	深さ
1	23×52	21.3	2	22×29	35.6
3	13×26	30.3	4	16×30	13.3

【第32号住居跡】 注 記

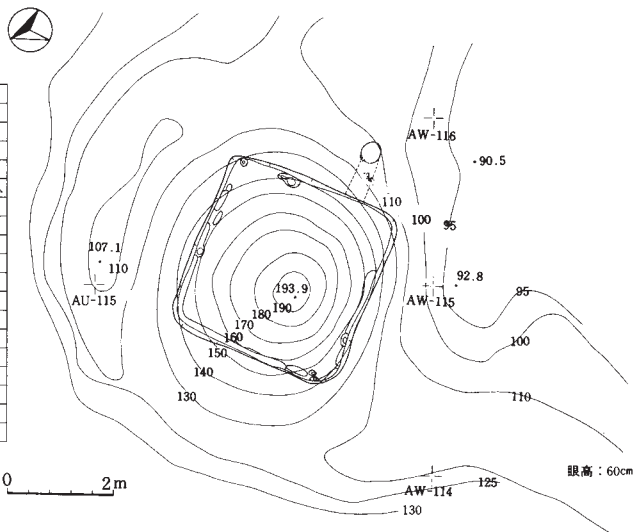
層位	土色	土質	備 考
1a層	10Y R 3/1 黒褐色	シルト質	ロームブロック少量混入
1b層	10Y R 2/3 黒褐色	シルト質	ローム粒多量混入
2a層	10Y R 2/3 黒褐色	シルト質	ローム粒微量混入
2b層	10Y R 3/2 黒褐色	シルト質	混入物なし
3a層	10Y R 3/4 暗褐色	シルト質	ローム粒、ロームブロック多量混入
3b層	10Y R 4/4 褐色	シルト質	ローム粒微量混入
4層	10Y R 3/4 暗褐色	シルト質	ローム混入
5a層	10Y R 5/8 黄褐色	ローム質	暗褐色土混入
5b層	10Y R 5/8 黄褐色	ローム質	混入物なし

第 図 第32号住居跡実測図

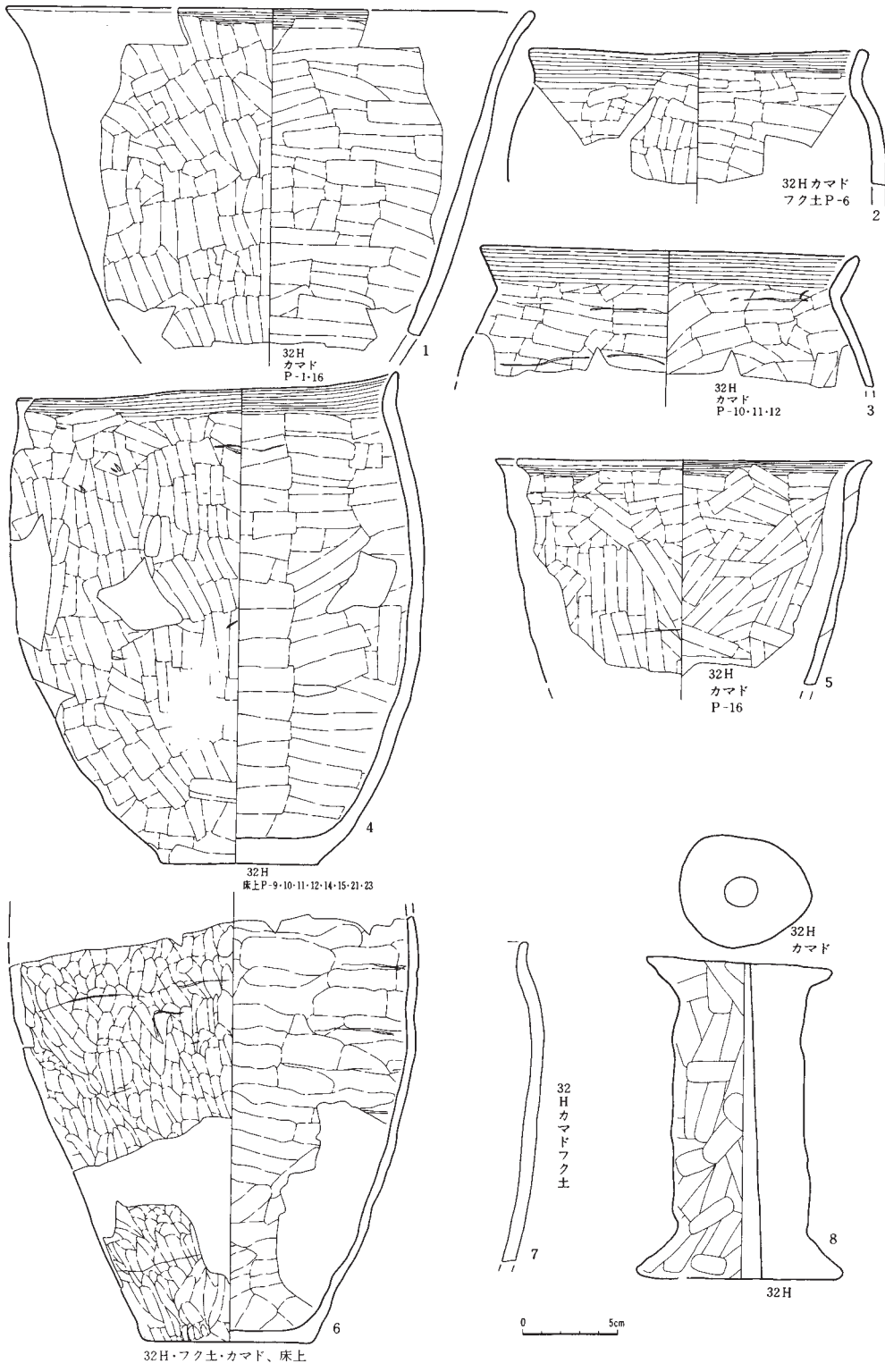


【第32号住カマド】 注 記

層位	土 色	土 質	備 考
1層	10Y R 3/3	暗 褐 色 シルト質	ローム粒少量混入
2a層	10Y R 4/4	褐 色 シルト質	ロームブロック少量混入
2b層	10Y R 4/6	褐 色 シルト質	ローム粒混入
3層	10Y R 5/8	黄 褐色 ローム質	ロームブロック多量混入
4層	10Y R 5/6	黄 褐色 ローム質	炭化材、ロームブロック少量混入
5層	10Y R 6/6	明黄褐色 ローム質	炭化物少量混入
6層	10Y R 6/8	明黄褐色 ローム質	炭化物混入
7層	10Y R 4/6	褐 色 シルト質	混入物なし
8層	5 Y R 5/8	明赤褐色	焼土
9層	2.5 Y R 4/8	赤 褐色	焼土
10層	10Y R 4/6	褐 色 シルト質	焼土粒少量混入
11層	10Y R 3/4	暗 褐色 シルト質	ロームブロック少量混入
12a層	10Y R 4/6	褐 色 シルト質	混入物なし
12b層	10Y R 4/6	褐 色 シルト質	ローム粒混入
13層	10Y R 5/6	黄 褐色 ローム質	焼土粒、ローム混入
14層	10Y R 5/6	黄 褐色 ローム質	ローム粒多量、炭化物少量混入
B1層	2.5 Y R 5/6	赤 褐色 ローム質	混入物なし
B2層	10Y R 6/6	明黄褐色 ローム質	混入物なし



第179図 第32号住居跡確認状況・かまど実測図



第180図 第32号住居跡出土土器実測図

第64表 第32号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	種類	器種	器部	法量 (cm)			調整			胎土 (mm)	焼成	色調	備考	出土位置
				口径	底径	器高	口縁部	胴部	底辺部					
1	土師器	甕形	口縁胴	(28)	—	—	強いヨコナデ	ヘラナデ	—	砂(多・1) 石英(若)	良好	2.5Y R5/8 2.5Y R5/8	変色もろい	カマドフク土 P1、P16
2	土師器	甕形	口縁胴	(18)	—	—	〃	〃	—	砂(多・1) 石英(若)	〃	7.5Y R7/4 7.5Y R5/4		カマドフク土 P6
3	土師器	甕形	口縁胴	(20)	—	—	〃	〃	—	砂(多・1) 石英(若)	〃	5Y R6/4 7.5Y R6/6		カマドフク土 P10、11、12
4	土師器	甕形	半完形	(20) (21)	9	26.6	〃	〃	—	砂(多・1) 石英(若)	〃	2.5Y R5/4 5Y R1.7/1		床上P9~18 P21~25、27
5	土師器	甕形	口縁胴	(20)	—	—	〃	〃	—	砂礫(少・2)	良堅	7.5Y R7/4 7.5Y R6/1		カマドフク土 P16
6	土師器	甕形	胴底辺	—	9	—	強いヘラナデ	強いヘラナデ	—	砂(多・1)	良好	5Y R4/6 10Y R6/4		カマドフク土 P14 床上P 11171822
7	土師器	甕形	口縁胴	(22.6)	—	—	強いヨコナデ	〃	—	砂(少1~3)	〃	7.5Y R5/6 7.5Y R5/4		カマドフク土 P2
8	支脚		完形	9.7	10	16.8	ユビナデ	ユビナデ	ユビナデ	もろい	〃	10Y R8/2		カマドフク土

※胎土の砂は砂粒

堆積土 住居跡の中央部では黒褐色土と暗褐色土の2層だけで、壁際では黒褐色土と暗褐色土、褐色土、黄褐色土が堆積している。自然堆積と思われる。

壁 どの壁もほぼ垂直に近い立ち上がり呈している。壁の上部はやや脆く柔らかいが下部は堅い。

床 直接ロームを床としており、堅く締っていてほぼ平坦である。

壁溝 南壁と西壁、東壁の南寄りの部分を除く壁下から検出した。幅は、上端が3~7cm、下端が1~4cmで深さは2.2~13.0cmである。

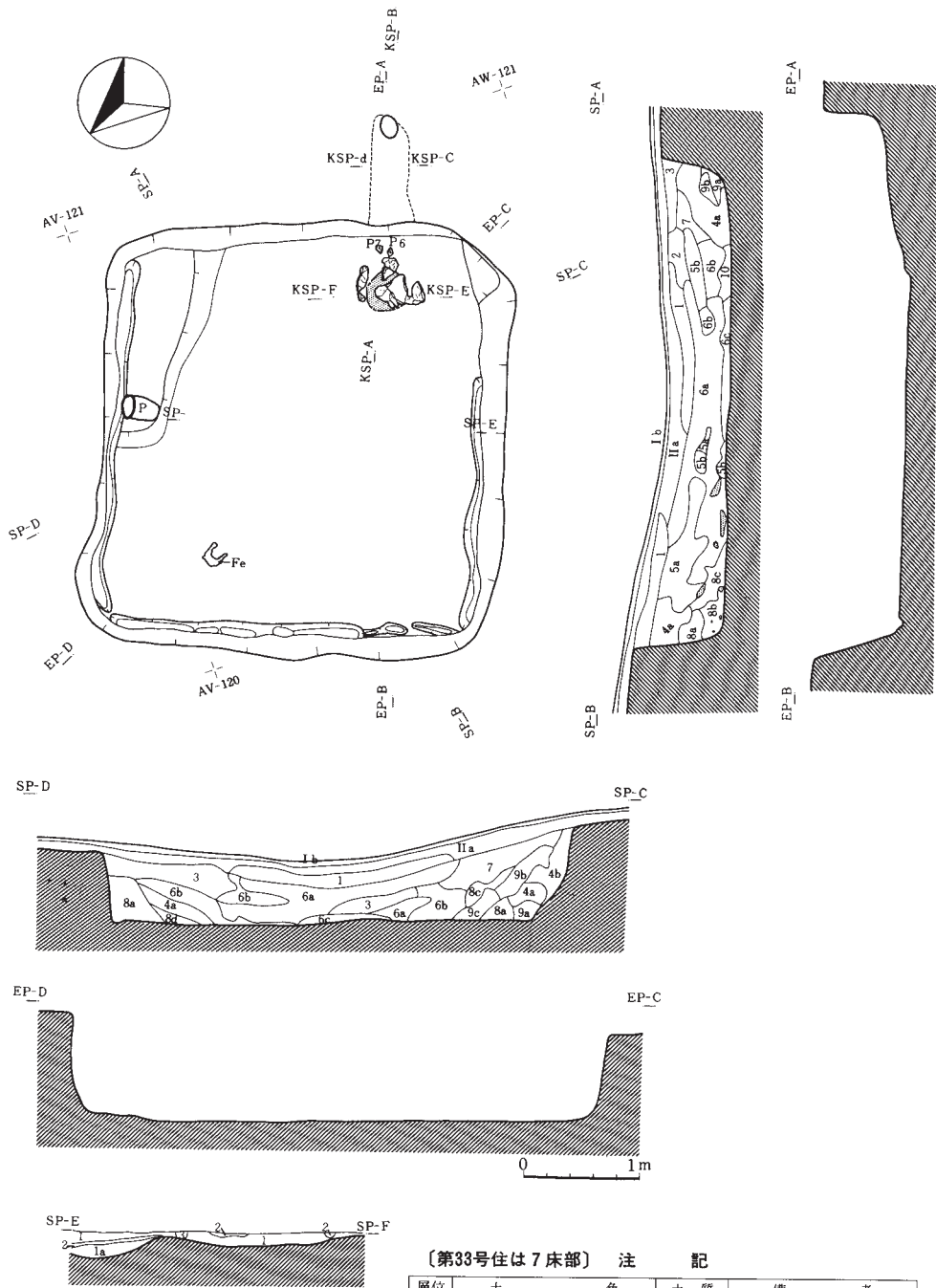
ピット 住居跡内から検出したピットは4個である。このうち柱穴と思われるのは、Pit-1とPit-3で、深さはPit-1が約20cm、Pit-3が35cmである。Pit-2とPit-4は中央部分の深さが約3cmの浅皿状である。

かまど 南壁の西寄りに構築されている。本体部の天井部は残存しないが、袖部で、骨材として使用したと思われるシルト岩が崩れて残存していた。壁間際には、高さ15cm長さ15cm位のシルト岩が、袖石の一部として、しっかり立てられた状態で残っていた。その袖石と焼土面とのほぼ中央から半分埋められて、立たされた状態で出土した。焼土範囲は、ほぼ円形で、径3.8cmの中央部分の深さ8cmの浅皿状で、その直上にシルト岩、土師器片が散在していた。煙道は煙出部へ向かって立ち上がるタイプで、傾斜角は23°、長さ157cm、幅35~50cmである。煙道部、煙出部の石組みとも残存状態が悪い。

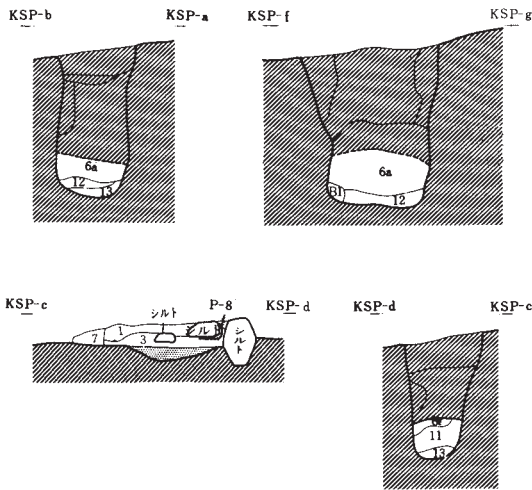
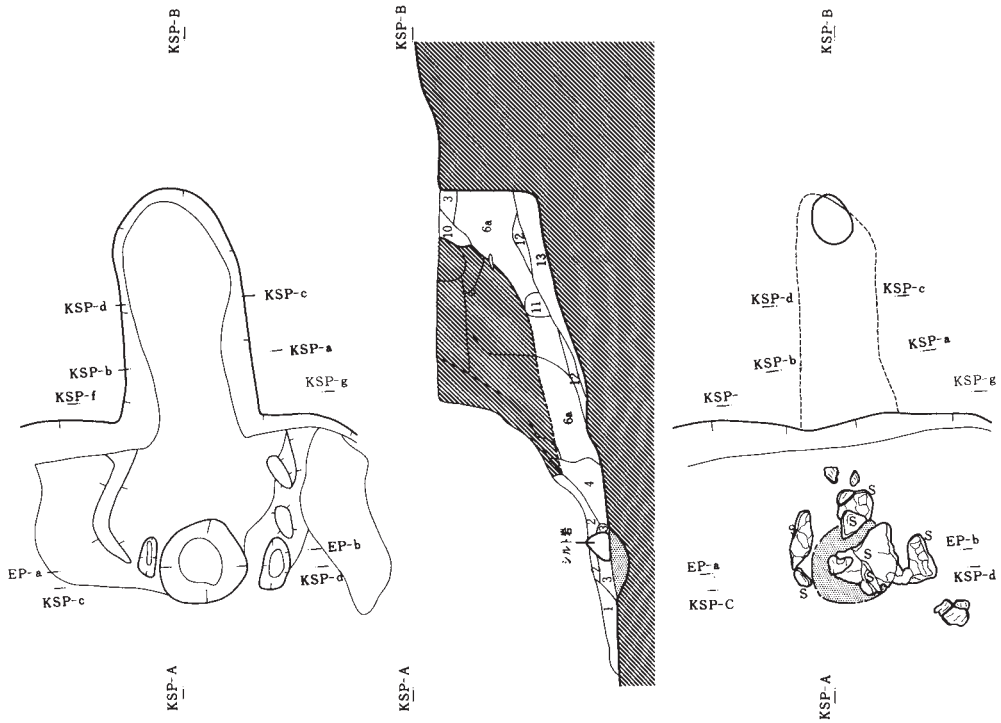
出土遺物 かまど内及び付近から第180図1~5の土師器片が出土した。床面直上からの出土土師器は第180図4である。また、かまど内から、第180図8の土製支脚や、袖部から炭化物が出土した。
(成田・津川)

第33号住居跡(第181図、第182図)

位置と確認 AU-121、AV-120・121グリッドから約34cmほどの窪みを確認した。



第181図 第33号住居跡実測図



〔第33号住カマド〕 注 記

層位	土 色	土 質	備 考
1層	10Y R 3/2 黒褐色	シルト質	ロームブロック混入
2層	10Y R 4/4 褐色	シルト質	ローム粒少量混入
3層	7.5Y R 4/4 褐色	シルト質	焼土粒微量混入
4層	10Y R 3/3 暗褐色	シルト質	焼土粒、黒色土粒、ローム粒混入
5層	10Y R 5/8 黄褐色	ローム質	ロームブロック、焼土混入
6a層	10Y R 2/3 黒褐色	シルト質	焼土粒、ローム粒少量混入
6b層	10Y R 2/3 黒褐色	シルト質	焼土、ローム粒少量混入
6c層	10Y R 2/2 黒褐色	シルト質	ローム粒少量混入
7層	10Y R 2/2 黒褐色	シルト質	ローム粒混入
8層	10Y R 3/3 暗褐色	シルト質	ローム粒、暗褐色土粒混入
9層	5 Y R 3/4 暗赤褐色	焼土	
10層	10Y R 4/4 褐色	シルト質	ロームブロック、焼土混入
11層	5 Y R 2/4 極暗赤褐色	焼土	
12層	10Y R 4/6 褐色	シルト質	ローム粒、黒褐色土粒混入
13層	10Y R 7/4 にごり黄褐色	ローム質	黒褐色土粒混入

0 1 m

第182図 第33号住居跡かまど実測図

平面形と規模

平面形	主 軸	規 模								
		壁 長 (m)				壁 高 (cm)				面積 (m ²)
方 形	S-44°-E	南	西	北	東	南	西	北	東	
				3.6	3.8	3.7	3.6	60	90	84

堆積土 19層に分層された。大別すると、黒色土、黒褐色土、暗褐色土、褐色土、にぶい黄褐色土、黄褐色土で、中央部分は床面まで黒色土が堆積しており、各壁際は、暗褐色土、褐色土、黄褐色土が堆積していた。また、床面近くの6 a層の中に焼土がブロック状に少量混入している。

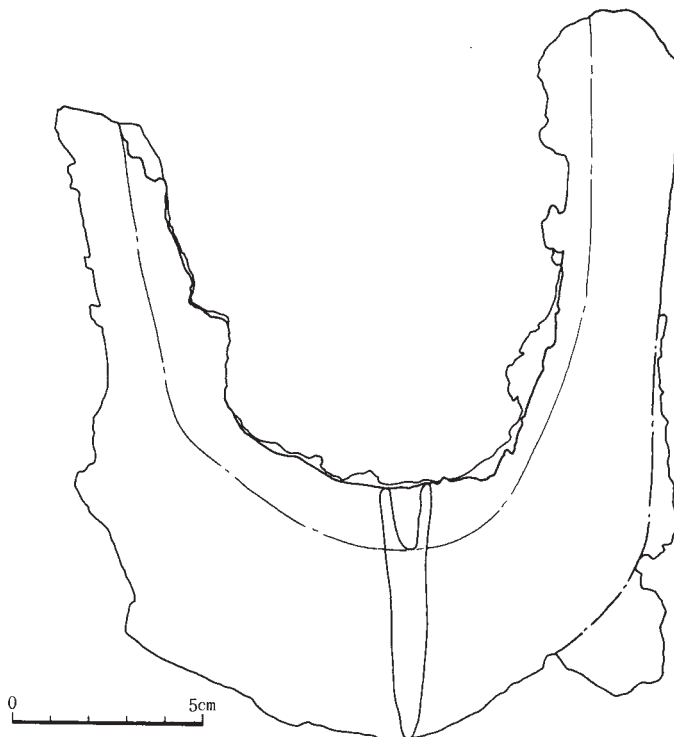
壁 壁の上部半分位までが b層のため、床面近くは堅いが、上部は柔らかい。東壁以外はやや緩い立ち上がりである。

床 中央部分とかまど周辺を中心として、全体的に堅く締っている。南東隅が部分的にやや高くなっている。

壁溝 南壁以外の各壁下から検出した。幅は、上端が6～15cm、下端が2～12cm、深さが3～23cmである。

ピット 検出できなかった。

かまど 南壁のほぼ中央に構築されている。かまど本体部分の天井部は残存しない。天井部、袖部ともシルト岩を骨材として使用していたとみられ、幅8cm、長さ25cmのシルト岩と、



第183図 第33号住居跡出土鋤・鍬先実測図

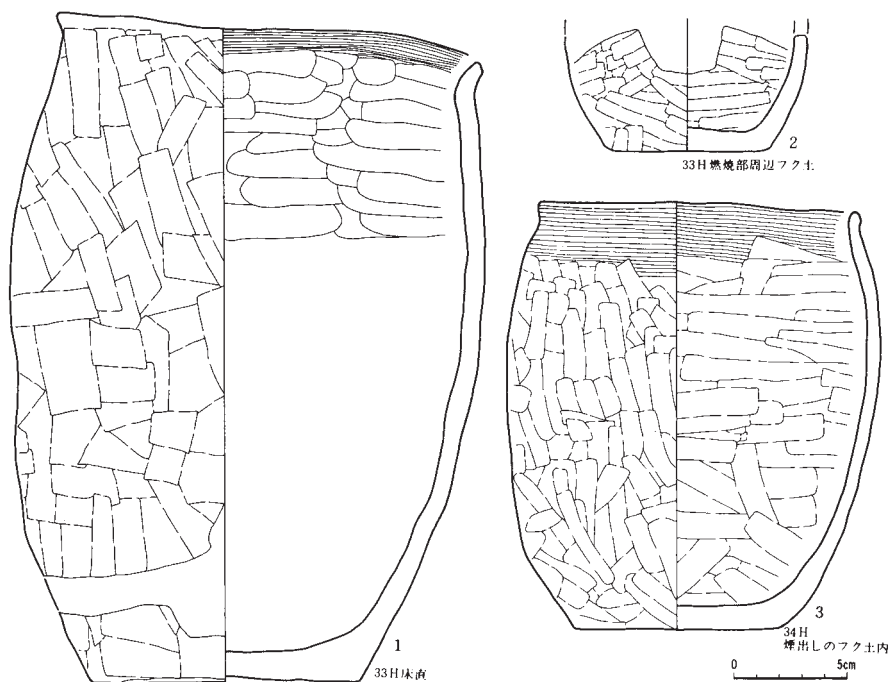
第65表 第33号住居跡出土土器観察表

遺物番号	種類	器種	器部	法量 (cm)			調整			胎土 (mm)	構成	色調	備考	出土位置
				口径	底径	器高	口縁部	胴部	底辺部					
1	土師器	甕	半完形	18.9 20.3	12	28.5 29.5	ヘラナデ	ヘラナデ	強い ヘラナデ	砂(多・1) 石英(多・1)	良好	10Y R 6/4 10Y R 8/6		床直直立
2	土師器	小型甕	胴底辺	—	7	—	—	〃	ヘラナデ	砂(多・1) 石英(若)	〃	10Y R 5/4 10Y R 6/3		燃焼部 周辺フク土

※胎土の砂は砂粒の略

幅 8 cm、長さ20cmのシルト岩が袖部に残存しており、その 2 個のシルト岩の間の焼土の上に、天井部に使用したとみられるシルト岩が崩れてあった。また、その周辺には、5 片の土師器片が散在していた。焼土範囲は径35cmの円形で、最深部分が7.5cmの浅皿状を呈している。煙道は煙出部へ向かって立ち上がるタイプである。傾斜角は12°で、掘り方の長さは100cm、幅は50～55cmである。

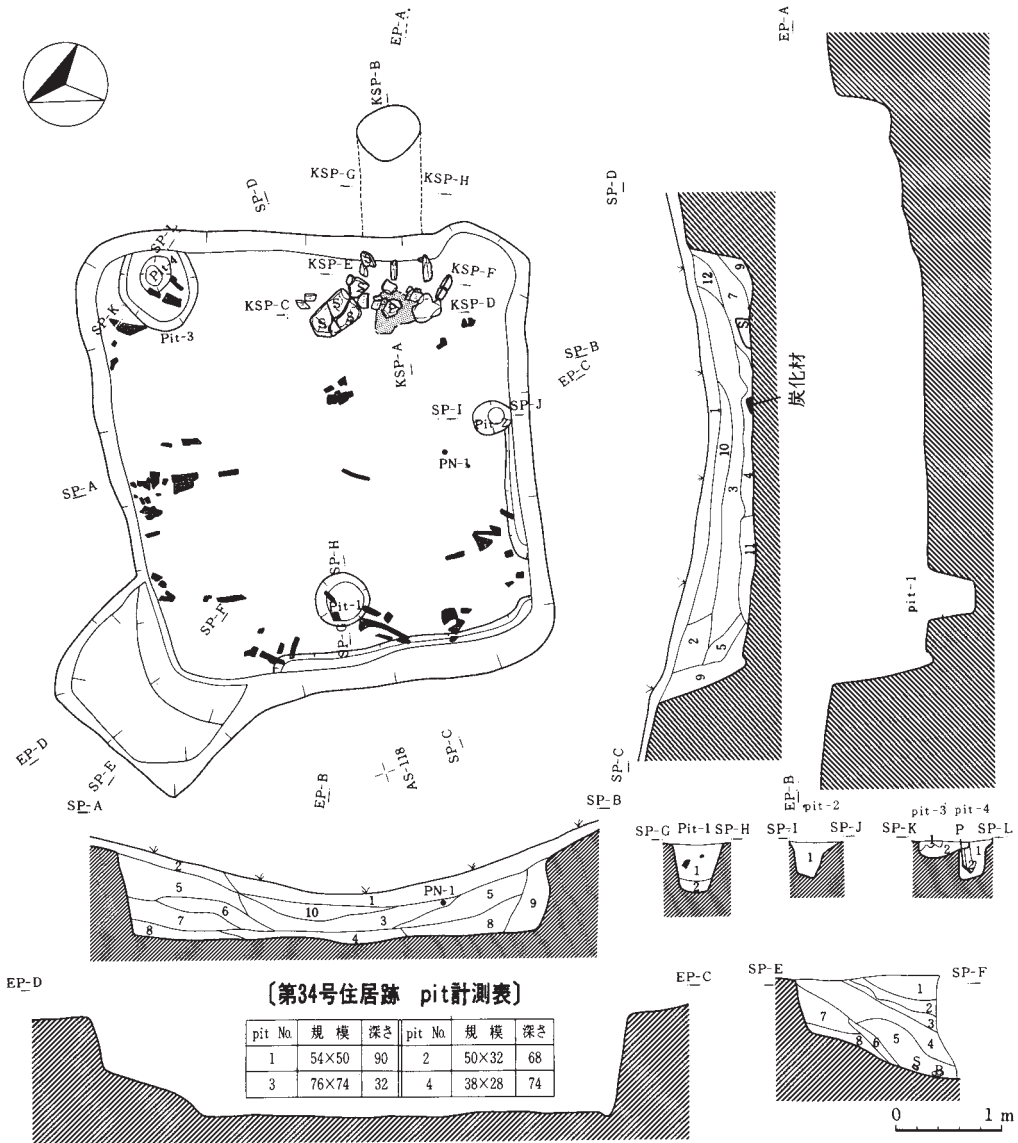
出土遺物 東壁中央寄りの床直上から器高約27cm、口径約20cmの完形土師器が出土した。また、北東隅寄り 6 層から 15×20cmの鉄製鋤・鋤先が出土した。(成田・津川)



第184図 第33号・第34号住居跡出土土器実測図

第34号住居跡(第185図、第186図)

位置と確認 A R - 118・119、A S - 118・119の位置から約75cmの窪みを確認した。



〔第34号住居跡 pit計測表〕

pit No.	規模	深さ	pit No.	規模	深さ
1	54×50	90	2	50×32	68
3	76×74	32	4	38×28	74

〔第34号住〕 注 記

層位	土 色	土 質	備 考
1層	10Y R 2/2 黒褐色	シルト質	炭化物微量混入
2層	10Y R 3/3 暗褐色	シルト質	ローム粒少量混入
3層	10Y R 2/1 黒色	シルト質	ローム粒・炭化物少量混入
4層	10Y R 3/4 暗褐色	シルト質	ローム粒、黒色土、炭化物微量混入
5層	10Y R 3/4 暗褐色	シルト質	ローム粒、炭化物少量混入
6層	10Y R 4/4 褐色	シルト質	ローム粒少量、炭化物微量混入
7層	10Y R 6/6 明黄褐色	ローム質	炭化物少量混入
8層	10Y R 5/6 黄褐色	ローム質	炭化物多量混入
9層	10Y R 4/6 褐色	シルト質	炭化物微量混入
10層	7.5Y R 2/1 黒色	シルト質	炭化物微量混入
11層	10Y R 3/4 暗褐色	シルト質	ローム粒少量、焼土粒、炭化物微量混入
12層	10Y R 2/2 黒褐色	シルト質	混入物なし

〔第34号住pit 1〕 注 記

層位	土 色	土 質	備 考
1層	10Y R 5/6 黄褐色	ローム質	炭化物多量、黒色土混入
2層	10Y R 6/8 明黄褐色	ローム質	

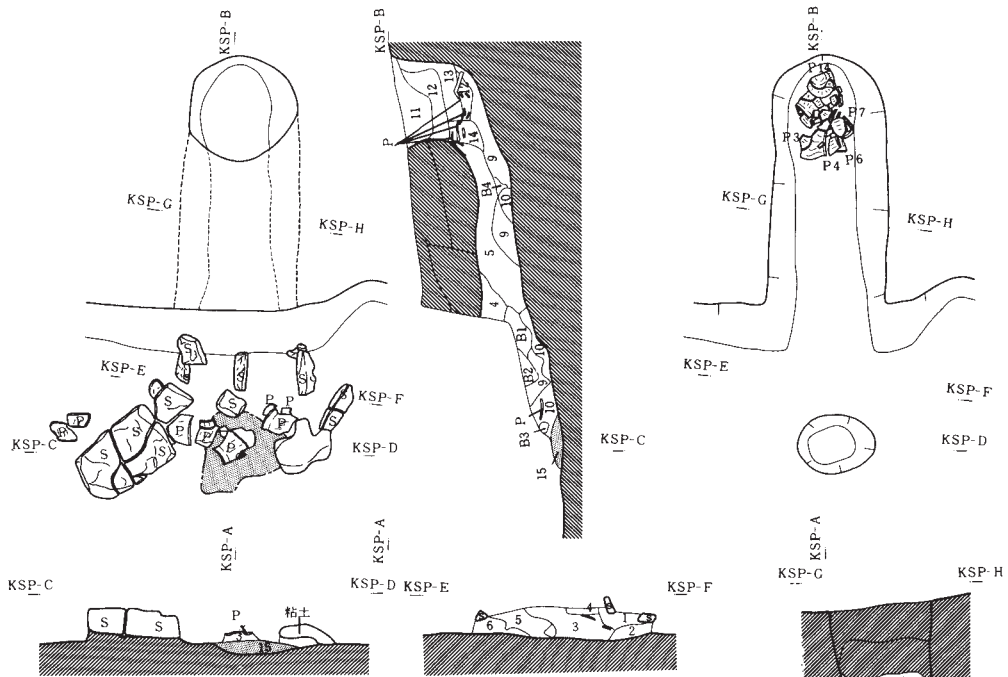
〔第34号住pit 2〕 注 記

層位	土 色	土 質	備 考
1層	10Y R 5/8 黄褐色	ローム質	炭化物微量混入

〔第34号住pit 3〕 注 記

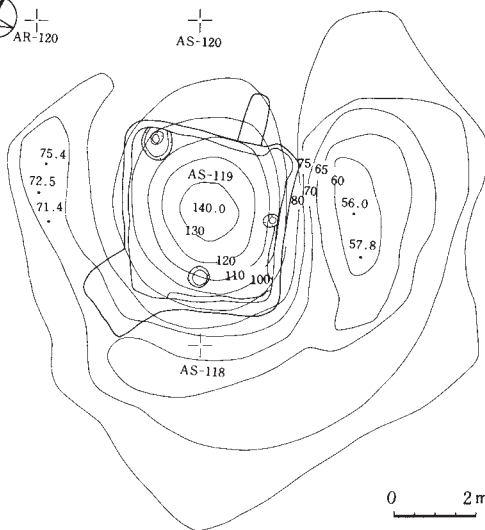
層位	土 色	土 質	備 考
1層	10Y R 5/8 黄褐色	ローム質	混入物なし
2層	10Y R 5/6 褐色	シルト質	炭化物微量混入

第185図 第34号住居跡実測図



〔第34号住カマド〕 注 記

層位	土色	土質	備考	層位	土色	土質	備考
1層	10Y R 2/3 黒褐色	シルト質	炭化物微量混入	11層	10Y R 2/3 黒褐色	シルト質	ローム少量、炭化物微量混入
2層	10Y R 3/4 褐色	シルト質	炭化物微量混入	12層	10Y R 3/4 暗褐色	シルト質	ローム少量、炭化物、焼土微量混入
3層	10Y R 4/6 褐色	シルト質	炭化物微量混入	13層	10Y R 4/4 褐色	シルト質	炭化物微量混入
4層	10Y R 4/6 褐色	シルト質	炭化物、焼土微量混入	14層	10Y R 4/4 褐色	シルト質	焼土、黒色土少量、炭化物微量混入
5層	7.5Y R 4/6 褐色	シルト質	焼土、炭化物微量混入	15層	2.5Y R 4/8 赤褐色		焼土
6層	10Y R 5/6 黄褐色	ローム質	炭化物、炭化物微量混入	B1層	5Y R 4/8 赤褐色		焼土
7層	10Y R 3/4 暗褐色	シルト質	炭化物、焼土微量混入	B2層	10Y R 5/8 黄褐色	ローム質	焼土、炭化物微量混入
8層	10Y R 4/6 褐色	シルト質	炭化物、焼土微量混入	B3層	5Y R 5/8 明赤褐色		焼土
9層	10Y R 6/6 明黄褐色	ローム質	黒色土、焼土、炭化物微量混入	B4層	10Y R 6/8 明黄褐色	ローム質	混入物なし
10層	10Y R 4/4 褐色	シルト質	炭化物、焼土、ローム微量混入				



0 2m

〔第34号住pit 4〕 注 記

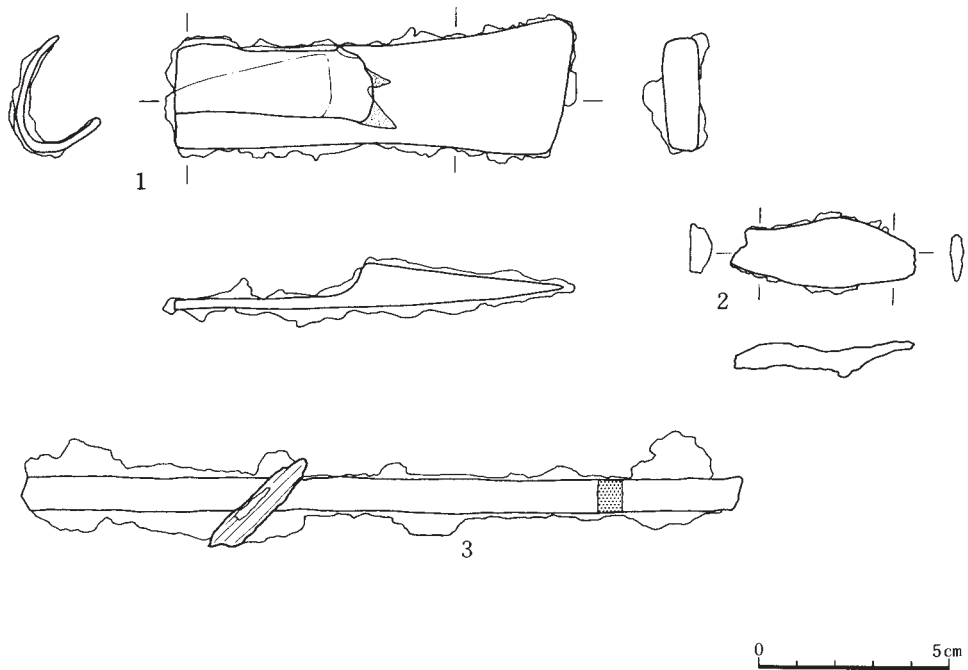
層位	土色	土質	備考	品
1層	10Y R 4/4 褐色	シルト質	炭化物微量、黒色土混入	
2層	10Y R 5/6 黄褐色	ローム質	炭化物微量混入	

〔第34号住玄関〕 注 記

層位	土色	土質	備考
1層	10Y R 4/4 褐色	シルト質	焼土ブロック、炭化物微量、ローム、黒色土混入
2層	10Y R 3/3 暗褐色	シルト質	炭化物微量、ローム粒少量混入
3層	10Y R 5/6 黄褐色	ローム質	炭化物微量混入
4層	10Y R 4/6 褐色	シルト質	炭化物微量、焼土粒微量混入
5層	10Y R 3/4 暗褐色	シルト質	炭化物、ローム少量、焼土微量混入
6層	10Y R 4/6 褐色	シルト質	ローム少量、炭化物微量混入
7層	10Y R 5/6 黄褐色	ローム質	炭化物微量混入
8層	10Y R 5/8 黄褐色	ローム質	黒色土少量混入
B層	5 Y R 4/8 赤褐色		焼土、黒色土混入

眼高：170 cm

第186図 第34号住居跡確認状況・かまど実測図



第187図 第34号住居跡出土鉄製品実測図

平面形と規模

平面形	主軸軸	規 模								面積(m ²)
		壁 長 (m)				壁 高 (cm)				
不整形	S-60°-E	南	西	北	東	南	西	北	東	14.41
		4.3	4.5	3.9	5.0	68	69	76	60	

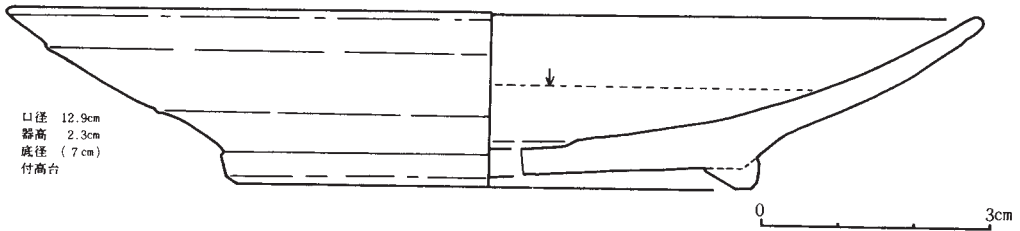
堆積土 12層に分層できたが大別すると黒色土、黒褐色土、暗褐色土、褐色土、明黄褐色土である。逆放物線状を呈し、自然堆積である。なお、3層から灰釉陶器が出土した。

壁 全体がほぼ垂直に立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、かまど周辺は堅く締まっているが、ほかは柔かである。

壁溝 南壁、西壁しか検出されなかった。規模は、上端が7~15cm、下端が5~8cmで深さ7~15cmである。

ピット 住居跡内から検出したピットは、第 図のように4個である。このうち柱穴と思われるのは、Pit - 3だけで、Pit - 1~2は貯蔵穴と思われる。Pit - 4は、住居跡に伴うものである。



第188図 灰釉陶器実測図

かまど 東壁の南寄りに地山を掘り込んで、トンネル式に構築されている。煙出の中から土師器片が2個体ほど出土した。燃烧部の焼土上面から、シルト岩、土師器片が散在していた。焼土範囲は、径25cmで円形を呈し、中央の厚さ7cmの浅皿状である。

その他の施設 住居跡の北壁と西壁の角に、一辺が約140~150cmの不整形の掘り込みがあった。緩傾斜していて底面がややしまりがあり、住居の出入口の可能性はある。

出土遺物 かまど内及び周辺からは、土師器片が出土した。鉄製品は第187図、灰釉陶器は第188図、覆土内出土のものは、第183図3である。炭化材が床面直上から多数出土した。

(成田・佐藤)

第66表 第34号住居跡出土土器観察表

遺物番号	種類	器種	器部	法量 (cm)			調整			胎土 (mm)	焼成	色調	備考	出土位置
				口径	底径	器高	口縁部	胴部	底辺部					
1	土師器	甕形	完形	13.5 ↓ 14	9 ↓ 9.3	18.7 ↓ 19.2	強い ヨコナデ	強い ヘラナデ	強い ヘラナデ	砂礫 (1~5)	良好	7.5Y R7/4 7.5Y R6/3		煙出しの フク土内

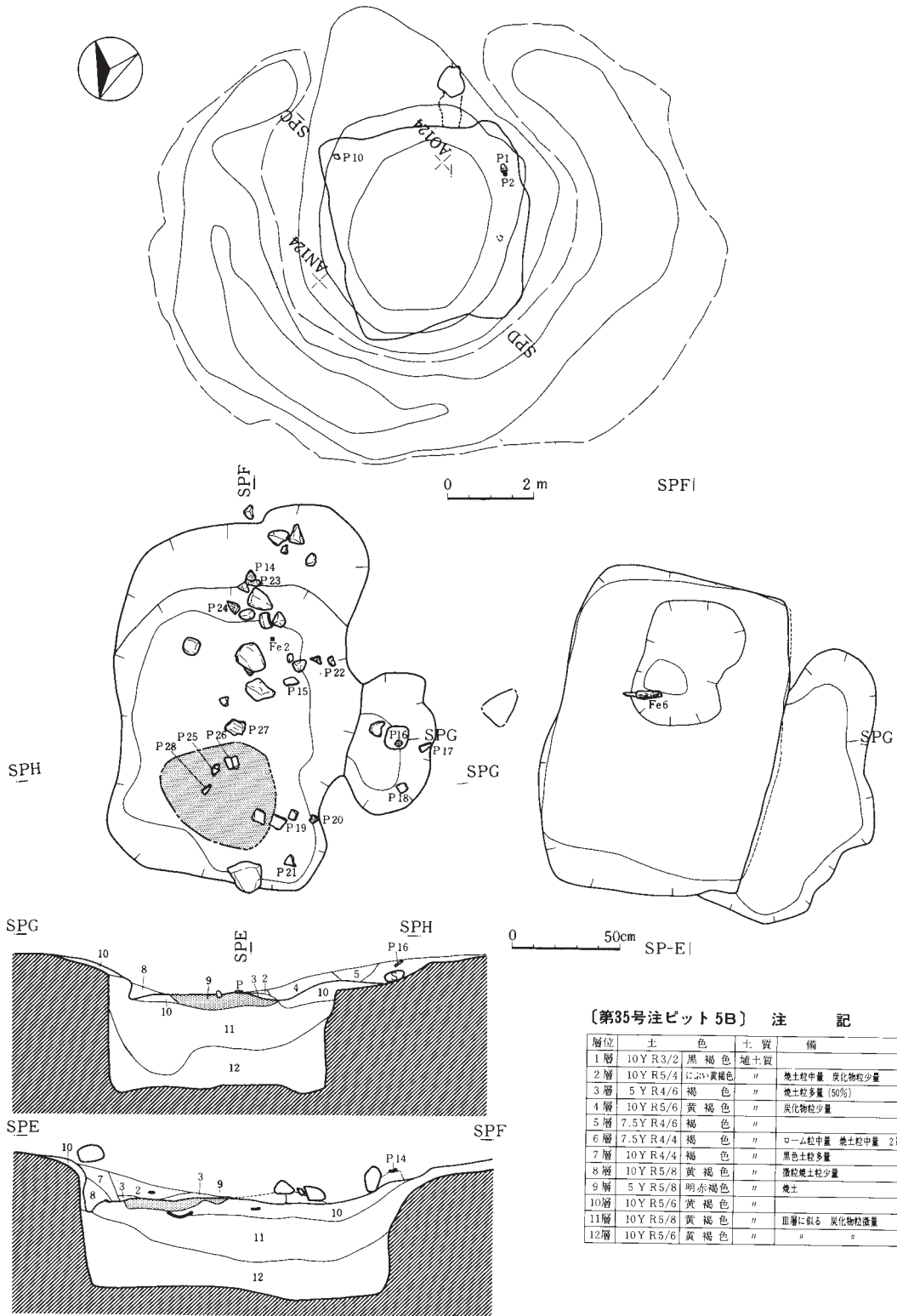
第67表 第33号・第34号住居跡出土鉄製品計測表

挿図番号	図版番号	種類	法量 (cm)				出土地点 (層位)	備考
183-1		鋤・鍬先	全長 19.2	刃幅 13.4	最大厚 1.0	柄はめ込み溝 1.6×0.8	フク土層 6	
187-1		鉄斧	全長 10.5	刃幅 3.6	最大厚 1.2	柄はめ込み孔厚さ 0.3	フク土 Fe-1	
187-2		鉄鍬	全長 (4.7)		最大幅 1.9	厚さ 0.2~0.5	Fe-1	
187-3		紡錘車の軸部	全長 (19.0)		幅 0.9	厚さ 0.6	フク土 Fe-2	

第35号住居跡 (第189~194図)

位置と確認 東側地区の北西の縁辺に近い部分AN-123・124、AO-123・124で、直径9m深さ40cmほどのレンズ状の表土からの窪みを確認した。

重複 J-1号土塙を切って構築している。



第 189 図 第35号住居跡確認状況・ピット 5 B 実測図

平面形と規模

平面形	主 軸	規 模								面積(m ²)
		壁 長 (m)				壁 高 (cm)				
隅 丸 方 形	S-20°-E	南東	南西	北東	北西	南東	南西	北東	北西	17.60
		4.53	4.62	4.89	3.88	52	72	55	53	

竪穴周囲 竪穴周囲に 層類似の火山灰質土(5 a層・5 b層)の盛土がみられる。またこの層内及び下位に灰褐色火山灰(6層)がブロック状にみられた。

堆積土 壁際に褐色土、中央にレンズ状に黒色ないし黒褐色土があり、自然堆積である。

壁 やや上方に開きぎみに立ち上っている。

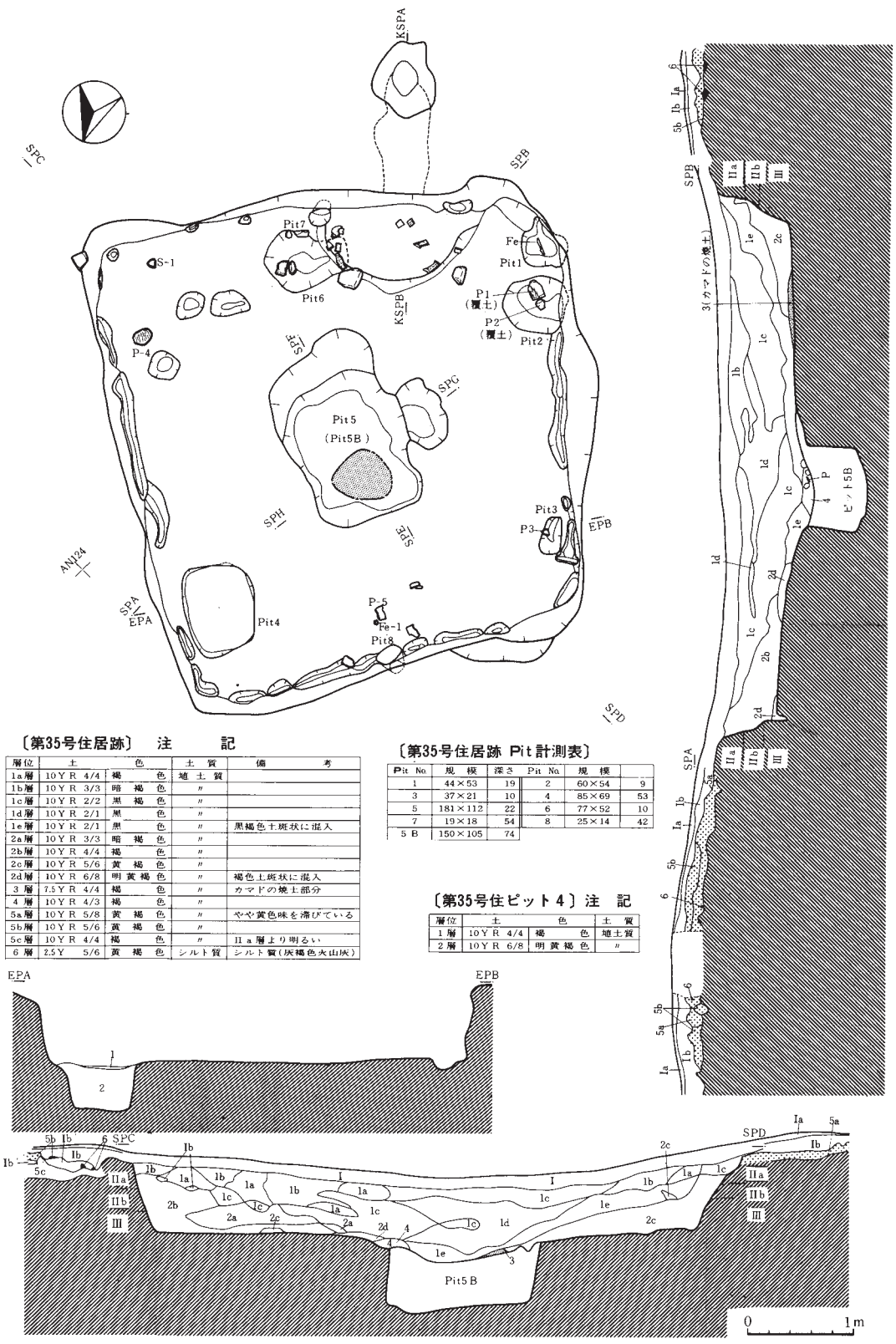
床 層を掘りこんで使用している。ピット5のある部分は、窪んでいて北西側は赤変している。

壁溝 北東・北西・南西の各壁に、幅10~15cm深さ3~8cmで断続的に検出した。

ピット ピットは、10個確認した。ピット7が柱穴と思われる。ピット4は覆土が 層類似の土で、埋められたものと思われる。ピット5は床面中央にあって緩く窪むもので、この下部には深いピット5 Bがある。ピット5 Bは 層類似の土が堆積し、上面は締って床のようであるが、このピットが本住居に伴うものであるかは不明である。

かまど トンネル式の煙道である。壁直下から壁外へ向かい下降していき、煙出しは急角度で立ち上がる。煙出しの周囲は、 層類似の火山灰質土粒(7層)で構築されている。煙出しの内部には甕形土師器の破片が多数出土した。燃烧部では礫、土師器破片及び土製支脚が出土した。底面は、火を受けて深さ15cmほどまで赤変していた。この部分の周囲には、深さ1~3cm浅いピットがとりまいていた。また、左側には、緩く落ちこむ大きいピットがあって、内部に土師器片や礫、粘土や鉄製品が含まれていた。

出土遺物 かまど燃烧部及びその周辺の崩落土の上に土師器甕の破片(5、10~12)や2個の土製支脚(22、23)などがあつた。崩落土の下からも甕や刃子が出土した。床面からは甕のほか、鉄製紡錘車が北西壁際から出土した(14、2)。東隅の床面直上からは須恵器壺の破片が出土した(21)。南壁際の覆土中床上10cmほどの所からは2個体の完形の甕が口縁を向かいあわせて出土した(6)。かまど煙出し内部からもかなりの土師器壺の破片(15)が出土した。ピット5上面の床には礫が多数あつて、中には焼けたように黒く変色しているものもみられた。ピット5 B覆土内からは甕(20)のほか、手づくね(1)や製塩土器と思われるもの(20)や刃子(底上10cm、3)が出土した。底面からは紡錘車の一部と思われる鉄製品が出土した。またピット1・6内からも小型の蜜が出土した(4)。(坂本)



【第35号住居跡】注記

層位	土色	土質	備考
1a層	10 Y R 4/4 褐褐色	埴土質	
1b層	10 Y R 3/3 暗褐色	n	
1c層	10 Y R 2/2 黒褐色	n	
1d層	10 Y R 2/1 黒色	n	
1e層	10 Y R 2/1 黒色	n	黒褐色土斑状に混入
2a層	10 Y R 3/3 暗褐色	n	
2b層	10 Y R 4/4 褐褐色	n	
2c層	10 Y R 5/6 黄褐色	n	
2d層	10 Y R 6/8 明黄褐色	n	褐色土斑状に混入
3層	7.5 Y R 4/4 褐色	n	カマドの焼土部分
4層	10 Y R 4/3 褐色	n	
5a層	10 Y R 5/8 黄褐色	n	やや黄色味を帯びている
5b層	10 Y R 5/6 黄褐色	n	
5c層	10 Y R 4/4 褐褐色	n	II a層より明るい
6層	2.5 Y 5/6 黄褐色	シルト質	シルト質(灰褐色火山灰)

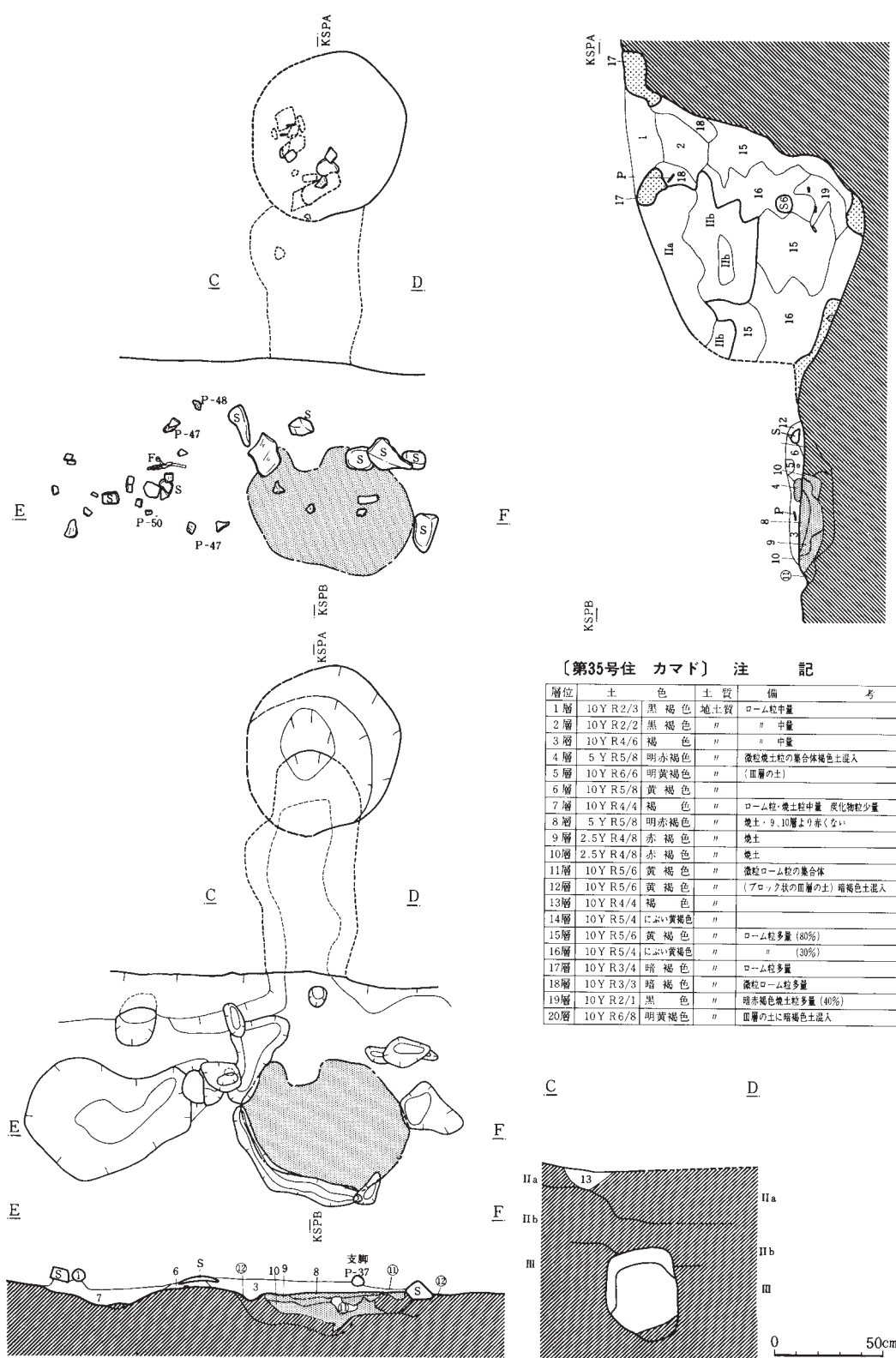
【第35号住居跡 Pit 計測表】

Pit No.	規模	深さ	Pit No.	規模	深さ
1	44×53	19	2	60×54	9
3	37×21	10	4	85×69	53
5	184×112	22	6	77×52	10
7	19×18	54	8	25×14	42
5 B	150×105	74			

【第35号住居跡ピット4】注記

層位	土色	土質
1層	10 Y R 4/4 褐褐色	埴土質
2層	10 Y R 6/8 明黄褐色	n

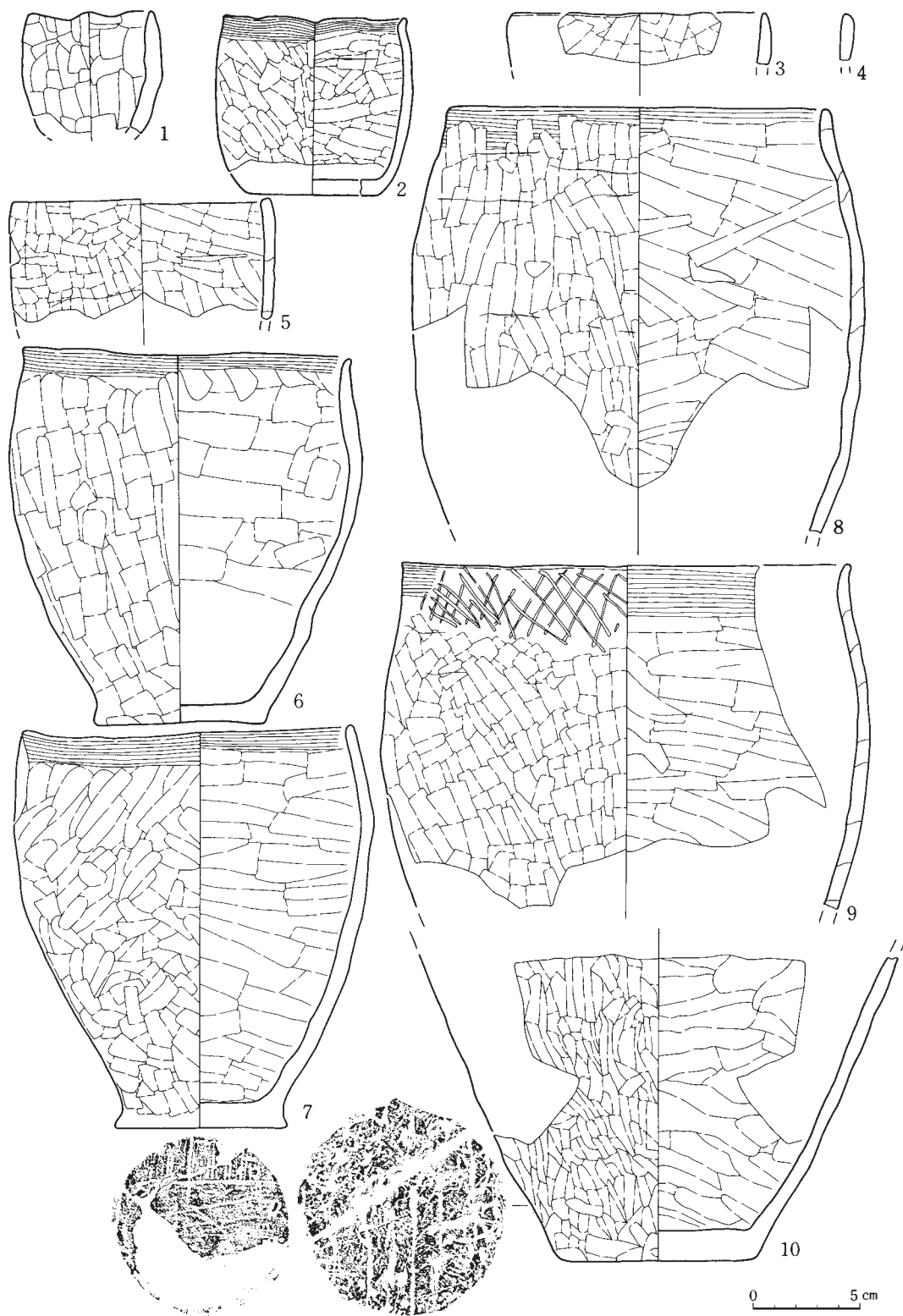
第190図 第35号住居跡実測図



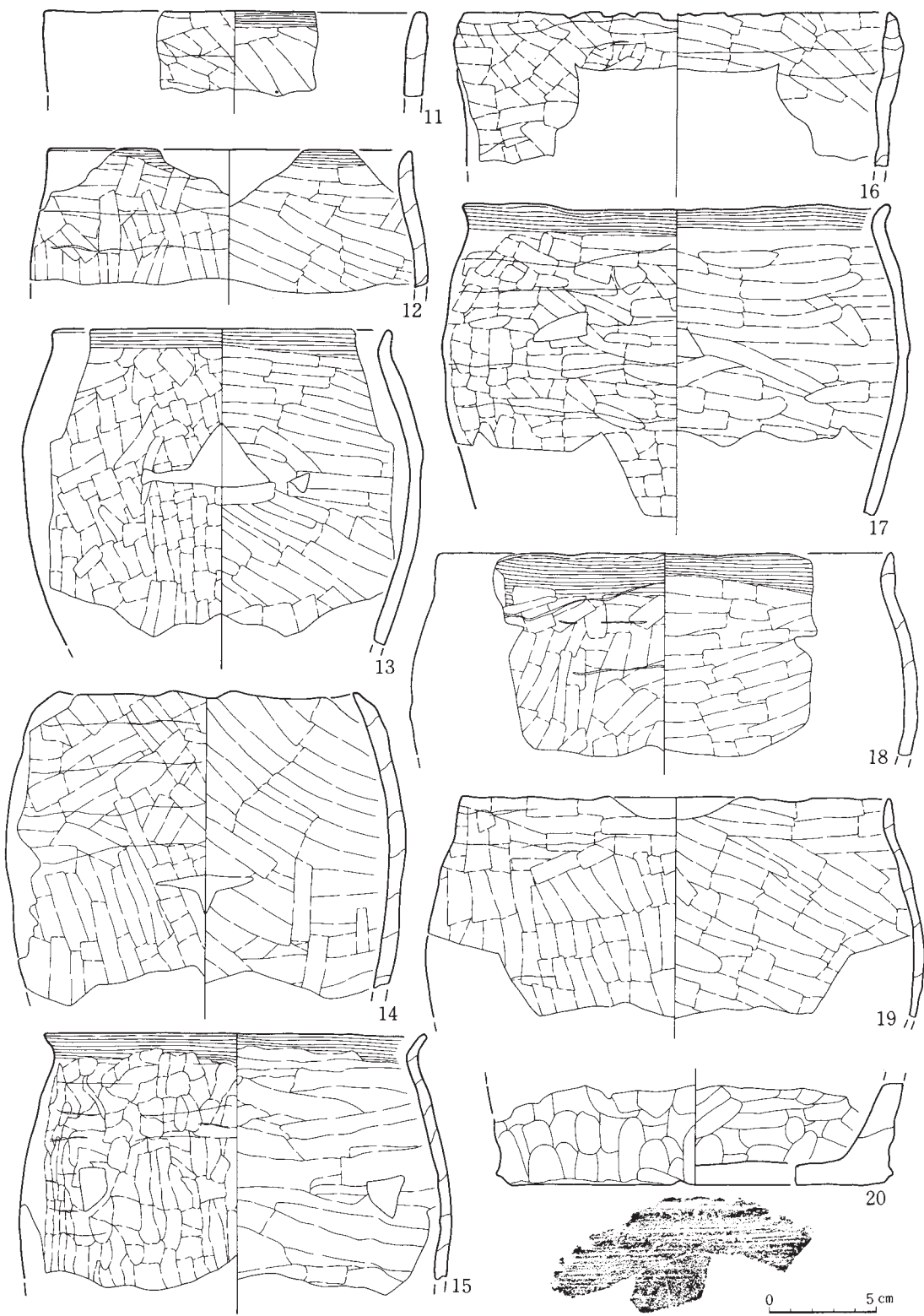
〔第35号住 カマド〕 注 記

層位	土 色	土 質	備 考
1層	10Y R2/3 黒褐色	粘土質	ローム粒中量
2層	10Y R2/2 黒褐色	"	" 中量
3層	10Y R4/6 褐色	"	" 中量
4層	5 Y R5/8 明赤褐色	"	微粒焼土粒の集合体褐色土混入
5層	10Y R6/6 明黄褐色	"	(田層の土)
6層	10Y R5/8 黄褐色	"	"
7層	10Y R4/4 褐色	"	ローム粒・焼土粒中量 炭化物粒少量
8層	5 Y R5/8 明赤褐色	"	焼土・9、10層より赤くない
9層	2.5Y R4/8 赤褐色	"	焼土
10層	2.5Y R4/8 赤褐色	"	焼土
11層	10Y R5/6 黄褐色	"	微粒ローム粒の集合体
12層	10Y R5/6 黄褐色	"	(ブロッコ状の田層の土) 暗褐色土混入
13層	10Y R4/4 褐色	"	"
14層	10Y R5/4 にぶい黄褐色	"	"
15層	10Y R5/6 黄褐色	"	ローム粒多量 (80%)
16層	10Y R5/4 にぶい黄褐色	"	" (30%)
17層	10Y R3/4 暗褐色	"	ローム粒多量
18層	10Y R3/3 暗褐色	"	微粒ローム粒多量
19層	10Y R2/1 黒色	"	暗赤褐色焼土粒多量 (40%)
20層	10Y R6/8 明黄褐色	"	田層の土に暗褐色土混入

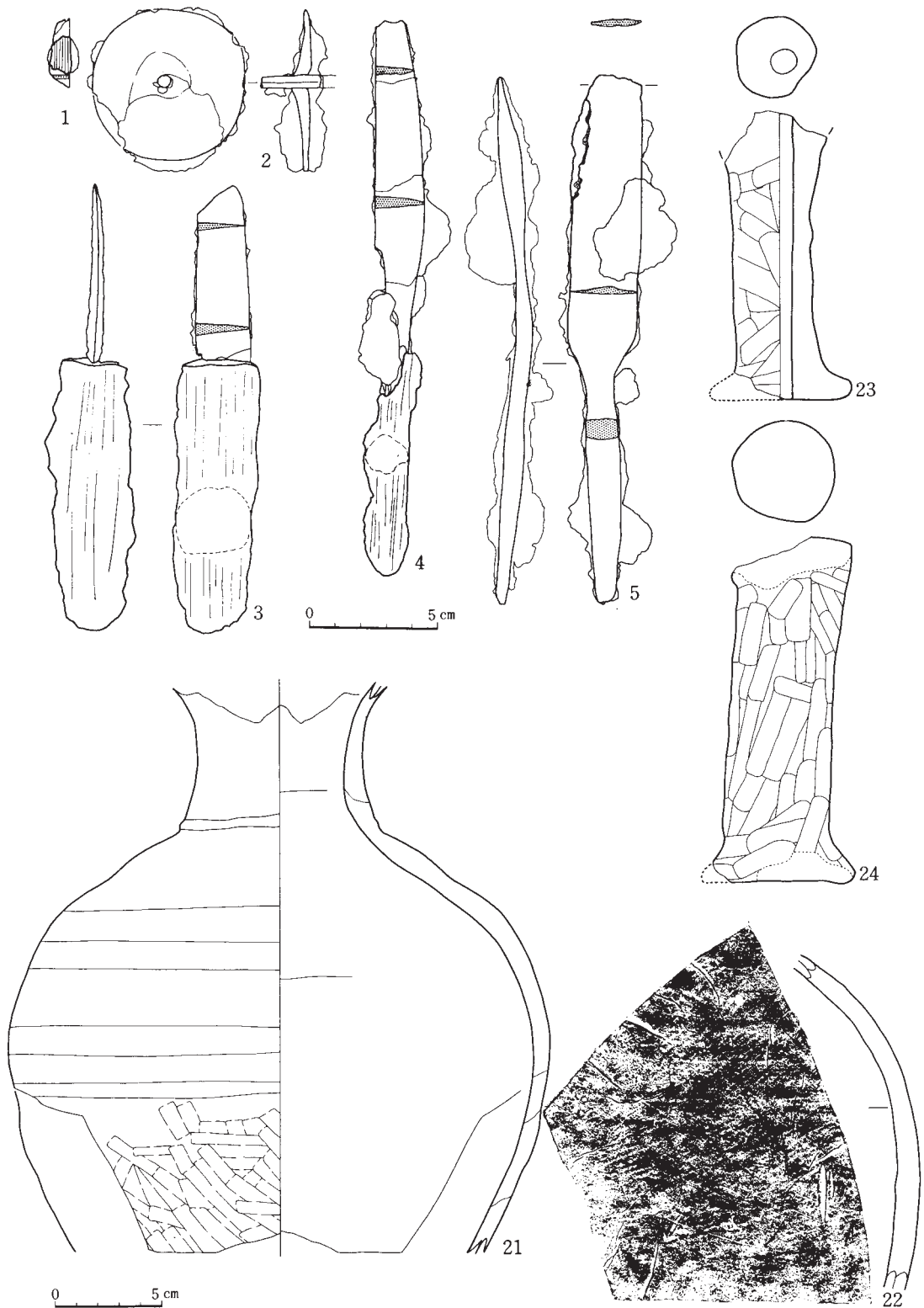
第191図 第35号住居跡かまど実測図



第192图 第35号住居跡出土遺物実測図(1)



第193图 第35号住居跡出土遺物実測図(2)



第194图 第35号住居跡出土遺物実測図(3)

第68表 第35号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	種類	器種	器部	法量(cm)			調整			胎土	焼成	色調	備考	出土位置
				口径	底径	器高	口縁部	胴部	底辺部					
1	土師器	手捏	口縁	5.8						細砂粒多量混入	良好で堅い	7.5YR5/2 6/2		ビット5 P-25・14 1層P-23
2	"	"	"	(8.6)	(6)	(9)	横ナデ 横ナデ	ケズリ		1mm大砂粒若干含む	良好	7.5YR3/1 8/3	外面煤状炭化物	覆土 ビット1の上面
3	"	小型甕	"	(12)			ヘラナデ ヘラナデ	ヘラナデ ヘラナデ		細砂粒多量混入	"	10YR6/2 5/2		ビット6 覆土
4	"	甕	"				"	"				10YR6/2 5/2		ビット6 覆土
5	"	"	"	(12)			"	"		砂粒多、石英粒若干含む	良好	7.5YR6/3 5/2		カマドP-36
6	"	"	"	14~ 15.7			横ナデ 横ナデ	"	ヘラナデ ヘラナデ	3mm大砂粒多 石英粒も若干	"	10YR7/4 2.5YR7/4		P-1 2層
7	"	"	"	(15.5)	8	19	"	ケズリ ヘラナデ		2×1mm大の砂粒含む 良質粘土	"	2.5YR7/1 7/3	外面煤状炭化物	覆土
8	"	"	"	(18)			"	ヘラナデ ヘラナデ		砂粒多 石英粒若干 良質粘土	"	7.5YR6/6 2/1 10YR7/3 3/1	巻上げ痕	煙道 P-50, P-40
9	"	"	"	(21)			"	"		砂粒多 石英粒若干	"	5YR7/4 2.5YR6/4	口縁部に格子状に罫書がある	覆土 カマドP-44 43 38
10	"	"	底面		9			"	ケズリ ヘラナデ	2mm大砂粒混入	"	7.5YR8/3 5YR5/6	底面木葉痕	カマド
11	"	"	口縁	(18)			ヘラナデ	"		細砂粒多量混入	"	7.5YR7/6 5YR6/6		カマドP-46
12	"	"	"	(17)			"	"		細砂粒多 石英粒若干	"	7.5YR6/3 7/2	煤状炭化物付着	カマドP-46
13	"	"	"	(16)			横ナデ	"		3mm大の砂粒多量、石英粒若干含む粗	"	10YR5/4 5/3 5YR3/1		煙道
14	"	"	"	(14)			ヘラナデ ヘラナデ	"		細砂粒 石英粒若干	"	5YR6/3 7.5YR7/4	外面と内面口縁に煤状炭化物	床直P-6
15	"	"	"	(18)			横ナデ 横ナデ	ケズリ ヘラナデ		砂礫を含 良質粘土	"	7.5YR3/4 5/4		カマド煙出P-40、ビット5B、覆土、煙道P-50
16	"	"	"	(20)			ヘラナデ ヘラナデ	ヘラナデ ヘラナデ		細砂粒多 石英粒若干	"	7.5YR6/3 6/3		カマド 煙出P-40
17	"	"	"	(20)			横ナデ 横ナデ	"		砂粒多少含むが密	"	10YR6/3 5/2	煤状炭化物	カマドP-33 床P-4
18	"	"	"	(21.2)			"	"		細砂粒 石英粒多	"	2.5YR6/6 7/6		カマドP-42 覆土
19	"	"	"	(20)			ヘラナデ 横ナデ	ケズリ ヘラナデ		2mm大の砂粒多	"			カマド 煙道P-40
20	"	"	底面	(17.6)				"	ケズリ	細砂粒と石英粒多量	"	5YR7/4 2.5YR7/4		ビット5B 覆土 床直P-7
21	須恵器	壺	胴部					下部 ヘラナデ		1mm以下の砂粒を微量に含	良好で堅い	5BG4/1 10BG5/1		2層 AN-125・126 II a層P-1
22	土製器	支脚	胴径	3.6				ケズリ		1mm以下の砂粒を多量に含	良好	10YR8/3		カマドP-35
23	"	"	胴径	4.8				"		1mm以下の砂粒(少) 石英粒(微)	良好で堅い	5YR6/4		カマドP-37

第69表 第35号住居跡出土鉄製品計測表

挿図番号	図版番号	種類	法量(cm)					出土地点(層位)	備考
1		刀子	刃部長 (2.68)	背部厚 0.12				カマド外Fe-4	
2		紡錘車	径 6.02	厚 0.46	軸長 2.64	軸幅 0.54		床Fe-1	
3		刀子	全長 (17.1)	刃部長 (6.9)	関長 0.5	背部厚 0.5		ビット5Bフク土	
4		刀子	(21.8)	(9.1)		0.52	0.56	カマド外Fe-5	
5		やりがんな?	20.8	10.2	1.8	0.25	0.70	ビット1覆土Fe-3	

第36号住居跡（第195図、第196図）

位置と確認 A K - 132・133、A J - 132・133から深さ約50cmの浅皿状の窪みを確認した。

平面形と規模

平面形	主 軸	規 模								面積(m ²)
		壁 長 (m)				壁 高 (cm)				
方 形	S-8°-E	南	西	北	東	南	西	北	東	10.59
		3.5	3.2	3.6	3.3	55	72	52	60	

堆積土 7層に分層できた。大別すると黒色土・黒褐色土・暗褐色土・褐色土並びに赤褐色土（第7層・焼土）で、中央部分が黒色土及び黒褐色土で、壁際は黒褐色土・暗褐色土・褐色土である。床面及び床直上に炭化材及び焼土が散在している状況から焼失したものと思われる。また竪穴外の北壁・西壁周辺に盛土がみられる。

壁 中央部分まで第7層のため壁中央ぐらゐまで軟弱である。立ち上がりは、東壁が直角に近いが、それ以外の壁は緩い。

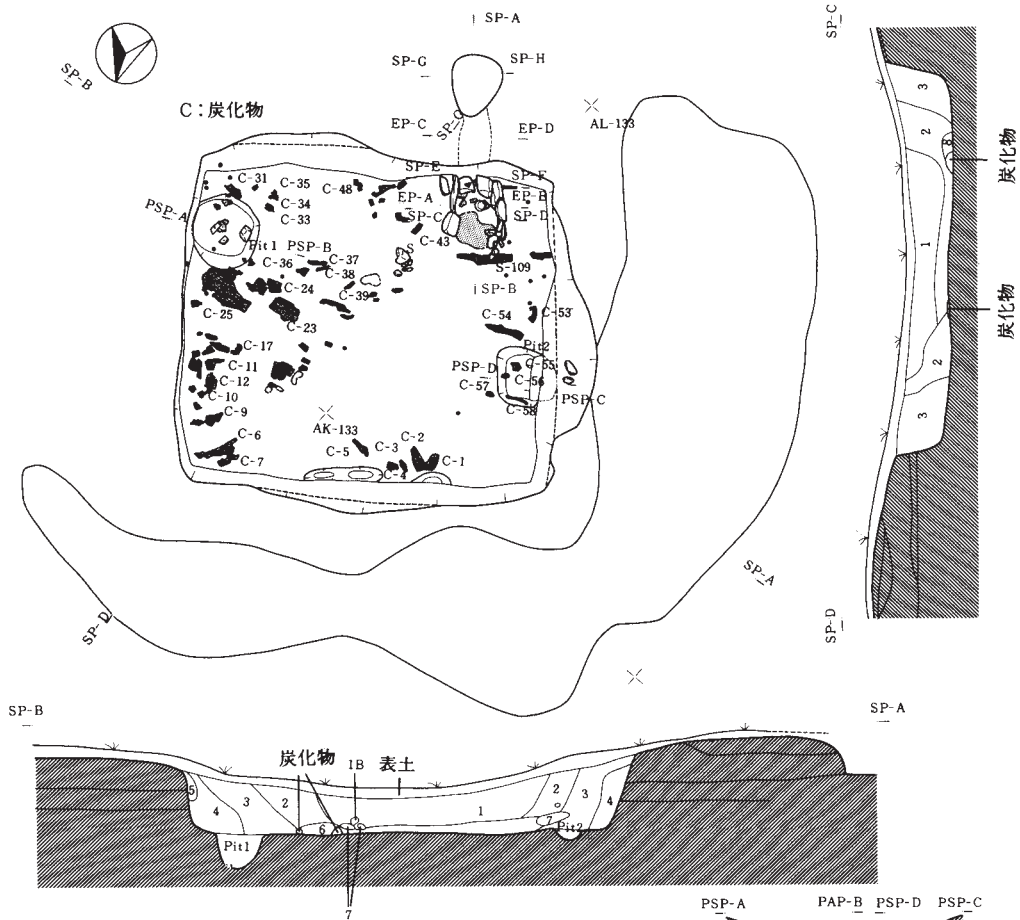
床 かまど周辺は、非常に堅く締っているが、ほかはやや軟らかい。

堅溝 北壁の一部の壁下にみられる。幅（上端）は12～14cmで、深さは5～6cmである。

ピット 東壁の南寄り及び西壁の北寄りからそれぞれ1個検出した。柱穴とみられるピットは検出できなかった。

かまど 南壁の西隅に近い部分に構築され、かまど本体部分も煙道も良好な状態で残存していた。本体部分の骨材として、厚さ8～14cmのシルト岩が使用され、シルト岩で囲まれた部分は、全長75cm・幅40～45cm・高さ20～30cmである。天井部分は、奥部にシルト岩が残存しているだけであった。焼土は不整な平面形をしており、断面形は最大深9cmの浅皿状である。焼土部分よりやや奥まった部分に支脚が残存していた。この支脚は、小型甕形土師器（第197図4）を倒立させたものである。煙道は、トンネル式でトンネル部分は、底面に若干起伏はあるが、ほぼ水平に構築され、長さが110cmで、断面形が40×30cmの楕円形を呈している。煙出孔は平面形が60×50cmの卵形で、長さは65cmである。

出土遺物 かまどの支脚として使用されていた土師器（第197図4）のほか、煙道底面から出土した土師器（第197図7）、床面からは、第197図3、堆積土中から出土した第197図9などの土師器及び第197図1のような壺形須恵器がある。pit-1の堆積土上部からほぼ完形の土師器（第197図8）のほか、pit-1内からは多数の土師器（第197図5）が出土している。また床直上から多くの炭化材が出土しているが、形状のわかるものはない。（成田）



〔第36号住〕 注 記

層位	土 色	土 質	備 考
1層	10Y R 1.1/1	黒 色 シルト質	ローム粒、炭化物混入
2層	10Y R 2/2	黒 褐色 シルト質	ローム粒、炭化物混入
3層	10Y R 3/3	暗 褐色 シルト質	ローム粒、炭化物混入
4層	10Y R 4/4	褐 色 シルト質	炭化物混入
5層	10Y R 4/4	褐 色 シルト質	炭化物混入
6層	10Y R 2/2	黒 褐色 シルト質	炭化物混入
7層	2.5Y R 4/8	赤 褐色	焼土
8層	2.5Y R 5/6	黄 褐色	ローム質 炭化物、ローム粒混入

〔第36号住Pit 1〕 注 記

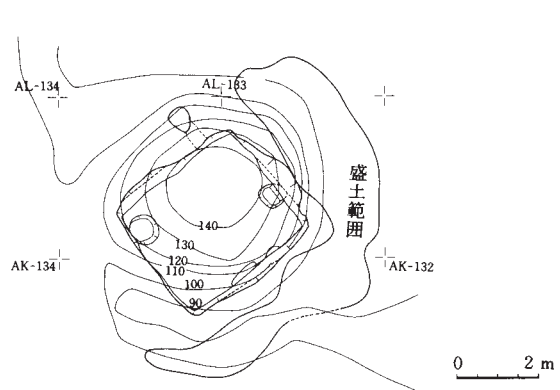
層位	土 色	土 質	備 考
1層	10Y R 2/3	黒 褐色 シルト質	焼土粒、炭化物、ローム粒混入
2層	7.5Y R 2/2	黒 褐色 シルト質	焼土粒多量、ローム粒混入
3層	10Y R 4/4	褐 色 シルト質	ローム粒多量混入
4層	10Y R 5/8	黄 褐色	ローム質 ローム粒多量、炭化物混入

〔第36号Pit 2〕 注 記

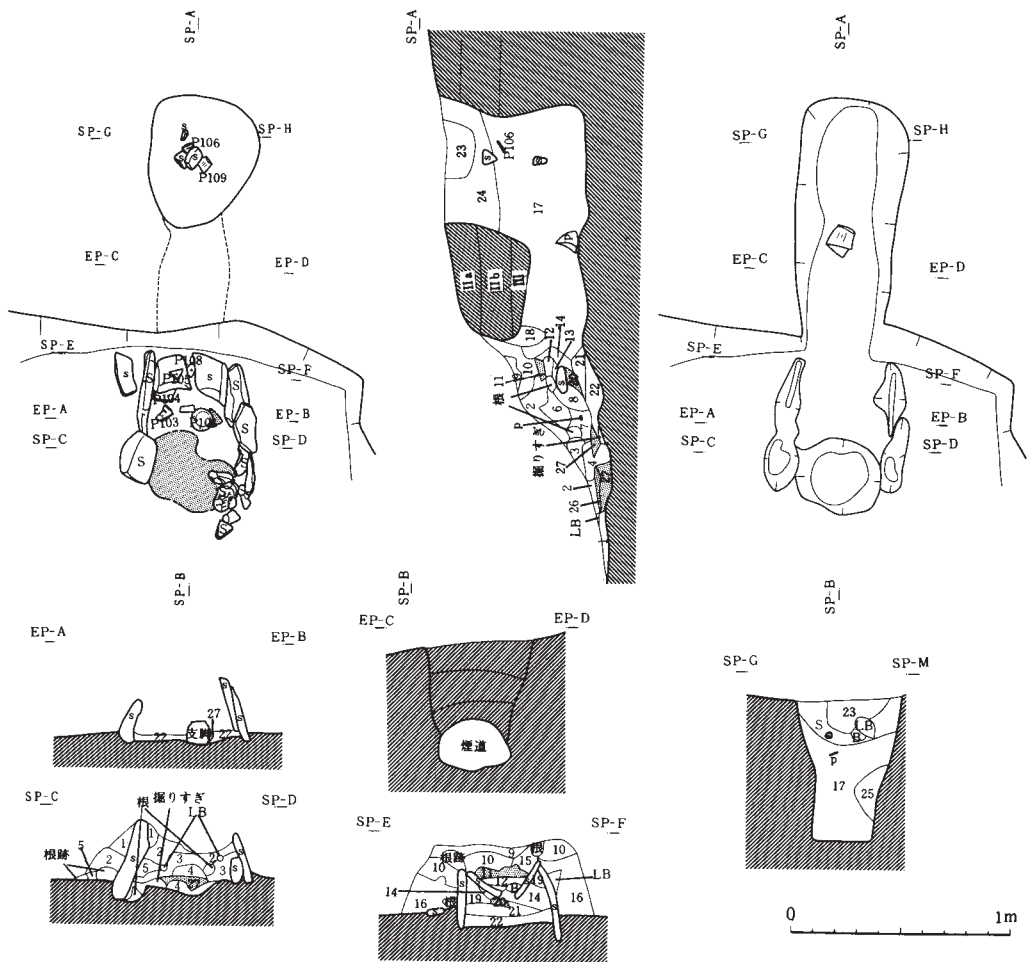
層位	土 色	土 質	備 考
1層	10Y R 4/6	褐 色 シルト質	ロームブロック、炭化物混入
2層	10Y R 5/8	黄 褐色	ローム質 ローム粒混入

〔第36号住居跡Pit計測表〕

Pit No.	規 模	深 さ	Pit No.	規 模	深 さ
1	66×74	48	2	44×60	32



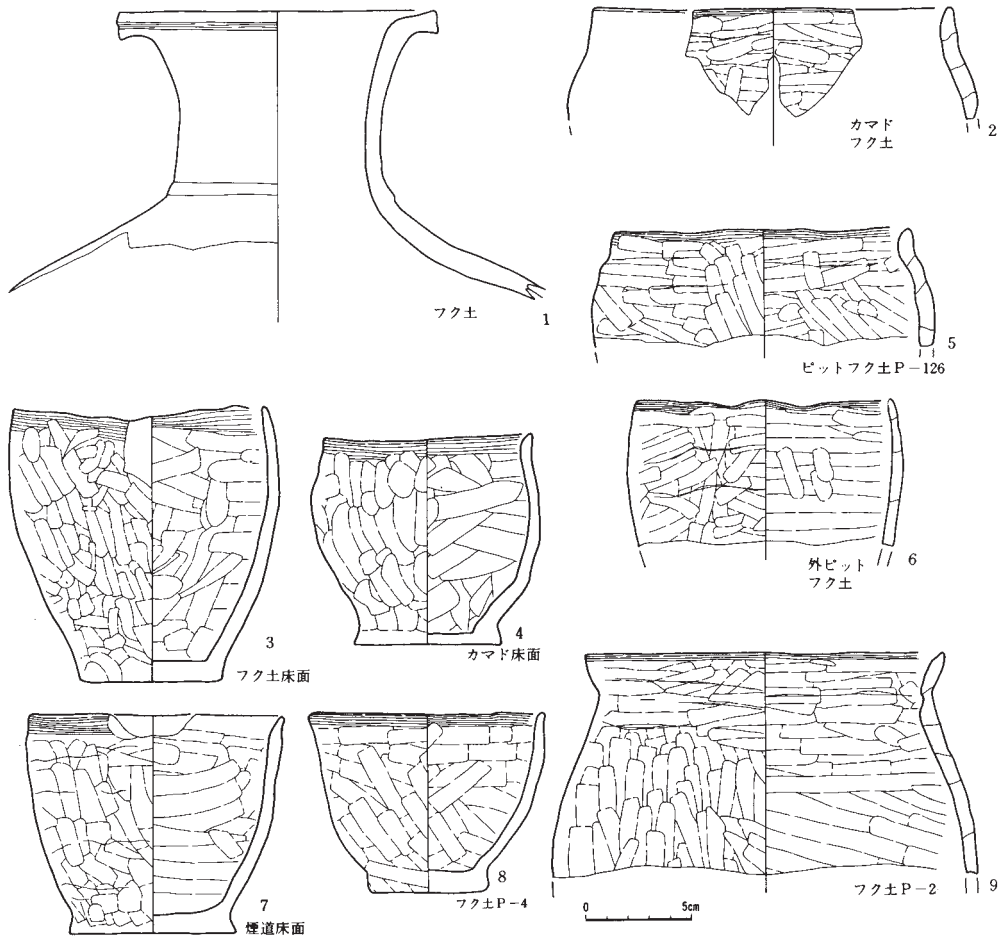
第195図 第36号住居跡・確認状況実測図



〔第36号住カマド〕 注 記

層位	土色	土質	備考	層位	土色	土質	備考		
1層	10Y R 2/2	黒褐色	シルト質	焼土粒、炭化物混入	15層	10Y R 3/3	暗褐色	シルト質	ローム粒、焼土粒混入
2層	10Y R 2/3	黒褐色	シルト質	炭化物混入	16層	10Y R 3/3	暗褐色	シルト質	炭化物、焼土粒混入
3層	10Y R 3/3	暗褐色	シルト質	焼土粒多量、炭化物混入	17層	10Y R 4/4	褐色	シルト質	ローム粒、炭化物混入
4層	10Y R 5/6	黄褐色	ローム質	焼土混入	18層	10Y R 3/4	暗褐色	シルト質	焼土粒、炭化物混入
5層	10Y R 4/4	褐色	シルト質	焼土粒、炭化物、焼土若干混入	19層	10Y R 4/4	褐色	シルト質	焼土粒混入
6層	2.5Y R 4/6	ネリブ褐色		火山灰、焼土粒、炭化物、暗褐色ブロック混入	20層	5 Y R 4/8	赤褐色		焼土
7層	10Y R 3/3	暗褐色	シルト質	焼土粒、炭化物多量混入	21層	10Y R 4/6	褐色	シルト質	焼土ブロック、ローム粒混入
8層	10Y R 3/4	暗褐色	シルト質	焼土粒、炭化物混入	22層	10Y R 3/4	暗褐色	シルト質	焼土粒、ローム粒混入
9層	10Y R 2/3	黒褐色	シルト質	焼土粒、炭化物混入	23層	10Y R 2/2	黒褐色	シルト質	焼土粒、ローム粒混入
10層	10Y R 3/3	暗褐色	シルト質	焼土粒多量、炭化物、焼土ブロック混入	24層	10Y R 2/3	黒褐色	シルト質	焼土粒、暗褐色土混入
11層	5 Y R 4/6	赤褐色		焼土、ローム粒、炭化物混入	25層	10Y R 4/6	褐色	シルト質	暗褐色土混入
12層	10Y R 3/4	暗褐色	シルト質	ローム粒多量混入	26層	5 Y R 2/3	極暗赤褐色		焼土粒多量混入
13層	10Y R 5/8	黄褐色	ローム質	混入物なし	27層	2.5Y R 4/8	赤褐色		焼土
14層	10Y R 3/4	暗褐色	シルト質	焼土粒、炭化物多量に混入	28層	10Y R 4/6	褐色	シルト質	ローム粒混入

第196図 第36号住居跡かまど実測図



第197図 第36号住居跡出土土器実測図

第70表 第36号住居跡出土土器観察表

遺番	物号	種類	器種	器部	法量 (cm)			調整			胎土 (mm)	焼成	色調	備考	出土位置
					口径	底径	器高	口縁部	胴部	底辺部					
1		須恵器	壺	口縁 胴	(15)	—	—	ロクロ	ロクロ	—	良・堅	N 41 N 51		フク土	
2		土師器	甕形	口縁 胴	(17)	—	—	強い ヘラナデ	ヘラナデ	—	初良好	7.5Y R6/4 7.5Y R6/6		カマド フク土	
3		土師器	甕形	半完形	11.7 ↓ 12	6.5	13	”	強い ヘラナデ	強い ヘラナデ	”	7.5Y R7/6 7.5Y R7/3		フク土・床直 P2,5,25,27	
4		土師器	甕形	完形	10.3	6.8 ↓ 7	9.7 ↓ 10	強い ヘラナデ	ヘラナデ	強い ユビナデ	”	7.5Y R6/6 7.5Y R7/3	内外 煤 炭	P101 カマド 底面	
5		土師器	小型甕	口縁 胴	14	—	—	”	”	—	不良	7.5Y R7/3 7.5Y R6/4		フク土P126	
6		土師器	小型甕	口縁 胴	(12)	—	—	”	”	—	良好	5Y R6/2 5Y R6/3		外ビット フク土	
7		土師器	小型甕	半完形	11.5 ↓ 12.5	7.5 ↓ 8	10.5	”	ヘラナデ	強い ヘラナデ	不良	7.5Y R6/3 7.5Y R6/4	変もろい	煙道底面 P107	
8		土師器	小型甕	完形	11.2	5.3	8.5	”	”	”	良好	7.5Y R6/4 7.5Y R5/3		フク土P4	
9		土師器	甕形	口縁 胴	17	—	—	”	”	—	”	7.5Y R6/2 7.5Y R5/1		フク土P2	

*胎土の砂は砂粒の略

第37号住居跡（第198図、第199図）

位置と確認 A N - 120・130、A D - 120・130～深さ約50cmの浅皿状の窪みを確認した。

平面形と規模

平面形	主 軸	規 模								
		壁 長 (m)				壁 高 (cm)				面積(m ²)
方 形	S-22.5°-E	南	西	北	東	南	西	北	東	
		3.7	3.3	3.7	3.4	70	80	85	70	

堆積土 8層に分層できたが大別すると、黒色土・黒褐色土・褐色土・黄褐色土である。黒色土と黒褐色土は中央部分に、褐色土と黄褐色土は壁際に堆積していた。その堆積状況は自然的である。

壁 下部付近まで第 a・b層のため軟弱で脆い。立ち上がりは、各壁ともやや緩やかである。

床 中央部分が多少窪んでいるが、ほかは平坦で堅く締っている。

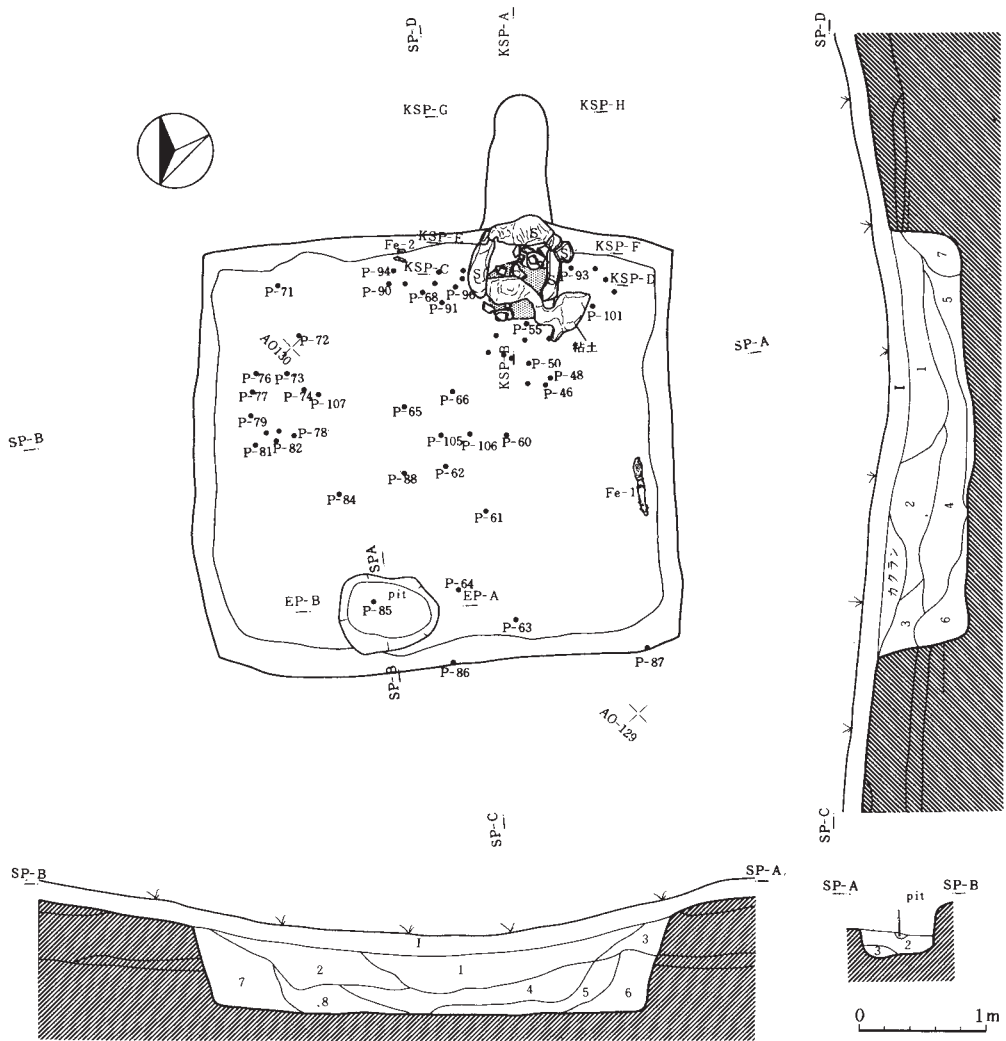
壁溝 確認できなかった。

ピット 北壁沿いに不整長方形のピットを検出した。上端が長辺78cm、短辺30cm、下端が長辺65cm、短辺40cmで、深さ16～22cmである。柱穴は検出できなかった。

かまど 南壁西寄りに構築され、両袖が残存していた。袖部は、厚さ約10～15cmのシルト岩が骨材として使用している。天井部は部分的ではあるが、シルト岩及び粘土が残存しており、シルト岩を骨材として粘土を貼って構築されたものと思われる。焼土範囲は、55×45cmのほぼ楕円形で、深さは、最深部分が8cmで断面形は浅皿状である。煙道は第9～11層及び第5層の褐色土及び暗褐色土の堆積状況を第5層上面に粘土がブロック状に貼られた状態で見られることから造り替えがあったものと思われる。当初、トンネル式煙道かどうかは断定できなかったが、かまど本体部分からほぼ水平に掘り込み、煙出孔へ続く形態のもので、これを埋め戻してかまど本体部分から煙出孔へほぼ直線的に続く形態の煙道にしたものと思われる。いずれにしても、煙道の天井部と煙出の施設は残存していない。

出土遺物 かまど内及び周辺出土の遺物は第200図1～5で、床面出土の遺物は、西壁際から直刀（第201図1）、南壁際から刀子（第201図2・3）が出土したほか、第200図7～9のような須恵器が出土した。また、住居跡覆土からは第200図6のような土師器が出土した。

（成田）



〔第37号住〕 注 記

層位	土 色	土 質	備 考
1層	10Y R 2/1 黒 色	シルト質	混入物なし
2層	10Y R 2/3 黒 褐色	シルト質	炭化物褐色土粒若干混入
3層	10Y R 4/6 褐 色	シルト質	黒褐色土若干混入
4層	10Y R1.7/1 黒 色	シルト質	褐色土粒若干混入
5層	10Y R 2/2 黒 褐色	シルト質	褐色土粒若干混入
6層	10Y R 5/6 黄 褐色	ローム質	黒色土若干混入
7層	10Y R 4/6 褐 色	シルト質	混入物なし
8層	10Y R 3/2 黒 褐色	シルト質	ローム粒若干混入

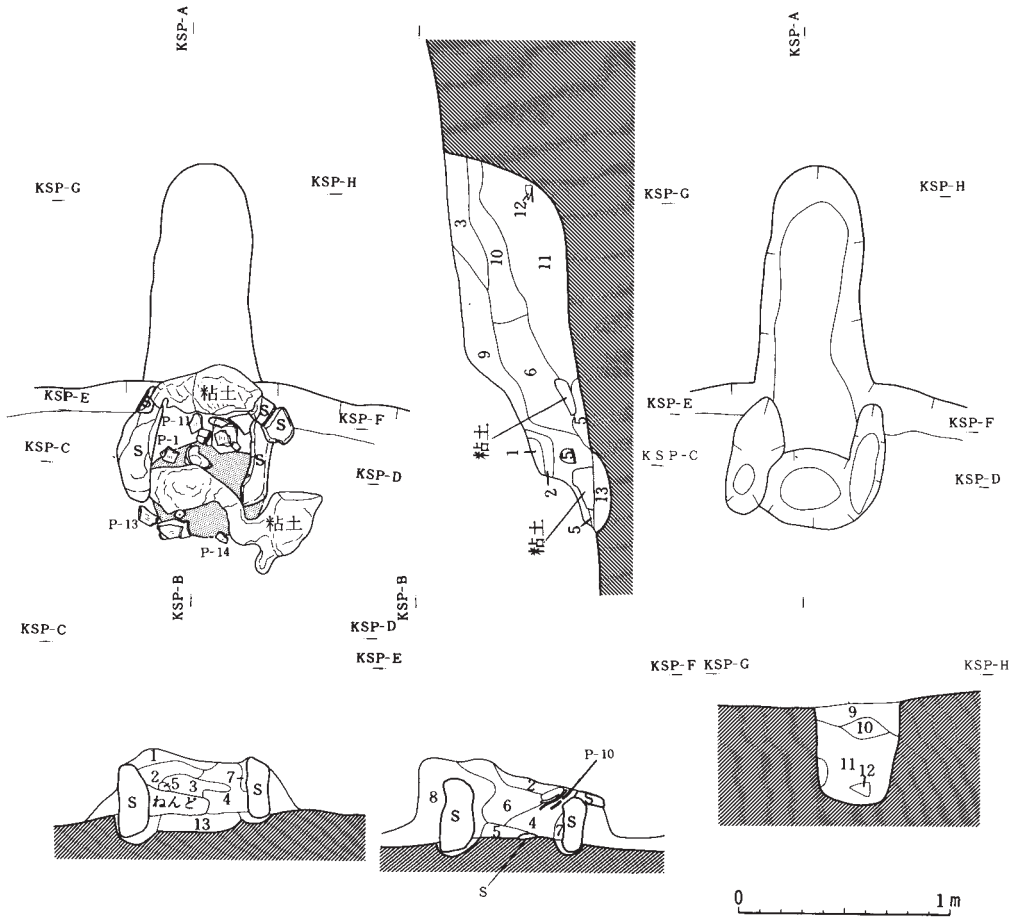
〔第37号住pit 1〕 注 記

層位	土 色	土 質	備 考
1層	10Y R 5/6 黄 褐色	ローム質	褐色土若干混入
2層	10Y R 3/4 暗 褐色	シルト質	褐色土混入
3層	10Y R 5/6 黄 褐色	ローム質	混入物なし

〔第37号住居跡
pit計測表〕

Pit No	規 模	深 さ
1	58×68	22

第198図 第37号住居跡実測図



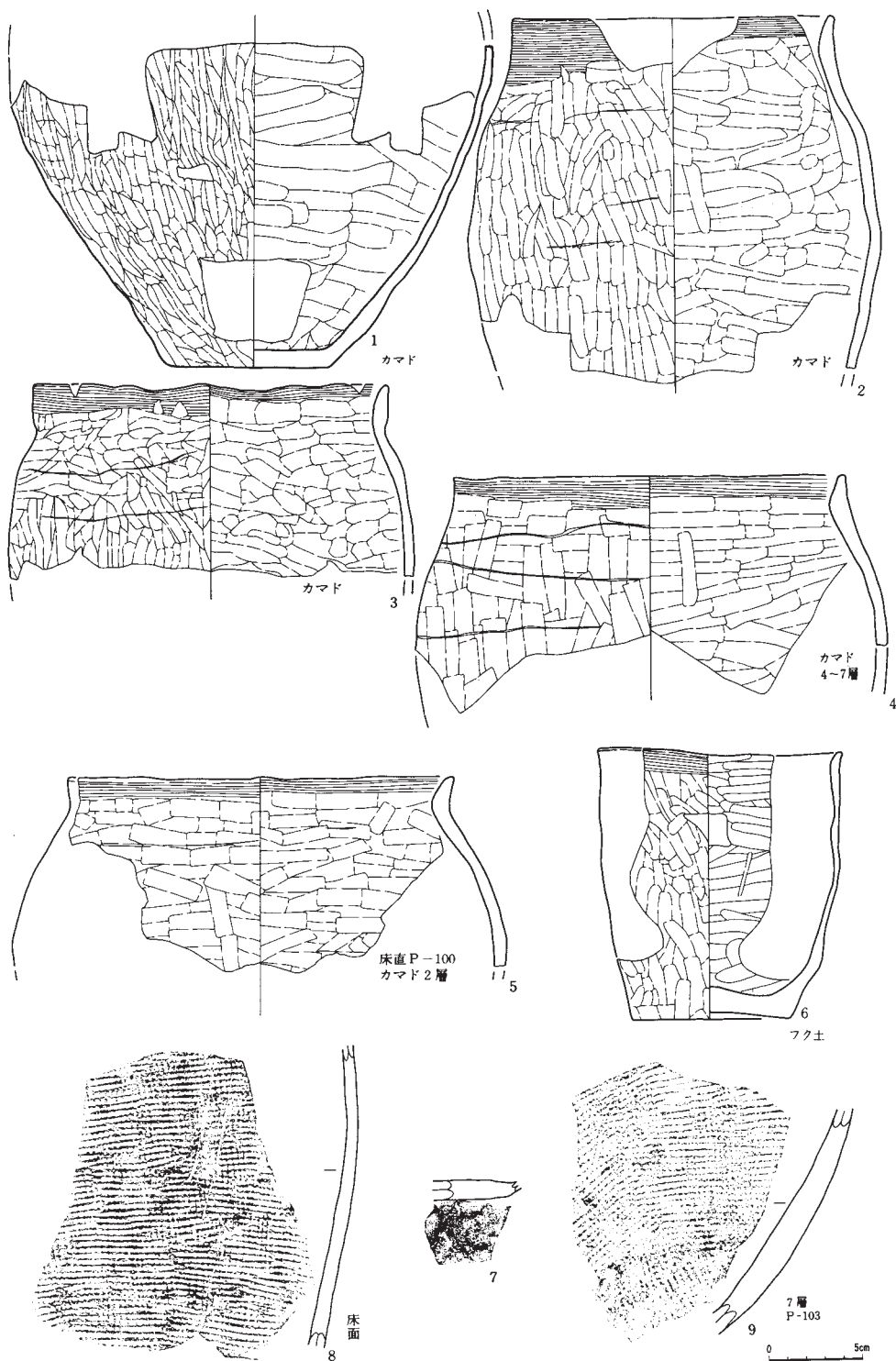
【第37号住カマド】 注 記

層位	土 色	土 質	備 考
1層	10Y R 2/3 黒 褐色	シルト質	褐色土若干混入
2層	10Y R 3/3 暗 褐色	シルト質	褐色土粒少量あり
3層	10Y R 2/3 黒 褐色	シルト質	褐色土粒若干混入
4層	10Y R 3/4 暗 褐色	シルト質	焼土粒少量混入
5層	10Y R 3/4 暗 褐色	シルト質	焼土粒混入
6層	10Y R 3/2 黒 褐色	シルト質	褐色土焼若干混入
7層	10Y R 3/4 暗 褐色	シルト質	焼土粒若干混入

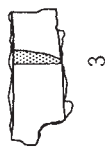
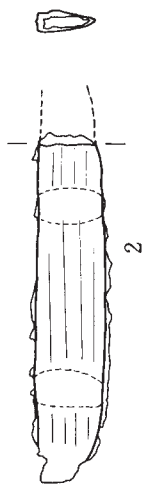
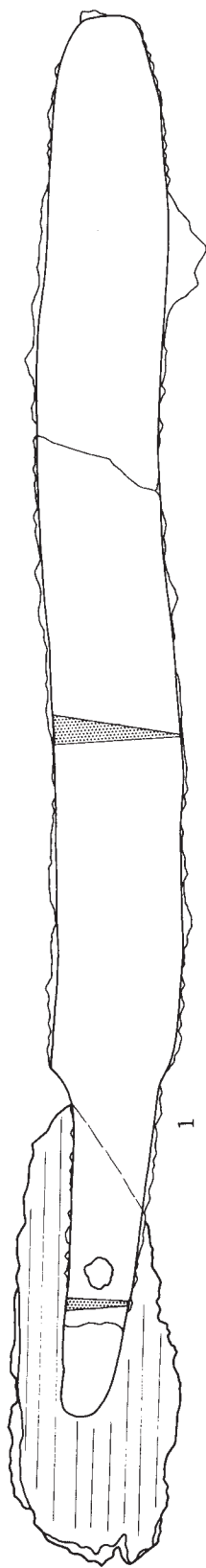
【第37号住カマド】 注 記

層位	土 色	土 質	備 考
8層	10Y R 3/3 暗 褐色	シルト質	褐色土若干、黒褐色土少量混入
9層	10Y R 3/4 暗 褐色	シルト質	褐色土粒若干混入
10層	10Y R 4/4 褐 色	シルト質	ローム粒若干混入
11層	10Y R 4/6 褐 色	シルト質	黒色土若干混入
12層	10Y R 2/3 黒 褐色	シルト質	黒色土混入
13層	2.5Y R 5/8 明赤褐色		焼土

第199図 第37号住居跡かまど実測図



第200図 第37号住居跡出土土器実測図



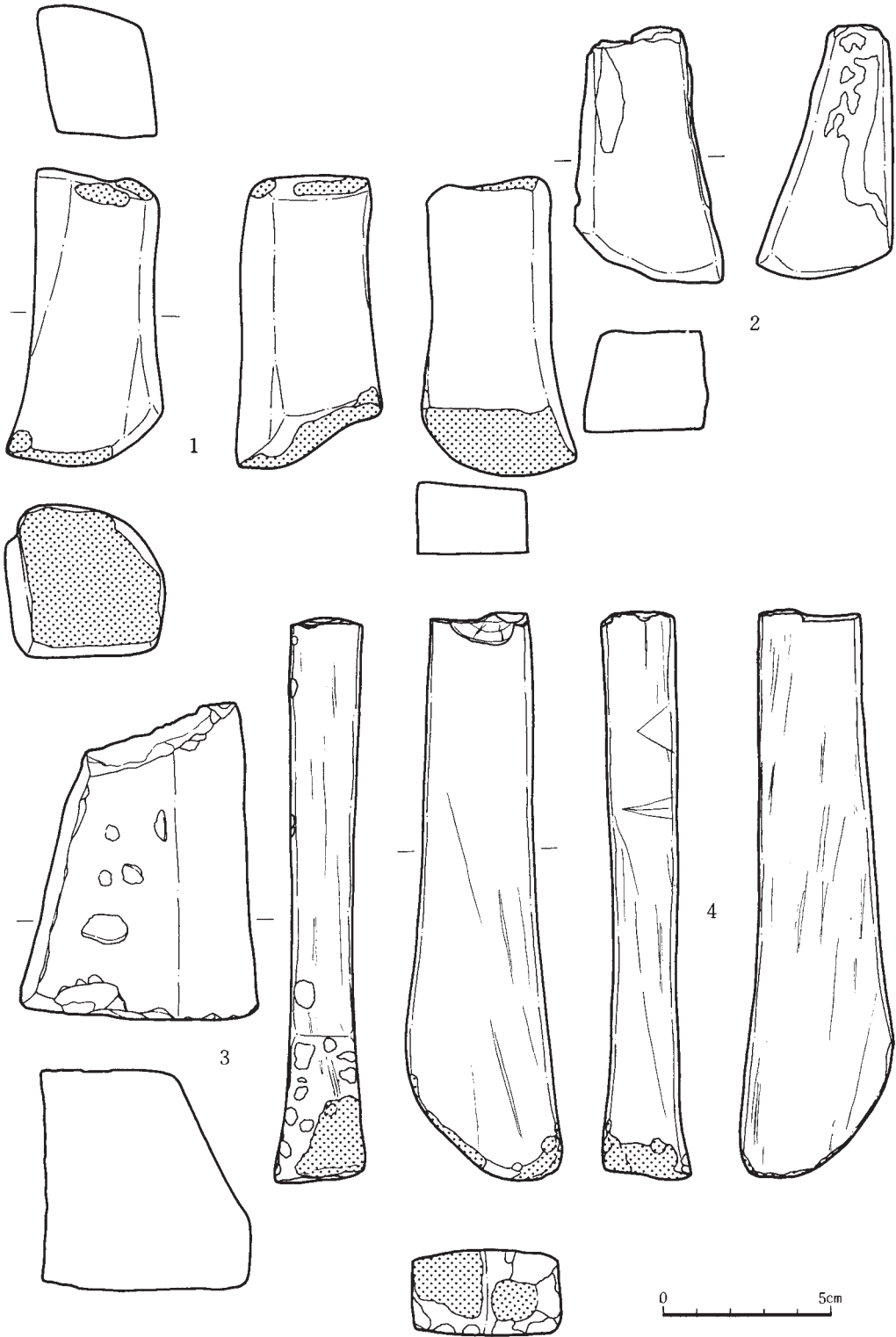
第201図 第37号住居跡出土鉄製品実測図

第71表 第37号住居跡出土土器観察表

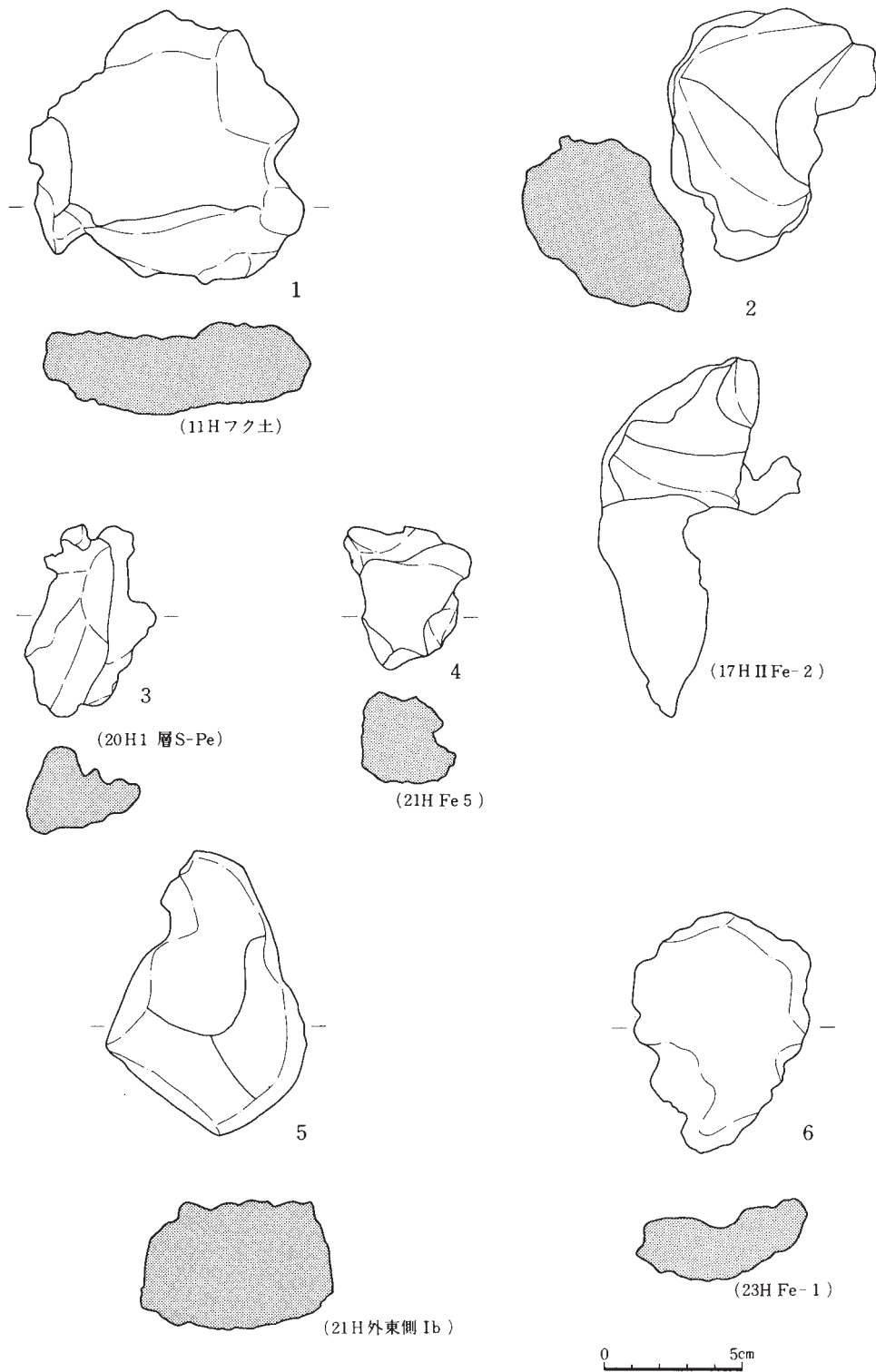
遺物番号	種類	器種	器部	法量 (cm)			調整			胎土 (mm)	焼成	色調	備考	出土位置
				口径	底径	器高	口縁部	胴部	底辺部					
1	土師器	甕形	胴底辺	—	9	—	—	ヘラナデ	強いヘラナデ	砂礫 (多・2~3)	良好	5 Y R4/4 5 Y R2/4		4~7層 P10 床直 P100 3層 P21
2	土師器	甕形	口縁胴	(17)	—	—	強いヨコナデ	〃	—	砂礫 (若・1)	〃	5 Y R5/4 5 Y R4/4		カマド5層 P5 〃 3層 P6 床面 P96,97
3	土師器	甕形	口縁胴	(19)	—	—	〃	〃	—	砂(多・1)	〃	10 Y R3/4 5 Y R2/3		カマド4~7層
4	土師器	甕形	口縁胴	(21) (22)	—	—	〃	〃	—	石英粒(若)	〃	5 Y R5/4 3 Y R4/4		カマド2層 P13
5	土師器	甕形	口縁胴	(20.5)	—	—	〃	〃	—	砂(多・1)	〃	7.5 Y R6/4 7.5 Y R7/4		フク土
6	土師器	小型甕	口縁胴底辺	(13)	8.5	14.5	—	ヘラナデ	強いヘラナデ	砂(若・1)	〃	7.5 Y R8/3 7.5 Y R6/3		床面
7	須恵器	甕形	胴	—	—	—	—	叩き	—	礫石粒(少)	良・堅	5 Y R7/6 5 Y R6/4	木業痕	フク土
8	須恵器	甕形	底辺	—	—	—	—	叩き	—	砂(少・1)	〃	7.5 Y R4/1 7.5 Y R5/1		
9	須恵器	甕形	胴	—	—	—	—	叩き	—	砂(少・1)	〃	5 Y R7/6 5 Y R6/2		7層 P103

第72表 第37号住居跡出土鉄製品計測表

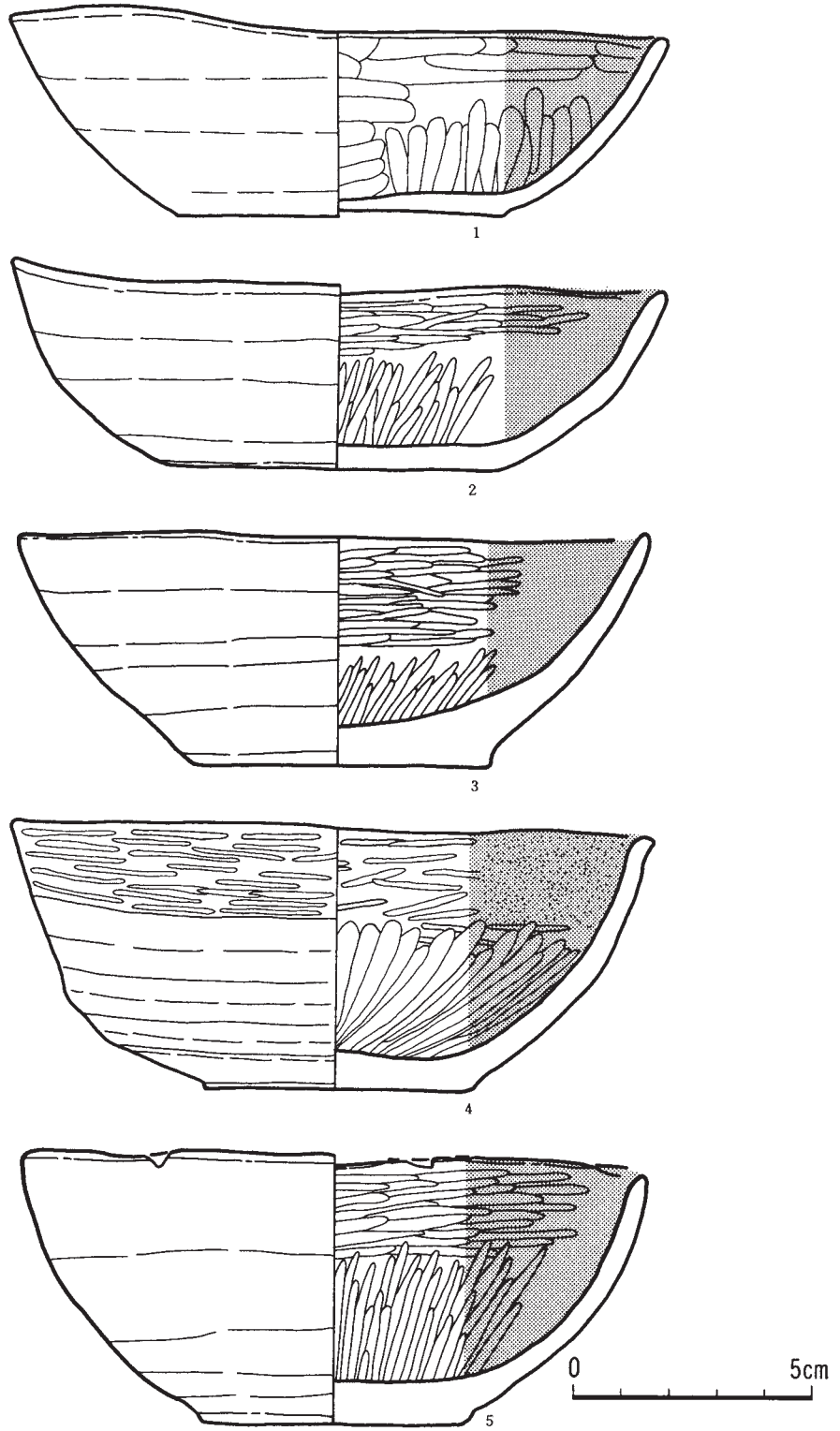
挿図番号	図版番号	種類	法量 (cm)					出土地点 (層位)	備考
201-1		直刀	全長 (42.7)	刃部長 (29.0)	幅 1.5 ~ 3.5	厚さ 0.8	関長 0.3	床面	茎長・幅・厚さ 目釘穴径 9.4 0.9~2.7 0.3 0.7
201-2		刀子(柄部)	全長 8.6	柄の大きさ 1.8 × 1.0	茎幅 1.5	厚さ 0.5	床直	茎長計測不可	
201-3		刀子(刃部)	全長 (3.5)	幅 1.2 ~ 1.4	厚さ 0.4	床直 Fe-3			



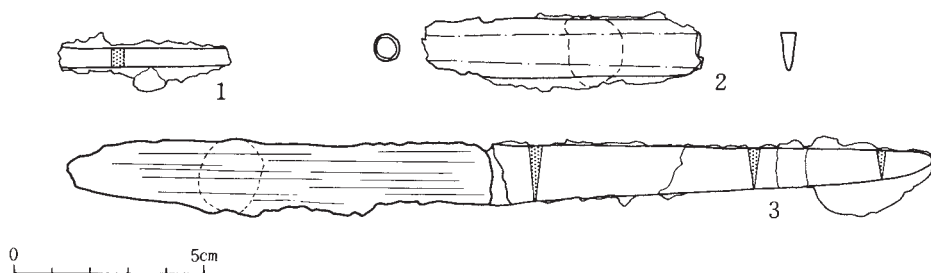
第202図 住居跡内出土の砥石実測図



第203図 住居跡内出土鉄滓実測図



第204図 住居跡内出土环形土師器実測図



第205図 第9・17・27号住居跡出土鉄製品実測図

第73表 住居跡出土砥石計測表

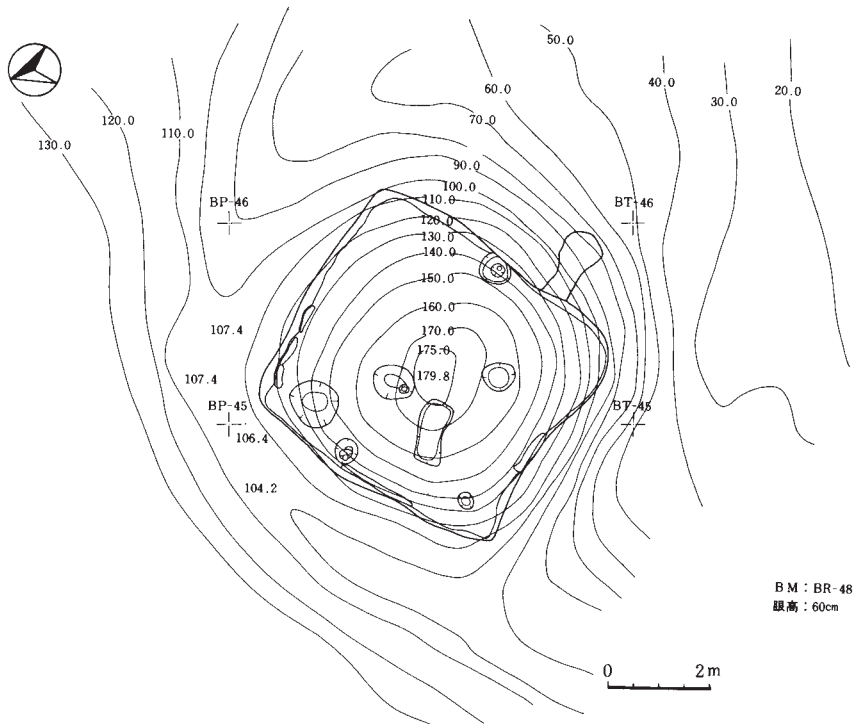
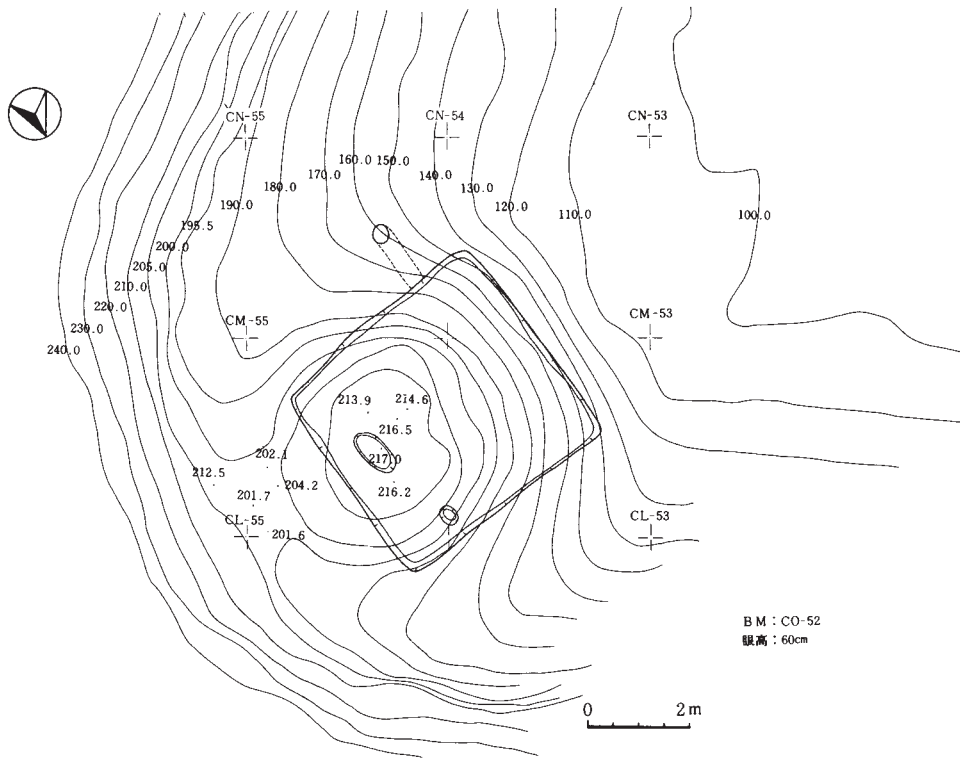
挿図番号	図版番号	種類	法 量 (cm)				出土地点 (層位)	備考
			全長	幅	厚さ	使用面		
202-1		砥石	9.0	2.2~4.0	1.8~3.3	4	26 へルトH内	石質(流紋岩)
202-2		砥石	7.7	2.6~3.5	3.0~3.5	4	15 S H・床2	石質(凝灰岩)
202-3		砥石	9.5	1.8~6.3	6.1~6.5	5	17 II a H層	石質(流紋岩)
202-4		砥石	17.0	3.0~4.4	2.2~2.6	4	21H・床直上	石質(流紋岩)

第74表 住居跡出土坏形土師器観察表

遺物番号	種類	器種	器部	法 量(cm)			調 整			胎土	焼成	色調	備考	出土位置
				口径	底径	器高	口縁部	胴部	底辺部					
1	土師器	坏	完形	13.8	6.8	4.5	口縁部 ロクロ (内)ミガキ	胴部 ロクロ (内)ミガキ	底辺部 ロクロ (内)ミガキ	良質密	良好	7.5YR6/3 7.5YR5/3	内面黒色処理	23H覆土
2	"	"	"	13.8	7.0	4.2	"	"	"	"	"	7.5YR6/4 7.5YR6/3	"	23H覆土
3	"	"	"	13.3	6.3	4.8	"	"	"	"	"	5YR6/6 5YR1.7/1	"	26H床直 P-5
4	"	"	"	13.6	5.6	5.5	"	"	"	"	"	10YR8/2 10YR1.7/1	黒色処理 外面口縁まで	36H覆土 P-22
5	"	"	"	13.3	5.6	5.7	"	"	"	"	"	10YR7/4 10YR1.7/1	内面黒色処理	36H覆土 P-22

第75表 第9号・第17号・第27号住居跡内出土鉄製品計測表

挿図番号	図版番号	種類	法 量 (cm)				出土地点 (層位)	備考
			全長	幅	厚さ	使用面		
205-1		紡錘車の軸部	4.5	0.5	0.35	4	9H・床直 Fe-2	
205-2		刀子柄部	7.2	0.7~1.0	0.4	4	27 層 H辺	木部(1.9×1.4)
205-3		刀子	22.9	11.5	0.6~1.6	4	17H・床面 Fe-1	木部(1.9×1.6)



第212図 第8号・第22号住居跡確認状況実測図

2 土壌

歴史時代の土壌は、中央区から検出されなかったが、西側区では10基検出し、第1号土壌から第10号土壌までナンバーリングした。東側区では6基検出し、第11号土壌から第16号土壌までナンバーリングした。

いずれの地区でも、住居跡周辺から検出される例が多い。

第1号土壌（第207図）

位置と確認 C H - 47グリッドから深さ約18cmの浅皿状の窪みを確認した。

平面形と規模 隅丸方形で、上端が190×170cm、下端が120×150cm、最深部分の深さが50～60cmである。北壁下から南にかけて、一段高くなっている。

堆積土 5層に分層できた。大別すると、にぶい黄褐色土、黄褐色土、明黄褐色土、黄橙色土で、堆積は自然状況である。

壁 北壁が段状である以外は緩い立ち上がりである。覆土と壁の色が類似している。壁面は、あまり堅くなく締りは弱い。

底 堅く締っている。

出土遺物 出土しなかった。 (成田・津川)

第2号土壌（第207図）

位置と確認 C C - 45、C D - 45グリッドから黒色土の落ち込みを確認した。

平面形と規模 不整楕円形で長径約295cm、短径約190cmで、深さ約40cmある。

堆積土 5層に分層できた。自然堆積である。

壁 緩い立ち上がりで壁面はやや軟弱である。

底 若干の凹凸があり堅く締っている。上端80×55cm、深さ13cmの不整楕円形のピットを検出した。

出土遺物 シルト岩が出土した。 (成田・佐藤)

第3号土壌（第207図）

位置と確認 B F - 50・51、B G - 50・51グリッドから、深さ約55cmのすり鉢状の窪みを確認した。

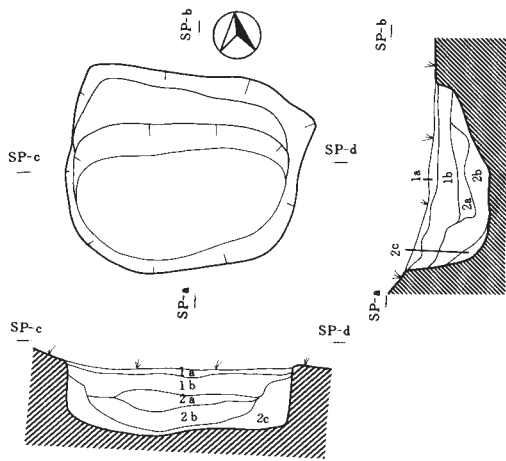
平面形と規模 隅丸方形で、上端が約290×285cm、下端が200×220cmで、深さ100～110cmである。

堆積土 7層に分層できた。覆土内に、厚さ約10cmの焼土を検出した。自然堆積である。

壁 垂直に近い立ち上がりで堅く締っている。

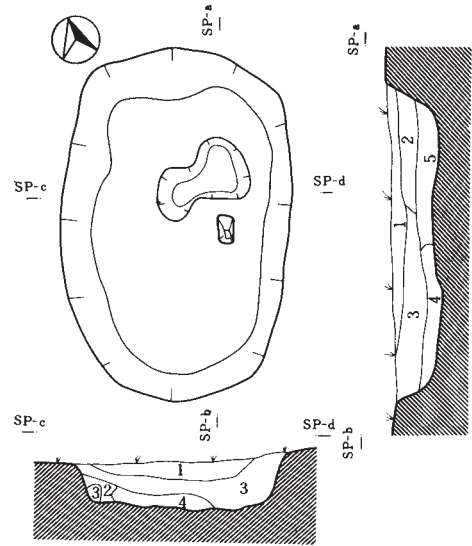
底 平坦で堅く締っている。中央に上端径105cm、75cm、深さ35cmのピットを検出した。

出土遺物 出土しなかった。 (成田・佐藤)



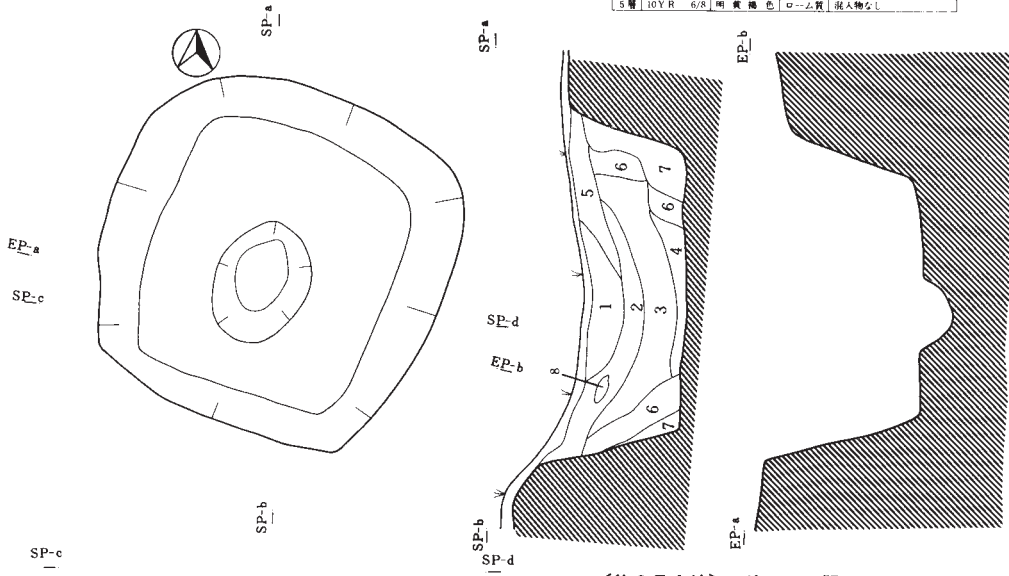
〔第1号土城〕 注 記

層位	土色	土質	備考
1a層	10Y R 4/3 に多い黄褐色	ローム質	混入物なし
1b層	10Y R 5/8 黄 褐色	ローム質	混入物なし
2a層	10Y R 6/8 明黄褐色	ローム質	混入物なし
2b層	10Y R 7/8 黄 橙色	ローム質	混入物なし
2c層	10Y R 7/8 黄 橙色	ローム質	混入物なし



〔第2号土城〕 注 記

層位	土色	土質	備考
1層	2.5Y R 2/1 黒 色	シルト質	焼土微量混入
2層	10Y R 3/4 暗 褐色	シルト質	炭化物微量混入
3層	10Y R 4/6 暗 褐色	シルト質	炭化物少量、ローム微量混入
4層	10Y R 3/3 暗 褐色	シルト質	黒色土少量混入
5層	10Y R 6/8 暗 黄 褐色	ローム質	混入物なし



〔第3号土城〕 注 記

層位	土色	土質	備考
1層	2.5Y R 2/1 黒 色	シルト質	褐色土混入
2層	10Y R 3/4 暗 褐色	シルト質	ローム層、黒色土、炭化物少量混入
3層	10Y R 1.1/1 黒 色	シルト質	ローム少量、炭化物微量混入
4層	10Y R 2/2 黒 褐色	シルト質	ローム少量、炭化物微量混入
5層	10Y R 3/2 黒 褐色	シルト質	炭化物、ローム微量混入
6層	10Y R 4/3 に多い黄褐色	ローム質	黒色土、ローム少量混入
7層	10Y R 6/8 暗黄褐色	ローム質	混入物なし
8層	5Y R 5/8 明赤褐色	焼土	

0 2m

第207図 第1号・2号・3号土城実測図

第4号土壌（第208図）

位置と確認 B G - 48、49グリッドから深さ約15cmの窪みを確認した。

重複 第5号土壌を切っている。

平面形と規模 不整な円形で長径150cm、短径135cmで、深さ約20cmである。

堆積土 自然堆積である。

壁 底面から外に開きながら立ち上がる。

底 平坦で堅く締っている。

出土遺物 出土しなかった。 (成田・佐藤)

第5号土壌（第208図）

位置と確認 B G - 49グリッドから深さ約15cmのすり鉢状の窪みを確認した。

重複 第4号土壌に切られている。

平面形と規模 隅丸長方形で、上端が200×145cm、下端が170×125cmで、深さが約100cmである。

堆積土 4層に分層された。自然堆積である。

壁 壁の立ち上がりはやや急であり、壁面上部は軟弱で、下部は堅い。

底 平坦で堅く締っている。

出土遺物 出土しなかった。 (成田・佐藤)

第6号土壌（第208図）

位置と確認 B F - 49、50グリッドから約20cmの窪みを確認した。

平面形と規模 斜面下方にあたる北壁を確認できなかった。上端245×(190)cm、下端200×(150)cmの楕円形である。

堆積土 2層に分層できた。

壁 底面から外に開きながら立ち上がる。

底 平坦で堅く締っている。

出土遺物 出土しなかった。 (成田・佐藤)

第7号土壌（第208図）

位置と確認 B L - 47、B M - 47グリッドの第 a 層上面で黒色土の落ち込みを確認した。

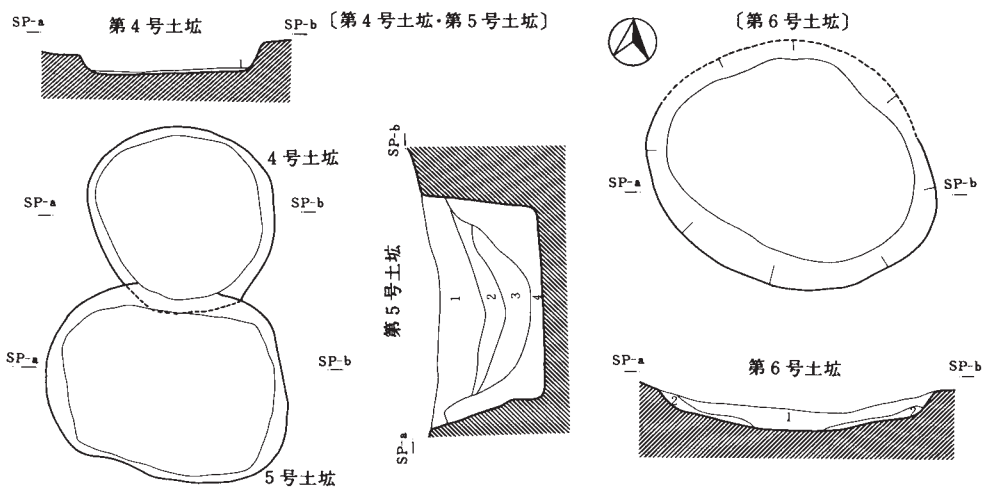
平面形と規模 方形で上端150×130cm、下端が130×105cm、深さ約70cmである。

堆積土 6層に分層できた。覆土内に火山灰を含んでいた。

壁 ほぼ垂直に立上がるが、壁面は、軟弱である。

底 ほぼ平坦であるが締りが弱い。

出土遺物 礫と土器片が出土した。 (成田・佐藤)



〔第4号土坑〕 注 記

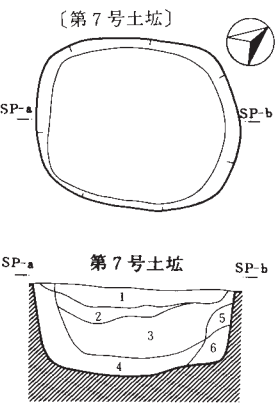
層位	土 色	土 質	備 考
1層	7	腐葉土	

〔第5号土坑〕 注 記

層位	土 色	土 質	備 考
1層	10Y R 2/1 黒 色	シルト質	炭化物、火山灰を微量に混入
2層	10Y R 2/2 黒 褐色	シルト質	火山灰を少量混入、炭化物を微量混入
3層	10Y R 4/6 褐 色	シルト質	ローム少量混入
4層	10Y R 5/8 黄 褐色	ローム質	褐色土を少量混入

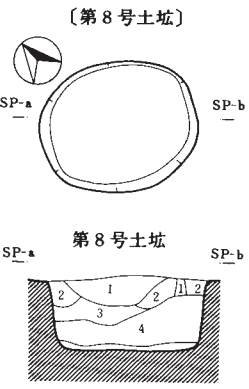
〔第6号土坑〕 注 記

層位	土 色	土 質	備 考
1層	10Y R 3/4 暗 褐色	シルト質	炭化物少量混入、ローム粒を少量混入
2層	10Y R 5/8 黄 褐色	ローム質	混入物なし



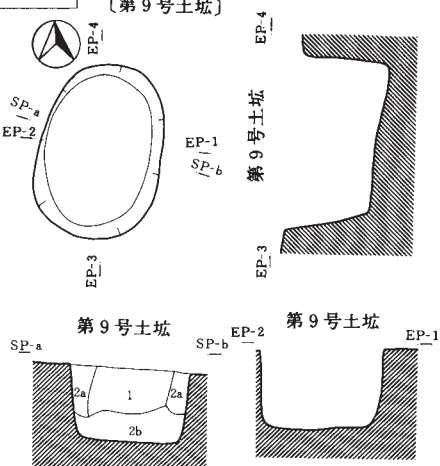
〔第8号住Pit2〕 注 記

層位	土 色	土 質	備 考
1層	10Y R 3/3 暗 褐色	シルト質	ローム粒若干混入
2層	10Y R 6/4 にぶい黄褐色	ローム質	ローム粒若干混入
3層	10Y R 3/3 暗 褐色	シルト質	ローム粒、微土粒若干混入
4層	10Y R 6/8 明黄褐色	ローム質	混入物なし
5層	10Y R 3/3 暗 褐色	シルト質	混入物なし



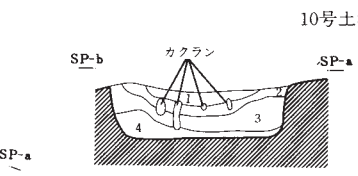
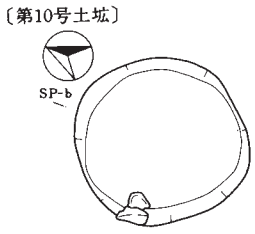
〔第7号土坑〕 注 記

層位	土 色	土 質	備 考
1層	10Y R 1.7/1 黒 色	シルト質	ローム粒を若干混入
2層	10Y R 5/4 にぶい黄褐色	シルト質	褐色土、黒色土混入
3層	10Y R 6/4 にぶい黄褐色	ローム質	混合物なし
4層	10Y R 6/6 明黄褐色	ローム質	火山灰混入
5層	10Y R 5/6 黄 褐色	ローム質	混入物なし
6層	10Y R 5/8 黄 褐色	ローム質	混入物なし



〔第9号土坑〕 注 記

層位	土 色	土 質	備 考
1層	10Y R 4/4 暗 褐色	シルト質	暗褐色土少量混入
2層	10Y R 4/6 暗 褐色	シルト質	混入物なし
3層	10Y R 5/4 にぶい黄褐色	シルト質	混入物なし



〔第10号土坑〕 注 記

層位	土 色	土 質	備 考
1層	10Y R 2/1 黒 色	シルト質	混入物なし
2層	10Y R 3/3 暗 褐色	シルト質	混入物なし
3層	10Y R 4/6 暗 褐色	シルト質	混入物なし
4層	10Y R 5/6 黄 褐色	ローム質	混入物なし



第208図 第4号・5号・6号・7号・8号・9号・10号土坑実測図

第8号土壌(第208図)

位置と確認 B N - 45、46グリッドの第 b 層上面で灰褐色土の落ち込みを確認した。

平面形と規模 楕円形で、上端が130×110cm、下端が115×95cmで、深さが約60cmである。

堆積土 5層に分層できた。

壁 立ち上がりは急で、壁面は軟弱である。

底 平坦であるが練りは弱い。

出土遺物 出土しなかった。 (成田・佐藤)

第9号土壌(第20・8図)

位置と確認 B L - 42、B M - 42グリッドから検出した。この位置は第27号住居跡の西壁の近くである。

平面形と規模 146×100cmの楕円形で、中央部分の深さ64cmである。

堆積土 3層に分層できた。自然堆積である。

壁 立ち上がりはやや急で、壁面は軟弱である。

底 全体的に平坦で締まりは弱い。

出土遺物 出土しなかった。 (成田・津川)

第10号土壌(第208図)

位置と確認 B U - 52、B V - 52グリッドから約10cmの浅皿状の窪みを確認した。

平面形と規模 円形で、上端が径140cm、下端が径120cm、深さが40cmである。

堆積土 4層に分層できた。大別すると、黒色土、暗褐色土、褐色土、黄褐色土で、自然堆積の状況を示している。

壁 ほぼ垂直に立ち上がり、壁面下部は、堅く締っている。

底 底面はほぼ平坦で、堅く締っている。

出土遺物 覆土内からシルト岩が3個出土した。 (成田・津川)

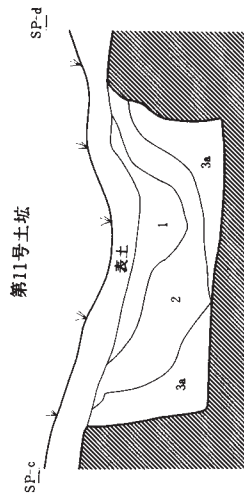
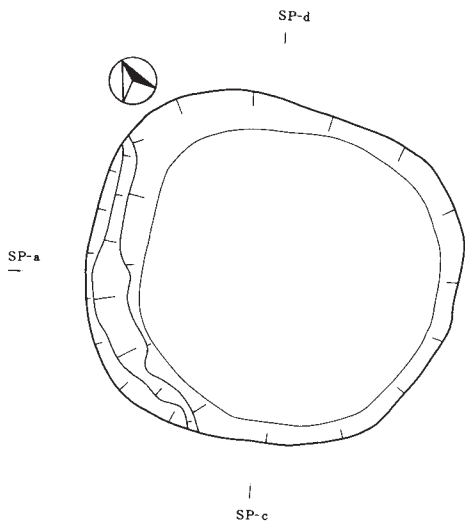
第11号土壌(第209図)

位置と確認 A E - 128・129グリッドから、深さ約50cmのすり鉢状の窪みを確認した。

平面形と規模 隅丸方形で、上端が308×280cm、下端が240×245cm、深さが95×100cmである。

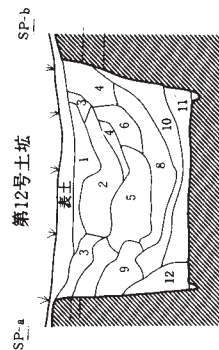
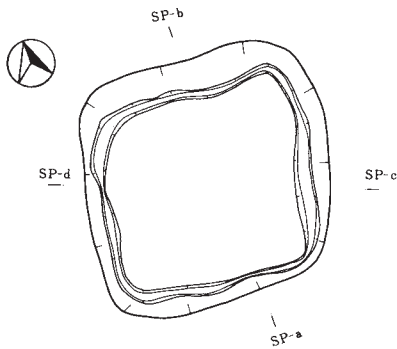
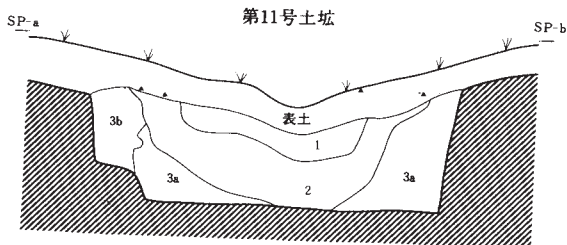
堆積土 4層に分層された。第3b層の存在が不自然であるがそれ以外は、逆放物線状を呈し、自然堆積である。

壁 西側壁が段状である以外は緩い立ち上がりである。上部は第 a・b層のため軟弱であるが下部は堅い。



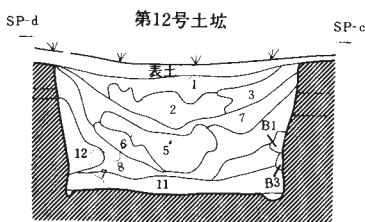
〔第11号土坑〕 注 記

層位	土 色	土 質	備 考
1層	10Y R1.7/1 黒 色	シルト質	ローム粒混入
2層	10Y R 2/3 黒 褐色	シルト質	ローム粒多量、炭化物、暗褐色土少量混入
3a層	10Y R 4/6 褐色	シルト質	混入物なし
3b層	10Y R 4/6 褐色	シルト質	炭化物少量混入



〔第12号土坑〕 注 記

層位	土 色	土 質	備 考
1層	10Y R 2/2 黒 褐色	シルト質	ローム粒少量混入
2層	10Y R1.7/1 黒 色	シルト質	ローム粒少量混入
3層	10Y R 2/2 黒 褐色	シルト質	ローム粒混入
4層	10Y R 2/1 黒 色	シルト質	ローム粒多量混入
5層	10Y R1.7/1 黒 色	シルト質	ローム粒多
6層	10Y R 2/2 黒 褐色	シルト質	ローム粒多量、暗褐色土少量混入
7層	10Y R 2/3 黒 褐色	シルト質	ローム粒少量、黒色土混入
8層	10Y R 3/3 暗 褐色	シルト質	ローム粒多量、黒色土少量混入
9層	10Y R 3/3 暗 褐色	シルト質	ローム粒、黒色土粒混入
10層	10Y R 3/3 暗 褐色	シルト質	ローム粒少量混入
11層	10Y R 4/4 褐 色	シルト質	黒色土粒少量混入
12層	10Y R 4/4 褐 色	シルト質	ローム粒混入



0 2m

第209図 第11号・12号土坑実測図

底 平坦で堅く締っている。

出土遺物 南東側から土師器が出土した。 (成田)

第12号土壇 (209図)

位置と確認 A R - 128・129グリッドから深さ約12cmの浅皿状の窪みを確認した。

平面形と規模 方形で、上端204×200cm、下端150×150cm、深さ112cmである。

堆積土 12層に分層できた。大別すると黒褐色土、黒色土、暗褐色土、褐色土で、全体的に締りのない層で、自然堆積と考えられる。

壁 上部は第 a・b層のため軟弱であるが、下部は堅い。立上がりは緩い。

底 平坦で堅く締っている。

壁溝 4周に巡らされており、幅4～10cmで、深さ約8cmである。

出土遺物 出土しなかった。 (成田)

第13号土壇 (第209図)

位置と確認 A R - 130グリッドから深さ約10cmの浅皿状の窪みを確認した。

平面形と規模 不整な方形で、上端200×185cm、下端170×145cm、深さ100～110cmである。

堆積土 6層に分層されたが、大別すると黒色土、黒褐色土、暗褐色土、褐色土で、全体的に締っていたが、人為的な堆積状況とはいえない。

壁 中央部まで第 a・b層のため上部は軟弱である。立上がりは西壁と南壁はやや緩いが北壁と東壁は急である。

底 平坦で堅い。

壁溝 北壁と西壁の一部にはないが、ほかの壁下に巡らされており、幅4～8cm、深さ約6cmである。

第14号土壇 (第209図)

位置と確認 B D - 125グリッドから検出したが、この位置は第29号住居跡の北壁脇に当る。

平面形と規模 平面形は楕円形で開口部が120×80cm、底面が90×56cmの規模である。断面形は鍋底状で、深さが20～32cmである。

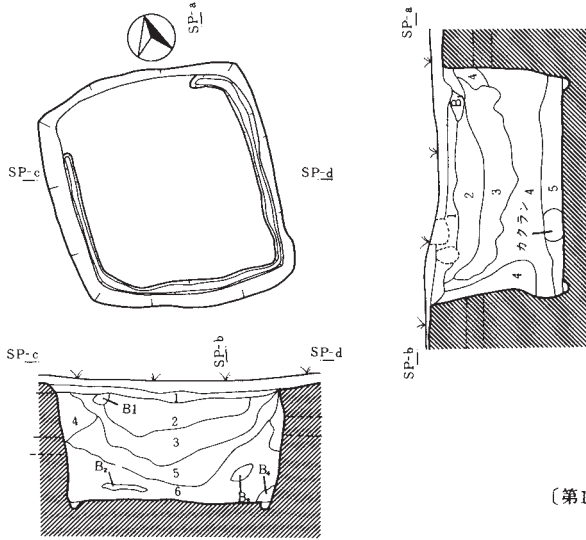
堆積土 4層に分層できたが自然堆積の状況を示している。

壁 軟弱である。

底 凹凸がありやや軟弱である。

出土遺物 出土しなかった。 (成田)

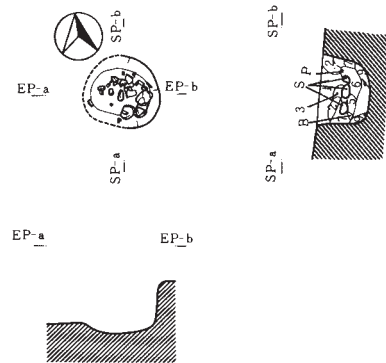
〔第13号土坑〕



〔第13号土坑〕 注 記

層位	土色	土質	備	考
1層	10Y R 3/4 暗褐色	シルト質	ローム粒微量混入	
2層	10Y R 3/3 暗褐色	シルト質	混入物なし	
3層	10Y R 4/6 褐色	シルト質	ローム粒多量混入	
4層	10Y R 4/4 褐色	シルト質	ローム粒少量混入	
5層	10Y R 5/6 黄褐色	ローム質	ローム粒微量混入	
6層	10Y R 5/6 黄褐色	ローム質	ロームブロック微量混入	
7層	10Y R 6/6 明黄褐色	ローム質	ローム粒、ロームブロック多量混入	

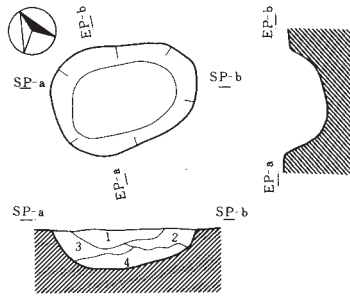
〔第15号土坑〕



〔第15号土坑〕 注 記

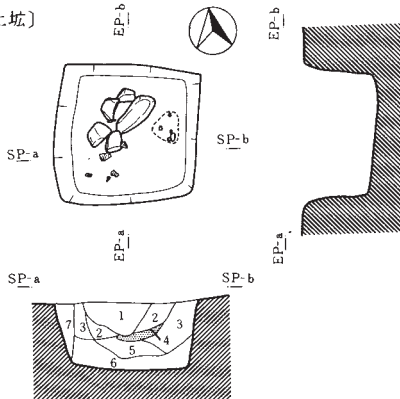
層位	土色	土質	備	考
1層	10Y R 2/1 黒色	シルト質	混入物なし	
2層	10Y R 3/3 暗褐色	シルト質	焼土混入	
3層	10Y R 2/2 黒褐色	シルト質	焼土混入	
4層	10Y R 2/3 黒褐色	シルト質	炭化物混入	
5層	10Y R 2/2 黒褐色	シルト質	焼土粒、炭化物混入	
6層	10Y R 2/3 黒褐色	シルト質	炭化物、焼土粒混入	
7層	10Y R 3/4 暗褐色	シルト質	混入物なし	
8層	10Y R 2/3 黒褐色	シルト質	ローム混入	
9層	10Y R 4/4 褐色	シルト質	混入物なし	

〔第14号土坑〕



層位	土色	土質	備	考
1層				
2層				
3層				
4層				
5層				
6層				
7層				
8層				
9層				

〔第16号土坑〕



〔第16号土坑〕 注 記

層位	土色	土質	備	考
1層	10Y R 2/2 黒褐色	シルト質	ローム粒混入	
2層	10Y R 3/3 暗褐色	シルト質	ローム粒、焼土粒若干混入	
3層	10Y R 4/4 褐色	シルト質	ローム粒若干混入	
4層	5Y R 4/8 赤褐色	褐色	焼土	
5層	10Y R 2/2 黒褐色	シルト質	ロームブロック、ローム粒若干混入、焼土粒、炭化物混入	
6層	10Y R 4/6 黄褐色	ローム質	炭化物混入、シルト岩若干含む	
7層	10Y R 5/4 褐色	シルト質	混入物なし	

0 2m

第210図 第13号・14号・15号・16号土坑実測図

第15号土壌（第209図）

位置と確認 A L - 133グリッドから検出した。この位置は、第36号住居跡かまど先端の南側である。

平面形と規模 平面形は不整楕円形で、開口部が64×58cmで、底面が50×40cmの規模である。断面形は鍋底状で深さは38～40cmである。

堆積土 8層に分層でき、中ほどに礫が入り込んでいる。

壁 第 a・b層が壁面のために軟弱である。

底 第層を掘り込んでいるためやや堅めである。

出土遺物 覆土及び底面から土師器破片が出土している。 (成田)

第16号土壌（第209図）

位置と確認 A O - 130グリッドの第 a層上面で確認した。(第37号住居跡南壁の東側)

平面形と規模 方形で上端119×116cm、下端94×100cm、深さ約60cmである。

堆積土 7層に分層できた。ほぼ中央に焼土（第4層）が堆積していた。第7層は壁面の崩落部分と考えられ、その他はほぼ逆放物線状で自然堆積と考えられる。

壁 西壁は、緩い立上がりであるが、ほかは急で、残存状態が良好である。

底 やや北側に傾斜している。

出土遺物 第7層から貝殻（ヤマトシジミ、ウネナシトマヤガイ）、第5層からかまどの袖部に使用されたとみられるシルト岩が出土した。また、覆土からは土師器が出土した。

(成田)

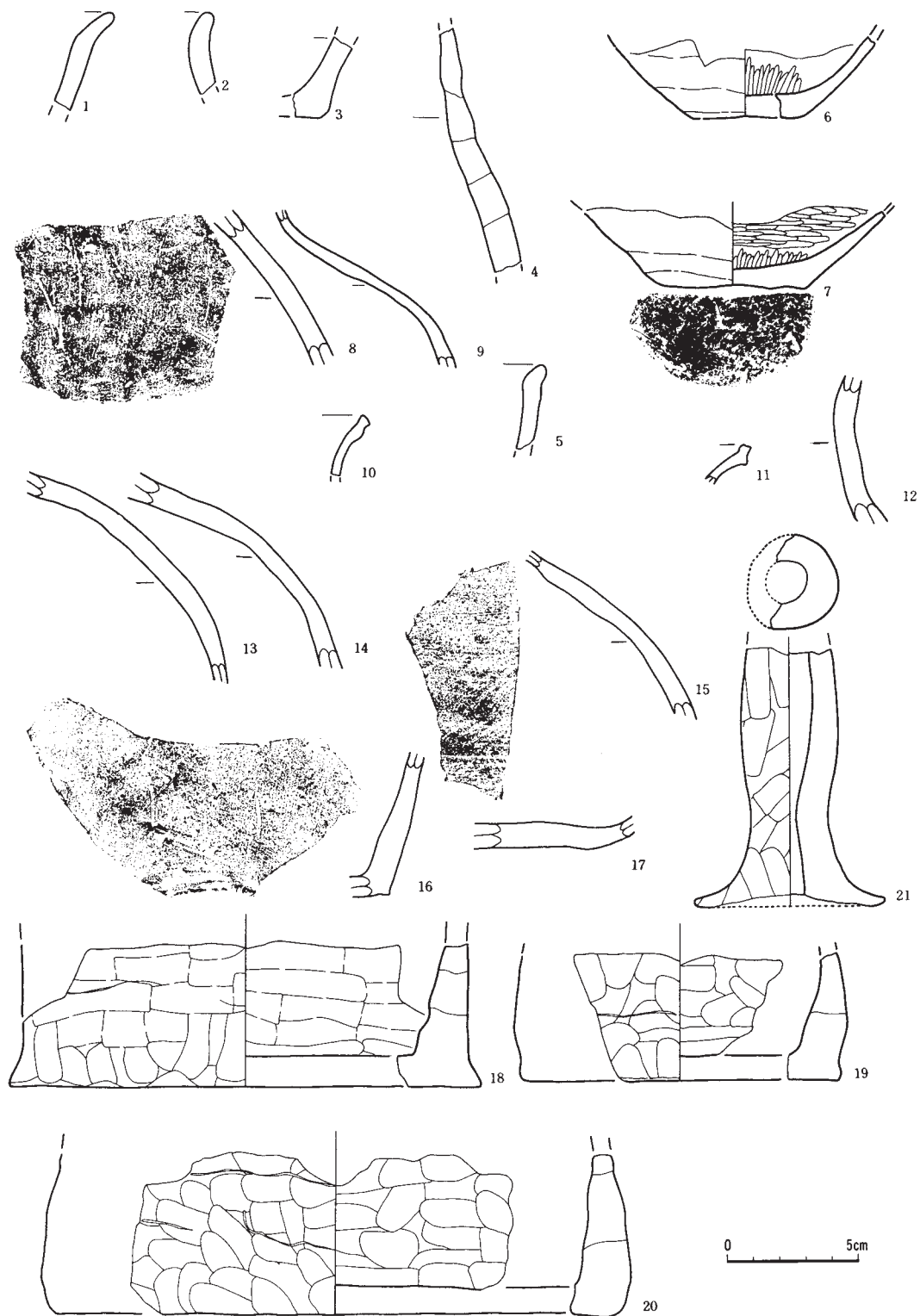
注：貝殻の種類は、東北区水産研究所八戸支所農林技官小滝一三氏の鑑定である。

3 遺構外の遺物

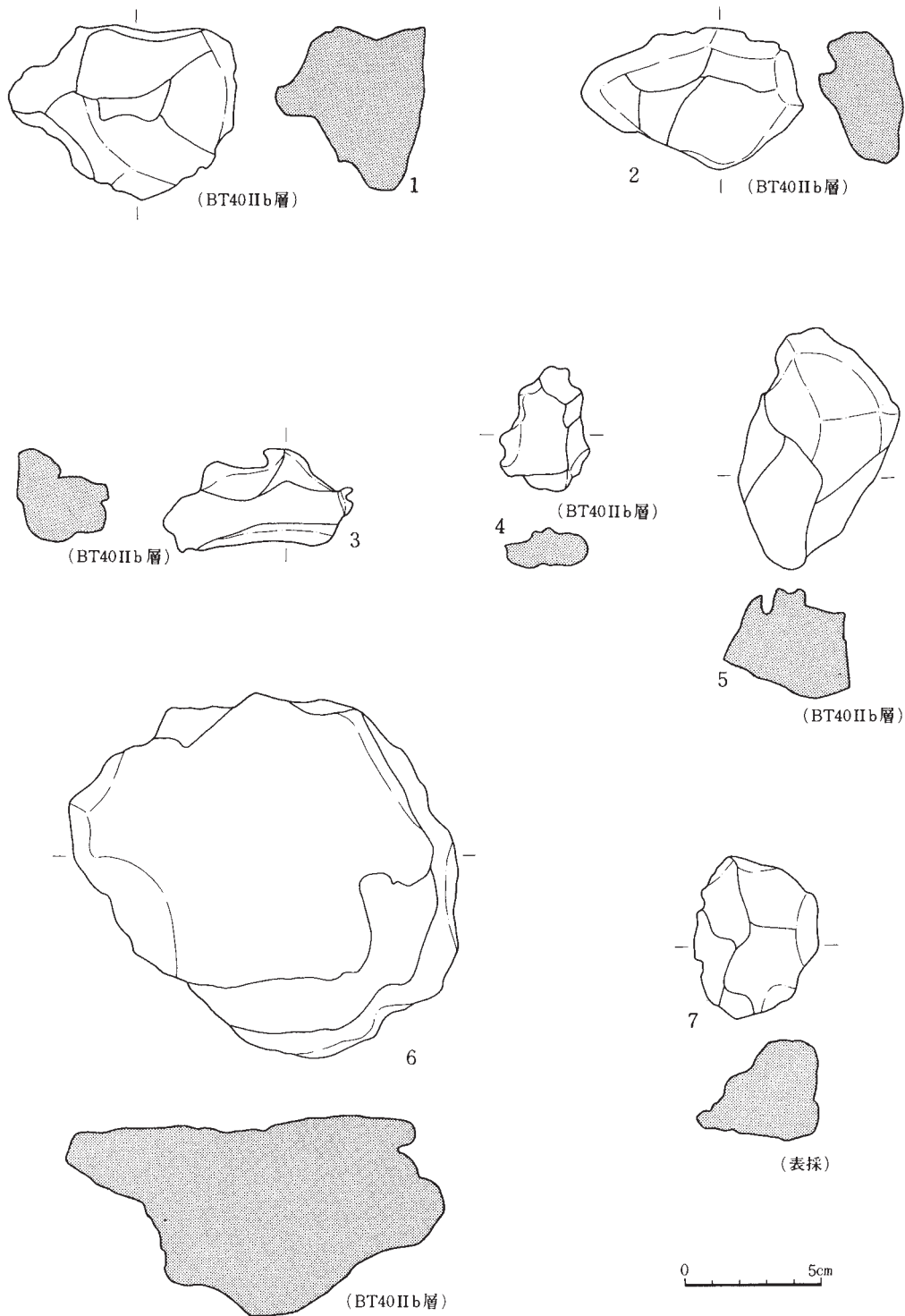
土師器、須恵器など歴史時代の遺物は各区の遺構外からも出土している。

また、鉄滓は碗形鉄滓と呼ばれているものが第5号住居跡、東側のグリッドからまとまって出土している。

(成田)



第210図 遺構外出土遺物実測図 (15H・23H・26Hも含む)



第212図 遺構外出土鉄滓実測図

第76表 第15・23・26号住居跡と遺構外出土土器観察表

遺物番号	種類	器種	器部	口径	法量 (cm)		調整	胎土	焼成	色調	備考	出土位置
					口径	底径						
1	土師器	鉢形	口縁部	(22)	—	—	強いヨコナテ	ヘラナテ	砂むが密	5YR3/3 5YR4/4	炭	15H床P-1
2	土師器	鉢形	胴部	(15)	—	—	強いヨコナテ	ヘラナテ	少量の砂粒を含むが密	7.5YR6/6 7.5YR6/6		15H床P-5
3	土師器	甕形	底辺部	—	—	—		ヘラナテ	砂粒少なく良質粘土	7.5YR6/6 7.5YR6/6		15H床P-5
4	土師器	甕形	胴部	—	—	—		ヘラナテ	砂粒少なく良質粘土	7.5YR5/6 7.5YR5/6		15H床P-4
5	土師器	甕形	口縁部 胴部	(18)	—	—	強いヨコナテ	ヘラナテ	砂粒を含むが良質	7.5YR4/4 7.5YR7/4		23Hピット6
6	土師器	坏	胴部 底辺部	—	—	—		クロクロ 米切底	砂粒少なく良質粘土	7.5YR1.7/1 7.5YR7/6	黒色処理	26 H
7	土師器	坏	胴部 底辺部	—	—	—		クロクロ 米切底	砂粒少なく良質粘土	10YR1.7/1 10YR7/3	黒色処理	26 H
8	須恵器	壺形	胴部	—	—	—		ケズリ	砂石粒、少量	2.5Y6/2 2.5Y6/2		21H 遺構外 P-5
9	須恵器	壺形	胴部	—	—	—		ロクロ	砂粒を含むが良質粘土	5 Y 5/1 5 Y 5/1		21H 遺構外 P-7
10	須恵器	壺形	胴部	(11)	—	—		ロクロ	ほぼ均一で密			21H 遺構外 P-6
11	須恵器	壺形	口縁部 胴部	(11)	—	—		ロクロ	ほぼ均一で密	5 Y 4/1 5 Y 4/1		27 H
12	須恵器	壺形	胴部	—	—	—		ロクロ	良質粘土	N. 4/ N. 5/		A0-126I層
13	須恵器	壺形	胴部	—	—	—		ロクロ	良質粘土	7.5Y 4/ 7.5Y 5/1		CA-47IR
14	須恵器	壺形	胴部	—	—	—		ロクロ	細かい砂粒を少量含む	7.5Y 5/1 N 5/		AD-126I層
15	須恵器	壺形	胴部	—	—	—			良質粘土	M N 4/ 5 Y 5/1		A1-B1Ib層
16	須恵器	壺形	胴部 底辺	—	—	—		ロクロ	良質粘土	S Y 5/1 7.5Y 4/1	底面 調整	BR-30Ib層
17	須恵器	小型甕	底辺	—	—	—		ヘズリ	良質粘土	7.5Y 4/1 10B G 4/1		AS-124IIa層
18	製塩土器	甕形	胴部 底辺	—	(18)	—		ヘラナテ	細かい砂粒を多量混入	10B G 6/4 7.5Y R 7/4	底面 調整	AP-126I層 AR-126Ib層
19	製塩土器	甕形	胴部 底辺	—	(12)	—		ユビナテ	砂粒を多量混入	2.5Y R 6/6 10Y R 6/3	"	AQ-129 I層
20	製塩土器	甕形	胴部 底辺	—	(21.5)	—		ユビナテ	細かい砂粒を多量混入	2.5Y R 6/6 5 Y R 6/4	"	AN-1251a層
21	支脚		胴部	3.7	(7.5)	—		ユビナテ	良質粘土	5 Y R 7/4		CA-40I層

第5章 考 察

第1節 遺構

1. 縄文時代の遺構

縄文時代の遺構は住居跡が2軒、土壌が24基、土器埋設遺構が1基、屋外炉が1基、焼土状遺構が2基で、いずれも東側地区から検出した。

(1) 住居跡

縄文時代の住居跡は2軒であるが、重複しており、その切合い関係からJ-1号住居跡が古く、J-2号住居跡が新しいものと思われる。J-1号住居跡は残存部分が非常に少なく、また、出土遺物がないため時期は不明である。J-2号住居跡は床面から土器が出土していないが、覆土から十腰内式土器片と十腰内式以前の土器（後期初頭）が数片出土している。床面出土の遺物でないため住居跡の明確な時期はとらえ難いが、形状、炉の形態、柱穴の配列、発掘区域内から出土した土器の種別等から縄文時代後期前半の住居跡とみなすことができると思う。これらの住居跡は次のような特徴をもっている。

- ア．平面形状が不整な楕円形である。
- イ．掘込みは浅く、第一層を深く掘込んでいない。
- ウ．炉は石囲炉で、中央部分より北東側に片寄った場所に構築されている。
- エ．長軸方向は、ほぼ東西線（磁北）上にある。
- オ．柱穴は、ほぼ壁際にあるほか、中央部分にも4個ある。
- カ．西側の長軸線上の床は堅く締り、出入口と推定される部分がある。

ここで特に注目したいのは、平面形と炉の種別及び炉の位置である。これと類似する住居跡は、昭和58年に発掘調査した大石平(1)遺跡(1985)の第10号住居跡で、規模・平面形・炉の位置と形態等が近似している。大石平(1)遺跡の第10号住居跡では、十腰内式土器が出土している。

なお、近接する沖附(2)遺跡(1986)では、十腰内式土器が出土しておらず、住居跡の形態等も本遺跡と近似するものはないようである。 (成田)

(2) 土 壌

縄文時代の土壌は、24基検出したが、住居跡の北東側から検出した。これらのなかには遺物が多く出土したのものもあり、また少量出土したもの、ほとんど出土していないものがある。

形状の相違によって分けると次のようになる。

- aタイプ：平面形が円形で、深さが120～150cmで、円筒形状を呈しているもの。J-16号土壌、J-17号土壌がこれに当たる。

bタイプ：平面形が円形及びそれに近い楕円形、深さが40～100cmでフラスコ状を呈しているもの。J - 8号土壙、J - 9号土壙、J - 19号土壙がこれに当たる。

cタイプ：平面形が楕円形で、比較的浅く、50cm未満の深さのもので、J - 2・J - 3・J - 4・J - 5・J - 6・J - 7・J - 10・J - 11・J - 12・J - 13号土壙がこれに当たる。

dタイプ：平面形が方形ないし長方形で、比較的浅いもので、J - 14・J - 18号土壙がこれに当たる。

これらの土壙の用途については、まだ不明な点が多く明確にはされておらず、定型的なものでもなく、遺跡によっても異なるともみられる。本遺跡においては、出土遺物等から類推すれば、aが貯蔵穴ないしは墓墳、bは墓墳の可能性を有し、cとdは不明である。なお、aタイプで、大石平(1)遺跡(1985)では柱痕状の堆積を示したものもあったが、本遺跡においては柱痕状の層はみられなかった。(成田)

(3) 土器埋設遺構・屋外炉・焼土状遺構

土器埋設遺構・屋外炉・焼土状遺構は、いずれも東側区の台地上でも最も沼に近い場所から近接して検出したものである。この場所には、ほかに縄文時代の土壙が2基と、土師器を伴う第36号住居跡も構築されている。これらは、縄文時代の遺構との関連は考えられるが、どの遺構とどのような関連を持つかは、土器埋設遺構や屋外炉及び焼土状遺構の遺物が少ないため判断できない。

ア．土器埋設遺構

土器が埋設されている例は一ノ渡遺跡に2例あり、この例では十腰内式の沈線文の甕形土器が埋設されている。その他の遺跡では、斜縄文施文のものが多く、網目状の文様を持つ土器が埋設されている例は少ない。本遺構の土器内の土壌を調べたが無遺物である。用途については不明確な点が多い。

イ．屋外炉

縄文時代後期前半の遺跡でよく検出されるものであるが、少数の石を用いている例は大石平(1)遺跡(1985)と外長根(4)遺跡(1981)から検出されている。いずれも短期間に使用されたとみられる痕跡をとどめているものである。

ウ．焼土状遺構

本遺構から検出したものは、いずれも焼土を廃棄したものと思われるものである。特に、第2号のものは土壙内に廃棄されたものとみられるものである。(成田)

2 歴史時代の遺構

発掘区全域では住居跡37軒、土壌15基で、これを各区ごとにみると、中央区では住居跡が7軒、土壌が検出されない。西側区では住居跡が21軒で土壌が10基、東側区では住居跡が9軒で土壌が5基である。

(1) 住居跡

住居跡はほとんどかまどを持っている。第28号住居跡だけが焼土の堆積はあるものの、火床面がないため用途不明で、復原できた土師器もあるため住居跡に入れた。プランは不整なものもあるが、多くは方形とみなし得るものであり、どちらかの辺が長く、長方形としてとらえなければならないものは少ない。

以下、覆土層位・規模・形態・主軸方位・かまどの形態等について簡単にまとめてみたい。

ア．覆土層位

覆土の組成等についての詳細な分析はしなかったが、堆積状況の違いがみられた。

aタイプとしては、黄褐色土が床面全面を覆い厚く堆積している住居跡で、第27号住居跡が典型的なものである。

bタイプとしては、壁下に黄褐色土が堆積しているが、中央部分では床面まで黒色土が堆積しているもので、第21号・第23号住居跡が典型的なものである。

cタイプとしては、床面まで黒色土が入っているものの、その上層に黄色ローム層が入り込んでいる住居跡で、第4号住居跡と第17号住居跡がこのような堆積状況である。

このような堆積状況の相違はどのような成因によるものかは即断でき難いが、cタイプの堆積状況を示す住居跡は焼失家屋であり、このことが成因に関係があるという推定できる。すなわち、消火のために黄褐色ロームを竪穴内に投げ込んだという考え方である。反面、住居跡廃棄後、新しい竪穴住居跡を構築する際に排土されたとみなすことも可能である。第17号住居跡の場合は隣接して第16号住居跡があり、同時に家屋が並びたない距離であり、新旧関係があるものと考えられ、後者の考え方が妥当性を持つものである。第4号住居跡の場合は、それぞれの住居跡どうしが離れており、必ずしも後者の考えは当たらない。

第77表 歴史時代住居跡の覆土堆積状況の類別

類別	住 居 跡 (H)															
	11H	13H	18H	26H	27H	28H	31H	35H								
a	1H	2H	3H	5H	6H	7H	8H	9H	10H	12H	14H	15H	16H	19H	20H	
b	21H	22H	23H	24H	25H	29H	30H	32H	33H	34H	36H	37H				
c	4H	17H														

第78表 歴史時代住居跡一覧表

住居跡(H)	かまど位置	施 設	出 土 遺 物
1 H	南 壁 西 隅	中央寄りに火床面	土師器, 鉄製品, 炭化材
2 H	南 壁 西 隅		土師器
3 H	南壁やや西寄	西・北・東壁外に周堤	土師器, 鉄製品, 羽口, 炭化物
4 H	南壁ほぼ中央	中央西寄りに火床面	土師器, 鉄製品, 砥石, 炭化物
5 H	南 壁 東 寄 り		土師器, 羽口, 炭化材
6 H	南 壁 東 寄 り		土師器, 炭化材
7 H	南 壁 西 寄 り		土師器少量, 炭化物
8 H	南 壁 西 寄 り		土師器
9 H	南 壁 西 寄 り		土師器
10 H	南 壁 東 寄 り	中央部に火床面 2	土師器
11 H	東 壁 南 隅	中央やや東寄りに火床面	土師器, 羽口, 鉄滓
12 H	南壁ほぼ中央		土師器, 須恵器
13 H	北 壁 東 寄 り		土師器
14 H	南 壁 西 寄 り	東壁南寄りに張り出し	土師器, 須恵器
15 H	南壁やや西寄り	壁溝内側に柱穴	土師器少量, 砥石
16 H	南 壁 西 寄 り		土師器少量
17 H	南 壁 東 寄 り	深さ約90cmの Pit	土師器, 支脚, 鉄製品, 砥石, 鉄滓
18 H	東 壁 南 寄 り		土師器
19 H	南壁ほぼ中央		土師器
20 H	東 壁 南 寄 り	中央部分に火床面	土師器, 鉄製品, 鉄滓
21 H	南壁ほぼ中央	東側に火床面、周堤	土師器, 鉄製品, 砥石, 鉄滓
22 H	南 壁 西 寄 り		土師器, 須恵器, 鉄製品, 炭化材
23 H	南 壁 西 隅	周堤南壁東隅に段状張り出し	土師器, 鉄製品
24 H	南壁ほぼ中央		土師器少量
25 H	南 壁 西 寄 り		土師器, 炭化材
26 H	南 壁 西 寄 り	周堤西壁南隅に張り出し	土師器, 須恵器, 製塩土器, 鉄製品, 砥石, 鉄滓
27 H	南壁ほぼ中央		周辺から鉄製品と須恵器片
28 H	かまどなし		土師器
29 H	南 壁 西 寄 り		土師器, 炭化材
30 H	南 壁 西 寄 り	東壁北寄りに張り出し	土師器
31 H	東 壁 南 隅	南壁外に盛土	土師器少量
32 H	南 壁 西 寄 り		土師器, 支脚, 炭化物
33 H	南壁ほぼ中央		土師器, 鉄製品
34 H	東 壁 南 寄 り	東壁隅に張り出し	土師器, 灰釉陶器, 鉄製品, 炭化材
35 H	南 壁 西 寄 り	中央部分に火床面	土師・須恵器, 製塩土器, 支脚, 鉄製品
36 H	南 壁 西 寄 り	北・西壁外に盛土	土師器, 須恵器, 炭化材
37 H	南 壁 西 寄 り		土師器, 須恵器, 鉄製品

(注) 「かまど位置」はかまどが新旧2つある場合、新しい方の位置を記した。

壁の呼称はおおよその方向に依ったもので正確な方位によって付していない。

イ．規模・形状

本遺跡で検出した住居跡で比較してみると、規模は大型・中型・小型と三つに分けることができる。

大型は、面積（竪穴内部の面積）が $39\text{m}^2 \sim 52\text{m}^2$ で、第15号・第21号・第23号・第26号住居跡のように西側区に限られている。

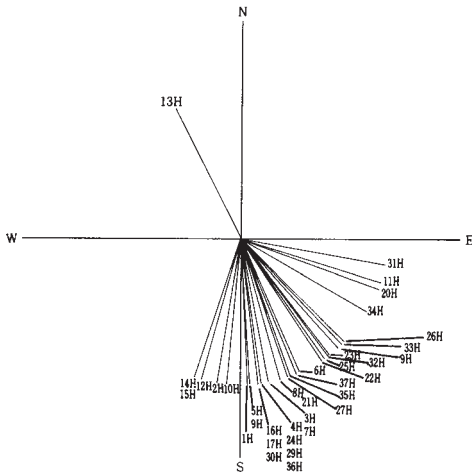
中型は、面積が $17\text{m}^2 \sim 27\text{m}^2$ で、第1号～第4号住居跡、第8号、第13号、第14号住居跡、第16号、第17号住居跡、第22号住居跡、第30号、第32号、第35号住居跡である。

小型は、面積が $8\text{m}^2 \sim 16\text{m}^2$ で、第5号～第7号住居跡、第9号～第12号住居跡、第18号～第20号住居跡、第24号、第25号、第27号住居跡である。

このような住居跡の規模の相違は、本遺跡の場合、時期の差というよりもむしろ社会的地位とか役割の差とみた方が妥当なようである。

平面形状については、前述のようにほぼ方形（不整も入る）のものが多く、長方形は少ない。長方形のものは、かまどを有する壁が長辺になるものと短辺になるものがある。前者は、第3号、第4号、第15号、第21号、第22号、第25号住居跡で、大型・中型の住居跡が多い。後者のものは、第7号・第30号・第31号住居跡のように比較的小型のものが多い。

ウ．主軸方位



第213図 住居跡主軸方位

ここで主軸方位とは、かまど本体部の中線と磁北方向を基準とした方位とのなす角としてとらえ、かまどを有するそれぞれの住居跡について計測した。この方位は、かまど構築の際、壁方向に対して直角に構築するかぎりその住居跡の向きを目安となるもので重要なものであるが、なかには壁方向と直角にならないものも少数ある。また、微地形の相違により異なってくるということもあるので微視的にとらえず、ある幅をもったグループとしてとらえるべきものとする。しかし、この

グルーピングされた住居跡を同時期のものとみる決定的な根拠とは必ずしもならないと思う。ただ、この主軸方位によってグルーピングされた住居跡について、ほかの諸要素によって相違をみていくことは、時期推定の一つの方法として妥当なものではないかと思われる。

第213図によってみると、第13号住居跡だけが反対方向にかまどを有するが、これは南側が斜面になっている場所に構築したために逆方向にかまどを造ったものと思われる、住居跡の方位と

してみた場合は、180 回転させた方位になる。

主軸方位は、大きく分ければ三つのグループに分けられる。

群は、南東方向から東方向までのグループで第11号・第20号・第31号・第34号住居跡である。これらの住居跡は東側区 2、西側区 2 である。

群は南東方向から S - 25 °- E あたりまでで、第18号・第19号・第22号・第23号・第26号・第32号・第33号・第35号住居跡である。これらは、東側区 3、西側区 5 である。

群は、S - 24 °- E あたりから南西方向までで、これらはさらに三つに分類できる。

- a 類は、S - 11 °- E から S - 24 °- E あたりまでで、第 6 号・第 8 号・第17号・第21号・第25号・第27号・第37号住居跡である。これらは、東側区 1、中央区 1、西側区 5 である。

- b 類は、南方向から S - 10 °- E あたりまでで、第 1 号・第 3 号・第 4 号・第 9 号・第16号・第24号・第29号・第30号・第36号住居跡である。これらは、東側区 3、中央区 3、西側区 3 である。

- c 類は、南方向から南西方向までで、第 2 号・第 5 号・第 7 号・第10号・第12号・第14号・第15号住居跡である。

以上を地区ごとにみると、中央区の住居跡は 群以外のグループになく、西側区の住居跡は 群と - a 類に多く、東側区の住居跡は 群 ~ 群に分散しているという傾向がみられる。

エ．かまど

住居跡のかまどは、第13号住居跡と第11号・第20号・第31号・第34号住居跡以外はほとんど南壁に面する壁に構築されており、壁の中央部分か、左右どちらかに寄っている。

かまどをどの方向に構築するかは、その土地の風向とか住居跡を構築する場所の微地形とか住居跡内の構造とかによって異なるものと思われる。また、ある時期における流行あるいは慣習とかの要因は、前者より弱いものではないかと考えられる。しかし、同一集団における規制とかはより強い要因になることは考えられる。

(ア) かまど構築の位置

群：東側に向く壁の南寄りに構築されたもので、第11号・第20号・第31号・第34号住居跡がこれに当たる。

群：南壁に構築されたもので、西寄りか東寄りか中央かの違いがみられる。

a 類は南壁の西寄りに構築されたもので、第 1 号 ~ 第 3 号住居跡、第 7 号・第 8 号・第 9 号住居跡、第10号住居跡の古いかまど、第12号・第14号・第15号・第16号住居跡第17号住居跡の古いかまど、第18号・第19号住居跡、第21号住居跡の古いかまど、第22号・第23号・第24号・第25号・第26号・第27号住居跡、第29号、第30号、第32号、第33号・第35号・第36号・第37号住居跡がこれに当たる。

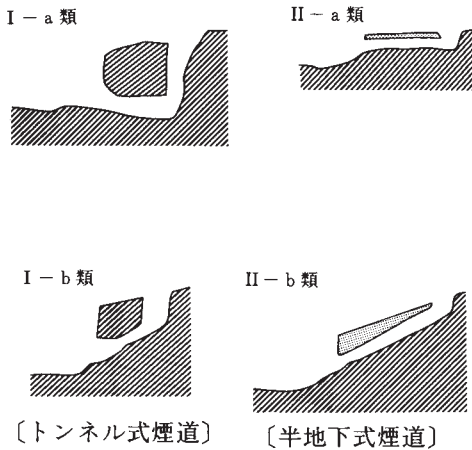
b類は南壁東寄りに構築されているもので、第5号、第6号住居跡のかまど、第10号住居跡の新しいかまど、第17号住居跡の新しいかまどがこれに当たる。

c類は南壁中央部分に構築されたもので、第4号住居跡のかまど、第21号住居跡の新しいかまどがこれに当たる。

群：北壁に構築されたもので、第13号住居跡がこれに当たり、中央部分に構築した後東寄りに造り替えている。

このように、東壁に構築されたかまどは南寄り（隅に近い部分）に位置し、南壁も北壁の場合も当初は西寄りの部分に構築されたが、造り替えで中央あるいは東寄りの部分に位置しているものがほとんどである。このことは、この土地の特徴である偏東風（やませ）を強く意識してかまどの構築位置を選定したものではないだろうか。

（イ）かまどの構造



かまどの本体部分は袖及び天井部の骨材としてシルト岩が使用され、それに粘土を貼って構築したものと思われる。支脚としては、中央部分が穿孔されたものと穿孔のない支脚を使用している例と小型甕形土師器を倒立させて使用した例がある。

かまどの造り替えの例もあるが、この場合、前述の第10号・第13号・第17号・第21号住居跡のように位置をかえる場合のほかに同じ位置で造り替える例もかなりある。

第214図 かまど分類模式図

煙道の構造は、トンネル式（群）と半地下式（群）の相違がみられるのでグルーピングしておきたい。

群のトンネル式としたものは、壁面を繰り抜き、横穴部分と煙道の出口へ通じる縦穴部分から成るものである。これには横穴部分が下方へ傾斜した後に立ち上がって出口へ通じるもの（a類）と横穴部分が下降せず、むしろ上昇みに繰り抜かれ緩い傾斜で立ち上がるもの（b類）がある。

群のトンネル式としたものは、壁面を繰り抜き、横穴部分と煙道の出口へ通じる縦穴部分から成るものである。これには横穴部分が下方へ傾斜した後に立ち上がって出口へ通じるもの（a類）と横穴部分が下降せず、むしろ上昇みに繰り抜かれ緩い傾斜で立ち上がるもの（b類）がある。

群の半地下式としたものは、トンネル式のように地山を繰り抜かず、煙道部分を掘り窪めた後トンネル状に構築したと思われるもので、その形状から二つのタイプに分けられる。

a類は、本体部分から緩い傾斜、又はほぼ水平に掘り窪められているもので煙道の両脇、又は天井まで石で囲まれているものもある。

b類は、本体部分からa類よりは急な角度で傾斜して出口方向へ通じる煙道で、トンネル式

のものを同じ位置で造り替える場合に多くみられるタイプである。

これらをまとめると次のようになる。なお、この項では、住居跡を「H」と略称し、同位置で造り替えられたかまどについては「新」、「旧」で区別し、位置を替えて改築されたものについては「A」、「B」として記載することとする。

群 a 類... 1 H、3 H - 旧、10 H - A (旧)、17 H - B (旧)、18 H、19 H、23 H、24 H、25 H、
26 H - 旧、27 H、35 H、36 H

群 b 類... 2 H - 旧、5 H、7 H、8 H、9 H、10 H - B (新)、12 H、21 H - A (新)、30 H、
31 H、40 H - 旧

群 a 類... 4 H、6 H (石囲煙道)、11 H、16 H (石囲煙道)

群 b 類... 2 H - 新、3 H - 新、13 H - 新・旧、14 H、15 H、17 H - A (新)、20 H、21 H -
B (旧)、22 H、26 H - 新、40 H - 新

まだ、造り替えのある住居跡とない住居跡とに分けてみると次のようになる。

造り替えなし	{	群	{	a 類... 1 H、8 H、18 H、19 H、23 H、24 H、25 H、27 H、35 H、36 H
		群	{	b 類... 5 H、7 H、8 H、12 H、30 H、31 H、32 H、33 H、34 H
造り替え	{	同位置	{	- a - b... 3 H、26 H
			{	- b - b... 2 H、40 H
	位置を変える	{	- a - b... 10 H	
		{	- a - b... 17 H	
		{	- b - b... 21 H	
		{	- b - b... 13 H	

以上のように本遺跡の特徴としては、大多数は当初トンネル式のかまどを構築していることがあげられる。そして、造り替える時には同位置の場合が半地下式、位置を替える場合がトンネル式か半地下式にしている。

第21号住居跡は、半地下式 トンネル式という造り替えを行なっているが、このような例は1例だけである。

このようなことから本遺跡における住居跡のかまどは、トンネル式から半地下式へという流れがあったように思われる。また、かまどの造り替えのある住居跡は少数であるという傾向がみられ、比較的短期間使用された住居跡が多いということも推定もできよう。

(オ) 柱穴

明確に主柱穴を持つものは、第3号・第15号・第21号住居跡で、大型住居跡又は中型でもそ

の区で比較すれば最大規模の住居跡である。

しかし、大型住居跡でも第23号・第26号住居跡は深くしっかりした柱穴を検出できなかった。

第3号住居跡の柱穴は、かまどが構築されている南壁下に3個と、北壁から中央部寄りに2個検出している。Pit - 4とPit - 7には新旧関係があるのではないかと思われるが、組み合わせとしては、Pit - 3 ~ 2 ~ 1 ~ 4の組み合わせはほぼ正方形でありPit - 3 ~ 2 ~ 1 ~ 7の組み合わせは台形である。

第15号・第21号住居跡の柱穴は、しっかりした柱穴で、かまどが構築されている部分避けて台形に配置されている。また、住居跡の四隅にも浅いピットが存在するが、上屋構造を考察する上で重要なものと思われる。特に第21号住居跡は、竪穴外に周堤というべき盛土があり、独特の上屋構造になっていたものと思われる。

(カ) 張り出し部

張り出し部を持つ住居跡は、第14号・第23号・第26号・第30号・第34号住居跡である。これらは四つのタイプに分けられる。

a類は、かまどに向かって左側の壁に構築したもので、この部分には周溝が巡らされず、床面は堅く締まっているものである。第14号・第30号住居跡に構築されている。

b類は、かまどが構築されている南壁に構築されたもので、褐色土が段状に踏み固められたように締まっている。第23号住居跡に構築されているものである。

c類は、かまどの右側の壁が張り出しているもので、この張り出し部分にも周溝が巡っているものである。第26号住居跡の張り出しがこれに当たる。第34号住居跡かまど脇の張り出しは、周溝が巡っていないので、第26号住居跡のものとは同一には考えられないかも知れないが、形態としては類似するものである。

d類は、コーナー部分が張り出しているもので、第34号住居跡のものはやや段状になっている。しかし、踏み固められたという堅さと締りはない。

以上のうち、c類は、永野遺跡(1980)、大平遺跡(1980)に類似例があり、収蔵施設ではないかと考察されている(遠藤、1980)。

a類、b類は出入口ではないかと思われるものである。

(キ) 竪穴外の盛土

住居跡は傾斜している場所にも構築されており、構築する際に土盛りをした痕跡もみうけられる。このような例は、台地の端に構築されたものにみられる。第1号・第8号・第13号・第24号・第25号・第30号・第32号住居跡などは、斜面の上方に構築されているために低い方に土盛りしている例である。また、これとは逆に斜面の下方に構築されている第31号住居跡は斜面に対する壁側にだけ土盛りをしている。しかし、これ以外に明らかに竪穴周辺に土盛りをして

高くしている住居跡も3軒ある。第3号・第21号・第26号住居跡がその例で、大型の住居跡にみられる。この場合、いずれの住居跡もかまどが構築されている側には、土盛りされていない。前述の柱穴との関連があり、独特な上屋構造が想定される

(ク) かまど燃焼部以外の焼土

かまど以外に住居跡のほぼ中央ないしは、中央寄りに焼土を検出した住居跡がある。これは、火災のために変色したというよりは、もっと長時間局部的に火を受けたためについた痕跡と思われるものである。このような焼土は、第1号・第3号・第4号・第10号・第11号・第20号・第35号住居跡から検出した。

(ケ) 鉄滓出土の住居跡

鉄滓出土の住居跡は、第11・17・20・21・22・23号住居跡である。この中で注目されるのは、第17号住居跡の出土状況である。住居跡の北壁寄りの床面に約8cm突き刺さって出土したものである。しかし、特に埋めたという痕跡が認められず、熱せられた鉄分を含んだ液状のものが床面の隙間に入り込んで固まった状況である。このようなものとすれば、この竪穴内で鉄を溶かす作業をしていたものと考えられ、同住居跡は、工房的な機能を持つものではないかと考えられる。

(2) 土壌

本遺跡の歴史時代に属すると思われる土壌は、次の3タイプに分けられる。

a類は、平面形が方形又は方形くずれで、やや楕円形に近い形状で深さが1m以上もあるもの。第3号・第11号・第12号・第13号土壌がこれに当たる。第3号・第11号土壌のように台地の先端部分で沼に直面する場所にあるものと、第12号・第13号土壌のように住居跡群の中央部分にあるものがある。

b類は、平面形が方形又は長方形で、深さが1m未満のもの。第1号・第16号土壌がこれに当たり、住居跡の煙出し周辺に構築されている。

c類は、平面形が円形又は楕円形で比較的浅いものである。構築されている場所では、第2号・第10号・第15号土壌のように住居跡の煙出し周辺に位置するもの、第7号・第8号・第9号・第14号土壌のようにかまど構築以外の壁際に位置するもの、第4号・第6号土壌のように住居跡から離れた場所に位置するものがある。

これらの土壌は、形状の相違もその用途上で重要と思われるが、それ以上に構築されている場所により大きな意味があるのではないだろうか。 (成田)

第2節 遺物

1. 縄文時代の遺物

(1) 土器

縄文時代の土器は早期の貝殻文土器、中期の最終末と思われる土器、後期前半の土器、晩期の土器が出土した。ここでは本遺跡で大多数を占める後期前半の土器について述べたい。

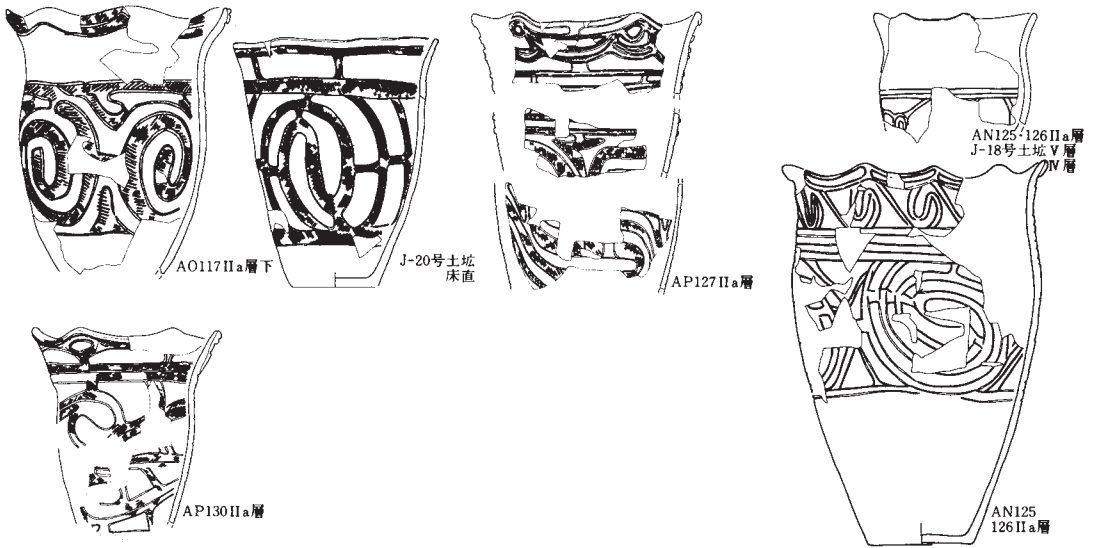
後期の土器のうち復原された土器を第 群に分類した。このうち第 群としたものは口頸部と胴部の文様帯を区分するという特徴のもので、この中の第 5 類の第38図 1 は波状口縁に縄文の施文された隆帯があり、比較的幅の広い 2 本の平行沈線間に縄文を付して、渦巻状の文様を描くという特徴をもっており、螢沢遺跡第 3 群土器（青森市螢沢遺跡調査団：1979）や中ノ沢西張遺跡第 1 号竪穴住居跡出土土器（青森県教育委員会：1976c）・葦窪遺跡第15号住居跡出土土器（青森県教育委員会：1984d）に類似するものである。本群の第29図 1 や第38図 2、第38図 5 はこれとはやや趣を異にしているが、胴部文様帯の渦巻きあるいは巴状の文様は胴部全体に大きく描かれて、となりのものと接続されており、この点では本群の他の土器と似ているものである。しかし、本群のうちでも第38図 3 は胴部文様は巴状であるが、上下 2 段に分かれて隣のものとは斜線で連結されており、第38図 1 からはかなり変化しているものである。第38図 2 も口頸部の文様をみると第38図 3 に近く隆線も細めで異質なところがある。第38図 2 の口縁にみられるいわゆる長方形文は第38図 5 の波状口縁頂部にもみられるが、この土器などは第 6 類の文様であり、一ノ渡遺跡 S T 15 土壇出土土器（青森県教育委員会：1984a）などに似ていて、第 8 類の施文技法の多い本遺跡の第 群に近いものと思われる。以上のように第 群としたものはいくつかの型式を含んでいるようである。

第 群は、第 群とは文様構成が異なるがきわめて類似するものである。その文様構成においても、第 群のようにはっきり個々のものが分かれた渦巻きや巴状のものではなく斜線や弧などによって様々な方向に連結されていて、主体となる文様を不明瞭にしており、またそれらが上下にいくつか連続したものになって縦方向への文様展開をするなど、極めて第 群に近いものとなっている。

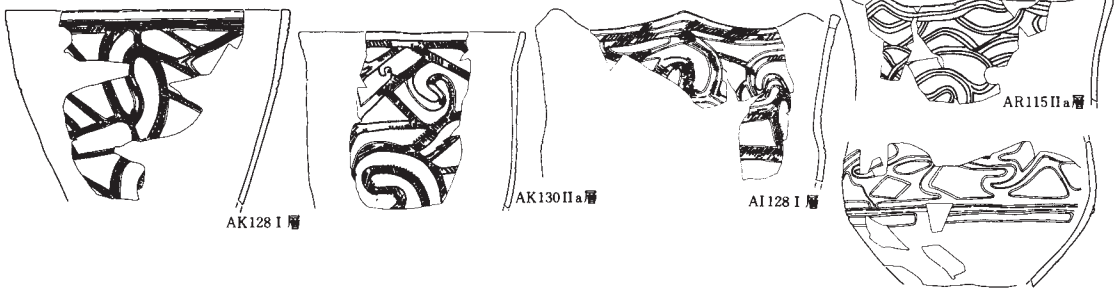
第 群土器は、主な特徴をあげると以下ようになる。

1. 器形は頸部のくびれから口縁にかけて緩く外反するもので、そのくびれは緩くしかも低い位置にある。
2. 口頸部文様帯と胴部文様帯を区画していない。
3. 文様は間隔の狭い 2・3 条の平行沈線で描かれる。
4. 磨消縄文の土器では、縄文は平行沈線の間でありその方向に沿って回転し施文される。
5. 文様は縦に蛇行する線、縦方向の弧の結合によるウロコ状のもの、縦方向に連結された斜

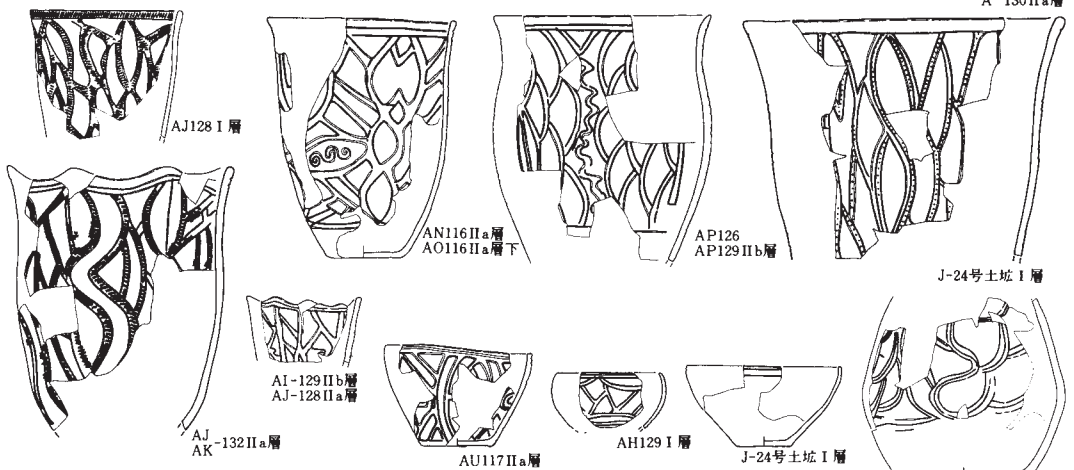
第I群



第II群



第III群



第IV群



第215図 縄文時代後期の土器分類図

線などであり、それらの連結あるいはそれらを結ぶ斜線でなりたっている。口縁には1・2条の口縁に沿った沈線が引かれている。

6．文様の展開は胴下半まで至っており、縦方向に連続するものが多い。

7．隆帯は施されない。

このような第 群土器は、これまで県内では類例の少ないものであるが、一ノ渡遺跡や大石平遺跡 区（青森県教育委員会：1985b）月見野遺跡（葛西：1978）などでいくらか見られる。また県外では縦位に展開する文様など堀之内 式（磯崎：1964）に共通する要素が多いと思われる。なお、鉢形土器の第17図18・第51図309や壺形土器の第53図363も本群の土器と文様構成等が類似している。

さて本遺跡出土土器の破片資料については、施文技法により分類したが、これらの土器について、文様パターンもあわせその位置付けを考えてみたい。

1類は大木10式とは胴部文様が異なると思われるが、大木10式にあるヒレ状の隆線をもつものであり、これと似た土器は鶉窪遺跡（青森県教育委員会：1983b）にある。また鷹架沼竪穴遺跡（青森県教育委員会：1978e）や葦窪遺跡、牛ヶ沢3遺跡（青森県教育委員会：1984d・e）、丹後谷地遺跡（八戸市教育委員会：1985）出土の土器も似ているものである。2類は5類とは異って脇に沈線を伴わない隆線が素文地に施文されるもので、葦窪遺跡や牛ヶ沢（3）遺跡、丹後谷地遺跡、螢沢遺跡第5群にみられる。3類は縄の側面圧痕による文様を特徴とするもので、牛ヶ沢（3）遺跡、丹後谷地遺跡でまとまった資料が出土した。4類は縦位回転の縄文地に沈線で施文するものであるが、沈線は5～8類のように常に2本平行ではなく、斜め沈線と水平な沈線の交点が弧で結ばれ、また山形、逆山形の斜線の間に渦巻が描かれるという特徴的な文様をもつものである。弥栄平（2）遺跡（青森県教育委員会：1984b）川代遺跡（川内町教育委員会：1981）や螢沢遺跡第 群土器に類似する。この山形、逆山形の頂点から渦巻やカギ状の文様が描かれるものは、今村啓爾によれば堀之内 式の初頭とされ、本遺跡の第 群のような縦位に連なる巴や楕円の文様のものより古い段階のものと考えられている（今村：1977）。なお236は本類の中にあってはやや異質なものである。5・6類は、第 群に隆線（帯）のみられないことから、ほぼ第 群としたものと考えてよいと思われるが、第 群は前述のように数型式の土器を含んでいると考えられ、破片の5・6類も同様のことがいえる。この中では、第 群のところで述べた口縁の頂部の左右にいわゆる長方形文を施文するものが数多くみうけられる。7a類は沈線が常に2ないし3本平行ではなく、1本で描かれる部分がかかなりあり、縄文もほぼ縦方向に回転施文きれていて、4類と共通する。また縄文の節が大きく、沈線が太い点でも4類と似ているものである。7b・8類は隆線を伴わないものとしたが、5・6類の部分的な隆線の施文されるものの場合、隆線部分以外の破片であれば、7b・8類に含まれているこ

とも考えられる。文様は第 5・6 類のそれぞれの土器にみられる文様が存在する。なお 8 類の 群に含めた第40図18や鉢形土器の第51図309は、2本の沈線の末端が連結されて、いわゆる輪ゴム状沈線文に近いものとなっている。これは深鉢や壺形土器の5・6類の隆線(帯)を多用するものに一般的にみられる特徴である。5・6類の土器では隆線(帯)の脇に沿って引かれた沈線が隆線(帯)の交点において接合しているが、ここから隆線(帯)をはずすとこのような文様が生じると考えられる。

ところで、本遺跡の遺構外出土の破片土器口縁部について、各個体をできるかぎり識別し、その縄文原体と隆線(帯)の有無について調べたが、次のような結果となった。

第5類 隆線(帯)のあるもの R L 38、L R 34、L 2

第7b類 隆線(帯)のないもの R L 7、R 1、L R 17、L 15 (総数114個体分)

これを見ると隆線(帯)のあるものではR L、L Rが多く、Lが少く、隆線(帯)のないものではR Lが少くなり、Lが多くなる傾向がうかがえる。

また粗製の第9～13類では総数109点のうち、第9類はL R Lが1点、R Lが12点、L Rが28点、Lが10点、第10類はR L Rが1点、R Lが2点、L Rが2点、Lが1点、第11類はR Lが4点、L Rが2点、Lが6点、第12類はRのL巻 R巻が20点、RのR巻 L巻が12点、LのL巻 R巻が1点、LのR巻 L巻が2点、1のL巻 R巻が1点、第13類はRが3点、Lが1点となっている。 (坂本)

(2) 石器

本遺跡から出土した石器は土師器を伴う遺構内から出土した砥石を除いて、すべて東側地区から多量に出土した。縄文時代後期前半の土器に伴うものが大半を占めるものと思われる。

本遺跡では遺構内外合わせてA～E類の剥片石器が21点、G・H類の石斧が15点、I・J類の礫石器が119点出土した。剥片石器に比べて礫石器が著しく多い傾向がみられる。

ここでは出土量の多かったI類・J類について述べる。

I類ではI類は長側縁に「擦り」がみられ、平坦面は「研磨」されているものである。形態が定形化しているものである。これは大石平遺跡(青森県教育委員会:1985b)にもみられる特徴で、縄文時代後期前半に一般的になる石器ではないかと思われる。類の第62図66は、先端が三角屋根状の形態をしているもので、数は少いが、大石平遺跡にもみられ、また、当センターが1984年に調査した弥栄平遺跡(1)(1986年3月報告書刊行予定)では多数出土しており、これもこの時代の定形化した石器の一つと考えられる。類は他の類にみられないチャートを素材とするものが多数を占めるのが著しい特徴である。これはチャートのもつ堅い性質を必要とする用除のために用いられたためと思われる。

J類では類の第65図121と第18図7に側縁に剥離がみられ、剥離のない側面が自然面であ

第79表 出土石器一覧表

	計	遺構内	遺構外	A 安山岩	B 砂岩	C チャート	D 凝灰岩	E 頁岩	F 閃緑岩	G 泥岩	H 流紋岩	I 珪質頁岩	J 玉髓	K 輝緑岩	L 鉄石英
A. 石 鎌	1	1										1			
B. 石 錐	1		1									1			
C. 石 ヒ	1		1									1			
D. 石 筥	2	1	1									1	1		
E. その他の剥片石器	16	4	12									8	7		1
E-I類	11	3	8									6	5		
E-II類	5	1	4									2	2		1
F. 剥片・石核類	101	8	93					1		6		93	1		
F-I 使用痕ある剥片	22	4	18									22			
F-II その他の剥片	78	4	74							6		71	1		
F-III 石核	1		1					1							
G. 磨製石斧	12		12		1				10					1	
H. 打製石斧	3	1	2						1		2				
I. 磨敲凹石類	96	7	89	60	6	20	7	1	1	1					
I-I	22	3	19	17			5								
I-II	8		8	7	1										
I-III	10	2	8	8	1				1						
I-IV	6	2	4	4			1			1					
I-V	4		4	3			1								
I-VI	31		31	10	1	20									
I-VII	5		5	3	1			1							
I-VIII	10		10	8	2										
J. 石皿・台石類	23	8	15	17	3		2	1							
J-I	7	6	1	5	1		1								
J-II	12	2	10	12											
J-III	3		3		2			1							
J-IV	1		1				1								
K. 軟質凝岩の石器	1	1					1								
L. その他の石器	1		1				1								
計	258	31	227	77	10	20	11	3	12	7	2	105	9	1	1

るのに対してその部分は折断面となっている。これはこの石皿が破損したものでなく人為的に割って手ごろな大きさに作られたものと思われるものである。(坂本)

2. 弥生時代の遺物

弥生時代の土器は東側地区の遺構外や、土師器を伴う住居跡の覆土中から出土した。これらについては、主にその文様から6類に分類したが、以下にそれぞれの特徴的な文様についての類例をみてみたい。

第68図の1・2・3の口頸部の肥厚するものは大石平遺跡(青森県教育委員会:1985a)にみられ天王山式(坪井:1953)にもある。また、これに類似すると思われる複合口縁は関東地方後期前半の久ヶ原式などに特徴的にみられるものである(神沢勇一:1966)。

第1類とした第68図1の土器の工字文状の文様は念仏間遺跡(橘:1977)・大石平遺跡・外崎沢(1)遺跡(脇野沢村教育委員会:1979)・螢沢遺跡(青森市螢沢遺跡発掘調査団:1979)や北海道の瀬棚南川遺跡の第群(瀬棚町教育委員会:1983)にみられる。また縦方向に向かいあった弧は瀬棚南川遺跡の群土器にみられ、最近札幌市K135遺跡でも出土している。K135遺跡のものは内面に砂の移動を伴う強いナデがあり、この点でも本遺跡の土器と似るものである(上野秀一氏の御教示による)。この弧と同時に施文される「几」状の文様は福島県金原田遺跡の土器にもみられる。この文様は2本1組の沈線で描かれているが、このような文様は北陸の天王山式の特徴とされている(中村:1976)。口縁部の縦の短い沈線は、大石平遺跡や北海道アヨ口遺跡の第3類土器(白老町教委:1980)や南川遺跡の群にもみられる。しかし本遺跡の土器のように口縁外側の貼付の上になされたものではない。同じ第1類の4の土器の胴部文様下端の下向きの連弧文は螢沢遺跡・上尾鮫(2)遺跡(青森県教育委員会:1978e)などにみられるが、天王山式の特徴とされる(中村:前掲書)。なお第1類の土器は胎土や色調が他類のものとかかなり異なっており、特に第68図1の土器などは複雑な文様をもつもので、本遺跡出土の弥生時代の土器の中にあつて特異な印象を受けるものである。

第2類の鋸歯状文は田舎館3群土器(須藤:1982)や大石平遺跡・念仏間遺跡・外崎沢(1)遺跡・螢沢遺跡などにみられ、第69図8の角度のきついものは、南川の群(瀬棚町教育委員会:1976)と群(瀬棚町教育委員会:1983)にみられる。

第3類の特徴とした連弧文は、念仏間遺跡(工藤:1968)・家ノ前遺跡・102号遺跡・大石平遺跡・螢沢遺跡・アヨ口遺跡3類にみられる。これは天王山式にある「上下に設けた界線を基底として半円あるいは三角文を連続的に対置させる」(坪井:1953)文様に似るものである。

第5類の第69図13の文様は外崎沢遺跡・念仏間遺跡・大石平遺跡・天王山式にみられる菱形文の一部ではないかと思われる。

第6類の縄文のみ施文された土器は、口縁内面に縄文が施されない点で異なっているが、頸部が無文化し、その上下の縄文が横走ぎみで、その他が縦走ぎみな点など外崎沢(1)遺跡の第a類の土器と極めて類似する。外崎沢(1)遺跡の土器は葛西が八幡堂式と念仏間式の間位置づけている。また、無文部はないが頸部が構走で、その他が縦走する縄文の土器はアヨロ3類や南川群にみられる。

以上、本遺跡出土土器と類似する土器を出土した各遺跡をあげたが、その編年上の位置づけは諸氏によりなされている。

南川群は高橋和樹により中村五郎のいう恵山A B式とされているが(瀬棚町教育委員会:1976)、須藤隆は東北地方の4 a期に併行するかやや新しい恵山期に位置づけている(須藤:1985)。念仏間遺跡出土の土器は橋善光により、弥生時代後期前半のものとされている(橋:1979)。また、須藤は念仏間・外崎沢(1)出土の土器は恵山B式に類似するとし、東北地方の5期に(須藤1982)、アヨロ3類・南川群・恵山B式を東北地方の4 b期あるいはそれ以降とする恵山期に位置づけている。螢沢遺跡出土土器は葛西励が天王山式系の土器としている。すでに述べたが金原田遺跡の土器も天王山式のものである。中村によれば天王山式は恵山B式に後続する恵山C式と一致する特徴をもつとされている(中村:1973)。

このように本遺跡の土器と類似する各遺跡の土器は、弥生時代後期の各期に位置づけられており、本遺跡の土器も後期のものと考えられる。特に最近この時期の遺構や遺物が多数検出された大石平遺跡と比較してみると、本遺跡の場合、垂柳遺跡出土土器(青森県教育委員会:1985b)にみられる数条の水平な沈線や沈線間の刺突、頸部の無文帯を沈線で画するものはみられず、頸部の屈曲の強いものが少なく、連弧文がある点などから、より田舎館3群からはなれたものと思われる。よって本遺跡の土器は、大石平遺跡の土器群よりは若干新しいものとなるようである。しかし、資料が少く断片的で、また、本遺跡の土器の中にも様々なものがあるため、明確な位置づけはむずかしいものと思われる。(坂本)

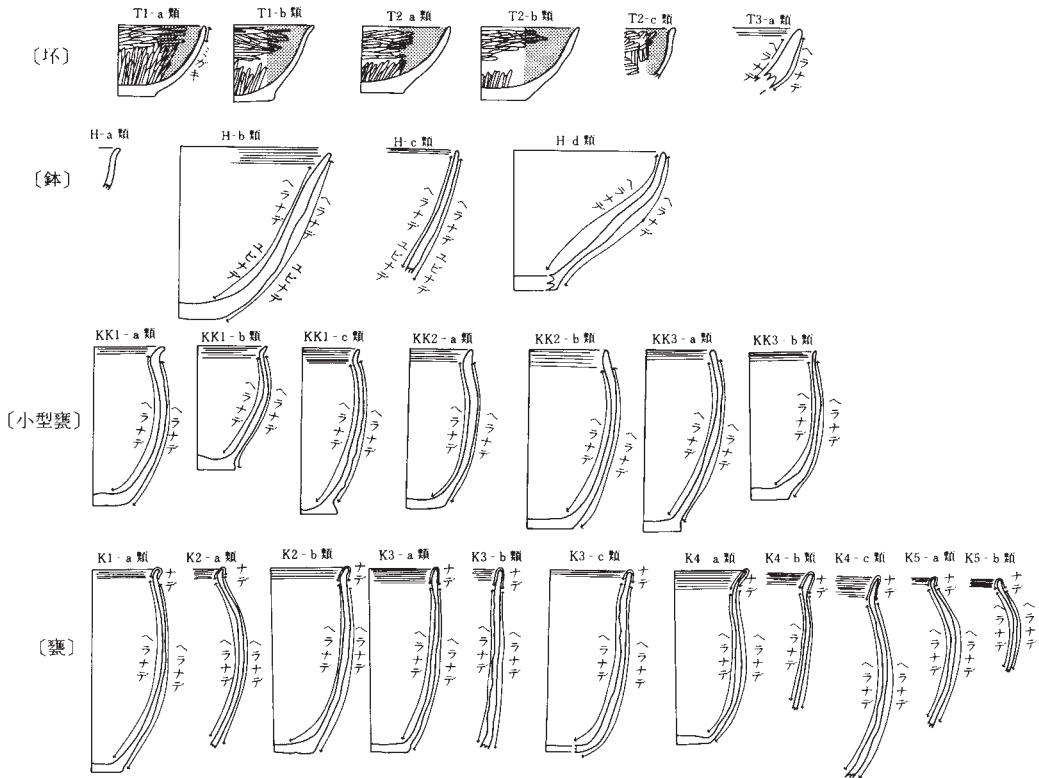
3 歴史時代の遺物

本遺跡から検出した竪穴住居跡39軒のうち、37軒から山土した遺物は歴史時代の遺物でありその種類は、土師器・須恵器・陶磁器・鉄製品・砥石・鉄滓等である。

このうち、土師器は、ほぼ完形で出土したものが21個、復原できたものが59個で、その他破片はダンボール箱で30箱分である。須恵器はすべて破片で出土し、総数量は80片である。陶磁器は第34号竪穴住居跡の覆土から出土したものの1点である。鉄製品は37個であるが元の形状をとどめているものは約12個である。砥石は5個で、鉄滓は約15個である。

(1) 土師器

本遺跡では坏形・鉢形・甕形・袖珍土器が出土したが、坏形・鉢形は非常に少ない。甕形は非常に多く、形態的にいろいろなものがある。また、甕形でも口径が10～14cmぐらいの小型のものもかなり出土している。袖珍土器は第26号竪穴住居跡からまとめて出土している。



第216図 土師器分類模式図

ア．坏形土師器

ほぼ完形のもものが4個で、あとは破片である。成形はろくろ使用のものほとんどである。製作技法及び形態の違いにより第216図のように分けられる。

T₁-a類は、ろくろ成形で内面全面と外面口縁部にかけてミガキと黒色処理が施され、口縁部は直立ぎみである。この類は第36号竪穴住居跡覆土出土のもの（第204図4）がテピカルなものである。

T₁-b類は、製作技法はT₁-a類と同じであるが、口縁部が外反するものである。この類は第20号竪穴住居跡床面直上から出土したもの（第138図）があげられる。

T₂-a類は、ろくろ成形で内面だけがミガキ及び黒色処理が施され、口縁部がやや内湾ぎみになるものである。この類は第26号竪穴住居跡床面直上から出土したもの（第204図3）である。

T₂-b類は、ろくろ成形で内面だけにミガキが施されているが黒色処理が施されたものかどうか不明なもので口縁部が内湾ぎみになっているものである。この類は第3号竪穴住居跡床面出土のもの（第81図1）がテピカルなもので、第23号竪穴住居跡覆土内出土のもの（第204図2）も入るものと思われる。

T₂-c類は、製作技法はT₂-b類と同様であるが、口縁部が外反するものである。この類は第25号竪穴住居跡床面直上から出土したもの（第161図1）である。

T₃-a類は、粘土紐巻上げ成形とみられ、指ナデ・ヘラナデ調整を施しているものである。この類は、第12号住居跡覆土内から出土したもの（第113図10）で、発茶沢遺跡（1982）から多く出土しているものである。

イ．鉢形土師器

ほぼ完形のもは第21号竪穴住居跡床面出土のもの（第143図1）だけで、口縁から底部まであり、復原できたものは第30号竪穴住居跡出土のもの（第176図4）である。これらのほか、底部のないものが第30号竪穴住居跡出土のもの（176図5・6）と第32号竪穴住居跡かまど内出土のもの（第180図1）で、ほかは部分的な破片である。これらのものはすべて成形が粘土紐巻上げによるもので、口縁部に内外面とも強い横ナデが施され、胴部は内外ともおもに篋状工具による横位及び縦位のナデが施されているものである。しかし、形状の違いで次のように分けられる。

H-a類は、口縁が多少外反し、体部がやや張り、緩くカーブして底部になるもので、第14号竪穴住居跡出土のもの（第120図7）である。

H-b類は、口縁が広く緩く外反し、底部が丸底風なもので、第21号竪穴住居跡床面出土のものがテピカルなものである。

H-c類は、口縁から底部までほぼ直線的に傾斜するもので、第30号竪穴住居跡出土のもの（第176図6）がこれに当たる。

H-d類は、口縁部が内湾ぎみで体部上半がやや張り、下部で急激に屈曲して底部に続くも

第30号竪穴住居跡から出土した2個がこれに当たる。

ウ．甕形土師器

ほぼ完形のものは、第2号・第5号・第18号・第32号・第33号住居跡から出土し、口縁から底部まで接合し、全体の形状がわかるものは第5号・第8号・第18号住居跡から出土している。製作技法は、鉢形と同様であるが、形状の違いによって次のように分けられる。

K₁-a類は、口縁部が「く」の字状に外反し、胴が緩やかに膨らみ、胴中央部に最大径を持つものである。第3号住居跡床面直上及びかまど等から出土したもの（第82図12）、第8号住居跡かまど内出土のもの（第102図1）、第32号住居跡床面直上及びかまどから出土したもの（第180図3）などがこれに当たる。

K₂-a類は、口縁部が狭く、小さく外反し、胴中央部が緩やかに膨らみ、胴下部はやや直線的にすぼむので、第8号住居跡かまど出土のもの（第102図1）がテピカルなものである。

K₂-b類は、口縁部形状はK₂-a類と同様であるが、胴部が特に丸みを帯びて膨らむことがなく、胴下部がすぼむものである。第32号住居跡床面出土のもの（第180図4）及び第2号住居跡覆土内出土のもの（第76図7）などがこの例である。

K₃-a類は、円筒形で、口縁が直立ないしは内湾ぎみのものである。第10号住居跡覆土内出土のもの（第108図12）がこれに当たる。

K₃-b類は、円筒形で、口縁が外反ないし、外反ぎみのもので、第26号住居跡かまど内出土のもの（第164図11）がこれに当たる。

K₃-c類は、バケツのような形状で、口縁部が広く緩やかに外反するもので、第18号住居跡覆土内出土のもの（第131図1）がテピカルなものであるが、このタイプは非常に少ない。

K₄-a類は、口縁部が広く緩く外反し、胴中央部に近い部分から胴下半までやや丸みを帯び底辺部ですぼむもので、第96図4がテピカルなものである。このタイプもこの遺跡では少ない。

K₄-b類は、口縁部が広く、緩い「く」の字状に外反し、胴部の張りが弱いものである。第6号住居跡かまど内出土のもの（第96図4）がこれに当たる。

K₄-c類は、口縁部が広く、外反し、胴部が膨らみ緩いカーブですぼむものである。第30号住居跡床面から出土したもの（第176図1）がこれに当たる。

K₅-a類は、口縁部がやや広く、外反ぎみで、胴上部が張り、やや壺形に近い形状を示すもので、第23号住居跡かまど内出土のもの（第153図11）がテピカルなものである。

K₅-b類は、口縁部が狭く、直立ないし内湾ぎみで胴上部が張るタイプである。

以上のタイプを模式図にすると、第216図のようになる。各住居跡出土の土師器は、同一住居跡内のものは、同一ないしは、類似関係のタイプのものが多い。

エ．小型甕形土師器

ほぼ完形のものは、第5号・第6号・第12号・第28号・第29号・第34号・第35号・第36号住居跡から出土したもので、その出土状態は特殊なものもある。

第5号住居跡出土のもの(第91図4)は覆土及びPit-1から出土した破片を接合してほぼ完形になったものである。第6号住居跡出土のもの(第93図2)は、かまど内とかまど付近から出土した破片を接合したものである。第12号住居跡では、かまど出土のもの(第113図5)と覆土内から出土したもの(第113図4)がほぼ完形で出土した。第28号住居跡出土のもの(第170図5)は、床面直上からまとまって出土した破片を接合してほぼ完形になったものである。第29号住居跡出土のもの(第173図9)は、かまど燃焼部底面から倒立の状態出土したもので、支脚として使用されていたものである。第34号住居跡出土のもの(第184図3)は、かまどの煙出し部覆土内から出土したものである。第36号住居跡出土のものは第197図4が支脚として使用されていたものであり、第197図7は、煙道底面から出土したものである。

口縁から底部まで接合し、形状がわかるものは覆土内から出土したものが多く、第4号・第10号・第13号・第18号・第35号・第36号・第37号住居跡などから出土したものは、覆土内の破片を接合したものである。なお、第24号住居跡では、煙道上面、第23号住居跡ではかまど内、第5号住居跡では、Pit-1覆土内から出土したものもある。

小型甕形土師器も、成形は鉢形や甕形と同様であるが、形状にそれぞれ違いがみられ、次のように分けられる。

KK₁-a類は、口縁が「く」の字状に外反し、胴部の張りは緩く、最大径が胴上半にあるものである。第28号住居跡床面直上出土のものがテピカルなものである。

KK₁-b類は、口縁が「く」の字状に外反し、胴部が張り、胴下半からすぼむもので、第5号住居跡Pit-1の覆土内出土のもの、第36号住居跡内出土のものである。

KK₁-c類は、口縁がやや緩い「く」の字状に外反し、胴中央部が張り、下部が徐々にすぼんで、底辺がくびれるものである。第4号住居跡第10層内出土、第29号住居跡かまど支脚がテピカルなものである。

KK₂-a類は、口縁部が狭く、小さく外反し胴部があまり張らず緩くすぼむもので、第2号住居跡かまど内から出土したもの(2個)、第3号・第6号・第23号・第31号住居跡のかまど内から出土したものなど、小型甕形土師器のなかでも数が最も多いタイプである。

KK₂-b類は、口縁が小さく外反し、口頸部直下が急に張り、胴中央部があまり膨らまないうで底辺部で急にすぼむもので、第34号住居跡煙道内出土のものがこのタイプである。

KK₃-a類は、口縁が直立ないしは、内湾するもので、胴部の張りが無いものである。第35号住居跡Pit-5内出土のもの、第37号住居跡床面直上出土のものがこのタイプである。

KK₃-b類は、口縁が直立に近いがかすかに外反しており、胴部があまり張らないものであ

る。第12号住居跡かまど内から出土したもの（2個）がテピカルなものである。

以上、土師器を坏形・鉢形・甕形・小型甕形と器形ごとにタイプ分けしたが、要約すると、次のようなことがいえる。

坏形は、ロク口成形で、内面ミガキ及び黒色処理が施されたものがほとんどで、赤褐色土器とかあかやき土器と呼称されているものと類するものは出土していない。

鉢形・甕形は、口縁が広く、外反するタイプもあるが、多数を占めるものは、口縁が小さく、外反するタイプである。また、口縁部直下から急に膨らむものもかなりある。これとは逆に、胴部の張りが緩いタイプのものは少ない。

小型甕形は、口縁が小さく、外反するタイプが多数を占め、口縁が須恵器のように屈曲するタイプとかロク口使用と思われるものは出土していない。（成田）

（2）須恵器・陶磁器

須恵器の復原できたものは小型甕が1個で、これは第12号住居跡床面から出土した破片と住居跡外及び同住居跡覆土内から出土した破片と住居跡外及び同住居跡覆土内から出土したものがそれぞれ接合されて一個体分になったものである。破片は、住居跡外に散在しているものが多く、住居跡内では第12・14・22・26・35・36・37号住居跡から少量出土した。

器種は、甕形・長頸壺形・小型甕形である。

小型甕は、ロク口水挽き後底面から底辺にかけて調整し、糸切痕を消しているものである。

壺は、底が高台付で、底面に中央部から放射状に棒状工具でナデを施したのも出土している。

甕は、外面に叩き目が入り、丸底のものである。

陶磁器は、第34号住居跡覆土第2層から出土した灰釉陶器1点だけである。これは、 $\frac{1}{2}$ ほど残存する破片で高台付小皿である。ロク口水挽き成形で付け高台であり、口唇部から内面上半が施釉されたものである。内面が部分的に平滑で光沢があり転用硯の可能性もある。井上喜久男氏、藤沢良祐氏の鑑定によれば、折戸53号様式で、製作時期は10世紀前半とのことである。

このような灰釉陶器は、本県では最初の出土であり、秋田県では払田柵遺跡、岩手県では主に城柵遺跡から出土しているものである。（成田）

(3) 鉄製品

鉄製品は覆土内も含めるとほとんど住居跡内から出土している。第1号・第3号・第4号・第17号・第20号・第21号・第22号・第23号・第26号・第33号・第34号・第35号・第37号住居跡から出土しているが、点数の多いのは第35号住居跡である。

種別としては不明なものもあるが、刀子が最も多く、次に紡錘車が多く、少数のものでは鋤鍬先・手斧・鉋・のみ・鐔・直刀などで、このほか鉄鏃と思われるものが1点出土している。

出土状況等は一覧表のとおりであるが、これらの用途としては、刀子は何にでも使用できるもので、いわば万能利器とでもいえる。鋤あるいは鋤鍬先は農耕具として分類されている。手斧鉋・のみ等は木工具として使用されたものであるが、本遺跡では、それぞれの数量は少ないものの、種類がそろっている。

紡錘車は衣料に関係するものであるが、当然綱などにも関係があり、本遺跡の立地にも深く係わるものではないだろうか。

一方、鐔とか直刀とか鉄鏃は武器として分類されるものであるが、数量が非常に少ない。

(成田)

第80表 住居跡出土の鉄製品一覧表

出土住居跡(H)	種 別	出土地点(層)	図番号	備 考
1 H	刀 子	かまど袖 Fe-1	73-1	
3 H	鋤・鍬 先	1 層	81	ほぼ完形
"	鋤・鍬 先	周 堤 内	81	小破片
"	紡 錘 車	床 面 Fe-1	81-1	軸 装 着
"	紡錘車軸部	床 面 Fe-2		
4 H	やりがんな	覆土10層	87-1	} 密着して出土
"	やりがんな	覆土10層	87-2	
"	刀 子	覆土7層	87-3	
9 H	紡錘車の軸部	床 直 Fe-2	205-1	
17 H	刀 子	床 面 Fe-1	205-3	ほぼ完形
20 H	直 刀(鋒部)	床 面 Fe-3	138-1	
21 H	鏢	Pit 9 Fe-1	144-2	完 形
"	不 明 (柄)	床 直e-2	144-3	
"	刀 子 柄 部	床 直e-3	144-1	
22 H	紡 錘 車	Pit 1	149-3	軸 装 着
"	鉄 滓	Pit 1	149-4	
"	不 明 (柄)		149-1	
"	不 明		149-2	先端が曲がっている
23 H	刀 子	Pit 8 Fe-3	155-1	ほぼ完形
26 H	ノ ミ	北側ベルト覆土1層Fe-2	165	ほぼ完形
"	鉄 斧	床 直 上 Fe-2	163-3	ほぼ完形
"	刀 子	床 面 上 Fe-3	163-1	
"	紡錘車の軸部		163-2	
27 H	刀 子 柄 部	周 辺	205-2	
33 H	鋤・鍬 先	覆土6層	183-1	ほぼ完形
34 H	鉄 斧	覆 土 Fe-1	187-1	
"	鉄 鍬	覆 土 Fe-1	187-2	
"	紡錘車軸部	覆 土 Fe-2	187-3	
35 H	紡 錘 車	床 Fe-1	194-2	軸 装 着
"	紡 錘 車	Pit 5 底 面 Fe-2		
"	やりがんな	Pit 覆土 Fe-3	194-5	ほぼ完形
"	不 明	かまど外 Fe-4	194-1	
"	刀 子	かまど外 Fe-5	194-4	
"	刀 子	Pit 5 覆土 Fe-6	194-3	ほぼ完形
37 H	直 刀	Fe-1	201-1	ほぼ完形(柄は部分)
"	刀 子(柄部)	床 直 Fe-2	201-2	
"	刀 子(刃部)	床 直 Fe-3	201-3	

第6章 自然科学的調査

第1部 沖附(1)遺跡出土火山灰の蛍光X線分析

奈良教育大学教授 三辻 利一

沖附(1)遺跡出土火山灰の蛍光X線分析の結果について報告する。このデータに基づいて描いたRb-Sr分布図を図1に示す。Rb-Sr分布図は白頭山火山灰と十和田系火山灰を相互識別する上に、もっとも有効な分布図である。NO1、2、3、4のうち、NO3、4は白頭山火山灰領域に入る。NO1、2は白頭山火山灰領域には入らなかったものの、Rb量は高く、Sr量は少ないという白頭山火山灰の特徴をもつ。これは母集団である白頭山火山灰領域を設定するに当たり、十分な数の試料を分析しなかったことによると考えられる。もう少し数多くの白頭山火山灰を分析すれば、この領域は若干、広がるものと推定される。この程度のずれではNO1、2、3、4とも白頭山火山灰領域に入るとみなせる。

一方、NO5は十和田系火山灰領域に分布する。そこで、十和田系火山灰のうち、どの火山灰に対応するかを調べるため、K-Ca分布図を図2に示す。K-Ca分布図は十和田a火山灰、十和田b火山灰、二ノ倉火山灰を相互識別する上に有効である(注1)。図2によると、NO5は十和田a火山灰であることが分かる。

これらの火山灰は、さらに、念のため、Fe量でも対応するかどうかを調べた。図3によると、NO1、2、3、4は白頭山火山灰に対応し、NO5は十和田a火山灰に対応することが明らかになった。

この結果、NO1、2、3、4は白頭山火山灰、NO5は十和田a火山灰と推定される。

(注1) 三辻利一、「垂柳遺跡の火山灰質堆積物、土壌の蛍光X線分析」、

垂柳遺跡発掘調査報告、362～369(1983)

青森県教育委員会

表1 沖附(1)遺跡出土火山灰の蛍光X線分析

試料番号	Sc	K	Ca	Fe	Rb	Sr	備考
1	0.846	1.09	0.375	2.83	0.958	0.170	第17号住居跡 B2～3
2	0.866	0.989	0.418	2.94	0.910	0.265	第21号住居跡 B1
3	0.828	1.12	0.411	2.68	1.13	0.139	第28号住居跡 床面
4	0.875	1.24	0.403	2.67	1.06	0.04	第2号住居跡 土下上部 周火山灰
5	0.937	0.362	1.11	1.69	0.221	0.998	第3号住居跡 土下下部 周火山灰

(データはすべて岩石標準試料JG-1による標準化値である)

図1 Rb-Sr分布図

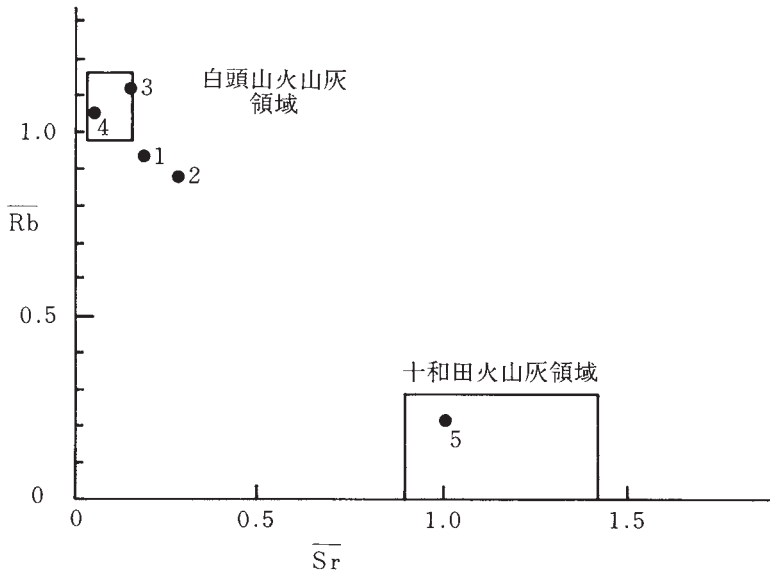
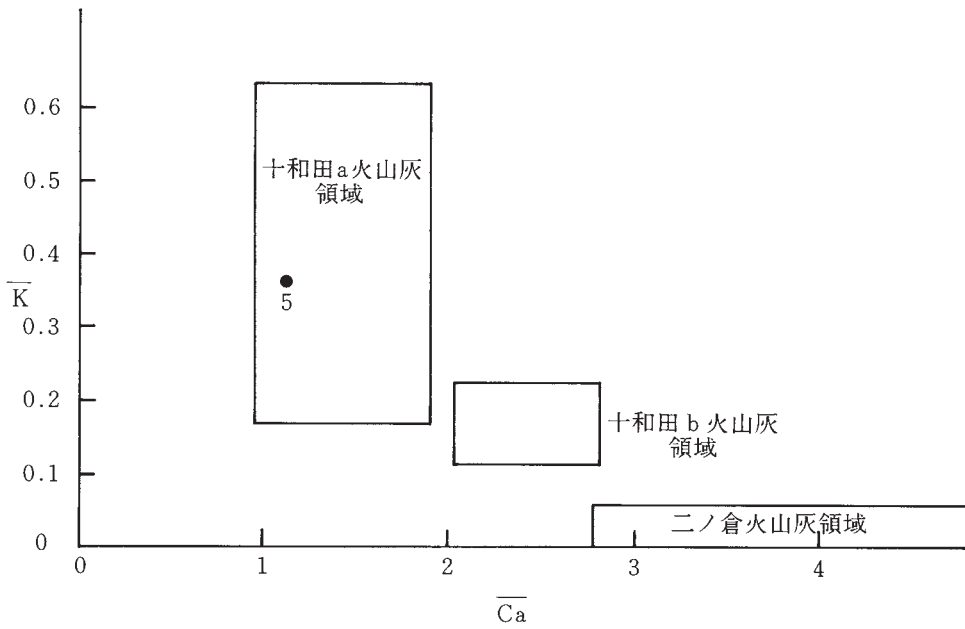


図2 K-Ca分布図



第7章 まとめ

本遺跡からは、縄文時代早期の貝殻文土器と中期末の大木10式及び後期初頭から前半ぐらいまでに位置づけられるような土器・土製品及び晩期の土器などが出土した。また、これらの時代の石器は石皿、すり石、石鏃、石匕、石斧、スクレイパー等総計157点出土した。

縄文時代の住居跡2軒と土壇23基、その他の遺構5基を検出したが、歴史時代の住居跡構築の際攪乱を受けたとしても非常に小規模な集落と思われる。

弥生時代の土器も散布していたが、尾駁沼の対岸に所在する大石平(1)遺跡家ノ前遺跡でも類似する土器が出土しており、その関連が注目される。

歴史時代については、坏形・甕形土師器などの製作技法及び形状等から平安時代後半期のものと考えられる。以下本遺跡の特徴と問題点等をまとめてみたい。

- 1 坏形土師器は、総数量が非常に少なく、タイプも限られたものである。甕形土師器は多量に出土し、タイプも多種であるが、口縁部が狭く外反ぎみのものが多くみられる。このように限られたタイプの土師器が出土していることからこの集落は短期間に営まれたものと思われる。
- 2 住居跡は、三つの地区に分かれて分布しているが、大型のものは西側区に限られている。
- 3 住居跡のなかには、かまどを造り替えるなどして他の住居跡より長期間使用されたものもあり、また、逆に短期間使用されたものもある。
- 4 焼失家屋が多い。
- 5 住居跡の覆土から折戸53号様式とみられる高台付皿形灰釉陶器が出土しているが、これはこの集落の年代推定及び、東南北半との交易という面でも重要である。
- 6 白頭山火山灰とみられるものが住居跡周堤下層に堆積しているものもある。
- 7 地区が異なっても関連性の強い住居跡があり、各地区を単独の集落とみるより、むしろ一集落とみたほうがより妥当性を持つ。

今回の発掘調査により、以上のようなことがわかったが、このような事柄も、より詳細に究明していかなければならない問題点を含んでおり、今後、これを究明していく必要がある。

(成田)

引用・参考文献

- 青森県教育委員会 1974 第12集 「近野遺跡()発掘調査報告書」
- 青森県教育委員会 1975 a 第21集 「富山遺跡、永泉寺遺跡発掘調査報告書」
- 青森県教育委員会 1975 b 第22集 「近野遺跡発掘調査報告書()」
- 青森県教育委員会 1975 c 第24集 「むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財試掘調査概報」
- 青森県教育委員会 1975 d 第25集 「中の平遺跡発掘調査報告書」
- 青森県教育委員会 1976 a 第26集 「黒石市牡丹平南遺跡、浅瀬石遺跡」
- 青森県教育委員会 1976 b 第27集 「千歳遺跡(13)発掘調査報告書」
- 青森県教育委員会 1976 c 第29集 「五戸町中沢西張遺跡、古街道長根遺跡」
- 青森県教育委員会 1976 d 第30集 「白山堂遺跡、妻の神遺跡発掘調査報告書」
- 青森県教育委員会 1976 e 第31集 「泉山遺跡発掘調査報告書」
- 青森県教育委員会 1977 a 第32集 「鳥海山遺跡発掘調査報告書」
- 青森県教育委員会 1977 b 第33集 「近野遺跡発掘調査報告書()」「三内丸山()遺跡発掘調査報告書」
- 青森県教育委員会 1977 c 第35集 「石上神社遺跡発掘調査報告書」
- 青森県教育委員会 1978 a 第37集 「青森市三内遺跡」
- 青森県教育委員会 1978 b 第39集 「源常平遺跡発掘調査報告書」
- 青森県教育委員会 1978 c 第40集 「高館遺跡発掘調査報告書」
- 青森県教育委員会 1978 d 第41集 「三内沢部遺跡発掘調査報告書」
- 青森県教育委員会 1978 e 第42集 「むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財試掘調査概報」
- 青森県教育委員会 1979 a 第44集 「羽黒平遺跡」
- 青森県教育委員会 1979 b 第45集 「杉の沢遺跡」
- 青森県教育委員会 1979 c 第46集 「松元遺跡」
- 青森県教育委員会 1979 d 第48集 「むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財試掘調査概報」
- 青森県教育委員会 1979 e 第49集 「細越遺跡」
- 青森県教育委員会 1980 a 第52集 「大平遺跡」
- 青森県教育委員会 1980 b 第53集 「砂沢平遺跡」
- 青森県教育委員会 1980 c 第54集 「碓ヶ関村古館遺跡」
- 青森県教育委員会 1980 d 第56集 「永野遺跡」
- 青森県教育委員会 1980 e 第58集 「神明町遺跡」
- 青森県教育委員会 1980 f 第59集 「板留(2)遺跡」

- 青森県教育委員会 1981 a 第61集 「表館遺跡」
- 青森県教育委員会 1981 b 第62集 「新納屋遺跡(2)」
- 青森県教育委員会 1982 a 第66集 「野辺地町明前遺跡」
- 青森県教育委員会 1982 b 第67集 「発茶沢遺跡」
- 青森県教育委員会 1982 c 第68集 「山崎遺跡」
- 青森県教育委員会 1983 a 第74集 「長者森遺跡」
- 青森県教育委員会 1983 b 第76集 「鶉窪遺跡」
- 青森県教育委員会 1983 c 第77集 「松原、陣場川原、槻ノ木遺跡」
- 青森県教育委員会 1984 a 第79集 「一ノ渡遺跡」
- 青森県教育委員会 1984 b 第81集 「弥栄平(2)遺跡」
- 青森県教育委員会 1984 c 第82集 「和野前山遺跡」
- 青森県教育委員会 1984 d 第84集 「葦窪遺跡」
- 青森県教育委員会 1984 e 第86集 「牛ヶ沢(2)遺跡」
- 青森県教育委員会 1984 f 第87集 「朝日山遺跡」
- 青森県教育委員会 1985 a 第88集 「垂柳遺跡」
- 青森県教育委員会 1985 b 第90集 「大石平遺跡」
- 青森県教育委員会 1985 c 第93集 「売場遺跡発掘調査報告書、大タルミ遺跡発掘調査報告書」
- 青森市螢沢遺跡発掘調査団 1979 『螢沢遺跡』
- 秋田県教育委員会 1981 『秋田県文化財調査報告書第84集・国道103号線バイパス工事関係遺跡発掘調査報告書』
- 阿部義平 1971 「口ク口技術の復元」 『考古学研究』第18巻第2号
- 磯崎正彦 1964 「後期」 『日本原始美術1 縄文式土器』
- 今井富士雄・磯崎正彦 1968 「十腰内遺跡」 『岩木山』
- 今村啓爾 1977 「称名寺式土器の研究(上)・(下)」 『考古学雑誌』第63巻第1号・第2号
- 氏家和典 1957 「東北土師器の形式分類とその編年」 『歴史』第14輯・東北史学会
- 江上波夫・関野雄・桜井清彦 1958 「青森県北津軽郡市浦村相内福島城址」 『館址』
- 江坂輝弥 1972 「奥羽地方北部の古墳時代の文化」 『北奥古代文化』第4号
- 小笠原好彦 1971 「丹塗土師器と黒色土師器」 『考古学研究』第18巻第2号
- 岡田茂弘・桑原滋郎 1974・3 「多賀城周辺における古代杯形土師器の変遷」 『研究紀要』
宮城県多賀城跡調査研究所
- 岡本 勇 1968 「青森県六ヶ所村平沼字追館遺跡」 『日本考古学年報』16
- 音喜多富寿・江坂輝弥 1958 「青森県八戸市鹿島沢古墳群踏査予報」 『史想』第9号

- 音喜多富寿 1960 「鹿島沢古墳群調査略報」 『奥南史苑』第4号
- 音喜多富寿他 1965 『八戸市新田市子林遺跡調査報告書』八戸市教育委員会
- 葛西励・藤田亮一 1974 「青森市沢山 号遺跡」 『うとう』第80号
- 葛西励 1978 『燃糸文第7号 青森市月見野遺跡発見の縄文後期の甕棺と人骨』
- 葛西励 1979 a 『家の上・外崎沢遺跡』
- 葛西励 1979 b 「十腰内 式土器の編年的細分」 『北奥古代文化』第11号
- 加藤孝 1954 「塩釜市表杉ノ入貝塚の研究」 『宮城学院女子大学研究論文集』5
- 神沢勇一 1966 「5 関東」 『日本の考古学 弥生時代』
- 川内町教育委員会 1981 『川代・邪馬尻遺跡発掘調査報告書』
- 北林八州晴 1969 a 「土師器と擦文土器」 『うとう』第73号
- 北林八州晴 1969 b 「青森県夏泊半島の製塩土器」 『考古学ジャーナル』No. 38
- 北林八州晴 1971 「津軽半島における擦文土器の新資料」 『北海道考古学』第7輯
- 北林八州晴 1972 「青森県陸奥湾沿岸の製塩土器(予報)」 『考古学研究』第18巻第4号
- 北林八州晴 1973 「陸奥湾沿岸に於ける土器製塩」 『北奥古代文化』第5号
- 工藤竹久 1968 「下北半島尻屋念仏間遺跡」 『考古学ジャーナル』第23号
- 工藤雅樹・桑原滋郎1972 「東北地方における古代土器生産の展開」 『考古学雑誌』第57巻
第3号
- 桑原滋郎 1969 「ロクロ土師器杯について」 『歴史』第37輯 東北史学会
- 桑原滋郎 1976 「須恵系土器について」 『東北考古学の諸問題』
- 斎藤忠・岩崎卓也 1968 「大館森山遺跡」 『岩木山』
- 坂詰秀一 1968 a 「前田野目窯跡発掘調査概要」五所川原市教育委員会
- 坂詰秀一 1968 b 「北限の須恵器窯跡」 『考古学ジャーナル』 21
- 坂詰秀一 1972 a 「東北北部における須恵器の生産」 『北奥古代文化』第4号
- 坂詰秀一 1972 b 「津軽・持子沢窯跡の調査」 『考古学ジャーナル』 75
- 坂詰秀一 1973 a 「津軽持子沢窯跡調査概報」 『北奥古代文化』第5号
- 坂詰秀一 1973 b 「津軽・持子沢窯跡の第二次調査」 『考古学ジャーナル』 89
- 坂詰秀一 1974 「津軽持子沢窯跡第二次調査概報」 『北奥古代文化』第6号
- 坂詰秀一 1975 「津軽前田野目窯跡群をめぐる課題」 『北奥古代文化』第7号
- 桜井清彦 1954 「青森県十三村中島発見の土師器」 『考古学雑誌』第40巻1号
- 桜井清彦 1955 「青森県相内村赤坂遺跡について」 『古代』第17号
- 桜井清彦 1956 「青森県森田村発見の鉄斧」 『貝塚』第51号
- 桜井清彦 1957 「青森県西津軽八重菊竈穴住居址(第2次)」 『日本考古学年報』5

- 桜井清彦 1958 a 「青森県市浦村岩井遺跡」 『日本考古学年報』 7
- 桜井清彦 1958 b 「青森県市浦村赤坂遺跡」 『日本考古学年報』 7
- 桜井清彦 1958 c 「東北地方北部の土師器と竪穴に関する諸問題」 『館址』
- 桜井清彦 1968 「東北地方の擦文文化について」 『北奥古代文化』 創刊号
- 桜井清彦・北林八州晴 1969 「青森市の擦文土器について」 『北奥古代文化』 第2号
- 桜井清彦 1971 「青森県小館遺跡の調査」 『考古学ジャーナル』 No. 62
- 桜井清彦 1973 「青森市沢田A遺跡の調査報告」 『北奥古代文化』 第5号
- 佐原真編 1976 『日本の美術第125号弥生土器』
- 市立市川考古博物館 1983 『シンポジウム堀之内式土器の記録』
- 杉山武 1981 「将木館遺跡発掘調査報告書」 東通村教育委員会
- 須藤隆 1982 「北辺の弥生文化」 『縄文土器大成5 - 続縄文』
- 須藤隆 1985 「弥生文化の伝播と恵山文化の成立」 『考古学論叢』
- 瀬棚町教育委員会 1983 『瀬棚南川』
- 高杉博章・木村鉄次郎 1975 「津軽野における擦文式土器の新例と問題点」 『北奥古代文化』
第7号
- 橘善光 1967 「下北半島尻屋大平貝塚 - 本州東北端部における歴史時代漁撈集落」 『考古学ジャーナル』 15
- 橘善光 1968 「青森県脇野沢村桂沢の擦文土器について」 『考古学ジャーナル』 22
- 橘善光 1969 「下北半島における土師器に伴う縄文のある土器について」 『北海道考古学』
第5輯
- 橘善光 1970 「青森県東通村白糠採集の土師器と擦文土器について」 『古代』 第53号
- 橘善光 1971 「第一田名部小学校校庭遺跡第1次調査概報」 『北奥古代文化』 第3号
- 橘善光 1972 「青森県下北半島の土師器 - 川内町宿野下遺跡出土史料を中心として - 」
『北奥古代文化』 第4号
- 橘善光 1973 「下北半島の擦文式土器」 『北奥古代文化』 第5号
- 橘善光 1975 「青森県大間町奥戸出土の擦文式土器」 『北奥古代文化』 第7号
- 橘善光 1977 「東通村尻屋念仏間遺跡」 『下北の古代文化』
- 橘善光 1979 「入門講座・弥生土器 - 北東北4 - 」 『考古学ジャーナル』 第160号
- 坪井清足 1953 「福島県天王山遺跡の弥生式土器 - 東日本弥生式文化の性格 - 」 『史林』
36 - 1
- 中村五郎 1973 「北海道南部の続縄文土器編年」 『北海道考古』 第9輯
- 中村五郎 1976 「東北地方南部の弥生式土器編年」 『東北考古学の諸問題』

- 成田滋彦 1981 「青森県の土器」 『縄文文化の研究4 縄文土器』
- 西村正衛・桜井清彦・玉口時雄 1952 「青森県森田村附近の遺跡調査概報」 『古代』第5号
- 西村正衛・桜井清彦 1953 「青森県森田村附近の遺跡調査概報(第2次)」 『古代』第10号
- 丹羽茂 1981 「大木式土器」 『縄文文化の研究4 縄文土器』
- 八戸市教育委員会 1984 『八戸市埋蔵文化財調査報告書第13集・八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 平山久夫 1967 「津軽平野における土師器の低地遺跡」 『考古学ジャーナル』No. 13
- 平山久夫 1969 「津軽平野の須恵器(予報)」 『北奥古代文化』第2号
- 平山久夫 1980・11 「青森県内に於ける平安期集落の研究」 『北奥古代文化』第14号
- 北海道白老郡白老町教育委員会 1980 『アヨロ』
- 前川要 1984 「猿投窯における灰釉陶器生産最末期の諸様相」 『研究紀要』 瀬戸市歴史民俗資料館
- 村越潔 1968 a 「浮橋貝塚」 『岩木山』
- 村越潔 1968 b 「外馬屋遺跡」 『岩木山』
- 村越潔 1968 c 「若山遺跡」 『岩木山』
- 村越潔・新谷武 1974 「青森県前田野目砂田遺跡発掘調査概報」 『北奥古代文化』第6号
- 村越潔 1982 「大野平遺跡発掘調査報告」 岩崎村教育委員会
- 森田知忠 1981 「北海道」 『縄文土器大成3 後期』
- 和島誠一 1938 「東京市内志村に於ける原史時代竪穴の調査予報」 『考古学雑誌』28 - 9
- 和島誠一 1948 「原始聚落の構成」 『日本歴史学講座』
- 和島誠一 1955 「集落址」 『日本考古学講座』
- 和島誠一 1961 「竪穴の火事」 『古代史講座・月報』
- 渡辺兼庸 1968 「常磐野遺跡」 『岩木山』
- 渡辺誠 1965 「下北半島割石遺跡採集の擦文土器について」 『考古学雑誌』第51巻3号

写 真 图 版

写真1



中央地区全景



中央地区東側



中央地区西側



西側地区完掘近景



東側地区完掘近景



東側地区完掘近景

発掘調査区の近景

写真2



(1 H ~ 4 H 周辺)



(1 H)



(3 H)



(3 H 周辺)



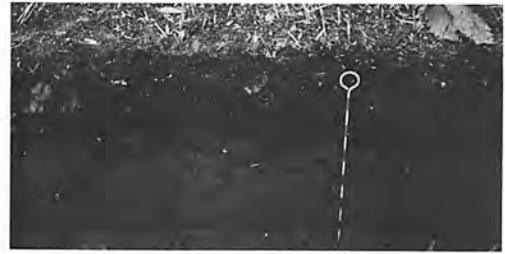
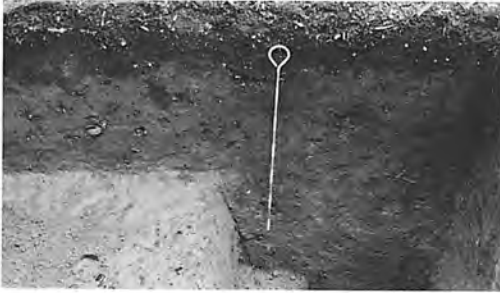
(1 H ・ 2 H 周辺)



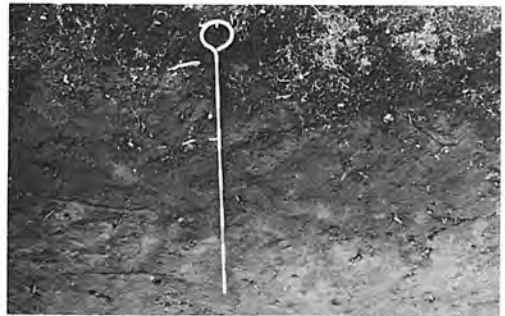
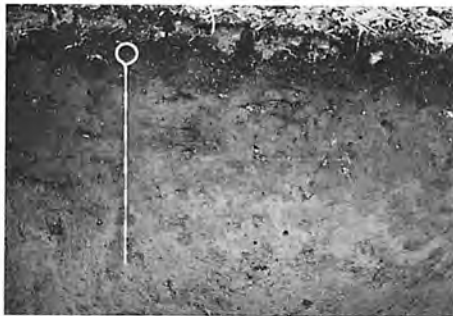
(4 H ・ 5 H 周辺)

中央地区発掘前の状況

写真3



〔西側地区メインセクション〕



〔東側地区メインセクション〕



〔東側地区石器出土状況〕
メインセクションと石器出土状況

写真4



東側地区縄文土器・石器出土状況

写真 5



セクション



かまど



遺構周囲セクション



遺構周囲セクション



▲ 遺構周囲セクション

第1号住居跡(1)

写真6



セクション



▲炭化物



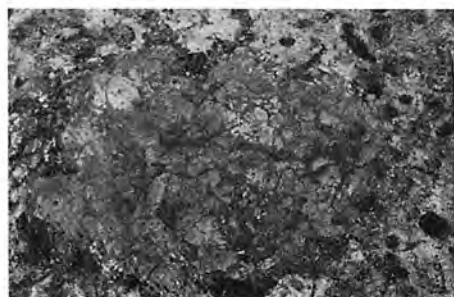
Pit



Pit



炭化物▶



火床面



火床面セクション

第1号住居跡(2)

写真7



Pit



かまどセクション



煙道セクション



かまど



かまど



煙道セクション

煙出口



かまど



第1号住居跡(3)

写真 8



完 掘



煙 道



か ま ど



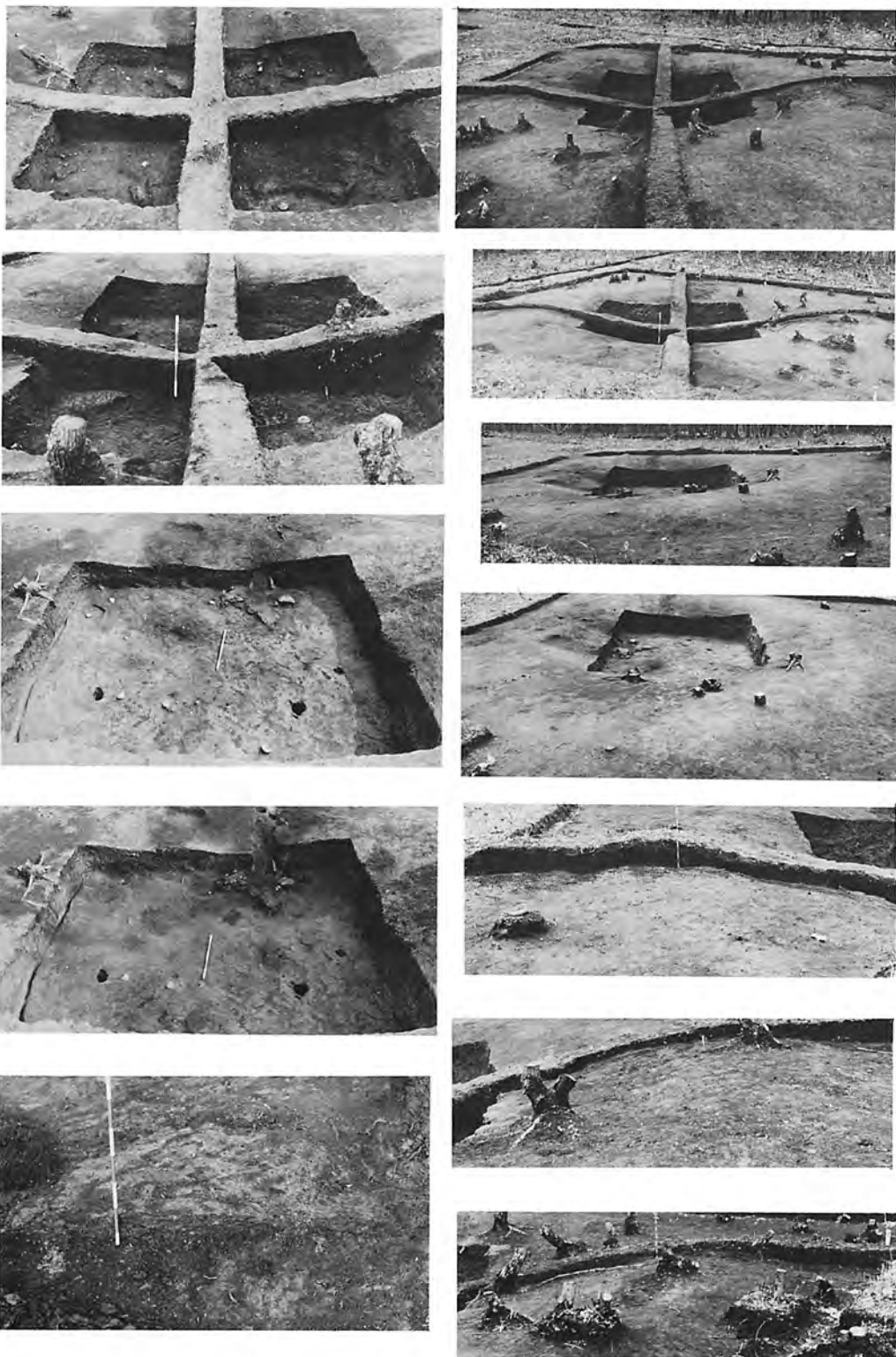
遺構周囲セクション



遺構内遺物出土状況

第 2 号住居跡

写真9



第3号住居跡(1)

写真10



〔かまど〕

第3号住居跡(2)

写真11



坏形土師器出土状況



遺構周囲セクション



遺構周囲セクション



策3号住居跡(3)

写真12



確認状況



完 掘



煙出口



かまど



ピットセクション



東壁周辺の遺物



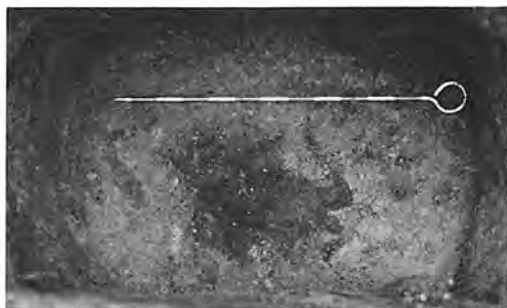
▲ 鉄製品

第4号住居跡

写真13



第4号住居跡Pit-2上面出土炭化材



Pit-2



第4号住居跡Pitセクション



Pitセクション



第5号住居跡セクション



第5号住居跡、かまど周辺



かまど

◀完掘

第4号・第5号住居跡

写真14



確認状況



遺物出土状況



完掘



完掘



煙道検出状況



かまど



かまど



煙道



かまどセクション

第6号住居跡

写真15



確認状況



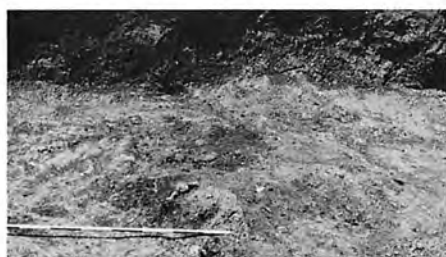
セクション



炭化物出土状況



かまど周辺



かまど火床面



かまどセクション

第7号住居跡



確認状況



セクション



完掘



遺物出土状況



かまど



かまど周辺



煙道

第8号住居跡

写真17



セクション



完掘



かまど周辺



完掘



火床面セクション



かまどセクション



かまど完掘



煙道セクション



煙道セクション

第10号住居跡

写真18



セクション



セクション



煙道セクション



第11号住居跡

写真19



完 掘



Pitセクション



か
ま
と



遺物出土状況



か
ま
と



煙道セクション

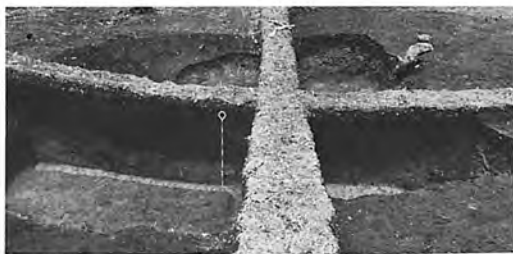


か
ま
と
完
掘



Pitセクション

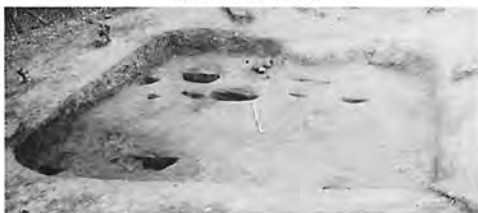
第12号住居跡



第9号住居跡



第13号住居跡



Pit-1



Pit-2



第13号住居跡



かまどセクション



第9号・第13号住居跡

写真21



セクション



完掘



かまど



かまど



かまど完掘



かまど火床面セクション



張り出し部セクション



張り出し部完掘

第14号住居跡



第15号住居跡、柱穴配置



セクション



第15号住居跡、完掘



かまど
完掘



第16号住居跡、完掘



第16号住居跡、かまど



煙道



第15号・第16号住居跡



セクション



完掘



かまどA



かまどA・B



かまどA完掘



かまどB完掘



Pit- 2 セクション



刀子出土状況

第17号住居跡

写真24



第18号住居跡



第18号住居跡、完掘



第18号住居跡



かまど煙道内



第19号住居跡セクション



第19号住居跡完掘



かまどセクション

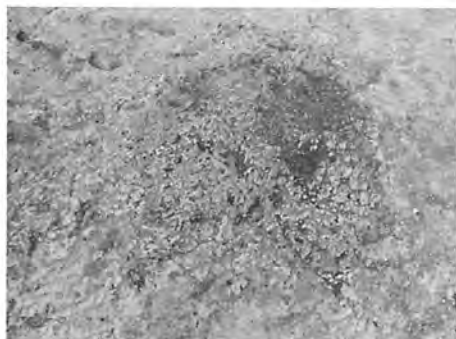


第19号住居跡完掘

第18号・第19号住居跡



セクション



火床面



▲かまどセクション

◀かまど火床面

▲Pit



煙道完掘

第20号住居跡



遺構周囲セクション
(第20号住居跡)



〔第21号住居跡〕



セクション



第20号住居跡、中央部火床面



竪穴完掘 (煙道含まない)



遺物出土状況



第21号住居跡かまどB

第20号・第21号住居跡

写真27



かまどA・B



かまどA



かまどA煙道セクション



かまどA床面



かまどA煙道



かまどA

第21号住居跡かまど



pit1



pit1



pit1



pit2



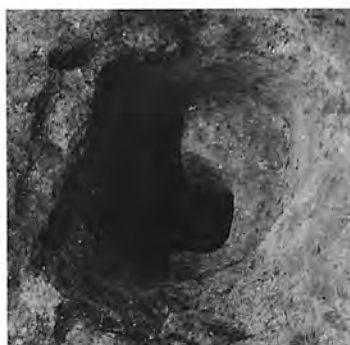
pit3



pit2



pit4



pit2

第21号住居跡ピット

写真29



pit10



pit9



pit6



pit7



pit8



第22号住居跡確認状況

第22号住居跡セクション



第21号・第22号住居跡



完 掘



かまど



かまど完掘



かまどセクション



鉄 滓



炭 化 材



Pitセクション



Pitセクション

写真31



セクション



▲
刀
子



遺構外出土土器



張り出し部分

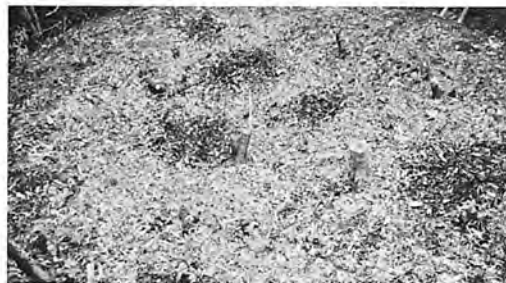


か
ま
ど



張り出し完掘

第23号住居跡



確認状況



セクション



〔第24号住居跡〕



確認状況



第25号住居跡全景



〔第25号住居跡〕



第24号・第25号住居跡

写真33



◀かまど▶



◀遺構外
セクション
▼



〔第25号住居跡〕



〔第26号住居跡〕

第25号・第26号住居跡

写真34



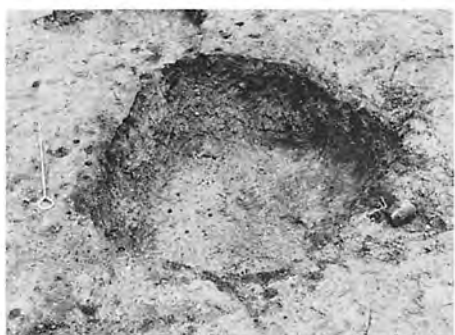
〔第26号
住居跡〕

かまど

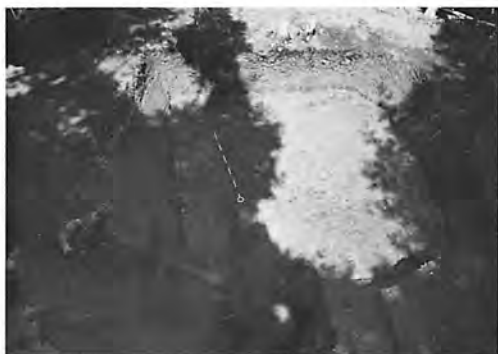
煙道



Pit



〔第27号住居跡〕



かまど
完掘



第26号・第27号住居跡

写真35



第28号住居跡セクション



完 掘



焼土・火山灰の堆積状況



東壁のPit



第29号住居跡セクション



炭化物出土状況



完 掘



完 掘

第28号・第29号住居跡



第29号住居跡遺物出土状況



かまどセクション



煙道セクション



かまどセクション



西側壁下Pit炭化物出土状況



Pit 完掘

第30号住居跡



第29号・第30号住居跡

写真37



第30号住居跡張り出し部分



張り出し部分セクション



第30号住居跡かまど周辺の遺物出土状況

第31号住居跡



第31号住居跡確認状況

第31号住居跡



Pitセクション



Pit完掘



第30号・第31号住居跡

写真38



第31号住居跡出土土器

かまど
完掘



第32号住居跡



かまど▶

煙道完掘



支脚出土▶
状態

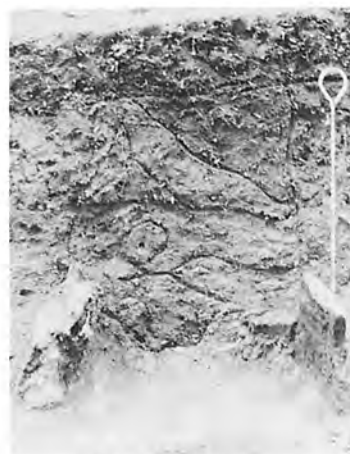


第31号・第32号住居跡

写真39



北東隅土器出土状況



煙道セクション



第32号住居跡支脚



第33号住居跡



第33号住居跡



かまど



かまど

第32号・第33号住居跡

写真40



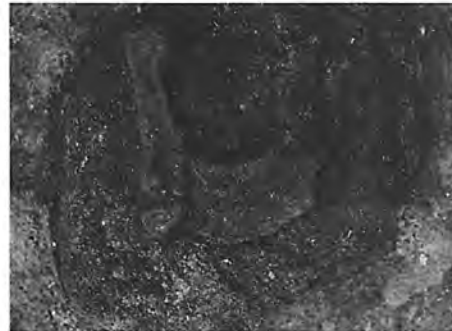
煙出孔セクション



かまど



第33号住居跡出土土器



第33号住居跡出土鋤・鍬先

第34号住居跡確認状況



第34号住居跡完掘



第33号・第34号住居跡

写真41



かまど



かまど



◀ 灰釉陶器
出土状況

▲ 煙出孔内
出土土器

煙道完掘



鉄製品



第34号住居跡

写真42



第34号住居跡煙道セクション



第34号住居跡北東隅張り出しセクション



第34号住居跡
北側壁面の炭化材

第35号住居跡確認状況



第35号住居跡



セクション



第34号・第35号住居跡



かまど
かまど



かまど周辺

覆土出土土器



中央部焼土上面出土遺物



須恵器出土状況

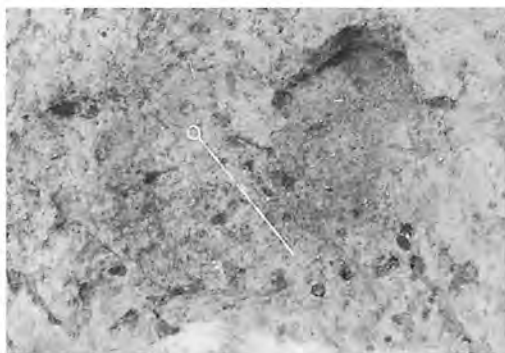


遺構外のセクション



第35号住居跡(1)

写真44



中央部分焼土



中央部分焼土下部検出のPit セクション



刀子出土状況



中央部分Pit

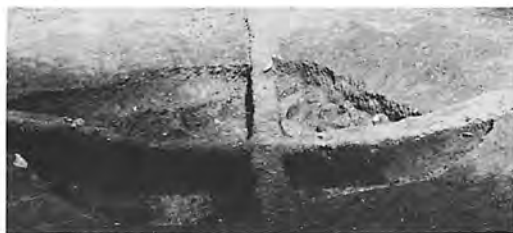


鉄製品出土状況



鉄製品出土状況

第35号住居跡(2)



第36号住居跡セクション



遺物出土状況



第36号住居跡



完 掘



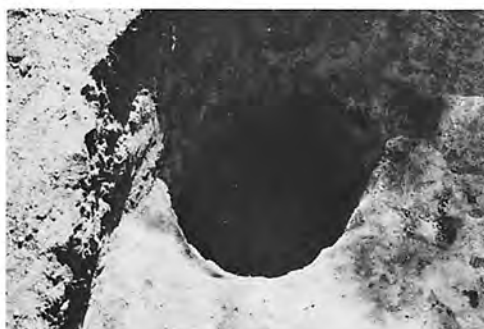
遺物出土状況



Pit



Pit-2



Pit-1

第36号住居跡(1)



第36号住居跡かまどセクション



かまど



かまど



←支脚



トンネル式
煙道



トンネル式
煙出孔

第36号住居跡(2)

写真47



第36号住居跡
かまど



第37号住居跡



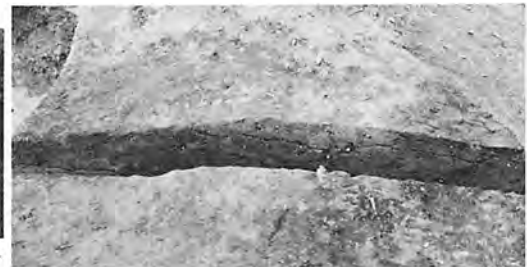
確認状況



セクション



遺構外セクション



第36号・第37号住居跡



刀子出土状況



かまど



直刀出土状況

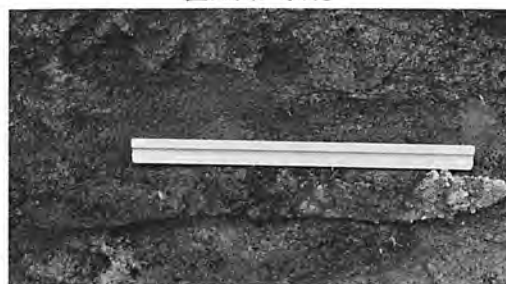


写真49



第2号土坑セクション



第2号土坑セクション



第2号土坑完掘



第3号土坑セクション



第3号土坑セクション

第1号～3号土坑



第3号土坑ピットセクション



第3号土坑完掘



第3号土坑完掘



第4・5号土坑



第5号土坑セクション



第5号土坑完掘



第6号土坑セクション



第7号土坑

第3号～第7号土坑

写真51



第8号土坑完掘



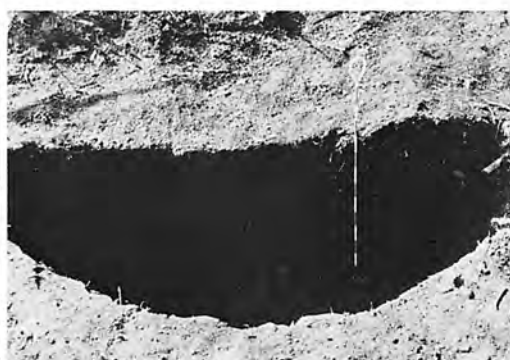
第9号土坑セクション



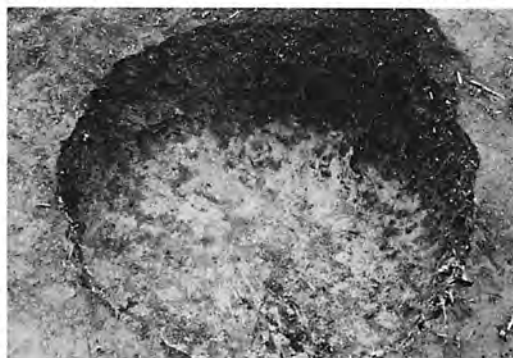
第9号土坑完掘



第10号土坑セクション

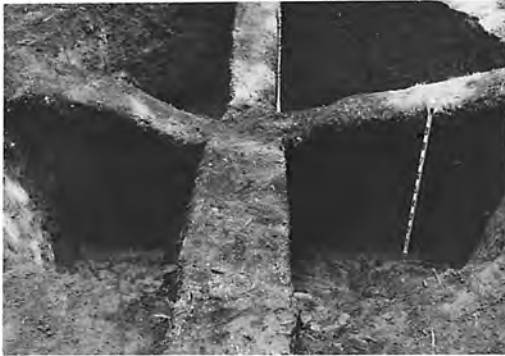


第10号土坑セクション



第10号土坑完掘

第8号～第10号土坑



第11号土坑セクション



第11号土坑完掘



第12号土坑セクション



第12号土坑完掘



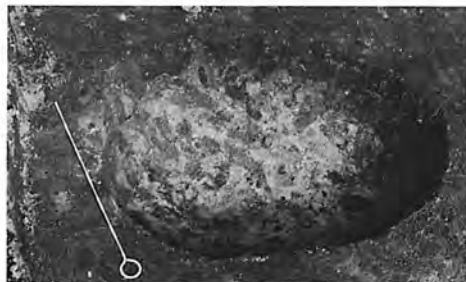
第13号土坑セクション



第13号土坑完掘



第14号土坑セクション



第14号土坑完掘

第11号～第14号土坑



第15号土塚セクション



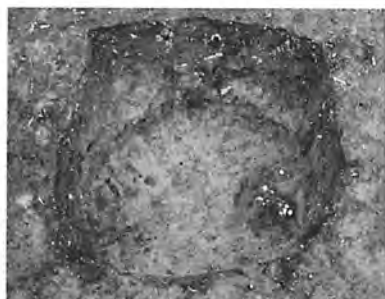
第15号土塚出土遺物状況



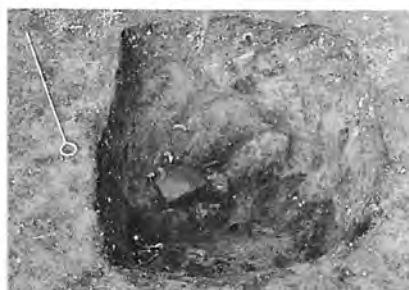
第15号土塚完掘



第16号土塚セクション



第16号土塚



第16号土塚出土遺物状況



第16号土塚完掘

第15号・第16号土塚

写真54



J-1・2号住居跡



J-1号住居跡



J-1号住居跡セクション



J-1・2号住居跡

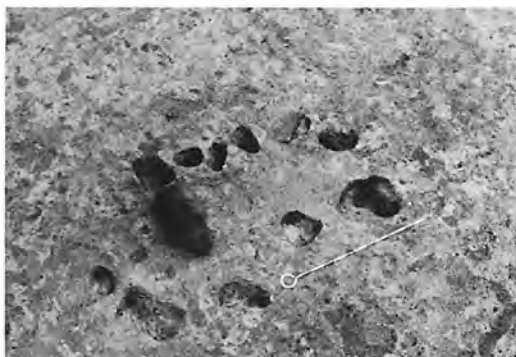


J-2号住居跡



出土遺物

J-1号・2号住居跡



J-2号住居跡炉



J-2号住居跡炉セクション



J-2号住居跡炉セクション



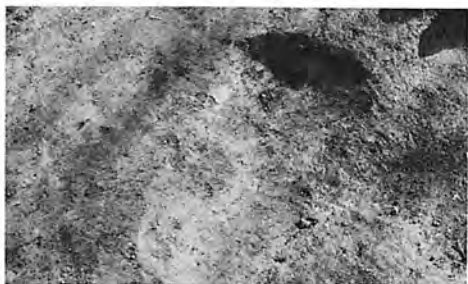
J-2号住居跡炉掘り方



◀第2号焼土状遺構



第2号焼土状遺構



◀第2号焼土状遺構掘り方

J-2号住居跡炉跡・第2号焼土状遺構



セクション



1号屋外炉

セクション



掘り方



埋設土器遺構

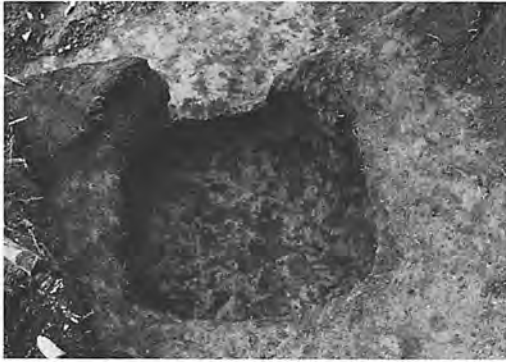


1号焼土



屋外炉・埋設土器・第1号焼土状遺構

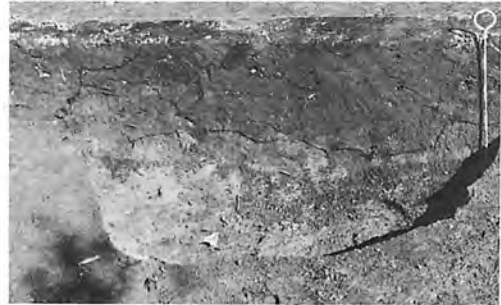
写真57



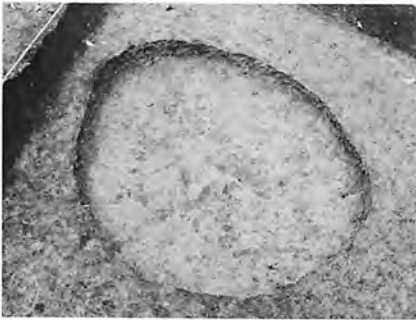
J-1号



J-2号



J-3号



J-4号



J-4号セクション



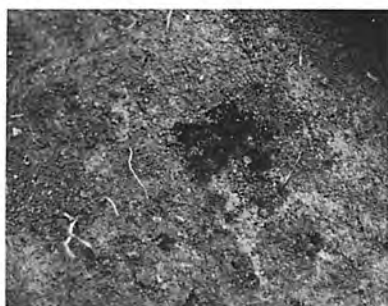
◀ J-5・6号

J-1～6号土坑

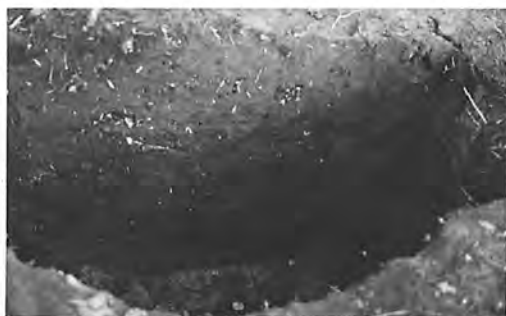


◀ J-5・6号

J-5~7号



◀ J-8号覆土内烧土

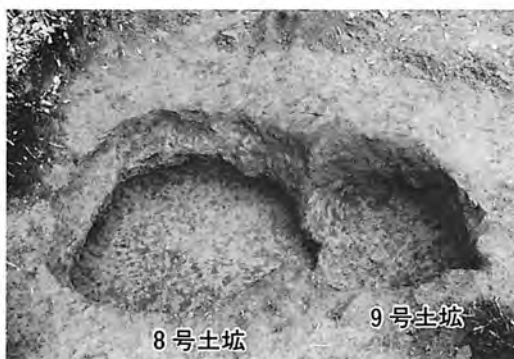


J-5~8号土坑

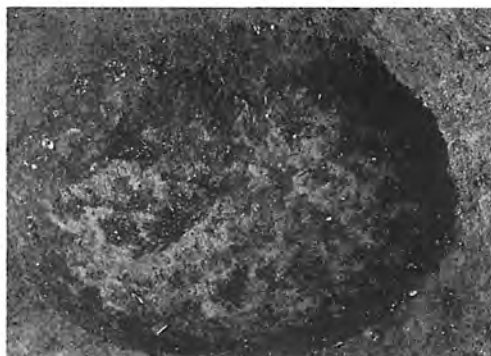
写真59



J-8号



J-10号



J-10~12号



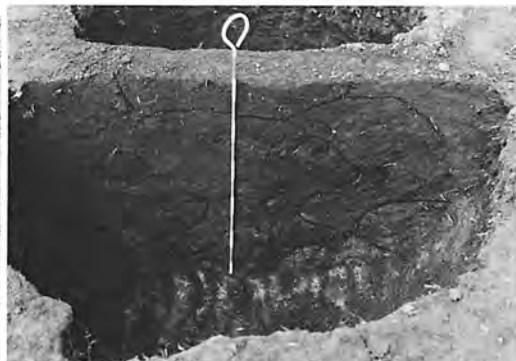
J-12号

J-8~12号土坑

写真60



〔J-12号〕



〔J-13号〕



〔J-14号〕



〔J-15号〕

J-12~15号土坑

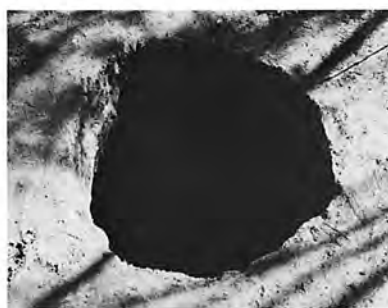
写真61



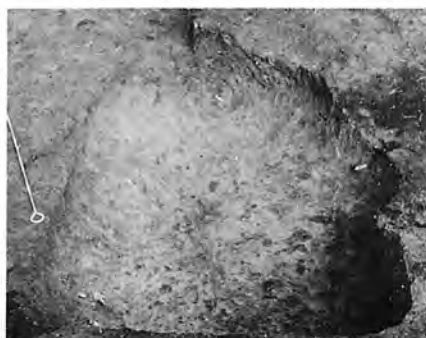
〔J-15号〕



〔J-16号〕



〔J-17号〕

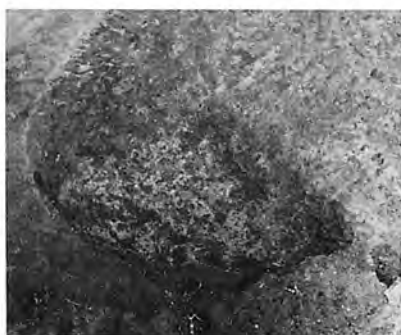


〔J-18号〕

J-15~18号土坑



[J-19号]



[J-20号]

J-19・20号土坑

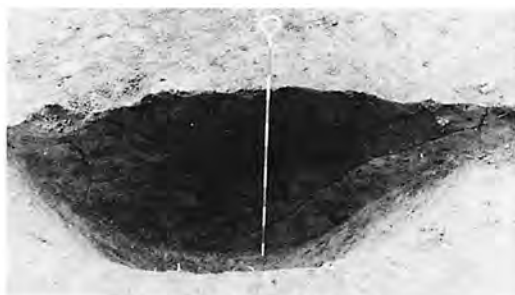
写真63



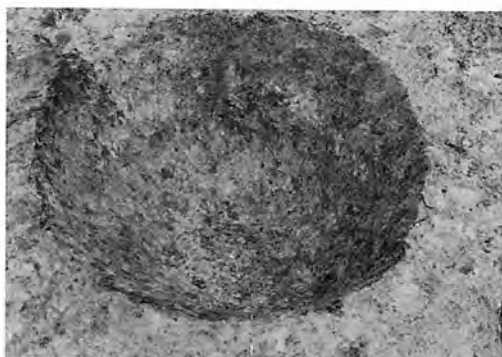
J-23号土坑掘方



J-22号土坑セクション



J-23号土坑セクション



J-23号土坑

J-22・23号土坑

写真64



1 (1H
カマド)



2 (2H床)



3 (2H床)



4 (2Hフク土)



5 (2H床)



6 (2H床面)



7 (2Hフク土)



8 (3HⅢ層)



9 (3H床P-15)



10 (3Hカマド)



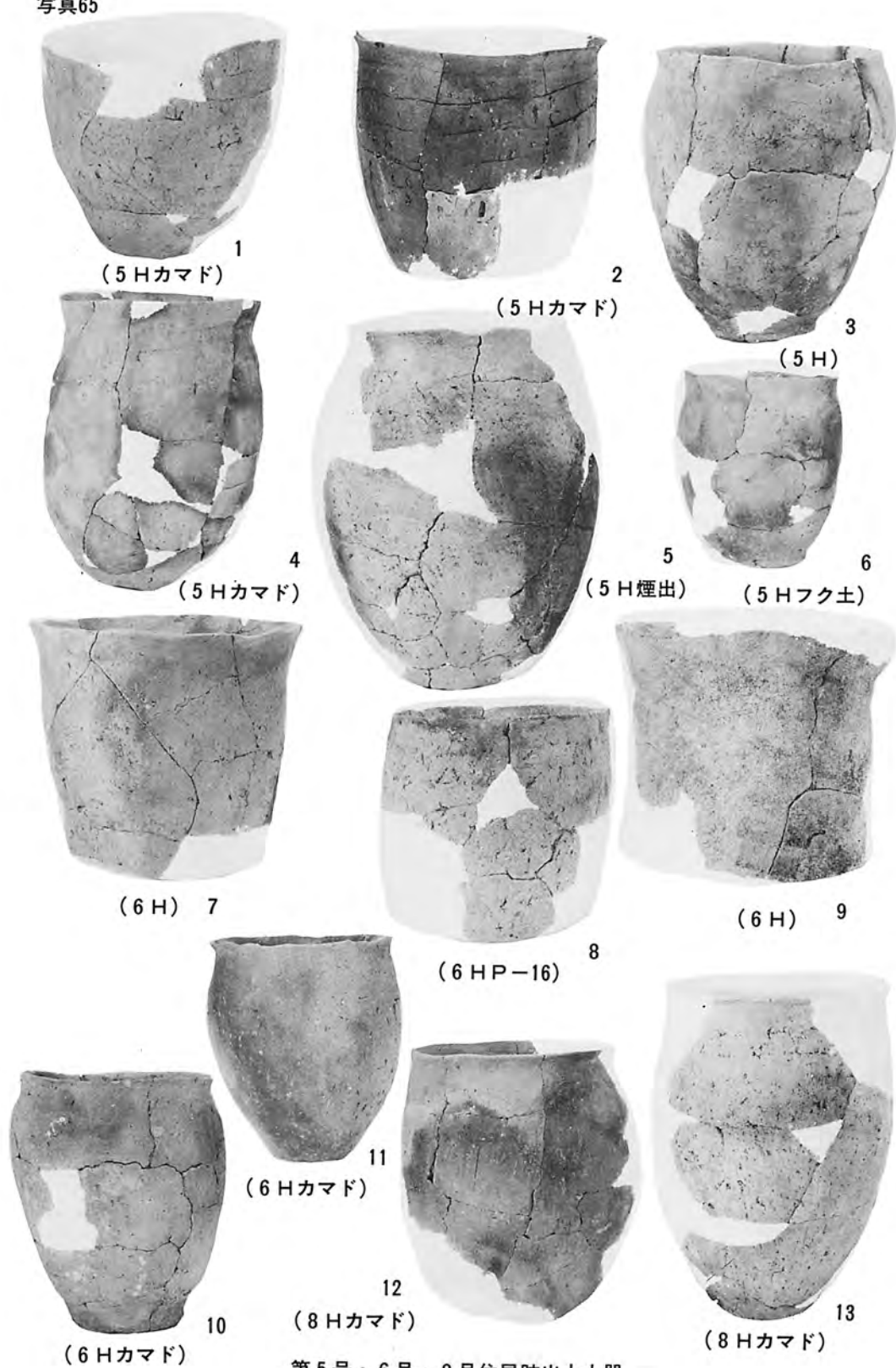
11 (4H10層)



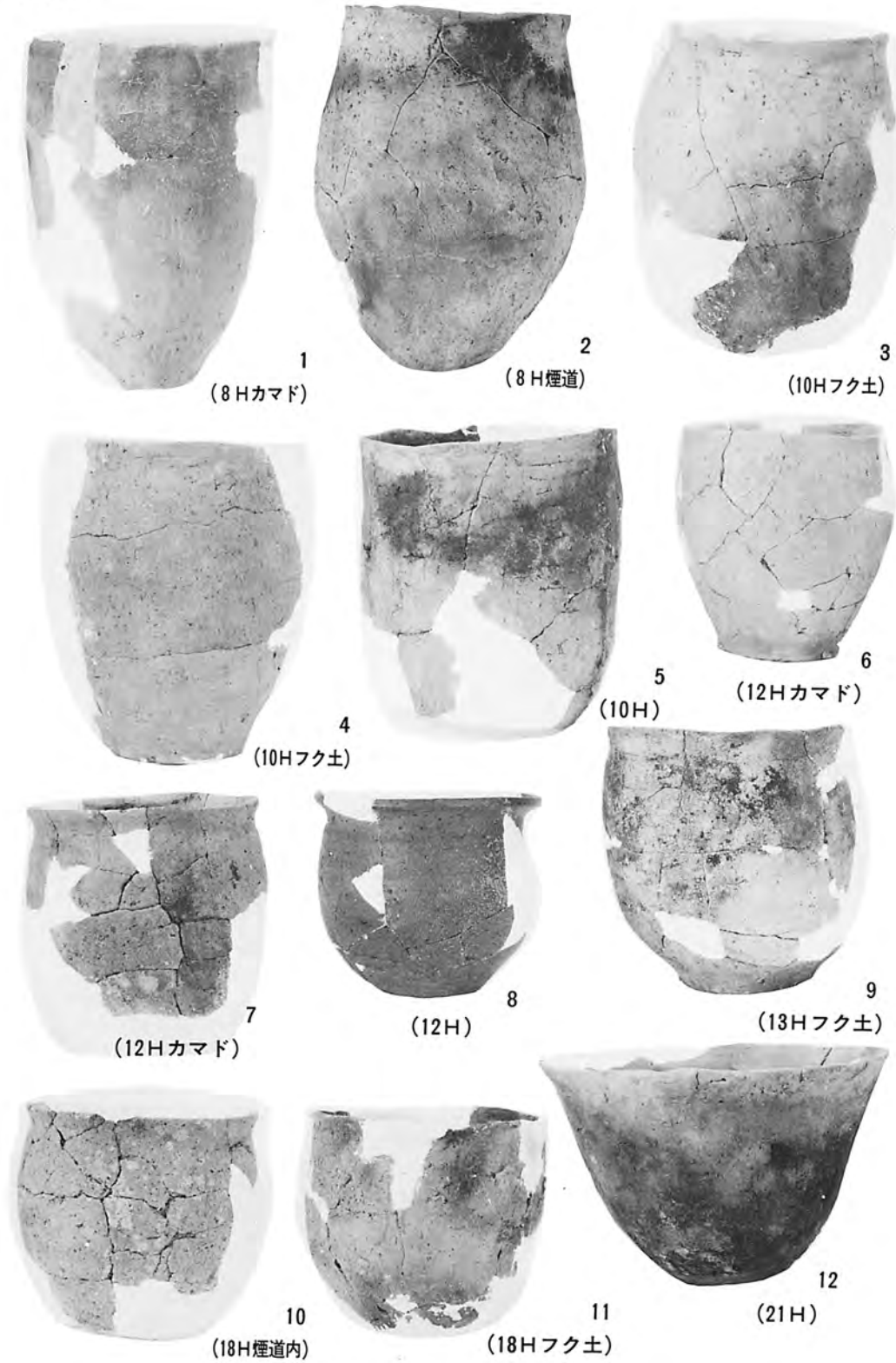
12 (4Hカマド)

第1～4号住居跡出土土器

写真65

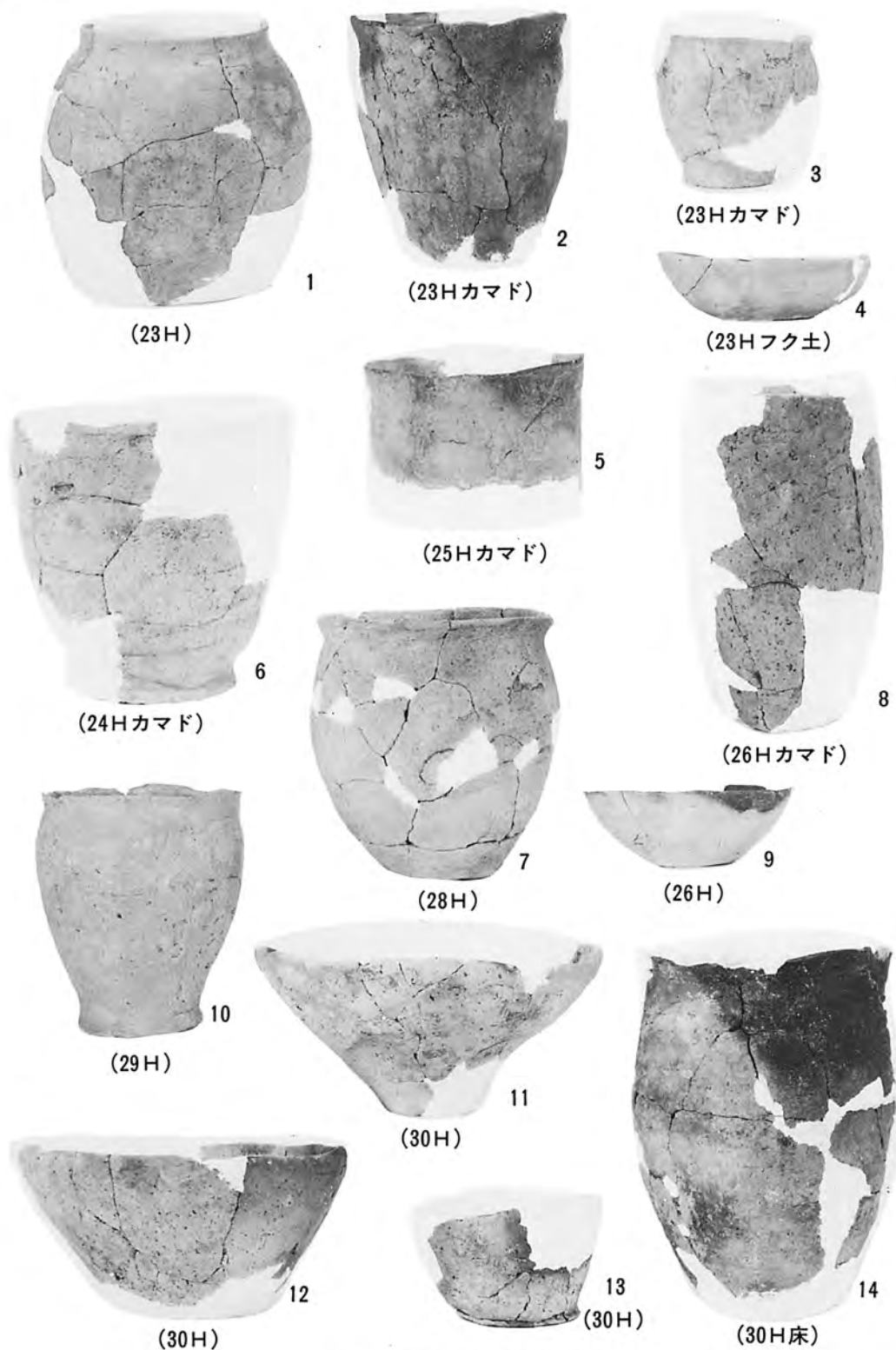


第5号・6号・8号住居跡出土土器

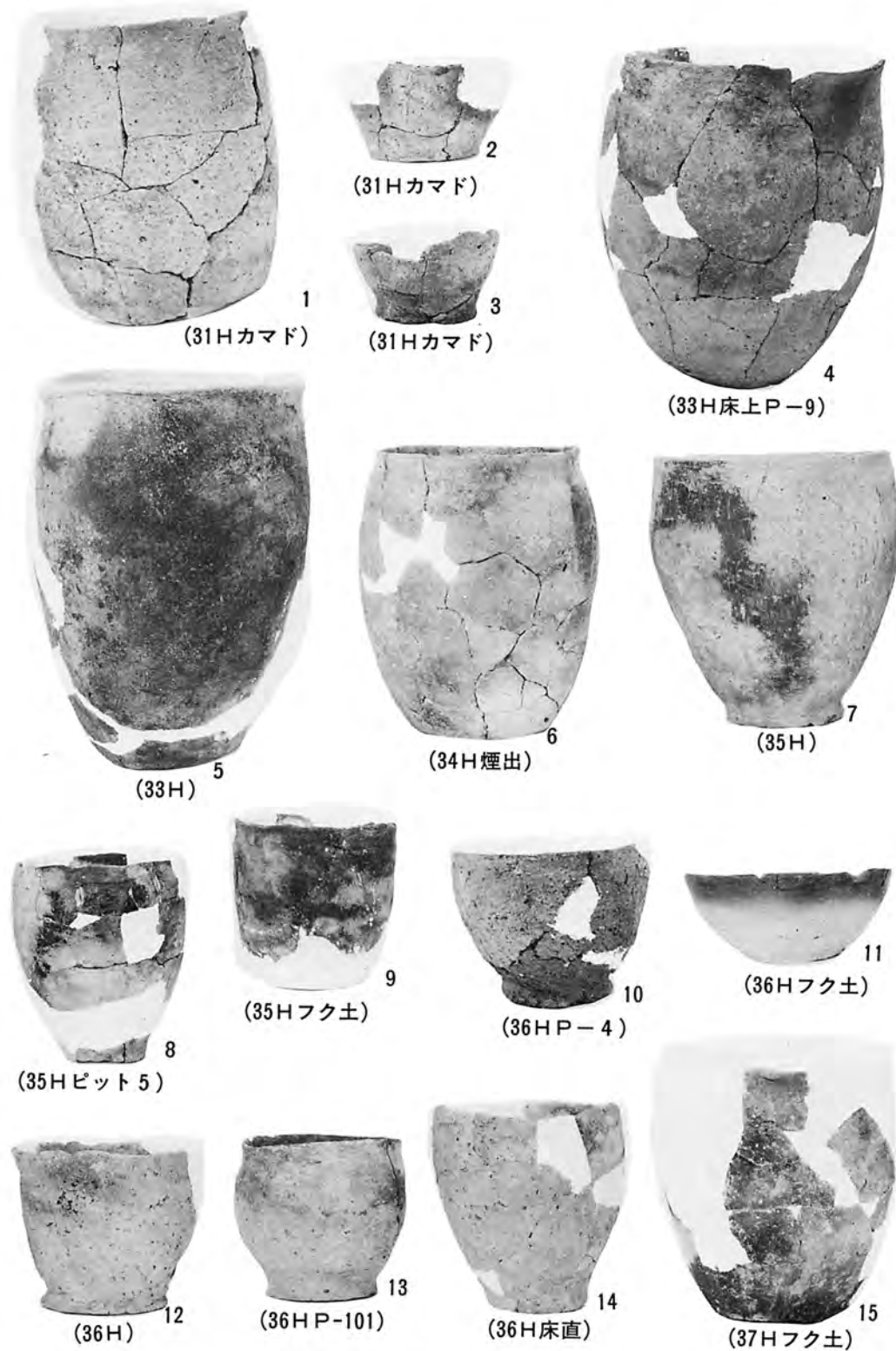


第8号～21号住居跡出土土器

写真67

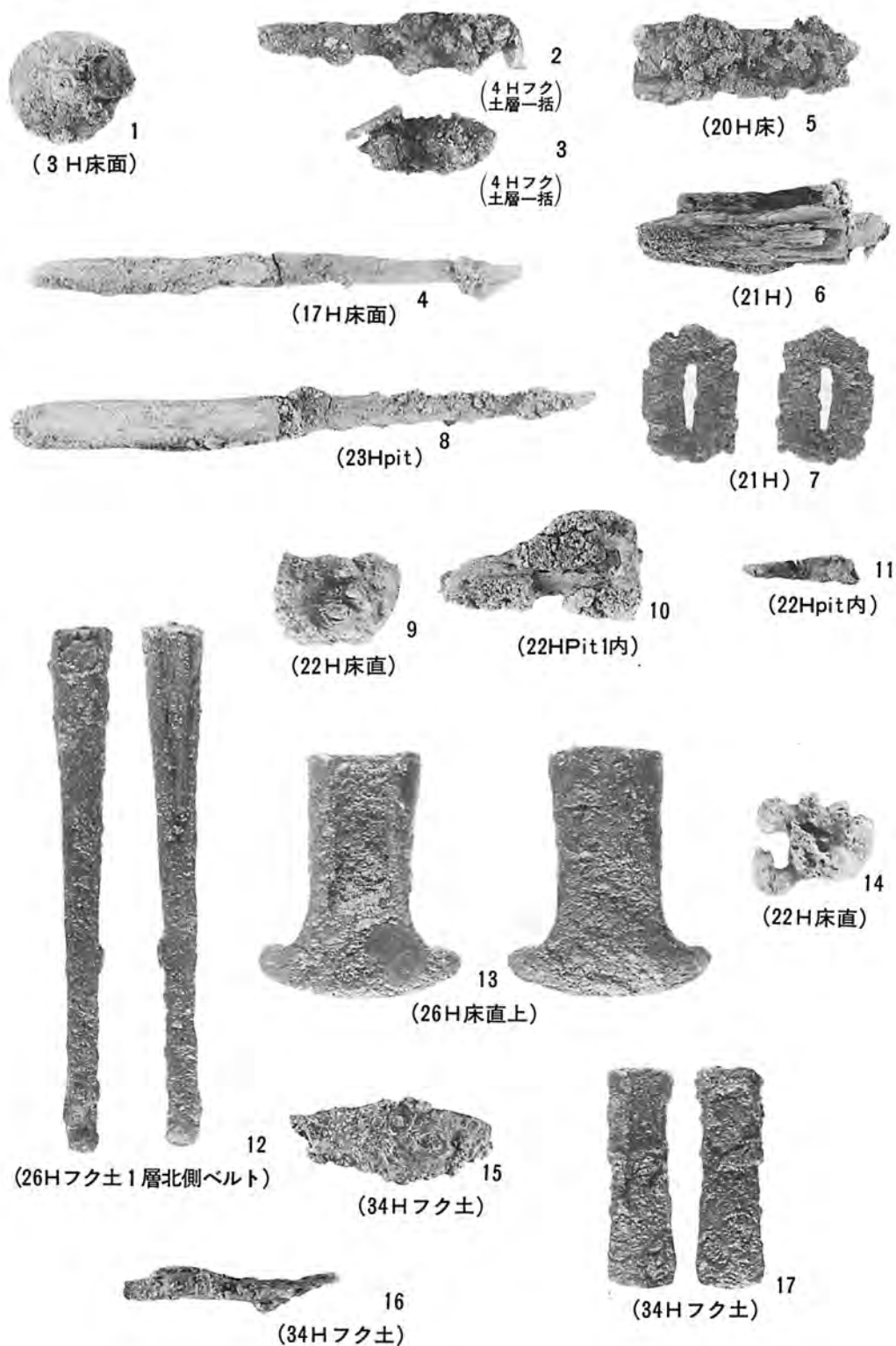


第23号～30号住居跡出土土器



第31号～37号住居跡出土土器

写真69



第3号~34号住居跡出土鉄製品



(33Hフク土6層)

1



2 (35H床)



3

(35Hpit 1 フク土)



5 (37H床直)



4

(35Hピット5B)



6

(37H床面)

写真71



(32Hカマド) 1



(35HカマドP-37) 2



(35HカマドR35) 3



(17Hカマド) 4



(3Hカマド) 5



(5Hカマド) 6



(5HII層) 7



(4H) 9



(21H床面) 8



(26H) 10

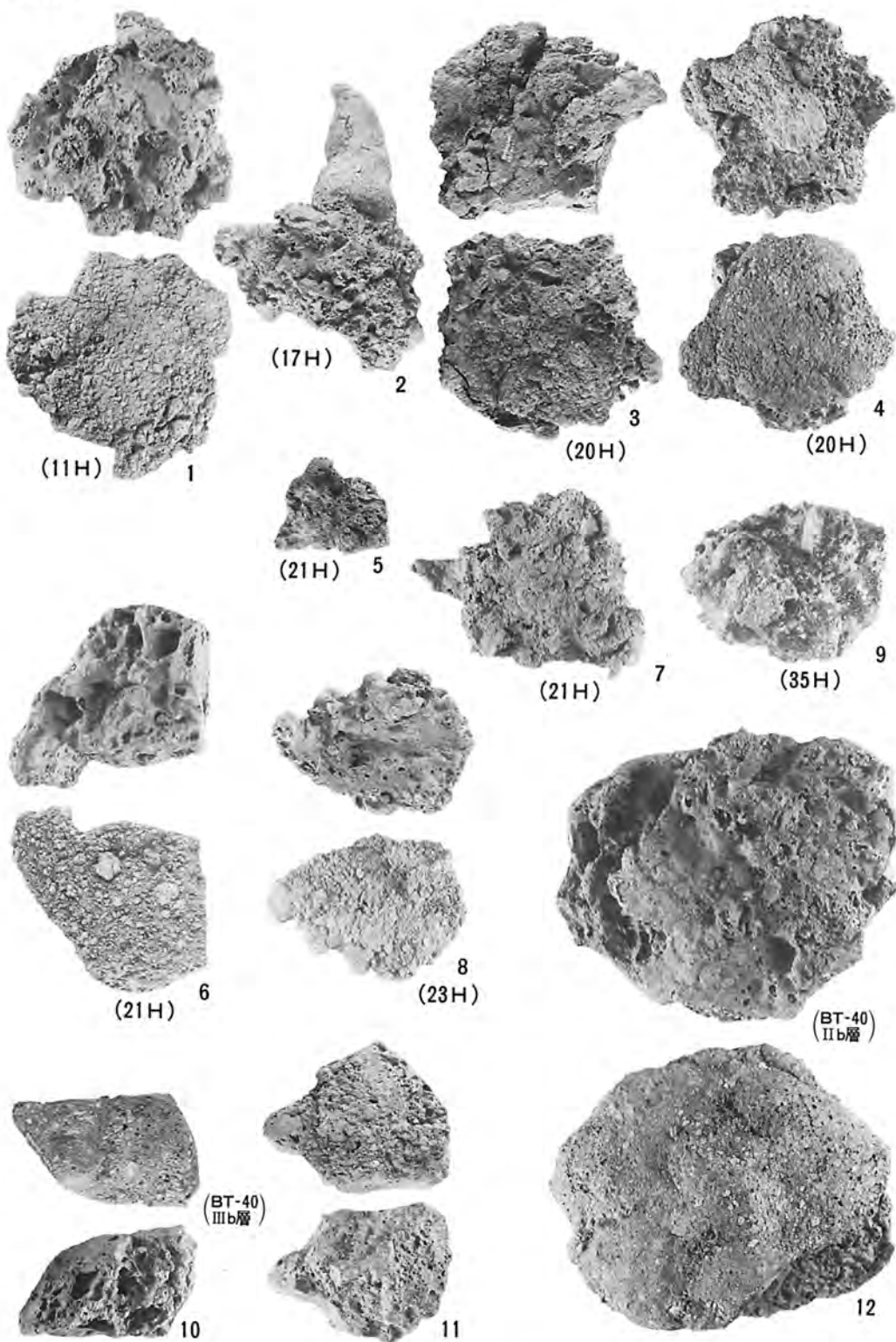


(15H床) 11



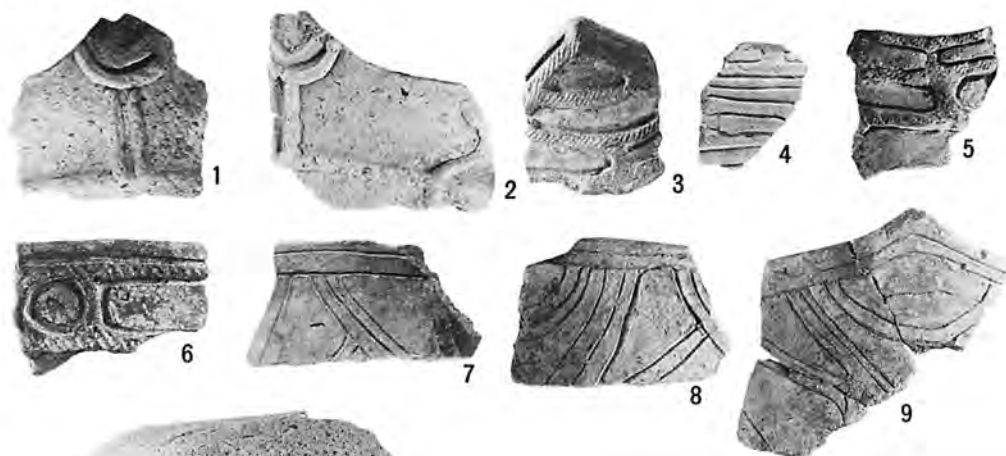
(17HIIa層) 12

住居跡出土支脚・羽口・砥石



鉄 滓

写真73



〔J-2号住居跡〕



〔J-8号土塚〕



〔J-9号土塚〕

J-2号住居跡・J-8号・9号土塚出土遺物

写真74



1



2



3



4



5

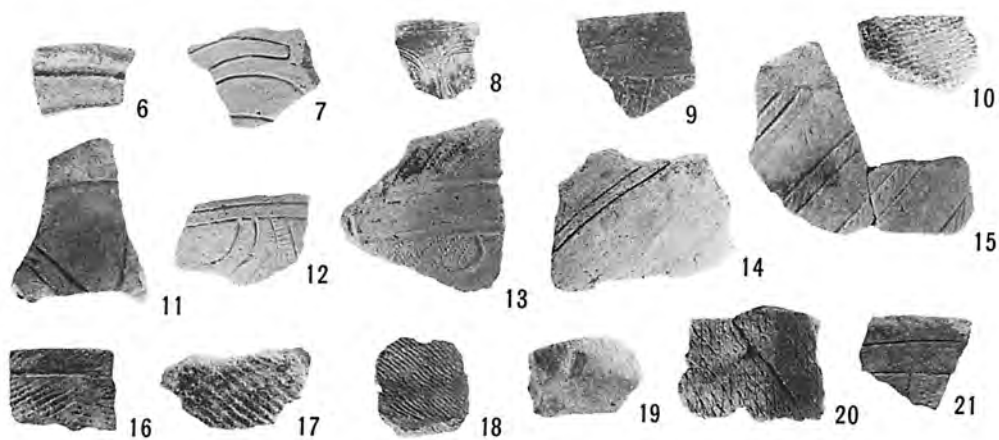
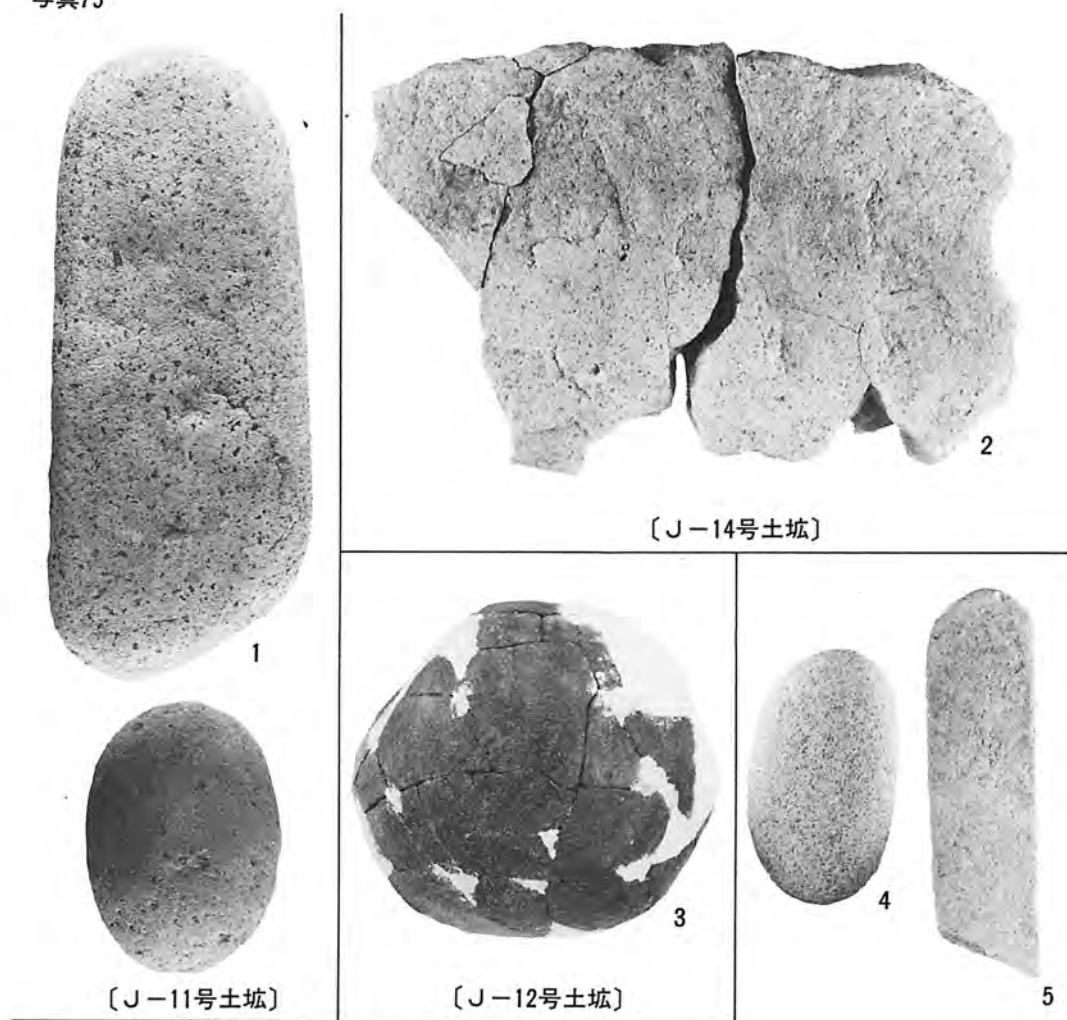


6



7

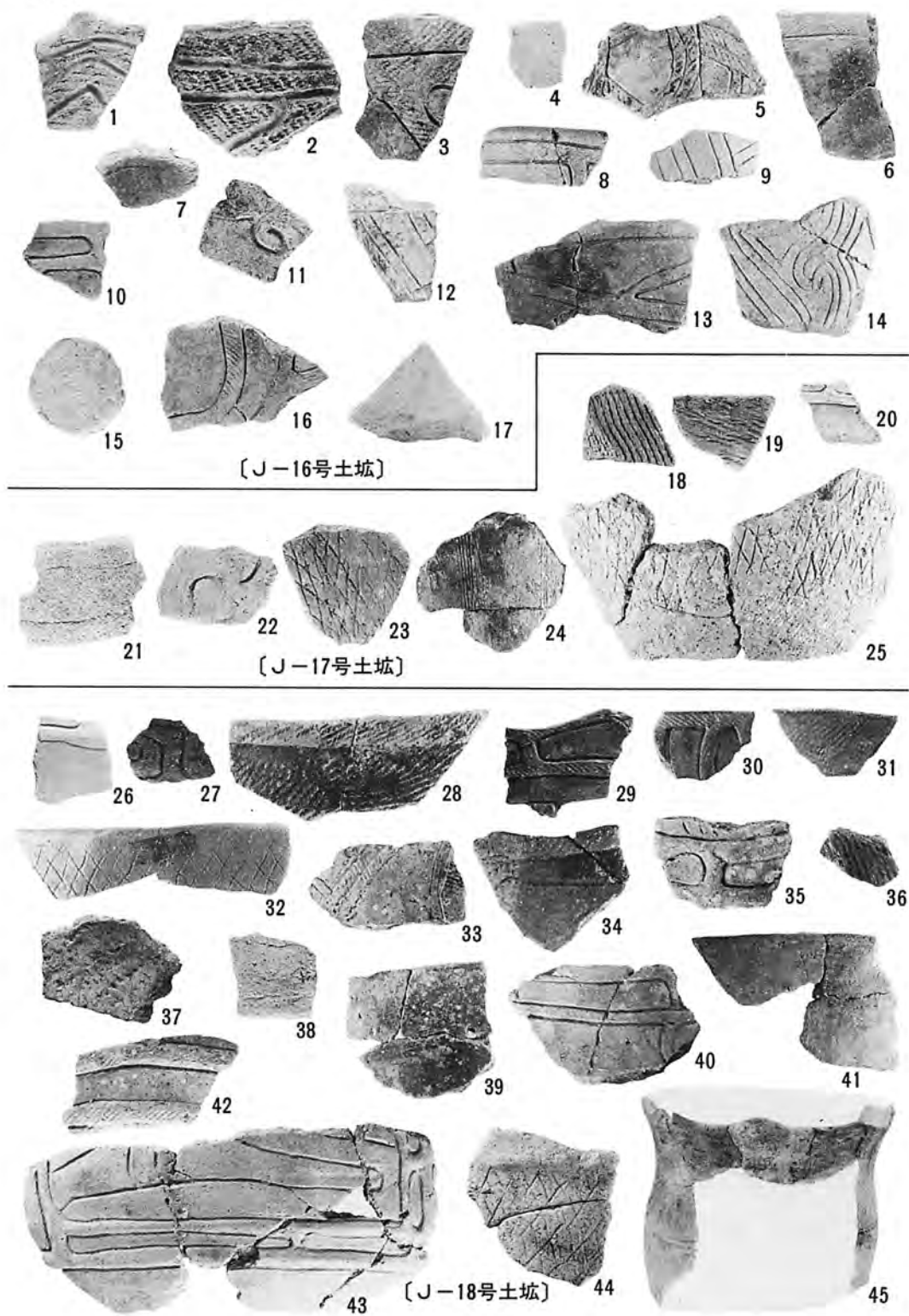
J-8号土坑出土石器



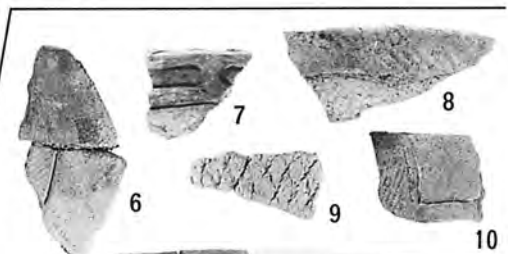
[J-15号土埴]

J-11号~15号土埴出土遺物

写真76



J-16号~18号土坑出土遺物

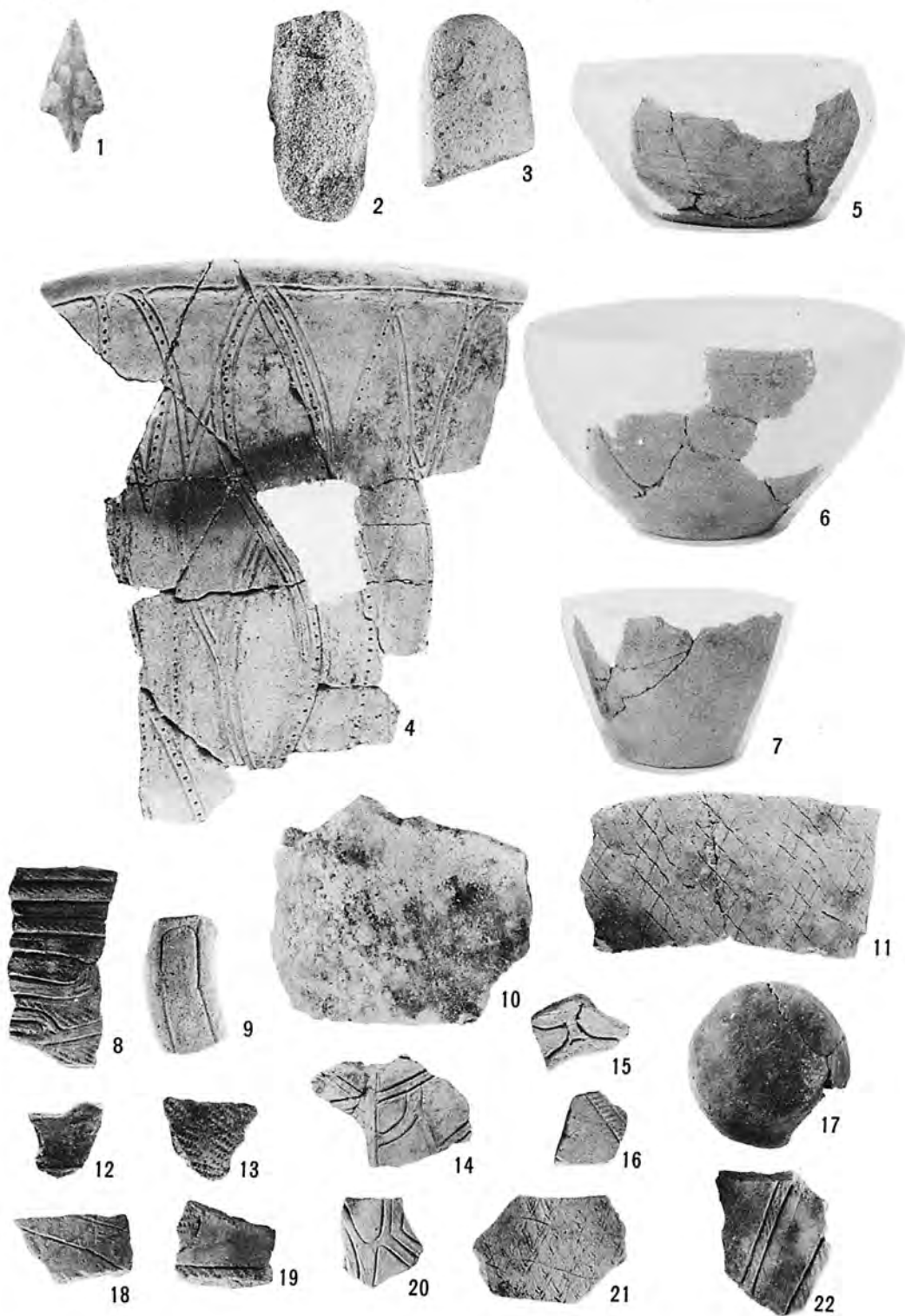


〔J-19号土埴〕



J-19号~21号土埴出土遺物

写真78



J-23号土城出土遺物



1
(埋設土器)



2
(焼土状遺構)



3
(焼土状遺構)



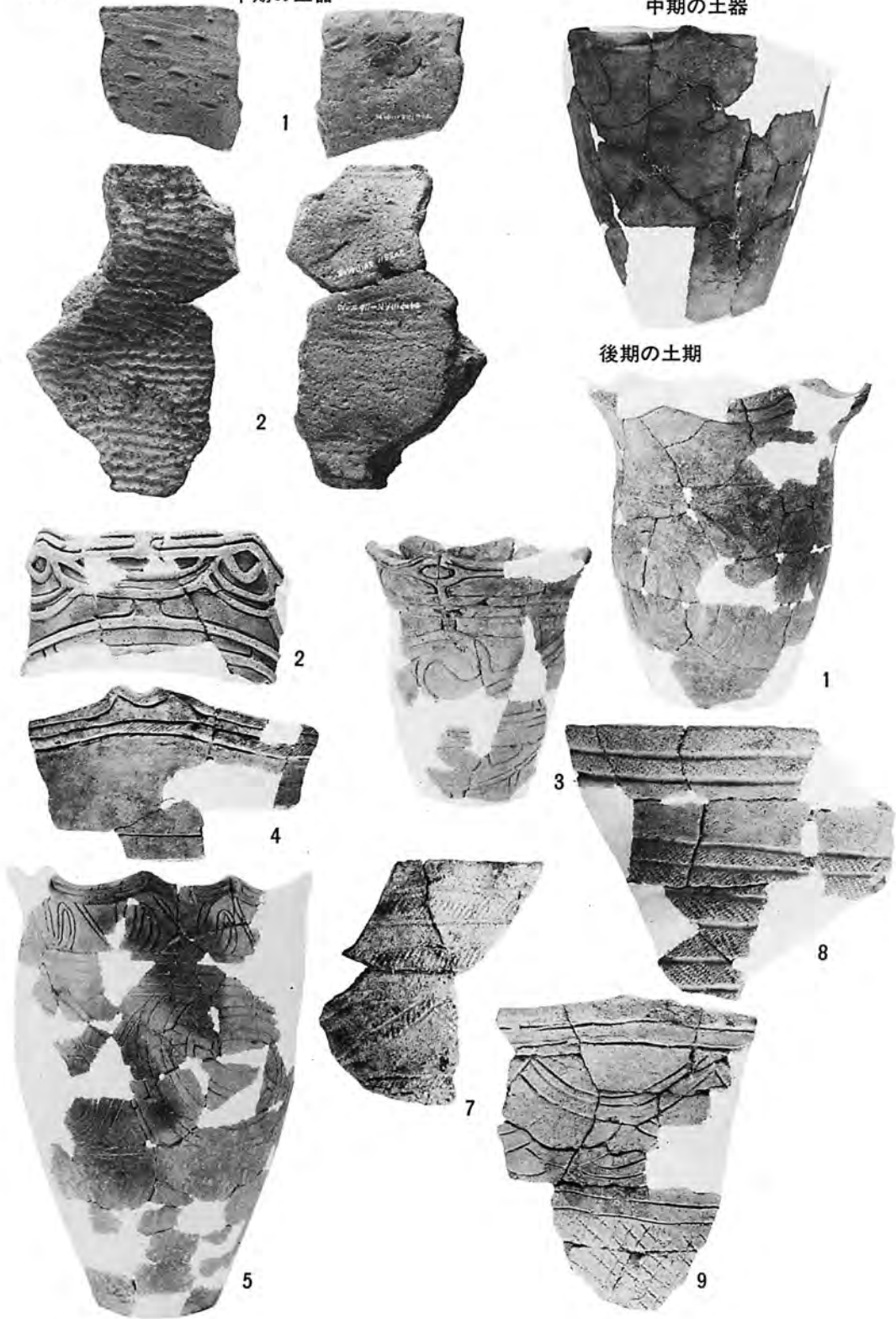
4
(屋外炉)

土器埋設遺構・焼土状遺構・屋外炉出土遺物

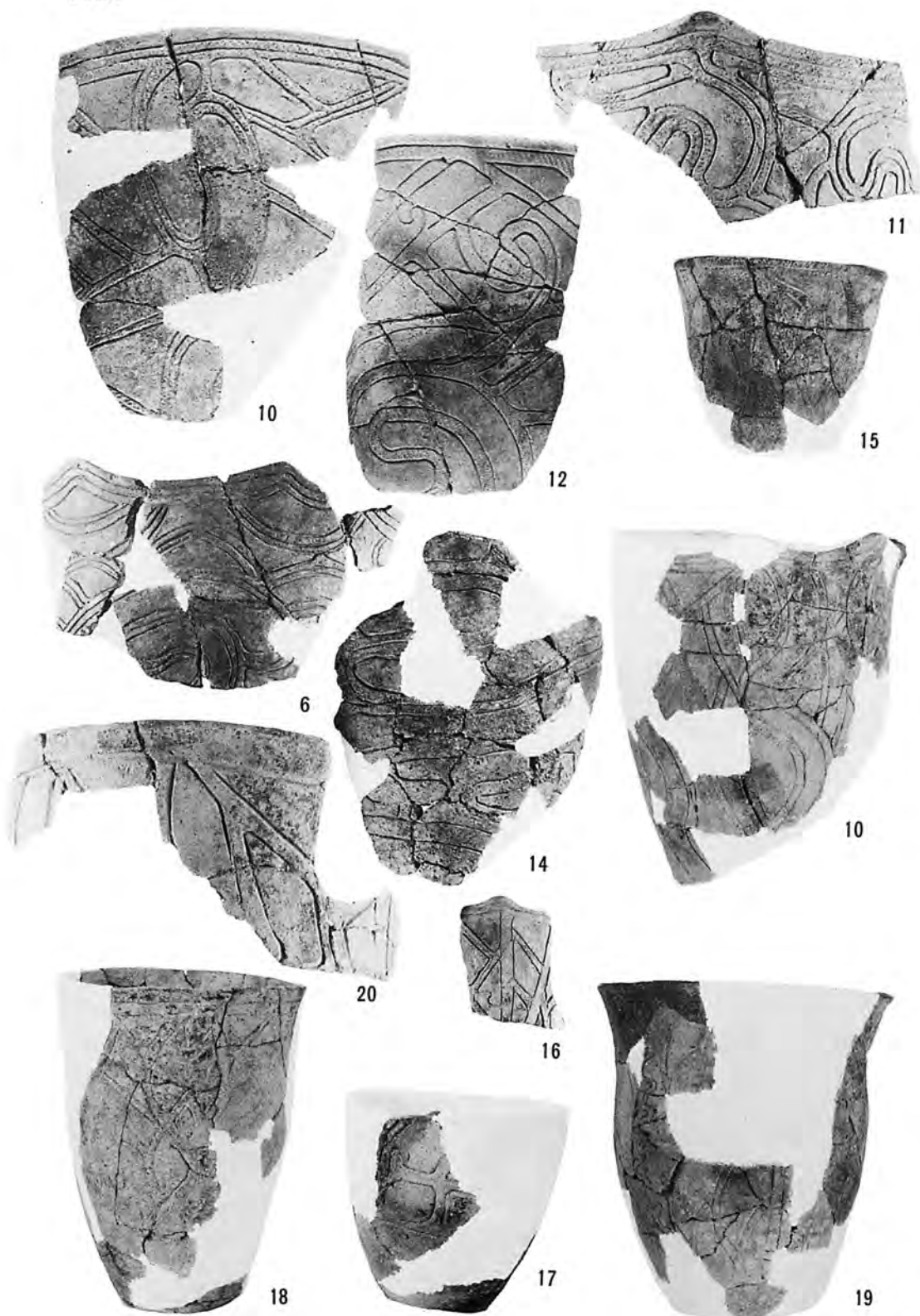
早期の土器

中期の土器

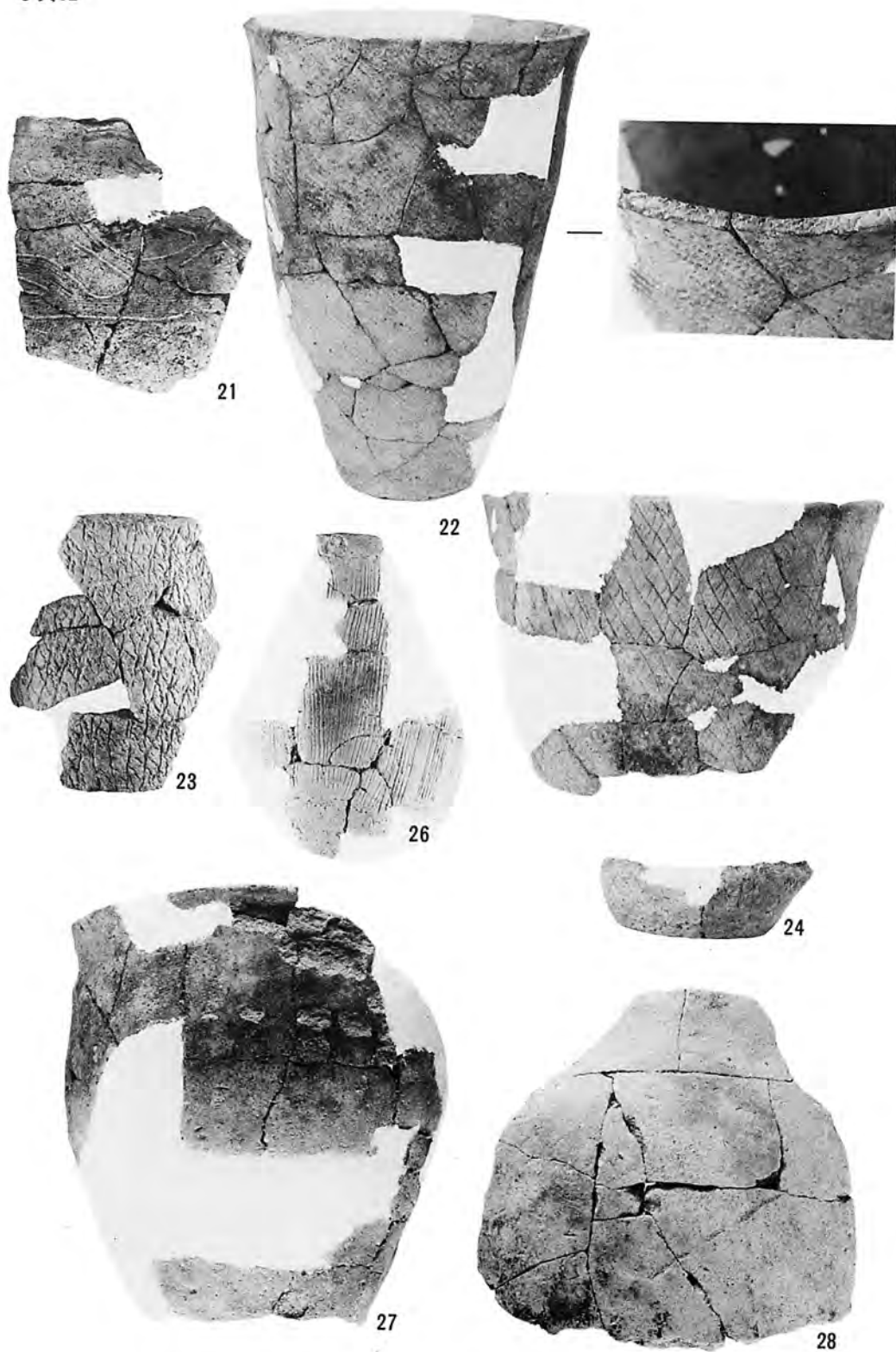
後期の土器



縄文時代早期の土器・中期の土器・後期の土器(1)

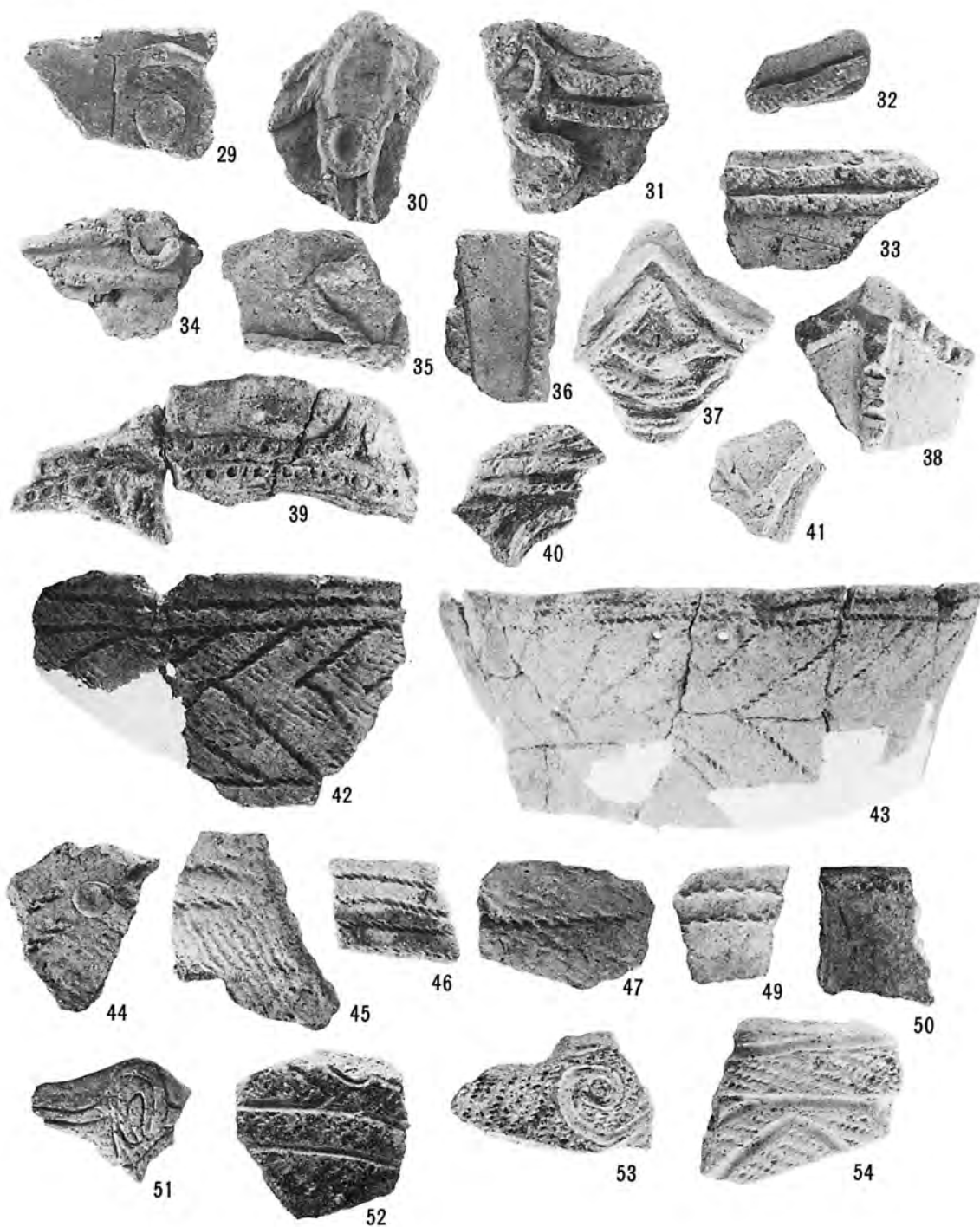


縄文時代後期の土器(2)



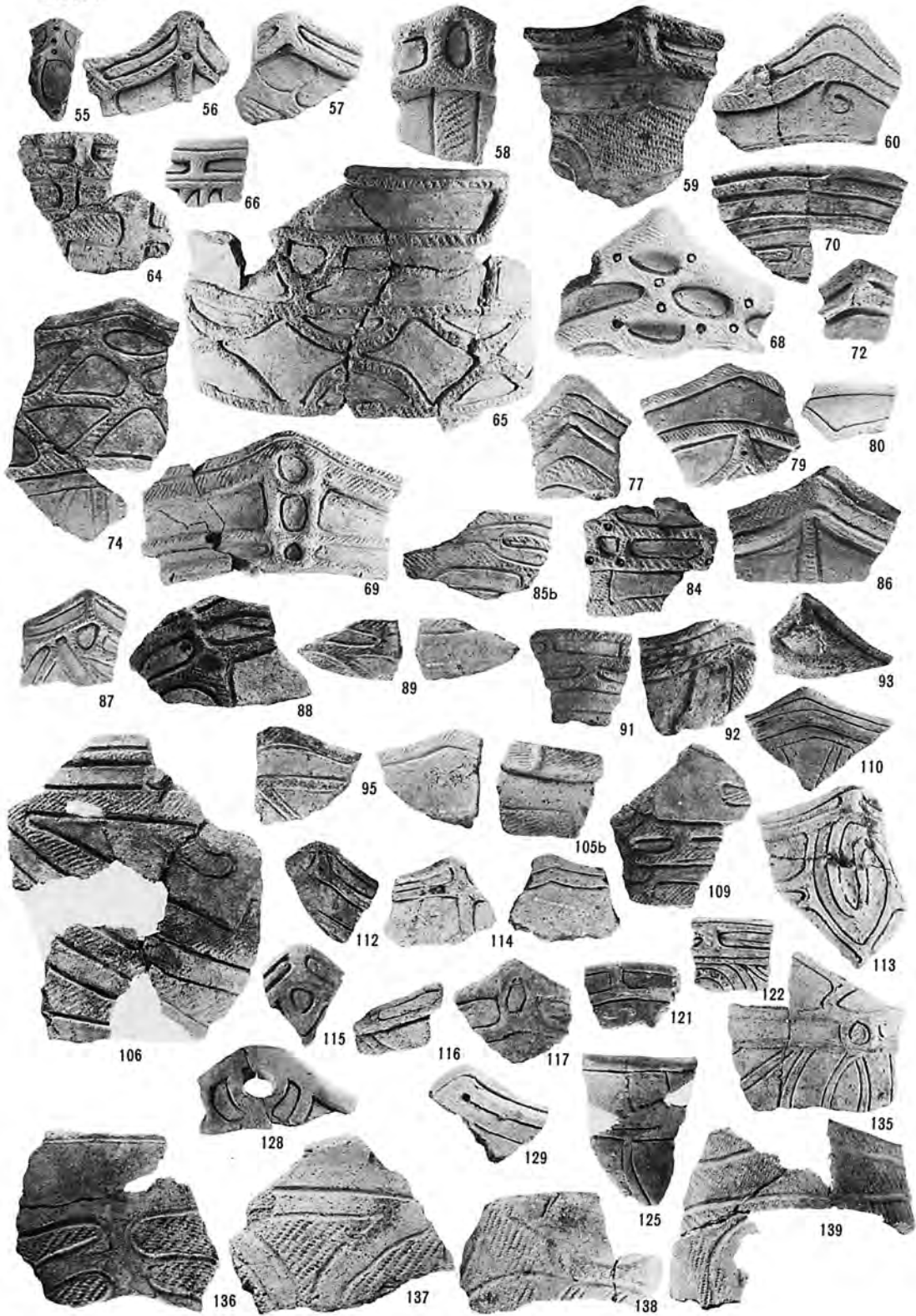
縄文時代後期の土器(3)

写真83



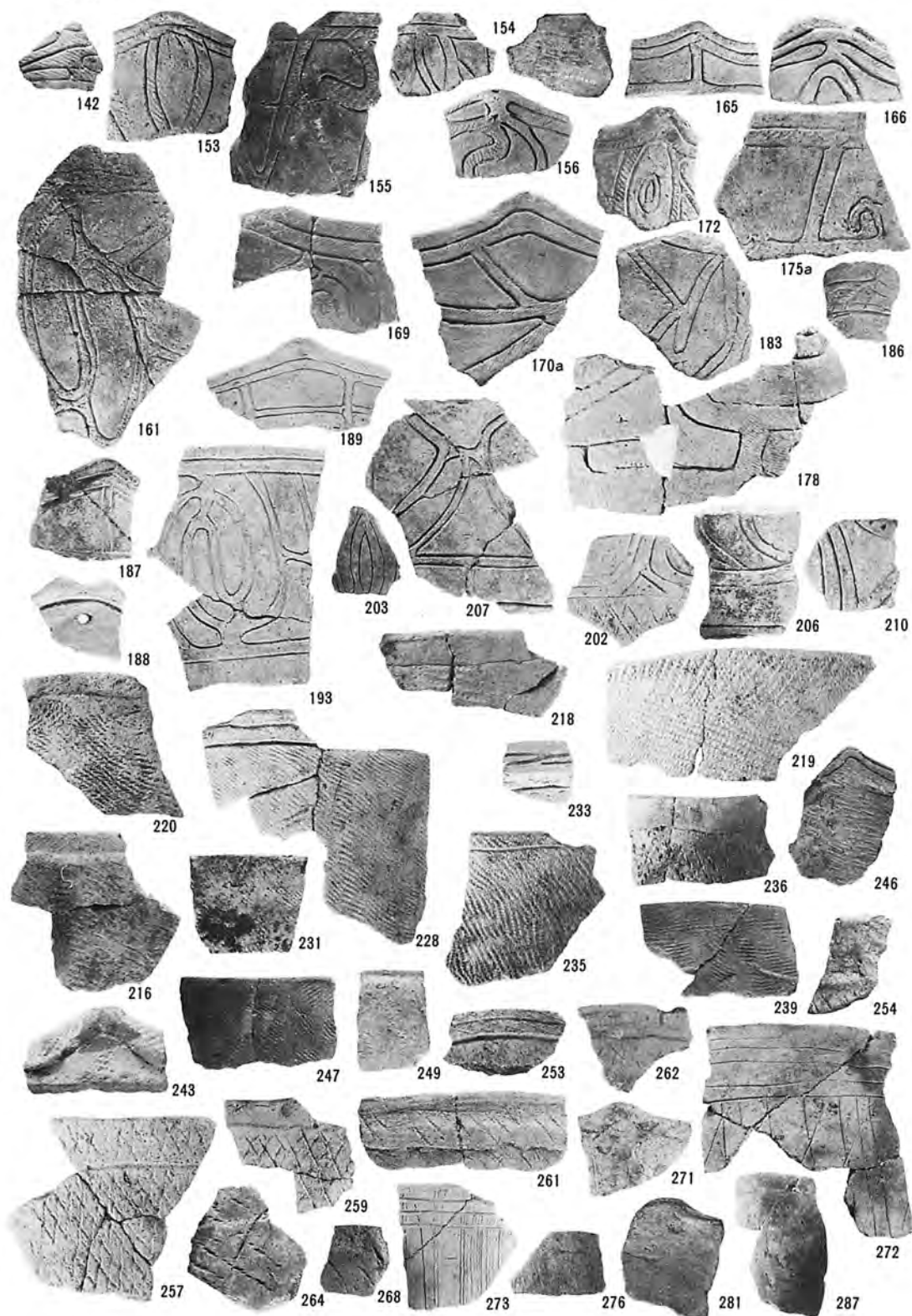
縄文時代後期の土器(4)

写真84



縄文時代後期の土器(5)

写真85



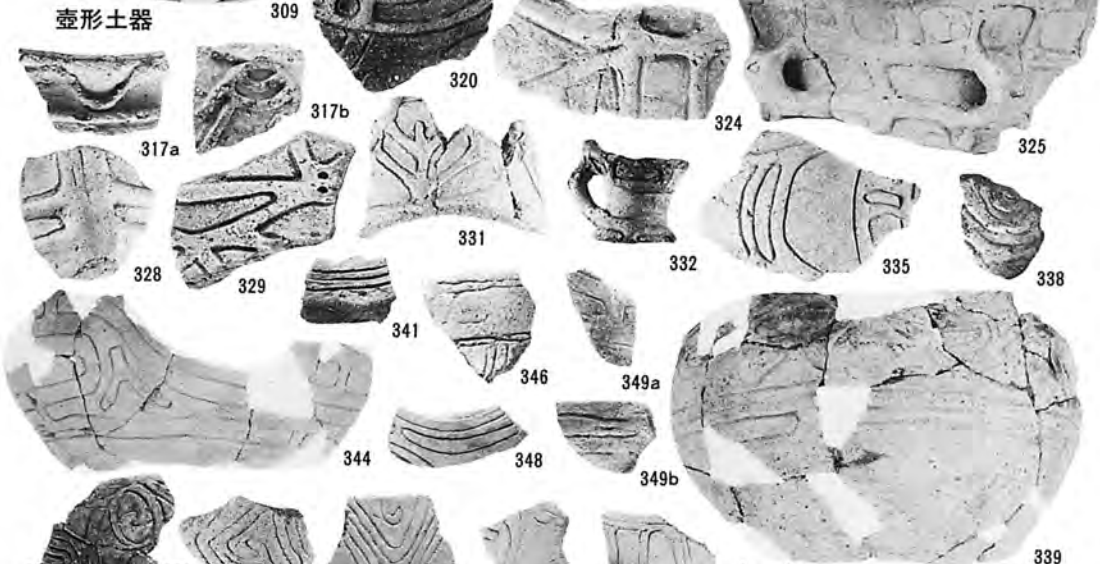
縄文時代後期の土器(6)

写真86

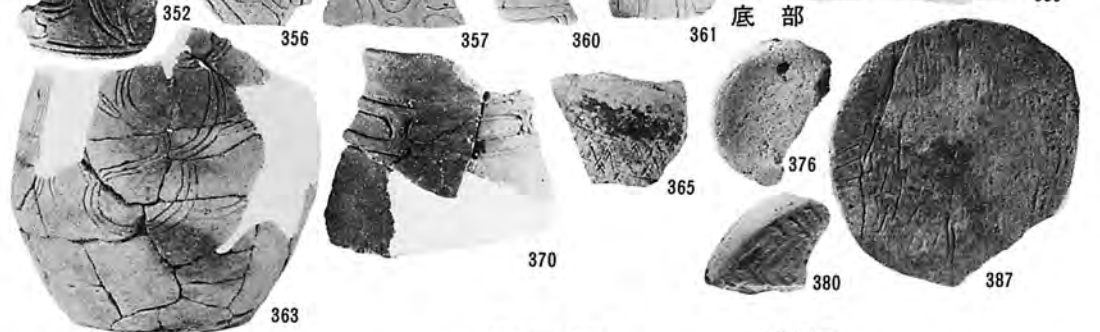
鉢形土器



壺形土器



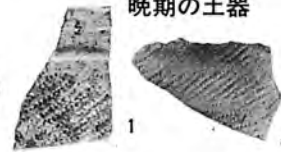
底部



小形土器



晩期の土器

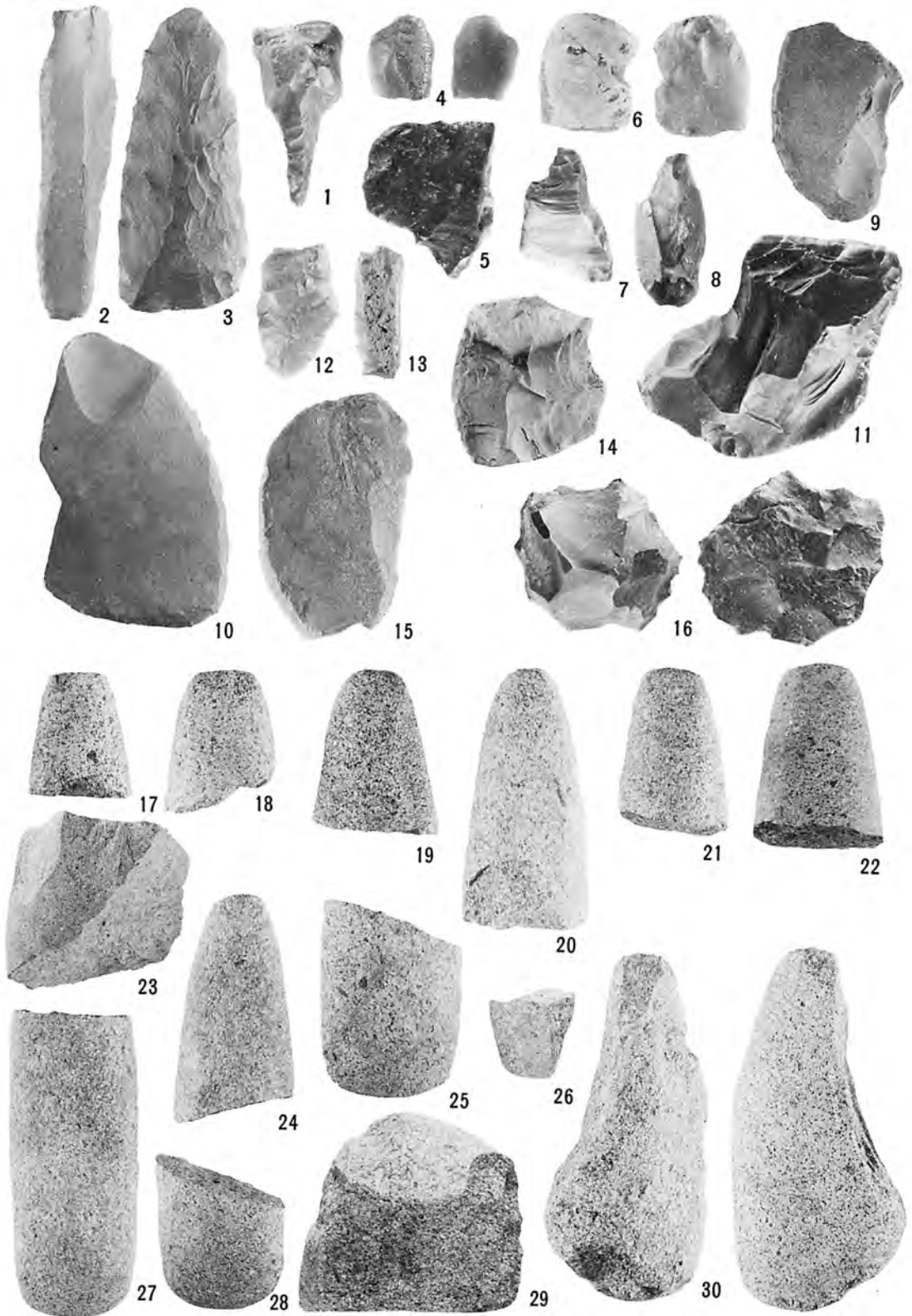


土製品



縄文時代後期の土器(7)・晩期の土器・土製品

写真87



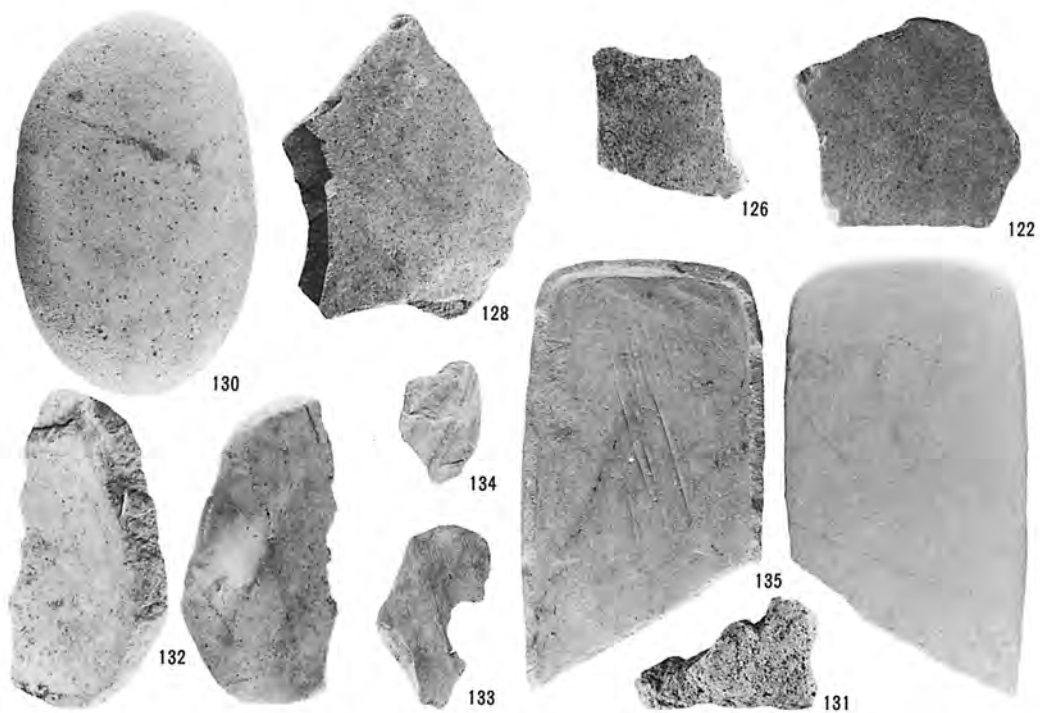
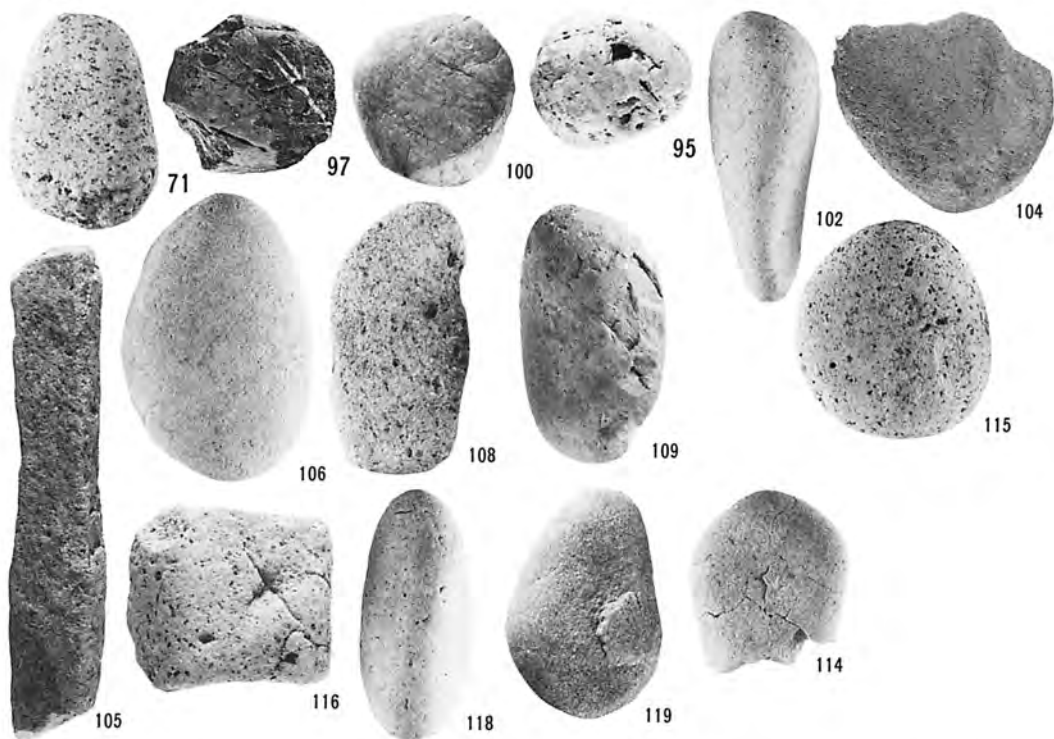
石器(1)

写真88

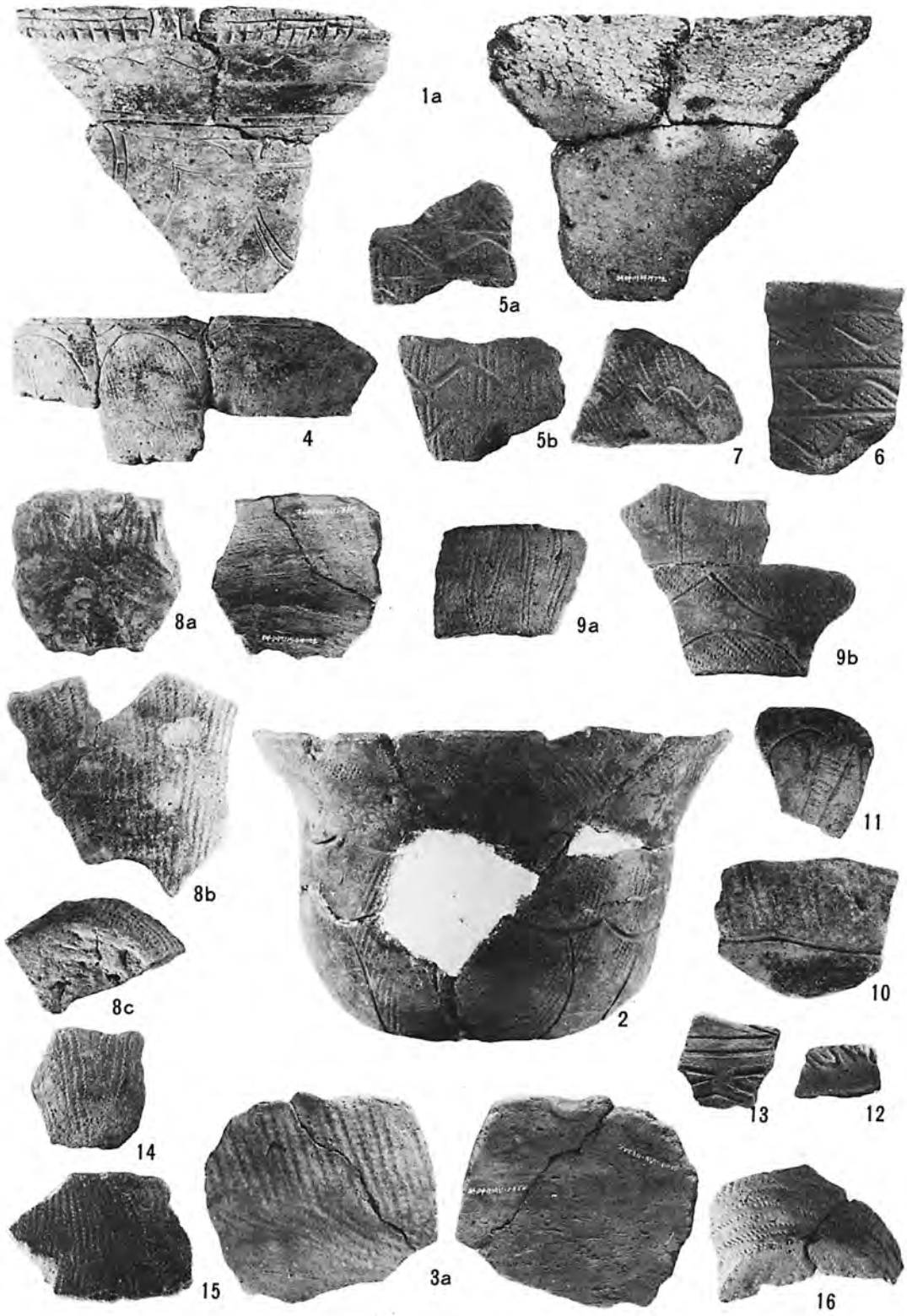


石器(2)

写真89



石器(3)



弥生時代の土器

沖附(1)遺跡発掘調査報告書

印刷発行 昭和61年3月31日

発行 青森県教育委員会

青森市新町二丁目3-1

編集 青森県埋蔵文化財調査センター

印刷 青森コロニー印刷

青森市大字幸畑字松元62-3

電話 0177(38)2021